昭和五年十月十日印刷
昭和五年十月十五日發行

國譯一切經 本緣部十一

不許複製

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號十番

印刷者 渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所 大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地十番
振替東京一九四七一番
電話芝（二一一六番 三〇四〇番）

製本所　兩角製本所

索　　　引

（頁數は通頁を表す）

—ワ—

—本縁部十一索引終—

して止まず。便ち、地に墮し之を破る。求むる所復得る能はず。

佛の經戒は譬ば寶瓶の如し、初め聞きて精進せば願ふ所必ず得、後、小、懈慢せば經を忘れ戒を失ふ。譬へば瓶破れ復得る所無きが如きなり。法家の婦女、金銀・珠環を著け四事有りて天上に上生す。一には金銀・珠環を著け、若し明經に明かなる者有り、經を聞き歡喜し、持するを脫し布施す。是れ一福、天上に生るを得。二には若し遠方の沙門、塔寺を興起するを見て歡喜し、金銀を脫し布施し勸助す、是れ二福、天上に生ることを得、三には若し貧窮・困厄の人、佛の布施を第一の行と說き給ふを聞き便ち解きて布施す、三福にして天上に生るるを得。四には疾病を得命終の時に臨み持つを脫し布施せば我が命を救助す。目に自ら施を見る。是の人、命盡き歡喜して懼れず、天に上生するを得。是を以て法家の婦女、四事の行有り、金銀寶環を著け天上に生るることを得。

生經（終）

羅門、天の頭を失ふ。天の頭若が去ると。衆人、聚會す。天神、頭を失ふ。是れ、神有ること無しと爲す。神、一婆羅門と著れ、「賊人我が頭を取り得ること能はず。便ち、南無佛と稱ふ。諸の天、皆驚動す。是の故に我が頭を得たり」と。諸の婆羅門、言く「天、佛に如かず」と。皆、去りて佛に事ふ。復天に事へず。賊人、南無佛と稱へて天の頭を得て去る。何ぞ況んや賢者南無佛と稱ふるをや。十方の尊神、敢て當らず。但、精進し懈怠を得る勿れ。

(七)昔、沙門有り、晝夜經を誦す。狗ありて、床の下に伏して、一心に經を聽く、復、食を念はず。是の如く年を積み命盡き人の形を得、舍衞國の中に生れ女人と作る。長大して沙門の分衞するを見、便ち、走り自ら飯を持ちて與ふ。歡喜すること是の如し。後、便ち、沙門を追ひて去り比丘尼と作る。精進し應眞道を得たり。

(八)昔、國王有り、城外に於て大いに伎樂を作す、國中の人民皆共に之を觀る。城外に一家有り、其の父、疾有り行歩する能はず。家室共に扶け將に強いて行かしめむとす、城を出でて便ち、樹下に止まり自ら致す能はず。家の中に語りて言く「汝行きて觀來り、還び乃ち我を將ゐて歸れ」と。時に、天・帝釋一道人と作り其の邊を過ぐ。便ち、病人を呼ぶやう「汝、我に隨つて去れ、我、能く汝の病をして愈さしめむ」と。人、聞きて大いに喜び便ち起ち隨つて去れり。釋、遂に將ゐて天に上る。天帝の宮に至り金珍寶を見るに世の所有に非ず。意の中、念を生じ、從ひ來り乞はむと欲す。人、有り語りて言く「從ひて瓶を求む可し」と。病人、便ち前み釋に詣りて言く「我、去らむと欲す、願くば此の瓶を乞ふ」と。釋、便ち、之を與ふ。之に語りて言く「此の中、物有り、汝の願ふ所在り」と。病人、卽ち、持ちて歸る。室家、相ひ對ひ共に之を探る。輙ち、心中に欲する所の金・銀・珍寶を得。意を恣にし皆得たり、因つて大いに宗親を會し、諸家、內外共に相ひ娛樂す。醉飽し已りて、後、因つて瓶を取り之を跳ぶ。我、汝の恩を受け、我をして富饒ならしむと。跳踉

我、劣を知らば我自ら下に在らむ。恨む所無きなり」と。梵志、懊惱し座を避けて之に與ふ。七寶挍飾し極めて精妙と爲す。長老梵志、因つて儒童に問ふやう「卿の學問何をか求索むる所ぞ」と。答へて言く「吾、[一〇]阿惟三佛を求め萬姓を度脫す」と。長老梵志、心に毒恚を生じ。內に誓願して言く「吾、當に世世子の心を壞り成ずるを得ざらしむべし。若し故に佛と作るも亦之を亂さむ。宜く復、念じて言ふべからず。善惡途を殊にす。恐く相ひ値はざらむ、唯、當に大いに德を修むべし、爾れば乃ち相ひ遇ふのみと。便ち、六度無極を行ひ兼ねて諸善を修む。恒に廢捨の心無し」と。是に於て別れ去る。施主の九物、諸の梵志と各之を分たしめ已る。各、一銀錢を減し追ひて儒童に與へ九物を受けず、吾、之等をして普く之を分ち得せしむと、儒童、受け已る。各自、別れ去る。菩薩道成じ調達、恒に菩薩と相ひ隨ふ。倶に生れ倶に死す、共に兄弟と爲り、恒に菩薩を壞る。爾時、長老梵志とは調達是なり、儒童とは釋迦文佛是なり、本誓を以ての故に恒に相ひ離れず。是れ其の本末なり。

(五)師、言く「學は當に善知識有るべし」と。昔、驢、一頭有り、其の主、恒に馬と相ひ隨はしむ。飮食行來、常に馬と倶なり、馬行くこと百里、亦、行くこと百里、馬行くこと千里、亦行くこと千里。衣毛・鳴呼、馬と相ひ似たり。後の時、驢と相ひ隨ふ。飮食・行來・驢と共に侶たり、驢行くこと百里、亦行くこと百里、驢、行くこと千里、亦行くこと千里なり。毛衣・頭驅・悉く驢と似たりと爲す。嗚呼・[一一]唉痾・純ら是れ驢と爲す。遂に老死に至る。復、馬と作らず。學者も亦是の如し。善知識に隨はゞ則ち日精進す、精進する者は道の駄を得。惡知識に隨はば則ち日懈怠し、懈怠する者は、是れ長く沒すと爲すなり。

(六)昔、外國の婆羅門、天に事へ寺舍を作る。好く天像を作り金を以て頭を作る。時に盜賊有り、天像に登り其の頭を挽き取る。都て動かず。便ち、南無佛と稱ふ。便ち、頭を得て去る。明日、婆

【一〇】阿惟三佛。梵語、Anuttara-samyaksambodhi. 無上正徧智、眞正に徧く一切の眞理を知る無上の智慧のこと。

【一一】唉痾。唉はなげくこゑ、痾はやまひ。

す。首達、諸の學者に謂く、惟先、年幼く、其の慧薄少なりと。惟先、竊に其の言を聞く。菩薩の法は當に相ひ供養すべし、諸の國土に行くに、視ること佛を見るが若し。今、我、護無く而して同法[五]の意を起す。惟先[六]、其の夜默然として其の國土を去れり。所以は何ぞや、學者をして首達を供養せしめむと欲す。首達、惟先を誹謗せしを用つての故に摩訶泥梨[七]に墮つること六十劫なり、既に出てゝ人と爲るを得、舌無きこと六十劫、所以は何ぞや、心・口・意を制せざるの故なり、而して菩薩の法を失へり。罪盡き已りし後前の功德に逮び自ら致して佛と得む。號して釋迦文と字すと。佛、諸の學者に告げ給ふやう「其の首達とは則ち吾が身是なり。惟先とは今、現に、阿彌陀佛[八]、是なり」と。其の坐中、一切皆悉く言く「其の失小のみ、罪を得ること甚だ大なり」と。

佛、諸の會する者に告げたまはく「身・口・意を護らざる可からず。其れ信有る者は奉行し而して道を得む。作す所の過惡能く自覺し改悔し首さば其の過、微輕を得べし」と。

(四)昔[九]、無數劫の時、一人有り、大いに布施を興し外道梵志を供養す。無數千人あり、數年の中、諸の梵志の法として經多く知る者を上座と爲すを得、中に梵志有り、年耆にして多智あり會中第一なり。時に、儒童菩薩、亦、山中に在り、諸の經術を學び博くせざる所無し。時に、來り會に就き其の下の頭に坐す。次いで知る所を問ひ展轉するに如かず乃ち上座に至る。長者、梵志に知る所を問ふ。亦儒童に如かず。十二年已に滿たむと欲するに向ひ、經を多く知る者は當に九種の物を以て以用て之に施すべし。九種の物とは金馬、銀鞍勒、及び端正女、金澡罐、及び金澡盤、金銀床席皆絕妙好なり、是の如き比九種の物有り。長老梵志、便ち自ら思惟すらく「吾、十二年の中我に係る者無し。而して此の年少欻ち乃ち吾に勝てり、人として羞恥す可し、物は言ふに足らず。名を失ふは易からず」と。便ち、儒童に語るやう「施す所の九物盡く相ひ與ふべし、卿、小し、我に下り吾をして上に在らしめよ」と。儒童、答へて曰く「吾、自ら理を以てす、強いて上に在らず。若し

【五】同法。行法を同じくすること。
【六】惟先。宋・元・本唯先に作る。
【七】摩訶泥梨。大地獄。
【八】阿彌陀佛。無量壽、無量光と譯し、西方極樂淨土の佛。
【九】此の儒童菩薩物語は六度集經第八十六儒童梵志本生(儒童授決經)を看よ。

に佛と因縁有るの故なり、」と。比丘、白して言さく「願くば佛よ、本末之を說きたまへ、聞く者功德を增益せむ」と。

佛、言はく「昔、一國有り、居、大海に近し。時に王を薩和達と名づけ、慈を以て國を治む。民を視ること子の如し。國に大災有り、三年、雨らず。人民、飢餓す。王、梵志、道士を召し、當に雨るべきやいなやを問ふ。占ふ者答へて曰く、十年を滿し乃ち雨ること有る耳と。王、是の語を聞き、人民、死し盡るを恐れ愁憂し樂しまず。當に何の計を作し以て國人を濟ふべきやと。復、念じて曰く、唯、當に身を施し以て衆生を救ふ耳と。便ち、齋戒、淸淨にして叉手して十方に向ひて曰く、我が前後の所作の善行を以て若し福報有らば願くば海中に生れ大身魚と作り肉を以て衆に供養せむ。便ち、口を閉ぢて食はず。七日、命終り生れて魚と爲るを得たり。身長四千里、具に宿命を識り便ち海岸の上に墮ち、正に黑山に像る。人民、山を見て那んぞ是の山有るを得たるやと怪しむ。皆、往きて之を視乃ち大魚たるを知り、國を擧げて皆往き、乃ち解ち取り食し、飢困を免るるを得、國遂に還び復豐熟故の如し」と。諸の比丘に告げ給ふやう「爾の時の魚とは我身是なり、爾の時、我が肉を食する者は今の維耶離國の人是れなり。如來、住せば肉を以て衆生を活す、一世の中のみ、今、道慧を以て識神を救護し本無に還り復し、長く三界を離れ衆苦永く滅せり。菩薩、勤苦し三施を具足す、何をか三施と謂ふ。外施、內施、大施是を三施と爲す。衣食・珍寶・國土・妻子是を外施と爲す。支體・骨肉・頭目・髓腦、是を內施と爲す。四等・六度・四諦・非常・十二部經を衆生の爲めに說く、是を大施と爲す。道を求むるの法三施具足す。乃ち疾く佛と得む」と。佛、是を說きたまふ時無數の衆生皆無上正眞道意を發せり。

(三)首達、耆年尊、五千人を教化す、惟先年少、其の智深遠なり、諸の國土に行き六萬人を教化し、展轉して首達と共に會す。首達の弟子、惟先、智慧勇猛なるを見て悉く往きて之を崇めむと欲

【四】十二部經。佛の說きたまへる經を形式內容より十二に分つ、之を十二部經、又は十二分教といふ。一、契經、二、應頌、三、諷頌(伽陀)、四、因緣(尼陀那)、五、本事(伊帝目多)、六、本生、七、未曾有、八、譬喩、九、論議、一〇、自說(優陀那)、一一、方廣、一二、授記となり。

佛、諸の比丘に告げたまはく「爾の時の梵志とは今の清信士是、其の婦とは今の婦是、彼の國王とは吾が身是なり。爾の時亂を起し今も亦是の如し」と、佛、說きたまふこと是の如く歡喜せざるは莫し。

第五十五、佛、譬喩を說く經

(一)過去無數世の時、獨の母有り、麻の油膏を賣り業と爲す。時に比丘有り、日日、是の母の許に於て麻の油膏を取り佛の爲めに燈を燈す。積むこと年數有り。佛、後に比丘に決を授く。汝、後に當に佛と作るべしと。諸の天、國王、人民、悉く往きて比丘を賀す。比丘、言く「我、恩を受く」と。獨母、比丘の授決を聞き便ち、佛の所に到り白して言く「此の比丘、麻の油膏を然すは我の所有なり。願くば佛よ、復、我に決を授けよ」と。佛、言はく「此の比丘、佛と作るの時汝當に其に從つて決を受くべし」と。佛、舍利弗に告げたまはく「是の時の比丘とは提惒竭佛是れにして、時に獨母とは我が身是れなり」と。

(二)昔、維耶離國に一長者有り、佛の來化を聞く。卽ち、佛所に詣り、稽首して足に禮す。佛に白して言く「意に佛を請ぜむと欲す。一時、三月なり」と。佛、默して之を可とす。卽ち、衣を攝し、鉢を持ち長者の家に就く。餘人の請ぜむとする者復得る能はず。皆、恚意を興し長者を害せむと圖る。便ち、日を刻し兵を擧げ舍を圍むこと數重なり。長者、怖懅し至心に佛に於てす。復、他想無し。佛、爲に法を說き給ふ。若干の要語、長者及び眷屬皆不起法忍を逮せり。佛、座より起ち出て、外人を解す。恚害の苦報を說き和慈の福を嘆ず。若干の要言衆人の意解く。八萬四千の人無上正眞道意を發せり。諸の比丘、佛に白すやう「今、此の大會、佛を見奉り意解く。是れ時に遭ふと爲すや、宿に因緣有りと爲すや」と。佛、言はく「今此の衆會の一時に度する者、皆宿

【一】此の燃燈佛物語。賢愚經第二十貧女難陀品、六度集經、第七十三、獨母本生（燃燈授決經）。

【二】提惒竭佛。梵名、Dīpaṁkara Buddha. 燃燈佛のこと。

【三】不起法忍。無生法忍のこと、無生法とは生滅を遠離せる眞如實相の理體なり、眞智此の理に安住して動さざるを無生法忍といふ。

希有とする所なり、卽ち、女人に問ふやう、卿は何人と爲す、所より來ると爲すやと。其の婦、本末、彼の國王の爲に所變の故を說く。王、女人を見るに女相具足し衆瑕有ること無し。心に自ら念じて言く、其れ彼の梵志、愚騃無智なり、是れ丈夫に非ず。而も此の女人を敬意せずと。棘を除き載せて去る。其の宮內に至り立てゝ王后と爲す。其の后、智慧、辯才及び難し。互に[二]摴蒲を用ひ及び[三]六博と書疏とを以て通利す。遠近の女人、來りて共に博戲す。王后、輒ち勝ち能く當る者無し。時に梵志、遙に彼の王、后有り、端正博戲を工にし、其の來る者有らば王后勝を得歸伏せざる無く能く勝つ者莫しと聞き、心、自ら念じて言く、且つ、是れ我が前婦、是れ異人に非ず、其れ我が前の婦博戲、第一なりと又、彼の梵志も亦博戲を工にす。王に詣り其の技術を現はさんと欲す。時に、王后、一梵志、形像此の如く及び其の顏貌、長短、好醜を聞き、卽ち、心に念じて言く、是れ我が前の夫なりと。時に、梵志、王宮の門に詣る。王、卽ち、之を見、遙に博戲を試む。侍人、齒と名づく、時に梵志、偈を以て頌して曰く。

　髮好く長さ八尺　其の眉畫の若如し、　柔軟、上第一なり、　當に熟せる[四]果蓏を念ふべし。

是に於て王后、偈を以て答へて曰く、

　往時、婢自在なり、　其の志其の所を好む、　敬重、第一と爲し、　劫取、第一と爲す。

時に梵志、復、偈を以て王后に答へて曰く、

　閑居、龍處に詣り　龍象、常に遊ぶ所、　彼に於て相ひ娛樂せむ、　熟せる果蓏を念ふべし。

王后、偈を以て梵志に答へて曰く、

　獨り自ら熟果を噉ひ、　生なる者を棄てゝ我に與ふ、　是れ、吾が宿因緣、　梵志、劫取する所なり。

時に、梵志、心中、懷恨し、卽ち、自ら刻責するも悔及ぶ所無し」と。

【二】摴蒲。ばくちのこと。
【三】六博。雙六の類。
【四】果蓏。くだもの、うり。

を見るを欲せず。反つて更に「一不急の老嫗僕使を敬愛して妾と爲す。而して之を敬重す。其の婦、聟の心異にして和せず志下使に在るを見て便ち其の夫に謂く「假使し卿の心相ひ喜ばずむば儻に出家し道を作し比丘尼と作るを聽るさるべし」と。數數是の如し。聟、便ち、之を聽す。卽便ち、出家し道を作し比丘尼と作る、晝夜、精進し道を行じ未だ久しからずして羅漢を證得せり。然して後の時に於て其の淸信士、敬ふ所の女人、非常に歸して沒しぬ。時に、淸信士、便ち行きて求索め、前の時妻たる所の比丘尼と爲りしを得むと。之を呼びて家に歸さんとす。比丘尼、肯て之に隨はず。「吾、已に出家せり、則ち、他人と爲る。更に異世に生れ罪福同じからず」と。時に、比丘尼、聞き往きて世尊に白し其の本末を說けり。佛、諸の比丘に告げ給ふやう「是の淸信士、前世に此の有德の人を毀辱す、但、今世のみならず、又、此の女人生生德有り殊德の志有り、此の人、常に之を壞亂す、今、比丘尼、已に大路に入れり、復、之を毀らんと欲するも願に從ふを得ず」と。

佛、比丘に告げたまはく「乃古、無數世の時、一梵志有り、婦を蓮華と名づく、端正、殊好、面貌、殊妙なり、色像第一、世に於て希有たり、名德及び難し、其の梵志、一婢使有り、而して之に親近し婢を順敬す。肯て蓮華を恭敬せず、喜びて之を見ず。反つて婢の語を用ふ。婦を將ゐて舍を出て山間に至る。優曇鉢樹に上り諸の熟果を採る。而して取りて之を食ふ。諸の生果を棄て用つて婦に與ふ。其の婦問うて曰く、君、何の故に獨り熟果を噉ひ、生なるを棄て下して持つて相ひ與ふるやと。其の夫、答へて曰く、熟を得むと欲せば何ぞ樹に上り而して自ら之を取らざるやと。其の婦、答へて曰く、卿、我に與へず、我、得る能はず、當に夫命に從ふべしと。婦、卽ち、樹に上る。夫、婦の樹に上るを見、尋いで時に樹を下り諸の荊棘を以て樹の四面を遮り、下さざらしめむと欲す。樹の上に置きて在り、之を捨てゝ去る。便ち、死せしめむと欲するなり。時に、國王、諸の大臣と共に遊獵に行き。彼の樹の下を過ぎ其の女人を見る。端正、殊好、顏貌、殊異にして世

【一】不急老嫗。さし急ぎて置かずともよき老嫗。

と。阿夷扇持、便ち、自ら往き獼猴に謂ひて言く、來り家に還歸れと。聲を默、肯ぜず。仙人、報へて曰く、亦、原し置かる可しと。仙人に答へて曰く、吾、之を置くのみと。仙人、報へて曰く、敢て強いて致す可きならば小く之を勸喩せむ。然る後將ゐて行け、假使し強いて之を致さむと欲せば儵ち能はざるなりと。其の人、答へて曰く、假使ひ方便を以てするも之を致し去らむと欲す。肯て往かずんば吾當に計を作すべしと。即時、偈を以て頌を歌ひて曰く、

卿、賢柔の善子よ　譬ば鹿の蔭に就くが如し、　便ち樹枝より下なば　飢渇の死を得る無し。

爾の時、獼猴、偈を以て答へて曰く、

仁和ならざるは　[四]生我なり、　我、自ら志性を知る、　何の覩聞く所によりて、　獼猴を柔賢と爲すや。　我、諸方面に到り、　未だ　[五]中間の念有らず、　假使し邪長有らば、　終に意を制する能はず。　吾、今、續けて之を念ふに、　君、阿夷扇持、　我を將ゐて城中に入り、　柱に縛り毒痛を加へたり。　今に於て之を忘れず、　摑捶して我を苦毒しぬ、　我已に自在を得たり、　君の困みに就く能はず」と。

佛、諸の比丘に告げ給ふやう「爾の時の阿夷扇持の子を知らむと欲せば今の淸信士の子是なり、淸信士とは則ち今の父なり、其の仙人とは我が身是なり、是の如く具足し分別し說くべし」と。佛、說きたまふこと是の如し。歡喜せざるは莫し。

第五十四、佛、夫婦を說く經

聞くこと是くの如し。一時、佛、舍衞の祇樹給孤獨園に遊び大比丘衆千二百五十人と俱なりき。淸信士有り、其の婦、端正、面貌、姝好なり、威光巍巍として威德倫無し。聰明にして智慧あり、言語・辯才・悅豫する所多く衆人の敬ふ所なり。時に、夫の壻、之を敬重せず、憍慢して歡はず、之

【四】生我。生れつきの我の意なるべし。
【五】中間念。中道の念、シヤバンヌは「規則正しい、寂かな思」と意譯してゐる。

諸の天宿衛す。無央數の人の共に愛敬する所なり。父意に可ならず。之を愛念せず。常に憎惡し見る。驅使して舍を出し、數捶杖を加ふ。復、堪ふること能はず。馳せて他國に至り、異土に在り賈作[二]す。治生方便し計校し興造す。時節を失せず所業を廢せず多くの財寶を積む。清信士、多くの財寶を積むと聞き遙に人を遣はし呼びて來り歸らしむ。子、肯て還らず。清信士、復、人をして行かしむ。設し使して來らずむば財物を遣はし來れと慇懃に諫曉す。都て肯て遣はさず。其の子報へて曰く「父、我を困苦しむること復計る可からず。我をして心を發し遣遺する所能はざらしむるに至るなり、復、自ら往き難し」と。時に、清信士、比丘衆に對し、自ら訟へ意を說く、其の子病有り父母に順はずと、諸の比丘、具に以て佛に啓しぬ。

世尊告げて曰く「此の清信士、但、今世のみ子と不和ならず。前世も亦然なり。福德、殊異なり、造し行ふ所有り違失する所無きも其の心を可とせず。比丘よ、且つ此を觀よ、其の子、智慧殊特にして德量る可からざるも、其の心を可とせず、其の聲を聞くを欲せず。復、得を思ふことを欲す」と。佛、諸の比丘に告げ給ふやう「乃往、過去久遠の世の時一人有り、名を阿夷扇持と曰ふ。獼猴の師と爲り獼猴に教ふ。擧動法則、技術・戲笑・悅豫する所多し。衆くの人民に於て此の技術を以てす。無央數の人、悉く共に愛敬す、遠近皆來り其の技術を觀る。是の恩を蒙り多く財利を獲。其の阿夷扇持獼猴を前後にして大いに衆物を得、撾捶、捊蹹[三]す。其の人、異日、彼の獼猴を將ゐ城中に入り柱に縛著し撾捶、毒痛し、毀辱、折伏す。時に獼猴、竊に默し出づることを得馳走して山に入り、閑居、獨處し仙人に近附く、之に依つて止頓り果蓏を採取し仙人を供養し復、自ら之を食ふ。阿夷扇持、之を聞き走りて其の處の空閑の山中に在り、而して人を遣し之を呼び來り還らしむ。獼猴、肯ぜず、遙に之に報へて曰く、吾、今、念を續くるに前に我を困毒し衆患量り難し。前の時、我が父橫に過罪無きに而も毒を加へらる。毀辱言ふこと難し。今、故に馳走し來り山中に入れり

【二】賈作。あきなふこと。

【三】捊蹹。しばりふむこと。

暢溢し聞き知らざる無し。時に、無央數の人皆來り集會まる。王、行事畢り還りて其の宮に入る。其の仙人、無欲を失ひ恩愛の中に墮し其の神足を失ひ飛行すること能はずと聞く。王、時に、夜、其の宮に至り獨り竊に自ら行く。往きて仙人に見え足下に稽首し、偈を以て頌して曰く、

吾、聞く、大梵志、　卒暴に皆貪欲、　爲に何の教る所に從ふと爲す、　何に因りて色欲を習ふ。

時に、撥劫仙人、偈を以て王に答へて曰く、

吾、實に爾り大王よ、　聖の聞く所の如し、　已に邪徑に墮つ、　以て王よ吾が教に違るなり。

王、偈を以て問ふて曰く、

不審なり、慧の在る所、　及び善惡のおもひ、　假使ひ欲心を發すも、　本淨に復する能はざるや。

時に、撥劫仙人、復、偈を以て王に答へて曰く、

愛欲に義利を失ひ　婬心鬱然として熾なり、　今日、王の語を聞き、　便ち、愛欲を捨つべし。

時に、國王、仙人を教告す、仙人、羞慚し心に剋ち自責し、宿夜、精懃し、久しからずして即ち獲、神通を還復せり」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく「爾の時の仙人撥劫とは今の舍利弗是なり、國王とは吾が身是なり」と。佛、說きたまふこと是の如し。歡喜せざるは莫し。

第五十三、佛、淸信士、阿夷扇持[一]父子を說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊び大比丘千二百五十人と俱なりき。一淸信士有り、子有り聰明なり、智慧辯才在在に興る所博くせざる所無し。能く自ら竪立し而して懈怠無し。明了殊絕たり。又、家業買賣の利を曉り、多く財寶を獲父母を供養す。佛の威神護り

【一】阿夷扇持。梵名、Āhi-tuṇḍika.

世尊に見ゆ「今、我等、錦氈手を察するに稽首して面に見え、法律を說くを聞き尋いで時に出家して沙門と爲る。博聞多智若干法を講ず、言談・雅麗・庠序として[一]獷無し、禪思を興起して故に復家に還る。世尊よ、是の如く其の應ずる所に隨ふ。未だ羅漢を得ざるに無根、無著法あり、未だ成就せざるに生死を觀見し周旋迴轉す、解脫を得ざるに佛の教へ給ふ所の如し、如來・至眞・等正覺・獲給ふ所安穩たり」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく「何ぞ怪みと爲すに足らむや、吾、無上正眞道を成じ最正覺と爲る。錦氈手、舍利弗の爲に教化せられ[二]四患を度すと雖も吾、異世に於て凡夫の身を以て廣く經法を說き諸の懃苦を度し乃ち殊特を爲せり。

往昔、過去久遠世の時一仙人有り、名を撥劫と曰ふ。五神通を得たり。時に、國王の爲に奉事せらるゝ所なり、愛敬量り無し、神足飛行し王宮に往返せり。彼の時、國王、仙人を供養し一切の施安し。坐して王の邊に在り、日日是の如し。王、仙人を奉じ髮を布ねて行く。手、自ら斟酌し、百味飲食あり、積みて年歲あり、供養限り無し。時に、彼の王、小緣の務有り、王に一女有り、端正殊好世に希有たり、王、甚だ敬重し、之を重んずること量り無し。女、未だ出門せず。王、女に告げて曰く「汝、吾を見るや不や、仙人を供養し奉事すること慇懃たり、敢て意を失せざるなりと。女、則ち、白して曰く、唯、然なり、已に見ると。王、之に告げて曰く、今、吾、事有り、當に遠く遊行すべし、汝、之を供養せよ、亦、我事ふるが如くし意を失する莫るべしと。時に、彼の仙人、空中より飛下し王宮内に至る。王女、來るを見手を以て之を擎げ、坐して座上に著く、適、手を以て擎げ體の柔軟に觸る。卽ち、欲意を起す、適、欲心を起し愛欲興ること盛なり、尋いで神足を失ふ。故に飛行する能はず、思惟し經行す。神足を復せむと欲す。故に獲ること能はず。時に彼の仙人、國王の女を見て貪欲の意起り志に從ふ能はず。歩行して宮を出づ。是の如きの所爲其の音、

【一】獷。あらあらしき貌。

【二】四患。四煩惱のことか、四煩惱とは我癡・我見・我慢・我愛となり。

て孔雀の形に供養す。尊敬して自ら歸す。諸の烏皆沒し處所を知らず。時に、天有り、即ち、歎じ頌して曰く、

未だ日光を見ざる時、　燭火、獨り明と爲す、　諸の烏本事へられ、　水を飲み及び果蓏を取る　音聲の具足に由り　日出で丶樹間に止まる、　諸鳥供せらる丶所、　今に於て悉く永く無し。　此の殊勝を觀ずるに當り、　尊卑と無く事へらる、　尊上、適興り現れ　卑賤、敬ふ事無きなり」と。

是に於て賢者、阿難、世尊の教に緣り心踊躍を懷く、頌を以て讃じて曰く、

如し佛興出せず、　導師、世に現はれずむば、　外の沙門、梵志、　皆普く供事を得たり。今、佛、具足の音を以て　明白に法を講說し給ふ。　諸の外、異學の類　永く諸の供養を失へり。

佛、諸の比丘に告げたまはく「爾の時の孔雀を知らむと欲せば我が身是れなり、烏とは諸の外異學なり、天とは阿難なり。時に世に在りて經法を講ずと雖も未だ三毒を除かず。生・老・病・死・究竟する能はず。塵勞の垢を除き梵行を淨修す。今に於て如來世間に興り、如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・佛・世尊と號す。今に於て法を說き具足し究竟す。梵行を淨修し諸の塵垢を離れ婬・怒・癡を除く、生死病死の三界に獨歩して畏るる所無し。諸の邪衆、外異學を降伏し歸伏せざるは莫し。一切度を蒙る。佛、是を說きたまふ時歡喜せざるは莫し。

第五十二、佛、仙人撥劫を說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、王舍城の靈鷲山に遊び大比丘衆千二百五十人と倶なりき。

爾の時、錦甚手長者、舍利弗の所に至り經法を諷誦し其の家に還歸り、所居の處を厭ひ其の鬚髮を下して沙門と爲る。未だ羅漢を得ざるも一切の遣す所皆已に備足せり。時に、諸の比丘、往きて

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞の祇樹給孤獨園に遊び大比丘衆千二百五十人と倶なりき。諸の比丘、悉く共に集會し、皆、共に嗟歎す。心に世尊を念ふやう「未曾有を得て一人世に興り號して如來・至眞・等正覺と曰ふ。一切の諸の外異學を毀壞し忽然として幽冥たり。復、光曜無し。未だ佛有らざりし時妙供養を致し、衣被・飮食・床臥の具恭事せざるは莫く自ら之に歸せし者、佛、世間に現はれ是等の類言をもつて誨へて行はざるなり」と。佛、道耳を以て遙に比丘の共に講義する所を聽き卽ち其の所に到り、諸の比丘に問ひたまふやう「向には何をか論ずる」と。諸の比丘、具足して自ら啓し說くやう「我等、集會し、平等正覺適世に興り、諸の外異學、便ち沒して現はれず、忽然、幽冥にして復光曜無し」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく「吾、未だ世に興らず、外學熾盛なり、日月無くして燭火を明と爲すが如し。日月適出てゝ燭火明無し。今、佛、世に興り異學皆沒し復、威曜無し。獨り佛慧明にして炤さゞる無し。但、今世のみ殊異行有るにあらざるなり。前世も亦然なり、未曾有の法なり、乃往過去久遠世の時一大國有り、北方邊地の土に在り、號して智幻と曰ふ、智幻の土人、烏を齎持し來り波遮梨國に至る。其の土の國界、此の鳥有ること無し。亦、異類奇妙の禽無し。時に、彼の國人、烏を持ち來るを見て歡喜、踊躍し自ら勝ふる能はず。供養し奉事す。果蓏を飮食し、日日月月而も之に消息す。遠方の鳥而も之を覺え見て皆來り集會まり。稱げて數ふ可からず。一國普く共に供養し奉事す。尊敬すること量り無し。彼の異時に於て一賈人有り、復、他國より三孔雀を齎し來る。時に衆人、微妙・殊好・羽翼殊特・行步・和雅・未だ曾つて有らざる所を見る。衆人、共に觀、其の音聲を聽き心に踊躍を懷く、又、前に加ふること千億萬倍なり。皆、烏を棄てゝ復供事せず。烏、威曜無く忽然として色無し。日の出てゝ燭火現はれざる如し。永く復、心諸の鳥の許に在ること無し。普く悉く彼の孔雀を愛敬す。之を視て厭ふこと無し。前に諸鳥を敬養する所の具皆以

汝、四衢に處り　顏貌、反覆有り、　人、未だ本末を知らず　選擇、觀察せず。　其れ道人此を視るに、　淨修、最法を行ず、　衆の凶惡有ること無く、　當に施して我に供事すべし。

爾の時、餘の梵志、　倶々共に行く。　皆、共に謂ひて言く、　此の人を信ずる莫れ。　將に卿を欺し財物を撾奪すること無からむとするかと。　偈を以て頌して曰く、

梵志よ、趣きて人に見ゆるを得る無く、　四衢路に於て、妄信すること莫れ、　其れ目を搖動し、
面、理無し　定で將に卿を撾ち卿の物を奪はむとす。

彼の時、梵志、　伴の語を信ぜず、反つて賤奴を信ず。　未だ益する所有らざるに佐助供養す。　時に、彼の奴、　夜半に向ひ人の斷絕を見て卽ち、　奔走して前み、　梵志を撾搉し脚膝を破傷す。　眼眩み地に躃る。　其の財物を奪ふ。　草驢駝梵志、　所有を亡失す。　又復、　其の膝を破る。　地に躃して啼泣す。　猶し小兒の如し。　怨を稱へ呼嗟す。　時に、　一天有り、　淨修梵行と名づく、　偈を以て頌して曰く、

其れ財を求むは利に於てなり、　而して懊哀を行ず、　[四]憒悷して自ら用ふるは、　尊師の教に從はざればなり。　皆、當に是の患を得べし、　彼の梵志の苦の如し、　愚に從ひ路を愼まず
罪を獲ること梵志の如し。

佛、　諸の比丘に告げたまはく「爾の時の梵志、　草驢駝とは今此の比丘、　新學比丘に猗彎を投くる者是なり。　[五]髡鉗の惡奴は（卽ち）新比丘、　心に惡を懷き猗彎の緣に依る、　是れ、　劫盜者是れなり。　彼の時の　諸　の異梵志とは今、　諸の比丘、　彼の比丘を難ずる者是れなり。　爾の時の淨修梵行天とは今の吾が身是れなり。　爾の時相ひ遇ひ今も亦相ひ値へり」と。　佛、　說きたまふこと是の如く、　歡喜せざるは莫し。

第五十一、佛、孔雀を說く經

【四】憒悷。人の語に乖く貌なり。

【五】髡鉗。毛髮を剃り落す刑。

爾の時、一比丘有り、新學の遠來の客此の國に至る。諸の比丘に一の猗籌を求めむと欲す。諸の比丘聞きて猗籌を與へず。「今、子を觀るに行具足せず擧動不祥なり、將に此に於て損耗の業を造すこと無からむとす」と。爾の時、新學、猗籌を得ず、復、餘處に詣りて、猗籌を求索む。彼の諸の比丘、本末を問はず、速に猗籌を授く。前比丘、聞きて即ち往き問ふて言く「卿、何を以ての故に本末を問はずして、便ち猗籌を與ふるや」と。比丘、答へて曰く「吾、猗籌を授く固より妄ならざる有り、我に奉事するに當り供養時を以てす、新比丘有り安詳雅步擧動暴ならず、入出、進退儀法を失はず、類、佳人の如く凶惡に似ず」と。主比丘、獨り在りて出でず。新學比丘、復、衣鉢を取り主比丘を取り、撾捶、榜笞し地に就け縛束す。猶、其の口を繫び喚ぶ所無からむとす。人、其の聲を聞き、即ち其の夜に於て馳迸、行走す、天、曉に向はむと欲し諸の比丘衆、適其の聲を聞き皆來り之に趣く。其の繫縛を解き則ち其の意を問ふ。時に、彼の比丘、本末を爲に說き、比丘に語るやう「當に共に分布して行きて之を求索めよ、我をして還び衣鉢を得しめよ」と。諸の比丘、答へて曰く「吾等、卿に語る、妄信を得る莫く、猗籌を與ふる勿れ、將、枉げらるること無からむや」と。自在、放恣にして吾が語を用ひず、作す可き所の者を今、自省す可し」と。時に、諸の比丘、具に世尊に啓しぬ。

佛、言はく「此の比丘、但、今世のみ是の凶人の爲に侵枉せらるゝ所となり、本末を知らずして妄信せしにあらざるなり、所在相ひ遇ひ輒ち侵す所と爲る。

乃往過去に、梵志有り、草驢駝と名づく、瓦器を載せて門戶に持つ有り、道路を行く、遙に一奴の道の傍に住するを見る。遙に梵志を覩て稍來り之に近づく。心に、劫奪を欲し之と相ひ見ゆ。梵志、之を信ずるやう「此の人、我に見え來りて我に奉事す。施與する所有り、來り我に親附す」と。彼の時、梵志、偈を以て頌して曰く、

【一】猗籌。人數の多少を算する器、布薩の時等に之を用ふ、概ね竹木にて作り長さ八寸、太さ小指許なり。

【二】榜笞。むちうつこと。

【三】馳迸。はしること。

と能はず。衆人、數數、共に之を觸嬈す。故に捨て去らず。衆人、捕へ得て盡く其の毛羽を搣く、荊棘を頸に繋く。天、時に[二]霖雨す。泥溺して行き匝く叉飛ぶこと能はず。徐徐に自ら曳き歸りて其の巣に到る。妻、時に、偈を以て頌を歌ひ問ふて曰く、

誰か皆毛雨を搣く、今、天、復陰雨す、荊棘を被て鎧と爲して、戸に立ち何を謂ふや。

烏、偈を以て婦に答へて曰く、

我が身吉祥にして所緣有り、今、天、時に大いに霖雨す、汝、促して戸を開き我を惱ます無れ、且つ食を持ち來り我が命を活せよ。

其の婦、偈を以て答へて曰く、

我が念ふ所の如く造る所の如し、卿の[三]讒哳せられて、貪る所多し、今、凶危に遭ふて華を得るが如し、後に、方に更に其の實を獲べし。我の頌する所亦受く可し、具足せば酪[四]を成じ[五]醍醐を致さむ、此の勤苦、衆惱に値ひ已りて、當に屏猥處に詣り閑居すべし。

彼を去ること遠からず、一神仙、梵志道人有り、遙に其の聲を聞きて頌を歌ひて曰く、

惡しき罪果を覩ず、是に緣つて苦患に遭ふ、故を以て罪を作る莫れ、將、大いなる惱を受くる無し。と。

佛、諸の比丘に告げたまはく「爾の時の烏の妻を知らむと欲するや不や、今、此の比丘尼是なり、其の烏の夫とは出家の子沙門と爲り打搣せらるゝ者是なり、爾の時の仙人とは則ち吾是れなり、昔日、相ひ遇ひ今世相ひ値へり」と。佛、說きたまふこと是の如し、歡喜せざるは莫し。

第五十、佛、驢駝を說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞の祇樹給孤獨園に遊び大比丘衆と倶なりき。

【二】霖雨。ながあめ。

【三】讒哳。そしりさへづること。

【四】酪。ちゝしる。

【五】醍醐。酥の上に浮べる油の如きもの、卽ち酪の精液。

故に諸天世間の尊と爲り、法に於て自在にして、法教を雨らす。歡悅の心を以て多く勸むる所なり。出家、上天、無數千なり。今、無利に勝ちて皆利を得、其れ悅心有りて佛に歸命す、恭肅、慇懃に[一]少薩を造し、命壽の終るに臨み趣の安を見む。

爾の時、世尊、賢者阿難を讚じて曰く「善き哉、善き哉、審に云ふ所の如し」と。復、次に阿難、若干の行を造し乃ち所立を成ぜり。佛、一切を救ふこと母の子を念ずる如し。佛、說きたまふこと是の如く、歡喜せざるは莫し。

第四十九、佛、雜讚を說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊び大比丘衆と俱なりき。

爾の時、一比丘尼の子有り、家を捨て道を爲し喜んで家家に詣る。諸の白衣と與に雜錯、麁獷にして行純一ならず。母、數之を訶す。「爾るを得ること勿かれ、行に節限有り、若し法會あらば經を講じ義を說き乃ち行ふ可き耳、效ひ進み俗間の事を爲すを得る無れ」と。父も亦之を呵す。亦、肯て父母の法教を受けず。人の間に在り家居の亂を造し、但、惡人と不成就の子と共に相ひ追ひ隨ふ。諸の兇人に遇ひ共に之を撾捶す。加へて手拳を得、今、水中に投じ久しく乃ち置かむと欲する耳、叫び呼びて脫することを得て捨て去れり。諸の比丘、聞いて往き之を救ひ家に還歸るを得たり。諸の比丘衆、往いて佛に白して其の本末を說く。

佛、比丘に告げ給ふやう「此の人、但、今世のみ家居の教に隨はず其の行を迷惑するにあらず。乃往過去久遠の世の時、諸の烏の巢有り、家居に[一]賓近せば人數喜び探し、之を捕取へむと欲す。烏の妻、烏に謂ふ。人の家に近く巢を作るを得ること無く、人を信ずる莫れ、卿を取り之に苦毒を加ふること無きを得むやと。其の烏、之を聞き捨て去るを欲すと雖も心戀戀を懷き避け去るこ

【一】少薩。意味不明。

【一】賓近、近接の意。

に光足より入る。

時に、阿難、座より起ち衣服を整へ右膝を地に著け長跪叉手して佛に白して言はく「佛、妄に笑ひたまはず、笑ひ會ず意有り」と。佛、阿難に告げたまはく「汝、梵志の蜜を以て佛に奉り、比丘僧に布き、餘蜜を水に投ぜしを見るや」と。對へて曰く「唯、然なり」と。「今、此の梵志、然れば後來の世二十劫を歷て惡趣に墮せず。二十劫を過ぎ當に緣覺を得べし。名を蜜具と曰ふ」と。諸の比丘、對へて曰く「唯、然なり、世尊よ、吾等、悉く此の梵志を見る。一鉢の蜜を以て饒益する所多し、而して緣覺を得む」と。

佛、比丘に告げたまはく「是の梵志、但、今世のみ一鉢の蜜を以て饒益する所多きに非ず。前世の宿命も亦復是の如し。

乃往過去稱計る可からざる時の世に一婆羅門有り、往きて閑居寂寞の處に入る。神仙有るを見て博愛する所多し。或は人有りて說く、今、此の仙人往古及び難し、當に往きて啓受すべしと、人有り報じて言く、用つて此の養身、滿腹の種を見るとなす。爾の時、仙人有り、五神通を得て心の念ずる所を見、卽ち、樹下の閑居の處に於て空中に踊りて在り、其の人の前に住す。其の人、之を見て歡喜、踊躍し善心を生ぜり。卽ち、其の家に還り鉢に蜜を盛滿して之を奉授せり。時に仙人、受けて虛空に飛在す。是の施の德に緣り後國王と作り名を蜜具と曰ふ。正法を以て國を治め、國を治むること年を積み、壽終るの後天上に生るゝを得たり」と。

佛、比丘に告げ給ふやう「爾の時の五通仙人を知らむと欲せば則ち我が身是なり。爾の時の梵志は今の梵志是れなり、爾時、蜜を施し天人の福を受く、是に緣つて今世も亦復佛に施す。後に緣覺を致さむ」と。是に於て賢者阿難、偈を以て佛を讚するやう、

世尊、多く哀憐し　自然に至誠に度す、　諸と天人と世の爲めに、　衆獄の繫著を懷へり。

れなり。爾時、脱することを得て危害せられず、今も亦是の如し」と。佛、說きたまふこと是の如し。四臣、兵吏、及び比丘僧、歡喜せざるは莫し。

第四十八、佛、蜜具を說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞國の給孤獨園に遊び大比丘と倶なりき。

爾の時、梵志、異道の術に迷惑し佛法を信ぜず、佛の教を亂さむと欲す。城中を行く。遙に佛の來り給ふ見、惡みて覩るを欲せず。竊に他舍に入る。世尊、瞿曇、我を見ること無きを得む。時に、大聖、愍傷し之を憐れみ、尋いで其の所に到り目前に住し給ふ。避け去るを得むと欲するも永く得ること能はず。又、馳走せむと欲するも自ら致す能はず。佛の所に來詣せり。彼の時世尊、爲に經法を說き給ふ。尋いで時に歡喜す。善心、生じて、輙ち佛と及び法と衆僧に歸命し戒禁を奉受す。佛を遶ること三匝にして稽首して退く。其の家に還歸り、卽ち、應器を取り、中に蜜を盛滿し、兩手に之を擎げ佛の所に來詣りて奉上せむと欲す。佛、諸の比丘に告げたまはく「是の鉢の蜜を取りて衆僧に布與てよ」と。時に、一鉢の蜜、佛及び衆僧皆滿足を得て、鉢滿つこと故の如し。卽ち、復、佛に授く。佛、梵志に告げ給ふやう「汝、是の蜜を取り大水無量の流れに投著せよ」と。梵志、又問ふ「何の故ぞや」と。佛、言はく「水中の蟲・蠡・黿・鼉・魚・鼈に具足せしめ悉く其の味を蒙らしめむ」と。梵志、敎を受け卽ち水中に投ず。還び佛の所に至り、或は驚き或は疑ひ踊躍し悲喜す。時に、世尊、尋いで以て欣笑し給ふ。五色の光口より出でて上、梵天に至る。普く五道を照し周遍せざる靡し。還び身を遶ること三匝す。菩薩の決を授くる時は、光、頂より入り、緣覺の決を授くる時は、光口より入り、聲門の決を授くる時は、光臂肘より入り、上天の福を說き給ふ時は、光、臍より入る。人身を受くるを說き給ふ時は、光、膝より入り、地獄、餓鬼、畜生を說き給ふ時

竭王、即ち、外人に勅し捕へしむ。鳥師、鷹を致し將來す。四鳥、之を見て畏く危命に在らん、故に往きて取り來れ、即時、敎を受け輙ち遣はす。鳥師、往くに應じ若干の變を以て其の趣く所を觀じ方便を造立り、羅を張り鳥を捕ふ。輙ち以て之を獲たり。生くるを國王に上る。時に、沙竭國王、其の四鳥に問ふて之を呵罵す。「汝等、何の故に數々此に來至り吾が境界を犯すやと。四鳥、答へて曰く、唯、然なり、大王よ、我が樂しむ所に非ず、願うて此に至らず、又王有り、名を安住と曰ふ。八萬の鳥と俱なり、以て眷屬と爲す。之の尊師の爲なり、其の婦、舊梨尼、懷妊受胎す。此の阻極を發して以て惡食す。須其の善柔鹿肉の食噉を得むと欲す。彼の王、遣し來る。其の君の敎を受け身命を惜まず。自ら投じ沈沒し而して敎を奉謹せり。吾が願ふ所に非ず。時に國王、聞きて未曾有を得、愕然として之を怪しむ。彼、自ら心を食して、此の食を作す莫し。自ら王の敎を受け此の方計を作し身命を惜まず。其の君王の爲に軀命を投棄つ。今の所爲、誠に及ぶ所に非ず。世に於て希有なり、俗人に求めむと欲するも此の反覆有らむや、君父の敎を受くるも尙得べからず。況んや鳥獸をや、其の命を奉宣すること及び難し、及び難し、實に未曾有なりと、是に於て諸鳥、王の爲に偈を說きて言く、

唯、願くは大國王よ、　我、沙竭國に止まる、　我等の王、安住、　八萬の衆と俱なり。　婦を舊梨尼と名づく、　善柔肉を欲思す、　是の大王の鹿苑　具足して王の食と爲す。　我等、國王の使、　命を奉じ此に來至る、　君の敎命を受け　敢て自ら此に至らず。

是に於て國王、心に自ら念じて言く、此の事得難し、未曾有と爲すと。時に、國王、諸鳥に告げて曰く、汝の罪過を赦す。汝の湊く所に在りて、常に解脫を得む、拘制有ること勿れ」と。

佛、諸の臣に告げたまはく「爾の時の四鳥身を知らむと欲するや不や、今の汝等四臣則ち是れなり、安住國王とは今の波斯匿王是れなり。今、國王の諸の兵、臣吏、卿等の將ゆる所は八萬の鳥是

り、是の如くにして發し行く」と。世尊、讃じて曰く「善き哉、善き哉、諸賢及び難く所作及び難し、是を報恩と爲す。而して反復有り、設ひ行ひて少しく所作有るも、汝等の身を失はず、王の俸祿を受くるもの所作當に然るべし、此の事佳善じ。爲めに儀像を愼めば則ち正仕と成す。大神恩を報ず、則ち反復有り、諸賢よ、之を聽け、但、今世のみ此の國王の爲に興立する所多く〔三〕功効を成就し所作及び難きにあらず。

昔、過去久遠の世の時沙竭の國に大いに諸の烏衆有り、而して來り集會し其の國に止頓る。彼に烏王有り、名を甘蔗と曰ふ。八萬の烏に王たり、中に在りて獨り尊し。烏王、婦有り、名を舊梨尼と曰ふ。時に懷軀し阻惡食有り、心に念ずること是の如し。鹿王の肉を得て食せむと欲す、至誠を以て王に白すやう、此の食を得むと欲す、今に於て我れ小か此の念を發す。善柔の鹿王の肉を得て食し乃ち活くるを欲す。爾らざれば死せむと。沙竭國王、善柔の鹿王の肉を得て之を食噉せむと欲す。獵者を亦募りて行き之を求む。之を捕へて將ゐ來る。時に、烏王、其の音聲を聞き烏衆を合會め、汝等當に行くべし、沙竭國王に大善鹿王の形貌有り、須臾夜と名づく、其の肉を得むと欲すと。彼の時、四烏、募に應ず。吾等、善柔の肉を取るに堪忍ふ、國王に用ふるが故に、身命を惜まず、當に此の事を辦ずべし、餘の烏をして我が後を逐ひ行かしむ無れと。時に、四烏、數々往きて大衆の會所に至り、各自議りて言く、何の方便を以て之を取るを得むと。彼の時、其の人國王の使者、往きて太子に告ぐ、烏、數來ると說く、則ち遣はして逝至る處を守護す。願の如く得ず。然る後、復大烏衆を遣し須臾の肉を求む。今現に此に在り。便ち、彼に遊び隨ひ卽時に肉を取り之を擧げて而して去る。時に、國王の子、大烏衆を見て恐懼し馳走し、還りて國王に白し、具に本末を說く。國王之に問ふやう、烏、所より來り、乃ち此に至るやと。太子、白して曰はく、我、四烏を見る。色像斯の如し。數々彼の鹿苑に來至る。吾も亦數往く、然る後四烏來り到ると。時に、沙

〔三〕功効。てがら。

何を以て安寐を得、何を行ひ憂患無きや　何を以て一法に至る、密に行ひ善財を致すや。賢聖、何をか歎ずる所、滅に至り能く憂へざる、誰か能く此の事を保ち、愁を除き患無からしむ。

大臣、偈を以て答へて曰く、

瞋を棄て安寐を得、恚を除き憂患無し、怒は毒の本なり、大王、此を知るべし。聖賢、知り歎ずる所、此に緣り憂患無し、此の義を以て王に答ふ、忍辱の行を嗟歎し瞋恨を毀呰る。此の義を以て之に答ふ。分別し降伏せしめ、推して其の便を得ず、凶惡、加ふる能はず　之に平等の德を立つ。

佛、諸の比丘衆に告げたまはく「爾の時の國五大猶とは則ち調達是れなり、大臣、密善財とは則ち我が身是なり、以て佛道を得、具に本末を演べぬ」と。佛、說きたまふこと是の如し、歡喜せざるは莫し。

第四十七、佛、拘薩羅國の鳥王を說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞の祇樹給孤獨園に遊び大比丘衆千二百五十人と俱なりき。爾の時、世尊、明旦、衣を著け鉢を持ち城に入りて分衞し給ふ。國王、波斯匿[一]四大臣有り、拜して四將と爲す。[二]四部の兵を合し他方の小國を伐たむと欲す。時に、四臣、遙に世尊の衆僧と俱なるを見、卽ち、佛の所に詣り足下に稽首し退きて一面に住す。世尊、之に問ひたまはく「諸の仁者等、何所に湊かむと欲す」と。諸臣、對へて曰く「王、波斯匿、臣等の行を遣はし四部兵を擧げ、他國に詣り小國を攻め伐たむと欲す。唯、然なり、世尊よ、我等の身、此の國王の爲に興立する所多し、餘衆を勞するに及び、常に危命を畏る。今、當に遠く行くべし、行きて戰鬪すべし、攻伐する所有

【一】波斯匿王。梵名、Prasenajit. 勝軍、勝光等と譯す、舍衞國の王、梵授王の子、佛と同日に生る。
【二】四部兵。象兵・馬兵・車兵・步兵。

便ち、其の所に到り給ふ。諸の比丘曰く「調達の凶惡は稱量る可からず。要を擧げて之を言はば言竟る可からず」と。

佛、言はく「是の如く是の如し、其れ比丘よ、調達は常に害心を以て如來に向へり、未だ曾つて和悅せず、吾、慈心を以て之を降伏せり、昔、過去久遠の世の時已來量り難し、爾より以來、佛久しく之を知る。調達は凶惡にして心に危嶮を懷く。吾、慈心を以て而も之を降伏す。續きて知ること此の如し。故に沙門と爲す。善德を建立し攝取せしめむと欲す。是を以て本と爲す。出家に由因り緣として救護を得計らむと欲す。調達は但、今世のみ吾の便を求め而して害心を懷き、吾、常に至心慈心弘普して之を降伏せしにあらず。

乃往過去久遠世の時勝げて計るべからず。波羅奈城に國王有り、號して大猗と曰ふ。法を以て國を治め萬民を枉げず、王に大臣有り、密善財と名づく、智慧聰明にして通ぜざる所無し。名德超異し世と同じからず。其の性吉祥なり、殊妙、和雅にして安穩患ひ無し。常に慈心を懷き愍哀する所多し。志、柔潤を懷けり。其の王、愍み無く、【一】釋子、心を哀む、志、慈を懷かず、常に人の過を伺ひ其の便を得むと欲す、心に凶惡を懷き一も善快無し。時に、彼の王、密善財大臣と俱なり。大猗王、大臣に告ぐるやう「人は何の食ふ所ぞ、何の言ふ所を說くか、安きを獲る所多く、危害を致さずして長益を得む」と。時に應じ偈を以て頌を歌ひて曰く、

【二】食言少くして獲るところ多く、　忍ばざれば長大を得、　忍辱は損過を致す、　密善財、云何と、

密善財大臣、偈を以て王に報へて曰く、

大王は是れ瞋の種、　恚恨の心の所爲なり、　害無く瞋恚無きは　則ち正に本の所行なり。

王、復、偈を以て問ふて曰く、

【一】釋子。釋迦佛の弟子、釋迦師の敎化に從ひて出生する故に釋子といふ。

【二】食言。言ひたることに背くこと。

四大人、食を得ずむば則ち悅喜せず、以て自ら安こと無し」と。時に、梵志、還び王の所に詣り具足して本末を說く、此れ、妻子、奴婢、求む可き所なりと。復、偈を以て重ねて歌つて曰く、

大王よ願くば之を聽せ、　願ふ所各各異る、　我が家心同じからず、　婦は百の瓔珞を索む。
男は車馬乘を求め、　女は珠寶の飾を願ふ、　吾前に畜ふところの奴婢は、　田と及び儥磨を求む。

時に、王、偈を以て答へて曰く、

汝の所欲に隨はゞ、　則ち與に心に違はず、　時に應じ梵志をして、　皆歡喜悅を得しめむ。
其の王皆以て賜ひ　各各志願の如し、　意の如く具足を得、　歡喜して一の恨無し。

佛、比丘に告げたまはく「爾の時の國王を知らむと欲せば則ち吾が身是なり。爾の時の梵志とは則ち今の梵志の身是にして、其の妻とは今の梵志の妻是れなり。子は則ち子、女は則ち女、奴は則ち奴、婢は則ち婢是なり」と。佛の說きたまふこと是の如く歡喜せざるは莫し。

第四十六、佛、君臣を說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、王舍城の靈鷲山中に遊び大比丘衆千二百五十人と倶なりき。

爾の時、諸の比丘、心に自ら念を興すやう「佛の威神を承けなば諸天之に感じ未曾有を得、是に於て世尊、常に慈愍を以てす。調達は而も反つて害意を以て如來に向ふに、佛は大哀、弘意を以て之を待ち給ふ」と。或は復、比丘、而も此の言を說く「往は世尊、豈、調達の凶惡の心にて殄害を懷くを察知し給はざらむや、而も家を捨てて其の頭髮を除かしむ」と。或は比丘有り、各各議りて言く「佛、已に調達の凶惡の心にて危殄を懷くを預知し給ふ」と。或は議りて言ふ有り「誰か調達をして頭鬚髮を除き沙門と作らしむ」と。佛、遙に之を聞き、諸の比丘衆、共に此の事を議ると。

て廣く大法を說きたまへり」と。
佛、諸の比丘に告げたまはく「汝等、寧ぞ、梵志、今、宣揚する所の口の所說を聞くや」と。比丘、對へて曰く「唯、然なり、世尊よ、已に見、已に聞けり」と。佛、言はく「今、此の梵志、諸の眷屬と與に皆大利を獲、是の如く具足せり。吾、異なる世に於ても此の梵志をして廣普を得獲しめたり。
乃往、過去、久遠世の時波羅奈城に一尊者有り、名を所守と曰ふ。是れ梵志種なり。黠慧、聰明にして義理を識解す。卒に對ふる辭、口言柔美にして王の爲に敬はる。常に王の心に可とす。其の國多く蒲萄・酒漿・飮食の具有り、王、及び人民飮食快樂す。彼の時梵志、異伎術を作し娛樂する所多し、王をして欣愕せしむ。王、大いに歡喜し多く賜遺する所其の所欲を恣にす。梵志、王に白さく「我、當に家に歸るべし、自ら其の婦に何の志求を欲するか問はむ」と。王、卽ち、之を可とす。梵志、便ち還り家に到り婦に問ふ。「我、異術を興し王をして歡喜せしむ。我をして願ふ所を許す。汝、何をか求むる所ぞ、誠を以て我に告げよ、卿の爲に致し來らむ」と。婦、梵志に問ふやう「君、何をか願ふ所ぞ」と。其の夫、答へて曰く「我、一縣を願ふ」と。其の婦、答へて曰く「(何を)用つて、縣邑を求むるや、我、願くば百種の瓔珞、莊飾、臂の釧、步搖の屬、種々の衣服、奴婢、乳酪、醍醐の飮食を得む」と。時に、梵志、復、其の子に問ふ「汝、何をか求むる所ぞ」と。其の子、答へて曰く「我の願ふ所は步行を用ひず。車馬に乘り王太子、大臣と倶に遊ぶことを得む」と。時に梵志、復、其の女に問ふやう「何の志願を欲するや」と。其の女、對へて曰く「我、求むる所は珠寶を得以つて自ら身を嚴にし上妙の服を被て千女の中央にあり、而も獨り姝好たるを欲す餘の異願を用ひむや」と。時に梵志、又、奴婢に問ふ「何の志求を欲するや」と。奴、言く「車と牛と田を覆す耕具を得むと欲す」と。婢、曰く「碓磨[二]を得て粟を舂き　磑麵[三]以て安を欲す。

【二】碓磨。ふみうすとひきうす。
【三】磑麵。めんをひくこと。

卷の第五

第四十五、佛、梵志を說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞の祇樹給孤獨園に遊び千二百五十の比丘と俱なりき。爾の時、世尊、晨旦に衣を著け鉢を持ち舍衞城に入りて分衞し、次第に食を求め、卽時に、轉た行いて梵志の舍に到り給ふ。時に、彼の梵志、遙に世尊を見奉るに威神巍巍たり、諸根寂定にして其の心湛靜なり、諸根を降伏し復、衰入無し。日の山岡に昇り出るが如し、月盛滿、衆星獨り明かなる如く、帝釋宮の忉利に處るが如く、梵天王の諸の梵中に在るが如く、高山の上の大積雪の四遠に現ずるが如く、樹華、茂るが如し。其の心憺泊にして水の淸きが如し。三十二相、其の身を莊嚴し八十種好其の體に遍布す。威神光光として稱り限る可からず。之を視るに日の如し。卽ち、座從り起ち眷屬と俱に、前み行きて奉迎し佛足に稽首し、別床に請坐す。佛、便ち、坐に就き給ふ。時に、梵志と梵志の婦と、心に踊躍を懷き、若干種の食、香潔の饌、手、自ら斟酌し、供養、極り無し。飯食畢訖り。鉢を擧げ手を洗ひ給ふに、更に[一]卑褊を取り佛の經を說き給ふを聽く。

時に、世尊、卽ち、梵志及び妻子、僕從、下使の爲に經道を講說し、其の心を開解し其の義を分別し給ふ。諸佛の法、其の本源に隨つて而して分別を演べ給ふ。布施・持戒・忍辱・精進・一心・智慧・病に應じ藥を與ふ。尋いで、心、苦・集・盡・道を解す。時に、梵志・妻子・僕從・下使、卽ち、座上に於て四聖諦に逮べり、要を取りて之を言はば則ち天眼を得、佛・法・衆に歸し五戒を奉受せり。是に於て梵志、卽ち、座より起ち佛足に稽首し、世尊に白して曰く「大聖よ、恩を弘め利義を現ずることを得たり、今日、獲る所衆患を度す。皆、是れ如來・至眞・等正覺の救濟し給ふ所なり、猶し大雲の虛空に周く、普く天下に雨らし潤澤する所多きが如し、世尊、是の如し。常に大哀、無極の慈を以

【一】卑褊。わるいこしかけ。

なり。衆人、咸來り皆共に居止し、其の人の邊に在り、居家遂に多く更に城邑を立つ。婦を取り子を生む。子大いに衆多にして父、轉た年大なり。諸子に教へ告ぐるやう「當に施を行ふ可し。身・口・意を護り、恩を布き德を施せよ」と。子、各、違錯し其の教の言に從はず。「父、今、已に老ひたり、何ぞ寂然たらず、妄に敎ふ所有り、誰か當に之を受くべきや」と。父、子の惱を得て、心に自ら念じて言く「吾、本一身、豐にする所、廣く遠近に施し下不逮に及べり、今、諸子を得て我が身心を亂す。其の敎に從はず、子無きに如かず」と。佛、言はく「人、本、神を立て一身清明なり、能く益する所有り正行を奉ず。強いて觀ずる所有り、本無を解せず、自ら身有りと見て因つて五陰・六衰の惑を生じ、反つて迷ふ所と爲り正眞に至らず。後、三界一切皆空なりと解す、五陰悉く除き三毒自ら滅す、乃ち無上正眞の道に至る」と。佛、說きたまふこと是の如く歡喜せざるは莫し。

時に天、小しく熱し。倶に行きて洗はむと欲し流水の側に詣る。凶衆、遙に見て即ち惡心を生じ、婬意、隆崇にして以て之を犯さむと欲す。比丘尼の適、衣被を脱ぎ水に入りて洗浴するを候ふ。尋いで前み衣を掣き持つて遠處に著く。牽ひて之を犯さむと欲す。時に、比丘尼、逆意を發すを見て意中[一]愴然たり、之を愍み愚と爲す。因つて兩眼を脫り其の掌中に著け、以て諸逆に示す。卿、我を愛する所なり、唯、面色を愛するのみ、今、我、以て盲となる。何をか好む可き所ぞ、復、腸・胃・身體の五臟・手脚、各、異にして示す。棄てゝ一面に在り。凶衆に謂ひて言く「好みて所在を爲せ」と。逆凶、之を見て忽然として恐怖す。世は無常にして三界は寄の如し、其の身は化成なり、骨と血と不淨にして貪る可き者無しと知り、尋いで衣被を還し稽首して過を悔ゆ、「所作、無狀なり、反逆義無し、願くば其の殃を捨てよ」と。長跪叉手す。各、五戒を受け將ゐて佛の所に至り地に稽首し自ら其の罪を責む「盲冥、無知たり、迷ひしより來、日久し、惡を作して罷まず。世世當に禍危を受くべきを覺らず。今、大聖の垂恩、救濟を蒙らむ。乃ち、比丘尼の威德化眼に感ず、罪を去り罪輕く稍、無爲に近づく」と。佛、言く「善き哉、惡趣、已に離れ轉た成就すべし、樹の花と枝と果實と以て茂るが如し。行も亦斯に從ふ」と。諸人、欣然たり、求めて沙門と作る。佛、即ち、之を聽す。正心を本と爲し、尋いで時に出家し諸根を守護し衆殃永く除く、[二]五蓋存せず三毒消滅す、佛の子孫と爲り以て生死を斷す、自然に神通す、爾らば乃ち佛の大恩を識別せり。

第四十四、佛、孤獨を說く經

昔、一人有り、幼少にして孤苦し獨一身居る。廣田に種え作り爲するに犂牛有り、五穀を得收し、乳酪・醍醐・衆果・衆茹・限量す可からず。遠近の諸食の者に供給し往來每に窮困と與なり。名德、流布し普く十方に通す。時に、衆喩を說くに其の意を解悟す、當に伴黨を得べく獨り諸ふ可からざる

【一】愴然。いたましき貌。

【二】五蓋。蓋は即ち蓋覆の義、五法ありて能く心性を蓋覆して善法を生ぜざらしむ。一、貪欲蓋、二、瞋恚蓋、三、睡眠蓋、四、掉悔蓋、五、疑法となり。

く「是れ卿の身の過なり、何をか怨責する所ぞ。長者、勒を授け鞍を被る。卽便ち、騎を受く。汝、隨順し東西之に從へ、便ち樂せらるる耳、斯の事極めて易し。而して卿、之に反す。故に此の殃を獲たり」と。子、母の教を聞き明日卽ち從ふ。長者、之を試む。安然として之に順ふ。之に騎るに身を授く。行かしめなば卽ち行き、住せしめなば尋いで住す。長者、大いに喜び馬、卽ち、調良す。飲食、時に隨ひ母と異ること無し。假に以て喩と爲す。長者とは佛を謂ひ、馬を學人に喩ふ。佛の教を受けず、放心、意を恣にし道化に從はず。故に爲に法を說き、去就を知らしむ。跳踉して走り行き制す可からずむば加ふるに捶杖を以てす。爲に[五]五戒、十善を演べ天人の中に生る。罪ある者には示すに地獄・餓鬼・畜生の勤苦の難を以てす。三界の患、往來輪轉し一も安ず可き無し。設し惡を犯さず五戒・十善あらば乃ち之を開化す。四等・六度・神通の行十方に在り、諸佛共に會す。三毒消除し諸の陰蓋を去る。其の子母に從ふ。長跪して問ふて曰く「前に其の師、行ずる所の法則を聞く、師、說く深淺の行皆意に有り」と。故に、五戒・十善の因天・人と爲ると說く、空・無相・(無)願・六度無極・四等・四恩は生死に在らず、滅度に住せず、乃ち、正眞に入る。勇果の徒、神通乘に處り三界に周旋し一切を度脫す。

第四十三、佛、比丘尼の現變を說く經

昔、舍衞の城、城を拘薩と名づく。國中、諸の蕩逸・婬亂の衆有り。專ら凶惡を爲し徑路に遵はず。一國之を患ひ以て酷苦と爲す。伴黨相ひ追ひ共に惡逆を爲す。官家、取らむことを求むるも馳走し得ること叵し。

時に國中、諸の比丘尼、俱共に遊行す。樹下に精專、正道を思惟し心の懷ひを捨てず、衆比丘尼の中智慧第一を名づけて差摩と曰ひ、神通第一を蓮華鮮と名づく。各各德行有り、威神巍巍たり。

【五】五戒。不殺生戒・不偸盜・不邪淫・不妄語・不飲酒。

除くが如し。樹神、跪拜し自ら辛苦を陳ぶ。三界に周旋し五陰の覆ふ所となり、十二牽連[七]、忽ち始めて相ひ因る。唯、愍哀せられ此の覆を救濟せよと。即ち、爲に經を說き心をして開解せしむ。五戒を奉受し十善を修行す、惡の[八]三塗を塞ぎ道心稍前み遂に無極に至り佛の正眞に入れり。

時に世尊、諸の比丘に告げたまはく「其の本末を解り心を執ることを堅くすべし、後悔を得ることと無きなり」と。佛、說きたまふこと是の如く歡喜せざるは莫し。

第四十二、佛、馬喩を說く經

昔、長者有り、一好馬を畜ふ。初めて之を得る時、志操犇突し御し調ふ可からず。適騎らむと欲すれば前の兩脚を擧げ跳上り遊逸す。四出横に走り徑路に從はず。溝渠に入り樹の牆壁を突く。其の主の長者、甚だ瞋恨を懷き還歸りて家に在り。鞭にて撾ち酷毒す。水草を與へず獨り窮困ならしむ。飢餓し心惱む。而して自ら剋責す。心中計無く何の施すべきを知らず。空中に聲出づ、則ち、之に告げて曰く「其の主に順從ふ時患難無し」と。時に、馬の心解く。明日、長者、故に乘騎りて試む。以て[一]鞍勒を著く。馬、即ち、之を受け復び跳踉せず。上に騎りて鞍住す。亦、爲に態と牽かず。東西・南北行き從ひて違はず。穀を與へ之に飲ます。隨時、消息す、飽滿し氣力を肥盛せしむ。後、騎りて行かむとするに轉た、遂に調柔し日日成就す。後、一子を生み數歳に至る。長者、之に乘るに復順從ならず。跳踉し横に走り[二]騎靽を斷絕す。[三]捶杖之に加ふ、以て行を改めず。還歸り之を餓やす。乃ち、己の殃を思ふ。食は臭草を以てし、飲は濁泉を以てす。自ら作し己に受く。何をか復、怨む所ぞ。夜、行きて母に見ゆ。長跪して問ふて言く「今は大家に獨り、憎毒せらる。水草を得ず、撾鞭、甚だ酷なり、母獨り高く處す。親感を念はず、行來欣欣として一身喜樂す。高望、遠視す。猶し[四]鴻鵠の若し。子孫、獨り此の酷に遇ふを憂へず。」と。其の母、答へて言

【七】十二牽連。十二因緣のこと、十二因緣により生死を牽ひつゞかしむる故にかくいふ。

【八】三塗。地獄・餓鬼・畜生。

【一】鞍勒。くらとくつわ。

【二】騎靽。たづな。

【三】捶杖。杖にてうつこと。

【四】鴻鵠。はくてうとこうのとり。

爾の時、一居士有り、世の苦患を厭ふ。萬物非常なり、身の所有る財物は幻の如し、天地に寄居する猶し過客の一も貪る可きこと無きが如し。唯、道は眞正にして永く常存す可し。因つて便ち出家し沙門と行作る。精進懈らざるも、志本より達せず。則便ち山に入る。山中に修行し夙夜廢せず。身命を惜まず。布施・持戒・忍辱・精進・一心・智慧・志を守りて動かざるも道證を得ず。心に變を悔ひ還び[一]白衣と作らむと欲す。道を學ぶこと年を積み勤務休まず、然も心冥冥として趣く所を知らず。本、人間に在り、數、說議を蒙り口舌流詍す。今、山中に在り、復、獲る所無し。進退宜きこと無く湊く所を知らず。衣を脫ぎ還び吾が業に就くに如かず。猶豫して未だ定まらず。時に山の樹神、之を視、其の功夫の方に成就せんとして、反つて家に還らむと欲し志瑕穢に在るを惜み、之に代つて恨恨むこと喩を爲す可からず。因つて則ち比丘尼の身を化作し、冀はくば亂意を化し道心を發し其の志を堅固にせむと欲す。其の比丘尼、身に珠寶を著け面色光榮、世の有る所に非ず。復、女人を現ず。顏貌、端正色像第一なり、姿曜、[二]燿燿として衆類逮ぶ無し。俱に相ひ謂ひて言く「卿は比丘尼なり。何の故に身に寶瓔珞を著け、脣口妙好にして猶、赤眞珠の如きや」と。比丘尼、曰く、「寶は幻化の如く、脣は彩畫の如し。端正は膏に喩ふ、何ぞ貪る可きもの有らむ。卿の今の身の如し。色端正なりと雖も猶し春の華の如し、身は果の落ちて久しく樹に著かざるが如く、[三]四大、合し散し正しき主有ること無し。唯、心を本と爲す。三界中に在り獨來り獨去る。一も隨ふ者無し。禍福身を追ふこと影の形に隨ふが如し。三界は皆空にして一も賴る可き無し。罪の覆ふ所と爲る。五陰・[四]六蓋・心閉ぢ意塞ぎ、三昧を解せず」と。比丘、之を聞き心卽ち、覺了す。審に言の如く知り四大本因緣に依りて合し、身を貪りて自ら害ふことを識別す。本空を剖判すること猶し[五]寄居の如し。十方の人を觀じ親疎有ること無し。則ち心了し意解く。諸[六]漏を盡すを得生死已に斷ず。悉く起分無し。出入自由にして垢塵に著かず。爾く乃ち達知せり。山神、故有り、化すること浮雲を

【一】白衣、俗人の別稱、天竺の婆羅門及び俗人は多く鮮白の衣を服すればなり、之に對して沙門を緇衣又は染衣といふ。

【二】燿燿。あきらかなる貌。

【三】四大。地・水・火・風。

【四】六蓋。五蓋の寫誤にあらざるか、五蓋とは心性の蓋覆する五法卽ち、一、貪欲蓋、二、瞋恚蓋、三、睡眠蓋、四、掉悔蓋、五、疑法。

【五】寄居。かりのやどり。

【六】漏。煩惱のこと。

たて皆沙門と作る」と。悉く佛の所に會し佛の爲に禮を作し退きて一面に坐す。諸天[二]・龍[三]・神[四]・乾沓和[五]・阿須倫[六]・迦留羅[七]・眞陀羅[八]・摩休勒[九]、人と非人と來りて來らざる靡し。佛の所に會し足下に稽首し遷つて一面に住せり。佛、時に便ち笑ひたまふ。阿難、佛に問ふやう「何の因緣にて笑ひ給ふか。至眞・世尊は終に虛しく欣び給はず。唯、其の意を說きたまへ」と。佛、阿難に告げたまはく「此の衆・人・天・龍・鬼神・來り會する者を見るや不や」と。答へて曰く「已に見たり」と。佛、阿難に告げ給ふやう「維衞佛の時一大國有り、光華と名づく。梵志有り、旃頭摩提と名づく。王、旃頭と名く。皆、大法を奉じ三寶に歸命す。時に、梵志有り、光華と名づく。三達を總攝し衆經を博綜す。義として達せざる莫し。維衞佛、十方を化し天上天下啓親せざる靡きを見て五百衆を誘ひ佛の所に往詣りて沙門と作り成經戒を受く。時に其の國王、國を棄て王を捐て五百衆と與に亦沙門と作る。大長者有り亦、群從を化す。五百の衆、行きて沙門と作り普く道化を受け進みて神通を獲たり。四等心・(卽ち)慈・悲・喜・護を奉ずること九十一劫なり、惡趣に歸らず、天上・人間に生れ今[一〇]、人身を得、悉く來りて此に會す。亦、普く出家し沙門と行作り經戒を啓受し皆道證を得たり。爾の時行ぜし所の梵志を知らむと欲せば豈異人ならむや。○他の觀を作すこと勿れ、則ち、吾が身是なり。國王、人民、及び大長者の衆皆是れ維衞如來・至眞同時の學者なり、彼に種へ此獲たり。功、唐に捐てず、皆自ら之を得たり」と。佛、是を說くの時無央數の人、無上正眞道意を發し、時に應じて不退轉地に立ち、一生補處も亦計ふ可からず。羅漢[一一]を成ずるを得たるも亦復是の如し。佛、是を說きたまふの時歡喜せざるは莫し。

第四十一、佛、變を悔ひしを喩すを說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞の祇樹給孤獨園に遊び大比丘衆と俱なりき。

【二】天。梵名、Deva. 天上の神。
【三】龍。梵名、Nāga.
【四】神。梵名、Yakṣa. 勇健と意譯し地上の下神。
【五】乾沓和。梵名、Gandharva. 尋香と意譯し歌神。
【六】阿須倫。梵名、Asura. 非天と譯し惡神。
【七】迦留羅。梵名、Garuḍa. 金翅鳥。
【八】眞陀羅。梵名、Kimnara. 神仙、歌神。
【九】摩休勒。梵名、Mahoraga. 地龍。

【一〇】本文斯とあれども今仙と改む。

【一一】羅漢。梵語、Arhan. 譯一小乘の證を極めたる人、譯一に殺賊・煩惱の賊を殺す意、二に應供、人天の供養を受くべき意、三に不生、永く涅槃に入つて再び生死の果をうけざる意。

薩の德を觀察す。巍巍として量り無し、光光堂堂猶星中の月のごとし。威神、遠くを照し稱り計ふ可からず。因つて時に思惟し、佛と法と衆とを念じ七日命盡き忽ち、天上に生る。尋いで憶し自ら宿命の世尊の功德を識り來りて人間に還り華を散し佛に供へ其の恩德に報ひ佛足に稽首す。佛、爲めに經を說き給ふ。卽ち、無上正眞道意を發し輒ち立ちて不退轉地に在り從ひて〔三〕無生忍を得たり。乃ち天上に還りぬ。

第四十、佛、光華梵志を說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞の祇樹給孤獨園に遊び大比丘衆と千二百五十の菩薩、無央數の人と俱なりき。

時に、衆人無央數の人、皆來り集會て佛の所に在り。悉く鬚髮を下し行きて沙門と作る。各自、五百の群從と道德を修治め精進して懈らず。神通を成得して生死の根を斷ち、普く道證を獲て、十方に周旋し衆生を濟度す。阿難、佛に白すやう「此等の衆學、宿に何の行有り、本、何の德を修め乃ち此の譽を致し、神通の慧、然れば第一と爲すや」と。

佛、阿難に告げたまはく「乃往、過去久遠世の時劫數を經歷すること九十有一、〔一〕維衞佛の時一國王有り、名を旃頭と曰ふ。城を旃頭摩提と號す。爾の時、一梵志有り、光華と名く。博く衆經を學び廣く法典を宣ぶ。義、達せざる無し。五百衆有り侍從啓受す。數數、維衞如來に往詣り經典を聽受す。群黎を誘化し愚冥を開發す。正眞を勸示し行きて沙門と作り、德を修するを業と爲す。時々、彼の國中の五百の營從も、五百人を將ひ、大臣、群僚も亦沙門と作る。大長者有り、諸の群衆を化す。皆復、家を捨て行いて沙門と作る。精進を奉行し禁戒を犯さず。命終の後天上に生るゝを得たり、天上の壽盡き人間に來生し、是の如く上下し終りて復始むること九十一劫なり。此の佛の世に

〔三〕無生忍。無生法忍の略、無生法とは生滅を遠離せる眞如實相の理體なり、眞智此の理に安住して動かざるを無生法忍といふ。

〔一〕維衞佛。梵名、Vipasin. 過去七佛の第一なり、勝觀と譯す。

佛、言はく「乃往、過去久遠の世の時轉輪王有り、四天下に王たり。千子と七寶とあり、治むるに正法を以てす。萬民を枉げず、天下太平なり、人民、安寧にして五穀、豐饒す。又、四德有り民を視ること子の如く、民奉ずること父の猶し。沙門・梵志・長者・人民・啓親せざるは莫く、身未だ曾つて病まず、永く安寧を得たり、四域、德を宣べ十方に徹す。

時に、轉輪王、四方に遊觀し還び宮に歸らむと欲す。時に、古世の一人の親しき人債主の爲に拘繫せられ、縛在して樹に著けて去るを得ざるを見る。時に、轉輪王、七寶侍從し停住して進まず。之の所以を怪しむ。遙に故舊、人の爲に拘がれ五十兩金を負ひ、去るを得ざらしむるを見る。聖王、之に報ひ、之を解き去らしむ。「當に卿に百兩金を倍すべし。」と。其の人、白して曰く、「吾、復、轉じて某に百兩金を負る。當に以て之を償ふべし、捨て置く能はず。」と。聖王、即ち、諸の臣下に勅すらく「宮に到り其の百兩金を與へよ」と。臣下言く「諾」と。即ち、債主に解かれ家に還歸るを得たり。其の人、數々王宮の門に詣り金を求めて得ず。債主、之を求むるも避けて處を知らず。遂に生死に在り、周旋往來すること無數の劫なり。負る所を償はず今世に至り、此の牛の中に墮す。債る所を賣られ數千兩金なり。故に來りて佛に歸す。宿緣の牽く所なり」と。

佛、阿難に語りたまはく「時の轉輪王とは則ち我が身是なり。其の債主とは此の牛是なり、佛、聖王と爲り之を保ち償を爲し竟に之に與へず。故に來り佛に歸し、債の救を求索む」と。佛、牛の主に告げたまはく「佛、卿の爲めに分衞を行ひ償を倍さむ」と。牛の主、肯ぜず。還び牛を得むと欲す。佛、復、重ねて告げたまはく「吾、牛身の斤兩の輕重と若干斤の金とを稱らむ」と。故に肯ぜざるなり、時に、釋・梵天倶に來り下り叉手して佛に白さく「佛よ、分衞する勿れ、得むと欲する所の金萬千億兩も吾等之を致らむ。兩牛皮を布く。釋・梵・四王、金寶を積累し兩牛皮に滿つ、爾れば乃ち各罷む。牛を將ゐ祇洹の中に到り其の中門に入る。佛身及び聖衆の形、諸の害

【一】轉輪王。梵名、Cakra-varti-rāja. 此の王身に三十二相を具し、位に即く時天より輪寶を感得し、其輪寶を轉じて四方を降伏すればかく名く。印度民族の天界理想の王。

【二】故舊。以前よりの知合。

上にして罪殃を爲さず、親に孝に君を敬ひ師長に奉承し三寶に歸命す。三乘[15]興隆し三毒消索[16]す、度する所量り無く皆道を得しむ」と。阿難、之を聞き悲喜交集る。將來末世に乃ち此の患有り、山野の愚坻癡人に如かず。此の輩に勝る者能く去就、進退の宜を知る、と。稽首して退けり。

第三十九、佛、負りて牛と爲る者を說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞の祇樹給孤獨園に遊び大比丘衆千二百五十人と及び衆菩薩と俱なりき。

時に佛、明旦、衣を著け手に應器を執り城に入り分衞す。時に遠方の民一つの大牛を將え、肥盛力有り此の城の中の人に賣與す。城の中の人買うて以て之を出し以て之を殺さむと欲し、城門の中に在りて、佛と相ひ遇ふ。其の主、牛を見る、旣に大いに多勢なり、犇突を畏るゝが故に十餘人を請じ牛を將ゐ共に行く。牛、遙に佛を覩て心中悲喜す。靷を絕ち馳せ逸す。數十人救ふも之を制すること能はず。走りて如來に趣く。如來則ち本の宿命を知憶り給ふ。阿難、之を見て前みて捍たむと欲し、之を一面に逐ふ、如來に觸るゝを恐る。一切の衆人も亦恐懼を懷き來り佛を傷けむことを畏る。佛、阿難に告げたまはく「之に來るを聽し、之を呵することを得る勿れ。牛、徑を前み佛に往趣き、前の兩脚を屈して佛足に嗚く、淚出で橫に交る。口に自ら演べて言く「唯、然なり、世尊よ、加ふるに大哀を以てし危厄を救濟し此の難を脫せしめよ、今、是れ其の時なり、大聖、遭ひ難し。億世の時有りて出づる所以は衆生の爲めの故なり。唯、弘慈を垂れ一に濟拔せられよ」と。佛、言はく「善き哉、甚だ愍念す可し、意、人を迷はし、乃ち斯の患に値ふ」と。阿難、天・龍・鬼神、人民を從へ愕然たらざる莫し。甚だ所以を怪む。畜生の類、自ら天尊に歸す、阿難、長跪し前みて聖尊に問ふやう「此の牛、佛を見て何の故に自ら歸するや、本末云何む」と。

【一五】三乘。聲聞乘・緣覺乘・菩薩乘、此の三能く各其の果地に人を乘せて到らしむる故に乘といふ。
【一六】消索。きえつくること。

寶を遣はし以て大王に貢ぎ、前には謬誤にして擧動當らず相ひ卑意を失す。從來[九]闊別すること年載を積累ぬ。慚愧・羞恥・[一〇]踧踖・顏無し。故に貢遺を遣す。願くば殃咎を恕し其の罪過を原せよ」と。其の王、之を聞き心中欣然たり、亦返つて己を責む。吾、久しく意有りて和解を得むと欲するも能く發する者無し。彼をして意を興さしむ。先に來り相ひ謝す。是れ吾が不逮の致す所なり。便ち、手に筆を執り書を作り之に報ふるやう「惟、別れて載を歷、言面を得ず、每に舊好を思へり、何の日か懷を捨て中間隔絕す、及ばざるの致す所なり、忽ち捐てられず。復、賢臣を遣はし美供・[一一]環琦以て相ひ謝す。剋して來意を抱き終始忘れず。願くば一に會を同じくし及び久過を散ぜむ。今、珍琦を寄す、是の身有る所貴び微心を致す、言面し乃ち敘べむ」と。彼の王、之を得歡然量り無し。會日を剋期め快く共に相ひ娛む。本、失ふ所を察するに盡し言ふに足らず。傳ふる者[一二]過差し乃ち此の患に至る。以て比國と爲り友親の意厚し、急緩相ひ救ふ、自ら大臣を遣はす。名(術)計る可からず。實に其の位を增益せり。阿難、佛に白して言はく「母の至教能く焉より大なるは莫し」と。佛、言はく「至(言)なる哉」と。復、佛に問ふて言く「將來の世、皆、此の教を承くるや」と。佛、言はく「從・不從有り、所以は何ぞや、將來の世、人民、[一三]悖亂・惡を貴び善を賤しむ、情意を放逸にして君を害せむと欲す、子は二親を殺し弟子は師を危くす、弘德を念はず、乳養の恩、其をして沒せしめむと欲す、獨り奉事を見て其の師を嫉妬すること猶怨家の如し、罪焉より大なるは莫し。所以は何ぞや、弟子後世前に在りては陽に供し後に在りては攻めむと欲し心與に同じからず。師、天下に出て道化を宣傳し一切を度脫するに反つて之を憎惡す。罪の中の罪たり、喩を爲す可からず。後世、德人時々有る耳、天下樹多く香樹は希有にして香草尠に生ゆ、少少山地金寶を出す耳、好人、德を行ふこと亦復是の如し。惡人の行ふ時伴黨相ひ隨ひ眞を識る者少し。彌勒佛の時、德人乃ち多し、善を貴び惡を賤み偏黨有ること無し。道德[一四]盈盈稱り量るべからず。德を修むること無

【九】闊別。人に面會せざること。
【一〇】踧踖。恭敬して安んぜざる貌。
【一一】環琦。環は輪玉、琦、めづらしき一種の玉、大正本瓌に作るは誤植。
【一二】過差。おごり。
【一三】悖亂。道德・倫理にそむくこと。
【一四】盈盈。みちみちたる貌。

する無し。恒に勸助を宣ぶれば、大財富を獲るを致し、長く正法の化を修めなば、壽を終へ天上に生る。

子、母に白して曰く「善き哉、親教、其の誨無上にして其の法限り無く巍巍量り難く稱げ載す可からず。吾の愚冥其の日久しきなり、恩に背き僞に向ひ至眞を識らず容色に迷ふ。種姓を惑はし自ら才智と謂へり。不明を明と謂ひ不達を達と謂へり、尊卑を別たず、親の明なる誨、善を賤しみ惡を貴び孝養を惟はず。慈親の徳厚を捨て薄に就く。愚伴を侶と爲し是の癡惑日に甚しきを致せり。親化を蒙りし賴り顯に慈仁を以てし愍澤に垂流せむ。乳養の本轉た興隆せしめ十方に通ぜむ。啓受・頂奉し敢て遺忘せず」と。子、稽首して謝す。親命を修行し終始違ふこと無し。子、法の如く進み常に柔和を行じ一國の宗たり。善を擇びて友と爲し能く侵す無し。恒に勸助を行ひ離別を合偶し鬪諍を和合す。大いに供遺を得財寶量り無し。稽首して佛に歸し五戒を奉受し[五]十善を修行し諸の天衞護す。國主、之を聞き召して大臣と爲す。王、之に告げて曰く「朕、德行一國之を悅ぶと聞く、故に以て相ひ命ず、國に良臣無し、唯、良輔と爲り士をして淸寧ならしめよ、四國德に歸せむ、爾らば乃ち榮を顯さむ」と。其の人、曰く「諾、敢て聖に違はず。唯、薄德にして功教に副ざるを恐れ慚愧を爲すのみ、聖教に違負せば[六]黎庶怨望せむ、自ら難しとする所以なり、敢て命に順はず」と。王、曰く「仁の言行・擧動・進止を觀るに果して能く之を辨ず。故に相ひ召す耳」と。其の人、默然たり、立てゝ大臣と爲す。王、復、告げて曰く「某許の國王、本時、吾と親々無二、猶し一體の如し。[七]傳口者有りて兩頭相ひ鬪ひ身をして相ひ失はしむ。年月の時久しく各爾廢礙す。能く解く者無し。卿、身躬自ら往き和して故の如くならしめむと欲せよ、當に重ねて財寶、重位を賜ふべし」と。其の人、曰く「諾し、」と。因つて家財を取り美饌を供作し又寶物を齎し彼の國に往詣り跪拜し陳謝するやう、「素り自ら[八]闇塞なり、天の潤を被蒙り王の爲めに使する所なり、此の飲食・金銀・珍

【五】十善。不殺生・不偸盜・不邪淫・不妄語・不兩舌・不惡口・不綺語・不貪欲・不瞋恚・不邪見の十。

【六】黎庶。人民。

【七】傳口者。つまらぬおしやべりの人。

【八】闇塞。無智。

に從ふを謂ふ。父、執り將ゐ歸るとは本無に從ふを謂ふ。其の女の聟をして毒を止めしめ乃ち女を與ふとは三毒の衆妄の想を去り、求めて、[六]四等に應じ、六度無極の善權方便に因つて一切の三界を度することを得て正眞無極の慧に至るを謂ふなり。

第三十八、佛、子を誨ふるを說く經

昔、人有り、父、早く命過ぐ。[一]少小にして孤寡なり、獨り母と居り未だ教勅を被らず。出入節ならず禮教に拘らず。先聖の典籍の誨に違失し肯て學問し經法を諮受せず。唯、愚伴・迷惑の衆を以て徒類と爲し、酒を嗜み[二]博戲し、[三]高抗・華飾し表有り裏無し。情欲を放恣にし天に嘘き雅步し、以て孝順し德を修め心を經め用つて身を立すべきあらず。身に衆惡を犯し、口に麁獷を言ひ心に毒害を念ひ、生みし所の親の遺教を念はず、唯、非法亂行を以て業と爲す。母、甚だ之を患ふ。因つて教勅し其の至密の威儀・法節を示し心行を改め身を愼み口を護り先聖の典を奉じ其の祖父所生の則を修め世尊の[四]無極の道を徹受せしめむと欲す。因つて慈意を以て妙誨を演出して子に告げて曰く、

子よ、常に柔和を行じ、　伴を結び善友に從へ　恒に喜びて勸助を宣べ　長く正法の化を修めよ。

子、又、母に問ふて曰く、

若し常に柔和を行ずとは、　何を以て爾りと爲すや、　設し善友と結ばば　何を用て增益と爲すや。　假し恒に勸助を宣ぶとは、　何をか此の義を修むと爲す、　長く正法の化を修め、　何の所にか施を加ふる有らむ。

母、子に告げて曰く、

若し常に柔和を行はゞ、　衆人の愛敬する所となる。　設し善友と結ばば　堅く住して能く勸

【六】四等。慈・悲・喜・捨の四無量心のこと。

【一】少小。年わかし。

【二】博戲。ばくち。

【三】高抗。心を高くして阿らざること。

【四】無極。波羅蜜のこと。

神に語るやう「今、此の婦を取るも毒藥を行ひ以て人を加害せず。而して肯て從はず。當に之を奈何んすべき」と。毒神、答へて曰く「吾、當に之を化し教に違はざらしむべし」と。毒神、便ち往き化して毒蛇と爲り來りて其の婦に趣く。其の婦、恐怖し至る所を知らず。或は頭上に現れ、食せば其の前に現れ、飲めば器の中に現れ、臥せば床の上に現れ、行歩後を逐ふ。其の婦、恐怖し到る所を知らず。羸痩骨立し飲食する能はず。毒神、之に勅するやう「毒藥を行はしめなば乃ち相ひ置くのみ」と。窮困し計無し。之を可とし教に從ふ。時に、本土の〔二〕比舍に人有り、此の國邑に到り、其の女に見ゆ。身、羸痩し安からず。以用て愕然たり。何の故に是の如しと。女、具に意を語るやう「還りて我が家に到り父母に宣白し疾く我を迎へしめよ、爾らずば定んで死せよ」と。人、還りて具に說く。父母、之を聞き愁感〔三〕憒憒たり。父、車馬を嚴にし疾く行きて女を迎ふ。其の鄉土に到り具に姑嫜を喩す。「父母、悲泣し夙夜女を思へり、故に遣はして之を迎ふ。當に相ひ見ゆるを聽すべし。久しからずして來り還らむ」と。姑嫜、聽し去る。父、女を載せて還る。便ち、姑嫜に語るやう「卿の家、毒を行ふ。吾、汝の女を奪ひ復相ひ與へず。設し其に諍はば自ら官法有り、應に得べし。爾れば此れは是れ滅門の憂なり」と。肯て聽さずば行毒を行ふ事を棄てよ、乃ち、婦を還さんと。夫婦、共に議る。此の婦端正にして世の希有とするところなり、之を棄つ可からず、寧ろ毒業を棄てむ。又、官家聞かば便ち相ひ危害せむと。便ち毒業を止め其と誓を約す。敢て復犯さず。毒神を遣棄し家中遂に安し。

其の毒神とは〔四〕四魔を謂ふ。毒を行ひ富を求むとは、諸の魔天・惡鬼の神の輩を謂ふ。日日婦を迎へ國中の人民肯て與へずとは又其の人魔教に從はざるを謂ふ。婦を迎ふとは行きて他方に到り以て人と爲るを求むるなり。便ち取りて婦を得るとは染法を謂ふ。教へて毒を行はしめんとして言に從はずとは魔を覺知し五陰に墮せざるなり。人をして還歸し父母に語らしむとは〔五〕般若の善權の教

〔二〕比舍。となりの家。

〔三〕憒憒。おもひみだるゝ貌。

〔四〕四魔。一に煩惱魔、貪等の煩惱能く身心を惱害すれば魔と名く、二に陰魔又五衆魔と云ひ、色等の五陰能く種々の苦惱を生ずれば魔と名く、三に死魔、死能く人の命根を斷てば魔と名く、四に他化自在天子魔といふ、欲界の第六天即ち他化自在天の魔王能く人の善事を害すれば魔と名く。此中第四を以て魔の本法とし他の三魔は類從して皆魔と稱す。

〔五〕般若。梵語、Prajñā. 智慧、明と譯す。

脫すべし」と。龍王、報へて曰く「善き哉、善き哉、當に來言の如くなるべし」と。各自、別れ去れり。

佛、言はく「時に龍王とは我が身是なり、五百の賈人とは五百の弟子舍利弗等是れなり、宿命を追ひ識り弟子と爲り說きて咸德を修せしむ。

第三十七、佛、毒喩を說く經

昔、一家有り。家喜び毒を行ふ。一に毒を行ひ已り家中富を得、宿命の罪福自ら其をして然らしむ。一國之を惡み敢て往來し與共に事に從はず。危害せらるゝを畏れ一國之を遠く。行きて子の婦を求むるも肯て與ふる者無し。各各相ひ令するやう、此の毒を行ふ家、世の最惡なり、義理に順はず人命を害するを欲す。設し與に婚姻せば毒を行ふに處無し、反つて來り人を危くせむ。是の故に之を遠く。猶劇賊を離るがごとし。賊人と鬪ひ手拳相ひ加ふるに尙强弱有り、毒を行ふの家默然として以て人に與ふ。人、卒に此の害を被むる。命、救ふ可からずと。咸、共に知らしめ皆之を遠離し與に從事する無し。

其の人、困み極り遍く子の婦を求む。肯て與ふる者無し。因つて他國千餘里の外に行き其の子の婦を求む。其の人の家富み旣に復豪貴なり。婦の家貧賤、且つ復貴からず。彼の家の富を見て貪にて其の女を與ふ。毒を行はざるが故に益財物を入れ、尋いで婦を迎へ來る。家に在り禮を行ひ威儀悉く備る。婦の禮を失はず、出入節に應ず。時に、其の家の中耗損諧はず。當に毒害を行ひ乃ち富を得べきのみ。[一]姑嫜、婦に勅す。其れ毒を行ひ某人を害殺せしむ。吾が家の本業、自ら應に其(の如く)然るべし。婦、聞きて愁憂す。姑嫜に白して曰く「我が家、慈を行ひ初より害を加ふる無し、毒を行ふに任へず。死すとも犯さゞるなり」と。姑嫜、罵詈するも肯て教を受けず。因つて毒

【一】姑嫜。夫の父母。

第三十六、佛、菩薩曾つて鼈王と爲るを說く經

昔、菩薩、曾つて鼈王と爲り大海に生長し諸の類を教化す。子民・群衆し、皆仁德を修む。王、自ら正を奉じ四等心(卽ち)慈・悲・喜・護を行ひ衆生を愍れむ。母の抱育して赤子を愛するが如し。海中に遊行し不逮を勸化す。皆安かならしめむと欲し衣食充備し飢寒ならしめず。其の海深長にして邊際限り難し。而も悉く周く至り更に歷らざるところ靡し。以て危厄を化し衆罪をじて免かれしむ。時に、鼈王、海を出て外にあり、邊に在りて臥息す。積むこと日月有り、其の背堅惨にして猶陸地の高惨の土の如し。賈人、遠くより來り之を高く好しと見因つて其の上に止る。薪を破り火を燃し飲食を炊作す。其の牛馬を繫ぎ莊物を積載す。車乘の衆諸皆其の上に著く。鼈王、之を見る。火に焚燒せられ其の背焚炙らる。車馬、人に從ひ咸其の上に止る。困しみ言ふ可からず。趣いて水に入らむと欲す、衆生を害し爲に不仁に墮ち道意を違失せむことを畏る。適強いて忍ぶことを欲するも痛み言ふ可からず。便ち、權の計を設け海の淺水に入り、自ら其の身を漬け火毒を除伏す。衆賈を危くせず、兩ながら違なからしむ。果して意に念ふが如くなし、輙ち方計を設く。衆賈、恐怖し、謂ふやう、海水漲り湖水卒に至る。吾等定むで死せむと。悲哀、呼嗟す。諸天・釋・梵・四王・日月の神明に歸命す。願くば威德を以て唯救濟せられよと。鼈王、然るを見て心益々之を愍れむ。因つて賈人に報ずるやう「愼みて恐怖する莫れ、吾、火焚せらるゝの故に捨てゝ水に入る。痛をして息めしめむと欲す。今、當に相ひ安んずべし、終に相ひ危くせず」と。衆賈、之を聞き自ら以て欣慶ぶ。活る望有るを知り俱時に聲を發し南無佛と言ふ。鼈、大慈を興し還び衆賈を負ひ移りて岸の邊に在り。衆人脫するを得て歡喜せざるは靡し。遙に鼈王を拜して其の德を歎ず。「尊、橋梁と爲り多く過度する所なり、行、大舟と爲り、載せて三界を越す。設し佛道を得ば當に復生死の厄を救

り。佛身を示現し廣く道化を宣べ十方を開度す、恩を蒙らざる靡し。

第三十五、佛、鼈の喩を説く經

昔、一鼈王有り、大海に遊行し周旋往來し以て娯樂を爲す。時に、海邊に出で水際にて臥す。其の身廣く長し、邊各六十里、而も其の上に在り。時を積み日を歷て陸地に寐ね息み而して轉移らず。

時に賈客有り、遠方より來り遙に之を見、謂ふやう、是の水邊の好き處、高き陸の地に依る可しと。五百の賈客車馬六畜數千頭有り、皆上に止頓り、飮食を炊ぎ作し薪を破り火を燃す。諸の牛・馬・騾・驢・駱駝を飼ひ行來し臥起す。時に、鼈王、身火燒くに遭ひ欻ち擾動を作す。因つて卽ち身を移し馳せて大海に入る。東西に遊走するも火の害息まず。賈人、之を見て地移ると爲す。海水、流れ溢れ悲哀呼嗟す。今、定んで死す、當に之を奈何がすべきと。鼈の身苦痛復忍ぶこと能はず。因つて其の身を沒し大水の中に入り、衆人を溺殺し牛、馬、六畜皆共に命を併す。

菩薩、時に諸の弟子に告げて曰く「喩を假り譬を引く、以て其の意を解かむ。遠來の估客とは三界の人を謂ふ。五百の群衆とは五陰、六衰[一]諸入の難を謂ひ、鼈身廣く長く各六十里とは二六に牽き連る十二因緣、輪轉して際無く五趣を周流し一も懈息無きを謂ふ。火を燃し炊作食具を作すとは三毒熾盛にして情欲發興るを謂ひ、鼈馳走し大海水に入るとは十惡[二]を犯し三惡(卽ち)地獄・餓鬼・畜生の中に沒溺して、苦しみ言ふ可からざるを謂ふ。是の故に如來其の聖德・無極の大慧を降し生死に往返し危厄を救濟す。罪に覆蓋はれ盲冥にして解らざるものは法燿を顯示し心を開闢せしむ。咸無上正眞道意を發せり。

の妄惑の餘氣を永く斷じて生ぜしめざるに於て能く如實に知る智力なり。

【七】 相好。佛の三十二相八十種好のこと。

【八】 四無所畏。一に一切智無所畏世尊大衆の中に於て我は一切正智の人なりと師子吼して些の怖心なきをいふ、二に漏盡無所畏、世尊大衆の中に於て我れ一切の煩惱を斷じつくせりと師子吼して些の怖心なきをいふ、三に說障道無所畏、世尊大衆の中に於て佛道を障害する法を師子吼して些の怖心なきをいふ。四に說盡苦道無所畏世尊大衆の中に於て盡苦の道を師子吼して些の怖心なきをいふ。

【一】 六衰。色・聲・香・味・觸・法の六塵能入の眞性を衰耗せしむれば六衰といふ。

【二】 十惡。殺生・偸盜・邪淫・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪欲・瞋恚・邪見此十並に理に乖て起る故に十惡といふ。

「此の毒、最も凶なり。適、樹の上に墮つ。須臾の間に今半ば樹枯る。日、未だ中に至らず、未だ冥を盡さゞる頃是の如く悉く枯る。未だ十日を滿さゞるに恐くば皆毀死せむ。此の叢樹木、當に之を奈何がして斯の毒害を去るべき」と。時に虛空の中に天神有りて曰く「是の如く久しからずして明人有り來る。道路を歷遊し斯の叢樹を過ぐ。卿、樹間の藏する所の金を取り雇ひて此の毒樹を掘れ、其の根株を盡くし餘り有ること無らしめよ、爾らば乃ち永く安からむ。設し爾らずむば日未だ冥からざる頃毒樹盡く枯れ、悉く叢樹に及ばむ」と。樹神、之を聞き因つて人の形に化し路の側に住して之を待つ。已に到る。即ち、其の人に語るやう「吾に金藏有り、當に以て相ひ賜ふべし、願くば毒樹を掘り其の根を窮索めよ」と。其の人、重ねて金藏の寶を得と聞き即ち言く「唯、諾し」と。便ち、前みて之を掘り其の根源を盡くす。樹神、喜悅し尋いで金藏を與ふ。其の人、取り去りて家居富を致せり。樹神、歡然たり。毒難を離ることを得衆樹長く安かなり。花菓茂り盛なり、毒患を慮らず、諸の罪皆散ぜり。

佛、言はく「叢樹とは謂く三界なり。樹神とは謂く發意の菩薩なり。鳥、他方より毒を取り來るとは謂く魔事の衆想無明より致す。虛空神とは如來・至眞・等正覺なり。諸の學とは魔法に從はず當に善友の菩薩大士・同志を修する者に順じ乃ち[一]三垢衆勞の厄を拔くべきを敎ふ。樹を掘り根を盡すとは謂く婬・怒・愚癡の冥を消す。設し爾らずむばとは三處に溺在し罪蓋自ら覆ひ威勢有り衆生の生死の惱を拯濟すること無し。藏を賜ふことを得とは道の法藏を謂ふ。菩薩大士、展轉相ひ助成するは猶萬川の流れ大海に合するがごとし。樹神、欣然として悉く憂患無く還び樹に處るとは、能く從つて生ずる所無き大哀法忍を逮得するなり。因つて三界に住し廣く一切を度し寶喜樂を得。家居富むとは以て總持を得、六度極まり無し。[三]三十七品、[四]四等心を修し、[五]四恩・[六]十力・[七]相好・[八]四無所畏、諸根寂定を無限の寶と爲す。道の富量り無く家に還歸へるとは本淨眞道の際に解り歸へるな

悲・喜・護の四、平等に此の心を起す故に。

【五】四恩。一、父母の恩、二、衆生恩、三、國王恩、四、三寶の恩。

【六】十力。如來の十力なり。一、知覺處非處智力、處とは道理の義、物の道理非道理を知る智力。二、知三世業報智力、一切衆生の三世の因果業報を知る智力。三、知諸禪解脫三昧智力。諸の禪定及び八解脫三三昧を知る智力。四、知根上下智力、衆生の機根上下優劣あるを知る智力。五、知種々解智力、一切衆生の種々の知解を知る智力。六、知種々界智力、世間の衆生の種々の境界同じからざるに於て如實に普く知る智力なり。七、知一切所道智力、五戒十善の行は人間天上に至り八正道の無漏法は涅槃に至る等の如く各其の行因の至る所を知るなり。八、知天眼無碍智力、天眼を以て衆生の生死及び善惡の業緣を見るに障碍なき智力なり。九、知宿命無漏智力、衆生の宿命を知り又無漏の涅槃を知る智力。一〇、知永斷習氣智力、一切

佛、衆人に告げたまはく「各、豫め之を知れ、宿命は請はざるなり」と。諸の父母を呼び之に告げたまはく「愁ふる莫れ、此の兒五百世、宿命應に然るべし、今、壽終ると雖も兜術天に生れ皆同じく發心し菩薩行を爲す」と。佛、威神を放ち其の光明を顯はし其の父母をして子の在る所を見せしむ。佛、時に遙に五百の童を呼び來る。尋いで時に皆來り虛空の中に住し花を散じ佛に供す。下りて稽首禮し自ら佛に歸命す。世尊の恩を蒙り身喪亡すと雖も天上に生ることを得、彌勒佛に見へぬ、唯、慈澤を加へ諸の不逮を化せよと。佛、言く「善き哉、卿等、快く計り道の至眞を知り塔寺を興立し是に因つて天に生る、既に生天を得て彌勒に見え法誨を諮受せり」と。佛、爲に法を說き給ふ、咸然、歡喜し不退轉に立てり。各、父母に白すやう「復、愁憂する勿れ、人、各命有り、稽留る可からず、努力精進し法を以て自ら修む。人、三界に在るは猶繫れし囚の如し。道を得て世を度り乃ち自由を得。三寶に歸命し〔一〕三流を脫せり。菩薩心を發し乃ち長久を得、〔二〕四使水に遊び、四瀆を度脫せり」と。父母、之を聞き悉く其の敎に從ひ皆道意を發せり。時に、諸の天子足下、稽首し佛を遶ること三匝にして禮を作し而して退き忽然として現はれ兜率天に還れり。佛、說きたまふこと是の如く歡喜せざるは莫し。

第三十四、佛、毒草を說く經

昔、一國に大叢樹有り、樹木、天に參り折傷する者無し。中に樹神有り、明に義理に達し出入節を行ふこと衆と同じからず。四方より來り趣き樹木を經歷す。時に樹神、悅豫び人の欲する所を恣にす。果と薪草を採るも以て恨と爲さず。蔭涼しく泉水あり、服む者大いに安かなり。

時に、一鳥有り、他方より口に弊惡の毒草を含み此の樹を飛び過ぐ。因て其の上に投じ適〻上枝に墮つ。毒其の樹を侵す。尋いで枯るゝこと半を過ぎたり。時に、叢樹の神、心に自ら念じて言く

【一】三流。三毒、貪欲・瞋恚・愚癡のことか。

【二】四使水。四暴流のことか、四暴流とは欲暴流・有暴流・見暴流・無明暴流となり。

【一】三垢。三毒のこと、貪・瞋・癡をいふ。

【二】六度。布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智の六波羅蜜をいふ。この六、涅槃の彼岸に度す故に六度といふ。

【三】三十七品。涅槃に到る道路の資糧三十七種あり、四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺支・八正道となり。

【四】四等心。四無量心、慈・

一に曰く功德を興立し佛寺を修治す。二に曰く經を誦し道を念じ典敎を宣布す、三に曰く一心に意を定めて放逸無し、四等心(卽ち)慈・悲・喜・護を奉じ、空・無相・無願の法を行ひ善權を解了す。時に隨つて人を化し道意を發さしむ。其の人年長命終らむと欲する時四輩の衆學及び諸の親里五種の諸家咸往きて問訊す。將、恐怖無く安心して懼るゝこと勿れ、と、其の人、卽ち、偈を以て衆人に答ふるやう、

吾 衆惡を棄捐て　諸の功德を奉行す、　今、身是を以ての故に、　一の恐畏心無し。　猶、橋梁有り柱强く　上下堅きが如く、　人、牢船に乘り彼岸に　渡り至らむと欲するが如し。

衆人、之を聞き悉く共に欣悅す。之に代り踊躍す。其の人命盡き壽終るの後兜術天に生る。[九]彌勒に稽首し不退轉を得諸の菩薩と經を講じ法を論じ不逮を開化せり。

第三十三、佛、五百の幼童を說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、波羅奈國に遊び大比丘衆千二百五十人及び諸の菩薩と俱なりき。爾の時、五百の幼童あり、行步遊戲し心を同じくし意を等しくす。相ひ結んで伴と爲り日日共に行き一體にして異無し。一日見えざれば猶百日の如く甚だ相ひ敬重す。彼の時、一日俱に行き遊戲し江水に近づく。沙の塔廟を興し各自說きて言く「吾が塔甚だ好し、卿、吾に效つて作れ」と。其の五百童、善心有りと雖も宿命の福薄し。時に山中に於て天大いに卒に雨り、水を積み流行し江水大いに漲る。流れ溢れて外に出で五百の諸戲の幼童を漂沒す。水中に溺死し流に隨つて墮つ。衆人、之を見て歎惜せざるは莫し。各、心に念じて曰く「憐む可し、憐む可し」と。父母聲を擧げ悲哀し大いに哭き自ら勝ふること能はず、死屍を求索むるも所在を知らず。益〻用つて悲むこと酷し。時に衆人、往返す。諸の比丘、具に佛に意を白す。

【九】彌勒。梵語、Maitreya Buddha. 兜率天の內院に居り五十六億七千萬歲を經て人界に下生し華園林の龍華樹の下に正覺する菩薩。

らず、經道を以ての故に軀命を惜まず。功を積み德を累ぬること無央數劫なり。乃ち、佛道を得たり。汝等、精勤し放逸を得る無く懈怠を得ること無れ、[三]六情を斷除すること頭燃を救ふが如く、心の所著無きこと當に飛鳥の虛空に遊ぶ如くすべし」と。佛、說きたまふこと是の如く歡喜せざるは莫し。

第三十二、佛、無懼を說く經

昔、人有り、性仁賢と作り經戒を修奉す。精進して德を守り每に自剋を生ず。行に過惡無く一身に[一]遵行し天下の則と爲る。行來の四輩意を息め穢を休め行正しく迷はず。布施・持戒・忍辱・精進・一心・智慧あり、悕望する所無く法を以て自ら衞る。行來の同學異計有ること無し。若し法會有らば輒ち往きて經を聽き以て厭惓せず。佛の功德を念ず。如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師・佛・世尊爲り。弘恩を流布し法の義を歎ず。唯、[二]無爲を志す法本柔潤なり、法香普く熏じ十方悉く聞ゆ。惡を去り善に就き居家穢無し。出家して弊無く恚常に法を思ひ法を以て務と爲す。勸めて經法を誦すること猶甘露を服むがごとし。法を道の藥と爲し療治する所多し。法を橋梁と爲し諸の往返を通ず。法を舟船と爲し諸の未だ度せざるを度す。法、日月と爲り晝夜照し明くして諸の[三]窈冥を去り陰蓋消除し無形を覩る。又、聖衆を信じ衆中の學ぶ者猶し衆流の大海に遊ぶが如し。聖衆の中或は道跡を得、或は[四]往來を得、或は[五]不還を獲、或は無著の[六]緣覺の果證を成じ、或は[七]菩薩を行じて不退轉に至る。[八]一生補處、無上正眞も亦是れ由り生ず。此れ則ち極り無し、至深の道海は菩薩の奉ずる所なり、往來を周旋し一切を度脫し興衰せざるは靡し。道慧高妙にして罣礙する所無し。

其の人、每に行き四輩に出入し三寶を弘宣す。身自ら歸命し幷に一切を化す。常に三事を尊ぶ。

【三】六情。眼・耳・鼻・舌・身・意の六根をいふ、根に情識を有する故なり。

【一】遵行。したがひ行ふこと。

【二】無爲。梵語、Asaṁskṛta. 爲は造作の義、造作なき涅槃界のこと。

【三】窈冥。おく深くくらきこと。

【四】往來。斯陀含果、梵語、Sakṛdāgāmi-phala. 一來とも譯す、人間と天上と一度受生する故に。

【五】不還。阿那含果、梵語、Anāgāmi-phala. 再び欲界に還來せざる故に。

【六】緣覺。梵語、Pratyeka-Buddha. 無佛の世に於て師無く獨り十二因緣を觀じて斷惑證理し、或は飛花落葉の外緣によつて證る人。

【七】菩薩。梵語、Bodhisattva. 覺有情と譯し、六度を行じ自利利他圓滿の佛果を得る人。

【八】一生補處。梵語、Ekajātipratibaddha 菩薩の未だ證知を得ず更に一轉法性の生有り、佛處を補ふ位なり。

一仙人有り、林樹に處在し果蓏を食噉して山水を飲む。獨り處り道を修し未だ曾つて遊逸せず、四梵行(即ち)慈・悲・喜・護を建て經を誦し道を念ず。音聲・通利にして其の音和雅なり、聞きて欣ばざるは莫し。時に、兎王、往附し之に近づき其の誦する所の經を聽き意中欣誦し以て厭を爲さず。諸の眷屬と共に果蓏を齎らし道人に供養す。是の如くして日を積み月を經年を歴たり。時に冬の寒さ至り、仙人還び人の間に到らむと欲す。兎王、之の衣を著け鉢及び鹿皮囊幷びに諸の衣服を取るを見て愁憂し樂しまず、心戀恨を懷き捨てて來らしむを欲せず。之に對へて涙出づ。問ふやう、何の所に趣くか。此に在りて日日相ひ見え以て娛樂を爲す。飢渴し食を忘る。父母に依るが如し。願くば一に意を留め住止りて發つ莫れと。仙人、報へて曰く、吾に四大有り、當に愼み將ゐて護るべし、今、冬の寒さ至り、果蓏已に盡く、山水氷凍え又巖窟も以て居止す可き無し。適、捨て去り人の間に依處し分衞し食を求め精舍に頓止せむと欲す。冬の寒さを過ぎ已り當に復相ひ就くべし、以て悒悒する勿れと。兎王、答へて曰く、吾等、眷屬當に行きて果を求め遠近募索すべし、當に相ひ給足すべし。願くば一に意を屈し愍傷し濟はれよ、假使し捨て去らば憂慼の戀或は自ら全からず。設使し今日供具有ること無くば便ち我が身を以て道人に供へ上らむと。道人、之を見て感じ唯哀念す、之の至心を愍み當に之を奈何すべきと。仙人、火に事へ前に生炭有り、兎王、心に念ずるやう、道人、我を可とす、是を以て默然たり。便ち、自ら身を擧げて火中に投ず。火、大いに熾盛なり、適火中に墮ち道人救はむと欲す。尋いで已に命過ぐ。命過ぐるの後兜術天に生る。菩薩身に於て功德特尊威神巍々たり。仙人、之を見て道德の爲の故に身命を惜まず、愍傷し之を憐れみ、亦、自ら剋責し穀を絕ち食せず。尋いで時に神遷り兜率天に處れり」と。

佛、比丘に告げたまはく「爾の時の兎王を知らむと欲せば則ち我が身是れなり、諸の眷屬とは今の諸の比丘是れなり、其の仙人とは　定光佛是なり。吾、菩薩と爲り勤苦是の如し。精進して懈

【三】定光佛。梵名、Dīpaṃkara-Buddha. 燃燈佛のこと、釋迦如來因行中第二阿僧祇劫の滿時に此の佛の出世に遇ひて未來成佛の記別を受く。

撾杖を默し　衆の墮落を建立し、　又恐懼の義を示し　默して報を加ふる者無し。

水牛、報へ偈を說きて言く、

我を輕しめ毀辱するを以て　必ず當に他人に加ふべし。　彼、之に加へて報ゆべし、　爾れば乃ち疾患を得。

諸の水牛過ぎ去りて未だ久しからず、諸の梵志の大衆・群輩の仙人等道に順つて來る。時に彼の獼猴亦復罵詈し毀辱し輕易し、塵と瓦石を揚げ堊を以て之を擲つ。諸の梵志等即時捕捉へて脚を以て之を蹋み殺す。則便ち命過ぐ。是に於て樹神即ち復頌して曰く、

罪惡は腐朽せず　殃熟し乃ち患に遭ふ、　罪惡已に滿足し　諸の殃、爛壞せざるなり。

佛、諸の比丘に告げたまはく「爾の時の水牛王を知らむと欲せば即ち我が身是なり、菩薩爲りし時罪に墮して水牛と爲り牛中の王と爲る。常に忍辱を行じ四等心（即ち）慈・悲・喜・護を修し自ら佛を得ると致せり。其の餘の水牛、諸の眷屬とは諸の比丘是なり。水牛の犢及び諸の梵志仙人とは則ち淸信士の家に居り學ぶ者なり、其の獼猴衆は則ち害を得し尼犍師なり。本末是の如く具足究竟せり、各所行を獲善惡朽ちず、影の形に隨ひ響の聲に應ずるが如し。」と。

第三十一[一]、佛、兎王を說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞の祇樹給孤獨園に遊び大比丘衆千二百五十人と俱なりき。佛、諸の比丘に告げたまはく「昔、兎王有り山中に遊在し群輩と俱なり。飢えて果蓏を食ひ渴きて泉水を飮む。四等心（即ち）慈・悲・喜・護を行ひ諸の眷屬に敎ひ、悉く仁和ならしむ。衆惡を爲すこと勿れ、畢りに此の身を脫し人の形と爲るを得て道敎を受く可しと。時に諸の眷屬歡喜して敎に從ひ敢て命に違ず。

【一】佛說兎王經。選集百緣經、第三十八、兎身を燒き仙人に供養する緣、六度集經、第二十一、兎王本生、菩薩本緣經第六兎品。

巻の第四

第三十、佛、水牛を説く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊び大比丘衆千二百五十人と倶なりき。

爾の時、佛、諸の比丘に告げたまはく「乃昔、去世、異なる曠野の閑居有り、彼の時水牛王有りて其の中に頓止す。遊行し草を食し而して泉水を飲む。時に水牛王、衆の眷屬と至り湊く所有り、獨り其の前に在り、顏貌・姝好・威神巍巍たり。名德、超異し忍辱和雅にして行止安詳たり。

一獼猴有り、道の邊に住在す。彼の水牛の王眷屬と倶なるを見て心に忿怒を生じ嫉妬を興す。便即ち塵・瓦石を揚げ坌を以て之に擲ち輕慢、毀辱す。水牛、默然たり。之を受けて報いず。過ぎ去りて未だ久しからず、更に一部の水牛の王有り、尋いで後に從へて來る。獼猴、之を見て亦復罵詈す。塵と瓦石を揚げて打ち擲つ。後の一部の衆、前の牛王の默然として報いざるを見之に效つて忍辱す。其の心和悅し安詳雅歩なり。其の毀辱を受け以て恨と爲さず。是等の眷屬過ぎ去り未だ久しからずして又一水牛犢有り、尋いで後より來り群牛に隨逐す。是に於て獼猴、之を逐ひ罵詈し毀辱し輕易す。是の水牛の犢恨を懷きて喜ばざるも前の等類の忍辱し恨まざるを見て亦復學び效ひ忍辱し和柔す。道を去ること遠からず大叢樹の間に時に樹神有り其の中に遊居す。諸の水牛の毀辱せらると雖も忍びて瞋らざるを見て水牛の王に問ふやう「卿等、何の故に此の獼猴の猥りに罵詈し塵と瓦石を揚ぐるを覩て、而も反つて忍辱し聲を默して應へず、此の義何の趣にして、何等の意有るか」と。又、復偈を以て之に問ひて曰く、

卿等何を以ての故に、　放逸の獼猴を忍び　兇惡、過度なるも　等しく諸の苦樂を觀るや。

後に來るも亦仁和にして、　坐起而も安詳　皆能く忍辱を受け　彼等尋いで過ぎ去る。　諸角、

佛、諸の比丘に告げたまはく「爾の時の仙人を知らむと欲せば則ち今此の和上是なり。時に象子とは死せる弟子是なり。天・帝釋とは則ち我が身是なり。爾の時相ひ遇ふこと今も亦此の如し」と。佛說きたまふこと是の如く歡喜せざるは莫し。

ること子の如し。之を視て厭ふこと無く之を敬ふこと極り無し。

時に、天帝釋、則ち時に念を發す。今、此の仙人の志象子に在り、猗念して厭ふこと無し。今、我、寧ろ別に愁感せしむ可し。時に、天帝釋、示現し之を試む。化して象子をして忽然地に死し而して血を流離せしむ。仙人、之を見、象子死亡し憂愁言ひ亘し。涕泣し横に流る、自ら解くこと能はず。餘の仙人聞き來りて之を諫曉するも憂を除く能はず。復、食飲せず、時に天・帝釋、自ら其の身を以て虚空に住在し、卽ち、仙人の爲に偈を說きて曰く、

仁者已に家を棄て　此に至り眷屬無し、　諸の仙人の法として　死を憂ふるは善哉に非ず。
假使ひ悲しみ涕泣するも、　能く死者をして生かしめむや　皆、聚り悃泣くも　啼哭するも、
活きず。　已に習ひ共に頓止し、　而も象子と俱なり。　則ち愍恩の情有り、　愁憂せざるを
得ず。　死すべき人死を哭き　其の啼哭するもの有るも　明智は憂を懷かず、　仙人の慧何ぞ
啼かむ。

時に、天・帝釋、其の仙人をして憂惱を懷かしめ已り、卽ち、象子をして活きて故の如くならしむ。時に、仙人、象子の活きたるを見て尋いで大いに踊躍し自ら勝ふること能はず。復、愁憂せず。時に、天、帝釋、卽ち尋いで仙人の爲に而も頌を說きて曰く、

以て卿の憂惱を拔く、　心に懷く所の愁感、　今に於て仁に患無し、　而も子の憂感を除けり。　人をして愁惱を離れしむ、　及び一切の親屬をして、　卿の今日の歡の如し、　象子の起つを見るが故なり。

時に、天・帝釋、偈を以て頌して曰く、

吾、卿を愍傷する故に　諸の憂感を除かむと欲す。　故に此の因緣を興し、　塵勞を増益せり。
明者斯を曉了る　恩愛は苦患を生ず、　則ち其の內外を察し　變化を興すを得る無れ。

經法を講說し具足し廣普して聖諦を分別せり。是に於て天子、卽ち、座上に於て聖法を成じ至せり」と。佛、比丘の爲に此の本末を說き給ふ。卽時、歡喜し其の愁憂を除き復涕泣せず。時に世尊、彼の比丘を教へ憂惱と、患とを除く。時に、諸の比丘、各心に念じて言く「未曾有を得たり。大聖世尊、無上の藥を以て此の比丘の憂惱の患を療せり。彼の弟子疾病にて、命過ぎ愁憂懊惱に於て能く解く者無し。佛、世尊に見え衆患皆除けり。眞に如來・至眞・等正覺と爲す。億千劫に於て佛德を歌頌するも窮盡す可からず」と。

佛、時に遙に諸の比丘衆の共に此の事を議するを聞き、佛、卽ち、往詣りて諸の比丘に告げたまふやう「向には共に會し何をか論ずる所と爲す」と。比丘、佛に白すやう「唯、然なり、世尊よ、向には共に會し佛の功德を歎ぜり、聖尊極まり無く諸の未だ度せざるを度し、諸の未だ脫せざるを濟ひ諸の未だ滅さゞるを滅す。一切の婬・怒・癡の患を療治し無上醫と爲る。常に法藥を以て諸の心の病を療す。向には比丘の憂患を蠲除す。是を以て踊躍し自ら勝ふること能はず」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく「汝、云ふ所の如し。今、此の比丘、弟子の終れるを見て愁憂感結し自ら解くこと能はず。獨り佛・世尊のみなり。前世の宿命も亦復是の如し。

乃去往古、久遠世の時、異なる閑居有り、一象、子を生み地に墮ち未だ久しからずして其の母終亡る。彼を去ること遠からず仙人の處る所なり。有上威神功德を具足し志大哀を懷く、遙に象子を見るに其の母命終り纔に能く足を擧げ東西に[三]遊佯し自ら活くること能はず。卽ち時に扶け將ゐ止頓する所に詣る。之に飮ますに水を以てす。果を採り之を飼ふ。彼の時象子、仁和、賢善にして功德殊妙なり。義理を樂しみ養うて安穩を得、憂患有ること無く諸の衆惱を除けり。時に仙人、臥起處を同じくして身形轉た長じ衣毛鮮澤なり。卽ち、水漿を以て仙人を供養す。其の好果蓏、然る後に自ら食す。往反慇懃にして奉侍懈らず。彼の時、仙人象子を愍哀し其の德行を觀て之を愛す

【三】遊佯。たちまとほる。

と違遠す。佛、世尊有り、普く一切智にして其の慧遍く見る。號して如來・至眞・等正覺と曰ふ。今、悉く大聖世尊、和上・師友、及び諸の同學に違遠す。無央數劫百千の數も、値ひ難く見難し。世間に興り遇ふことを得可からず。經典を講說し深妙優奧にして限り難し。未だ曾つて念ずる所にあらず、口に言を發せず、而して安穩を爲し、皆、之を開化し、智慧を分別し諸の緣起を說き各各解了る從つて來る所の因無央數劫に未だ聞見せざる所[三]、悉く爲に解決す。吾、本、和上に遭遇し此の經典と法律に値ふ可くして家を棄てて道を爲し沙門と作るを得て、超異に至らず。是の如き等類興立すべき所の究竟を得ず、今、反つて放逸の行を爲すべけんや。今、吾、寧ろ先に世尊に詣り經義を諮受す可し。則ち、自ら曉り責め己の身を感傷す。卽ち、其の夜を以て威神光光として明徹し遠く照し、世尊に往詣り、足下に稽首し却きて一面に住す。佛、其の心の眞正道を樂み純淑の法に在るを見て爲に四諦（卽ち）苦・集・盡・道を說き給ふ。卽ち、四諦を見る。是に於て世尊本の根の如く、爲に分別し給ひ、果證に至るを得て歡喜踊躍す。其の嚴戒を受け佛足に稽首し右に三たび遶り已り忽然として現はれず。

　時に、和上、心に弟子の功德性行を念じ愁憂し感結し泣涕雨淚し自ら解くこと能はず。等類諫喩するも恩を究むること能はず。時に比丘、世尊に往きて啓す。世尊、告げて曰く「比丘を呼び來れ」と。之に問ひ給ふやう「比丘よ、何の爲めに憂惱して、自ら解くこと能はざるや」と。比丘、白して曰く「弟子、終に沒せり」と。佛、言く「何の故に愁憂し自ら解く能はざるや」と。比丘、白して曰く「唯、然なり、世尊よ、我が彼の弟子甚だ大いに良謹にして仁賢溫雅なり。名德量り難く未だ究竟有らず、而して中夭して沒す。故を以て憂悒して自ら寬がず」と。佛、比丘に告げたまはく、「復、愁憂する勿れ、所以は何ぞや、卿の弟子、已に究竟に至り天上に生るを得たり。今日、夜半、佛の所に至れり。威神巍々として光明遠く照し足下に稽首し却きて一面に住せり。吾、天子の爲に

【三】所、大正、我に作る。

を責むる勿れ。諸の佛及び緣覺、聲聞、聖弟子、寂然處を捨置し城と、聚落に入りて乞ふも、窮厄し所依無く生身、苦患に遭ふ。今、我腹の使と爲る、唯、人尊、恕されよ。

時に王、之を愍傷し則ち偈を以て梵志に報へて曰く、

梵志よ卿に施すべし、赤牸牛、千頭　及び犢子と倶なり、焉んぞ使に惠まざるを得む。

吾、諸の使者の爲に、飢乏する所を給與す、使者と爲り使と作る(者に)、施を加へ恐懼無し。」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく「爾の時の梵志を知らむと欲せば阿難是れなり、梵達王とは波斯匿王是なり。爾の時、阿難、開化して悅ばしめ戴仰すること量り無し。是に於て阿難、今世國に在り、復、波斯匿王を化す。穀米飢饉なり。世尊及び比丘衆を供養す。三月の中乏少する所無し。是の故に比丘よ、當に善言、柔和の辭を學ぶべし。當に巧辭、方便の語を作すべし、是れは諸佛の教なり」と。佛、說きたまふこと是の如く歡喜せざるは莫し。

第二十九、佛、弟子命過ぐるを說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞の祇樹給孤獨園に遊び大比丘衆千二百五十人と倶なりき。爾の時、異比丘の弟子有り、志性溫雅にして功德殊異なり。意行、仁賢にして至誠安穩、身、常に侍從して和上を宿衞す、恭順、良謹にして精進及び難し。法教に順從して師命に違はず。時に短命なるは宿世に種うる所なり、其の壽薄少にして幼小亡沒す。即ち、天上に生れ忉利宮に在り適天上に生る。則ち、天上を觀ずるに久しく堅固ならず。但、大火と觀ず。吾、本志す所如意を得ず、究竟に至らず、善き師友と相ひ守ること能はず。今、善師を捨てて惡友に隨ふ。是に於て至尊の和上及び[一]阿夷梨、衆諸の等類、梵行を修する者、四輩の弟子(即ち)比丘、比丘尼・清信士・清信女

【七】聚落。落聚に大正作る。

【一】阿夷梨。阿闍梨、即ち高僧の稱。

言く、汝、勤苦に遭ひ乞匃し患に遇ふ。至らざる所無くして而も得る能はず。何ぞ王に詣り其れ從り乞匃せざるや。本と聞く、國王敢て乞ふ者有り人意に逆はずと。梵志、婦に答ふるやう、汝、聞かずや、國王令有り、人、王に詣り乞匃せしむるを得ず。唯、遠方の使のみ乃ち進み見ゆるを得て其の賚償を給す。餘人の乞ふ者皆當に斬らるべしと。梵志、婦に答ふやう、我が身今日安きを求むるを得むと欲し反つて危害せらる。既に他に依仰し復毀辱せらる。其の婦、答へて曰く、諸の臣吏の四遠に告勅し、唯遠使のみ前むを得て餘人に聽さゞる如くんば卿自ら言ふべし、遠くより使として來り大王に見えむと欲すと。食乃ち得可しと。時に梵志卽ち、婦の言を受け、杖を執り使を奉じ使の冠を著奉し王宮の門に詣る。門吏曰く、子、所より來るやと。答へて曰く、遠くより使として來ると。門吏、王に白し其の本末を啓す。卽時之に現はれ、「子よ、所より來るや。今、十六國穀米踊貴す。各自、界を守る、何より自ら到り、何國より來る」と。吏、具に是に問ひ已る。梵志、答へて曰く、王の德を聞き服するの故に使と被り來りぬと。吏、又、問ふて曰く、是の國界に於て彼の國を見るや、聚落〔五〕墟聚、達知す可きに足る。假し使とは已の爲ならむと。唯、願くば天王よ、獨り〔六〕己の爲のみならば求むる所得ること易し。大王に見えむと欲する故に來り見えむことを求むと。門吏、之に問ふに其の對是の如し。王、曰く、之に現はれよと。梵志、卽ち入る。王、之に問ひて曰く、誰の爲に使として來るや。梵志、對へて曰く、恐懼せざることを求む。唯、聽許せられよ、乃ち敢て王に啓し、使し來る所を說かむと。王、之に告げて曰く、便ち具に自ら說け、恐懼を原除せむと。王、又、問ふて言く、誰の與に使と爲ると。梵志、啓して曰く、大王よ、之を知るを欲せよ、我が腹に使し來る。時に、梵志、卽ち、頌を說きて曰く、

衆人は財利を求め、　或は諸の怨賊に遇ふ、　我、腹の使と爲りて來る、　國主よ、唯願くば
恕したまへ。　誰か最尊勢と爲す、　誰か其れ第一先、　我、實に腹の使と爲る、　大王よ、罪

【五】墟。大丘。
【六】己、大正、已に作る。

し乞者日に滋し。王の官門に詣り倉庫虛しく竭く。時に、諸の臣吏、各共に議りて言く、今、此の國王、敢て來り乞はゞ即ち施與し人に逆ふこと能はず、天旱雨らず、乞ふ者遂に甚だし。米穀踊貴し倉庫虛しく盡く。將に國を壞らむと欲すと。時に、諸の大臣、國を救護せむと欲し王の所に往詣る。具足して王の爲めに此の議を啓し說く。王、施與する所今は省み息む可し。法に於て依る可し。後豐に有るべくして爾して乃ち復施せよと。王、之に告げて曰く、吾、施與する所懈り止む可からず。寡人令有り、志願し布施す焉んぞ本心に違はむ。又、來り乞はば何ぞ忍びて之に逆はむ。其れ來らずむば乃ち施す所無しと。時に、諸の群臣各共に議りて言く、吾等、宜に於て當に共に計を作すべし。諸の窮士をして來り乞ふを得ざらしめむ。爾らば乃ち斷つ耳と。時に王の施未だ曾つて懈廢せず。心、自ら願ひて言く、諸の倉穀をして消滅せしむる莫らしめむと。時に諸の法明吏四遠に告勅す、往きて王從り乞匃せしむるを得ず、敢て乞ふ有らば皆誅罰を受け命を都市に棄てむと。四遠の乞者其の國に來詣し此の急なる敎を聞き敢て行きて乞はず。王に見ゆるを得ず、愁憂、懊惱し諸の大臣に問ふやう、審に是の命有りや、又父母に問ふやう、實に急なる敎有り乞ふことを得ざるやと。答へて曰く、之れ有り、行きて乞ふを得ずと。乞者、又問ふやう、假令し遠方の諸の使吏有らば(云何む)、答へて曰く、東西南北(より來れる使者には)皆稟價【四】・穀糧・飮食を足す、今、此の臣吏獨り飮食を欲すと。故に惡敎を出し諸の四遠に勅す、諸の貧窮、乞士門に詣り王從り乞匃するを得ず。假使し乞はば罪皆應に死すべし、唯、遠方の使のみ倉庫を見るを得と。展轉し傳へ語る。衆人皆諸の臣の建つる所にして王の所爲に非るを知る。

一梵志有り、飢窮し日を經て行きて乞匃し以て其の命を救ひ遍く行きて求索め妻子を給足す、假使し穀賤しければ乞匃して得ること易く獲る所量り無し。設し穀踊貴せば乞匃して獲難し。馳走し乞匃し至らざる所無く纔に活命を得。心、憂悴を懷き復言ふ可からず。其の婦、時に梵志に謂ひて

【四】稟價。くらの品物。

を爲さむと欲す。賢者阿難、博聞多智にして法に於て厭ふこと無く辯才無礙なり。佛說きたまふ所の經に於いて無數の人の爲めに經典を護受し精進及び難し。心に自ら念じて言く「假使し世尊餘國に詣りて歲節を造し給はば他域に處る無央數の人其の德本を失ひ坐具亦乏少する所有らん。假使し如來此の舍衞に止りて歲節を爲し給はば安隱する所多く、爲に德本を成ぜん」と。

時に世尊、群黎を愍傷し之を救護せむと欲し舍衞城に入り給ふ。波斯匿王の傍臣、人民國王に往詣り、阿難自ら往き此の本末を說く。王波斯匿、阿難の言を聞き佛及び比丘衆を請ずること三月なり。若干種の饌、飲食具足す、病瘦に藥を給し一切安き所なり。其の樂む所に隨ふ。是の如く三月乏少する所無し。佛、比丘衆と舍衞に歲節し給ふ。時に、諸の比丘、心に自ら念じて言く「賢者阿難、功德及び難く未曾有を得たり。權を行ふに、時を知り誼理を曉了る。國王波斯匿を勸化し世尊及び比丘衆を供養す。歲節三月皆安穩ならしむ。比丘衆をして九十日の中憂慮有ること無からしむ。一切に安を施し供す所乏しきこと無し。比丘衆をして各自安穩ならしむ。復、遊馳して他國に至らず」と。

時に、佛、徹聽して諸の比丘の共に此の事を議るを聞き、尋いで卽ち比丘衆の所に往到り、「汝等、向に何をか講論する所ぞ」と、諸の比丘衆、本末を具足し如來に啓白せり。

佛、比丘に告げたまはく「賢者、阿難、但、今世のみ權を行ひ時を知るに非ず、前世も亦然なり、權方便を行へり。

乃去往古、久遠世の時[二]波羅奈國あり時に王有りて[三]梵達と名づく。王、大德有り名稱遠く聞ゆ、時に國飢饉にして米穀踊貴す。人民飢餓し乞者衆多にして以て供す可き無し。王、施與を憙ぶ。四面より來り乞ふ。集ること浮雲の如く十方より皆至る。力の任す所に隨つて之を供給す。布施是の如く休息有ること無し。穀米遂に貴く天、轉た旱酷し。復び降雨せず種うる所收まらず。人民飢困

【二】波羅奈國。梵名、Vārāṇasī. 中印度恒河流域の國名、今のベナレスを中心とする地方。
【三】梵達。梵名、Brahmadatta.

る可し。丈夫男子、人民を以ての故に其の德本を承く、而して之に降伏するも自ら歸すると言はず。其れ阿脂王、大丈夫爲り方便校計するも亦復是の如し。又、其の眷屬和順にして敎を承け異心有ること無し。志離別せず所作無上、威德巍巍なり。假使ひ阿脂王勝を得ざるも、今願くば天王よ、目自ら之を視よ、王の勇猛を以て計策方便せよ、權揞[五]及び難きも終に破壞せず、設し相ひ信ぜずむば且く自ら目に見よと。偈を以て頌して曰く、

方策、尊雄の計　時を知り强めて精進し　勇猛にして權略有り　此を察せば則ち勝を知る。
阿脂とは德忍を名づけ、　諸の瞋恚を開化す、　阿脂王、堪任せば　迦隣焉んぞ勝を得む。

時に、王、言を用ひず師を興し兵を起し阿脂國に往詣せり。

其の欣踊の兵、大臣輔佐す、聰明、智慧あり勇猛精進し無上心を以てす、和して離別せず、又阿脂王、身自ら勇健其の力聖强なり。時に應じ迦隣王に勝つことを得たり。迦隣王、伏し自ら歸して謁拜す。生け捕り收攝す。尋いで便ち之を放つ。是に於て天帝釋、偈を以て頌して曰く、

賢聖、忍辱を歎じ　諸の瞋恚を開化す、　迦隣王を降伏し　阿脂王、獨り勝てり。」と。

佛、諸の比丘に告げ給ふやう「爾の時の迦隣王を知らむと欲せば審裸形子是れなり、阿脂王とは則ち我が身是れなり、欣踊大臣とは則ち舍利弗是れなり。帝釋とは阿難是れなり。爾の時相ひ隨ひ以て伴黨と爲り義理相ひ化し上下相ひ承く。今も亦是の如し」と。佛、說きたまふこと是の如く歡喜せざるは莫し。

第二十八、佛、腹使を說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に遊び大比丘衆千二百五十人と俱なりき。爾の時、其の國の米穀踊貴し人民飢餓す。佛、諸の比丘と、各散去し諸國に流遊し以て[一]歲節

【五】權揞。權、はかりごと、揞、宋・元・明本は惜に作る。その音と訓は如何。

【一】歲節。安居のことなり。

圍遶す。王、傍臣に問ふやう、當に之を奈何がすべき。吾、自ら門を開き而して捨て去り此の他門に入らんかと。傍臣、對へて曰く、恐懼を得ること無れ、天王、自ら安んぜよ。譬ば師子の林間に處り樹木を畏れざるが如し今此に住するも亦復是の如し。城郭則ち安らかに護を得て患無しと。偈を以て頌して曰く、

以ふに自ら其の門を開き、　反つて此の國界に入る、　[四]阿蘭の大士、　師子の林樹にあるが如し。　安護にして護を得　自然に所畏無く　其の欣踊と國王と　以て長く安隱なる可し。

人、倶に論議し其の言、流溢す。阿脂王、其の迦隣王の財利の故と其の名稱とを以て發意し趣く所と聞く。則ち、敕じ頌して曰く、

此の事大いに佳し　微妙にして量り難く、　名德流布し　衆惡有ること無し、　能く法に堪忍し、　將に此より誑詐する所　有ること無らむとす。

又、問ふて曰く、其れ此の仙人と、天帝の神と、皆迦隣國界に遊び威神廣大なり、彼、我が德を聞く。卽ち當に勝を得べきや、其の迦隣王、便ち當に破壞して自ら降伏すべきやと。時に、阿脂王、心に自ら念じて曰く、彼の諸の仙人は終に妄語せずと。諸の仙人は、吾、當に勝を得べし、功德量り無ければなりと云ふ。說く所此の如しと。諸の臣、報じて曰く、唯、然なり、大王よ、仙人は至誠終に虛言せずと。偈を以て頌して曰く、

諸の迦隣、勝を得　是に緣つて而も降伏す　阿脂王、計を失す　仙人說くこと是の如し。　善き哉、言、質直、　興す所失ふ所無し、　何を以て此の言を說く、　自然に聲音有り。　天王之を知るべし、　言斯に至誠にして　所行放逸無くば　而も當に勝法を得べし。　又言く、阿脂王、　而も復勝を得べしと、　此れ云何が至誠なるか、　更に我が爲に解說せよ。

大臣、答へて曰く、曾つて聞かずや、聖を失ふ仙人剛强にして化し難し。手に利劍を執り像貌畏

【四】阿蘭。阿蘭若(Araṇya)の略、森林、空閑處の意。

る。譬へば蛇虺・弊蟲・兇惡の人の如きは、倚、親近す可く、信ず可く、樂む可く、吉祥安穩の法を致す可し。世尊、瞿曇に是の功德安穩の誼を求むるも終に得可からず」と。諸の女、答へて曰く「世尊の道德は人の四虺瑕穢の毒を去り人をして安隱寂然たらしむ、虛空倘瑕有る可し、如來世尊未だ曾つて短有らず。男女之を見る安隱ならざる莫し。時に我等の爲に微妙の誼を說き道稱を咨歎す、我等歡喜し稽首歸命せり」と。

時に比丘僧、具足し佛に啓すやう「唯、然なり、世尊よ、且く外學、裸形子を觀るに異語有り、佛を誹謗し反つて諸女を譏る。汝等、何故に世尊に歸命するや。其の擧動を觀て當に長短を取り而して來り我に語るべし。反つて迷惑沈溺を爲し其の身自ら濟ふこと能はず」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく「裸形子、四女人を遣し來りて佛を試み其の長短を取らむと欲す。世尊に瑕無し。何より闕を取らむ、佛、尋いで開化し、皆得度せしめ無著の證に至れり。

乃往古久遠世の時一國王有り、名を迦隣と曰ふ。他國の王と結び怨仇と爲る。往きて之を壞らむと欲す。卽ち、四女を遣はす。端正殊妙、姿顏雙び無し。而して往いて之を試み。其の長短を取り內匿の賊と爲り、阿脂王の許に詣る。時に阿脂王、尊太后有り、端正殊好尊敬せざるは無し。威神巍巍殊德量り無し。瑕穢有ること無く柔和・無[三]獷・名稱遠く聞ゆ。安詳柔和なり。迦隣王の女、阿脂王の功德世の希有なりと嗟嘆す。名稱遠く聞え八方上下宣揚せざる莫し。我等の父王、諱、迦隣と爲す。故に相ひ遣し來り以て相ひ給侍し左右に奉在す、我が父王、辭して曰く、其れ王の德・殊なり、微妙及び難く瑕垢有ること無し。安詳にして暴ならず忍辱穢無し、人と語言し才辯殊異にして名を聞かば輒ち伏す。我れ言を受けず、其の國阿脂王に屬し大國主と爲す。又、國號を虛空と曰ふ。王の所止處に一大臣有り、名を細那と曰ふ。聰明にして智慧聖達及び難し。卒慧尋いで答ふ。王の輔臣と爲る。」と。時に迦隣王、女の言に隨はず、乘てゝ大國細那の土界に詣り大衆と俱なり。周匝

【三】無獷。無獷、あらあらしさのなきこと。

第二十七、佛、審裸形子を說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞の祇樹給孤獨園に遊び大比丘衆千二百五十人と俱なりき。

爾の時、國王有り、梵志女に因つて一子を生み名を至誠と曰ふ。外道異學なり、審裸形子而も爲に字と作す。其の裸形子、智慧聰明超異の慧有り、講說する所有り、降伏する所多し。諸の經典に於て博くせざる所無し。普く衆人の爲にす。其の國王と共に博く衆誼に達す。世尊に往詣る。其の尼揵に四姊弟有り、梵志に因つて生れ異學を敬樂す。一に饕餮と名づけ、二に興貪と名づけ、三に金誠と名づけ、四に誠雪と名づく。時に裸形子佛の所に遣し詣し世尊を試みむと欲し皆法則を受け悉く經誼を知る。具に我に來り說く。爾の時姊弟、各相ひ謂ひて言く「吾等、共に沙門瞿曇の所に詣り其の擧動を試み行步進止其の長短を取らむ」と。便ち、共に往詣し居家を棄捐て悉く沙門と爲り具足戒を受く。

時に佛世尊、往世の喩を以て之を開化し本源に導示し諸根從ふ所なり。功德の本、貢高を棄捐て其の憍慢を除き皆羅漢を得たり。時に裸形子、諸の姊弟に問ふやう「試みる所云何」と。諸女則ち無央數の誼を以て世尊を嗟嘆し經典法律の妙を稱譽し勝て限る可からず。時に裸形子女の言を受けず。「汝等家事を以て往きて試み道を亂さむと欲し反つて世尊の爲に攝取・迷惑・誑詐せらるゝ所なり、譬ば人有り行きて水中に入り垢濁を洗ひ去り身をして淨潔ならしめ反つて水に溺れ死するが如し。汝等是の如し。往きて佛を試み其の道意を壞り其の擧動を視、其の長短を取らむと欲し、反つて瞿曇の爲に迷惑せらるゝ所、沒溺自失し己を濟ふことを得ず。譬ば人有り行きて果樹に入り好果を採らむと欲し反つて禽獸虎狼の爲に食はれ身を亡ぼし還らざるが如し。汝等是の如し。往きて沙門瞿曇を試み其の法則、擧動長短を取り以て來り吾に語る。而して反つて沒溺し彼の瞿曇の爲に惑さ

【一】裸形子。裸形外道(Nirgrantha)の徒、印度外道の一にして一切の繫縛を遠離するを表して裸形を以て正行とする。

【二】貢高。たかあがり。

す。則ち偈を頌して曰く、

妻子を棄捐て　出家し慕ふ所無し、　卿よ、和上を父と爲し、　等類は則ち兄弟なり。　頓して梵志と倶なり、　而も相ひ供視せざれば、　疾病困篤を得るも　孤獨にして所依無し。　子を察し之を見已る、　梵行を親友と爲し、　普く子の恭敬を行し　展轉相ひ瞻視す」と。

時に、佛世尊、比丘に往詣りて之に問ふて曰く「今、疾病を得て醫藥、床臥具を瞻視する有りや」と。白して曰く「孤獨にして瞻視する者無し、醫無く藥無し、家を去ること甚だ遠く父母に離れ兄弟有ること無し。親里伴侶、供侍者無し」と。世尊、又、問ひたまはく「卿、强健の時頗る疾有る者を瞻視、問訊せしや不や」と、答へて曰く「不なり」と。世尊、告げて曰く「卿、强健の時、人を瞻視せず疾病を問訊せず。誰か當に卿を瞻視すべきや、善惡對有り罪福報有り、恩は往返を生じ義は稀疎を絶つ。佛、一切三界の救ひの爲めに五道を救度す、卿を捨つべきや、前世は卿を救へり、今も亦當に然るべし」と。佛、之を扶け起し水を以て洗はむと欲す、時に天、臂を屈伸する頃忽然として來下し之を洗浴せむと欲す。佛、言く「拘翼[四]よ、卿、天上の香潔の中に在り安んぞ能く穢濁の臭處を救ひ洗ふや」と。天帝釋、答へて曰く「向に世尊說きたまへり、此の比丘本人を瞻ず疾病を視ず。孤獨救ふこと無し。佛十方一切の救の爲めに功德具足し乏少する所無し。尙、之を瞻視す。況んや我が罪福未だ斷ぜずして福を興さゞるをや」と。時に佛手にて洗ひ天帝、水を灌ぐ、還び復之を臥す。其の醫藥を飮み卽時除愈す。爲に經法を說くに卽時道を得たり。世尊、偈を以て之を讃じて曰く、

人は當に疾病を瞻て　諸の危厄を問訊すべし、　善惡報應有り　果を種え實を獲るが如し。
世尊を則ち父と爲し　經法を以て母と爲し、　同學者は兄弟　是に因て度を得と。

佛、說きたまふこと是の如く歡喜せざるは莫し。

【四】拘翼。天帝釋の名。

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞の祇樹給孤獨園に遊び大比丘衆千二百五十人と俱なりき。
時に一比丘、疾病困篤なり、獨自にして一身、等類有ること無し。視る者有ること無く亦醫藥・衣被・飲食無し。起居する能はず惡露自ら出づ。身其の上に臥し四向顧視するも來り救濟ふ者無し。便ち自ら歎息す、今日、吾が身救無く護無しと。時に、阿難、見え往きて佛に白すやう「唯、然なり、大聖よ、吾が身今日未曾有を得たり、如來世尊、大慈大哀なり、病比丘有り當に救濟を念ふべし」と。

「吾、乃往の世無數劫の時此の比丘の疾病の患を救ひ今世に於ても亦然なり。

乃往過去久遠の世の時空閑處に於て多くの神仙五通の學者あり、彼の獨處に在り各各相ひ勸め轉た相ひ佐助く。各各果を取り以て相ひ給足す。以て[一]籌算を作し設使ひ疾病するも轉た相ひ瞻療せむと。時に[二]摩納學志有り、緩急する所有れば常に馳走して趣く。一學志有り、若し急緩疾病の厄有るも初より視瞻せず。時に彼の學志急緩有るの時救者有ること無し。則ち自ら獨立し伴無く侶無し。彼、異時に於て身に疾病を得療瞻する者無し、亦、果を持ち食を授與する者無し。是の時五通仙人は是れ彼の和上なり。之を見ること是の如し。心に自ら念じて言く、此の人孤獨にして救護有ること無しと。心に之を[三]愍念み卽ち其の所に往到り卽ち之に問うて曰く、摩納學志よ、卿、强健の時頗る消息有り、問訊寧からず、親厚の朋友有りやと。卽ち時に報じて曰く、無きなり、和上も亦親厚の知識の友無し。我の父母、家屬・親里此を去ること大いに遠しと。又、問ふて曰く、此れ梵志よ、共に一處に頓し親友と結んで知識と爲らざるやと。答へて曰く、無きなりと。和上答へて曰く、親友と結ばず、知識有ること無し、何を以てか人爲らむ。卿、餘人の展轉相ひ敬ひ展轉相ひ事ふるを見よ。卿、獨り不なり、今日孤獨救護有ること無しと。時に仙人、摩納を扶接け之をして坐せしむ、自らの頓する處に將ゐ詣り之に勸めて安心せしむ。親厚を將ゐ詣りて以て療治

【一】籌算。くちを引き順を定めること。
【二】摩納學志。摩納は梵語、Māṇavaka. 年少の婆羅門の意。
【三】愍念。愍念、あはれむこと。

誰ぞ尊、樹上に在る、其の慧第一最たり、其れ明に十方を炤し、紫磨金を積むが如し。

時に、烏、偈を以て報じて頌して曰く、

君は則ち大師子、君に見えむと欲し故に來る、君の脂は鹿王の如し、善き哉利義を得たり。」

蠱狐復、偈を以て報じ頌して曰く、

誠信實に相ひ知り、倶に相ひ至誠を歎ず、紫磨金を合積し[三]所問して此を服食せむ。

爾の時、彼を去ること遠からず。大仙人有り閑居に處り淨修して道を爲す。狐及び烏轉た共に相ひ譽るを聞き、心に自ら念じて言く「彼等の類横に相ひ咨嗟す。彼の言皆虚なり、一の誠實無し、偈を以て問ふて曰く、

吾久しく興る所を見、此に至つて倶に兩舌、自ら樹間に藏れ、倶に人肉を食す。

時に烏、瞋恚し偈を以て仙人に報ず、

[四]師子と及び孔雀と共に禽肉を食す、彼の[五]兇滅頭に於て次第して而も活くるを求めむ。

仙人、偈を以て答へて曰く、

樗樹の臭、下枉れり、一切の鳥の惡む所衆鹿の依りて困しむ所、死せる黄門の身を棄つ。

汝輩は下賤の物倶に來りて此に聚會り、黄門の身を食し、自ら稱して上人と爲す。」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく「爾の時の蠱狐を知らむと欲せば調達是れなり、烏とは拘迦利是れなり。仙人とは則ち菩薩是れなり、爾の時倶に共に相ひ歎じ非を以て是と爲し是を以て非と爲す、今に於ても亦然なり」と。

第二十六、佛、比丘の疾病を說く經

【三】所問。シヤバンヌは所問は不問と爲すべきであらうといふてゐる。「問はざるも」。

【四】師子・孔雀は卽ち、狐と烏。

【五】兇滅頭。禿ちやびんの老翁。

時に福德王、遂に高位を以て諸の兄弟を署り、各所を得しむ。佛、諸の比丘に告げたまはく「爾の時の智慧者とは則ち舍利弗是れなり。工巧者は則ち阿那律是れなり。端正者は則ち阿難是れなり。精進者は則ち輸輪是れなり。福德者は卽ち吾が身是れなり。此等は爾の時各自己の長ずる所を稱歎し以て第一と爲す。今に於ても亦然なり。昔、爾の時、世皆吾に如かず、而して各自嗟歎せり。吾、佛道を成じ三界の尊なり。今、皆吾に歸し以て弟子と爲り佛に依つて度を得たり」と。佛、說きたまふこと是の如く歡喜せざる莫し。

第二十五、佛、蟲[一]狐と烏とを說く經

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞の祇樹給孤獨園に遊び大比丘衆千二百五十人と俱なりき。

爾の時、佛、諸の比丘に告げたまはく「調達は兇危なり、横に嗟歎を見る者は其の理を得ず」と。拘迦利比丘は調達を嗟歎し調達も亦復拘迦利比丘を歎ず。其れ彼二人横に相ひ嗟歎す、義無く理無し。諸の比丘聞いて、往きて世尊に白す「唯、然なり、大聖よ、拘迦利比丘を觀るに正典に因り、法律教に緣り以て信じ出家し而して沙門と爲る。横に調達を歎じ非を以て是と爲し、義理を得ず。又、彼の調達も拘迦利比丘を嗟歎し非を以て是と爲し是を以て非と爲す」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく「今、此の輩、愚騃の等なり、但、今世のみ横に相ひ嗟歎し非を以て是と爲し是を以て非と爲すにあらず。前世も亦然なり。

乃往過去久遠の世の時　黄門[二]の命過ぐ、親里卽ち取りて樗樹の間に棄つ。彼の時蟲狐、烏鳥來りて其の肉を食ふ。時に共に相ひ嗟歎す。樹間の烏、狐の爲に偈を說きて曰く、

　君の體師子の如く、　其の頭は仙人の如し、　脂は鹿中の王の猶く、　善き哉好華の如し。

時に蟲狐、卽ち樹間に偈を以て讚じて曰く、

【一】蟲。まどはすこと。

【二】黄門。禁門の監視人。

數の億寶を致せり。此の寶を得已り諸の兄弟に與ふ。偈を以て頌して曰く、

　善き哉色は花の如く、　端正の顏貌足り　女人の尊敬する所、　又常に安穩を得。　衆人觀察する所　猶し星中の月の如し、　今、若干の寶を致し、　自ら食し幷に人に施す。

第四の精進なる者轉た他國に詣り一江邊に到る。一栴檀樹を見る。流に隨つて來り下る。衣を脫ぎ水に入り泅ぎ截接して取る。國の王家急ぎ栴檀を求む。即ち載せて送り上る。金百萬を得たり。得る所の寶稱げて計る可からず。諸の兄弟に與へ偈を以て頌して曰く、

　精進、最第一、　勇猛能く海に入り　衆珍寶を致し　以て家の親屬に給す。　我に頼りて江水に浮び、　妙栴檀を接得し、　金若干數を致し、　自ら食し及び人に施せり。

第五の福德者は轉た大國に詣る。時に天暑熱なり、樹下に臥す。日の[六]時昳の中餘樹の蔭移る。此の人の臥す所樹の陰動かず、威神巍巍として端正姝好にして猶し日月の如し。彼の國王薨じ太子の嗣立す可き者有ること無し。衆人、議りて言く「當に賢士を求め以て國主と爲すべしと。人を募り四出し、國內應に立つべき者を選擇す。使者[七]按行し、一樹下に此の一人有り、世に希有なり、樹下に臥し樹蔭移らざるを見、心に自ら念じて言く、此れ凡人に非ず、應に國主たるべしと。尋いで往き遍く啓す。國の大臣具に本末を說く。時に群臣即ち威儀を嚴にし導從騎乘す。[八]印綬・[九]冠幘・車駕・衣服則ち往きて奉迎す。洗沐香を塗り衣冠被服し帶を佩び畢訖る。皆拜謁し臣と稱ふ。車に昇り宮に入る。南面して詔を立つ。國即ち太平、風雨時節を以てす。即時に外に勅し、詔ぐるに四人有り、一は智慧、二は工巧、三に端正、四に精進なり、召して[一〇]中閤に至り一時に倶に集り侍衞に任せしむ。時に福德王、偈を以て頌して曰く、

　福功德有る者は　天帝釋と爲るを得、　帝王、轉輪王、　亦、梵王と爲るを得。　智慧、及び工巧　端正幷に精進、　皆、福德門に詣り、　侍立して臣僕と爲る。

【六】時昳。午後二時。
【七】按行。しらべあるくこと。
【八】印綬。印と印璽につくるひも。
【九】冠幘。かぶりもの。
【一〇】中閤。御殿。

言辭具足する所　辯能く經典を造る、　正士、能く博聞　安穩、究竟に至る。　我を觀るに智慧を以てし、　此の若干の寶を致せり、　衣食自ら具足し　幷に人に布施す。

時に第二の工巧者、轉た行きて他國に至る。時に應じて國王諸の技術を喜び即ち材木を以て機關の木人を作る。形貌端正にして生人と異る無し。衣服顏色黠慧比無く能く歌舞を工にす。擧動人の如し。辭して言く、我が子生れ若干の年あり、國中恭敬し多く、餽遺する所なりと。國王、之を聞き命じて技を作さしむ。王及び夫人、閣に升りて觀る。伎歌舞を作し若干方便し跪拜進止生人に勝る。王及び夫人歡喜量り無し。便ち眼を【五】角睮し夫人を色視す。王、遙に之を見て心に忿怒を懷き促して侍者に勅す。其の頭を斬り來れ、何ぞ𥈮眼を以て吾が夫人を視るや。謂ふに惡意有りて色視すること疑はずと。其の父啼泣す、淚出ること數行、長跪して命を請ふ、吾に一子有り甚だ重く之を愛す、坐起進退以て憂思を解く。愚意及ばず是の失有るのみ、假使し殺さば我共に死すべし。唯以て哀を加へ其の罪釁を原せよと。時に王恚り甚しく肯て聽さず。復、王に白して言く「若し活くることならずば願くば自ら手にて殺さむ、餘人にせしむるなかれ」と。王、便ち之を可とす。則ち、一肩の楔を拔く、機關解落し碎散地に在り。王、乃ち驚愕す。吾が身云何が材木を瞋るや。此人の工巧天下に雙び無し、此の機關を作る三百六十節、生人に勝る。即ち、以て億萬兩金を賞賜す。即ち金を持ちて出で諸の兄弟に與へ之を飲食せしめぬ。偈を以て頌して曰く、

此の工巧者を觀るに　多くはしかも成就する所なり、　機關を(以て)木人を作り　生者に過踰ぎたり。　歌舞伎樂を現じ　尊者をして歡喜せしめ、　賞を得る若干寶、　誰か最第一と爲す。

第三端正なる者轉た他國に詣る。人民、端正なる者有りて遠方より來り色像第一世間希有なりと聞く。人民皆往きて奉迎す。飲食百味、金銀珍寶用て上り之を遺る。其の人伎を作す、衆庶益々悅ぶ。光顏を瞻戴するに星中の月の如し。驕貴の女多く珍寶有り、衆藏盈ち滿つ。獻ずるに珍異無

【五】角睮。ながしめ。

釋・梵天、轉輪王と爲り、亦佛道を成ずるを得、道法を具足する王たり。

各各自ら己の長ずる所を說き各第一と謂ひ能く決する者無し。各自意を立て相ひ爲に伏せず。轉相ひ謂ひて言く「吾等各當に自ら功德を試むべし。丈夫の相を現じ遠く諸國に遊び他土の地に詣らむ、爾れば乃ち別に殊異の德誰か第一爲るを知らむ」と。時に智慧者、他國土に入り、其の國の人民の善惡・穀米・貴賤・豪富・下劣を推問す。其の國中兩長者有り豪富及び難し、舊に共に親親たるも中に共に相ひ失し、衆人[二]搆狡にして鬪ひ怨を成ぜしめ積みて年歲有り、能く和解する者無しと聞き、其の智慧者權方便を設け[三]好饋を齎らし百種の飲食を遺り長者の門に詣り奉現を求索む。長者即ち見ゆ。其の齎す所の[四]餽遺の具を進むるに其の長者の名を以てし、辭謝し問訊す。前者相ひ失するは意及ばざるを以てなり、衆人狡を搆へ、遂に怨結を成じ積年遼曠し言會を得ざりき、一たび侍面し其の辛苦を敍べんことを思へり。故に飲食饋遺の物を遣しぬ。唯、納受せられて譏責せらるゝ無れ。亦父の怨母の讎無く故に吾を遣し來る。相喩す意を以てなり。其の長者聞いて欣然として大いに悅び、吾、和解を欲し其の日久しきなり。但、親親以て相ひ喩す意なきのみ、乃ち、復、信を辱くし枉屈し相ひ喩す。誠に所望に非ざらむや。同じく厚意を念じぬ。便ち、來旨に順ひ敢て命を違はずと。其の智慧者、長者の意を解し燿然として疑無し。辭して出でゝ退く。第二の長者に詣り亦復是の如し。其の意を解喩すこと前の言ふ所の如し。便ち共に期を尅し共に某處に會し衆人を聚合め仇怨を和解す。時に應じて讌飲し諸の伎樂を作し共に相ひ娛樂す。各各本末和解の意を相ひ問ふ。乃ち此の人善權を以て兩怨を和解し親なること故の如くならしむるを知る。各自念じて言く「吾、久しく相ひ失す。一國中の人和解する能はず、乃ち、此の人遠く來り相ひ聞き和解せしむ、其の恩量り難し、辭盡す所に非ず。各百千兩金を出して之に奉送す。即ち、此の寶を持ち諸の兄弟に與へ偈を以て頌して曰く、

【二】搆狡。事を解せずざることと。
【三】好饋。よきかれいひ。
【四】餽遺。食物をおくること。

と。

佛、比丘に告げたまはく「此の諸人等、但、今世のみ各自ら稱譽し常に己身を歎じ第一無雙なりとせず。前世も亦然なり。生生歸する所皆吾が所に伏せり、吾、尊く極り無し。所以は何ぞや。乃往過去久遠の世の時一國王有り、名を大船と曰ふ。國土廣大にして群僚大臣普く亦具足す。其の土豐熟にして人民熾盛なり、王に五子有り、第一は智慧、第二は工巧、第三は端正、第四は精進、第五は福德なり、各自己の長ずる所を嗟嘆す。其の智慧ある者智慧天下第一と嗟嘆し偈を以て頌して曰く、

智慧は最第一　能く衆の狐疑を決し、　難解の義を分別し、　久しき怨結を和解す。　能く權方便を以て、　人をして其所を得しめ、　衆庶覩て歡喜し　悉く共に等しく稱譽す。

第二者、工巧を嗟嘆し偈を以て頌して曰く、

工巧技術有らば、　能く成就する所多く　機關木人を作り、　正に能く人形に似たり。　擧動し而も屈伸、　觀る者欣ばざる莫し、　皆共に之を　歸遺[一]とし、　所技に依因す可し。

第三人、端正を嗟嘆し偈を以て頌して曰く、

端正最第一なり、　色像比倫し難くば、　衆人顏貌を覩て　遠近に聞えざる莫し。皆來り之を尊敬し　事を愼み普く慇懃　家人奉ずること天の若く　日の浮雲を出づるが如し。

第四人、精進を嗟嘆し偈を以て頌して曰く、

精進を第一と爲す、　精進して大海に入り、　能く諸の患難を越え、　多く珍寶財を致す。勇猛能ふ所多く　是に由て凝ぐる所無く、　家業皆成辦し　親里敬ひて欣戴す。

第五人、福德を嗟嘆し偈を以て頌して曰く、

福德を第一と爲す、　所在自然に得て、　富樂極り有る無く、　生生福田と爲る。　福は天帝

【一】歸遺。みやげ物。

第三は黑優陀、第四は阿難なり。天の偈を說きし者は則ち吾身なり。爾の時相ひ遇ひ今も亦是の如し」と。佛、說きたまふこと是の如し。歡喜せざるは莫し。

第二十四、佛、國王五人を說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞の祇樹給孤獨園に遊び大比丘衆千二百五十人と俱なりき。

爾の時、諸尊比丘、各心言を發す。賢者舍利弗・賢者阿那律・賢者阿難・輸輪・及び諸弟子五百の衆、本俱に一時家を棄て道を爲し貪慕する所無し。世の榮を志とせず、悉く沙門と爲ると。時に舍利弗は智慧を嗟歎し最も第一と爲す、衆の狐疑を斷ち鬪諍を和解す、道義を分別し通ぜざる所無し、冥中、炬火有り照曜する所多きが如しと。

時に阿那律は巧便を嗟歎す。衆人の匠と爲り成就する所多し。若干の術を現じ人をして喜悅せしむ、工巧第一なりと。

時に阿難、端正を嗟歎し色像第一なり、顏貌殊妙なれば見て欣ばざる莫し、衆人愛重し一切尊敬す、嘆じて佛の三十二相有りと爲す。

時に輸輪、既に勤めて修習し未だ曾つて懈ることあらず、精進を嗟歎し世間倫無し。又、能く海に入り成辦する所多し。如來、世尊、現に釋種に生れ國を棄て王を捐て佛道を成ずるを得たり。端正比無く色像第一にして、星の中の月の如し。光明日に超えたり。體長丈六、三十二相八十種好あり、其の聲萬億の音を出す。講說する所の法天・龍・鬼神の八部人物の類、各開解を得皆其の所を得。佛の諸の兄弟、伯叔の子、各自ら譽ると雖も皆佛に歸命し、以て弟子と爲る。佛の功德稱限す可からず。無數百千億劫より功德を積累し自ら致して佛を得たり。一切人の爲めに其道路を示せりと。俱に佛に往詣し其の本末を問ふ「誰か第一と爲すや。我々衆會し各各已の長ずる所を歎ぜり」

言く「吾等計を設け其の獵師に從ひ當に鹿肉を索むべし。誰か多く獲るを知らむ。俱に卽ち發行す。一人、辭を陳べ其の獷言を出す。而して自ら高くす。「咄！　卿男子なり、當に我に肉を惠むべし、之を食はむと欲す」と。第二人曰く「唯、兄よ、肉を施し弟をして食を得しめよ」と。第三人曰く「仁者は愛す可し、肉を以て相ひ與へよ。吾、之を食はむと思ふ」と。第四人曰く「親厚なるものよ、肉を捐てよ、唯乞うて施され、吾、之を食はむと欲す、俱共に飢渴す」と。時に獵師、四人の言辭を察し各言ふ所に隨つて偈を以て報へて曰く、

卿、辭甚だ麁獷なり。　云何が相ひ肉を與へむ、　其の言人を刺すが如し、　但、角を以て相ひ施さむ。

復、偈を以て第二人に報へて曰く、

此の人善哉爲り、　我を謂ひて以て兄と爲す、　其の辭肢體の如し、　便ち一脚を持つて與へむ。

復、次に第三人に偈を以て報へて曰く、

愛敬して我に施す可しと(云ひ)、　而も心に慈哀を懷く、　辭言腹心の如し、　便ち心肝を以て與へむ。

復、次に第四人に偈を以て報へて曰く、

我を以て親厚と爲す、　其の身同き契を得たり　此の言快く善哉なり、　肉を以て皆相ひ施さむ。

時に、獵師、其の志す所の言辭の麁細に隨つて各肉を分ち與へぬ。時に、天、頌して曰く、

一切男子の辭、　柔軟其身に歸す、　是故に麁言する莫れ、　褒利身を離れず。

爾の時、佛、諸の比丘に告げたまはく「第一の麁辭なるは則ち所欣釋子、第二人とは跋陀和梨、

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞の祇樹給孤獨園に遊び大比丘衆千二百五十人と倶なりき。所欣釋子、遊至する所多し、出入節無く詣る所の門族稱て計ふ可からず。或は晨に或は冥に、或は早く入り冥くして出づ。

時に阿難、優陀、薄拘盧等一處に合會り。所欣釋子に謂ひて曰く「賢者よ、何の爲に而も多く行來し時節を知らず。何ぞ時に出でて時に入らざる。詣るの處自ら節量せざる」と。所欣釋子、尋いで衆賢を罵り麁獷の辭を出す。卿等無智にして擾擾搖動す、自ら安ずる能はず。喧呼[一]し惡口す。卿等懈怠にして衆僧の爲めに興立する所有らず。吾、今、出入するは常に衆僧の爲めに當る所を嚴辦す。卿等、能く是の如き勞に任ふるや。諸の衆僧の爲めに辦ずる所有り耶、吾、多く事理有りと謂ふを得る勿れ。諸賢多務なること吾身所欣釋子より甚し、卿等、且く復合辦する所有り吾衆僧の事を辦ずる何如がたるを知れと。

時に、諸の比丘、同じく共に意を發す。彼の時三人、言語柔軟にして威德殊妙なり、本の福行に依り獲致る所多く、彼よりも過踰ゆ。所欣釋子、鈍愚の男子、卒暴の決を以て愚騃自ら用ひ、强いて求むる所有り、志の如く得ず。一異天有り、長者の家に詣り、大甖[二]に滿つる若干の供養を得たり。賢者、阿難、他の長者に詣り柔軟の辭を以てし、宿德賢强爲めに經法を說き其の家人をして歡喜踊躍せしめ從つて分衞を得、大いに供養を獲たり、意の施す所に隨ひ、强ひず求めず。時に、諸の比丘、往きて佛に啓し具に本末を說けり。

佛、諸の比丘に告げたまはく「此に於ける四人は但、今世のみ功を諍ひ分衞せず。唯、一人のみありて、獲る所薄少にて餘人は多くを得たり。阿難比丘、衆人に勸助し一切安き所なり。

往古、久遠計る可からざるの時、他の異土に於て時に四人有り、以て親厚を爲す。相ひ斂聚[三]し會り、共に一處に止る。時に獵師有り、射獵し鹿を得たり。來りて城に入らむと欲し各共に識りて

【一】喧呼。さわがしくいふ。

【二】大甖。大がめ。

【三】斂聚。相ひあつまること。

の諸の菩薩佛の聖旨を承け各自說いて言く「諸佛は盡く聽く、諸佛世尊の所行量り無し。極めて大變化す。其の本相に隨つて諸法を曉了り一切皆知る。諸佛は超異にして都て[二]陰蓋無し。諸佛世尊は普く法界に逮び法界に入る。諸佛の世界は無所有の處にして罣礙する所無し。何をか十と爲すや、[三]兜術天に在り、現に壽命を盡し忽ち沒して能く禁制する無し、亦處有ること無し。母腹中に入り十月にして生る。又家を棄捐てゝ樂みて外に出づ、心、常に欣悅し[四]佛樹下に坐す。一切諸佛の法を積累す。一時の頃に普く諸の佛土示現す。如來の感動、瑞應常に法輪を轉ず。悉く德本を殖え分別し解說す。當に佛を得たらむ時に當つて具に菩薩を成じ而して法を以て成す。諸佛世尊、永く住處無し。在在の智慧而も之を建立す、是を佛子と爲す。處所有ること無く亦所住無し。

復次に佛子よ、諸の世尊に十教目有り、何等か十とす。一切を教化し諸度極り無し。皆一切諸の無智の法を除き、常に大哀を修す。十種の力有り普く法輪を轉ず。[五]群黎を教化し衆生を禁制し平等覺を成す。[六]萠類を開通し所住なからしむ。此に於て行相無き法自ら歸す。已に寂然を得たり。亦他人の覺滅度に至るを教ゆ。是を十と爲す。復次に、佛子、復十事有りて疾く如來を見る。何等か十とす。適諸佛に見え則ち衆生を視る。便ち一切を棄つるは諸の歸趣する所なり。要を取り之を言へば速疾に福德の眷屬を具足し速に諸德の本を受く。卽ち、清淨を得短乏する所無し。便ち、狐疑を除く。適諸佛に見え衆生等の爲に大乘を示す。畏る所無からしめ、尋いで成就を得、不退轉と爲る。適諸佛世尊に逮見するを得て疾く衆生の源を分別するを求めて而して之を開度す。便ち世を逮度し衆生の根を淨む。適、諸佛世尊に逮見するを得て便ち弊礙無し。是を十と爲す」と。佛、說きたまふこと是の如し。諸の菩薩、經を聞き歡喜せり。

第二十三、佛、所欣釋を說く經

【二】陰蓋。色聲等の有爲法は眞理を蔭覆するよりかくいふ。

【三】兜術天。兜率天、欲界の天處彌勒菩薩の居らるゝ天處。

【四】佛樹。菩提樹。

【五】群黎。衆生。

【六】萠類。衆生。

卷の第三

第二十二、佛、總持を説く經

聞くこと是の如し、一時、世尊、摩竭に遊び法閑に在ること常の如し。佛、道樹に之き初めて成道の時萬の菩薩と倶なりき。一切成就せり。普賢菩薩【一】無願を行じ其の行餘り無し。及び空無菩薩・蓮花藏菩薩・寶藏菩薩・行藏菩薩・妙聯菩薩・金剛藏菩薩・力士藏菩薩・無垢藏菩薩・調定藏菩薩・一萬の菩薩と倶なり、一萬の世界三千大千塵數の菩薩と倶なりき。各各異なる佛國より此所に來會す。方に從つて師子座に來化し佛足に稽首す。佛前に在り師子座に坐す。時に此等の菩薩大士吾我を計らず清淨無瑕なり。各心に念じて言く「此に於て何に因てか不可思議なる。諸佛世尊の所有境界は能く稱量る無し。諸佛、世尊の本願ふ所も殊特有り、何に因て諸佛如來は感動し給ふや。何をか所爲不可思議無罣礙の行と謂ふ。云何か世尊、無念無想にして此の殊特を致し給ふ」と。時に、世尊、尋いで此等の諸の菩薩の心の念ずる所、(即ち)諸坐の菩薩の諸佛の處無く、亦住せざる無く、如來諸佛の威神一切光明を問はむと欲するを知りたまふ。佛威神の德、精進踰ること無く而して皆立つを得。皆、諸佛の諸の總持法に入り、廣大の聖覺是等の入る所なり、殊特此の如し。罣礙する所無く身の入る所も亦皆此の如し。諸佛の眷屬は諸瑕を棄捐て諸佛の法は而も獲る可からず。而して常に安穩なり。

時に、蓮華藏菩薩、諸法の趣く所の心に入り罣礙する所無し。所念の法門、諸の弊礙無く、諸の菩薩の行は普賢の願を爲す。合集等の行は正に願に住し諸佛の法に入り、十方の佛に見え大哀を加ふ。無極を度し衆生を降伏し惡趣を休息す。一切の菩薩、諸の三昧定にて本際を視る。諸佛の慧は所行無盡にして歸伏せざるは莫し。諸の道慧に趣き皆總持を照し諸度の蓮華の藏を分別す。其

【一】無願。諸法に於て願樂する所なきをいふ。

選ぶ所無きの句、安穩の句、擁護の句、諸〻の衆人に於て嬈さるゝこと無きの句、害せらる無きの句、禁制の句、諷誦者の句なり、四部衆の爲に則ち擁護を設け人と非人と犯す能はざるなり。若しくは臥し出づる時、在る所の寤寐に敢て嬈す者無し。況んや佛の說く所なり。其れ此の呪を聞かば安穩ならざる莫し」と。佛、說きたまふこと是の如く歡喜して去れり。

今は天王よ、當に共に鎧を被るべし、諸の群從を將ゐ暫し兵衆を勅へよ。譬ば菩薩の初めて樹下に坐するが如し」と。魔、鎧甲を被、諸の兵衆と佛の所に往詣せり。是に於て世尊、阿難に告げて曰く「是の大女神・設陀羅迦醯、雪山の南に止り五百の子と倶なり。適に如來の是の神呪・總持印呪を說くを聞き恐怖し懅を懷き衣毛爲に竪つ。諸魔の一切官屬及び餘の衆魔に及ぶ。時に彼の魔其の鎧翰[三]を被て眷屬と倶に世尊に往詣り。惡心にて沙門瞿曇に詣らむと欲す。彼の時菩薩有り、名づけて降棄魔と曰ふ。魔及び官屬を降し還りて佛の所に詣り、聖足に稽首し叉手して佛に歸し、世尊に白して言く「我、已に此の弊魔及び諸の官屬の諸兵を發遣するを攝制し、幷に設陀迦醯大女神をも之を制伏せり。敢て非を爲さず、亦敢て嬈さず。比丘・比丘尼・淸信士・淸信女、敢て害に中らず、妨廢する所無し。善き哉、世尊よ、願くば總持の法印を說き四輩衆の爲めに皆擁護を得せしめ安穩を得せしめよ、唯、佛よ、哀を加へ普く人民に及び安穩を得せしめよ。」と。是に於て世尊、是の神呪の爲めに時に應じて欣笑せり。阿難、佛に問ふやう「世尊、何の故に笑ひたまふや、笑當に意あるべし」と。佛、賢者阿難に告げ給ふやう「汝、寧ぞ降棄魔菩薩の道行殊特にして魔の官屬を降し、設頭迦醯大女神技術皆以て壞敗し心憂慼を懷き彼に於て忽然として沒して現れず。斯に到つて是の總持の印を說くを見るや」と。爾の時、世尊、此の總持印王、一切諸惡の鬼神及び諸の妖魅を攝伏し一切の嬈を除くを思ひ給へり。

伏鳩伏鳩、休浮木樓阿祇提、是の如きは總持印王の呪なり。其れ、鬼神・女神・鳩桓[四]・龍・金翅鳥・及び諸の弊獸、一切の衆魅有り、至意意有り道に在て他を斷ち來りて食と爲さむと懷ふ。何の爲に甘嘗を跡ね、月の動搖の爲に善く震動する意を心と爲す、何ぞ況んや細微にして微ならざることと無きものをや。其れ大德の總持は無擇無冥にして所斷無し。其の心其の十事を誦し、讀みて今に於て笑ふなり。所作すべき者も亦選ぶ所無し。」と。佛、阿難に告げたまはく「是れ無擇の句、總持の句、

【三】鎧翰。鎧、よろひ、翰、はね。

【四】鳩桓。梵名、Kupana. 鬼の名、譯、大身。

第二十一、佛說吉祥呪を說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衛城に在しき。是を名づけて轉法輪と曰ひ能く踰ゆる者無し。是の地廣普なり。若し嬈す者有らば佛皆之を說く。今、講誦に當つて大人・聖賢具足して彼に歸す。時に佛、賢者阿難に告げたまはく「吾、汝の爲に神呪の王を說かむ。汝、當に之を持つべし。諸佛の說き給ふ所なり。至誠の行、趣道の行、[一]十二因緣の行・月行・日行・賢者の行・日月俱行、諦に聽け、善く之を思念せよ」と。阿難、言く「教を受けて聽かむ」と。是の如し。

休樓、牟樓、阿迦羅、錍羅、莫迦垣羅陀提、波羅鈴波芻阿尼呵、耶提阿尼、耶提阿提邪提遡締末諦盧盧羅陀提摩那羅羅波夷吒。

無量の總持、[二]諸印の王にして諸佛の說き給ふ所なり、至誠の行と爲し、修道の行、平等跡の行、日行、月行、日月の行と爲す。佛、阿難に語りたまはく「此の總持の句は佛の句と爲し、尊上の句と爲し、學句、聖賢の句、利義を得る句、懷ふ所のもの丶來る句、兵仗無き句と爲す。若し族姓子、族姓女、若し此の句に入らば無數解の百千の門に入る。能く分別して說かむ」と。佛、阿難に告ぐ「雪山の南脅に大女神有り、設陀憐迦醯(晉に攝聲と名く)と名く。五百の子及び諸の眷屬有り、彼、此の經を聞き卽ち自ら起ちて往き聲を擧げて怨を稱ふ。嗚呼、痛しき哉、嗚呼、何ぞ以て劇しや、吾が身本時、千、百の衆生の人精を取り以て飮食と爲し命を害し之を服しぬ。今に於て堪へず、復び犯すこと能はず、沙門・瞿曇・四部衆の爲めに而も擁護を設く。所以は何ぞや、若しくは善男子善女人、是の神呪を受け、童男童女、郡國縣邑聚落に入り是の吉祥呪を持ち若し諷誦して說かば能く嬈る者無し。所以は何ぞ、今、沙門瞿曇說く所の神呪は非人を遣逐し衆患を滅除し常に此に住すと。而して魔宮を現はす。諸の弊魔、言く、天王よ、知るを欲す。沙門瞿曇、以て汝の界を空ず。

【一】十二因緣。十二緣起ともいひ衆生が三世に渉りて五道を輪廻する次第因緣を說きし數。

【二】印。印契、印相といひ、指の先にて種々の形をなし以て法德の標幟となすもの。

第二十、佛、諸の比丘を護る呪を說く經

聞くこと是の如し。一時、世尊、[一]摩竭の[二]羅閲祇城の東に遊び奈樹の間に在しき。梵志、比丘聚る。是より北[三]鞞提山中の天帝石室に上る。

爾の時、無數の比丘各各馳走し怱怱として安からず。捕魚師の網を布き魚を捕ふるに魚都て馳散するが如し。世尊、遙に無數の比丘各各馳散し擾擾として安からざるを見、佛、比丘に問ひたまはく「何の爲に馳散し擾動すること斯の如く魚の網を畏るゝが若きや」と。比丘、對へて曰く「我、患に遭ひ所在安からず。諸の賊盜・鬼神・[四]羅刹・諸象、及び龍・餓鬼・師子、及び諸の[五]妖魅・鬼魅・[六]非人・熊・羆・諸邪・滿邊の[七]溷鬼・蠱道の[八]巫呪に遇ふなり」と。佛、比丘に告げたまはく「當に汝の爲に說くべし。常に當に一切を救濟し擁護すべし。諦に聽き善く之を思念せよ」と。比丘、答へて曰く「唯、然なり、教を受けむ」と。佛、言く「何等か、一切を救濟し擁護を爲すや、是の如し。

阿呵彌、迦羅移、噎隷噎隷、般鞞、阿羅鞞、摩丘、披賴兜、呵頭沙。翅拘犁、因提隷者、比丘披漚羅須彌者、羅難樓在者、羅阿耆破耆、阿羅因阿羅耶、耶勿遮坻鞞移阿鞞。

若し解脫せずむば我當に勸解し其の爲めに擁護し救濟し安吉祥、患無からしむべし。若し賊・鬼神・羅刹・蠱道・符呪あるも四百里の周匝を護り敢て嬈す者無し。其れ恭順ならずして是呪を犯す者は頭七分に破る所以は何ぞや」佛、比丘に告げたまはく「今、吾、普く天上・世間を觀るに若し是の如く呪すれば呪願擁護し終に恐懼無く衣毛竪たざるべし。其の宿命に南無と請はざるを除く」と。世尊の呪し給ふ所の者吉にして梵天是の呪を勸助せり。

【一】摩竭。梵名、Magadha. 中印度摩訶陀國のこと。
【二】羅閲祇。梵名、Rājagṛha. 摩訶陀國の都城、王舍城。
【三】鞞提山中天帝石室。Vedisagiri? Vepulla 山 Indrasālaguhā.
【四】羅刹。惡鬼。
【五】妖魅。ばけもの。
【六】非人。人に對して天龍八部及び夜叉、惡鬼の冥衆を總て非人といふ。
【七】溷鬼。溷は犬、ぶたの瀕。
【八】巫呪。まじなひ。

姓子、汝をして當に見るを得せしめ及び聽聞せしむべし。如來の說き給ふ所の言教を護れ。我等も亦當に如來の說き給ふ所を奉受すべし、此の族姓子當に大義を成ずべし」と。

佛、摩夷亘天子に告げ給ふやう「卿、當に奉行すべし、今、言ふ所の如く是は則ち佛教なり」と。佛說きたまふこと是の如し。摩夷亘天子、淨居の諸天、一切の衆會、天・龍・鬼神・世人・阿須倫、經を聞き歡喜せり。

怨家は知識に像　而して強く親友と結び　諸の王の行ふ所多ければ、　則ち、土地に主たり。
其の國、大臣多くし　而して常に鬪諍を興し　當に爲に弊眼を造るべし。　是に於て說くこと是の如し。

陀飢梨尼、陀飽梨尼。
師比丘、跪羅陀、蔣偈陀、沙瑜投陀漚、阿夷比兜波、昧瘻翅那旃、跪離那波羅、翅提尼槃尼、尼披散尼、摩呵曇那㝹陀梨耶。

其是れ有り、我に於て空耗なるも所有る財寶之を逮得せしむ。若し過ぎ去らば則ち是の神呪を以て、當に手を以て授くべし。其の手足を重ね、膝を擁護し、臏を重ね常に皆重ぬるを見るべし。爲に脅を重ぬるを見、下をして重ぬるを見せしめ、頸をして重ぬるを見せしめ、心をして重ぬるを見せしめ、四部衆をして皆重ぬるを見せしめ悉く平等ならしむ、從つて來る處の風其の華を散す。

漚那提奴、漚那提陀、漚彌提屠、漚提屠取披韃陀、叱闍叱者。
朱陀闍陀、波沙提、波沙檀尼耶醯迦彌仇彌遮羅翅、朱羅鈴摩尼、阿提陀。
浮彌羨那伊兪羅頭、那翅祇裨彌、比闍裨彌、薩披那樓、彌檀㝹南模、摩迦尼阿裨比耶。
祝吉する所梵天をして勸助せしむ。

て逮はず、如來の教をして普く然く具足せしめよ」と。衆會、又、問ふやう「何をか世尊よ、佛心總持の法と謂ふ乎」と。世尊、告げて曰はく「今、次第して說かむ、垢無く垢を離れ一切の義を造す、皆、已に逮得し所作の諸の德邊際有ること無し。三世平等にして、一切十方、諸の慧を具足し一切を示現す、諸の所有る藏、諸の法自在に具足し成就す。所作通達し普く周匝を了へ一切を除く眼なり、皆三界に於て普く十方に至る。寂然憺怕諸の脫門を獲、法界を分別し猗著を究竟す。皆、一切諸の作爲する所を念じ餘心を超度し已に解脫を得、結轉の法を除き普く虛空に於て本性淸淨にして垢無く三處に勸化す、過去・當來・現在平等の三世斷除して餘り無し。所有を離れ第一に度證す。行ふ所言の如く所作成就す。一切大慈にして大哀を興し一切人に於て而も度する所無らむ」と。佛、天子に告げたまはく「是れ佛心總持の法と爲すなり。四輩の爲に說く、菩薩乘を求め其れ諷誦あらば懷はば身心に在り、諦に曉り識ることを了る。此の經を持する者諸の思想を懷ふこと譬ば如來立つて頂に在り、思はゞ則ち見ることを得るが若し。其れ能く見る有り、若しくは聞くこと有らば能く經法を說く　若し持する者有らば未だ曾つて忘るること有らず、學を究竟し當に復作することを得べし。道に於て作する所、經を說き寂然たり。故を以て經を講ず。持つ所は當に持つべし、未だ曾つて忽疑せず。是を以ての故に能く忍んで一切の聞く所を總持すれば得る所海の如く、

不起法忍[四]に逮る。一切の法に於て而して自在を得、罣礙する所無く解脫の門に至り、如意に具足し現在の法に於て我が法教に於て當に重任を受け、諸の重擔[五]を棄つべし。此の族姓子は則ち佛を見ると爲す。若し此等を覩たば當に從つて聽受し、當に其の法を觀ずべし、其の形を察する莫れ、毀呰して輕易すべからざるなり」と。摩夷亘天子、佛に白して言はく「唯、然なり、教を受け敢て違はざるなり、普く如來の命を宣佈すべし。然れば後世に於て是の經法を以て四輩の爲めに說き及び菩薩乘は當に分別を爲すべし、若し誦して得る有り、若し忘るゝ有らば當に開示を爲すべし。族

【四】不起法忍。無生法忍のこと、無生法とは生滅を遠離せる眞如實相の理體なり、眞智此の理に安住して動かざるを無生法忍といふ。
【五】重擔。煩惱。

長者、一切の問ふ所に報答ふることに應ずるが如し。寧に實に虛しからず、寧むぞ是實ならざらむ」と。答へて曰く「實ならざらむ。所以は何ぞ、大聖の說き給ふが如し。是に於て世間與ふる所實ならず、欲法悉く虛し。我、念ふに世尊よ、此の世俗の事、皆以て虛しく立つ、未曾有の法なり」と。佛、言はく「善き哉、善き哉、長者よ、假使し說くこと有らば世事皆虛し、悉く未曾有なり、則ち諸の佛の說なり。所以は何ぞ、世事、悉く虛しく一として實有ること無し。是に於て世間は皆未曾有なり」と。

佛の說きたまふこと是の如し、和利長者、敎を受け歡喜して退けり。

第十九、佛、佛心總持を說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞國に遊ぶ、濱近き大海の邊に近づき、その所行樹の師子座に於て無央數の諸天、眷屬とに圍遶せられて爲めに法を說き給へり。

彼の時、世尊、安詳として摩夷亘天及び淨居身天子に告げ給ふやう「諸の天子よ、當に知るべし、總持有りて佛心の法と名づく、過去の如來・至眞・等正覺の說き給ふ所にして四部會の爲なり、最も後世に於て救攝し擁護し自歸を得せしむ。普く特勝を獲、所生の到る處、一切義を護る。諸の菩薩大乘を學ぶ者の爲めに法恩を蒙らしめ普く至ることを得せしむ、一切の爲す所則ち超異有り、故を以て說く耳、今は諸賢、亦當に之を受け持諷・誦讀すべし、我が滅度の後最後の世の時四輩の衆會、大乘を學ぶ者、其の名を聞く者當に分別し說くべし。他人の爲に講ぜよ、心に忍辱を懷き、心に自在を得、其の音の難きを聞き說し其の名を致さば超異なる德性あり、如來の說く所にして復攝護す、已に願の最上にして、見る所自在あり、其聞かむと欲する有らば當に爲めに之を說くべし」と。衆會、對へて曰く「唯、然なり、世尊よ、當に聖敎を受くべし、佛の言ふ所の如く終に敢

【一】總持。陀羅尼の義譯にして一語、一句の中に總して一切の義趣を攝持する意。

【二】摩夷亘天(Maheśvara)。大自在天。

【三】淨居身天。色界第四禪の五淨居天の天子。

處時を知らざるを知るや」と。答へて曰く「唯、然なり、世尊よ、無常に歸し永く現ぜざるを知るなり」と。佛、長者に告げ給ふやう「何をか火種と謂ふ」と。長者、答へて曰く「溫煖の類能く人をして熱せしむ。消化する所有りて能く焚燒す、光焰の類なり」と。佛、言く「善き哉、長者よ、汝、乃ち能く火種の滅沒し復現ぜざるを知る耶」と。答へて曰く「能く無常盡に歸し現ぜざるを知る」と。佛、長者に告げ給ふやう「何をか風種と謂ふや」と。長者、答へて曰く「風に五事有り、寒冷の類、輕飄・駃疾・飄り吹く所有り、出入通ずるを得、諸の響聲有り、」と。佛、言く「善き哉、善き哉、爾、乃ち能く風種の忽然として沒し復、現ぜざる(を知る)や」と。答へて曰く「唯、然なり、世尊よ、能く風種の自然に盡くるに歸するを知る」と。佛、言く「善き哉、善き哉、長者よ」と。世尊、又、問ひ給ふやう「豈、其の種の寂聲を覩見ざるや」と。答へて曰く「唯、然なり、其の種の聲、平等にして稱ふ如きを知る」と。「其の四大魁、何所處と爲す」と。答へて曰く「猗欲・飲食・恩愛なり」と。又、問ひ給ふやう「其の四大魁、何所に倚ると爲す」と。答へて曰く「展轉相ひ依るなり」と。又、問ひ給ふやう「何所に趣くと爲す」と。答へて曰く「色と諸入に趣く」と。又問ひ給ふやう「諸入、何所に歸すると爲す」と。答へて曰く「罪の塵勞に歸す」と。又、問ひ給ふやう「何に因つて罪の塵勞有るや」と。答へて曰く「唯、然なり、世尊よ、其の識及び身各自別異し而して各離散す」と。又、問ひ給ふやう「命盡き身壞れて、何所に趣くと爲すか」と。答へて曰く「豈、趣く所有らむや、身に心意無く身と識と各別なり、」と。又、問ひ給ふやう「長者よ、續くに故識を以つてし趣く所に歸す。更に異識を得る耶」と。答へて曰く「唯、然なり、世尊よ、故識を齎らさずむば所趣に歸せむ。故識を離れず、亦異識無し」と。「云何が長者法を見る乎、」と。「譬ば世尊、眼識は非常にして耳識異有り共に合同せざるが如し、是の如く世尊よ、生死に沒す、是の如く見る所厭ふこと無し。而して以つて命を存す」と。佛言はく「善き哉、善き哉、長者よ、今、

【三】諸入。十二入のこと、新には十二處とす、色・聲・香・味・觸・法の六境と眼・耳・鼻・舌・身・意の六根をいふ。是等十二は心心所來門の意にて入といふ。

に施を興し　愛欲の諸の瑕穢を棄捐てよ。然る後、當に父母・妻子　親屬及び知友を求むべし、常に佛教を承け命に違はざれば、將に後世に値ひ就かざること無し。假使し疾病とならば父母・妻子　親屬及び知友を求め、救護せしめむと欲するも得る能はず、功德の智慧は後世に明かなり。

賢者、迦旃延、諸の比丘の爲に法を說くこと此の如し。比丘、歡喜し即時教を受けたり。

第十八、佛、和利長者、事を問ふるを說く經

聞くこと是の如し。一時、那難國の波和奈樹間に遊び大比丘衆五百人與なりき。

爾の時、和利長者、佛の所に往詣し足下に稽首し退きて一面に坐せり。佛、長者に告げ給ふやう「吾、汝に問はむと欲す、假使し魔及び魔の官屬、及び無央數の諸の外の異道來りて問はゞ時を以て答へよ、汝、諦に聽いて善く之を思念ふべし」と。「唯、然なり、世尊よ、願樂して聞かむと欲す、」と。是に於て長者　諸の大衆と與に教を受けて聽く。

佛、長者に告げ給ふやう「何をか大魁と謂ふ」と。長者、白して曰く「唯、然なり、世尊よ、大魁四有り、何をか謂ひて四と爲す、一に曰く地種、二に曰く水種、三に曰く火種、四に曰く風種、是を四大魁と曰ふ」と。佛、言く「何をか地種と謂ふ、」と。答へて曰く「謂く五事有り、立・堅强・不柔・麤擴、能く往返する者なり」と。佛、言く「善き哉、善き哉、長者よ、能く彼の諸の地種を解す、永く現ぜざるや不や」と。長者、答へて曰く「唯、然なり、世尊よ、我が身能く地種を知る。滅沒して知る可からず」と。佛言く「善き哉」と。復、問ひ給ふやう「何をか水種と謂ふ」と。答へて曰く「唯、然なり、世尊よ、水に五事有り、津液・通流・細滑・微碎・形貌有ること無し、猶し羅網の遍く諸脉に至るが如し」と。佛、言く「善き哉、善き哉、長者よ、汝、乃ち能く水種の滅沒し

【一】那難國(Nalanda)。

と雖も必ず復苦しみ極まり消化する能はず。虚空を捉へむと欲して白汗流出す、聲、雷鳴の如く惡露自ら出て身共の上に臥す。滅する處に歸し命盡き神去る。初めて野田に出し或は火之を燒く。身體・臭腐し識知る所無し。飛鳥の食ふ所となり、骨・節支解け頭項處を異にす。連筋節を斷ち消えて灰土と爲る。一切無常なり。是の時に當り身所に在りと爲すや、頭・足・手・脚何所處にありと爲すや。初始め死する時出して塚間に在り、父母・兄弟・妻子皆共に之を逐ふ。親厚・知識も亦復是の如し。啼哭・愁憂し悲哀・呼嗟す、胸を推し殟惘[四]す、葬埋し已訖り、各自還歸り亦救ふこと能はず。身獨り自ら之に當り棄捐てて地に在ること猶し瓦石の如し、聲・香・味を聞かず、細滑も亦見ず、色及び五欲と識知る所無し。是を以ての故に身の無常を知る。父母に孝順・供養し、沙門・諸の道士を恭敬し布施・持戒・齋肅・禁を守り行を修め起住・迎送・稽首して禮を作し、叉手して自ら歸せよ、今、諸の賢者、諦に省みて之を察せよ、當に無常・苦空・非身を念ふべし。是に於て偈を說きて曰く、

已に此の如き大恐怖を見る、　人身を計求するは甚だ得難し、　當に精進を行ひ頭火を救ひ諸の勤苦を除き大安に立つべし。　往古、佛の時値ひて閑はざりしも、　吾我を計ると放逸と莫く　此の無量の苦と生死の患と　地獄の酷に遇ふこと無きを得たり。　志 愛欲に在りて惡を爲すこと無く　諸の根本を伏するが故に此を說く　惡と諸想を念ふことを得ること無く寂然に至るを得て賊を壞る如し。　是れ我が所と念言ふことを得ることなく、　是に於て我無く亦吾も無し、　尊からずして自ら勢ありと謂ふを得ること無く　身の諸事を攝して其の心を伏す。　常に羞慚て身の時を知るべし　軀命を捐棄つるに著する所無し、　長夜惡趣に在るを得ること無く　愼みて此の爲めに是の患に遭ふこと莫かれ。　復、閻羅界に往至る勿れ　常に孝順にして二親に供ふべし、　功德を積累ぬるは後護の爲めなり、　是に因つて疾く賢聖の路を得。　衆安を求めて惡を犯す勿れ、　邪教を承け卒暴を爲すこと無かれ、　此を觀察し以一常

【四】殟惘。心悶ゆること。

塵垢を去る。燕處に處在るの德斯の如し。
佛、說きたまふこと是の如し、諸の大弟子・天・龍・鬼神・阿須倫、經を聞き歡喜せざるは莫し。

第十七、佛、迦旃延、無常を說くを說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、阿和提國[一]に遊び給ひき。

爾の時、賢者迦旃延、諸の比丘に告ぐるやう「諸の賢者よ聽けよ、一切合會せば皆當に離別すべし、復、安隱と雖も會ず疾病を致す。年少くも老ゆべし、復、長壽と雖も會ず死に歸すべし、朝露の花の如く日出でて卽ち墮つ、世間の無常なること亦復是の如し。年少く强健なるも常に存す可からず。譬ば日出でゝ天下を照し久しからずして則ち沒するが如し。是の如く賢者よ、合會すれば別るゝ有り、人に生死有り興盛なれば必ず衰ふ。一切の萬物皆無常に歸し、壞敗し盡に歸す、樹の果熟して尋いで墮つる憂有るが如し。萬物、常無く亦復是の如し。合會せば離る有り、興れば必ず衰ふ、譬ば陶家、諸の瓦器を作り、生者、熟者の壞敗せざる無きが如し。是の如く賢者よ、合會せば離るゝ有り、興れば必ず衰へ生れし者は死有り、恩愛は離別し、求むる所、慕ふ所意の如く得ざるなり。爾の時、則ち惡應・變怪の現ずる有り、其れ病現前せば諸根危熟し身疾病を得、命轉盡るに向ふ。骨肉消滅し已に安隱を失ふ、大困疾を得て懊惱言ひ巨し、體適困しみ極り水漿下らず、醫藥治らず、神呪行はれず、假使ひ解除するも復益する所無し、醫見ること是の如く尋いで退き捨てて去る。最後に命盡く。鞕軏[二]を至し殆危を與へ若しくは變を爲さしむ。命、盡きむと欲するの時則ち六痛有り、苦毒に遭ひ鞕軏の惱、衆患普く集る。已れ欲せざる所自然に來至す。轉氣を抒すに向ひ或は塞ぎて通ぜず、但、出氣有りて入氣有ること無し、出息も亦極り入息も亦極る。諸の脈斷たむと欲して好顏を失ふ。臥するも起きるも人を須ひ人常に飲まし飼はす、醫藥・糜粥[三]を得て之を含む

【一】阿和提國。梵名、Avanti. 西印度の國名。

【二】鞕軏。つよくむちうたるゝごとき苦しみ。

【三】糜粥。固きかゆと軟きかゆ。

其の香芬馥し柔軟人を悦す。音聲樹に在りて雅德を現ずるや。是に於て比丘よ、明日其の衣鉢を從へ聚落に入り、若しくは異國に在り樹下に處在る、是に於て明日、衣を著け鉢を持ち彼の國邑に入る。若しくは聚落に於て其の手足を洗ひ燕處に獨り坐し結加趺坐す、身を正しくし形を直くし心を安じて前に在り。則ち世を觀じ一切は無常なりと。心に自ら念言ふやう「假使し吾が身、漏盡き意解けなば乃ち坐より起たむ。輙ち、言ふ所の如く諸の漏盡きずんば坐より起たず。比丘よ、是の如く音聲叢樹に在らば則ち奇雅を現ず」と。時に世尊、而も偈を說きて曰はく、

博く聞き法を持つは微妙最たり、　經典を分別し法の義を解し、　無央數の爲めに而も講說し、
閑居に志有りて獨處を樂しみ、　內に自ら身を觀じ外に勸化し、　執御、禪を樂しみ身に自ら行ず、
世尊より博く聞ける敎を遵修し、　燕處、若しは樹下に在有り。　其の目清淨にして著する所無く
身の病四百四を蠲除す　・衆生の若干種を視見る、　樹間に燕處する德斯の如し。
譬ば師子の山居に遊ぶが如く、　閑居に獨り處し寂靜に猗る、　止足・解脫類に隨つて敎へ
燕處に處在る德斯の如し。　若くは天上、及び梵宮に在り、　若くは[10]揵沓恕、及び人間
普く能く彼に至り礙ぐる所無し、　燕處に處在る德斯の如し。　淨妙の智慧普く人を解し　心、自在にして諸根の定を得、
一切知足し諸の惡を棄つ　燕處に處在る德斯の如し。　是の如く上人微妙を說き
各各法を講じ所知に隨ふ、　演ぶる所善哉上義に順ひ　世尊に往詣し說く所を叙ぶ
其れ天中の天、廢礙無く　音聲梵の如き寂志尊　其の諸の神通普く平等にして、
尊師、時に應じて慧門を開けり。　彼の時、世尊を除雲と曰ふ　此に因つて敎を興し吾が言を聽く、
諸の比丘應ずる所の行の如く　樹間に燕處せば志奇雅なり。　諸の微妙多少の求を貪ぼり
最勝に其の心行を分別す、　衣を著け鉢を持ち威儀則へ、　其の行、鳥の虛空に遊ぶが如し。
其れ能く此の如き妙を修する有り　聖は嫉を興さず害を懷く無し　寂然に至るを得て

【10】揵沓和。梵名、Gandharva. 尋香と意譯し、樂神。

善き哉、善き哉、離越よ、若の說く所、所以は何ぞや、假使し比丘、閑居に在らば其の行寂然、其の心清淨にして空無を分別す。

善き哉、善き哉、阿那律、爾の說く所、所以は何ぞや、今、卿の天眼、三千大千の佛國を覩見すること高樓の上に於て察して下に在るを見るが如し。

善き哉、善き哉、須菩提よ、能く空法を解說す。空を以て本と爲す。

善き哉、善き哉、迦旃延よ、爾の說く所、所以は何ぞや、汝、四諦を見て復狐疑無し。

善き哉、善き哉、牛呞よ、爾の說く所、所以は何ぞや、生死の苦を畏れ泥洹を樂しむ。

善き哉、善き哉、邠耨よ、經義を分別し、佛典を演說す。

善き哉、善き哉、優波離よ、罪福を分別し、法律を奉修す。

善き哉、善き哉、離垢よ、三毒の罪を去り、[九]三脫の門を得。

善き哉、善き哉、名聞よ、善德を清淨にし幷に衆人を化す。

善き哉、善き哉、羅云よ、禁戒を守護し違犯する所無し。

善き哉、善き哉、大迦葉よ、樂しみて閑居に在り、他に閑居を勸む。十二事を以て常に自ら身を修め亦他人に勸む。

善き哉、善き哉、目犍連よ、大神足量り無きを得、大尊自在なり、一を分つて萬と爲し、萬、還び一に合す。能く日月を捫摸し、身梵天に至る。

善き哉、善き哉、舍利弗よ、明旦・日中・日入り・人定り夜半・後夜、禪定三昧常に自在を得、長者の子、沐浴し衣を著け寶瓔珞を以て晝夜三時意の服する所を恣にす。

佛、諸の比丘に告げたまはく「汝等各知る所を說く、皆快く法に順ひ違錯する所無し、復、吾が言を聽け、云何が比丘、音聲叢樹に在り快樂と爲すや、威神巍巍として華と實と茂りて盛なり、

【九】三脫門。空・無相・無願の三無漏定をいふ、解脫(脫)とは涅槃なり、無漏は能く涅槃に入る門なればかく名く。

爾の時、目連、舍利弗に問ふて曰く「卿の意は云何、音聲叢樹に在りて快樂を爲すや不や、威神巍巍として華と實と茂りて盛なり、其の香芬馥して柔軟人を悅す、云何が音聲叢樹に在りて雅德を現ずるや」と。舍利弗、答へて曰く「假使し比丘、心を制すること自在にして身の教に隨はず、自ら其の室に於て三昧正受し、發意の頃、明旦・日中・日冥、意を定め心を一にし人定まりて夜半・後夜自由に行ずる所常に自在を得、罣礙する所無し。譬ば長者の如く、尊者の子の若し、淨水にて洗沐し新しき好き衣を著、所有るもの具足し少しも乏しき所無し。其の欲する所に隨ふ。何の衣・衆寶・瓔珞・香花・伎樂を得むと欲し、明晨・日中・夜に向ひ止らむと欲する所に處り、衣裳・服飾・臥起の床榻悉く自在を得るなり。是の如く目連よ、心を制し亂意に隨はず明旦・日中・闇冥人定り夜半・後夜、其の欲する所に隨つて禪定三昧し其の觀ずる所に隨つて皆自在を得。比丘、音聲叢樹は則ち奇雅を現ず」と。

爾の時、賢者舍利弗、目犍連に謂ふやう「賢者、已に說く、吾等の類各志を言ふを盡くす。其の辯才に隨つて各其の意を宣べたり。寧、倶に佛、大聖に往詣りて此の事を啓し說く可し。佛の說き給ふ所の如く吾等當に奉行すべし」と。目連、答へて曰く「唯、命是れ從はむ」と。是に於て舍利弗、前みて世尊に白すやう「我等の類各知る所を演ぶ。今、故に啓白す。其の理を得るや不や」と。

是に於て世尊、舍利弗に語り賢者阿難を讃し給ふやう「善き哉、善き哉、阿難の說く所や、所以は何ぞや、比丘、博く聞き則ち持して忘れず、若し法を說くことあらば初め善く中善く竟り善し、其の義を分別し微妙具足し梵行を淨修し能く此を分別す。是の如く法に倣ひ博く聞き普く達す、之を覩ること自在なり、其の心淸淨にして諸根を降伏し皆能く曉了る。則ち四輩の爲めに粗略して要を擧げ經典を演說し各所を得しむ。

丘、天眼三界を徹見し一の罣礙無し。音聲叢樹の間に在らば則ち奇雅を現ず」と。

舍利弗、大迦葉に問ふて曰く「卿の意、云何、音聲叢樹に在り快樂と爲すや不や。威神巍巍、華と實と茂りて盛なり、其の香芬馥し柔軟人を悅ばす。云何が比丘、音聲叢樹に在りて雅德を現ずるや」と。迦葉、答へて曰く「唯、舍利弗よ、假使し比丘、自ら閑居に處して人に閑居を勸め、自ら賢聖を修して人に賢聖を勸め、自ら弊衣を服して人に弊衣を勸め、自ら止足を知りて人に止足を勸め、自身少しく求めて人に少しく求むることを勸め、自身寂然にして人に寂然を勸め、自身精進して人に精進を勸め。自身心を制して人に心を制するを勸め、自身定意し人に定意を勸め、自身專修して人に專修を勸め。自身戒を具へ、三昧・智慧・解脫・度知見・慧(を具へ)人に勸むることも亦然なり、自身敎化し衆人を勸發し法義を聽受し開化し經を說き法に於て厭ふこと無し。人を勸むるも亦然なり。是の如く舍利弗よ、比丘、音聲叢樹の間に在れば則ち奇雅を現ず」と。

又、舍利弗、大目揵連に問ふやう「卿の意は云何が音聲叢樹に在りて快樂と爲すや不や、威神巍巍として華と實と茂りて盛なり、其の香芬馥し柔軟人を悅ばす、云何が比丘、音聲叢樹に在りて雅德を現ずるや」と。目連、答へて曰く「唯、舍利弗、假使し比丘大神足を得れば威聖量り無し、普尊自由なり、其の神足に於て念ずる所自在なり、變化に於て無央數の形を示現し能く一身を變じ計る可からざるに至り、則ち還び一に合す。此の牆壁・山藪・谿谷に於て通過礙げ無く無閒より出でゝ無孔に入り、地に入りて復出づ。譬ば水に入るが如し。水を履きて溺れず、陸地を行くが若し。虛空に處して[七]結加趺坐す、若しくは飛鳥の如し。身より光燄を出し大火聚の如し。身中水を出すこと猶し流泉の如し。其の身濡はず。今、此の日月、威神光光として天下を照す。地より手を擧げ日月を[八]捫摸す。大きく其の身を化して梵天に至る。是の如く舍利弗よ、比丘、音聲叢樹の間に在れば則ち奇雅を現ず」と。

【七】結加趺坐、佛陀の坐法、趺(足背)を左右の髀上結加して坐すること。

【八】捫摸。つかむこと。

の所に往詣り、手に涼扇を執り舍利弗の所に詣る。「所以は何ぞや、今日、且く當に舍利弗に因つて法を講ずるを聞くを得べし、大弟子と一と時心を同じくせむ」と。

時に、舍利弗、大弟子を見、尋いで以て賢者阿難を勞賀[五]す、「善く來りぬ、阿難よ、能く自ら枉屈[六]せり、佛の侍者と爲り世尊に親近し聖明の教を宣ぶ。當に心に疑を懷く所の疑を阿難に問ふべし。音聲叢樹は甚だ樂しみ爲すや・威神巍巍として華と實と茂りて盛なり、其の香芬馥し柔軟人を悅ばす。云何が比丘、音聲叢樹の間に在りて雅德を現ずるや」と。阿難、答へて曰く「常に時節を以て具足行を修し其の義を分別す、微妙を成就し梵行を淨修す、發起する所多く成就する所多し、博聞に至り言教を曉了り心意開解す。快見に處し諸の四輩の爲に經典を講說し粗要言を擧げ、諸の曠野・深谷の患を濟ふ、是の如く舍利弗比丘よ、應に音聲叢樹の間に在るべし」と。

時に、舍利弗、復、離越に問ふやう「卿の意は云何、賢者阿難の說く所辯慧猶し獅子吼のごとし、今は離越に問はむ、仁は此を視る、音聲叢樹快樂と爲すや不や。威神巍巍、華と實と茂りて盛なり、其の香芬馥して柔軟人を悅ばす、云何が比丘、音聲叢樹の間に在りて雅德を現ずるや」と。離越、答へて曰く「唯、舍利弗よ、假使し比丘閑居燕坐し獨處を樂しみ家想を除去して愛欲無くば衆人に在りて放逸せず、輕戲せず憺怕寂然として其の心亂れず、志、容行に在り。是の如きは比丘、應に音聲叢樹の間に在りて則ち雅德を現ずべし」と。

又、舍利弗、復、賢者阿那律に問ふやう「卿の意、云何む、音聲叢樹に在りて快樂と爲すや不や、威神、巍巍、華と實と茂りて盛なり、其の香芬馥し柔軟人を悅ばす。云何が比丘、音聲叢樹に在りて雅德を現ずるや」と。阿那律、答へて曰く「唯、舍利弗よ、假使し比丘、天眼・徹視し道眼清淨なれば天人を覩、三千大千の佛の國土普く見て礙無し。譬ば假の喩せば有眼の人高樓閣に上り上より下を視るに悉く所有る人民の行來・出入・進退・居止・屋舍を見るが如し。是の如く舍利弗よ、比

【五】勞賀。ねぎらふこと。
【六】枉屈。身を卑下して來りのぞむ意。

と無し。子の憂を以て狂亂し志を失ふ。門戸・中庭・街路を奔走し子を求む。願くば來りて我を見よ、當に何所に於て汝の形を覩るを得べきと。

時に、此の人其の門の路に隨ひ舍衞城を出でゝ祇樹給孤獨園に至り佛所に往詣り、默然として前に立つ。佛、其の人に問ひ給ふやう「汝、何を以ての故に本、其の心を制し、今は諸根變沒して常ならず、一四憔悴し羸極れりや、」と。其の人、佛に白して言はく「用爲ぞ我が諸根の變異を問ふや。所以は何ぞや、獨一子有り、家を擧げて愛重し敬愛せざるは莫し、之を視るに厭くこと無し。今、以て命過ぐ、子の憂を以て狂癡を發す。其の心迷亂し、軒窻及び門戸を開き子を求索む。願くば來り我を見よ、何の所に子を求めむ」と。佛、言はく「其れ人は恩愛に著し、別離せば則ち憂、啼泣・悲哀・憂惱の患あり、合會へば離るゝ有り、適愛する所有らば必ず惱患を致さむ」と。

爾の時、其の人、佛の語り給ふ所を聞き心中忽然として世の無常を了る。三世は幻の如し。即ち、佛に戒を受け稽首して退けり。

第十六、佛、比丘各志を言ふを說く經

聞くこと是の如し、一時、佛、一越祇の音聲叢樹に遊び尊比丘と倶なりき。一切の聖賢、諸通已に達し皆悉く耆年なり。其の名をば賢者舍利弗・賢者大目連・賢者迦葉・賢者阿那律・賢者離越・賢者二邠耨文陀弗・賢者須菩提・賢者迦旃延・賢者優波離・賢者離垢・賢者名聞・賢者三牛呞・賢者四羅云・賢者阿難と曰ふ、是の如きの比大比丘衆五百人なり。

爾の時、賢者大目揵連及び大弟子、天、明に向はむと欲し、坐より起ちて賢者舍利弗の所に往詣る。時に、舍利弗、遙に諸の大弟子の相ひ隨ひて來るを見、適此を覩已り、離越の所に至りて之に謂ひて曰く「離越よ、且つ大聖の衆來るを觀よ、諸の目連等なり」と。賢者離越、尋いで時に舍利弗

聖者の道なれば八聖道といふ、是れ見道位の行法なり。
【一〇】四部衆。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷をいふ。
【一一】緣起。一切の有爲法は皆相ひ緣りて生起してゐるものであるといふこと。
【一二】大颿。大法の意か。
【一三】無黠。無知なること。
【一四】憔悴。やせ衰ること。

【一】越祇國。梵名、Vargi. 巴利名 Vajji. 中印度の國名。
【二】邠耨文陀弗・富樓那尊者。尊者の母を邠耨文陀尼 Pūrṇa-maitrāyaṇī といひ、その子なれば邠耨文陀弗(Pu-tra)といふ。
【三】牛呞。佛弟子、憍梵波提の譯名。
【四】羅云。羅睺羅尊者、釋尊の一子。

頂一旦崩摧するが如し。是の如く阿難よ、舍利弗比丘は衆僧の中に在り今滅度を取る寶山の崩るるが如し。無常・壞敗・別離の法至らざらしめむと欲するも安んぞ意の如きを得む」と。佛、阿難に告げ給ふやう「猶し大寶樹のごとし、根・芽・莖・節・枝・葉・華・實・具足し茂ること好し。〔二二〕大觝卒に墮つれば則ち缺滅を現ず、之を視るも感無し。是の如く阿難よ、舍利弗比丘、衆僧に存在りて今滅度を取る。衆僧、感滅ず。應に滅盡すべき無常・衰耗至らざらしめむと欲するも豈得可けむや。是の故に阿難よ、今日より往 自ら身行を修め已に歸依を求むるもの、法を以て證と爲し經典に歸命し餘の歸を求むること勿れ、云何か比丘是の行を作すや、是に於て比丘は自ら身行を觀じ內外非我なることを當に自ら觀察し、其の心を調御すべし。諸の世間を觀ずるに皆 〔二三〕無黠に由る。內の痛痒を觀じ外の痛痒を觀じ內外我に非ずして善哉に入るなり。其の心を調御し世の無明を察し、內に其の心を觀じ亦外の心を觀ず、內外を得ずして善哉に入るなり。自ら其の心を調へ世の無黠を觀じ上日月を觀じ亦外法を觀じ、內外に猗らず善哉に入るなり。其の心を調御し世の無黠を觀ぜよ」と。佛、阿難に告げ給ふやう「是れを其の身行を修すると爲す、自ら歸依を求め法地に處せよ、法に歸命し他地に處せず餘人に歸せざれ」と。佛、阿難に告げ給ふやう「其れ、比丘・比丘尼・清信士・清信女、我從り教を受く、自ら其の身を修め自ら歸依を求めよ、法地に處し法地に歸し法に歸命せよ、他地に處らず餘人に歸せざれ、出家の比丘よ、佛弟子と爲り此の教に順ふ者は則ち佛の教に順ふなり」と。佛、說きたまふこと是の如し、阿難及び沙彌、諸の比丘衆、經を聞き歡喜し教を受けて退けり。

第十五、佛、子の命過ぐるを說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衛の祇樹給孤獨園に遊び給ひき。

爾の時、舍衛城の中に一異人有り、息男、命過ぐ、父母愛重し欲念せざる無し、之を視て厭くこ

け、覺法七種に分るれば支或は分と分る。修道に於て思惑を斷ずること此の七覺の力に依る。正に一、擇法覺支、二、精進覺支、三、善覺支、四、輕安覺支、五、念覺支、六、定覺支、七、行捨覺支をいふ。

【九】　八聖道行。八正道分、八聖道支ともいふ。其の道遍邪を離るれば正道といひ、又聖者の道なれば聖道といふ。一、正見、苦集滅道の四諦の理を見て分明なるをいふ、無漏の慧を體とす、是の八正道の主體なり、二、正思惟、旣に四諦の理を見て尙思惟して眞智を增長せしむるをいふ無漏の尊の心所を體とす、三、正語、眞智を以て口業を修むるをいひ無漏の戒を體とす、四、正業、眞智を以て身の一切の邪業を除き淸淨の身業に住するをいふ。無漏の戒を體とす、五、正命、身口意三業を淸淨にして正法に順ひて生活するをいふ。無漏の戒を體とす、六、正精進、眞智を發用して强め涅槃の道を修するをいふ。無漏の勤を體とす、七、正念、眞智を以て正道を憶念し邪念なきをいふ、無漏の念を以て體とす、八、正定、眞智を以て無漏清淨の禪定に入るをいふ。無漏の定を以て體とす、此の八法涅槃に至る

分別し說かば（三）四意止と（四）四意斷（五）四神足と（六）五根と（七）五力と（八）七覺意と（九）八聖道行となり。佛の現に信ずる所なり。汝、今に於て舍利弗比丘の又般泥洹するを見、而して反つて愁感し涕泣し悲哀し自ら勝ふること能はず」と。賢者、世尊に白して曰く「舍利弗比丘は、戒・定・慧・解脫・知見品を齎持せずして滅度し去れるなり、世尊は是を以て斯の法を分別し最正覺を成じ、分別して說き給ふのみ、四意止と四意斷・四神足・五根・五力・七覺意・八聖道行となり。亦、此を齎さずして滅度せしなり」と。阿難、佛に白さく「唯、然なり、世尊よ、舍利弗比丘は戒の眞諦を奉じ妙辯才有り。法を講じ厭ふこと無し、其の（一〇）四部衆之を聽くも倦まず、之を說くに懈らず、多く勸助する所未だ解せざるを開化し心をして欣豫ならしめ命を奉ぜざるは莫し。節を知り足るに止まり常志精進し志常に定り止まる。大聖智、無極の慧有り、卒に問ふに之に對ふ。言辭機に應じて發遣す。博達能く了し普に尋いで答へ報ふ。一切能く通じ、智慧寶と爲し衆德具足す。舍利弗比丘の巍巍たること是の如し。故を以て舍利弗比丘、滅度を取り去るを見て愁憂・悲哀し心・感慼を懷き自ら勝ふること能はざるなり」と。佛、阿難に告げ給ふやう「生るゝ者は世に在りて、安んぞ久しく存す可き、諸の思想・（一一）緣起の法有り、必ず、當に歸盡すべし、壞敗永く沒す。法は當に崩敗すべく、法は應に壞るべし、爾らざらしめむと欲すも終に得べからず。」と。佛、阿難に告げ給ふやう「佛、本、自ら說き給ふ。一切の恩愛は皆當に別離すべし。夫、生るれば終有り、物成ずれば敗有り合すれば散ずる有り。應に滅盡・壞敗すべきを爾らざらしめむと欲するも安んぞ意の如きを得む。應に終沒し無常に歸すべき離別の法は散ぜざらしめむと欲すも安んぞ獲可けむや」と。佛、阿難に語り給ふやう「舍利弗の所遊の處は佛心則ち安し以て慮りを爲さず。應に別離すべき壞敗・無常は至らざらしめむと欲するも安んぞ獲可けむや、法起れば滅有り、物成ずれば敗有り、人、生るれば終有り、興盛は必ず衰ふ、應に無常なるべき別離の法至らざらしめむと欲するも未だ獲べからざるなり。譬ば大寶の山嵩高の

勤と名くは一心に精進して行ずる故なり。

【五】四神足。四如意足ともいはれ四種の禪定なり、定能く靈妙の果德を生ずる所依故に足といはる。欲如意足・精進如意足・念如意足・精進如意をいふ。

【六】五根。一に信根、三寶四諦を信ずること、二に精進根、勇猛に善法を修すること、三に念根、正法を憶念すること、四に定根心を一境に止めて散失せしめざること。五に慧根眞理を思惟すること、此の五法能く他の一切の善法を生ずる本となれば五根と名く。

【七】五力。五根增長して五障を治する勢力を有するもの、一に信力、信根增長して能く身の邪信を破するもの、二に精進力、精進根增長して能く身の懈怠を破するもの、三、念力、念根增長して能く邪念を破するもの、四、定力、定根增長して能く諸の亂想を破するもの、五に慧力慧根增長して能く三界の諸惑を破するもの。

【八】七覺意。七菩提分、七覺支或は七等覺支といふ。覺了覺察の義、心の定慧に據るを明かに見分けて偏に一方にかたよらしめず定慧均等ならしむる法なるが故に等覺と名

ち、已に永く眼色・耳聲・鼻香・口味・身觸・意法を除く。衆の德本を積み恭順和雅なり。是の如きの比像、我等之を觀る。沙門梵志、婬・怒・癡を離れ及び人に離ることを教ゆ。我等、今日、自ら、佛及び法・僧に歸(依)し[二〇]五戒を奉受し[二一]清信士と爲らむ」と。

佛、說きたまふこと是の如し。歡喜せざるは莫し。

第十四、佛、舍利弗の般泥洹を說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、王舍城の[一]迦蘭陀竹園の中に遊び給ひき。

爾の時、賢者舍利弗、那羅聚落に在り疾を得て困み劣へ寢ねて床に在り。諸の賢者沙彌と俱なり。時に、舍利弗、尋いで般泥洹す。侍者、諄那供養し奉事すること法の如く已訖り、鉢と衣服を取り王舍城に就むき竹林の間に到る。已に日[二]晡時燕處より起ち、鉢と衣服を取り阿難の所に至り足下に稽首し退きて一面に坐す。諄那沙彌、阿難に白して曰く「唯、然なり、仁は知るを得るを欲するや不や、賢者・舍利弗、已に滅度を取る。我、今、和上の舍利と及び鉢と衣服を齎持せり」と。賢者、阿難、諄那に報へて曰く「便ち、我と俱に佛の所に往詣し敬事し轡を修めむ。儻し世尊に從つて要法を聞くことを得む。」と。諄那、答へて曰く「唯、然なり、命に從はむ」と。阿難、諄那と俱に佛所に往詣し足下に稽首す。退きて一面に坐し叉手し佛に白すやう「我が身羸極まる。復、力勢無し。柔弱・疲劣、法を修すること能はず。所以は何ぞや、諄那(晉に碎末と言ふ。)沙彌、我が所に來詣し足下に稽首して我が爲に說きて言く、仁は知らむと欲するや、賢者舍利弗、已に滅度を取り幷に衣・鉢及び舍利を齎すと。」

佛、賢者阿難に告げたまはく「汝の意、諄那は、舍利弗比丘が戒品を齎らして滅度し、定品・慧品・解脫品・知見品にして滅度せりと念へりや。又、吾れ、是の法を了して最正覺を致せり。乃ち、

【二〇】 五戒。殺生・偷盜・邪婬・妄語・飲酒。

【二一】 清信士。梵語、Upāsaka. 三寶に歸依し五戒をうけたる在家の信者、四衆の一。

【一】 迦蘭陀竹園。梵名、Karaṇḍa-veṇuvana. 迦蘭陀長者の所有に係りもと尼揵外道に與へしを後に率て僧園と爲す。所謂、竹林精舍とはこれ。

【二】 晡時。午後二時。

【三】 四意止。四念處或は四念住ともいひ、一、身念處、身は不淨なりと觀ず、二、受念處、受は苦なりと觀ず、三、心念處、心は無常なりと觀じ、四、法念處、法は無我なりと觀ずるなり。

【四】 四意斷。一に巳生の惡に對して除斷の爲に勸めて精進す。二に未生の惡に對して更に生ぜざらしめんが爲に勸めて精進す。三に未生の善に對して生ぜんが爲に勸めて精進す。四に巳生の善に對して増長せしめんが爲に勸めて精進す。意中決定して之を斷行すればかく名け、普通、四正

者に告げ給ふやう「假使し人來り汝に問ふ者有り、『何の所の沙門か供養・奉事に當らざるや』と。答へて曰く、『及ばざるなり』唯、佛よ之を說き給へ」と。佛、言く、「其、沙門・梵志有り、眼妙色に著し、耳五音を貪り、鼻好香を慕ひ口美味を存し身細滑に猗る、諸の法に志し欲を捨てず。貪嫉・恩愛を志求し厭ふこと無し。梵燒之れ痛む。是の如きの比・沙門・梵志は供養・奉事・尊敬すべからず。」と。佛に白して言すやう「來り問ふ者有らば當に是を以て答ふべし、乃ち、善き義に合す。則ち法化に應ず。所以は何ぞや、我等、色・聲・香・味・細滑の法に著し、恩愛之れ著し貪求厭ふこと無し。斯の輩類[一五]五陰に迷ひ[一六]六衰に惑ふ。官爵・俸祿・財物・富貴以て懈惓せず、俗と別無し。是を以ての故に奉供して此等の類に順ずべからずと。佛、梵志長者に告げ給ふやう「假使し人來り汝に問ふ者有り、『當に供事・奉敬。尊重すべきは何なる所の沙門ぞ』と、梵志、當に云何がすべきやと。世尊に白して曰く「其れ、五陰・六衰・婬・怒・癡に著念せず、色・聲・香・味・細滑の念に[一七]習濟せず。斯れ等の德を積み溫雅・和順なれば、正に此の如きの輩の沙門梵志に供事すべし」と。佛、城裏の聚落の梵志長者に告げ給ふやう「汝等、何故に此の言を說くや、寧ろ比類有り、安んぞ沙門梵志の已に婬・怒・癡を離れ、又、人に離るゝことを教ふると及び色・聲・香・味・細滑、恩愛の著、心惱の熱、諸情厭くこと無きとを知らむ」と。佛に答へて言く「吾等、數沙門梵志を見る。端正殊に好し、色・聲・香・味・細滑の欲する所を捨てて閑居に處在り、若しくは樹下に坐し、[一八]塚間・曠野、諸の瑕惡を棄つ。志、求むる所無し。[一九]燕居獨り處る。彼は則ち永く色の痛み、想・行・識の諸法の念を除く。求を斷ち容を念ふ。常に此れ等の沙門梵志を察するに婬・怒・癡を離れ亦人に離るゝを教ふ。色・聲・香・味・細滑の念を捨つ。聽聞是の如し。斯を以て樂と爲す。恩愛の著永く以て除き盡す。可意の色欲、諸の慕求する所燿然已に離る。則ち時節を以て樂しむ所を供事す。五陰・六情亦復是の如し。我、此等の沙門梵志を觀るに閑居に處在り、若しくは樹下に坐し、塚間・曠野、獨りして燕處す。則

damaya-sārathi. 一切衆生を法にて導き調御し證入せしむる故に。
【一〇】天人師。梵語、Śāstā-devamanusyānam. 天と人とを教示する師の故に。
【一一】佛、世尊。梵語、Buddha-lokanātha. 佛とは覺者、世尊とは世に尊重せらる義。
【一二】六通。作用自在にして無礙なるを通といひ、六通とは、一、神足通、二、天眼通、三、天耳通、四、他心通、五、宿命通、六、漏盡通。
【一三】占謝。御體をのぶること。
【一四】揖讓。合掌して謙遜すること。
【一五】五陰。梵語、Pañca skandha. 新に五蘊と譯す、蔭とは積聚の義有爲法の自性を顯はす、一、色陰、二、受陰、三、想陰、四、行陰、五、識陰等をいふ。
【一六】六衰。色・聲・香・味・觸・法の六境、能く人の眞性を衰耗せしむる故にいふ。
【一七】習濟。なじむこと。
【一八】塚間。はかの間。
【一九】燕居。坐禪すること。

きやと。稽首し答へて曰く、實に爾く是なりと。王、曰く、卿の聰哲天下雙び無し。卿の願ふ所に隨ひ女を以て之に配し、夫婦と爲ることを得せしめん」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく「爾の時の甥とは則ち吾が身是れなり、女の父王とは舍利弗是れなり。舅とは調達是れなり。國王は父、[一六]輪頭檀是れなり。母は[一七]摩耶是れ、婦は[一八]瞿夷、是れ、子は[一九]羅云是れなり」と。

佛、是を說きたまふ時、歡喜せざるは莫し。

第十三、佛、閑居を說く經

聞くこと是の如し、一時、佛、拘留國に遊び轉り遊びつゝ大比丘衆五百人と俱なりき。稍、城の裏の聚落に至るに自然の好音有り、佛、其の中に頓し給ふ。

時に、彼の聚落に梵志の長者有り、無央數と悉く共に普く聞く。大寂志有り、姓を瞿曇と曰ひ釋種の子なり、國を棄て(佛となり)、城裏の聚落に轉り遊び大比丘五百人と俱なり。彼の佛、大聖にして名稱普く聞え流れて十方に遍く宣揚せざるは莫し。疑ふ者、[一]肅驚し戰戰、兢兢として欣戴せざるは莫し。號して[二]如來・[三]至眞・[四]等正覺・[五]明行成・[六]爲善逝・[七]世間解・[八]無上士・[九]導法御・[一〇]天人師と曰ひ[一一]佛、世尊と號す。則ち以て哀を加ふること天上・人間・諸の魔・梵天・沙門・梵志となり。天人を開化す。證するに[一二]六通を以てし三界に獨步し給ふ。說く所の經法初の語亦善く中の語亦善く竟の語亦善し、其の義を分別し微妙に諦を見、梵行を淨修す。斯の如き如來・至眞・等正覺を觀るを得るは善き哉、慶を蒙らむ。若し能く稽首し敬ひて道敎を受けなば功祚量り無からむ。と。

時に、梵志・長者、佛の所に往詣し足下に稽首し、卻きて一面に坐し敬ひ問ひ[一三]占謝す。叉手して佛に白す者、[一四]揖讓する者、遙かに見て默する者、卻きて一面に住する者あり、時に、世尊、梵志・長

【一六】輪頭檀。梵名、Śuddhodana. 淨飯、又は白淨と譯す、釋尊の父王。

【一七】摩耶。梵名、Māyā. 釋尊の母摩耶夫人。

【一八】瞿夷。梵名、Gopikā. 悉多太子第一夫人、耶輸陀羅姬。

【一九】羅云。梵名、Rāhula. 太子の一子羅睺羅をいふ。

【一】肅驚。嚴かに驚く。

【二】如來。梵語、Tathāgata. 如實の道に乘じて來り正覺を成ずる故に。

【三】至眞。梵語、Arahat. 一切の虛僞を離る故に。

【四】等正覺。梵語、Samyaksambuddha. 正しく等しく一切法を覺る故に。

【五】明行成。梵語、Vidyācaraṇa-sampanna. 智慧(明)と行と成就する故に。

【六】爲善逝。梵語、Sugata. 八正道を行じて涅槃に逝きたる人故。

【七】世間解。梵語、Lokavidū. 世間の有情、非情のことを解するが故に。

【八】無上士。梵語、Anuttara. 一切衆生の中に於て無上なる故。

【九】導法御。梵語、Puruṣa-

く者無し、飢えて餅の爐を過ぐ。時に餅を賣る者餅を授けて乃ち鳴くと。王、又、詔して曰く、何ぞ縛りて送らざると。乳母、答へて曰く、小兒、飢えて啼く、餅師、餅を授く、因つて之に鳴く、是れ賊と意はざるなり、何に因つて之を囚へむと。王、乳母をして更に兒を抱へ出て及び諸に伺候せしむ。兒に近く者を見れば便ち縛り將來せよと。甥、美酒を酤る。乳母と及び微に伺ふ者を呼び請ず。酒家に就きて酒を勸む。大いに醉ひ眠り臥す。便ち、兒を盜すみて去る。醒悟るに兒を失ふ。具に以て王に啓す、王、又、詔して曰く、卿等、[一四]頑騃なり、狂水を貪嗜し、既に賊を得ず、復、兒を亡失ふと。甥、時に兒を得て抱へて他國に至る。前みて國王に見え[一五]占謝し答對ふ。經を引き義を說く。王、大いに歡喜す。輙ち、祿位を賜ひ以て大臣と爲す。而して之に謂ひて曰く、吾が一國、智慧、方便あること卿に逮ぶ者無し、臣に女を以てめあわさむと欲す、若し、吾の女當に以て相ひ配すべしや。自ら欲する所を恣にせよと。對へて曰く、敢てせず。若くは王よ、其の實を哀まれよ、某國王の女を索めむと欲すと。王、曰く、善き哉、志願する所に從はむと。王、卽ち、名有り自ら以て子と爲す。使者をして往かしめ往きて彼の王女を求めしむ。王、卽ち、之を可とす。王、心に念言ふやう、續きて是れ盜魁ならん、前後狡猾なり。卽ち、使者を遣はし吾が女を迎へむと欲すと。其の太子を遣はし五百騎乘皆嚴整ならしむ。王、卽ち、外に勅し、疾く車騎を嚴かならしむ。甥、賊臣と爲り。卽ち、恐懼を懷く。心、自ら念言ふやう、若し彼の國に到らば王に必ず覺られ執へらるること疑はざるなりと。便ち、其の王に啓さく、若し王よ、遣はさるゝならば人馬五百騎をして衣服・鞍勒を具へしめ、一も差異なからしむべし。乃ち婦を迎ふ可しと。王、其の言を然りとす。卽ち、往きて婦を迎ふ。王、女をして飲食し客に侍り善く相ひ娛樂せしむ。二百五十騎、前に在り二百五十騎後に在り、甥、其の中に在り、馬に跨りて下りず。女の父、自ら出でて屢之を觀察す。王、騎中に入り、躬ら甥を執へて出づ。爾、是の非を爲す。前後方便し捕ふること何ぞ得回

【一四】頑騃。かたくなにておろかなること。
【一五】占謝。御禮をのぶること。

て送り來れ、と。是に於て外甥、將に【一〇】僮竪をして炬を執り舞戲するを教ゆ、人衆く總て鬧ぐ。火を以て薪に投ず、薪燃ゆること熾盛なり。守者、覺らず。具に以て王に啓す。王、又、詔して曰く、若し已に【一一】蛇維せば更に守者を增し嚴に其の骨を伺へ、來りて骨を取る者則ち是れ元首なり。甥、又、之を覺り、兼て、猥に釀酒し特に醇厚ならしむ。守備する者に詣り、微びて之を酤る。守る者、連宿飢渴す、酒宗を見て共に酤うて飲む。飲酒、過ぎること多く、皆共に醉ひて寐ぬ。【一二】俘囚、酒の瓶にて骨を受けて去る。守る者、覺らず、明、復、王に啓す。王、又、詔して曰く、前後警守し竟に級を獲ず。斯の賊、狡黠なり。更に謀を設くべし、と。王、即ち、女を出す。瓔珞・珠璣・寶飾に莊嚴りて房室に安立す。大水の傍に於て衆人をして侍衛し、非妄を伺察せしむ。必ず利色して女に來り趣く者有らむ。素り女を教誡し、逆へて抱捉を得、喚びて衆人をして則ち收執すべからしめむ。他日、異夜、甥、尋いで竊に來り、水に因つて株を放ち、流に順つて下らしむ。唱叫し犇急す。守る者驚き趣き、謂らく異人有りと。但、株杌を見る。是の如く連宿、數數變せず。守る者、翫習し睡眠して驚かず。甥、即ち、株に乘り女の室に到る。女、則ち衣を執ふ。甥、女に告げて曰く、用つて衣を牽くことを爲すよりも我が臂を捉ふべし、と。甥、素り猾黠なり。預め死人の臂を持ち以用つて女に授く。女、便ち衣を放つ。轉じて死臂を捉へて大いに稱叫ぶ。守る者の寤ること遲く甥脫走を得たり。明に具に王に啓す。王、又、詔して曰く、此の人、方便あり、獨り一に雙無し、久しく捕へんとするも得ず。當に之を奈何すべきと。女、即ち懷妊し十ケ月にして男を生む。男、大いに端正なり。乳母をして抱へ行き國中を周遍せしめ、人有り見て與に【一三】鳴喚する者有らば便ち縛り送り來れよと。兒を抱くこと終日なり。鳴喚する者無し。甥、餅師と爲り、餅の爐下に住す。小兒、飢えて啼く。乳母、兒を抱へて餅の爐下に趣く、餅を市ひ兒に餉ふ。甥、既に兒を見る。即ち餅を以て與ふ。因つて之に鳴く。乳母、還りて王に白して曰く、兒、行くこと終日たり、來り近

【一〇】僮竪。わかもの。

【一一】蛇維。荼毗、火葬のこと。

【一二】俘囚。とりこ。

【一三】鳴喚。口を鳴し小兒をあやすこと。

卷の第二

第十二、佛、舅と甥とを說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に遊び大比丘衆と倶なり。

佛、諸の比丘に告げたまはく「乃昔過去無數劫の時、姉と弟と二人あり、姉に一子有り、舅と倶に[一]御府に[二]給官し金縷・錦綾・[三]羅綺の珍好の異衣を織る。[四]帑藏中の琦寶の好物を見て貪意爲に動く、卽ち、共に議りて言く、吾、織作し勤苦懈らず、諸の藏物の好醜・多少を知る。寧ろ共に取り用つて貧乏を解く可しと。夜、人定りて後地窟を鑿作して官物を盜み取ること貲數ふ可からず。明、監藏者物の減少を覺え以て王に啓白す。王、之に詔して曰さく、廣く之を宣べて外人をして舅甥の盜者に知らしむること勿れ、謂へらく、王多事覺察する能はずと。後日に至り遂に當に[五]慴伏するも必ず復重ねて來るべし、且つ警守を嚴にし以て之を待て、得れば收捉し放逸せしむること無れ、と。藏監、詔を受け卽ち守備を加ふ。其の人、久久に則ち重ねて來り盜む。外甥、舅に敎ふるやう。舅、年尊く、體羸く力少し。若し守る者の爲めに得らるれば自ら脫るること能はず。更に、地窟從り[六]却行して入れ、如し見るを得せしめば我が力強盛なり、當に舅を濟ひ免れしむべし。舅、適窟に入る。守者の爲に執へらる。執る者、諸の守人を喚呼す。甥を捉へて制めず。明日の識るところとなるを畏れ輙ち舅の頭を截り窟を出てゝ持ち歸る。晨曉、藏監具に以て啓聞す。王、又、詔して曰く、輿にて其の尸を出し四交路に置け、其れに對つて哭いて死尸を取る者有らば則ち是れ賊魁なり。之を四衢に棄て、警守日を積む、時に遠方より大賈有りて來り人・馬・車馳せ[七]塡噎路を塞ぎ奔突し猥り逼る。其の人、[八]射鬧に兩車に薪を載せ其の尸の上に置く、守る者、明朝具さに以て王に啓す。王、詔するやう、微に伺へ伺ふこと[九]周密ならず、若し燒く者有らば收縛し

【一】御府。朝廷。
【二】給官。つかへること。
【三】羅綺。うすぎぬと綾絹。
【四】帑藏。かねくら。
【五】慴伏。おそれふすこと。
【六】却行。あとしざり。
【七】塡噎。ふさぎむせぶこと。
【八】射鬧。さわがしきこと。
【九】周密。あまねくゆきとどくこと。

り稽首して過を謝し還りて本國に到り續いて以て之を上る。王、即ち歡喜し、群臣、意解け、其の寵位に復す」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく「爾の時の王とは則ち吾が身是なり。四仙人とは〔一六〕拘留秦佛・〔一七〕拘那含文尼佛・〔一八〕迦葉佛・〔一九〕彌勒佛是れなり。其の梵志とは調達是れなり」と。

佛、說き給へり、爾の時、歡喜せざるは莫し。

【一六】拘留秦佛。梵名、Krakucchanda-Buddha. 過去七佛の第四佛に當る。
【一七】拘那含文尼佛。梵名、Kanakamuni-Buddha. 過去七佛中の第五佛。
【一八】迦葉佛。梵名、Kāśyapa-Buddha. 過去七佛中の第六佛、釋迦佛よりすぐ前の佛。
【一九】彌勒佛。梵名、Metteya-Buddha. 未來に出世し給ふ佛。

と。設使し見れば當に之を如何がすべきやと。答へて曰く、當に其の手足を斷ち其の耳鼻を截り、頭を斷ち腰を斬り五毒之を治すべしと。王、曰く、設使し見れば能く之を識らむやと。臣、曰く、不審なりと。王、寶屐を出し以て群臣に示し、梵志に出でゝ臣と相ひ見ゆることを命す。此の異寶を致る。當に共に之を原すべしと。群臣、啓して曰さく、此の梵志の罪山の如く海の如し、赦す可からざるなり。屐一隻を獻ずるも、何の[一四]施補する所ぞ。若し一緉を獲ば罪除く可きなりと。王、卽ち、之を可とす。重ねて梵志を逐ひ、更に一隻を求めしむ。梵志、懊惱す。吾、本、……嗚嗟、而も轉、劇を加ふと。故の主人に還る。主人、問ふて曰く、卿、何所に至り而して所從り來るやと。梵志、之を匿し敢て對へて說かず、云く、偶行きて還ると。則ち犂牛と奴子とを付して耕種せしむること前の如し。時に、梵志、奴子に問ふて曰く、汝、前の寶屐本何從り得たるやと。奴子俱に行き屐を得たる處を示す。水側に至り、遍に恣に之を求む。隻處を知らず。奴子捨てゝ去る。梵志、心に念ふやう、此の寶屐必ず上流從り來る。下り行きて之を求むるも得ずと。卽ち、流に逆つて上に行き、大蓮華を見る。流に順ひ波を廻らし、魚に之を銜む。其の華甚だ大なり、千餘葉有り、梵志、心に念ふやう、屐を得ずと雖も此の華を以て之を上らば儻ち過を解き復前の寵を得可しと。便ち、復、華を執る。則ち四仙人の樹下に坐するを見る。前みて爲に禮を作し起居を問訊す、聖體、萬福なりやと。仙人、曰く、然り卿は所從り來るやと。答へて曰く、吾、王の意を失ひ、一屐を獻ずと雖も過を解くに足らず。故に流に逆つて來り、之を求むるも未だ獲ずと。仙人、告げて曰く、卿、學人と爲り當に進退を知るべし。彼の國王とは是れ吾等の子なり。[一五]存待し愛敬せよ、食を同じくし坐起、參詣し、云何が一旦、之を殃呪と罵るや、卿の罪重し。當に相ひ誅害すべきも今は相ひ問はざるなりと。樹下を指示す。則ち、王の先身侍者たりし時、仙に供給するの時坐して一脚を翹げ、憾み結びて終り、寶屐、水に墮ち一隻を脚に著く、便ち、自ら取り去れよと。梵志、屐を取

【一四】施補。名譽恢復の意。

【一五】存待。ねぎらふこと。

今、先に獨り食すと。王、曰く、吾、先に食すと雖も卿出てゝ未だ歸らざれば豫め別に饌を俟む。卿、自ら來ること晩きなりと。梵志、罵りて曰く、咄！ 殈呪の子、義理を顧みずして本誓に違ふと。群臣、之を聞き臣の君を毀るに臨み、咸、奏して殺さむと欲す。王、群臣に詔し、何の罪を以て之を罪せむと。各各、進みて曰ふ。或は云く、甑[七]をもつて之を蒸せ、と。或は云く、之を煮れと、或は云く、支[八]を解けよと。或は云く、臼擣けと、或は云く、五杌[九]、耳を截り舌を割き目を挑りて之を殺せよと。王、聽す所無し。吾、道法を奉じ、慈心衆生の類を愍哀す、蠕動を害せず、況んや人命を危くするをや、但、資糧を給し驅りて國を出さしめむと。群臣、詔を奉じ即ち衣糧を給し遂ひて境を出さしむ。獨り遠路を渉り寒暑に觸冒れ疲極憔悴し似類する所無し。而して他國に到る。異梵志の家に詣り舊と與に親を親む。又、而して問ふて曰く、卿、何より來る。何をか綜習する所、何の經典を業とし能く悉く念ずるやと。答へて曰く、吾、遠く從り來り飢と寒に逼られ、誦習する所を忘ると。梵志、心に念ふやう、此の人誦する所、今、已に廢忘す。能く化する所無し。當に田作せしむべしと。輙ち、奴子及び犂牛を給す。梵志を見るに耕し種え奴子を苦役す。酷しくして地を平にせしむ。東西に走使す。奴子、無聊[一〇]、自ら水に投ぜむと欲す。往きて河の側に到り、則ち一隻の七寶の屐を得たり。心に自ら念言ふやう。大家に與へむと欲するも、大家に恩無し。父母に與へむと欲するに必ず賣りて噉食せむ。梵志、我を困しめ役使し、無賴[一一]なり、吾、當に奉承すべし。屐を以て之を上り寬恣を獲可しと。則ち、屐を齎らし還り、用つて梵志に上る。梵志欣豫び心に自ら念言ふやう、此の七寶の屐其の價貿ふること難し。吾、王の意に違ふ、屐を以て奉上らば愆咎[一二]解く可しと。尋いで王國に還り屐を以て王に上り、深く自ら前の罪舋[一三]を陳べて悔い原赦を得むと願ふ。王、曰く、善き哉、と。王、即ち之を幃の裏に納る。別座に之を座せしめ、諸の群臣を會し則ち之に詔して曰く、卿等、寧ろ前に逐ふ所の梵志を見るや不やと。答へて曰く、見ざるなり、

【七】甑。炊ぐ器。
【八】支。四肢。
【九】五杌。五つの體刑。

【一〇】無聊。さびしきこと。
【一一】無賴。狡猾にしていつはり多きこと。
【一二】愆咎。愆、つみ、咎、とが。
【一三】罪舋。つみ。

もならず王薨じ嗣を絶ち賢士を娉求し以て【四】國冑と爲す。群臣、議りて曰く、國の主無きは人の首無きが如し。宜く速に使者を發遣し有德を勤求し時を以て之を立つべしと。使者、四布す。遂に斯の童、異人の姿有るを見る。輙ち尋いで人を遣し還りて群臣に啓さく。唯、王制を嚴にし威儀法の如く駕し幸に來り奉迎せよと。群臣、百僚踊躍せざるは莫し。使者の白す所の如く、嚴駕奉迎す、香湯洗沐す。五時の朝服、寶冠劍帶先王の法の如し。前後導衛して國典に違はず。位に卽き殿に處り南面して制を稱ふ。境土、安寧し民庶踊悅す。

時に、梵志、仰ぎ天文を瞻、下地坤を察して知る、已に【五】嗣立すと。卽ち、宮門に詣り覲えむことを求む。門監、啓して曰はく、外に梵志有り、尊に覲えむことを欲求すと。王、詔し、之に見えむと。梵志、進入し【六】占謝し呪願す。又、王に白して曰く「我が瞻る所の如し、今、前の誓を果せり、寧んぞ審諦ならむやと。王、曰く、誠なる哉、道人、神妙なり、恩を蒙り祚を獲たりと。王、曰く、道人、豈、半國分藏の珍寶を欲するや、婦女美人、車馬、侍使得むと欲する所を恣にせよと。梵志、答へて曰く、一も欲する所無し、唯、二願を求む。一に曰く、飮食・進止・衣服・臥起王と一に等しくして相ひ須ひ、前後有ること勿からん。二には曰く、國事に參議し決する所意を同じくして自ら專にすること莫かれ」と。王曰く、善き哉、思ふに二願を副ふこと此れ豈易からざらんや。王、國を修治する常に正法を以て萬民を枉ずと。梵志、恩を受け因つて自ら憍恣にして重臣を輕蔑す。群臣、忿怨し倶に進め諫めて曰く、王は尊位高し、宜く國臣の耆舊と參議すべし。偏に乞士を信ず。遂に傲慢群職を陵侮せしむ。隣國之を聞かば將に嗤ふ所と爲らむとす、以て寇難を致さむと。王、曰く、吾、少く之に與へむ。久しく、本誓有り安んぞ廢す可けむやと。臣、諫めて止まず。若し王饌を食すとも但、之を須つこと勿れ、則ち必ず改むるなりと。王、遂に之を可とす。梵志の出づるを伺ひ復還るを須たず。則ち之に先んじて食す。梵志、恚りて曰く、本の要、云何む、

【四】國冑。くにのよつぎ。
【五】嗣立。家系を相續すること。
【六】占謝。御禮を述ぶること。

猴王とは則ち我が身是なり」と。

佛、說きたまふこと是の如し。歡喜せざるは莫し。

第十一、佛、五仙人を說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、王舍城に遊び大比丘衆千二百五十人と諸の菩薩と俱なりき。佛、諸の會する者に告げたまはく「乃往久遠無數劫の時五仙人有り、山の藪に處り四人主と爲り一人給侍す。供養し奉事し未だ曾つて意を失はず。果を採り水を汲み進むに時節を以てす。一日遠く行き果の水漿を採る。懈廢、眠寐し時を以て還へらず。日、以て中を過ぐ。四人食を失し恨を懷き飢え恚る。卿は給使令にして何ぞ是の如きことを得たる。卿の所行の如きは殉呪爲る可し、族姓となすべからずと。侍者、之を聞き憂感し言ひ難く退きて樹下に在り。水邊に近づきて坐す。偏に一脚を翹げ思惟し自責す。勞を執り積むこと久し。今、四仙の時食の供を逆ふ。既に道教を失ひ四等に順はず。遂に感じて死す。其の足常に七寶の履を著け足を翹てゝ坐す。履を著け水に墮して一隻を沒す。命過ぐるの後即ち外道に生れ殉呪の子と爲る。年、十餘歲、其の同輩と路の側に戲る。時に梵志有り。過ぎて戲童を見るに人數猥りに多し。遍に之を觀察し殉呪の子を見る。特に貴相有り、應に王者と爲るべし。顏貌殊に異あり人中に於て上なり。梵志、命じて曰く、爾、王の相有り、懊惱して衆の內に遊ぶべからずと。童子、答へて曰く、吾、殉呪の子なり。何ぞ王相有らむと。梵志、又曰く、吾が經典の如くむば儀容、形體、讖書と符合す。爾は則ち之に應す。深く吾が語を思へ、誠諦に欺く無し。斯の國王當に某日某時を以て薨殁すべし。必ず爾の位を嗣らむ。童子、答へて曰く、唯、之を廣むる勿れ、協せて靜密ならしめよ、設し仁の言の如くむば當に重て恩を念ふべしと。敢て自ら憍らずと。梵志言ひ畢り尋いで逃げ遁走し出てゝ他國に之く。後日、未だ幾、

【一】給使令。いひつけ通り役目をなすもの。
【二】族姓。同じやから。
【三】讖書。未來記。

と爲す。將に外に於て放逸、無道ならむとするやと。其の夫、答へて曰く、吾、獼猴と結びて親友と爲る。聰明にして智慧あり又義理を曉る。出でゝ輒ち往き造り共に經法を論ず。但、快事を說くのみ他の放逸無しと。其の婦信ぜず。謂へらく然らずと爲す。又、獼猴の我が夫を誘訹し數出入せしむるを瞋る。當に圖りて、之を殺さば吾が夫乃ち休まるべし。因つて便ち佯り病み、困み劣り床に著く。其の聟、瞻勞し醫藥療治するも竟に肯て差へず。其の夫に謂ひて言く「復、意を勞すること勿れ、其の醫藥を損てよ、吾が病甚だ重し、當に卿の親親しむ所の獼猴の肝を得べし、吾、乃ち活くるのみと。其の夫、答へて曰く、是吾が親友なり。身を寄せ命を託し終に相ひ疑はず。云何が相ひ圖り用以て卿を活さむやと。其の婦答へて曰く、今、夫婦と爲り同じく共に一體なり、相ひ濟ふを念はず、反つて獼猴の爲にす。誠に誼理に非ずと。其の婦夫に逼る。又、之を敬重す。往きて獼猴を請ずるやう、吾、數往來し君の頓する所に到る。仁、枉屈[四]して我が家門に詣らず。今、相ひ請じて舍に到り小食せむと欲すと。獼猴、答へて曰く、吾、陸地に處り、卿、水中に在り安んぞ相ひ從ふを得むと。其の鼈、答へて曰く、吾、當に卿を負ふべし、亦儀に任す可しと。獼猴、便ち從ふ。負ふて中道に到る。獼猴に謂ひて言く、仁、知るを欲するや不や。相ひ請ずる所以は吾が婦、病み困しみ、仁の肝を得服食し病を除かむと欲するなり」と。獼猴、報へて曰く、卿、何の故に早く相ひ語らざる。吾が肝樹に挂かげ齎持せずして來る。促し還り肝を取り乃ち相ひ從ふのみと。便ち樹上に還り、跳踉[五]し歡喜す。時に、鼈、問ふて曰く、卿、當に肝を齎らし來り我が家に到るべし。反つて更に樹に上り跳踉し踊躍す。何をか施す所と爲すと。獼猴、答へて曰く、天下の至愚、卿より過ぐる無し。何ぞ肝有りて挂げて樹に在る所ぞ。共に親友と爲り身を寄せ命を託す。而して還つて相ひ圖り我が命を危くせむと欲す。今從り已往各自別に行まむと。」

佛、比丘に告げたまはく「爾の時の鼈の婦とは則ち暴志是なり。鼈とは則ち調達是なり。獼

【四】枉屈。身を卑下して來りのぞむ意。

【五】跳踉。をどりはねまはる。

して遂に怒る。我、前に珠を買ふに便ち來りて還ひ奪る。又從つて請求むるも復肯へて與へず。汝、我を毀辱す、在在生る所當に汝に怨を報ゆべし、在る所毀辱し悔ゆるも及ぶ所無からむ」と。

佛、國王と及び諸の比丘に告げたまはく「珠を買ふ男子とは則ち我が身是なり。其の女の身とは則ち暴志是れなり。彼の恨を懷くに因て所在生るゝ處常に相ひ謗らむと欲す」と。

佛、說きたまふこと是の如し、衆會疑ひ解け歡喜せざるは莫し。

第十、佛、鼈と獼猴とを說く經

聞くこと是くの如し。一時、佛、舍衞の祇樹給孤獨園に遊び大比丘衆千二百五十人と俱なりき。時に、諸の比丘、會して共に議りて言く「此の暴志比丘尼なる者有り、家を棄て業を遠けて學道を行ふ。三寶に歸命す。佛は則ち父と爲し法は則ち母と爲し諸の比丘衆は以て兄弟と爲す。本道法を以て沙門と爲り道誼を遵修し三毒の垢を去り佛・法及び比丘僧に供侍す。一切を愍哀し四等心を行ひ乃ち得度す可し。而して反つて惡を懷き佛を謗り尊を謗り衆僧を輕毀す。甚だ疑ひ怪しむ可し未曾有と爲す。時に、佛、徹聽し往きて比丘に問ふやう「屬よ、何をか論ずる所ぞ」と。比丘、具に向に議る所の意を啓す。

時に、世尊、諸の比丘に告げ給ふやう「此の比丘尼、但、今世のみ如來の惡を念ふにあらず、在在の生るゝ所も亦復是の如し。吾、自ら憶念するに、乃往過去無數劫の時一獼猴王有り。林樹に處在り果を食し水を飲む。一切の蚑行、喘息、人物の類を愍念し、皆度せしめ無爲に至らしめむと欲す。時に一つの鼈を以て知友と爲る。親親しみ相ひ敬ひ初より相ひ忤らはず、鼈數往來し獼猴の所に到る。飲食し言談り正しき義理を說く。其の婦、之の夫の數出でゝ在らざるを見て之れ外に婬蕩ありて節ならざるを謂へり。即ち、夫の鼈に問ふやう「卿、數出でゝ何所にか至湊く

【一】佛說鼈獼猴經。六度集經第三十六獼猴本生。

【二】三毒。貪欲・瞋恚・愚癡。

【三】親親。したしみしたしむこと。

第九、佛、旃闍摩暴志佛を謗るを說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞の祇樹給孤獨園に遊び大比丘衆千二百五十人と俱なりき。爾の時、國王[一]波斯匿、佛及び比丘衆を請じ中宮に於て飯はし奉る。佛、祇樹を出て大比丘及び諸の菩薩・天・龍神・鬼と與に眷屬圍遶し、釋・梵・四王・華香妓樂、上に於て供養し香汁地に灑ぐ。時に、世尊、大衆と俱に舍衞城に入り王宮に詣らむと欲し給ふ。比丘尼有り、名を暴志と曰ふ。[二]木魁腹に繫け懷妊の如似し、因て佛の衣を牽く。「君は我が夫爲り。從うて有身を得、衣食を給せざるは此の事云何む」と。時に、諸の大衆、天人・釋・梵・四王・諸天・鬼神及び國の人民驚愕せざるは莫し。佛は一切三界の尊と爲す。其の心淸淨なること摩尼よりも過ぐ。智慧の明なること日月よりも超え、三世に獨步して能く逮ぶ者無し。諸邪の九十六種を降伏し歸伏せざるは莫し。道德巍々喩を爲す可からず。虛空は形無く汚染す可らず。佛心彼に過ぎ等侶有ること無し。此の比丘尼は旣に佛弟子なり。云何が惡を懷き如來を謗らむと欲ずる。是に於て世尊、衆會の心を見て疑を決し爲さむと欲し仰ぎ、上方を瞻給ふ。時に天帝釋尋いで時に來り下り化して一つの小さなる鼠と作り、繫げる魁の繩を齧む、魁即ち地に墮つ、衆會之を覩て瞋りと喜びと交集まる。之の所以を怪しむ。時に、國王、瞋るやう「此の比丘尼、家を棄て業を遠け反還つて妬を懷き大聖を誹謗するや」と。即ち、侍者に勅し地を堀り深坑と爲し之を倒に埋めむと欲す。

時に、佛、解喩り「爾るを得ること勿れ、是れ吾が宿の罪なり。獨り彼の殃に非ず。乃往過去久遠の世の時、賈客有り、好き眞珠を賣る。枚數甚だ多し。旣に團くして明に好し。時に一女有り詣りて之を買はむと欲す。向に[三]諧偶を欲す。一男子有り益を遷して價を倍にし、獨り珠を得て去る。女人、得ずして、心に瞋恨を懷き又從つて請ひ求むるも、復、肯て與へず。心盛に

【一】波斯匿。梵名、Prasenajit. 舍衞國の王名、梵授王の子、佛と同日に生る。
【二】木魁。糞を入るゝ料なり。
【三】諧偶。價をねぎること。

珠を以て與ふ。時に、諸の賈客各各寶を採り悉く皆具足す。船に乘りて來り還る。海中の諸の龍及び諸の鬼神悉く共に議りて言く、此の如意珠は海中の上寶にして世俗の人の獲べき所の者に非ず。云何が海を損して閻浮利提を益せむ。誠に之を惜む可し。當に方計を作し還び其の珠を奪ふべし、之を失ひ人間に至すべからずと。時に、龍、鬼神、晝夜圍遶し若干之を廻りて其の珠を奪はむと欲す。導師の德尊く威神巍々たり。諸の鬼神、龍、船を翻へし如意珠を奪はむと欲すと雖も力任へざる所なり。時に、導師、及び五百人安穩に海を渡る。菩薩、踊躍し海邊に住し頭を低くし手を下し海神に呪願す。珠、繫きて頸に在り。時に海龍神、因緣と便を得て、珠をして海に墮さしむ。導師、感激す。吾、行きて海に入り船に乘りて難を涉り勤苦量り無く乃ち此の寶を得たり。當に衆の乏を救ふべし。今に於て海神、反つて海に墮さしむ。邊の侍人に勑するやう、器を捉り持ちて來れ。吾、海水を[四][illegible]み底の泥に至り珠を得ずむば終に休み懈たらずと。即ち、器にて水を[illegible]す。精進力を以て苦難を避けず、壽命を惜まず。水、自然に趣き悉く器の中に入る。諸の海龍神、之を見るに是の如し。心即ち懼を懷く、此の人の威勢、精進の力誠に世に有るところに非ず。若し今水を[illegible]さば久しからずして海を竭さむと。即ち珠を持ちて來る。辭を以て謝して之を還す。吾等、聊か試みぬ。圖らざりき精進の力勢是の如し、天上、天下能く君の導師に勝る者無しと。寶を獲て齎し還る。國中寶を覩て求願し七寶を雨らしむ。以て天下に供す、安穩ならざるは莫し」と。

「爾の時の導師とは則ち我が身是なり。五百の賈客とは諸の弟子なる者是なり。我が將ゐ導く所即ち精進して行き大海に入り還び寶珠を得、諸の貧窮を救へり。今に佛と得て生死の海を竭し智慧量り無く群生を救濟し度を得ざるは莫し」と。

佛、說きたまふこと是の如し、歡喜せざるは莫し。

【四】[illegible]。くむと假に讀みしがその音訓如何。

聞くこと是の如し。一時、佛、[一]王舍城の[二]靈鷲山に在し大比丘の衆と倶なりき。一切の大聖、神通已に達せり。

時に諸の比丘、講堂の上に於て坐して共に議りて言く「我等の世尊、無數劫より精進にして懈たらず生死[三]五道の患に拘らず、佛道を得て一切を救濟せむと欲し精進を用つての故に九劫を超越し自ら無上正眞の道を致して最正覺を爲せり。吾等度を蒙り以て橋梁と爲れり」と。時に、佛、遙に比丘の議る所を聞き起ちて講堂に到り之に問ひ給ふやう「何をか論ずる」と。比丘、白して曰はく「我等の共に議るは、世尊の功德巍々として量り無く、劫を累ねてより來精進して厭ひ無く諸難を避けず勤苦して道を求め、一切を濟はむと欲し中に墮落せず自ら佛と得ることを致し、我等度を蒙むれり」と。

佛、比丘に告げたまはく「實に言ふ所の如し、誠に異有る無し。吾、無數劫より以來精進して道を求め初めて懈怠無し。衆生を愍傷し之を度脫せむと欲す。精進を用つての故に自ら佛を得ることを致せり。九劫を超越して彌勒の前に出でぬ。

我、過去無數劫の時を念ふ、國中の人を見るに多く貧窮有り、愍傷し之を憐む。何の方便を以て而して豐饒ならしめむと。念らく、當に海に入り如意珠を獲、乃ち救ふ所有るべしと。鼓を撾ち鈴を搖り、誰か海に入りて珍寶を採り求めむと欲すと。衆人、大いに會す。上船すべきに臨み、更に敎令を作さく、父母を捨て妻子を惜まず身を投げ命を沒するを欲せば當に共に海に入るべし。所以は何ぞや、海に三難有り、一は大魚の長さ二萬八千里、二には鬼神・羅刹其の船を翻さむと欲す。三には山を振ふ故なり。此の令を作し怨み無きを得、適更に令し已る。衆人、皆悔ひぬ。時に五百人、心獨り堅固なり。便ち風を望み帆を擧げ船に乘りて海に入る。海龍王に詣り從つて頭上の如意の珠を求む。龍王、之を見るに一切を用つての故に勤勞して海に入り窮士を濟はむと欲す。即ち、

【一】王舍城。梵名、Rājagṛha. 中印度摩訶陀國の都城。
【二】靈鷲山。梵名、Gṛdhrakūṭa. 王舍城周圍の五山の一、東北十里にあり、山鷲の形す、故にこの名あり。
【三】五道。地獄・餓鬼・畜生・人間・天上の五。

所無く最も上座に處る。又、年[七]朽耄・面色醜陋・人類に似ず。兩眼復靑し、父母愁憂し女も亦惱を懷けり。云何が當に此の人の爲に婦と作るべき、何ぞ怨鬼に異ならむ、當に之を奈何がすべきと。

時に、遠方に一梵志有り、年既に幼少、顏貌殊に好し、聰明にして智慧あり三經を綜練し五典に通達す。上は上天を知り下は地理を觀る。災變、吉凶皆預り能く覩る。能く[八]六博・[九]妖異・[一〇]蠱道・懷姙の男女、產乳の難易を知り、十方の[一一]蜎飛・蠕動・蚑行・喘息・人物の類を愍傷す。四等心・（卽ち）慈・悲・喜・護を懷けり。彼の豪姓の大富梵志、諸の同學五百の衆を請じ供養すること三月女を處めむと欲すと聞く。尋いで時に往詣し一々難問す。諸の梵志等咸皆窮乏し以て對ふるに辭無し。五百の衆、智皆及ばず、年少の梵志則ち上座に處る。時に女の父母及び女之を見て皆大いに歡喜す。吾、女の婿を求むること其の日甚だ久し、今、乃ち願を獲たりと。年尊梵志、曰く、吾年既に老たり。久しく我に女を許せ、以て妻婦と爲さむ。且く以て我に假せ、得る所の賜遺悉く用つて卿に與へむ、此の婦を置く可し、我が年高を傷け相ひ毀辱する勿れと。年少、答へて曰く、法を越えて以て人情に從ふべからず。我、應に之を納るべし、何の爲に卿に與へむと。三月畢竟り、卽ち處女を用つて年少の梵志に與ふ。其の年老者、心に毒惡を懷くやう、卿、相ひ毀辱して我が婦を奪ふ、世世在る所、卿と怨を作さむ。或は危害すべし、或は毀辱を加へ終に相ひ置さずと。年少の梵志、常に慈心を行ずるに彼獨り害を懷けり。」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、「爾の時の年尊梵志とは今の調達是なり。年少の梵志とは我が身是なり。其の女とは[一二]瞿夷是なり。前世の結今に解けず」と。

佛、說きたまふこと是の如し。歡喜せざるは莫し。

第八、佛、珠を墮し海中に著くを說く經

【七】朽耄。おいぼれ。
【八】六博。雙六の類。
【九】妖異。ばけもの。
【一〇】蠱道。呪道。
【一一】蜎飛。蜎はいもむし、飛はとぶ蟲。
【一二】瞿夷。梵名、Gopikī. 悉達太子第一夫人、耶輸陀羅姫のこと。

吾・自覺せずして、怨家をして頭を梳づらしむることあらず、其れ爾と相ひ親しまば、終に壽長きことを得ず。

佛、諸の比丘に告げたまはく「爾の時の野猫を知らむと欲せば今の〔一〇〕栴遮比丘是なり。時に雞とは我が身是なり。昔に相ひ遇ひ今も亦是の如し」と。

佛、說きたまふこと是の如し、歡喜せざるは莫し。

第七、佛、前世女と諍ふを說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞の祇樹給孤獨園に遊び、大比丘衆と俱なりき。

爾の時、〔一〕調達、心に毒害を念ひ如來を誹謗す。自ら謂らく、道有りと。衆人、之を呵す。天・龍・鬼・神・〔二〕釋・〔三〕梵・〔四〕四王悉く共に曉喩すらく「害を懷き如來に向ふことを得ること勿れ、世尊を謗る莫れ、佛は一切三界の尊と爲り〔五〕三達の智有り罣礙する所無し。天上天下歸命せざるは莫し。云何が誹謗するや、罪を得ること量り無し。卿、佛を毀らむと欲するは猶し手を擧げて日月を捫たむと欲するが如く、一塵を以て須彌を超えむと欲するが如く、一毛を持し虛空を度さむとするが如し」と。調達、之を聞くも其の心を改めず。時に、諸の比丘、具さに以て佛に啓すやう「調達、何の重嫌有り、結を懷くこと乃ち爾る」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく「調達は、但、今世のみならず。世世是の如し。

乃往久遠無數劫の時、一梵志有り、財富無數なり。一好女有り端正殊に妙にして色像第一なり。諸の梵志の法として其の〔六〕豪姓なる者假使し處女あらば經を明にする者に與ふるなり。時に梵志、諸の同學五百の衆を請じ供養すること三月其の知る所を察す。時に五百人の中一人有り、最上の智慧あり三經を學び博く五典に達す、章句次第して經の義を失はず。問者、發遣するに疑難とする

〔一〇〕栴遮。Ciñcā の事なるべし。

〔一〕調達。梵名、Devadatta. 佛の從弟、提婆達多をいふ。

〔二〕釋。帝釋をいふ、忉利天の主なり。

〔三〕梵。大梵天王をいふ、佛法外護の神。

〔四〕四王。四王天、帝釋の外將、持國天・增長天・廣目天・多聞天をいふ。

〔五〕三達。羅漢に於ては三明といひ、天眼・宿命・漏盡なり、天眼は未來の生死因果を知り、宿命は過去の生死因果を知り、漏盡は現在の煩惱を知りて之を斷盡す、之を知ること窮盡する故達といふ。

〔六〕豪姓。名高き家柄。

野雞、偈を以て報じて曰く、

天當に汝に願を與ふべし　梵杖を以て卿を撃たむ、　世に於て何の法有りて、　云何が　雞を食はむと欲する。

野猫、偈を以て答へて曰く、

我、肉を食はざるべし　路に曝して淸淨を修め　諸の天衆に禮事ふ　吾、此の釁を得むが爲なり。

野雞、偈を以て答へて曰く、

未だ曾て此の　野猫の淨行を修するを見聞せず、　卿、滅す所有らむと欲し　賊と爲りて雞を噉はむと欲す。　木と果と各ゝ別なりとし、　美辭を以て僞りて喜笑す　吾終に卿を信ぜず　安んぞ　雞を得て噉はざらむや。　惡性にして卒暴　面を觀るに赤きこと血の如く、　其の眼青く藍の如し、　卿、鼠蟲を食ふべし。　終に雞を食ふを得ず、　何ぞ行いて鼠を捕へざるや　面赤く眼正に靑し、　叫喚びて猫と言ふ時、　吾が衣毛則ち竪つ、　輙ち避け自ら藏むと欲す、　世世卿を離れむと欲す、　何の意か今、相ひ振れむ。

是に於て猫、復偈を以て答へて曰く、

面色豈に好からんや。　端正なるも皆童ならむや　當に威儀の則と及び　餘の　諸の功德を問ふべし。　諸の行當に具足し、　智慧に方便有り、　家居の業を曉了るもの　未だ曾つて我に比有らず。　我常に洗沐を好み、　今、好き衣服を著る、　起ちて舞ひ歌聲の音、　乃ち爾、我を愛敬せむ。　又、當に仁の足を洗ひ、　其の爲に頭髻を梳るべし、　及び當に　調譺して戲むれ、　然る後我を愛敬すべし。

是に於て野雞、偈を以て答へて曰く、

【八】曝路。日にさらし、露にあたること。

【九】調譺戲。たわむること。

野雞、偈を以て答へて曰く、

意を息め 自ら卿に從ふとも 青眼、惡瘡の如し、 是の如きは鏁に繋がれて、 牢獄に閉在する如し。

野猫、偈を以て報へて曰く、

我と心を同じくせず 言口刺棘の如し 會ふことは當に何を用て致すべきや 愁憂當に思想ふべし。 吾が身臭穢ならず 戒德の香を流出す、 云何が我を捨て、 遠く遊び別處に在らむと欲するや。

野雞、偈を以て答へて曰く、

汝、遠く牽挽かむと欲す 兇弊なること蛇虺の如し [五]彼の皮の柔軟を揆みて 爾し乃ち [六]申叙を得たり。

野猫、偈を以て答へて曰く、

速に來り下り此に詣れ 吾、所誼有らむと欲す、 幷に當に親里に語り 及び父母に啓すべし。

野雞、復、偈を以て答へて曰く、

吾れに童女の婦有り 顏正しく心性好し、 禁戒を愼み法の如く、 意を護り違を欲せず。

野猫、偈を以て頌して曰く、

是に於て棘 杖を以てす、 家に在りて正敎に順ふ 家の中に尊長有り 法戒を以て谿と爲す。 [七]楊柳の樹外に在り 皆時を以て茂りて盛なり、 衆、共に仁に稽首す、 梵志の火に事ふるが如し。 吾が家、勢力を以て 諸の梵志に奉事す、 吉祥、多く子を生み、 財寶を饒かならしむべし。

【五】揆彼皮柔軟。シャバン又は此の句の意味を「あなたの言葉は蛇の皮の如く柔軟であるが本性は蛇の如く邪惡である」に解してゐる。
【六】申叙。諦話。
【七】楊柳。やなぎ。

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に遊び、大比丘衆千二百五十人と倶なりき。
爾の時、佛、諸の比丘に告げ給ふやう「乃往過去無數世の時大叢樹有り、大叢樹の間に野猫有り
て遊居す。產在りて日を經るも食せず、飢餓極らむと欲す。樹王の上を見るに一野雞有り、端正
[1]姝好なり。既に慈心を行じ一切の　[2]蚑行、喘息、人物の類を愍哀す。時に野猫、心害毒を懷き雞
の命を危くせむと欲し徐徐に前み樹下に在り、柔軟の辭を以て頌を說きて曰く、

意寂しく　[3]相異殊るも　魚を食ひ若しは服を好む。　樹從り來り地に下りよ　當に汝の爲めに
妻となるべし。

時に、野雞、偈を以て報へて曰く、

仁は四脚あり　我が足は兩足有り　計ふに鳥と野猫と、　夫妻と爲るべからず。

野猫、偈を以て報へて曰く、

吾、多く遊行する所、　國、邑及び郡、縣　餘人を得るを欲せず、　唯、意、樂、仁に在り。君
の身端正を現す、　顏貌、第一に立つ、　吾も亦微妙にして好し、　行淸淨き童女なり。當
に相ひ娛樂しみ　雞の如く遊びて外に在らむ、　兩人、共に心を等くす、　亦、快樂とせざる哉。

時に、野雞、偈を以て報へて曰く、

吾、卿を識らざらんや、　是、誰れ、何をか求むやを、　衆事未だ辦足せず　明者、歎ぜざる所
なり。

野猫、復偈を以て報じて曰く、

既に此の如き妻を得るに、　反つて杖を以て頭を擊つ、　中に在りて貧爲めに劇しからん　富
は雨寶の如し。　眷屬に親近せば　大寶財量り無く　家室に親近するを以て　[4]心を息め堅固
なるを得む。

【一】姝好。かほよく美しきこと。

【二】蚑行。虫のはひゆくこと。

【三】相異殊。シヤバンヌは「我々は互に別居してゐる」と譯してゐる。その意であらう。

【四】息心。心を安んずること。

かず。彼の鳥、薄福なり。愁憂叫呼し聲、休絕せず。是に緣りて命過ぎぬ」と。佛、言はく「是の如し是の如し。比丘よ、是の間に於て愚騃の子、下士[四]と爲り行を治め財を求む。或は正、或は邪にして財寶を積槃ね一旦命盡く、財、身に隨はず。猶し彼の鳥の我所と名づく者の如く蓽茇樹及び諸の藥樹、且つ成熟せんと欲するを見て叫喚、悲鳴し、皆是我所なりと。人、遂に採取し禁制すること能はざるがごとし」と。

時に、世尊、則ち頌を說きて曰く、

鳥有り、我所と名づく、　香山に處在る、　諸の藥樹成熟し　叫喚す、是我が所と。　彼の叫喚の聲を聞き　餘の鳥皆集會す、　衆人、藥を取り去り　我所鳥、懊惱す。　是の如く假使、人、無量の寶を積聚するも　既に飮食を念はず　施さゞれば斯鳥の如し。　縣官、及び盜賊　怨家、水・火・等、　之を奪ひ、或は燒き沒す、　我所の藥菓の如し。　好く飮食する能はず、　床、臥具も亦爾なり、　香、花、諸の供養　所有皆是の如し。　既に人身を得るを致し、　來つて種類に歸す、　命盡き皆捨てゝ去り　一も其の身に隨ふ無し。　是の故に當に德を殖え　後世を顧念すべし、　人の所作の功德、　後世、且に人に待つ。　壽終るに臨みて心中・湯火を懷くを得る無し　吾、前に放逸を爲す　故に德本を造るべし。

佛、諸の比丘に告げたまはく「爾の時の我所鳥を知らむと欲せば則ち今の此の尊長者是なり。是の故に比丘よ、當に此を修學すべし、慳惜すべからず、垢濁の心を除き常に清淨を修めよ。是、諸の佛の教なり」と。

佛、說きたまふこと是の如し。歡喜せざるは莫し。

第六、佛、野雞を說く經

【四】下士。身分の卑しきもの。

第五、佛、是れ我所を說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞の祇樹給孤獨園に遊び、大比丘衆千二百五十人と倶なりき。

爾の時、一の尊き長者有り。財富量無く金銀・珍寶稱て數ふ可らず。勤苦して治生す。飢渴・寒熱諸の難に觸冒し諸患に憂慼するも道理を以てせず、此の財業を積む。財富を爲すと雖も自ら衣食せず、布施する能はず、二親に供養し奉事する能はず、妻子、僕使に給足する能はず、中外の家室・親里を益する無し。安んぞ能く布施し福德を爲さむ乎。衣は卽ち麤衣・食は卽ち惡食、意の中に悋惜す。父母、窮乏し妻子、裸にして凍ゆ。家室の內外與に交通せず。各自ら兩び隨ふて常に煩嬈を恐る。求索む所有り所作慳貪なり。悋惜すること此の如し。少福無智にして第一【一】矜矜【二】齋持する所無し。本治生の時、或は能く誠を至し或は誠を至さず。財寶を積累することゝ稱て計ふ可らず。衣食する能はず時に壽終る。旣に子姓無く所有財寶皆沒して官に入る。

世尊、比丘に告げ給ふやう「且く聽けよ、愚爭の下士、微妙の寶を得て衣食する能はず、父母・妻子・奴・客に供せず、萬分も之後に復益する所無し。而して減損有り」と。比丘、此を聞き具足して佛に啓さく「唯、然なり、世尊よ、一人の長者有り、名號を某と曰ふ、財富量り無く衣食する能はず、父母・妻子・僕使に供せず、布施する能はず、一旦壽終り財物沒して官に入れり」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく「今、此の尊長者、但に今世のみ慳貪にして財寶を愛惜するに非ず。前世も亦然なり。乃往、過去無數世の時大香山有り、無央數の【三】蓽茇の諸の藥、及び胡椒の樹を生ず、蓽茇の樹上時に一鳥有り、名を我所と曰ふ。其の中に止頓す。假使し春月藥果熟するの時となれば人皆採取し服食し疾を療す。時に我所鳥、嗚呼、悲鳴すらく、此れは我が所なり、汝等取ること勿れ、吾が心人をして之を採らしむるを欲せずと。叫喚し呼ぶと雖も衆人續いて取り其の聲を聽

【一】矜々。かたくつよき貌。
【二】齋持。戒などを持つこと。
【三】蓽茇。いばら。

而も往きて經を說く。或は罣礙[三]に處して爲に經を說き、或は衣食、世俗の諸饌を獲んが爲に歎じて經を說く。是に由ての故に美の飮食、諸の供養の具を致る。時に、異學の梵志、之の此の如く、國王の子及び諸の大臣の爲に經典を講說し遂に騎に乘るを見、時に、諸の仙人往きて和上[四]及び餘の仙人に啓す。之を聞くこと斯の如し。皆、共に訶諫すらく、之爲す所に非ずと。時に和上、之を五通仙人の菩薩に問ふ。(菩薩)、卽ち訶譴すらく、是の如くすべからず、其此の非義の事を犯す有り、若しくば誹謗するもの有(れば)計るに此の二人皆、善哉に非ず、奇雅と爲さず。此の經を說く爲に聖賢の住を離れ典籍に應ぜず。其の聽受する者も亦宜に應ぜず。則ち兩墮落すと」是に於て和難、偈を以つて偈して曰く、

兩ながら倶に誼を解らず　之を計れるに兩墮落す　法を說くも理を得ず　經を聽くも義を解らず。　世俗に於て　神仙、道誼を講ずることに値ひ難し。　俗の衣食の供を以て、　無知なるもの之を歎說す。　服・食・粳米[五]の飯、　上美の肉、全の供　以て聖賢の誼に依り　典籍を論解せんと欲す。　遊志、閑居に在り　飯食、菓糗[六]を採る　是、吾が樂を歎ずる所　神仙、此の法を歎ず。　道德、寂に歌ふ所、　法の利を梵志と爲す、　威儀、自ら調伏す　非法を樂しむを得る無し。　節を知りて少く求む　家を捨てゝ分衞に行く、　寧、此の業を以て活く、　經典に違ふこと得ること無し。」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく「爾の時、常に衣・食・諸饌を以て法を說き道を論ぜざる者を知らむと欲せば今の和難釋子是なり。諸の梵行を淨むる其の和上とは今の比丘衆是なり。五通仙人とは我身是なり。前世に相ひ遇ひ、今と亦相ひ値へり」と。

佛、說きたまふこと是の如し。歡喜せざるは莫し。

【三】罣礙。さゝはること。

【四】和上。梵語、Upādhyāya. 譯して親敎師、和尙と同じ。

【五】粳米。うるち。

【六】菓糗。くだもの。

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞の祇樹給孤獨園に遊び、大衆の比丘千二百五十人と倶なりき。

時に、和難釋子、人の爲に經を說き生活の業を論じ、但、飮食、衣被の具を講ずるのみ。人の爲に經を說き福德の事報應の果を講じ未だ曾つて道義の慧を講ぜず。大いに衣被、飮食の諸饌を獲、此を攝取するのみ。立に賢聖を離る。若干の事有らば俗の經典世間の飮食を說き種々非宜の說を興起し世を度する無極の慧を演ず。諸の比丘、行く所、分衞し人の家に在り、但、俗事衣食の供を說くを見て卽時訶諫し轉た相ひ告令す。衆學、之を聞き卽ち共に追隨し所爲を訶諫すらく「云何が賢者よ、世尊大聖、已に聖通の身を以て最正覺し給ひ、世の妙法を講じ及び難く了り難し。玄音【一】の道教、念無く想無し。其の心名を離れ安穩にして患無し。明かなる者、達する所は無央數億百千劫より本諸佛に從ひ聽聞奉持し皆、安穩に度す。諸の比丘聞くに家の信を以てす。家を離れて道を爲す。而も返つて更に世俗の經典を說く。多く想ひ多く求め、諸事、世俗の飮食無益の義を興發し聖賢の迹を離る」と。乃ち、復、世俗の事を講論せり。時に比丘往きて世尊に啓うしぬ。

佛、比丘に告げ給ふやう「是は沙門に非ず、此は出家の業を具足し法に因つて生活するに非ざるなり。但、衣食を求むるのみ。未だ曾つて敎導せざるなり」と。時に、佛、世尊、無數の事を以て之の所作、道の法敎に非るを訶し給ふ。

諸の比丘に告げたまはく「和難釋子、愚騃【二】の丈夫なり、但、今世のみ衣食の利を以て世俗の經典廣く說法するに非るなり。自ら名を顯し衆をして供養せしめむと欲すること前世も亦爾なり。

乃往、過去無數世の時異しき閑居に於て多くの神仙有りて、其の中に處在せり。一仙人有り、愚冥、無明にして心閉ぢ意塞ぐ、國王、太子及び諸の臣吏の爲に唯但、飮食・諸饌・衣服の具を講說し經道を論ぜず。處して時節を知り車馬に乘を見れば、迎へて爲めに經を說き、或は迷ふ者の爲に

【一】玄音。微妙の意。

【二】愚騃。おろかなること。

勞し咸以て慶と爲す。其の行跡を見るに漏失有ること無し。卽時に信を付す。時に、尊者、其の人の德を觀るに內外表裏の瑕短を視ず、普く之を勸め助け、其の人の作す所成立する所有り、第一恭敬にして未だ曾つて輕慢ならず最も篤信せらる。弟の如く兄の如く等しくして差別無し。戒と定安諦にして欺誑有ること無し。稍稍信を付するに、大財業を以てす。卽時、竊取し之を出して外に在り。車に財寶と諸の好物を載せ還び王舍城に至り。妖婬蕩の女と飮食し相ひ樂む。彼、異時に於て其の人現れず、普遍く行きて索むも湊く所を知らず。藏の中を觀察するに大いに財寶を亡ひ稱て計ふ可らず。財寶無きを見て遍く行きて求索むも湊く所を知らず。乃ち人從り聞くに此の人還び王舍城に至り婬女と倶に飮食す。此れ博掩の子にして是れ長者に非ず仁賢の人に非ずと。尊者、心に念ひ以て遠近に走るも復得可からず。甚だ自ら瞋恨し。歎吒し偈を說くやう。

是、賢君の子に非ず、　外貌は好華に似たり　色にて人を信ず可らず、　及び柔軟の美辭と。
擧動と行を觀察すれば　外に現るは佳善の如し、　明者、當に遠慮すべし、　共に止めて察試すべし。　乃ち志性の惡を知る。　博掩の子、聲を揚ぐ　吾、時に棄捨てずば　譬ば毒を雜ゆる食の如し。　云何が反復無からむ、　亦、復恩情薄し、　智者、與倶にせず　救ふと雖も捨てしむべし。　我、時に適之を見て　信ずるが故に欺侵かる、　賢に非ずして賢なる貌を現し、
財を竊みて亡走せり。」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく「爾の時の尊者は今の和難比丘の身是なり。落度、欺く者とは今の博掩の子、沙門と作り和難を欺く者是なり。前世相ひ侵し今世も亦然なり」と。

佛、說くこと是の如し。歡喜せざるは莫し。

第四、佛、邪業自活を說く經

周匝して普く問ふ。今、所に湊くと爲す、權に時に現はれず。但、遙に之を聞く。彼は博掩の子、落度、兇暴佯りて沙門と作り、卿を欺詐き竊に財物を取らむと欲せりと。衆人、答へて曰く「卿性倉卒なり、本末を問はず便ち鬚髮を下す。今、取る所の物を以て獨處に在り、博掩の子と俱に共に食ひ飮む」と。以て彼に在るを知るも禁制を(得)ざるを恐れ、聲を默し內に惱む。諸の比丘、具足して佛に白せり。

是に於て大聖、諸の比丘に告げたまはく「此の博掩の子、落度の人、但今世のみ異なる形貌、閑居の像を以て竊 欺む所に有らず。前世も亦然なり。和難比丘、刈らずして續いて之を信ぜり。乃往、過去久遠の世の時なり。時に王舍城に一賢人有り、婬蕩の家に入り婬女と俱に飮食し歌戲して娛樂せり。所有財業久しからずして殫盡す。其の財物を彼の婬女人悉く之を奪取し復其の家に入ることを聽さず。婬女之を逐ふ。數々發遣すも都て肯て去らず。時に婬女人其の家より驅出す。去りて更に財を求めよ。爾ば乃ち來り還れと。財を求むるに得ず。財を求むるを用つての故に欝單國に到る。彼の國に到ると雖も識知る所無し。時に欝單國に大尊者有り、多財・饒寶・勢富量り無し。佯りて仁賢を現じ尊者に往詣る。吾、賈客と爲り衆人の導(者)なり、某國より來り多くの財寶を致せり。道に惡賊に遇ひ悉く劫奪せらる。皆財業を失ひ貧窮、委厄し以て自活する無し。纔に命を濟ふを得たり。盡力奔走す、今尊者に歸し左右に給侍せむと。時に尊者之を見るに此の如し。威儀の法則、行步の進止、威神の德有り、此は則ち佳人なり、吾、爲に計を設け故に興復せしめむ。其の人黠慧・聰明・辯才・擧動機に應ず。志 懈怠ならず意性悟り易し、極めて尊む べき者にして以て自ら樂しむ。其の心を護 愼みて、未だ曾て放逸ならず。作す所成辦し事として成らざるは無し。身の行淸淨にして、口の言は柔軟、麤獷有ること無し。巧みなる談、美しき辭、衆人見る者歡喜せざるは莫し。尊者の眷屬家中の大小悉く共に敬愛し皆共に讚擧す。尊者の見るも然なり。踊躍し慰

【五】周匝。めぐりまはること。

【六】驅出。追ひ出すこと。

ざるとを問はず、趣かば人を得むと欲して鬚髮を下し具足戒を授く、諸の比丘、呵すらく、「此を爲す當らず、趣き來る人有らば輙ち沙門と爲すは、眷屬を得むと欲して後の患を顧ざるなり。當に本末と、何所より來るかを問ふべし、擧動、安諦なるも爲に侵欺かる、後悔及ぶこと無し」と。和難比丘、都て諫を受けず、値ひ得て人に見えなば輙ち鬚髮を下しぬ。

爾の時、之の世に兇惡の人[三]博掩の子有り、遙に、和難、釋家の子、無央數の衣被、鉢器有り、好みて眷屬を求め、趣きて來り學ぶを得れば本末、從つて來る所を問はず便ち鬚髮を下すと聞き、其の身飢凍へ以て自ら活くる無し。往きて誑詐かむと欲し心に豫て計を設け、和難の所に詣り恭敬肅々稽首して禮を爲す。威儀法則、坐起安詳にして卒暴有ること無し。和難釋子、其の人に告げて曰く「沙門は安穩にして憂無く患ひ無し、愛欲に親近づけば則ち吉祥に非ず、懈怠りて行ふこと無ければ、人知らざるも欲の壞るところと爲る。而して愛欲を習はゞ無央數の憒惱の害を致す。愛欲に貪著すれば度を得ること能はず」と。其の人、答へて曰く「我が身は愛欲を棄捐てて、而も沙門と爲ること能はず」と。和難、又、問ふやう、「子、何を以ての故に沙門と爲らざるか。沙門は多く衆利を獲。子、便ち意を降し出でゝ沙門と爲れ、學ぶ所の德行、我れ悉く供給せん」と。其の人答へて曰く「唯、諾し、命に從はむ。諸の憂患を除け、假使安穩ならば便ち沙門と爲らむ」と。則ち鬚髮を除き成就の戒を受く。沙門と作ると雖も敎の使し易きを受け、故に自ら示現し恭順にして失無く、精進、勤修し未だ曾つて懈怠せず、忍辱して敎に順ふ。時に和難、信ず可く保つ可きを見て內態を觀ず復狐疑せず、之を信ずること一の如し。諸の衣被及び鉢・[四]震越の諸の供養の具を以て皆用つて之に託す。外に出でゝ、遊行し意の中安穩なり。態を作すと謂はざるなり。(後、比丘)悉く衣・鉢・諸の供養の具を斂め馳走して藏竄し獨り一處に在り博掩の子と倶に共に飮食す。時に、和難、彼の新弟子の所在を聞き卽時速に還り、其の室の中を觀るに竊取する所多し。

【三】博掩。ばくちうち。

【四】震越。梵語、Civara. 譯、臥具、又は衣服。

是に於て鼈復偈を以て答へて曰く、

吾、心常に存して志卿に在り、　心恩愛を懷き思想ひ念ふ、　是を以ての故に而も相ひ問ふ、
當に何の法を以て會ふことを得べき。

獼猴、偈を以て報へ、頌して曰く、

鼈よ、之を知るべし、　我樹に處り、　君と共に合會すべからず、　假使し我と俱ならんことを得むと欲せば、　叢樹の間に在りて相ひ供養せよ。

是に於て鼈、復、偈を以て答へて曰く、

吾、服食する所肉を以て活く、　柔軟、甘美　[六]果蓏に勝る、　獲べからざるを貪求るべからず
汝の爲に衆の　[七]標果を致るべし。

爾の時、獼猴、偈を以て報へて曰く、

假使卿身樹に處らずして、　何の爲に我れの致る可からざるを求むるや。　今の如き我を觀るに羞慚無し且く自ら馳走し見ゆるに忍びず。」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく「爾の時の獼猴とは今の婬蕩の女人是なり、鼈とは分衞の比丘是れなり。彼の時放逸にして之を慕求めて願の如く得ず。今も亦是の如し」と。

佛、說きたまふこと是の如し。歡喜せざるは莫し。

第三、佛、和難を說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に遊び大比丘衆千二百五十人と俱なりき。

爾の時、和難[一]釋子、多く眷屬を求め其の人を覩ず行跡を察せず出家を欲する(もの)有らば便ち鬚髮を除きて沙門と爲し[二]成就戒を授く。本末、何所より來るか、父母の姓字・善惡・好醜・識と識

【六】果蓏。樹の實、草の實。
【七】標果。からなしの果。

【一】和難(Upananda)釋子。釋迦佛の弟子なり。釋迦師の敎化に隨ひて出生する故に名く。
【二】成就戒。具足戒のこと、比丘は二百五十戒、比丘尼は五百戒なり。

是に於て比丘、偈を以て女に答へ、頌して曰く、

吾れに財と業と有ること無し、　我が行と擧動を觀よ、　乞匃を以て立つ、　得る所の者あらば相ひ與へむ。

是に於て、婬女、偈を以て頌して曰く、

假使卿身財と業と無くば　何の爲に志を立て致し難きを求むるや　卿の所作の如きは羞慚無し、　馳せ走り促出でて我家を離れよ。

時に比丘を逐ひ出し追ふて祇樹の門に至る。

諸の比丘、即ち來り佛に詣り世尊に啓白して具に本末を說く。佛、言く「此の比丘、宿命、曾つて水鼈と作り婬女、曾つて獼猴と作る。故に亦相ひ好し、志して果を得ず、還つて自ら侵欺き正教に入らず惱患を增益せり。今に於ても是の如く婬女に志願し願心に從はず逆つて折辱せられ慚愧して去れり」と。佛、言はく「乃往、過去無數世の時大江の水の中に、鼈の居遊する所あり、其の江水の邊に樹木熾盛なり。彼の叢樹の間に一獼猴有り彼の樹に止頓まる。時に彼の鼈、江水從り出でて遙に樹木を見るに此の獼猴有り、與に談語る。稍々前み行き之に親近づかむと欲す。數々往返し相見ゆること日有り。日日是の如し。之を視るに懈たらず。則ち婬意を起し心爲めに迷惑し、汚染し穢濁し自ら覺むる能はず。則ち時に偈を以て歎ず。頌して曰く、

顏貌、赤く黃にして、眼は青く、　叢樹の間に遊び枝格に戲る　吾、今問はむと欲す、毛の滑澤あるものよ、　何を志求め何の所存を欲するや。

獼猴、偈を以て答へて曰く、

吾、今、具に鼈の本末を知る、　國王の子と爲り聰明有り、　今、卿、何故に而も我に問ふや、我、此の言を聞き狐疑を懷く。

【五】止頓。一處に止ること。

問ふやう「比丘よ、仁、何より來る」と。比丘、答へて曰く「吾が主、分衞す。故に來りて乞匃す」と。時に女人、卽ち爲めに餚饌の衆味を施設し之を盛り鉢に滿して之を奉上す。比丘、卽ち受け自ら退きて去る。彼の時、比丘、是の美食の甘美と豐足とを得て心の中に歡喜し自ら勝ふること能はず。數數婬蕩の女舍に往詣る。時に女、心に念ひ計るやう此の比丘法を守ること及び難しと。頻に爲めに甘脆肥美の食を興設けて之を授與ふ。(比丘)往返して息まず。學問未だ明かならず所作辦せず未だ諸根を伏せず、婬蕩の女の顏色、妙好なるを見て婬意爲めに動き、志、放逸に在り婬蕩の女に著し、口に軟柔、恩情の辭を出し親附の心を懷き、與に語りて周旋す、彼の家に日日分衞して懈らず。比丘、其の好色を覩て音聲を聽聞き婬意爲めに動く、迷惑し[二]憒錯して自ら覺むること能はず、而も佛經に曰く、目に好き色を見て、婬意爲めに動くと、又、世尊、曰く、女人を覩ると雖も長者は母の如く、中者は姉の如く、少者は妹の如く子の如く女の如し。當に內の身を觀ずるに皆惡露にして愛す可き者無く、外は[三]畫瓶の如く中に不淨を滿すを念ひ、此れ四大(卽ち)地・水・火・風の因緣和合し本有る所無しと觀ずべしと。

時に、彼の比丘、空觀を曉らず但、色を視ることを作すのみ、婬意則ち亂れ、婬女人の爲めに頌を說きて曰く、

淑女、年幼童にして淸淨　顏貌、端正にして殊に妙好し、　一一容を觀るに等倫無く、　吾が意の志願共に和同せむ。

時に婬蕩の女、此の比丘の說く所是の如きを見、吾れ本、兇惡と貪婬を知らず反つて淸淨にして戒を奉ずるの意を以て待ふ。之を謂ふに仁賢罪釁を犯すことを喜ぶ。其の來言に隨つて當に之を[四]折答すべしと、卽時、偈を以て報へ頌して曰く、

當に飮食を持ち來り　香・華・好衣服の　若干種を供養すべし　爾ば乃ち仁と俱ならむ。

【二】憒錯。心亂ること。

【三】畫瓶。花かめ。

【四】折答。過失に直言して答ふること。

切の欲を得るも厭くこと無く足ること無しと。（卽ち）偈を以て頌うて曰く、

一切の世間の欲、　一人も厭はざるは非なり、　所有、危害あり　自ら己を喪ふを云何せむ。

一切の諸衆の流　悉く皆、海に歸するも　以て滿足と爲さず　愛する所厭ざるも爾なり。

假使、[一一]梵と爲るを得　尊豪を致し及び難きも、　所欲、復、彼を超へ　以て厭足と爲さゞるなり。

假使、[一二]閻浮提の　樹木、諸の單の葉　之を燒くも以て厭ず　欲足らざること是の如し。

設し、[一三]八輩の男子　端正にして顏貌姝くも　一切、[一四]如し欲を以てせば、　威力の端正ぞ好けれ。　設ひ言を爲し惡を增すも、　欲を毀る丈夫に於て　輕を以て輕と爲さず、　未だ厭はざるに爲めに厭ふことを用てす。　大王よ、此を知るべし　設し愛欲の事を習はば　恩愛、轉增長す、　譬へば[一五]鹹水を飲むが如し。　時に、彼の仙人　王方迹の爲に講じ　爲に辛苦の偈を說き　意をして開解を得しめぬ。

時に仙人、方迹王の爲に是の法教を以て開化す。時に王、卽ち開解し慕樂する所無く出家し道を爲し、[一六]四梵行を修し愛欲を斷除し衆行を具足し壽終りて後梵天に生れたり」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく「爾の時の方迹王を知らむと欲せば則ち此の比丘是れなり。那賴仙人とは則ち我が身是れなり。爾の時相ひ遭ふて今も亦相ひ遇ひぬ」と。佛、說きたまふこと是の如し。歡喜せざるは莫し。

第二、佛、分衞比丘を說く經

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞の祇樹給孤獨園に遊び、大比丘衆、千二百五十人と倶なりき。一比丘有り、普く[一]分衞に行き、一々次第して婬蕩の家舍に入る。時に、婬女、比丘入りて其の家舍に至るを見て歡喜踊躍し、卽ち座從り起ち尋いで奉迎し足下に稽首し、請じ入れて座に就く。又、

【一一】梵。梵語、Brahmā. 梵天のこと。
【一二】閻浮提。梵語、Jambu-dvipa. 須彌山の南方にある島、卽ち、吾人の住處。
【一三】八輩。四向四果の聖者をいふ。
【一四】如。大正本、加に作る。
【一五】鹹水。しほみづ。
【一六】四梵行。又四梵住ともいふ。慈悲喜捨の四無量心なり、此の四心は梵天に生ずる行業なれば梵行と名く。

【一】分衞。梵語、Piṇḍa-pāta. 乞食すること。

世尊如來の章句、諸の通慧句、有目章句を開示し、人を化して賢聖となし給へり」と。時に、諸の比丘、世尊に白して曰はく「我等、是の族姓子を觀察するに家居を棄捐て信に沙門と爲り、還び妻子の形類、擧動、家事を念へり。世尊、爲めに愛慾の瑕と法律の德、生死の難と無爲[七]の安とを說き聖證、無著の界に至らしめ給ふ。自ら如來・至眞・等正覺に非ずむば孰か能く爾らむや」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく「此の比丘は但、今世のみならず。心、常に欲に在り情色に迷惑し自ら制すること能はず。志、縛ること欲に在り、能く制する者無し。獨り佛勸化して、其の惑さるゝ愛慾の著を除くのみ。

乃往、過去久遠の世の時、一國王有り、方迹と名づく。中宮、婇女稱げて數ふ可からず。顏貌端正にして、色像及び難し、他人と諍ひ婬蕩の女と與に慈哀を離る。或は婢使と、或は童子と而も或闘諍す。各各闘諍し肯て共に和せず。適闘諍し已り便ち宮を出でゝ去る。王、方迹、之を聞きて恚る。諸の臣吏、諸の婇女を求むるも趣く所を知らず。愁憂ひ樂しまず、涕泣し悲哀す。諸の婦女の戲笑し、娛樂し夫婦の義、本現前の時諸の伎樂を作せるを念ひ、擧動、坐起の法を思念ひ、反つて益用て愁ひ自ら解くこと能はず。時に一仙人有り、五神通[八]を興し神足飛行し威神極り無し。名づけて那賴と曰ふ、(晉に無樂と曰ふ)方迹王、愛慾の爲に惑ひ自ら解くこと能はざるを見て爲に慈哀を興し愛欲の患を蠲除[九]せむと欲し、空中に飛在して神足を現はし忽然として來り下り、王の殿上に住せり。時に王、即ち見、尋で起ちて迎逆へ之に讓るに床在り、則便ち坐に就く、王に問ふて曰く、大王よ、何故に意、愛慾に在り、勞思、多念、情色を思想ひ自ら諫むること能はざるやと。頓首して(云ふやう)、實に然なり、宮中の婇女共に尊卑上下の敘[一〇]を爭ひ相ひ和すること能はず、各馳せて捨て去る。是を以て憂慼し自ら解くこと能はずと。

是に於て仙人、爲に愛慾の難、離欲の德を說く、世人欲を求め厭足ことを知らず、假使ひ一人一

【七】無爲。梵語、Asaṃskṛta. 爲は造作の義、因緣の造作なきを無爲といひ、證の境をいふ。

【八】五神通。五つの不思議自在の用、一、天眼通、二、天耳通、三、他心通、四、宿命通、五、如意通。

【九】蠲除。はらひのぞくこと。

【一〇】敘。位を定むこと。

生經

巻の第一

第一、佛、那賴を說く經

西晉、三藏　竺法護譯

聞くこと是の如し。一時、佛、舍衞國の[一] 祇樹給孤獨園[二]に遊び、大比丘衆千二百五十人と俱なりき。

爾の時、族姓の子[三]有り、家を棄て妻子を捐て諸の眷屬を捨て行きて沙門と作る。其の婦、端正にして殊に好し。夫の家を捨て沙門と作るを見、便ち復行いて嫁る。族姓の子之を聞き心に卽ち念を生ずるやう「婦と相ひ娛樂みし時、夫婦の禮あり、戲笑れ放逸なりき」と。心、常に此を想うて須臾も去らず、婦を念へばその面顏、形貌、坐起・擧動・前にあり。愁憂、憒れ惱みて復び梵行を慕へ樂しみ淨修せず。便ち、其の家に歸れり。諸の比丘、聞きて便ち往いて佛に啓しぬ。世尊、時に應じて人をして比丘を呼び來らしむ。輒ち、教を受け比丘至り、皆佛の爲めに禮を作し却きて一面に坐す。佛、卽ち、比丘の爲めに色欲の念を拂ひ癡愛の失を除かむとす。爲めに、塵勞[四]の穢樂少く憂多く、多く壞れ少しく成じ節限有ること無し、唯、佛及び諸の弟子の明智の人有り、是を分別する耳、愛慾、罪の生ずること稱て限る可らず、色慾を超越へ衆想を休息め閑居して諦を講ぜよと說き給へり。時に、族姓の子時に尋いで賢聖の法を證り明しぬ。

時に、諸の比丘、未曾有を得、各共に議りて言く「且く當に此を觀るべし、是の族姓の子、家の牢獄、鋃鐺[五]、杻械[六]を棄てて、(再び)妻子を想著し而も自ら繫縛して梵行を樂しまざりき。時に、

【一】舍衞國。梵名、Śrāvastī. 中印度、拘薩羅國の首都。
【二】祇樹給孤獨園。梵名、Jetavana Anāthapiṇḍikārāma. 須達長者が祇多太子の林園を購ひ精舍を建てゝ世尊に献じたるもの。
【三】族姓子。梵語、Kulaputra. 良家の子弟。
【四】塵勞。煩惱のこと。
【五】鋃鐺。くさり。
【六】杻械。てかせ。

てゐる。此の書は三冊より成り、漢譯三藏中より本生話關係の物語を抜萃し翻譯したものである。

此の書中、生經中よりも抜萃して第四百二十三より第四百三十八の間の中に十六經の過去物語を翻譯してゐる。即ち、生經では第二、第六、第十、第十一、第二十四、第二十五、第二十六、第二十八、第二十九、第三十、第三十四、第三十五、第三十七、第三十八、第五十三、第五十四の十六經である。元來、此の生經は生硬な譯であつて、漢譯單獨では譯解に困難な所が多く加ふるに梵語原典も西藏譯も存しないので國譯の便を得ぬことは遺憾である。この國譯に當りシヤバンヌ氏の譯に參照し得た所もある。

この國譯に於ては、いつもの通り、大正藏經を底本とし、二、三の誤植は縮刷本により訂正して置いたが、この竺法護譯の生經に極めて譯文不完全であつて何とも讀みこなせない處が多い、これは元より我々和譯者の學力の不足からも來るには相違ないが、又原譯文の不完全に基因する點も多いのである、從つて和譯の不十分なることに就ては讀者の諒恕を得たいと思ふ。

昭和五年九月十六日

譯者　赤沼智善
　　　西尾京雄　識

生話の中に說かれて居る教理說相を少し揭げて他日の研究の手がかりとしやうと思ふ。

第一に五道を說いて六道の言葉がない。五道の語は第八、第二十六、第三十五、第四十八、に出て居るが、智度論第十卷により六道は犢子部、五道は一切有部の說として居る。大衆部、セイロン上座部等も亦五道說である。それ故に犢子部のものではないと選ぶことが出來る譯である。

第二に第五十五經、第二に十二部經の語が出て居るからセイロン上座部等から選ばれる。

第三に第十六經に三千大千の佛國とか、第二十二經には異佛國、十方佛の語よりがあるところからして說一切有部のものでないとすることが出來る譯である。

第四に第二十二經中普賢菩薩の名あること、第五十五經第三には阿彌陀佛の本生が現はれて居ることが注意せられる。然も、其處に出てくる釋尊は誹謗の罪によりて六十劫中大地獄に墮ち、六十劫中人と生れて舌なしと曰はれてゐる。異部宗輪論に記す大衆部の菩薩論の條下に菩薩は衆生を回心せしむる爲に、惡趣にも生るゝと云ふことがあるが誹謗の罪で地獄に生るゝこと六十劫とは如何なる部派の主張する所であらうか。見當がつかない。又その誹謗をうけた惟先比丘は今、現に阿彌陀佛是れなりとしてあつて、阿彌陀佛を稱揚してあるがこれは既に彌陀經典の出現のあつたことを物語つてゐるものである。

第五に諸經中よく本無の語出で第四十四卷には三界一切皆空の句を見ることが出來る。又生死に住せず涅槃にも住せずの思想も顯はれてゐる。

第六に本經中陀羅尼經が第十九——第二十二の四經も含むでゐる。

右の諸項によつて、若し生經を小乘部派のものとすれば大衆部系のものであることは明かであるが、其の大衆部の中の何の部派に屬するものであるか見當がつかない。然し、將來、もつと精確に部派のことが知られる時、又、これら本生物語の系統的なる研究が明かにされる時、その時、それらの研究と相俟つて推定せられるであらうことを想像せられるのである。今は大乘經典の影響を受けた本緣文學經典の一種であると云ふことが出來る丈けである。

五、本經の佛譯について

シャバンヌ（Edovard Chavannes）氏は一九一〇——一九一一年の間パリーより「五百の物語と寓話」（Cinq cents contes et Apologues.）なる書を公にし

八 Sanisumāra-Jātaka.（及び第五十七、Vānarinda-Jātaka. に當り、第三百十六 Saso-Jātaka. に相應するものである。

（二）行藏（Cariyāpitaka.）紀元前四世紀に遡ることの出來る佛敎經典であつて、パーリ經典小阿含の最後の書物である偈よりなる三十五の本生話よりなるものである。

（三）本生鬘（Jātaka-māla.）年代不明の梵語作品であり原文は獨逸のケルン氏によりハーヴード東洋叢書第一巻に公刊（1890）されスパイヤー氏が英譯（S. B. B. 1895）せられ三十五の本生話を含むものである。行藏中の三十五の本生話と同じく菩薩の波羅蜜を説きその十二は行藏中にも出てくるものであり、漢譯の本生鬘論とは内容を異にして居る。

（四）五十本生（Paṇṇāsa-Jātaka.）年代不明であるが五十の本生話を含むだシャム語でかゝれたパーリ經典系のものである。第一のものとは全然別のものである。それについてレオン、フイーヤ氏の「ヂャータカの研究」(Etude sur les Jātakas pp. 62—65.) がある。

（五）大事（Mahāvastu.）説出世部の佛傳であり、梵語原典である。E. Snart. 氏が三冊として巴里から出版（1882—1897）したが、此の書の中には三十七の本生話を含むで居る。

（六）六度集經、是は呉（太元元年——天紀四年 A. D. 250—280）の康僧會の譯である。八巻あり、その名の示すが如く六度に關する本生話を集錄したもので九十一の本生話を含むで居る。漢譯の此の種の經典中では傳譯の年代も古く内容も充實したもので重要なものである。しかし生經と關係するものは四、五に過ぎぬ。

（七）菩薩本緣經、此の經は印度の僧伽斯那論師と呉の支謙三藏が翻譯したものであると傳へられて居る一部三巻の中八個の本生話を含み第六兎王本生は生經の第三十一兎王經と相應するものである。

その他、譯人の名を詳にしないが、菩薩本行經一部三巻中には二十四の本生話を載せ、大方便佛報恩經、菩薩本生鬘論等關係經典として參考に供すべきものが非常に多い。

四、本經の傳承部派

本經は古來より小乘經中に入れられてゐるものであるが小乘二十部派中何れに屬するものであるかは不明である。この部派播屬のことは困難な問題であつて簡單に決定せられるものでないが今此等本

なつてそれらの物語の中でそれ〴〵役割を演じて居られる譯であるが今總括してこれらすべての說話の生で釋尊は如何なる生をうけ給ふたかを先づ見て置くことにする。

(一)轉輪王、 No. 39.
(二)天、 No. 23. 29. 50.
(三)仙人、 No. 1. 4. 25. 48. 49. 53.
(四)國王、 No. 11. 24. 27. 45. 52. 54.
(五)梵志、 No. 7. 28. 40.
(六)菩薩、 No. 55. の第四、
(七)大臣、 No. 46.
(八)比丘、(墮獄の) No. 55. の第三、
(九)俗人、 No. 9.
(10)海船師、 No. 8.
(11)女、(獨母) No. 55. の第一、
(12)盜賊、(賢明なる) No. 12.
(13)動物、a鼈王、 No. 10. 36.
　b雞、 No. 6.
　c水牛王、No. 30.
　d兎王、 No. 31.
　e鳥王、 No. 47.
　f孔雀、 No. 51.
　g大魚、 No. 55. の第二、

右の如く上は天上より下は地獄に至るまで種々の生を經て居らるゝことを知り得るのである。成佛といふ結果から見る時は墮獄者も成佛し、女人も成佛し畜生も亦正眞道を得て居ることになり、茲に佛教の特殊な溫かい見方といふものに觸れることが出來るのである。

猶この生經の中には阿難比丘が前生梵志としての本生經(第二十八經)、分衞比丘の前生鼈としての本生經(第二經)、和難比丘の過去博掩の子としての本生經(第三經)、長者が前生鳥としての生經(第五經)、波斯匿王の四將が本生鳥としての生經(第四十七經)等が含まれて居る。

三、同種の集錄

本生經に屬する經典は種々あるが今、有名なるものをあげるならば、

(一)本生話意義詳說 'Jātaka Aṭṭha-vaṇṇanā' 其の早く存在してゐたものは西曆紀元前三・四世紀に遡ることが出來る。現在の形をとつたのは西曆五世紀錫蘭に於てゞあつて、そのパーリ原典は丁抹の學者フォウスボエール氏が一八七七――一八九七の間に索引を附して七冊としてロンドンより出版した。英譯はカウエル(E. B. Cowell.)氏代表の下に一八九五――一九〇七の間に全六冊として全譯し、全獨譯として Julius Dutoit. 氏は全七冊として一九〇六――一九一六の間に譯しライプシッヒより出版してゐる。其の他部分譯は數多く、繁をさけて略する。

此の傳承のものと生經を比較すると、內容も異なるが第六、佛說野雞經はヂャータカの第三百八十三、Kukkuṭa-Jātaka. に相當し、此の經はバルフト塔の石欄の浮彫に見出さるゝものである。又第三十水牛經は第二百七十八 Mahisā-Jātaka. に當り、第十、佛說鼈獼猴經は第二百

釋」(Jātakaṭṭhakathā.) の名のもとに錫蘭に傳はり、それがフワウスベールに依つて出版されてゐるが、各本生話は次の部分から成り立つてゐる。

(一)通序、釋尊が何時、何處で話されたものかを記す。

(二)別序、現在の物語にて如何なる因緣により次の本生話がなされるやうになつたかを記して居るものである。

(三)正宗分、前生譚を正しく述べる部分である。

(四)偈か又は詩節であつて、これは過去物語の一要素、又は屢ゝ現在物語の要素となつて居るものである。

(五)偈の文典的辭書的註釋。

(六)連結、現在物語の人物と過去物語の人物とを連結して說明する部分である。

以上の如き、諸部分から出來上つてゐる本生經は梵語巴利語西藏語漢譯の諸三藏中莫大な數に及ぶことであるが、印度を中心として西洋說話文學と交渉し、支那及び日本の說話文學とも密接な關係をもつて國民の生活を佛教化し、殊に印度に於ては佛教信仰と結びついて繪畫や彫刻に畫かれて優秀の作品として殘り千載の下に佛教の眞生命を渴仰せしめてゐる。尙その藝術はヂャバ、ビルマに餘流をたゝへさしてゐる。

二、生經の組織と内容

今茲に譯出するところの此の生經は西晉武帝の太康六年(西曆、二百八十五年)正月十九日に竺法護三藏が翻譯したものである。生經の名は十二部經の一として各部派佛教に傳へられて居るのであるが漢譯佛典中生經の名あるものはこの經典のみである。さうして南方錫蘭上座部が傳へて居るヂャータカは五百四十七經の大集錄であるに對してこれは纔に五卷、五十五經であり約十分の一に過ぎぬ、第一卷に十一經、第二卷に十經、第三卷に八經、第四卷に十五經、第五卷に十一經である。此の中第五卷の第五十五經である譬喩經には八つの異つた物語を載せてゐるから畢竟は六十二の物語から成り立つて居るわけである。

さうして是等五十五經が、生經の名のもとに總括せられて居るから、全て生經としての形式を持つて居るものと考へられるであらうが、實は其等の中十五經は全く生經ではなく、又殘りの經典の中最後の一經卽ちその中に含まるゝ八經は明かに譬喩經(Umapā.)であることは注意すべきものであらう。

それで、十五經と最後の一經(八經)を引いた殘餘の三十九經が正しく生經であつて、これ等の各々の本生話の中で釋尊が主人公となり、脇役となり、傍觀者と

生經解題

一、本生話 (Jātaka) に就て

釋尊の說法を其の內容及び形式の上から古來九分經若しくは十二分經に分類し、此の中十二分經の第九位、九分經の第七位を占めて居るものがヂャータカと謂はれ經典中廣大なる領域を占め佛教文學の上から王座の地位を勝ち得て居るものである。

ヂャータカ (Jātaka.) とは「生」「本生」「前生」と譯さるゝが「佛陀の前生物語」或は「菩薩物語」の謂である。菩薩とは覺有情の意味であり、釋迦佛の成道される以前のこの地上の生活をいふことは勿論であるが、此の世に出現さるゝ以前六道に輪廻して善業を積まれた無數の生活——或る時は王、或る時は仙人、或る時には兎——の時代を總括していふのである。本生話とはこの過去の種々なる生活に於て菩薩がその主人公となり或は脇役となり、或は傍觀者となつて、さとりと德への精進をなされた生活の物語をいふのである。

此等の本生物語は釋尊によつて、その當時民間に傳承した物語、御伽話、寓話及び史話等を巧に利用して說法敎化の方便に話されたものもあらうし、又釋尊自身の創作になるものもあらう、或は教團の長老達が種々な物語から換骨脫胎して本生話に仕上げたものもあるであらう。兎も角、本生話が古い成立であることは阿育王が死んで間もなく、西紀前の第三世紀の終から同第二世紀の初めにかけて建造されたバルフト塔の外垣の彫刻に此の本生物話を題材にした多數の圖像があり本生話の題目まで記載されて居ることにより確められる。

此の本生話が印度文學の作品であるパンチャタントラやヒトパデイシャに關係のあることは勿論希臘のイソップ、シリヤの 'Kalilag と Damnag' アラビヤの 'Kalilah と Dimnah' 等の物語に關係のあることは既に泰西の學者によつて報告せられた世間周知のことに屬する。

殊に佛教の中にありて、ヂャータカの成立當時に於ては釋尊の菩薩物語であつたものが、その意味が擴張せられて佛弟子の本生話も加へられ、釋迦佛にならつて過去七佛のそれぞれの本生話が發生し、殊に大乘佛教となつては諸佛の本生話が生れ經典の樞軸を形作る樣になつた。

是等本生話の纏つた集錄は「本生話註

りて行ぜむ」と。佛、言はく「大いに善し、善く來りぬ、比丘よ」と。即ち、沙門と成り、内に安[六]般を思ひ應眞を逮得し、聽く者無數皆法眼を得たり。

法句譬喩經（終）

【六】安般。梵語、Ānāpāna. 數息觀と譯す、出息入息を數へて心を鎭める觀法の名。

佛は尊くして諸天に過ぐ、　如來に常に義を現はし給ふ。　梵志と道士有り、　來りて何をか吉祥と問ふ。　是に於て佛、愍傷したまひ、　爲に眞に要有るを說きたまは、　已に正法を信樂す。　是を最吉祥と爲す。　亦、天と人に從ひ　希望し僥倖を求めず、　亦神祠を禱らず　是を最吉祥と爲す。　賢を友とし善を擇びて居り、　常に先づ福德を爲す、　身に勅して眞正を承く。　是を最吉祥と爲す。　惡を去り從つて善に就き、　酒を避けて自ら節するを知り、　女色に婬せず、　是を最吉祥と爲す。　多聞にして戒の如く行じ　法律を精進して學び、　已を修め爭ふ所無し、　是を最吉祥と爲す。（家）に居りて、父母に孝事し、　家を治めて妻子を養ひ　空乏の行を爲さず、　是を最吉祥と爲す。　慢らず自大ならず　足るを知り反復を念じ　時を以て經を誦習す、　是を最吉祥と爲す。　聞く所は常に忍を欲し　樂しみて沙門に見へむと欲し、　每の講を輒ち聽受す、　是を最吉祥と爲す。　齋を持ち梵行を修め、　常に賢聖を見むと欲し　明智者は依附す、　是を最吉祥と爲す。　已に道德有るを信じ、　意を正し向つて疑無く　三惡道を脫せむと欲す、　是を最吉祥と爲す。　等心に布施を行じ、　諸の得道者を奉じ、　亦、諸の天人を敬ふ。　是を最吉祥と爲す。　常に貪婬、愚癡、　瞋恚の意を離れむと欲し、　能く成道の見を習ふ、　是を最吉祥と爲す。　若しは以て非務を棄て、　能く勤めて道用を修め、　常に事ふ可きに事ふ　是を最吉祥と爲す。　一切は天下の爲にし、　大慈の意を建立し、　仁を修め衆生を安んず、　是を最吉祥と爲す。　智者は世間に居りて　常に吉祥の行を習ひ　自ら致して慧見を成ず、　是を最吉祥と爲す。

梵志の師徒、佛の偈を說き給ふを聞き欣然として意解け甚だ大いに歡喜す。　前みて佛に白して言く「甚だ妙なり、　世尊よ、　世の希有とする所なり、　由來する迷惑未だ　闚明るに及ばず。　唯、願くば世尊よ、　矜愍みて濟度し給へ、　願くは身自ら佛法の三尊に歸し沙門と作るを得む。　冀くば下に在

【四】愚癡。　遇に大正本作るは誤植。

【五】闚明。　うかがひ明にすること。

昔、佛、羅閲祇の耆闍崛山の中に在し天・人・龍・鬼の爲めに三乘の法輪を轉じ給ふ。時に、山の南恒水の岸の邊りに尼犍梵志有り、先出にして耆舊・博達・多智なり。德は五通に向ひ明に古今を識る。養ふ所の門徒五百人有り、敎化し指授し皆悉く天文・地理・星宿・人情に通達し瞻察せざるは無し。內外を觀略し吉凶・禍福・豐儉・出沒皆包み之を知る。梵志の弟子は先きの佛の所にて行じ當に道を得べし、欻ち自ら相ひ將ゐ水の岸邊に至る。坐を屏け語を論じ自ら共に相ひ問ふやう「世間の諸國人民の所行何等の事を以て世の吉祥と爲す、徒等、了らず」と。師の所に往到り師の爲めに禮を作し叉手して白して言はく「弟子等學久しく學ぶ所已に達せり。しかも諸國何を以て吉祥と爲すかを聞かず」と。尼犍、告げて曰く「善き哉、問ひや、閻浮利地に十六大國と八萬四千の小國有り、諸國に各吉祥有り、或は金、或は銀、水精・琉璃・明月の神珠・象・馬・車輿・玉女・珊瑚・珂貝・妓樂・鳳凰・孔雀、或は日月星辰、寶瓶・四華・梵志・道士なり、此れは是れ諸國の好喜む所の吉祥の瑞應なり。若し當に之を見るべきならば善と稱し量り無し、此れは是れ瑞應にして國の吉祥なり。諸の弟子曰く「寧ろ更に殊特の吉祥有る可し、身に於て益有り終に天上に上る」と。尼犍、答へて曰く「先師より以來未だ此に過ぐる有らず。書籍に載せず」と。諸の弟子曰く「近く聞く、釋種出家し道を爲し端坐すること六年、魔を降し佛を得、三達礙り無しと。試みに共に往きて問ひ、知る所を博く探らむ、何如むぞや大師よ」と。師徒弟子五百餘人山路を經涉し佛の所に往到り佛の爲めに禮を作す。梵志の位に坐し叉手長跪し佛、世尊に白して曰く「諸國の吉祥好き所此の如し、不審なり、更に、是に勝る者有りや不や」と。

佛、梵志に告げたまはく「卿の論ずる所の如きは世間の事なり、順なれば則ち吉祥、反すれば則ち凶禍なり。人をして神を濟ひ苦を度せしむること能はず。我が聞く所の如きは吉祥の法なり、行者福を得永く三界を離れ自ら泥洹を致す」と。是に於て世尊、偈を作して曰はく、

【二】閻浮利地。普通、南閻浮州といひ須彌山の南海中にある三角形の島州の名。

【三】珂貝。大なる貝。

梳くの人、啓して言く「白髪、已に生ず」と。勅して之を拔かしめ擧げて案上に著く。王、白髪を見て涕泣し、命じて曰く「第一使者、忽然として復び至る。今、頭已に白し。宜しく當に出家し沙門と行作り自然の道を求むべし。髪を掌中に擎げ自ら偈を說きて言く、

今、我が上體の首に　白(髪)生え爲めに盜まる。〔八〕　已に天使の召す有り、　時に正に宜しく出家すべし。

卽ち、群臣を召し太子を立てて王と爲し、沙門と行作り山に入り道を修め人の壽を畢り卽ち、第二天上に生れ天帝釋の太子と爲る。後に於て天下を領理すること亦大王の如し。復、頭を梳く人に勅するやう「若し白髪を見なば便ち當に我に啓すべし」と。久しきに至り復啓す。白髪已に生じ勅して之を拔かしむ。擎げて掌中に著き偈を說きて言く、

今、我が上體の首に　白髪生え爲めに盜まる。　已に天使の召す有り　時に正に宜しく出家すべし。

復、群臣を召し太子を立てて王と爲し、卽ち、沙門と行作り山に入り道を修む。人の壽を畢り復天上に生れ天帝釋と爲る。前の天帝釋、天の壽を畢り下りて世間に生れ聖王の爲めに太子と作る。此の三聖主、更に父子と爲る。上は天帝と爲り下は聖主と爲り中は太子と爲る。各各三十六反數千萬歲なり、終りて復始む。此の三事を行じ自ら佛と爲るを致せり。爾の時の父とは今の我が身是れなり、太子とは舍利弗是れなり、王の孫とは阿難是れなり。更に相ひ從つて生れ展轉して王と爲り以て天下を化す。是を以て特尊三界に比無し」と。佛、是を說き給ふの時、國王・太子幷びに諸の太子皆大に歡喜し佛の五戒を受け優婆塞と爲り須陀洹道を得たり。

吉祥品　第三十九〔一〕

【八】白生爲被盜。意味不明。

【一】吉祥品。小誦（Khuddaka-pāṭha）吉祥經（Maṅgala-sutta）。

きて一面に坐して法を聽けり。諸の太子等即ち、佛に白して言く「佛道・清妙・玄遠にして及び難し、古より以來頗、國王・太子・大臣、長者の子有り、國の吏・民の恩愛・榮華を捨て沙門と行作る者ありや」と。佛、諸の太子に告げたまはく「世間の國王の榮樂の恩愛は幻の如く化の如く夢の如く響の如し。卒に來り卒に去り常に保つ可からず。又、國王・太子・三事を以ての故に道を得る能はず、何をか三事と謂ふ。一には憍恣にして佛經を學問し妙義を以て神本を濟ふを念はず、二には貪取して布施するを念はず、下貧しく困厄するを、群臣・將士の所有財寶を民に與へて共に以て財本を修むことをせず、三には色欲愛樂の事を遠離し牢獄憂煩の惱みを捨棄し沙門と行作り衆の苦難を滅し以て身本を修むこと能はず。是を以て菩薩は生るゝ所王と爲り此の三事を除き自ら致して佛たるを得たり。又三事有り、何をか謂つて三と爲す。一には少壯にして學問し國土を領理し民庶を率ゐ化して十善を行はしむ。二には中に貧窮・孤寡に財施を以てし群臣・將士民と同じく歡ぶ。三には毎に無常の久しく留まらざるを計り、宜しく當に出家し沙門と行作るべし、苦の因緣を斷ち更に生死する勿し、三事施さずむば獨り得る所無し。」と。

是に於て世尊、而ち自ら陳べて曰く「昔、我、前世轉輪聖王と作り名づけて南王皇帝と曰ふ。七寶導き從ひ宮觀・浴池宮に行き園に戲むる。及び群臣・太子・夫人・婇女・象馬・厨宰各、八萬四千なり。子千人有り勇猛・精鋭にして一人、千に當る。虛空を飛行し四方に周遊す。自在の所爲、當り前むものなし。其の壽八萬四千歲なり、法を以て政を治め人民を枉げず。

爾の時、聖王、欻ち自ら念じ言ふやう「人命短促にして無常保ち難し、但、當に福を作し以て道眞を求むべし、常に世間人民に布施するを念ひ所有財物を民に與へ之を共にす、已に福德を種ゆ、唯、當に出家し沙門と行作るべし。貪欲を斷絕し乃ち苦を滅するを得む」と。王、即ち、頭を梳く人に勅するやう「若し頭の髮白きを見たば便ち當に我に啓すべし」と。久しく數萬歲に至る。頭を

【七】厨宰。料理人。

じて其の宮内を照す。羅刹、光を見て是れ異人なるを疑ひ、即ち、出で丶佛を見、便ち、毒心を起し前みて佛を噏はむと欲す。光、其の目を刺す。山を擔ひて火を吐くに皆化して塵と爲る。久しきに至り疲頓し然る後降化す。佛を請じて坐に入らしめ頭面に禮を作す。佛、爲めに經を說き一心に法を聽き、即ち、五戒を受け優婆塞と爲る。里吏、食を催ほし兒を奪ひ將ゐ來る。宗家・嘷哭[六]し道に隨つて來る。觀る者無數之が爲に悲哀す。吏、兒を抱き食を擎げ羅刹の前に著く。羅刹、即ち、此の小兒を持て食を擎げ佛前に至り長跪して佛に白して言く「國人、相ひ差次し小兒を以て食と爲す。我、今、佛の五戒を受く、復、此の小兒を食するを得ず、請ふ、小兒を以て佛に布施せむ。佛の給使と爲し給へ」と。佛、爲めに之を受け、即ち、呪願を說き給ふ。羅刹、歡喜し須陀洹道を得たり。佛、小兒を以て鉢の中に著け宮門に擲げ出で、其の父母に還して之に告げて曰く「快く小兒を養へ、復、愁憂うること勿れ」と。衆人、佛を見て驚愕せざるは莫し。怪しむやう「是れ何の神ぞ、此の兒何の福にて獨り之を救ふか。羅刹の食ふ所奪ひて父母に還す」と。是に於て世尊、大衆の中央に在りて偈を說きて言はく、

　戒の德は恃怙む可し、　福報は常に已に隨ふ　法を見れば人の長と爲り、　終に三惡道を遠く。
　戒を愼み苦畏を除く、　福德は三界の尊たり、　鬼・龍と蛇毒の害は、　有戒の人を犯さず。

佛、偈を說き已り給ふ。無央數の人佛の光像を見乃ち至尊、三界に比無きを知る。便ち、皆化に歸し佛弟子と爲る。偈を聞き歡欣び皆道迹を得たり。

昔、佛、波羅奈國の鹿野場上に在し天・人・龍・鬼・國王・臣民、計る可からざる衆の爲に法を說き給へり。

時に、大國王の太子、小國王の世子五百餘人を將ゐ從へ佛の所に往到り、佛の爲めに禮を作し却

【六】嘷哭。さけびなくこと。

民は苦毒を被り復堪へ諸はず。皆、想念を發し、王を謀り圖らむと欲す。諸の姦臣の輩、王を將ゐ獵に出づ。城を去ること三四十里なり。曠野の澤の中に於て王を牽き殺さむと欲す。王、左右に問ふやう「何に緣りて我を殺す」と。答へて曰く「昔日、民、慕ひ豐樂し王を奉ずるに禮を以てせり。(今は)民困しみ思破れ家を破り國を圖るなり、」と。王、之に告げて曰く「卿等、自ら爲して我れの本造りしに非ず。我を枉殺せば神祇之を知る。我れに一つの願を發すを聽せ、死するも恨あらず、卽ち、願ひて曰く、「我、本荒を開き穀を出し民を養ひ、來る者皆活き富樂極り無し、自ら共に我を擧げ立てゝ國王と爲す。諸國を案ずるに依り自ら共に此を作す。今は反つて我を殺す、我、實に惡爲し。此に於て人民、若し我れ死すれば願くば羅刹と作り還び故身の中に入り、當に此の怨を報ゆべし。」と。是に於て絞殺し屍を棄てゝ去る。三日の後、王神卽ち羅刹と作り還び故身の中に入り自ら阿羅婆と名づく。卽ち、起ちて宮に入り新王を絞殺し幷びに後宮・婇女・左右の姦臣卽ち皆、之を殺す。羅刹、瞋恚し宮を出でて盡く人を殺さむと欲す。國中、三老を草索にて自ら縛り來りて羅刹に向ひ自首す。此れは是の姦臣の爲す所なり、是れ細民の能く知る可き所に非ず。乞匃ふ、原恕されよ。還び國を治めよ」と。曰く「我は是れ羅刹なり、何ぞ人等と共に事に從はむや、食飮、當に人肉を得べし、羅刹は急性にして怒りて思議せず」と。三長、曰く「國は是れ王の許なり、故に當に前の如くすべし、食飮須ふる所當に相ひ【五】差次すべし。」と。國王、共に宣令を出す、人民、皆共に籌を探り此を以て次と爲す。家の一小兒を出し生けるを用つて食と作し羅刹王を食ふ。三四千の家、正に一戶有りて佛弟子と爲る。居門、精進し五戒を犯さず。民に隨つて籌を探り、第一の籌を得たり。一小兒有り、當に先に鬼王に食はしむべし。賢者大小懊惱し啼哭す、遙に崛山に向ひ佛の爲めに禮を作し過を悔ひ自ら責む。佛、道眼を以て其の辛苦を見、便ち、自ら說きて言く「是の小兒に因つて當に無數の人を度すべし。」と。便ち、獨り飛往して羅刹の門に至る。現に光相を變

【五】差次。差別。

恚り逸り蹴り近づく者卽ち死し遠き者走るを得たり。象逐ふて置かず。時に、山の脇に諸の年少の道人有り多力勇健なり。山中に學道すること大いに久しく未だ定意を得ず、遙に此の象の追逐し人を殺すを見る。道人、人を憐愍むの故に自ら勇健を恃み往きて之を救はむと欲す。佛、已に遙に見て此の比丘の神象の爲めに殺さるゝを恐れ、佛、卽ち、邊に到り大光明を放ち給ふ。象、佛の光を見て怒止み恚解け復追逐うて人を殺さず。比丘、佛を見て迎へ爲に禮を作す。佛、比丘の爲に卽ち、偈を說きて言はく、

妄りに神象を嬈す勿れ、　苦痛と患を招くを以てなり、　惡意は自ら殺すことと爲り、　終に善方に至らず。

比丘、偈を聞き卽便ち稽首し懺悔し過を謝す。內に自ら責を篤くし深く惟うて非と爲す。卽ち、佛前に於て應眞を逮得せり。時に、捕象の人卽ち皆還び甦り走る者尋ね還り皆道迹を得たり。

昔、佛、羅閱祇の耆闍崛山の中に在しき。

時に、國王、瓶沙に一大臣有り、事を犯し免退し南山の中に徙著す。國を去ること千里あり、外は出りて來る人無く五穀熟らず。大臣、中に到りて泉水流れ溢れ五穀大いに熟る。四方の諸國、飢寒有る者皆此の山中に來至る。數年の中に便ち三四千の家有り。來る者に田地を給與し生活を得せしむ。其の中の三老・諸の長・宿年と共に議るやう「國の君無きは猶し身の首無きがごとし。」と。相ひ將ゐて大臣の所に至り大臣を擧げて國王と爲す。大臣、長老に答へて曰く「若し我を以て王と爲さば當に諸國の王の法の如くすべし。左右の大臣、文武の將士上下[四]朝直し女を發し、宮に租稅・穀帛を斂し當に民の法の如くすべし」と。諸の國老曰く「唯、然なり、命を奉じ一に王法に隨はむ」と。卽ち、立てゝ王と爲す。群臣を文武の上下に處置す。人民を發調し城を築き舍と宮殿と樓觀を作る。

【四】朝直。參內すること。

臣の正直の諫を信ずべし、讒言を受け以て正直を傷くること無れ、五には欲貪・樂心を節し放逸ならざれ。此の五事を行はば名四海に聞へ福祿自ら來る。此の五事を捨てなば衆綱擧がらず、民困しみ、則ち思亂れ、士勞して則ち勢擧がらず、福無く鬼神助けず自ら用つて大理を失ふ、忠臣敢て諫めず心逸り國理まらず臣諍ひ民則ち怨む。若し是の如くならば身、令名を失ひ後は則ち福無し。」と。是に於て世尊、重ねて偈を說きて言はく、

夫れ世間の將と爲らば　正を修め[三]阿枉げず　心を調へ諸惡に勝つ、　是の如きは法王と爲る。　正を見て能く惠を施し、　仁愛好く人を利す、　既に利して平均を以てす、　是の如きは衆、附親しむ。

佛、偈を說き已り給ふ。是の時、王大に歡喜び、佛前に起ち住し五體を地に投げ懺悔し佛に謝し、卽ち、五戒を受く。佛、重ねて法を說き給ひ須陀洹道を得たり。

昔、佛、舍衞國の祇樹精舍に在し諸の天人・國王・大臣・四輩の弟子の爲めに無上の大法を說き給へり。

時に、舍衞國の南に深山有り、其の中に常に野象を出す。象に三色有り、白と靑と黑の者なり。國王、好名の鬪の大象を得むと欲す。輙ち、人をして往きて捕取へ將來して象師に付け調はしむ。三年の中に便ち乘騎す可く、亦鬪はしむ可し。時に、一神龍象の生るゝ有り、身白きこと雪の如く尾、赤きこと丹の如く兩の牙金色の如し。獵師、此の非常の好き象を見て還りて國王に白しぬ。此の大象有り其の形是の如し、宜しく大王の乘たるべし。王、卽ち、捕象師三十餘人を募り、遣はして此の象を捕へしむ。人衆、象の所に往到り、羂を張り象を捕へむと欲す。而して此の神象、諸の人の意を知り卽便ち來り前みて羂の中に墮つ。衆人、皆來りて之を捕へむと欲す。象、便ち、瞋

【三】阿枉。おもねりまがること。

「國土・人民・群僚・百官、悉く自ら常の如きや不や」と。王、曰く「人と爲り年幼にして化を綏んずる能はず、皆佛恩を蒙むり國土他無し」と。佛、王に告げて曰く「王、今、自ら知るや、本所より來り、何の功德を作り此の王位を得たるかを」と。王、曰く「不審なり、頑愚達せざるなり、先世の從來する所を知らず」と。佛、大王に告げ給ふやう「本、五事を以て國王と爲るを得、何等をか五と爲す。一には布施、國王と爲るを得、萬民宮を奉獻し殿堂・資財極り無きを觀る。二には寺廟を興立し三尊に床・榻・幃帳を供養し是を以て王と爲る。正殿の御座に在り國を理む。三には親しく身三尊及び諸の長德を禮敬す、是を以て王と爲る、四には忍辱し身三口四及び意惡無し、是を以て王と爲る。一切見る者歡欣ばざるは莫し。五には學問して常に智慧を求む、是を以て王と爲り、國事を決斷し奉用せざるは莫し。此の五事を行はば世世王と爲る。是に於て世尊偈頌を以て曰く、

人、其の上の君と父と、　師と道士を奉ずるを知れ。　信・戒・施・聞と慧　終に吉にして生る、所安かなり。　宿命に福慶有らば　世に生れ人尊と爲る、　道を以て天下を安んじ、　法を奉じ從はざる莫し。　王は臣民の主爲り、　常に慈を以て下を愛せ、　身率ゆるに法戒を以てし、　之に示すに法の咎を以てせよ。　安に處りて危を忘れず　慮明かなれば福轉た厚し、　福德の反報は　尊と卑とを問はざればなり。

佛、王に告げて曰く「王、前世の時、大王の給使を爲し、佛を奉ずるに信を以てし、法を奉ずるに信を以てし、法を奉ずるに淨を以てし、僧を奉ずるに敬を以てし、親を奉ずるに孝を以てし、君を奉ずるに忠を以てせり。常に一心に行じ精進布施せり、身を勞し體を苦しめ初めより懈惓せず。是れ福、身を追ひ王子と爲るを得、王を補ふの榮なり。今は富貴にして反つて懈怠す。夫れ國王と爲らば當に五事を行ふべし、何をか謂つて五事と爲す。一には萬民を領理し枉濫有ること無れ、二には將士を養育し時に隨つて稟與せよ、三には本業を念修し福德絕ゆること無れ、四には當に忠

【一】幃帳。とばり。

【二】稟與。ふちまいすること。

今日、三處懊惱、涕哭す、寧ろ言ふ可きなり。其の前世其の喜を助くるを以ての故に此の三人は報いて以て涕哭すと。是に於て世尊、即ち、偈を說きて言はく、

識神、三界と、善と不善の五趣を造る。陰に行き而も默して至る、往く所響の應ずるが如し。

欲・色・不色の有、一切は宿行に因る、種は本の像に隨ふが如く、自然の報いは影の如し。

佛、偈を說き已り長者をして意解らしめむと欲し、即ち道力を以て其の宿命を示し皆、天上・龍中の事を見せしめ給ふ。長者、意解け欣然として即ち起ち、長跪叉手し佛に白して言はく「願くば大小ともに佛弟子と爲り、五戒を奉受し優婆塞と爲らむ」と。佛、即ち、戒を授け重ねて爲に法の無常の義を說き給ひ、大小歡欣し皆須陀洹を得たり。

道利品　第三十八

昔、國王有り、正法を治め行ひ民其の化を慕ふ。太子有ること無く以て愁憂と爲す。佛、來りて國に入り給ふ。便ち出でゝ尊を覲、經を聽き歡欣びて即ち五戒を受く。一心に奉じ敬ひ、唯、子有らんことを願ひ、晝夜精進し三時懈らず、一給使有り、其の年十一常に王の使と爲る。忠信、法を奉じ威儀を失はず、謙卑・忍辱・精進し一心に學び經偈を誦す。時を知り先に起ち已に香火を辦ず、數年の中精進すること是の如く以て勞と爲さず。卒に重病を得て遂に無常を致せり。其の神來り還び王の爲めに子と作る。乳哺して長大し年十五に至り立てゝ太子と爲す。父王、命終り代を襲ぎ王と爲る。憍慢・自恣・婬泆・欲樂し晝夜耽荒にして國事を理めず、臣僚、朝を廢し民其の患を被むる。佛、其の行を知るも本より會はず、識りて諸の弟子を將ゐ其の國に往到り給ふ。王、佛の來り給ふを聞き先王の法の如く、大衆にて奉迎し地に稽首し却きて王位に坐す。佛、王に告げて曰く

【三】欲・色・不色有。明本により欲・色・不色有とす、欲界・色界・無色界の三界をいふ。

くして遣送す。家に還り啼泣し自ら止む能はず。是に於て世尊、其の愚を愍傷み、往きて之に問訊し給ふ。長者の室家大小佛に見え悲感し禮を作し具に辛苦を陳ぶ。佛、長者に告げ給ふやう「止息りて法を聽け、萬物は無常なり。久しく保つ可からず、生るれば則ち死有り罪福相ひ追ふ。此の兒三處其の爲に哭泣し懊惱し斷絶し亦復勝ふること難し。竟に誰か兒と爲り何者か親と爲る」と。是に於て世尊、即ち偈を說きて言はく、

命は華、菓の熟するが如し、　常に會ず零落するを恐る、　已に生れて皆苦有り　孰れか能く不死を致さむ。　初より愛欲を樂しみ　婬に因り胞胎に入り、　形を受け命は電の如く　晝夜、流れて止み難し。　是の身死物と爲り　精神、形法無し、　假令ひ死するも復生れ、　罪福敗亡せず。　終始、一世に非ず　愛癡に從ひ久しく長し、　自ら作して苦樂を受け、　身死すも神喪はず。

長者、偈を聞き意解け憂を忘る。長跪して佛に白すやう「此の兒の宿命何の罪釁を作し盛美の壽にして而も便ち中夭せるや。唯、願くば本の所行の罪を解說せよ」と。

佛、長者に告げたまはく「乃往昔の時一小兒有り、弓箭を持ち神樹の中に入りて戲むる。邊に三人有り亦中に在り。樹上を看るに雀有り、小兒射むと欲す。三人、勸めて言く、若し能く雀に中つれば世の健兒と稱せむと。小兒意美しく弓を引きて之を射る。雀に中り即ち死して地に墮つ。三人、共に、笑ひ之を助け歡喜して各自ら去れり、生死を經歷すること無數劫の中在所に相ひ遭ひ共に會して罪を受く。其の三人とは、一人は福有り、今、天上に在り、一人は海中に生れ化生の龍王と爲り、一人は今日の長者の身、是れなり、此の小兒は前に天上に生れて、天の爲めに子と作り、命終り來下りて長者の爲めに子と作り、樹より墮ち命絶えて即ち海中に生れる。化生の龍王の爲に子と作る。即ち、生れし日を以て化生の金翅鳥王、取りて之を食ふべし。

して一法を持たしむるも尙攻む可からず。何ぞ況んや、盡く是の如き七法を持つをや」と。是に於て世尊、卽ち、偈を說きて言はく、

利の勝は恃むに足らず、　勝つと雖も猶復苦なり、　當に自ら法に勝つを求むべし、　已に勝ちて生ずる所無し。

雨舍丞相、佛の偈を說き給ふを聞き卽ち道迹を得、時に會の大小皆、須陀洹道を得たり。公、卽ち、坐より起ち、佛に白して言く「國事煩多なり、還らむと欲す、辭するを請ふ」と。佛、言はく「宜しく是の時を知る可し」と。卽ち、坐より起ち佛を禮して去る。還り至り具に事を王に白す。卽ち、止めて攻めず。佛の嚴教を持ち以て國內を化す。越祇の國人卽ち、來り命に順ひ、上下相ひ奉じ國遂に興隆せり。

生死品　第三十七

昔、佛、舍衞國の祇洹精舍に在し天人・國王・大臣の爲めに廣く妙法を說き給へり。一梵志長者有り、路の側に居在し財富無數なり。正に一子有り、其の年二十、新に婦を娶る。未だ七日に滿たざるに夫婦相ひ敬ひ言語相ひ順ふ。婦、其の夫に語るやう「後園の中に至り看て戲れむと欲す、爾るを得と爲すや不やと。上春、三月夫婦相ひ將ゐ後園の中に至る。一榛樹有り高さ大にして華、好し。婦、華を得むと欲するも人の取りて與ふる無し。夫、婦の意を知り榛華を得むと欲し、卽便ち、樹に上り正に一華を取り、復、一を得むと欲し展轉し樹に上り乃ち細枝に至る。枝折れ地に墮ち傷き中り卽ち死す。居家の大小奔波・跳走し兒の所に往き趣むき天を呼び傷哭し斷絕し復甦る。中外の宗族來る者無數なり。皆甚だ悲痛す、聞く者心を傷めざる莫く見る者痛哀せざるは莫し。父母・妻息天地を怨み咎めて謂ふやう「護らざると爲す」と。棺殮し、衣を被ふこと法の如

【一】榛樹。からなし、菴婆樹のことなり。

や」と。國に賢公有り[二]丞相にして名づけて雨舍と曰ふ。對へて曰く「唯、然なり。」と。王、雨舍に告ぐるやう「佛、是を去ること遠からず、聖哲、三達し事として貫かざる靡し。汝、吾が聲を持ち、佛の所に往至り、卿の意知るが如く委しく悉く之を問へ、往きて彼を伐たむと欲す、寧ろ勝つことを得るや不や」と。丞相、教を受け即ち車馬を嚴かにし精舍に往至り、前みて佛の所に到り頭面を地に着け佛の爲めに禮を作す。佛、命じて坐せしむ。公、即ち、坐に就く。佛、國の丞相に問ひたまはく「何所より來る」と。公、言はく「王の使臣として來る、佛の足を稽首し起居・飡食常の如きかを問訊すと」と。佛、即ち、公に問ひたまはく「王及び國土の人民、臣下皆自ら平安なるや不や」と。公、言く「國主、及び民皆佛の恩を蒙る」と。公、佛に白して言はく「王、越祇國と嫌有り、往きて之を伐たむと欲す、佛の聖意に於て勝を得可きと爲すや不や」と。佛、丞相に告げ給ふやう「是の越祇國の人民七法を奉行す。之に勝つ可からず。王よ、諦に思ひ妄に擧動すること勿る可し」と。公、即ち、佛に問ふやう「何等をか七法となすや」と。佛、言はく「越祇國の人數相ひ聚會り正法を講議し福を修め自ら守る。此を以て常と爲す、是を謂ひて一と爲す。越祇の國人、君臣常に和し、任ずる所忠良なり、教諫、承用し相ひ違戻せず、是を謂ひて二と爲す。越祇の國人法を奉じ相ひ率ひ調はざる所無し、敢て過を犯さず上下常に循ふ。是を謂ひて三と爲す。越祇の國人、禮讓にして謹み敬ひ、男女別有り長幼相ひ承け儀法を失はず。是を謂ひて四と爲す。越祇の國人、父母に孝養し師長に遜悌し誡を受け教誨す、以て國則と爲す。是を謂ひて五と爲す。越祇の國人、天に承け地に則る。[三]社稷を敬畏し四時を奉順し民農廢れず。是を謂ひて六と爲す。越祇の國人、道を尊び徳を敬ひ國に沙門有り道を得、應眞なり。方に遠く來る者に衣被・床臥・醫藥を供養す。是を謂ひて七と爲す。夫、國主と爲り此の七法を行ぜば危を得べきこと難し。天下の兵を極め共に往きて之を攻むるも勝を得ること能はず。」と。佛、丞相に告げたまはく「若し越祇國人を

第二十六品、Mya-ṅan-las-ḥdas-pa(涅槃)、出曜經第二十七品、泥洹品。

【二】丞相。大臣。

【三】社稷。社は上の神、稷は穀の神。

に於て世尊、偈を以て報へて曰はく、

[二]流を截つて渡り、　欲無きこと梵の如し、　行已に盡くるを知る、　是を梵志と謂ふ。　[三]二法無きを以て、　淸淨に淵を渡り、　諸の欲結の解くるを　是を梵志と謂ふ。　[四]族と結髪とを名づけて　梵志と爲すに非ず、　誠行と法行と、　淸白ならば則ち賢なり。　[五]飾髪も慧無くむば、　草衣も何をか施さむ、　內に著を離れずむば、　外に捨つるも何の益あらむ。　[六]婬と怒と癡と　憍慢の諸の惡を去り、　蛇の皮を脫する如きを　是を梵志と謂ふ。　[七]世事を斷絕し、　口に麁言無く、　八道を審にし諦にす、　是を梵志と謂ふ。　[八]已に恩愛を斷ち、　家を離れて欲無く　愛著已に盡く、　是を梵志と謂ふ。　[九]人衆の處を離れ　天衆に墮せず　諸衆に歸せず、　是を梵志と謂ふ。　[一〇]自ら宿命の　本と更に來る所とを識り、　生死盡くるを得、　叡通と道玄とあり、　明に[一一]能默の如き、　是を梵志と謂ふ。

佛、偈を說き已り諸の梵志に告げ給ふやう「汝等修むる所自ら謂へらく、已に涅槃に達せりと。少水の魚の如し、豈、長き樂有らむや、本無きを合する者なり」と。梵志、經を聞き五情內に喜悅を發す。長跪して佛に白すやう「願くば弟子と爲らむ」と。頭髮、自ら墮ち卽ち沙門と作る。本、行淸淨なり、因りて道を得阿羅漢と爲り、天・龍・鬼神皆道迹を得たり。

[一]泥洹品　第三十六

昔、佛、王舍城の靈鷲山の中に在しゝ時、諸の比丘千二百五十人と俱なりき。時に、摩竭國王を號して阿闍世と名づく。領する所の五百國各姓名有り、近くに一國有り、名づけて越祇と曰ひ、王命に順がはず往きて之を伐たむと欲す。卽ち、群臣を召し講室に議りて曰く「越祇の國人富樂熾盛なり、多く珍寶を出し我に首伏せず、寧ろ兵を起し往きて之を伐つ可きや不

【二】此の偈、Dhammapada. 第三百八十三偈、出曜經梵志品、第十偈。
【三】此の偈、Dhammapada. 第三百八十四偈、出曜經梵志品、第十三偈。
【四】此の偈、Dhammapada. 第三百九十三偈、Udāna varga. 梵志品、第十偈。
【五】此の偈、Dhammapada. 第三百九十四偈。
【六】此の偈、同じく、第四百七偈、出曜經梵志品、第四十一偈。Udāna varga. 梵志品、第十九偈。
【七】此の偈、同じく、第四百八偈、出曜經梵志品、第五十七偈、Udāna varga. 梵志品、第六十五偈。
【八】此の偈、同じく、第四百十五偈、Udāna varga. 梵志品、第四十六偈、出曜經梵志品、第三十七偈。
【九】此の偈、同じく、第四百十七偈、Udāna varga. 梵志品、第五十四偈。
【一〇】此の偈、同じく、第四百二十三偈、Udāna varga. 梵志品、第五十七偈、出曜經梵志品、第四十七偈。
【一一】能默。梵語 Muni(牟尼)の義譯、身口意の三業を靜止する學道者の尊號、佛陀も亦牟尼と稱す。
【一】泥洹品。Ud ̄na varga.

梵志品 第三十五

昔、私訶牒國の中に大山有り、私休遮他と名づく、山中に梵志有り五百餘人各神通に達す。自ら相ひ謂つて曰く「吾等、得る所は正に是れ涅槃なり」と。佛、始めて世に出で初めて法鼓を建て甘露の門を開き給ふ。此等の梵志聞きて而も就かず、宿福應に度すべし。佛、往きて之に就き獨り行きて侶無し。其の路の口に到り一樹下に坐し給ふ。三昧定意にて、身に光明を放ち一山の中を照す、狀、火を失するが如く火中盡く燃ゆ。梵志、怖懼れ水を呪して之を滅せんとし、其の神力を盡くすも滅せしむること能はず、怪しみて捨て走り路より山を出づ。遙に世尊の樹下に坐禪し給ふを見る。譬へば日の金山の側に出づるが如し、相好炳然たり、月の星の中にあるが如し、是れ何の神ぞやと怪しみて就きて之を觀る。佛、命じて坐せしめ、問ひ給ふやう。「所從り來るや」と。梵志、對へて曰く「此の山中に止まり道を修せしより來久し、且つ、欻ち火起り山の樹木を燒き怖れて走り出づ」と。佛、梵志に告げたまはく「此れは是れ福火にして人を傷損はず。卿等の癡結の垢を滅せむと欲するなり」と。梵志の師徒顧みて相ひ謂つて曰く「是れは何の道士ぞや、九十六種未だ曾つて此の師有らず、曰く、曾つて聞く、白淨王の子名づけて悉達と曰ふ、聖位を樂しまず出家し佛を求むと。將是れ無きや」と。徒等、師に啓すやう「共に佛に問ふ可し、梵志所行の事如法と爲すや不やと」と。師徒の等共に起ちて佛に白すやう「梵志の經法四無礙と名づく、天文・地理・王者の治國・領民の法、并びに九十六種の道術應ずる所の行法なり、此の經は是れ涅槃法と爲すや不や、願くば佛よ、解說して未聞を開化せよ」と。佛、梵志に告げ給ふやう「善く聽き之を思へ、吾、宿命、無數劫より來常に此の經を行じ亦五通を得山を移し流に住し更に生死を歷ること計數す可からず、既に涅槃を得ず亦復得道有るを聞かざれば汝等の如きは梵志と名づくに非ず」と。是

【一】梵志品。Dhammapada. 第二十六品、Brāhmaṇa（婆羅門）、Udāna varga. 第三十三品、Brāhmaṇa（婆羅門）、出曜經第三十四、梵志品。

來る者有り網に觸るれば箭發し箭に中れば則ち死す。一端正の年少の女子有りて此の園を守る。人往かむと欲すれば遙かに喚んで道を示し、乃ち園に入るを得、道を知らざれば必ず箭を發し殺す所と爲る。而して此の女子獨り守り悲しみ歌ふ。其の聲妖亮、聽く者車を頓め馬を止め迴旋し、躁〔三〕躧せざるは莫し。而して之に趣かむと欲し、盤桓〔四〕して去らず皆聲の響に坐す、時に、此の比丘、分衞して行き、還道に歌聲を聞き、耳を側て音を聽き五情逸豫す。心迷ひ意亂れ貪著して捨てず。想ふに是の女人必ず大端正なり、欲を思想し起ちて見坐して言語し便ち旋りて往趣く。未だ中間に到らざるに意志悦惚として手に錫杖を失ひ肩に衣鉢を失ひ殊に自ら覺らず。佛、三達を以て此の比丘の小らく復前み行かば箭の爲に殺されん。福、應に道を得べきに、愚の爲に迷はされ欲蓋の、覆ふ所となるを見、其の愚を憐愍み、之を度脱せむと欲し、自ら白衣〔五〕を化作し其の邊に往到り、偈を以て之を呵して曰く、

〔六〕沙門何にか行くや。　意の如くにして禁ぜず、　歩歩、著粘して、　但、思に隨つて走る。　袈〔七〕裟を肩に被るも　惡を爲さば損はざらんや。　惡行を行ぜば　斯れ惡道に墮す。　流〔八〕を截りて自ら持ち、　心を折りて欲を却けよ、　人、欲を割ずむば　一意、猶走る　之を爲せ之を爲せよ、　必ず強めて自ら制せよ。　家を捨てて而も懈らば、　意、猶復染む。　行懈り緩む者は意を誘ひて除かず、　淨き梵行に非ずむば、　焉むぞ大寶を致さむ。　調はずむば誡め難く、　風の樹を枯すが如し。　自ら作すは身の爲めなり、　曷んぞ精進せざるや。

此の偈を說き已り即ち自ら形を復し給ふ。相好炳然として天地を光照す。若し見る者有らば迷解け亂止り各、其の所を得たり。比丘、佛を見奉り心意霍開し冥より明を闚ふ如し。即ち、五體を地に投じ佛の爲めに禮を作し叩頭し過を悔ひ懺悔し佛に謝せり。內に止觀を解り即ち羅漢を得、佛に隨て精舍に還り聽く者數なく皆法眼を得たり。

〔三〕躁躧。足ふみのこと。

〔四〕盤桓。たちもとほること。

〔五〕白衣。俗人の別稱、婆羅門及び俗人は多く鮮白の衣を服る故である。之に對し沙門を緇衣又は染衣といふ。

〔六〕此の偈、Udāna-varga. 第十一品、第七偈、出曜經第十二品、第七偈。

〔七〕此の偈、Udāna-varga. 第十一品、第九偈、出曜經第十二品、第九偈。

〔八〕此の偈、同じく兩經の第一偈。

し殿前に縛著し之を射殺せむと欲す。夫人、怖れず一心に佛に歸す。王、自ら之を射る。箭還りて王に向ふ、後、射るも輒ち還る。數箭も亦爾なり。時に、王、大いに怖れ自ら解きて之に問ふて曰く「汝、何の術有りて乃ち此の如きを致す」と。夫人、對へて曰く「唯、如來に事へ三尊に歸命す。朝に佛齋を奉じ中を過ぎて飡はず、[四]八事を加行し飾を身に近けず、必ず是れ世尊の愛顧にして、茲の若し」と。王、曰く「善き哉、豈、言ふ可きや不や」と。即ち、吉星女を出し其の父母に還し大夫人を以て正に宮內を理む。王、大夫人・後宮・太子と與に嚴駕し并びに群臣と佛の所に往到り禮を作し却きて坐し叉手して法を聽く。王、即ち、佛に白し、具に事の如きを以て佛に向つて、之を陳ぶ。佛、大王に告げたまはく「妖蠱の女人に八十四態有り、大態八有り慧人の惡む所なり。何をか謂つて八と爲す。一には嫉妬、二には妄瞋、三には罵詈、四には呪詛、五には[五]鎭厭、六には慳貪、七には好飾、八には含毒、是を八大態と爲す」と。是に於て世尊、即ち、偈を說きて言はく、

天七寶を雨らすも、　欲は猶厭くこと無し、　樂少く苦多し、　之を覺れば賢と爲す。　天の欲有りと雖も　慧は捨て貪らず　樂みて恩愛を離るを、　佛弟子と爲す。

佛、大王に告げたまはく「人、罪福を行ふに各本性有り、受くる所の影報萬倍して同じからず、若し六德を行ひ齋を持てば福多し、諸佛の譽め給ふ所にして終に梵天に生る。福樂自然なり」と。佛、是を說き給ふの時王及び夫人・婇女・大臣一切心解け皆道迹を得たり。

沙門品[一]　第三十四

昔、佛、舍衛國の精舍の中に在し天・龍・鬼神・國王・人民の爲に法を說けり。時に、一年少の比丘有り、晨旦、衣服を著け柱杖と、鉢を持ち、大村中に至り分衛す。時に大道の邊に官の菜園有り、外面[二]黍穄を種え其の田の外の草中に張を施し箭を發す。若し蟲獸・盜賊の

【四】八事。一、不殺、二、不盜、三、不婬、四、不妄語、五、不飲酒、六、身口塗飾香鬘せず、七、自ら歌舞し又歌舞を觀聽せず、八、高廣の牀座に眠坐せず、以上の八なり、この八戒に中を過ぎて食せずの一種の齋戒とを加へ八齋戒といふ。

【五】鎭厭。しづめおさへること。

【一】沙門品。Dhammapada, 第二十五品、Bhikkhu (比丘)、Udāna varga, 第十一品、Dge-sbyon (沙門)、出曜經第三十三、沙門品。

【二】黍穄。もちきびとくろきび。

者無し。金千兩を懸け積むこと九十日にして、智者を募索め、能く此の女を訶め端正ならずと爲す者有らば金を以て之を與へむと。敢て應ずる者無し。女、長大を以て當に嫁處ぐべし。念へらく「當に誰に與ふべき、若し端正我が女の如き者有らば女を以て之に與へむ。聽聞くならく、沙門・瞿曇は釋迦種なり、姿容金色にして世の希有とする所なり。當に此の女を以て往きて之に配し與へむ」と。卽便ち、將ゐて佛の所に至り佛の爲めに禮を作し、佛に白して言く「我が女好潔にして世間に雙無し、年大にして嫁すべきに世に匹偶無し、瞿曇の端正は以て雙と爲す可し。故に遠く將ゐ來る、以て世尊に配さむ」と。佛、吉星に告げたまはく「卿の女端正は是れ卿の家の好きなり。我の好きが如きは是れ諸佛の好きなり。我の好む所の其の道同じからず。卿、自ら女の端正・殊好を譽む。譬へば畫瓶の中に屎尿を盛り何の奇特有りて好き所在と爲すや。眼・耳・鼻・口は身の大賊、面首の端正は身の大患なり。家を破り族を滅し親を殺し子を害ふ、皆女色に由る。吾、沙門と爲り一身獨立す、由りて尙危きを恐る。況んや禍災・殘賊の胤を受けむや。卿、自ら將ゐ去れ、吾、之を受けざるなり」と。是に於て梵志、瞋恚し便ち去る。優塡王の所に到り女の姿媚を讃え具に王に白して言く「此の女相に應ず。當に王妃爲るべし。今、年大なるを以ての故に女を送り王に與へむ」と。王、見て歡喜し卽ち之を納受れ、拜して第二の左夫人と爲す。卽ち、(與ふるに)印綬を以てし金銀・珍寶を吉星に賜與し拜して輔臣と爲す。此の女叙[二]を得、每に嫉姤と妖蠱[三]とを協せて王を迷はし數大夫人を譖る。是の如きこと一に非ず。王、返つて辱めて曰く「卿等妖媚、言返つて不遜なり、彼の人の操行貴む可し。而も返つて之を譖る」と。此の女、心忌み猶之を害せむと欲す。數譖りて已まず、王、頗る之に惑ふ。「前後を心に謀り其の齋の時を伺へ」と。因りて勸めて王に白すやう「今日の樂宜く右夫人を請ずべし」と。王、便ち、普く召し勅して皆會せしむ。大夫人、齋を持ち、獨り命に應ぜず、反覆して三たび呼ぶ、齋を執りて移らず。王、怒り降盛にして人を遣はし捉き出

【二】叙。位を與ふること。
【三】妖蠱。人の美しくして迷はすこと。

心に可なれば則ち欲と爲る、　何ぞ必ずしも獨り五欲のみならんや。　速に五欲を絕つ可し、　是れ乃ち勇士と爲す。　欲無く畏有る無く　恬惔にして憂患無く、　欲を除き使結解くるを　是を長く淵を出づると爲す。

佛、偈を說き已り其の光相を現ず。比丘、之を見て慚愧し過を悔ゆ。五體を地に投げ佛の爲めに禮を作す。重ねて爲めに法を說く。欣然として解を得、便ち、羅漢を得たり。一人行き還りて伴の顏姿を見るに常よりも欣悅す。即ち、其の伴に問ふやう「獨り何ぞ斯の如きや」と。即ち、事の如く說くやう「佛は之れ大慈愍にして度すること此の如し、世尊の恩を蒙り衆苦を免るゝを得たり」と。是に於て比丘重ねて爲めに偈を說きて言く、

晝夜嗜欲を念ひ　意走り念ひ休まず　女欲の汚露を見　想滅すれば則ち憂無し。

其の伴の比丘、此の偈を聞き已り便ち自ら思惟し、欲を斷じ想を滅し、即ち、法眼を得たり。

[一]利養品第三十三

昔、佛、諸の弟子を將ゐ俱曇彌國の美音精舍に至り　諸の天・人・神・龍の爲めに法を說き給へり。時に、彼の國王を名づけて優塡と曰ふ。大夫人有り仁愛を執行し譽を顯はし淸潔なり。王、其の操を珍とし每に私に恭敬す。佛の來化し給ふを聞き嚴駕して共に出で佛の所に往至り佛の爲めに禮を作し卻きて常の位に坐せり。佛、國王及び夫人・婇女の爲に無常と苦と空と人の由つて生るゝ所と、合會ば別離るゝこと、怨憎と會する苦と禍に由りて天に生るゝと、惡に由りて淵に入るとを說き給ふ。國王・夫人・歡欣びて信解し各、五戒を受け淸信士と(及び淸信)女と爲る。佛を禮し辭退し還び宮中に入れり。

時に、婆羅門有り、名づけて吉星と曰ふ。一好女を生み世間に比無し。年十六に至り能く誦むる

【一】利養品。Udāna varga. 第十三品、Bkur-sti(利養)、出曜經第十四、利養品。

爾の時、長者、佛の偈を說き給ふを聞き欣然として歡喜し憂を忘れ患を除く。即ち、座上に於て一切大小及び諸の聽く者二十億の惡を破り須陀洹道を得たり。

昔、佛、舍衞の精舍の中に在し天・龍・鬼神・帝王・臣民の爲に法を說き給へり。時に、遊蕩の子二人有り、共に親友と爲る。常に相ひ追隨し一體にして異無し。二人、共に議り沙門と作らむと欲す。即便ち、相ひ將ゐ佛の所に來至り佛の爲に禮を作し長跪叉手し佛に白して言く「願くば沙門と作らむと欲す。唯、聽許せられよ」と。佛、便ち、之を受け即ち沙門と作れり。佛、二人をして共に一房に止めしむ。二人、共に止り、但、世間の恩愛・榮樂を念ふ。更に共に情欲の形體を咨嗟し其の姿媚を說き專ら著して捨念せず、止息せず。無常・汚露・不淨を計らず、此を以て欝悒し病、内に生ず。佛、慧眼を以て其の想亂れ意を走らし、欲に於て心を放ち任せず。是を以て度せざるを知り給ふ。佛、一人をして行かしめて便ち自ら一人を化作し房に入り、之に問ひて言く「吾等、思ふ所の意志離れず、共に往きて其の形體を觀視る可し、何如か爲すを知らむ。但、容の想念は疲勞して益無し」と。二人、相ひ隨ひ婬女の村に至る。佛、村内に於て一婬女人を化作し共に其の舍に入りて之に告げて曰く「吾等道人、佛の禁戒を受け身に事を犯さず。意、女人の形容を觀むと欲す。當に直にて、雇ひ法の如く顧るべし」と。是に於て化女、即ち、瓔珞・香薰の衣裳を解き裸形にして立つ、臭處近づき難し、二人、之を觀るに具に汚露を見る。化沙門、即ち、一人に謂つて言く「女人の好きは但、脂粉・芬薰・衆華・沐浴し香を塗るに有るのみ、衆の雜色の衣裳を著け以て汚露を覆ふ。強き薰香を以て人の觀むことを欲す。譬へば革嚢に屎を盛るが如し、何の貪るべき有らむ」と。是に於て化比丘、即ち、偈を說きて言く、

二四 欲よ、我汝の本を知る、　意は思想を以て生ず　我汝を思想せずんば　則ち汝は有らざるなり。

【二四】此の偈、Udāna-varga. 第二品、Hdod-pa. 第一偈、出曜經、欲品第二、第一偈。

る。女、竊に之を聞き還りて其の夫に語るやう「我が家群强勢にして能く卿を奪はむ。卿生活する能はざるを以ての故なり、卿は當に云何が何の計を作さむと欲するや」と。其の夫、婦の言を聞き慚愧し自ら念うやう「是れ吾が薄福なり、生れて覆蓋を失なひ家計生活の法を習はず、今、當に婦を失はば乞匃故の如くなるべし、恩愛已に行じ貪欲の情著す、今、當に生きて別るべきならば情として豈に勝ふ可けむや。」と。思惟反覆し便ち惡念を興す。婦を將ゐて房に入り、「今、汝と共に一處に死せむと欲す」と。即便ち婦を刺し還び自ら刺害す。夫婦俱に死す。奴婢、驚き走り往きて長者に告ぐ。長者の大小驚き來り看視し其の已に然るを見る。棺殮遣送すること國の常法の如し。長者の大小憂愁し女を念ひて去らず。須臾にして佛世に在りて教化し說法し、見る者歡喜し憂を忘[二一]れ患を除くと聞き家の大小を將ゐ佛の所に往到り、佛の爲めに禮を作し卻きて一面に坐す。佛、長者に問ひたまはく「所從り來ると爲すか、何を以て樂しまず憂愁の色あるか」と。長者、白して言はく「居門不德なり、前に一女を嫁し愚夫に値愚ふ。生活する能はず。其の婦を奪はむと欲す。便ち、婦及び身を殺し共に死す。此の如く遣送し適還り過ぎ世尊を覲たてまつる」と。佛、長者に告げたまはく「貪欲と瞋恚は世の常病なり、愚癡・無智は患害の門・三界五道此に由て淵に墮す。生死に展轉すること無央數劫苦を受くること萬端なり、由りて悔ひず。豈に況んや愚人能く識るを得むや、此の貪欲の毒身を滅し族を滅す。及び衆生を害す。何ぞ況んや夫婦をや」と。是に於て世尊、即ち偈を說きて言はく、

[二二]愚は貪を以て自ら縛し、　彼岸に度るを求めず　貪は財愛の爲の故に、　人を害し亦自ら害す。

愛欲の意を田と爲し、　婬・怒・癡を種と爲す、　故に世を度する者に施さば、　福を得ること量り有ること無し。

伴少く而して貨多ければ、　商人[二三]怵惕して懼る、　欲を嗜む賊は命を害す、　故に慧あるものは貪欲ならず。

【二一】大正、妄に作るは忘の誤植。

【二二】此の偈、Dhammapada, 第三百五十五偈。

【二三】怵惕。おそるゝこと。

は今已に此の如し。萬物は無常にして一變、呼吸（の中に）あり、愚者は外を觀て其の惡を見ず。罪網に纏綿して以て快樂と爲す」と。是に於て世尊、卽ち、偈を說きて言はく、

色を見て心迷惑し、　惟無常を觀ぜず、　愚は以て美善と爲す、　安んぞ其の非眞を知らむ。

〔一五〕婬樂を以て自ら裹むは、　譬へば蠶の繭を作るが如し、　智者は能く斷棄し、　眄せず衆くの苦を除く。〔一六〕心に放逸を念はば、　婬を見て以て淨と爲し、　恩愛の意盛に增し、　是より牢獄を造る。〔一七〕意を覺り婬を滅する者は、　常に欲の不淨を念じ、　是れ從り邪獄を出で、　能く老死の患を斷つ。

是に於て年少の比丘此の女人を見る。死して已に三日、面色、〔一八〕胮れ爛れ其の臭さ近づき難し。又、世尊の淸誨の偈を聞き悵然として意悟り自ら迷謬を知り佛の爲めに禮を作し叩頭して過を悔ゆ。佛、自歸を授け將ゐて祇洹に還り給ふ。命を沒するまで精進し羅漢道を得たり。將ゆる所の大衆無央數の人、色欲の穢を見、無常の證を信じ貪愛の望み止み亦道迹を得たり。

昔、佛、舍衞の精舍に在し天・人・龍・鬼の爲に法を說き給へり。

時に、世に大長者有り財富無數にして一人の息男有り年十二・三たり。父母命終り、其の兒小く未だ生活し家を理むる事を知らず。財物を〔一九〕泮散し數年にして便ち盡く。久しき後行乞す、自らを供せざるに由る。其の父の親友長者有り大富無數なり。一日之に見え其の委曲を問ふ。長者、愍念し將ゐて歸り〔二〇〕經紀し女を以て之に配し奴婢・車馬・資財無數を給與す。更に屋宅を作り門戸を成立す。人と爲り懶惰にして計校有ること無く生活する能はず。坐して財を散じ盡くし日更に飢困す。長者、其の女を以ての故に更に資財を與ふ。故に復前の如し。遂に貧乏に至る。長者數餉るも之を用ふること道無し。念へらく、成就し叵し。其の婦を奪ひ更に人に嫁與へむと欲す、と。宗家共に議

〔一五〕此の偈、Dhammapada. 第三百四十七偈。
〔一六〕此の偈、同じく、第三百四十九偈。
〔一七〕此の偈、同じく、第三百五十偈。
〔一八〕胮。脅側の薄肉。
〔一九〕泮散。ちること。
〔二〇〕經紀。よく生活を營むこと。

長者、偈を聞き驚きて之に問ふやう「道人、何の故に而も此の語を說くや」と。道人、答へて曰く「案の上の雞とは是れ卿の先世の時の父なり、慳貪を以ての故に常に雞の中に生れ卿の爲に食はる。此の小兒は往昔、羅刹と作り卿は賈客と作る。大人船に乘り海に入り、輒ち流れて羅刹の國の中に墮して、羅刹の爲めに食はる。是の如く五百世壽盡きて來り生れ卿の爲めに子と作る。以ふに卿の餘罪未だ畢らざるの故に來りて相ひ害せむと欲する耳。今、是の妻とは是れ卿の先世の時の母なり。恩愛深く固きを以ての故に今還び卿の爲めに婦と作る。今、卿、愚癡にして宿命を識らず、父を殺し怨を養ひ母を以て妻と爲す。五道の生死に輪轉し際無し。五道に周旋するを誰か能く知る者ぞ、唯、道士有りて此を見彼を覩る。愚者知らず、豈、慙羞ざらむや」と。是に於て長者欻然として毛竪ち畏怖する狀の如し。佛、威神を現はし宿命を識らしむ。長者、佛を見奉り宿命を識る。尋いで則ち懺悔し佛に謝し便ち五戒を受く。佛、爲めに法を說き卽ち須陀洹道を得たり。

昔、佛、舍衞國の祇洹に在し法を說き給へり。

時々、年少の比丘有り城に入りて分衞す。一年少の女人を見る。端正にして比無し。心色欲に存し迷結解けず、遂に便ち病と成り食飮下らず。顏色憔悴して委臥して起たず。同學の道人往きて之を問訊し、何をか患苦する所ぞと。年少の比丘、具に其の意を說くやう「道心を壞り彼の愛欲に從はむと欲す、願、意の如くならず、愁結し病と爲る」と。同學、諫喩するも其の耳に入らず。便ち强ひて扶持し將ゐて佛の所に至り、具に事狀を以て世尊に啓白ぐ。佛、年少の比丘に告げたまふやう「汝の願得易きのみ、愁結するに足らざるなり。吾、當に汝の爲に方便し之を解かむ。且く起ちて食飮せよ」と。比丘、之を聞き坦然として意喜び氣結便ち通ず。是に於て世尊、此の比丘と幷びに大衆とを將ゐ舍衞城に入り好女の舍に到る。好女、已に死し屍を停むること三日室家悲號し埋藏するに忍びず。身體、臭脹し不淨流出す。佛、比丘に告げたまはく「汝、貪惑する所の好女人

【四】羅刹。惡鬼。

卷の第四

愛欲に喩ふる品　第三十二の二

昔、佛、舍衛國に在し天人の爲に法を說き給へり。時に、城中に婆羅門の長者有り。財富無數なり。人と爲り慳貪にして布施を好まず、食に常に門を閉ぢ人客を喜ばず。若し其れ食する時は輙ち門士に勅し堅く門戶を閉づ。「人有り妄に門裏に入らしむる勿れ」と。乞匃求索の沙門・梵志其れと相ひ見ゆるを得る能はず。爾の時長者欻ち美食を思ひ便ち其の妻に勅し飯食を作らしむ。教へて肥えし雞を殺し（九）薑椒を和調す、之を炙り飲食を熟せしむ。（一〇）飣餖即時已に辦ず。勅して外門を閉ぢ夫婦二人坐し一小兒中央に著聚し便ち共に飲食す。父母、雞肉を取り兒の口中に著く。是の如く數過ぎ初めより肯て廢せず。佛、此の長者の宿福度すべきを知り、沙門を化作し其の坐食を伺ひ現れて坐前に出づ。呪願し且つ言く「多少とも布施せよ、大富を得可し、長者頭を擧げて化沙門を見る、即ち、之を罵りて曰く「汝、道士爲り、而して羞恥無し、室家坐食す、何ぞ搪揬を爲す」と。沙門、答へて曰く「卿、自ら愚癡なり、慚羞を知らず。今、我、乞士なれば何ぞ慚羞と爲さんや」と。長者、問ひて曰く「吾、及び室家自ら相ひ娛樂す、何の故の慚羞ぞや」と。沙門、答へて曰く「卿、父母を殺し怨家に供養し慚羞を知らず。反つて乞士何ぞ慚羞ざると謂ふ。」と。是に於て沙門、即ち偈を說きて言く、

生ずる所の枝は絕えず、　但用つて食うて貪欲る。　怨を養ひ（一一）丘塚を益し、　愚人常に汲汲たり。
（一二）獄に鉤鍱有りと雖も、　慧人は牢しと謂はず、　愚なる妻子の飾を見て、　染著し、愛甚だ牢し。
（一三）慧は愛を說きて獄と爲し　深く固くして出づるを得難し　是の故に斷ち棄つべし、　欲に親しまざるを安しと爲す。

【九】薑椒。はじかみ。

【一〇】飣餖。食を貯へ殺をつらぬる義。

【一一】丘塚。小高き丘の如くに築きたるつか。

【一二】此の偈、Dhammapada. 第三　四十五偈。

【一三】此の偈は、同じく、第三百四十六偈、慧は慧人のこと。

或は多く自ら、山川と樹神とに歸して、圖像を厝立して禱祠りて福を求む。自歸の是の如きは、吉に非ず上に非ず、彼れ來りて、汝の、衆苦を度する能はず。如し自歸有らんとせば、佛と法と僧衆とにせよ、道徳の四諦は、必ず正慧を見る。生死極めて苦しくも、諦に從はば度を得、世の八難を度す、斯れ衆苦を除くなり。自ら三尊に歸するは、最吉最上なり、唯、獨り是れのみ有れば一切の苦を度す。

佛、偈を說き訖り火聲尋いで滅す。七人、安きを獲、心喜ぶこと量り無し。梵志の國人驚悚、仰瞻せざるは莫し。世尊の光明赫奕として身を分ち體を散ず。東に沒し西に現れ存亡自由なり。身より水火を出し五色晃昱す。衆人、之を見て五體を以て歸命す。是に於て七人薪より下り出づ。悲喜交集りて偈を說きて言はく、

聖人を見るは快く 依附を得るも快く 愚人を離れ得るは 善く獨り快しと爲す。正見を守るは快く、互に法を說くも快く、世と諍ひ無く 戒具は常に快し。賢をして居らしむるは快く、親の如く親しみ會し、仁智の者に近づくは、多聞、高遠なり。

是に於て七人此の偈を說き已る。諸の梵志、「願くば弟子と爲らむ」と。佛、即ち、之を受け給ひ、皆、沙門と爲り羅漢道を得。國王、臣民咸各道を修む。天尋いで大いに雨り國豐に民寧し。道化興隆し樂しみ聞かざるは莫し。

【七】四諦。現世迷界の苦果を苦諦といひ、その苦果の原因なる愛欲は苦果を起すより集諦といひ、その渇愛の寂滅せる悟界を滅諦といひ、その理想實現の方法なる八正道を道諦といふ。

【八】偈、大正本渴に作るは誤植。

る所無し。　【五】一切の意、流行し、　愛結は葛藤の如し、　唯慧のみ分別して見、　能く意の根源を斷つ。　【六】夫れ愛の潤澤に從はば、　思想は滋蔓と爲る、　愛欲、深く底無く、　老死是を用て増す。

比丘、佛の光相の炳著を見、又偈の言を聞き悚然として戰慄し、五體を地に投じ懺悔し過を謝す。内に自ら改め責め即便ち、却きて歎息す。止觀に隨ひ佛前に在り應眞を逮得せり。諸天來りて聽聞し皆歡喜し、散華、供養し善を稱すること量り無し。

＊昔、羅閱祇の南四千里に國有り。梵志數千人に奉事す。時に、國に大旱あり三年雨らず。諸の神に禱祠り遍からざる所無し。王、梵志に問ひ、其の由る所を問ふ。諸の梵志言く「吾等、當に齋戒し訖竟るべし、當に人を遣はし梵天と相ひ聞き其の災異を問はむ」と。王、言く「大いに善し。齋戒乏しき所は願くば告示せられよ」と。諸の梵志言く「當に二十車の薪・酥・蜜・膏油・華香・旛蓋・金銀の祭器を得べし、盡く用て之を用ふ」と。王、即ち、辦じて送る。出で〻城外に至り城を去ること七里にして平廣の地に薪を積むこと山の如し。共に相ひ推奬するやう「其れ身を惜まざる有らば終に梵天に生る。七人を選び得て當に火燒に就き梵天に遣し至るべし」と。七人、祭の呪願を受け訖る。蹈みて薪に上らしむ。下より火を放ち當に之を燒殺せんとす。烱烱烱然として熱氣直に至る。七人、惶懼し左右に救ひを求むるも救ふ者有ること無し。聲を擧げて曰く「三界の中寧ろ大慈愍、我が厄を念ふ者有らむ。願くば自歸を受けよ」と。佛、遙に之を知り聲を尋ねて往きて救ひ給ふ。虛空の中に在り相好を顯現し給ふ。七人、佛を見奉り悲喜踴躍す。「唯、願くば自ら歸す、我が痛熱を救へよ」と。是に於て世尊、即ち、偈を說きて言はく、

【五】此の偈、同じく、第三百四十偈。
【六】此の偈、同じく、第三百四十一偈。
※此の處大正大藏經に法句譬喩經卷第三の標題あり。

所從り來るや、此の地平坦なり。共に坐して語る可し」と。是に於て二人便ち、坐し息みて語る。即ち、化人に答ふやう「吾、家と妻子を捨てゝ沙門と作るを求め此の深山に處り道を得ること能はず。妻子と別れ本の願の如くならず、唐に我が命を喪ひ勞して獲るところ無し。今、悔ひて歸り我が妻子に見えむと欲す。快く相ひ娛樂し復更に計を作さむ」と。須臾の間に老獼猴有り、久しく樹木の間を遠離し樹無き處に在り中に於て生活す。化沙門、此の比丘に問ふやう「是の獼猴何の故に獨り平地に在り、樹木有ること無きに、云何が此を樂しむや」と。比丘、化人に答へて言く「我、久しく此の獼猴を見る。二事を以ての故に此に來り住する耳、何等をか二と爲す、一には妻子眷屬群多にして飮食して快樂口を恣にするを得ず。二には常に晝夜樹木を上下し脚の底穿ち壞れ寧息を得ず、此の二事を以ての故に樹木を捨て是の間に來り住す」と。二人、語る頃復獼猴の走りて還び樹に上るを見る。化沙門、比丘に語りて言く「汝、獼猴の還び樹木に趣くを見るや不や」と。答へて曰く「之を見る、此の獸、愚癡にして樹木を離るを得て、群從、憒鬧、勞煩を厭はず、還び中に入る」と。化人、復、言く「卿も亦是の如し。此の獼猴と復何ぞ異ならむ。卿、本二事を以ての故に此の山中に入る。何等をか二と爲す。一には妻婦、舍宅を牢獄と爲すが故に、二には兒子、眷屬を[三]桎梏と爲すが故なり、卿、是を以ての故に來り索む。道を求め生死の苦を斷ぜむとして方に家に歸り還び桎梏に著せむと欲す。牢獄の中に入り恩愛戀慕し徑地獄に趣く」と。化沙門、即ち、相好丈六を現じ金色の光明普く照し一山を感動す。飛鳥、走獸、光を尋ねて來り、皆、宿命を識り心內に過を悔ゆ。是に於て世尊、即ち、偈を說きて言はく、

[四]樹根深く固ければ　截ると雖も猶復生ずるが如く、　愛意盡く除かずむば　輙ち還び苦を受くべし。

獼猴の樹を離るる如く、　脫し得て復樹に趣く、　衆人も亦是の如く　獄を出で復獄に入る。

貪意、常に流ると爲す　習と憍慢と幷びに、　思想とは婬欲に猗り　爲ら覆うて見

【二】憒鬧。さわがしきこと。

【三】桎梏。手かせ、足かせ。

【四】此の偈、Dhammapada. 第三百三十八偈。

し二には慈貞を以て身の剛强を伏し、三には智慧を以て意の癡蓋を滅す。是の三事を持ちて一切を度脫し三惡道を離れ自ら無爲を致す。生死の憂悲、苦惱に遭はず」と。是に於て世尊、卽ち、偈を說きて言はく、

[九]護財と名くる象の如きは、　猛害にして禁制し難し、　絆に繫ぎ食を與へざるに、　而も猶暴逸の象のごとし。[一〇]本、意に純行を爲し　及び常に安ずる所を行じ、　悉く結使を捨降てなば、　鈎をもて象を制し調ふるが如し。[一一]道を樂しみ放逸ならず、　能く常に自ら心を護る是を身苦を拔くと爲す、　象の陷を出づるが如し。[一二]常に彼の新たに馳せて　亦最善なる象の調をなすと雖も、　自らを調ふるに如かず。[一三]彼れの適く能はず、　人の至らざる所なり。　唯、自ら調ふる者のみ、　能く調ふる方に到る。

居士、偈を聞き喜慶すること量り難し。內は情解釋け、卽ち法眼を得、聽く者數無く、皆道迹を得たり。

[一]愛欲品　第三十二

昔、佛、羅閱祇國の耆闍崛山の精舍の中に在し天・人・龍・鬼の爲めに大法輪を轉ぜり。時に、一人有り、家と妻子を捨て佛の所に來至り、佛の爲めに禮を作し求めて沙門と爲れり。佛、卽ち、之を受け沙門とならしめ、命じて樹下に坐し道德を思惟せしむ。比丘、敎を受け便ち深山に入る。精舍を去ること百餘里なり。獨り樹間に坐し道を思ふこと三年、心堅固ならず意退還せむと欲す。自ら念ふやう、家を捨て道を求め勤苦するも早く歸り我が妻子を見るに如かずと。此の念を作し已り便ち起ちて山を出づ。佛、聖達を以て此の比丘の應に道を得べきに愚の故に還歸るを見、佛、神足を以て沙門を化作し、便ち、往きて之を逆へ道路に相ひ見え給ふ。化人、卽ち、問ふやう

【九】此の偈、Dhammapada. 第三百二十四偈。
【一〇】此の偈、同じく、第三百二十六偈。
【一一】此の偈、同じく、第三百二十七偈。
【一二】此の偈、Dhammapada. 第三百二十二偈、Udāna-varga. 第十九、馬品、第七偈、西藏譯は巴利の偈に近し。
【一三】此の偈、Dhammapada. 第三百二十三偈、Udāna-varga. 馬品、第八偈。
【一】愛欲品。Dhammapada. 第二十四品、Taṇhā（愛欲）、Udāna-varga. 第三品、Sred-pa(愛欲)、出曜經第三、愛欲品。

羅雲、佛の懇惻の誨を聞き感激し自ら勵まし骨に刻して忘れず精進、和柔し忍を懷くこと地の如し。識想寂靜し羅漢道を得たり。

昔、佛、舍衞國の祇樹精舍に在し四部の弟子、天・龍・鬼神・帝王・臣民の爲めに大法を敷演し給へり。

時に、長者居士有り、名づけて呵提曇と曰ふ。佛の所に來詣り、佛の爲めに禮を作し、却きて一面に坐し叉手し長跪し世尊に白して曰く「久しく洪化を承け欽仰し奉顏す。逼私りて獲ず、願くば慈恕を垂れよ」と。世尊、坐せしめ、卽ち所從り來り姓字を何と爲すかを問ひ給ふ、長跪して答へて曰く「本、居士の種にて呵提曇と字す。乃ち、先王の時王の爲めに象を調ふ」と。佛、居士に問ひ給ふやう「象を調ふる法幾の事有りや」と。答へて曰く「常に三事を以用つて大象を調ふ。何を謂つて三と爲す。一には剛鈎、口に鈎け其の[七]䩭靽を著く、二には食を減じ常に飢え痩せしむ、三には杖を捶ち其の楚痛を加ふ。此の三事を以て乃ち調良を得」と。又、問ひたまはく「此の三事を施し何をか掫治する所ぞや」と。曰く「鐵鈎・口を鈎くとは以て強を制するなり。口、食飮を與へず以て身の獷きを制するなり、杖にて捶つ如きは以て其の心を伏するなり。正に爾くして便ち調ふるなり」と。曰く「此の伏を作すは何の爲の施用する所ぞ」と。答へて曰く「是の如く伏し已り王乘に中つ可し、亦鬪はしむべし。意に隨つて前み却き罣礙有ること無し」と。又、居士に問ふやう「正に此の法有り、復、其の異有りや」と。答へて曰く「象を調ふるの法正に此の如きのみ」と。佛、居士に告げ給ふやう「但、能く象を調ふ、復、能く自ら調へよ」と。卽ち、[八]曰く「不審なり、自ら調ふる、其の義云何、唯、願くば世尊よ、彰に未聞を演べよ」と。佛、居士に告げ給ふやう「吾も亦三、有り、用つて一切の人を調ひ、亦自ら調ふるを以て無爲に至るを得、一には至誠に口業を制御

【七】䩭靽。たづな。

【八】日とあり。曰の誤字ならむ。

ち止む。佛、羅雲に語りたまはく「汝、寧ろ澡盤を惜み破るゝを恐るゝや不や」と。羅雲、佛に白すやう「足を洗ふの器は賤價の物なり。意の中に惜むと雖も大いに慇懃ならず」と。佛、羅雲に語りたまはく「汝も亦是の如し、沙門と爲ると雖も身を攝めず口麤言にして惡說中傷する所多し、衆の愛せざる所智者は惜まず、身死し神去り三塗に輪轉す。自ら生れ自ら死し苦惱量り無し。諸佛賢聖の愛惜せざる所なり。亦汝の澡盤を惜まずと言ふが如し」と。羅雲、之を聞き慚愧して怖悸す。佛、羅雲に告げたまはく「我が喩を說くを聞け、昔、國王に一大象有り、[四]猛黠能く戰ふ。其の力勢を計るに五百の小象に勝る。其の王、軍を興し國を逆へ伐たむと欲す。象に鐵鎧を被せ象士之を御す。雙の予戟を以て象の兩牙に繫く。復、二劍を以て兩耳に繫著し、曲れる刃刀を以て象の四脚に繫く。復、鐵棒を以て象の尾に繫著す。象に九の兵を被せ皆嚴利ならしむ。象は唯鼻のみを藏し護つて鬪に用ひず、象士歡喜し象の身命を護るを知る。所以は何ぞや、象の鼻は軟脆なり、箭に中れば卽ち死す。鼻を出さずして鬪ふのみ、象鬪ふこと殊に久し、鼻を出して劍を求む。象士與へず、念ふやう此の猛象身命を惜まず。鼻を出して劍を求め鼻の頭に著けむと欲す。王及び群臣此の大象を惜み復鬪はしめず」と。佛、羅雲に告げたまはく「人九惡を犯すも唯當に口を護るべし、此れ大象の鼻を護り鬪はざるが如し、然る所以は箭に中り死するを畏る。人も亦是の如く口を護る所以は當に三塗地獄の苦痛を畏るゝが故なり。十惡盡く犯し口を護らざる者は此の大象の身命を分喪へ箭に中るを計らず鼻を出し鬪ふ如き耳、人も亦是の如し、十惡盡く犯すは三塗、毒痛の辛苦を惟はざるなり。若し十善を行ひ身・口・意を攝め衆惡犯さゞれば便ち道を得、長く三塗を離るべし、生死の患無し」と。是に於て世尊、卽ち偈を說きて言はく、

[五]我は象の鬪ふに、箭に中るを恐れざるが如く、常に誠信を以て、無戒の人を度ち。

[六]譬へば象の調伏せるは、王乘に中つ可し、調せるを尊人と爲し、乃ち誠信を受く。

【四】猛黠。たけく、さときこと。

【五】此の偈、Dhammapada. 第三百二十偈。

【六】此の偈、Dhammapada. 第三百二十一偈。

心を攝し過を悔ひ禮を作して去る。還び山中に入り命を殞つるまで精進し偈義を思惟し、一を守り心を正しくし閑居し寂滅して阿羅漢道を得たり。

[一]象品第三十一

昔、尊者羅雲[二]、未だ道を得ざりし時心性麤獷なり、言に誠信少し。佛、羅雲に勅したまはく「汝、賢提に往到し精舍の中に住し口を守り意を攝し經、戒を勤修せよ」と。羅雲、教を奉じ禮を作して去り、住すること九十日慚愧自ら悔ひ晝夜息まず。佛、往きて之を見給ふ。羅雲、歡喜し趣き前みて佛を禮し、安かに繩の床を施し、震越[三]を攝受す。佛、繩床に踞り羅雲に告げて曰く「澡盤に水を取り吾が爲めに足を洗へ」羅雲、教を受け佛の爲めに足を洗ふ。足を洗ひ已訖る。佛、羅雲に語りたまはく「汝、澡盤の中の洗足の水を見るや不や」と。羅雲、佛に白すやう「唯、然なり、之を見る」と。佛、羅雲に語りたまはく「此の水、食飲し、盥を漱ぐに用ふべきや不や」と。羅雲、白して言く「復び用ふ可からず、所以は何ぞや、此の水本實に清淨なり、今、已に足を洗ひ塵垢を受く。是を以ての故に復用ふ可からず」と。佛、羅雲に語りたまはく「汝も亦是の如し。吾が子にして國王の孫と爲り世の榮祿を捨てゝ沙門と爲るを得たりと雖も精進し身を攝め口を守るを念はず、三毒に垢穢胸の懷に充滿す。亦此の水の如く復び用ふ可からず」と。佛、羅雲に語りたまはく「澡盤の中の水を棄てよ」と。羅雲、卽ち棄つ。佛、羅雲に語りたまはく「澡盤空なりと雖も用つて飲食を盛る可きや不や」と。佛に白して言く「用ふ可からず、然る所以は澡盤の名有るを用つて曾つて不淨を受くるの故なり」と。佛、羅雲に語りたまはく「汝も亦是の如し、沙門と爲ると雖も口に誠信無く心性剛強精進を念はず、曾つて惡名を受く、亦澡盤の食を盛るに中らざるが如し」と。佛、足の指を以て澡盤を撥ひ却く、澡盤時に應じて輪轉して走る。自ら跳び自ら墮つること數返して乃

【一】象品。Dhammapada. 第二十三、Nāga（象）、Udāna-varga. 第十九品、Rta(馬)、出曜經第二十、馬喩品。
【二】羅雲。梵語、Rāhula. 佛の一子、羅睺羅のこと。
【三】震越。梵語、Civara. 衣服。攝受すは今はとゝのへることならん。

道は甚だ難し、形を毀り、節を執り、寒苦を避けず、終身食を乞ひ辱を受け堪え難し。道は卒に得難く罪は除く可きこと難し。唐に自ら勞勤し命を山中に殞す、家に歸りて修め門戸を立て妻を娶り子を養ふに如かず、廣く利業を爲し快心意を樂しみ安に後事を知らむ」と。是に於て七人卽ち起ち山より出つ。

佛、遙に應に之の得度すべきを知り、小苦を忍ばずば終に地獄に墮ちん。甚だ憐傷す可しと、佛、卽ち、沙門を化作し谷の口に往到り、七比丘に逢ふ。化人、問ふて曰く「久しく學道を承け何を以て來り出づ」と。七人、答へて言く「學道勤苦するも罪根拔くこと難し、分衞し、食を乞ひ辱を受くること堪え難し。又此の山中供養する者無く【六】璅璅として年を積み恒に儉約を守る。唐に自ら困苦して道得べからず、且く家に還り廣く利業を求めむと欲す。大いに資財を作り後老いて道を求めむ」と。化沙門言く「且く止めよ、且く止めよ、我が言ふ所を聽け、人命は無常にして【七】旦夕を保せず、學道難しと雖も前は苦にして後は樂なり、家に居るは艱難にして億劫に息む無し。妻息、會し止む、願くば安利を同くし永樂を望み患難に遭はざるを欲せよ、是れ猶病を治せんとして毒を服み、増有るも損無きが如し。三界形有らば皆憂惱有り。唯、信戒有りて放逸の意無くば精進し道を得衆苦永く畢る。是に於て化沙門、佛身の相を現じ光像巍巍たり。卽ち、偈を說きて言はく、

學は難く罪を捨つるも難く、　家に居在るも亦難し、　會止うて利を同じくするも難く、　艱難は有に過ぐるは無し。　比丘の乞求すること難くとも　何ぞ自ら勉めざる可きや。　精進せば自然に得、　終に人に欲無し。　信有らば則ち戒成じ、　戒に從つて多く寶を致す、　亦從ひて【八】諧偶を得、　在る所に供養を見ん。　一坐・一處の臥も　一行も放恣にせず　一を守り以て心を正しくせば、　心樂しく樹間に居る。

是に於て七比丘佛の身相を見、又此の偈を聞き慚愧し戰慄し、五體を地に投じ佛の足を稽首し、

【六】璅璅。小さき貌。

【七】旦夕不保。宋・元・明・聖本による。

【八】諧偶。あなふこと。

ること量り無し。是を以て智者は其の心を守り攝し内に惡を興さず外に罪至らず。譬へば邊城、寇を連接し守備牢固なれば畏懼る所無く、内は人安隱外は寇入らざるが如し。智者、自ら護るも亦復是の如し」と。是に於て世尊、即ち、偈を說きて言はく、

妄に證りて路を求め、　行已に正しからずむば、　良人を怨譛し　枉を以て世を治む、　罪斯の人を牽き、　自ら坑に投ず。　邊城を備ふるに　中外牢固なる如く、　自ら其の心を守り非法を生ぜざれ、　行缺くれば憂を致し、　地獄に墮せしむ。

佛、偈を說き已り、重ねて王に告げて曰く、「乃往昔に獼猴王有り、各五百の獼猴に主たり。一王、嫉妬の意を起し一王を殺さむと欲し規圖し獨り治む。便ち往きて共に鬪ふ、數々如かずして羞慚ぢて退き去り、大海の邊り海曲の中に到る。大聚沫有り風吹きて積聚す、高さ數百丈なり。獼猴王、愚癡にして謂へらく是れは雪山なりと、群輩に語りて言く、久しく聞く、海中に雪山有り其の中快樂にして甘菓口を恣にすと。今日乃ち見る。吾、當に先に往行きて視るべし、若し審かに樂しまば復還る能はず。若し樂しからずんば當に來り汝等に語るべしと。是に於て樹に上り力を盡くして跳騰す、聚沫の中に投じ海底に溺沒す。餘の者之の出でざるを怪しみ、謂へらく、必ず大樂なりと。一々中に投じ群を斷ち溺死せり」と。佛、王に告げて曰く「爾の時の嫉妬の獼猴王とは今の富蘭迦葉是なり。群輩とは今の富蘭迦葉の弟子の五百人なり、彼の一獼猴王とは我が身是なり。富蘭迦葉前世に坐に嫉妬を懷き罪の牽く所となり、自ら聚沫に投じ群を絕ち種を斷つ。今、復、誹謗し盡く江河に投ず。罪の對然しめて劫を累ねて限り無し」と。王、聞きて信解し禮を作して去れり。

昔、七比丘有り山に入り道を學ぶこと十二年の中、道を得ること能はず。自ら共に議りて言く「學

【五】此の偈、Dhammapada. 第三百十五偈。

迦葉等の虚妄の嫉妬を見て卽ち大風を起し其の高座を吹く、坐具顚倒し幢幡飛揚す、雨・沙・礫・石ありて眼に視るを得ず、世尊の高座は淡然として動かず、佛、大衆と庠序として來り、方に高座に向ひ忽然として上り給ふ。衆僧一切寂然として次いで坐す。王及び群臣敬を加へ稽首して佛に白して言く「願くば神化を垂れ邪見を厭伏し幷びに國人をして明に正眞を信ぜしめよ」と。是に於て世尊、卽ち、座上に於て霍然として現ぜず。卽ち、虚空に昇り大光明を放ち給ふ。東に沒し西に現れ四方も亦爾なり。身より、水火を出し上下交易す。空中に坐臥し十二變化す。身を沒して現れず還び座上に在り。天・龍・鬼神・華香供養し之を讚善するの聲天地を震動す。富蘭迦葉自ら道無きを知り低頭慚愧し敢て目を擧げず。是に於て【四】金剛力士金剛杵を擧げ杵の頭より火を出し以て迦葉に擬するやう「何を以て卿は變化を現ぜざるや」と。迦葉、惶怖し座より投じて走る。五百の弟子奔播、迸散す。世尊の威、顏容欣感無く還び祇樹給孤獨園に到り給ふ。國王、群臣歡喜し辭退す。是に於て富蘭迦葉、諸の弟子と辱を受けて去る。去り至りて道中に一人の老優婆夷に逢ふ。摩尼と字す。逆へて之を罵りて曰く「卿等群愚自らを忖度せずして佛と道德を比揣せむと欲す、狂愚・欺誑にして羞恥を知らず、亦此の面目を持て世間を行くべからざるなり」と。富蘭迦葉、諸の弟子と江水の邊に至り、諸の弟子を誑かすやう「我、今水に投ぜば必ず梵天に生る。若し我れ還らずむば則ち彼の樂を知れ」と。諸の弟子之を待つに還らず。自ら共に議りて言く「師は必ず天に生る。我れ何ぞ宜しく住すべけんや」と。一々水に投じ「冀くば當に師に隨ふべし」と。罪牽くを知らず皆地獄に墮す。後日、國王、其の此の如きを聞き甚だ之を驚き怪しむ。佛の所に往到り、佛に白して言く「富蘭迦葉の師徒迷愚何に緣りて乃し爾るや」と。佛、王に告げて曰く「富蘭迦葉の師徒に重罪二有り、一には三毒熾盛にして自ら稱して道を得となすと、二には如來を毀謗し敬事を望まむと欲す。此の二罪を以て應に地獄に墮すべし、殃咎催逼し其をして河に投ぜしむ。身死し神去り苦を受く

【四】金剛士。金剛杵を執りて佛法を護持する天神をいふ。

人は之れ無常なり、老ゐて特牛[三]の如く但長じ肌肥え智慧有ること無くば生死は無聊にして往來は艱難なり。意は身を貪ぼるに倚り、更に苦の端無し慧人は苦と見る。是を以て身を捨て意を滅し欲を斷ち、愛盡きて生無し。

王、重ねて偈を聞き欣然として意解り、即ち、無上の正眞道意を發す。聽く者數無く皆法眼を得たり。

地獄品[一] 第三十

[二]昔、舍衛國に婆羅門の師有り。富蘭迦葉[三]と名づく。五百の弟子と相ひ隨ふ。國王、人民、奉事せざるは莫し。佛、初め道を得、諸の弟子と與に羅閱祇より舍衛國に至り給ふ。身相顯赫し道教淸美なり。國王、宮中・率土の人民奉敬せざるは莫し。

是に於て、富蘭迦葉嫉妬の意を起し世尊を毀りて獨り敬事を望まむと欲し、即ち、弟子を將ゐ波斯匿王に見えて自ら陳べて曰く「吾等長老は先學の國の舊師なり、沙門瞿曇は後より出でゝ道を求む。實に神聖無く自ら稱して佛と爲す。而して王、我を捨て專ら之を奉ぜむと欲す。今、佛と道德を捔試し、誰か勝れ爲るを知らんと欲す。勝つ者は王便ち終身之を奉ぜよ」と。王、言く「大いに善し」と。王、即ち、嚴駕し佛の所に往到り禮し畢り白して言く「富蘭迦葉、世尊と道力を捔盡し神變化を現ぜむと欲す。不審なり世尊よ、爾る可きと爲すや不や」と。佛、言はく「大いに佳し、七日の期を結び當に變化を捔すべし」と。王、城の東の平廣の好地に二高座を立つ。高さ四十丈七寶を以て莊校す。幢幡を施設し座席を整頓す。二座の中間相ひ去ること二里なり。二部の弟子各其の下に坐す。國王、群臣大衆雲集し二人の其の神化を捔するを觀むと欲す。

時に、迦葉諸の弟子と先に座所に到り梯を登りて上る。鬼神の王有り、名づけて般師と曰ふ。

【三】特牛。をうし。

【一】地獄品。Dhammapada. 第二十二品、Niraya（地獄）。

【二】此の譬喩譚、賢愚經、第十四、六師を降すの品參照。

【三】富蘭迦葉。梵名、Pūraṇa kaśyapa. 空見外道。

に苦しむ。氣閉ぢ息絶ゆ。時を經て蘇覺す、坐臥呻吟し恒に身の重きを苦しむ。轉側する能はず身を以て患と爲す。便ち、敕して嚴駕し佛の所に往到り、侍者扶持し問訊し坐に却きて叉手し佛に白して言く「世尊よ、侍覲することを違遠し諸受階無し。何の罪ありてか。身爲めに自ら肥ゆるを知らず、何の故に爾らしむるかを自ら覺る能はず。毎に自ら之を患ふ、是を以て違替し禮覲數くならず」と。佛、大王に告げたまはく「人に五事有りて人をして常に肥えしむ、一には數食す、二には睡眠、三には憍樂、四には愁無し、五には無事、是の五事の喜、人をして肥えしむ。若し肥えざらむと欲せば食を減じ[illegible]惨なれば然る後乃ち瘦ん」と。是に於て世尊、卽ち、偈を說きて言はく、

人當に念意有るべし、　毎に食して自ら少きを知れば　是從り痛用つて薄く　節消し而して壽を保つ。

王、此の偈を聞き歡喜すること量り無し。卽ち、厨士を呼びて之に告げて曰く「此の偈を受誦せよ、若し食を下す時先に我が爲めに說き然る後食を下せよ」と。王、宮に辭し還る。厨士、食を下し、輒便ち偈を說く。王、偈を聞き喜び日に一匙を減ず。食、轉た減少し遂に以て身輕し、卽ち、瘦すること前の如し。自ら此の如きを見歡欣びて、佛を念ず。卽ち、起ちて步行し佛の所に往到り佛の爲めに禮を作す。佛、命じて坐せしめ而して王に問ふて曰く「車馬は人の今從つて所在と爲すところなり。何に緣りて步行するや」と。王、喜びて佛に白すやう「前に佛の敎を得奉行すること法の如し、今は身輕し、世尊を力なり、是を以て步み來る。何如が爲すを知る」と。佛、大王に告げたまはく「世人、此の如く無常を知らず、身の情欲を長じ福を爲すを念はず、人死して神去り身を墳塚に留む。智者は神を養ひ愚者は身を養ふ。若し能く此を解せば聖教を奉修せよ」と。是に於て世尊、重ねて偈を說きて言はく、

【二】違遠。とをざかること。

兒にして肯て見えて認めず、反つて我を謂つて癡騃の老翁と爲す。寄任すること須臾我を認めて子と爲す、永く父子の情無しと。何に緣つて乃ち爾るや」と。佛、梵志に告げ給ふやう「汝、實に愚癡なり。人死し神去り便ち更に形を受く。父母妻子因緣ありて居を會す、譬へば寄客起てば則ち離散するが如し、愚迷、縛著計りて己の有と爲す、憂悲・苦惱の根本を識らず、生死に沈溺し未だ休息せず、唯、慧有る者のみ恩愛を貪らず、苦を覺り習を捨て經戒を勤修す、識想を滅除し生死盡くるを得」と是に於て世尊、卽ち偈を說きて言はく、

[五]人は妻子を營み　病法を觀ぜずむば　死命卒に至ること、　[六]水湍の驟きが如し。　[七]父も子も救はず　餘の　[八]親に何をか望まん、　命盡き親を怙むは、　盲の燈を守る如し。　慧を以て是の意を解し　經戒を修め　勤行して世を度し　一切の苦を除くべし。　諸の淵を遠離すること、　風の雲を却くるが如く　已に思想を滅せば、　是を知見と爲す。　智を世の長と爲し、　憺樂、無爲なれば、　正教を受くるを知り、　生死盡くるを得。

梵志、偈を聞き懽然として意解る。命は無常、妻子は客の如しと知る。稽首し委しく質せり。願くば沙門と爲らむと。佛、言く、善き哉と。鬚髮自ら落ち法衣身に在り卽ち、比丘と成る。偈義を思惟し愛を滅し想を斷ち卽ち、座上に於て阿羅漢道を得たり。

[一]廣衍品第二十九

昔、佛、舍衞國に在し法を說き敎化し給へり。天・龍・鬼神・帝王・人民三時に往きて聽けり。彼の時の國王を波斯匿と名づく、人と爲り憍慢にして情欲を放恣す、目は色に惑ひ耳は聲に亂れ鼻は馨香を著け口は五味を恣にす、身は細滑を受け飮食極美初より厭足無し。食遂に進むこと多く恒に飢虛に苦しむ、厨膳廢せず食を以て常と爲す。身體肥盛し乘輿・臥起に勝えず、呼吸但短氣

【五】此の偈、Dhammapada. 第二百八十七偈。
【六】水湍。はやせ。
【七】此の偈、同じく、第二百八十八偈。
【八】親。親族の意。

【一】廣衍品。Dhammapada. 第二十一品、Pakiṇṇa (廣衍)。

して去る。所在を人に問ふやう「閻魔王の治むる處何れの許に在りと爲すや」と。轉た前み行くこと數千里なり、深山の中に至り諸の道を得たる梵志を見る。復、問ふこと前の如し。諸の梵志問うて曰く「卿、閻羅王の治むる處を問ひ何等を求めむと欲するや」と。答へて言く「我に一子有り、辯慧人に過ぐ、近日卒に亡ぶ、悲窮懊惱し自ら解くこと能はず、閻羅王の所に至り兒の命を乞ひ索め、還び將ゐて家に歸り養ひ以て老に備へむと欲す」と。諸の梵志等其の愚癡を愍み卽ち之に告げて曰く「閻羅王の治むる處是れ生ある人の到るを得可きに非ざるなり。當に卿に方宜を示すべし、此より西に行くこと四百餘里大川有り、其の中に城有り、此れは是れ諸の大神世間に[三]案行し停宿するの城なり、閻羅王、常に月の八日を以て案行し必ず此の城を過ぐ。卿、齋戒を持ち往きて必ず之に見へよ」と。梵志、歡喜し教を奉じて去れり。其の川の中に到り好き城郭を見る。宮殿屋宇忉利天の如し。梵志、門に詣り燒香し脚を翹げ呪願し閻羅王に見へむことを求む。王、門人に勅し之を問ふ。梵志、啓して言く「晩く一男を生み以て老に備へむと欲す、養育すること七歲近日命終す。唯、願くば大王よ、恩を垂れ施を布き我に兒の命を還へせ」と。閻羅王、言く「大いに善し、卿の兒今東園の中に在りて戲る。自ら往きて將ゐ去れよ」と。梵志、卽ち往くに兒諸の小兒と共に戲るゝを見る。卽ち、前みて之を抱き之に向つて啼泣して曰く「我、晝夜汝を念ひ食寐甘からず、汝、寧ろ父母の辛苦を念ふや不や」と。小兒、驚喚し逆つて之を呵して曰く「癡騃の老翁道理に達せず、[四]寄住すること須臾之を名づけて子と爲す。妄りに多言する勿れ、早く去るに如かず、今、我此の間自ら父母有り、邂逅の間なり唐らに自ら抱くや」と。梵志、悵然として悲泣して去る。卽ち、自ら念じて言く「我聞く、瞿曇沙門、人の魂神の變化の道を知る。當に往きて之に問ふべし」と。是に於て、梵志、卽ち、還へりて佛の所に來至る。時に、佛、舍衛の祇洹に在し大衆の爲めに法を說き給へり。梵志、佛に見え稽首し禮を作し共に本末を以て佛に向ひ之を陳ぶるやう「實に是れ我が

【三】案行。しらべあるくこと、巡察なり。

【四】寄住。かりのすまゐ。

虚飾 言行に違有るに非ず。七 能く惡を捨て 根原已に斷ちて、 慧にして而も恚無きを謂つて、 是を端正と謂ふ。八 謂ゆる沙門とは、 必ずしも髮を除くに非ず、 妄語、貪取して 欲有らば凡の如し。九 能く惡を止め 恢廓、弘道、 心を息め意を滅するを謂つて、 是を沙門と爲す。一〇 謂ゆる比丘とは、 時に食を乞ふに非ず、 邪行、彼を望めば 名を求むるのみ。一一 罪業を捨て 淨く梵行を修め、 慧にて能く惡を破するを謂つて、 是を比丘と爲す。一二 謂ゆる 一三 仁明とは 口に言ふ所に非ず、 心を用ふること淨からずむば、 外順なるのみ。一四 心、無爲にして 內に淸虛を行ひ、 此と彼と寂滅なるを謂つて、 是を仁明と爲す。一五 謂ゆる道有りとは、 一物を救ふに非ず 普く天下を濟ひ、 害こと無きを 一六 道と爲す。一七 法を奉持するとは、 多言を以てせず、 素より少しく聞くと雖も、 身法に依りて行じ 道を守りて忘れざるを 法を奉ずると謂ふ可し。

薩遮尼犍及び五百の弟子佛の此の偈を聞きて歡喜し開解し貢高を棄捐し皆沙門と作れり。尼乾、一人 一八 菩薩の心を發し五百の弟子皆阿羅漢道を得たり。

一 道行品 第二十八

昔、婆羅門有り、年少くして出家し學道す。年六十に至るも道を得ること能はず。婆羅門の法として六十にして道を得ざれば然る後家に歸り婦を娶り居を爲す。生みて一男を得端正愛す可し。年七歲に至り書を學ぶに聰了なり。才辯口より出て人の操を踰ゆる有り。卒に重病を得て一宿に命終る。梵志、憐惜し自ら勝ふること能はず。其の屍の上に伏し氣絕え復蘇へる。親族、諫喩し强いて奪うて、二 殯殮し城外に埋著す。梵志、自ら念ふやう「我、今啼哭し計るに益する所無し。閻羅王の所に往至り、兒の命を乞ひ索むるに如かず」と。是に於て、梵志、沐浴齋戒し華香を賫持ち舍を發

【七】此の偈、同じく、第二百六十三偈。
【八】此の偈、同じく、第二百六十四偈。
【九】此の偈、同じく、第二百六十五偈。
【一〇】此の偈、同じく、第二百六十六偈。
【一一】此の偈、同じく、第二百六十七偈。
【一二】此の偈、同じく、第二百六十八偈。
【一三】仁明。Dhammapada には Muni とあり、牟尼なり、寂默と普通譯す。
【一四】此の偈、同じく、第二百六十九偈。
【一五】此の偈、同じく、第二百七十偈、但し、パーリ文は、道の說明ではなく聖(Ariyo)の說明となつてゐる。Ariyo を道と譯すか。
【一六】無害爲道。大正本、無道と作るは誤植。
【一七】此の偈、同じく、第二百五十九偈。
【一八】菩薩。梵語、Bodhisattva. 覺有情と譯し、自利利他圓滿の佛果を求むる人。
【一】道行品。Dhammapada. 第二十品、Maggo(道)、Udāna varga. 第十二品 "Lam (道)"、出曜經第十三道品。
【二】殯殮。かりもがり。

を作し懇惻自ら陳ぶるやう「至眞に尊敬し全き形骸を得たり、惡を棄て善を爲し上下慶びを蒙る。願くば大慈を垂れて度を接し道を爲せよ」と。佛、言はく「善き哉」と。鬚髮、尋いで落ち即ち沙門と成り、內に止觀と四諦の正道を思ひ精進して日に登り羅漢道を得たり。

[一]奉持品　第二十七

昔、長老の婆羅門有り、薩遮尼犍と名づく、才明に智多きこと國中第一なり。五百の弟子有り、貢高自ら大にして天下を顧みず。鐵の鍱を以て腹を鍱にす。人、其の故を問ふ。答へて曰く「智溢れ出づるを恐るゝ故なり」と。佛、世に出て道化明達なるを聞き心に嫉妬を懷き[二]寤寐に安んぜず。諸の弟子に語るやう「吾、聞く、瞿曇沙門、自ら佛と爲ると稱す、今、當に往きて深妙の事を問ふべし、其の心をして悸き陳る所を知らざらしめむ」と。即ち、弟子と祇洹に往到り門外に列び住す。遙に世尊の威光赫奕として日初めて出づるが如きを見、五情、騰踊し喜懼交錯す。是に於て徑を前み佛の爲めに禮を作す、佛、座に就くを命じ給ふ坐し訖る。尼犍、佛に問うて曰く「何をか謂ひて道と爲すや、何をか謂つて智と爲すや、何をか謂つて長老と爲すや、何をか謂つて端正と爲すや、何をか謂つて沙門と爲すや、何をか謂つて比丘と爲すや、何をか謂つて仁明と爲すや、何をか謂つて道有りと爲すや、何をか謂つて戒を奉ずと爲すや。若し能く解答せば願くば弟子と爲らむ」と。是に於て、世尊、其の應ずる所を觀て偈を以て答へて言はく、

常に好學を慾み、　心を正しくして以て行じ、　唯寶慧を懷くは、　是を謂つて道と爲す。
[三]謂ゆる智者とは、　必ずしも辯言ならず、　恐無く懼無く　善を守るを智と爲す。[四]謂ゆる長老とは　必ずしも年耆ならず、　形熟し髮白きは　惷愚のみ。[五]諦法を懷き　順調、慈仁、明達、清潔なるを謂つて、　是を長老と爲す。[六]謂ゆる端正とは、　色花の如くなるも　慳嫉、

【一】奉持品。Dhammapada. 第十九品、Dhammattha (法住)。
【二】寤寐。覺むること、寢ぬること。
【三】此の偈、Dhammapada. 第二百五十八偈。
【四】此の偈、同じく、第二百六十偈。
【五】此の偈、同じく、第二百六十一偈。
【六】此の偈、同じく、第二百六十二偈。

將ゐて師友に詣り之に書學を勸む。其の兒[二]憍蹇し永く心を用ひず、朝に受け暮に棄て初より誦習せず、是の如く年を積むも知識する所無し。父母呼び歸へし家業を治めしむ。其の兒[三]憍誕し勤力を念はず家道遂に窮り衆事妨廢す。其の兒放縱し錄を顧る所無し、家物を[四]糶賣し快心意を恣にす。頭を亂し[五]徒跣し衣服不淨なり、慳貪・搪突し恥辱を避けず。愚癡自ら用ひ、人に惡み賤しめらる。國人・咸憎む、之を凶惡と謂ふ。出入行步與に語る者無し、自ら惡なるを知らず反つて衆人を咎む。上は父母を怨み次は師友を責む「先祖の神靈肯て祐助せず、我をして[六]賴帶、[七]轗軻此の如くならしむ。佛に事へ其の福を得るに如かず」と。即ち、佛の所に到り佛の爲に禮を作す。前みて佛に白して言く「佛道、寛弘にして容れざる所無し、願くば弟子と爲らむ、乞ふ聽許を蒙らむ」と。佛、此の人に告げ給ふやう「夫れ、道を求めむと欲せば當に清淨の行を行ふべし。汝、俗垢を齎らし我が道の中に入る。唐に自ら去就するも何ぞ益を長ずる所あらむ、家に歸り父母に孝事するに如かず。師教を誦習し命を沒すまで忘れざれ、居業を勤修し富樂にして憂無く禮を以て自ら將ゐ非宜を犯さゞれ。沐浴し衣服し言行を愼み。執心一を守り所作の事を辦ぜよ、行を改め精修し人に歎慕せられよ、此の如きの行乃ち道と爲る可き耳」と。是に於て、世尊、即ち、偈を說きて言はく、

[八]誦せざるを言の垢と爲し、　勤めざるを家の垢と爲し、　嚴ならざるを色の垢と爲し、　放逸を事の垢と爲す。　[九]慳を惠施の垢と爲し、　不善を行の垢と爲し、　今世にも亦後世にも、　惡法を常の垢と爲す。　[一〇]垢中の垢は、　癡より甚しきは莫し、　學ぶもの此を捨つべし、　比丘よ、無垢なれ。

其の人、偈を聞き自ら憍癡を知る。即ち、佛の教を承け歡喜して還歸り、偈義を思惟し改悔自ら新なり。父母に孝事し師長を尊敬し經道を誦習し居業を勤修す、戒を奉じ自ら攝し非道を行はず、宗族孝と稱し鄕黨悌と稱す。善名遐に布き國內賢と稱す。三年の後還び佛の所に至り五體を以て禮

【二】憍蹇。おごりなやむ。
【三】憍誕。おごりほしいまゝにす。
【四】糶賣。穀物を賣ること。
【五】徒跣。はだしのこと。
【六】賴帶。無賴の意。
【七】轗軻。志を得ざること。
【八】此の偈、Dhammapada. 第二百四十一偈。
【九】此の偈、Dhammapada. 第二百四十二偈。
【一〇】此の偈、Dhammapada. 第二百四十三偈。

願くば大慈を垂れ我が迷愚を恕せ」と。是に於て世尊、阿闍世及び諸の大衆に告げたまはく「世に八事有りて長く誹謗を興す皆名譽に由る。又、利養を貪ぼり以て大罪を致し劫を累ねて息まず、何等をか八と爲す、利・衰・毀・譽・稱・譏・苦・樂なり。古自り今に至るまで尠も爲に惑はず」と。是に於て世尊、即ち、偈を說きて言はく、

[三]人相ひ謗毀りて、　古より今に至る、　既に多言を毀り　又、訥訒を毀り　亦中和を毀り　世に毀らざる無し。　欲意にて聖を誹り、　中を折る能はず、　一毀、一譽　但、名利の爲めなり。　明智は譽めらる、　唯、正賢を稱す　慧人、戒を守り　譏謗る所無し、　羅漢の如く淨きは、　誣謗する莫し、　諸天も咨嗟し　梵・釋も稱する所なり。

佛、偈を說き已り重ねて王に告げて曰く「昔、國王有り、喜びて雁の肉を食す、常に獵師を遣はし網を張り雁を捕ひ、日に一羽の雁を送り以て王の食に供せしむ、時に、雁王有り、五百の雁を將ゐて飛び下り食を求む。雁の王、網に墮ち獵師の爲めに得らる。餘の雁驚き飛び徘徊して去らず、時に一雁有り、連翩し追隨し弓矢を避けず、悲鳴吐血し晝夜息まず、獵師、之を見て其の義に感憐し、即ち、雁の王を放ち相ひ隨ひ去らしむ。群雁、王を得て歡喜し迴遶す、爾の時、獵師具に以て王に白す。王、其の義に感じ斷じて雁を捕へず」と。佛、阿闍世王に告げたまはく「爾の時の雁の王とは我が身是なり、一雁とは阿難是れなり、五百の群雁とは今の五百羅漢是なり、時の獵師とは今の調達是なり、前の世已來恒に我を害せむと欲す、我、大慈の力を以て因つて濟ふことを得たり。怨惡を念はず自ら佛と得るを致せりと。佛、是を說き給ふの時王及び群臣開解せざるは莫し。

[一]塵垢品　第二十六

昔、一人有り、兄弟有ること無し。小兒爲りし時父母憐愛し赤心僕僕として成就せしめむと欲す。

【三】此の偈、Dhammapada. 第二百二十七偈。

【一】塵垢品。Dhammapada. 第十八品、Mala(垢穢)。

重ねて此の義を聞き慚愧し過を悔ひ心意開悟し意を滅し欲を斷ち羅漢道を得たり。

忿怒品[一] 第二十五

昔、佛、羅閲祇の耆闍崛山の中に在しき。時に、調達、阿闍世王と共に議り佛及び諸の弟子を毀る。王、國人に勅するやう、佛を奉ずるを得ず、衆僧分衞するも施與するを得ずと。時に、舍利弗・目連・迦葉・須菩提等及び波和提比丘尼等各弟子を將ゐ去りて他國に到る。唯、佛、五百の羅漢と崛山の中に住し給ふ。調達、阿闍世の所に往至り、王と議りて言く「佛の諸の弟子今已に逆散す、尙、五百の弟子有りて佛の左右に在り、願くば王よ、明日、佛を請じ城に入れよ、吾、當に五百の大象を飲まし醉しむべし。佛、來り城に入らば醉象を驅使し之を踏み殺さしめ盡く其の種を斷たむ。吾、當に佛と作り世間を敎化せむ」と。阿闍世王、之を聞き歡喜す。卽ち、佛の所に到り稽首し禮を作し佛に白して言く「明日、薄施を設けむ。願くば世尊及び諸の弟子を屈し宮內に於て食せよ」と。佛、其の謀を知り、答へて言く「大いに善し、明旦、當に往くべし」と。王、退きて去る。還りて調達に語るやう「佛、已に請を受く、當に前の計を念ふべし、象に飲まし醉しめ伺候し之を待てよ」と。明日、食時に佛五百の羅漢と共に城門に入り給ふ。五百の醉象鼻を鳴して前む、墻壁に搪揬し樹木を摧折す。行人驚怖し一城戰慄す、五百の羅漢飛びて空中に在り、獨り阿難有りて佛の邊に住し在る。醉象、頭を齊しくし徑を前みて佛に趣く。佛、因りて手を擧げ五指時に應じ五の師子王と爲る。聲を同じくし倶に吼え天地を震動す。是に於て醉象膝を屈し地に伏し敢て頭を擧げず。酒の醉尋いで解け淚を垂れ過を悔ゆ。王及び臣民驚肅せざるは莫し。世尊、徐に前みて王の殿上に至り諸の羅漢と食訖り呪願し給ふ。王、佛に白して言く「稟性明かならず、彼の讒言を信じ惡逆を興造り圖りて不軌を爲せり。

【一】忿怒品。Dhammapada. 第十七品、Kodha(忿怒) Udānavarga. 第二十 Khroba(恚)、出曜經。第二十一品。

問うて曰く「樹下に[六]屬坐し共に何事をか論ずる」と。四人、以て實に具に樂しみとする所を白す。佛、四人に告げたまはく「汝等論ずる所盡く是れ憂畏危亡の道なり、是れ永く安き最樂の法に非るなり、萬物春榮え秋冬衰落す、宗親の歡娯皆當に別離すべし、財寶・車馬は王家の分、妻妾の美色は愛憎の主なり、凡夫、世に處し怨禍を興し招き身を危くし族を滅す、憂畏量り無く三塗八難の苦痛萬端之に由らざるは靡し、是を以て比丘は世を捨て道を求む、志、無爲に存し榮利を貪らず、自ら泥洹を致し、乃ち最樂と爲す」と。是に於て世尊、即ち、偈を說きて言はく、

[七]愛喜は憂を生じ　愛喜は畏を生ず、　愛喜する所無くむば、　何を憂ひ何を畏れむ。　[八]好樂は憂を生じ、　好樂は畏を生ず、　好樂する所無くむば、　何をか憂ひ何をか畏れむ。　[九]貪欲は憂を生じ　貪欲は畏を生ず、　貪欲する無きを解らば、　何を憂ひ何を畏れむ。　[一〇]法を貪り戒成じ、　至誠慚を知り　身に行じて道に近かば、　衆の愛する所と爲る。　[一一]欲態を出さず正を思ひて乃ち語り、　心に貪愛無くむば、　必ず流を截りて度る。

佛、四比丘に告げたまはく「昔、國王有り、名づけて普安と曰ふ、隣國の四王と共に親友爲り。此の四王を請じ宴會すること一月なり、飲食・娯樂・極歡比無し。別の日に臨み普安王、四王に問うて曰く、人、世間に居りて何を以て樂と爲すかと。一王、言く、遊戲を樂と爲す、と。一王、言く、宗親、吉に會し音樂をなすを樂みと爲すと。一王、言く、多く財寶を積み欲する所意の如きを樂みと爲すと。一王、言く、愛欲、情を恣にす、此れ最も樂みと爲すと。普安王、言く、卿等の論ずる所は是れ苦惱の本、憂畏の原なり、前に樂しみ後に苦む。憂悲萬端皆此に由て興る。寂靜にして求むる無く欲無く淡泊にして一を守り道を得るを樂みと爲すに如かずと。四王、之を聞き歡喜し信解す」と。佛、四比丘に告げたまはく「爾の時の普安王とは我が身是なり、四王とは汝四人是なり、前已に之を解く、今、故に解らず、生死延蔓し何に由りて休息せむ」と。時に、四比丘、

【六】屬坐。聚り坐すこと。
【七】此の偈、Dhammapada. 第二百十二偈。
【八】此の偈、Dhammapada. 第二百十三偈。
【九】此の偈、Dhammapada. 第二百十五偈。
【一〇】此の偈、Dhammapada. 第二百十七偈。
【一一】此の偈、Dhammapada. 第二百十八偈。

る所無く身を危くし命を滅するは之に由らざる莫し。と。毒蛇、言く、瞋恚最も苦なり、毒意一たび起れば親疎を避けず、亦能く人を殺し復能く自らを殺す。と。鹿、言く、驚怖最も苦なり、我、林野に遊び恒に[一〇]怵惕す。獵師及び諸の豺狼を畏懼し髣髴として聲有らば坑岸に奔投す。母子相ひ捐て肝膽[一一]悼悸す、此を以て之を言ふ、驚怖を苦と爲すと。比丘、之を聞き即ち之に告げて曰く、汝等論ずる所是れ其の末耳、苦の本を究めず、天下の苦身有るに過ぎたるは無し、身は苦の器と爲す憂畏量り無し。吾、是を以ての故に俗を捨て學道し意を滅し想を斷じ四大を貪らず、苦の原を斷たむと欲し志泥洹に存す。泥洹道は寂滅にして形無し、憂患永く畢りて爾れ乃ち大安なりと。四禽、之を聞き心即ち開解せり」と。佛、比丘に告げたまはく「爾の時の五通比丘は則ち吾が身是なり。時に四禽とは今の汝(等)四人是なり、前世已に苦本の義を聞く、如何が今日方に復爾云ふ」と。比丘、之を聞き慚愧自ら責め、即ち、佛前に於て羅漢道を得たり。

[一]好喜品　第二十四

昔、佛、舍衛の精舍に在しき。

時に、四新學の比丘有り、相ひ將ゐて[二]㮈樹の下に至り坐禪し行道す。㮈華、榮え茂り色好く且つ香あり。因て相ひ謂つて曰く「世間の萬物、何者か愛す可く以て人の情を快くするか」と。一人、言く「[三]仲春の月、百木榮え茂り原野に遊戲す、此れ最も樂しと爲す」と。一人、言く「宗親、吉に會し[四]觴酌交錯し音樂歌舞す、此れ最も樂しと爲す」と。一人、言く「多く財寶を積み欲する所即ち得、車馬服飾衆と異り有り、出入光り顯れ行く者[五]矚目す、此れ最も樂しと爲す」と。一人、言く「妻妾端正、綵服鮮明より、香熏・芬馥し意を恣にし情を縱にす、此れを最も樂しと爲す」と。佛、四人の化度すべく、而も意を走らし六情無常を惟はざるを知り、即ち、四人を呼びて之に

【一〇】怵惕。おそるゝこと。
【一一】悼悸。いたみわななくこと。
【一】好喜品。Dhammapada. 第十六品 Piya(愛樂)、Udāna varga. 第五品、Sdug-pa(愛樂)、出曜經第六、念品(法集要頌經、愛樂)。
【二】㮈樹。からなし。原語 Amba マンゴー樹。
【三】仲春。陰暦の二月。
【四】觴酌。觴はさかづき、酒をくみかはすこと。
【五】矚目。ながむこと。

昔、佛、舍衞國の精舍に在しき。

時に、四比丘有りて樹下に坐す。共に相ひ問うて言く「一切世間は何者か最も苦なるか」と。一人の言く「天下の苦は婬欲に過ぐるは無し」と。一人の言く「世間の苦は瞋恚に過ぐるは無し」と。一人の言く「世間の苦は飢渴に過ぐるは無し」と。一人の言く「天下の苦は驚怖に過ぐるは莫し」と。共に苦義を諍ひ云云して止まず。佛、其の言を知り其の所に往到り、諸の比丘に問ひ給ふやう「何事を屬論するか」と。卽ち、起ちて禮を作し具に論ずる所を白しぬ。佛、比丘に言く「汝等論ずる所苦義を究めず、天下の苦は身有るに過ぐるは莫し。飢渴・寒熱・瞋恚・驚怖・色欲・怨禍皆身に由る。夫れ、身は衆苦の本、患禍の原なり、心を勞し慮を極め憂畏萬端、三界[七]蠕動し更に相ひ殘賊ふ。生死に縛著し息まざるは皆身に由る。世の苦を離れむと欲せば當に寂滅を求むべし。心を攝し正を守り[八]怕然として想無くば泥洹を得可し、此を最樂と爲す。是に於て世尊、卽ち偈を說きて言はく、

[九]熱は婬に過ぐる無く、　毒は怒に過ぐる無し、　苦は身に過ぐる無く、　樂は滅に過ぐる無し。
樂無く、小樂　小辯、小慧、　觀じて大を求むる者は　乃ち大安を獲。　我は世尊爲り　長く無憂を解り　正に三行を度し　獨り衆魔を降す。

佛、偈を說き已り、諸の比丘に告げ給ふやう「往昔、久遠無數の世の時五通の比丘有り、精進力と名づく、山中の樹下に在り閑寂の道を求む。時に四禽有り、左右に依附し常に安穩を得たり。一には鴿、二には烏、三には毒蛇、四には鹿なり。是の四禽は晝行きて食を求め暮ては則ち來り還る。四禽、一夜自ら相ひ問うて言く、世間の苦は何をか重しと爲すやと。烏、言く、飢渴最も苦なり。飢渴の時身羸れ目冥く神識寧からず、身を羅網に投じ鋒刃を顧みず。我等の身を喪ふは之に由らざる莫し。此を以て之を言ふ、飢渴苦と爲すと。鴿、言く、婬欲最も苦なり、色欲熾盛なれば顧念す

【七】蠕動。うごめくこと

【八】怕然。安なる貌。

【九】此の偈、Dhammapada. 第二百二偈。

葬送すべし」と。各、束し薪を持ち、就往きて之を燒く。火然え薪盡く。佛、坐より起ち道神化を現はし給ふ。光明照曜し十方に感動し現變畢訖り、還び樹下に坐し給ふ。容體、靜安し怡悅故の如し。村人の大小驚懼せざるは莫し。稽首して謝して曰く「山民頑野、神人なるを識らず、妄りに薪火を以て未だ然らざるを燒く、自ら惟ふに罪を獲ること太山よりも重し、唯、慈赦を垂れ咎愆を見ざれ、不審なり、神人よ、傷病無きを得たるや、將愁感無きや、將飢渴無きや、將熱惱無きや」と。是に於て世尊、和顏に笑を含みて偈を說きて言はく、

　[二]我が生已に安し、怨を慍らず、衆人に怨有るも　我に怨無きを行ず。[三]我が生已に安し、衆人に病を病とせず　衆人に病有り　我病無きを行ず。[四]我が生已に安し、憂を慼へず、衆人に憂有り　我憂無きを行ず。[五]我が生已に安し、淸淨にして無爲なり、樂を以て食と爲すこと、[六]光音天の如し。我が生已に安し、恬淡として事無し、彌き薪園の火も、安んぞ能く我を燒かむ。

爾の時村中の五百人偈を說くを聞き已り、皆、沙門と作り羅漢道を得。村人の大小皆三尊を信ず。佛、五百人と與に飛びて竹園に至り給ふ。賢者、阿難佛、得道者と俱に來り給ふを見前みて佛に白して言く「此の諸の比丘何の異德有りて乃し世尊をして自ら往きて度に臨ましむるや」と。佛、阿難に告げ給ふやう「我、未だ下佛と爲らざりし時、世に辟支佛有り、常に是の山に處る。村を去ること遠からざる一樹下に在りて般泥洹せんと欲す、道神德を現はし便ち滅度を取る。村人、薪を持ちて火に就け往きて之を燒く。舍利を斂め取り寶瓶の中に著け山頂に埋め著き、各共に願を求むるやう、願くば後に道を得む、是の如き沙門の滅度は快樂なりと。此の福は緣るが故に應に道を得べし。是の故に如來往きて之を度する耳」と。佛、是を說き給ふ時天人無數なり皆道迹を得たり。

【二】此の偈、Dhammapada. 第百九十七偈。
【三】此の偈、Dhammapada. 第百九十八偈。
【四】此の偈、Dhammapada. 第百九十九偈。
【五】此の偈、Dhammapada. 第二百偈。
【六】光音天。色界の第二禪の終天。

には師保無く、　志、獨りにして伴侶無く　積みて一たび佛と作るを得たり、　是に從はば聖
道に通ぜむ。

憂呼、偈を聞き　[六]悵惘として解らず。卽ち、世尊に問ふやう「瞿曇よ、如に行くや」と。佛、梵志に告げたまはく「波羅捺國に詣り甘露の法鼓を撃ち無上の法輪　轉ぜむと欲す、三界衆聖の未曾有の輪法輪なり、人に遻らば泥洹に入ること我の今の如きなり」と。憂呼、大いに喜び「善き哉、善き哉、佛の言の如きは願くば甘露の如應の說法を聞かむ」と。梵志、揖し已り卽便ち過ぎ去れり。未だ師の所に到らざる道路の宿に於て其の夜半に至り卒に便ち命終す。佛、道眼を以て其の已に終るを見、之を愍傷して曰く「世間は愚癡なり、命常に有りと謂ふ。佛に見え捨て去り而して獨り喪亡ふ。法鼓震動して獨り聞かず、甘露苦を滅するに而も獨り甞めず、五道に展轉し生死　彌　長く劫數を經歷て、何時か度を得む」と。佛、慈愍を以て偈を說きて曰はく、

諦を見淨くして穢無く、　已に五道の淵を度る、　佛出でゝ世間を照すは、　衆の憂苦を除かむが爲めなり。　人道に生るを得ること難く、　生壽も亦得難し、　世間に佛有ること難く、
佛法聞き得ることも難し。

佛、此の偈を說き給ふ時空中の五百の天人偈を聞き歡喜し皆、須陀洹道を得たり。

[一]安寧品　第二十三

昔、佛、羅閱祇に在しき。東南三百里山民の村五百餘家有り。人と爲り剛强以て道化し難し。宿世の福あり、願くば應に開度を蒙るべし」と。是に於て世尊、沙門を化作し村に至り分衞し給ふ。分衞し畢竟り、村外に出て樹下に坐し定んで泥洹三昧に入り七日に至るも喘がず息せず動かず轉ぜず。村人、之を見て謂へらく、命終ると爲すと。共に相ひ謂ひて曰く「沙門、已に死す、當に共に

【六】悵惘。なげきくらきこと。

【一】安寧品。Dhammapada. 第十五品 Sukha(安樂)、Udāna varga. 第三十品 Bala.(安樂)、出曜經第三十一、樂品。

來、乞匃して用つて生活せむと欲す、諦に人命を念ふに世に處すること幾も無し。萬物無常にして旦夕に保ち難し、因緣、遂に重り憂苦日に深し、寶を積むこと山の如きも己に益無し。貪欲、規圖し唐に自ら艱苦す。意を息め無爲の道を求むるに如かず、是を以て取らず」と。王、意開解し、願くば明教を奉ぜむと。是に於て梵志佛の光明を現はし、踊りて空中に住す。爲に偈を說きて言はく、

珍寶を積むを得、　崇高天に至り　是の如く世間に滿つと雖も、　道跡を見るに如かず。　不善の像は善の如く、　愛は不愛に似るが如く、　苦を以て樂相と爲すは　諸天[二]の滅する所と爲す。

是に於て國王、佛の光相遍く天地を照すを見、又此の偈を聞き踊躍し歡喜す。王及び群臣卽ち五戒を受け須陀洹道を得たり。

佛を述ぶる品[一]　第二十二

昔、佛、摩竭提界[二]の善勝道場の元吉樹の下に在し德力にて、魔を降し、坐して自ら惟ふて曰く「甘露の法鼓[三]三千に聞ゆ、昔、父王、遣はし給ふ五人、[四]麻米を供養し執侍して勞有り。功の報應を敍べむ、此の五人は波羅奈國に在り。是に於て如來樹下より起ち相好巖儀明に天地を暉す、威神、震動し見る者喜悅す。波羅奈國に至る。未だ中道に至らざるに一梵志に逢ふ、名づけて憂呼と曰ふ。親を辭し家を離れ師を求めて學道す、尊妙を瞻覩し驚喜交々集まり、道の側に下りて在り聲を擧げ歎じて曰く「威靈、人を感ず、儀・雅にして[五]挺特ず、本、何の師に事へ、乃ち斯の容を得たるや」と。佛、憂呼の爲めに而も頌を作りて曰はく、

八正覺を自ら得、　離無く所染無く　愛盡き欲の網を破る、　自然にして師受無し。　我が行

【二】諸天爲所滅。宋本による。底本、狂夫爲所厭、と作る、前句と意合はず、法句經、宋・元・明・聖本は狂夫爲所致（狂夫の致す所と爲す）と作る。

【一】述佛品。Dhammapada. 第十四品 Buddha(佛陀)、udāna varga. 第二十一品 De-bshin-gçegs-pa(如來)、出曜經、第三十二、如來品。

【二】摩竭提界。中印度の國名摩竭陀國に同じ、王舍城のある國。

【三】三千。三千世界の略。

【四】麻、米と大正本、縮刷本共に作るが糜(カユ)の字の分離せるものならん、但し、今は底本に從ふ。

【五】挺特。ぬきんづること。

手して佛に白して言く「頑愚にして及ばず未だ聖訓に達せず、唯、願くば愍育みて沙門と爲るを得せしめよ」と。佛、即ち、聽受し皆沙門と爲る。村人の大小佛の變化を見て歡欣ばざるは莫し。皆、道迹を得之を賢聖と稱す。復、屠兒の名無し。佛、食し畢訖り即ち精舍に還り給へり。

[一]世俗品第二十一

昔、婆羅門の國有り、王を多味寫と名づく、其の王、異道の九十六種に奉事ふ。王、忽ち、一日、善心を發し大布施を欲す。婆羅門の法の如く、七寶を積むこと山の如く持用つて、布施す。來り乞ふ者有らば自ら取らしめ重ねて一たび撮り去るを聽す。是の如くすること數日其の積、減ぜず、佛、是の王の宿福度に應ずるを知り梵志を化作し其の國に往到り給ふ。王、出でゝ相見え共に相ひ禮し起居を問うて曰く「何をか求索むる所ぞ、自ら疑難する莫れ」と。梵志、答へて言く「吾、遠くより來る、珍寶を乞ひ持ちて舍宅を作らむと欲す」と。王、言く「大いに善し、自ら重ねたる一を取りて、撮り去れ」と。梵志、一を取り撮りて七步を行き、還りて故處に著く。王、問ふやう「何故に取らざる」と。梵志、答へて曰く「此れは纔に舍廬を作るに足る耳、復、當に婦を娶り俱に用ふるに足らず、是を以て取らざるなり」と。王、言く「更に取れ」と、三たび撮る、梵志即ち取り七步を行き復還りて故の處に著く。王、梵志に問ふやう「何を以て復爾る」と。答へて曰く「此れは婦を娶るに足る。復、田地・奴婢・牛馬、無し、計るに復足らず、是を以て意を息むなり」と。王、言く「更に取れ」と。七たび撮る。梵志、即ち取り七步を行き、復還り故處に著く。王、言く「復、何の意の故ぞ」と。梵志、答へて言く「若し男女有りて、當に復嫁娶すべくんば、吉凶の用費計り、用ふるに足らず、是を以て取らざるなり」と。王、言く「盡く積める寶を以て持用へよ、相ひ上らむ」と。梵志、受けて捨て去る。王、甚だ之を怪しみ重ねて意故を問ふ。梵志、答へて曰く「本

【一】世俗品。Dhammapada. 第十三品 Loka(世俗)。

震ふ如く淸き霽雨と下る。坐上の道人驚怖し自ら悔ひ皆羅漢を得たり。王の爲めに說法し解釋せざるは莫し。群臣、百官皆須陀洹道を得たり。

昔、佛、舍衞國に在しき。

五百の婆羅門有り、常に佛を求めて之を誹謗せむと欲す。佛、三達の智あり普く人の心を見給ふ、愍みて之を度せむと欲し給ふも、其の果未だ熟せず因緣未だ到らず、一切の罪福來至せむと欲するの時自ら因緣を作して罪福を迎ふ。此の諸の梵志宿に微福有り應に度を得べし。福德の之を牽く自ら方宜を作す。五百の梵志自ら共に議りて言く「當に屠兒をして殺生せしめ佛及び衆僧を請ぜしむべし、佛、必ず請を受けて屠兒を讚歎せむ。吾等、便ち前みて共に之を譏らむ」と。是に於て屠兒之が爲めに佛を請ず、佛、卽ち、請を受け屠兒に告げて言く「果熟すれば自ら墮ち福熟すれば自ら度す。屠兒よ、還歸つて飯食を供設せよ」と。佛、諸の弟子を將ゐ屠兒の村の中に到り檀越の舍に至り給ふ。梵志の大小皆共に歡喜するやう「今日、乃ち佛の便を得たる耳、若し當に檀越の福德を讚ふべきならば當に以て其の前後罪を作すべし、持用つて之を譏らむ。佛、若し其の由來の罪を說かば當に今日の福を以て之を難ぜむ、二宜の中、今日、乃ち佛の便を得ん耳」と。佛、到りて卽ち坐し給ふ。水を行り食を下ぐ。是に於て世尊、衆心を觀察し、應に度すべき者あり、卽ち舌を出し面を覆ひ耳を甜め、大光明を放ち一城の內を照し、卽ち、梵聲を以て偈を說き呪願し給ふやう、

〔一〇〕眞人の敎の如き、道を以て身を活す、愚者は之を嫉み　見て惡を爲す、惡を行ぜば惡を得、苦き種を種うる如し。〔一一〕惡は自ら罪を受け、善は自ら福を受く、亦各熟すべし彼れ相ひ代らず、善を習へば善を得、亦甜を種ゆる如し。

佛、偈を說き已り給ふに、五百の梵志意自ら開解す。卽ち、前みて佛を禮し五體を地に投げ、叉

【一〇】此の偈、Dhammapada. 第百六十四偈。
【一一】此の偈、Dhammapada. 第百六十五偈。

れ闇塞此の如し、一偈を知らず、人の薄賤する所なり、是を用つて活くると爲むや」と。卽ち、繩を持ち後園の中の大樹の下に至り自ら絞死せむと欲す。佛、道眼を以て遙に是の如きを見たまひ、樹神を化作し給ふ。半身の人現はれて之を呵して曰く「咄咄！　比丘、何の爲めに此を作す」と。摩訶盧、卽ち、具に辛苦を陳ぶ、化神、呵して曰く「是を作すこと勿れ、且く、我が言を聽け、往、迦葉佛の時卿〔三〕三藏の沙門と作り、五百の弟子有り、自ら多智を以て衆人を輕慢し、經義を悋惜み、初めは訓誨せず、是を以て世世生る所諸根闇鈍なり、但、當に自ら責むべし、何ぞ爲めに自ら賊ふや」と。是に於て世尊、神光の像を現はし卽ち、偈を說きて言はく、

〔四〕自らの身を愛する者は　愼みて守る所を護れ、　希望して解を欲せば、　正を學むで寐まざれ。

〔五〕身は第一と爲す　常に自ら勉學せよ、　〔六〕乃を利し人を誨ふ　惓まざれば則ち智あり。〔七〕學は先づ自ら正しくし、　然る後人を正しくせよ、　身を調へ慧に入り　必ず遷つて上と爲る。　身を利する能はずして、　安んぞ能く人を利せむ、　心調へば體正しく、　何の願か至らざらむ。　〔八〕本、我が造る所を　後に我自ら受く、　惡を爲して自ら更ふること、　剛の珠を鑽る如し。

摩訶盧比丘、佛の身の光像を現はし給ふを見て、悲喜悚慄し佛の足を稽首す。偈義を思惟し卽ち定意に入り、尋いで佛の前に在りて羅漢道を逮得す。自ら宿命の無數の世事を識り、三藏の衆經卽ち貫きて心に在り。佛、摩訶盧に語り給ふやう「衣を著け鉢を持ち王宮の食に就け、五百の道人の上座に在れ、此の諸の道人、是れ卿の先世の五百の弟子なり、還び說法を爲し道迹を得せしめ、幷びに國王をして明に罪福を信ぜしめよ」と。卽ち、佛の敎を受け、徑宮裏に入り上座に坐す。衆人、心恚り共の所以を怪しむ。各王の意を護り敢て呵譴せず、念へらく、其の愚冥を曉らざるなりと、〔九〕達嚫の心之が爲に疲る。王、便ち、食を下し手自ら斟酌す。摩訶盧卽ち達嚫を爲す。音、雷の

【三】　三藏。經藏・律藏・論藏。

【四】　此の偈、Dhammapada. 第百五十七偈。

【五】　此の偈、Dhammapada. 第百五十八偈。

【六】　乃。宋・元・明・聖本による、底本能に作る。

【七】　此の偈、Dhammapada. 第百五十九偈。

【八】　此の偈、Dhammapada. 第百六十一偈。

【九】　達嚫。梵語、Dakṣiṇā 財施の義、又右手の義、齋食の後に僧に財物を施し右手をして之を受けしむるをいふ。又轉じて法施をもいふ。此處では法施。

戒を守らず　又財を積まず　老羸氣竭きて　故を思ふも何ぞ逮ばむ。　老ゆれば秋葉の如く
行ひ穢れ〔二〕繿褸なり、　命疾く脱至れば　後悔を容れず。

佛、梵志に告げ給ふやう「世に四時有り道を行はば福を得度を得て衆苦を免る可し、何をか謂ひて四と爲す。一には年少力勢有るの時、二には富貴財物有るの時、三には三尊の好福田に遇ふを得るの時、四には當に萬物を計し憂ひ離散すべき時、此の四時に行なはば願ふ所皆獲、必ず道跡を得るなり。是に於て世尊、重ねて偈を説きて言はく、

命日夜盡きむと欲す、　時に及むで勤力む可し、　世間は諦に非常なり、　惑ひて冥中に墮つる莫れ。　當に學びて意の燈を然し、　自ら練り智慧を求むべし、　垢を離れ染汚する勿れ
燭を執りて道地を觀よ。

佛、是を説き給ふ時大光明を放ち天地を照曜す、五百の年少の梵志此に因つて心解け衣毛爲に竪つ、起ちて佛の足を禮し佛に白して言く「世尊に歸命す、願くば弟子と爲らむ」と。佛、言く「善く來りぬ、比丘よ」と。即ち、沙門と成り羅漢道を得たり。村人の大小皆道跡を得歡欣せざるは莫し。

〔一〕愛身品　第二十

昔、一國有り、多摩羅と名づく。城を去ること七里にして精舍有り、五百の沙門常に其の中に處る。經を讀み〔二〕行道す。

一長老の比丘有り、摩訶盧と名づく。人と爲り闇塞なり。五百の道人傳へて共に之に教ふるも數年の中に一偈を得ず、衆、共に之を輕んじ將ゐて會を同じくせず、常に精舍を守り勅して掃除せしむ。後日、國王、諸の道人を請じ宮に入れ供養す。摩訶盧比丘、自ら念じて言く「我れ、世間に生

【二】繿褸、宋・元・明本に從ふ、底本鑑鏤と作る。

【一】愛身品。Dhammapada. 第十二品、Atta(自己)、Udāna varga. 第二十三品、Bdag(我)、出曜經第二十四、我品。
【二】行道。佛を敬禮する爲に其の周圍を佛の右方に向て旋繞するを云ふ。

佛、偈を說き已り給ひ、七比丘、意解け望止み、即ち佛前に於て阿羅漢道を得たり。

昔、佛、舍衞の精舍に在し諸の天人帝王の爲めに法を說き給へり。

時に、婆羅門村有り、五百餘家の中に五百の年少の婆羅門有り、婆羅門の術を修む。人と爲り憍慢にして長老を敬はず。貢高自ら貴び此を以て常のことと爲す。五百の梵志、欻ち自ら議りて言く「沙門[六]・瞿曇、自ら佛と爲り三達權智敢て共に論ずる者無しと稱す。吾等、共に請す可し、論議を求め事事詰問し何如が爲すを知らむ」と。即ち、具を辦し往きて佛を請じ來る。佛、諸の弟子と與に梵志の村中に往到り給ふ。坐し畢り水を行り食し訖り手を澡ぎ給ふ。時に、長老梵志夫婦二人有り、此の村の中に於て共に乞丐を行ふ。佛、其の本大富無數にして曾て大臣と作るを知り給ふ。佛、即ち、諸の年少梵志に問ひ給ふやう「汝等、長老の婆羅門を識るや不や」と。皆、言く「曾つて識る」と。又、問ふやう「本、何以を爲すや」と。曰く「本、大臣と爲り財富無數なり」と。「今は何故に復乞丐を行ふ」と。皆、言く「散じ用ひて無道なり、是を以て貧を守る」と。佛、諸の婆羅門に告げ給ふやう「世に四事有り、人行ふこと能はず、行はば福を得て此の貧を致さず、何をか謂ひて四と爲す、一には年盛・力壯にして愼みて憍慢する莫れ、二には年老い精進し婬泆を貪らざれ、三には財・珍寶有らば常に布施を念ぜよ、四には師に就き學問し正しき言を聽受せよ、此の老公の如き四事を行はず。これを常ありと謂ひ、成敗を計らず、一旦に離散す。譬へば老鵠[七]の此の空池を守りて永く獲る所無きが如し」と。是に於て世尊、即ち、偈を說きて言はく、

晝夜、慢惰たり、　老ゐて婬を止めず、　財有るも施さず　佛の言を受けず　此の四蔽有り
自ら侵欺を爲す。　咄！嗟ゝ老至り　色變じ耄と作り　少時意の如くせば　老ゐて蹈踐[八]せらる。
[九]梵行を修めず、　又、富財ならずむば　老ゐて白鵠の　空池を守り伺ふが如し。　[一〇]既に

【六】瞿曇。新に喬答摩といふ、釋種の姓、それより佛を外道の人々の姓を以つて呼ぶ。

【七】鵠。はくてう。

【八】蹈踐。ふみにじる。
【九】此の偈、Dhammapada. 第百五十五偈。
【一〇】此の偈、Dhammapada. 第百五十六偈。

巻の第三

[一]老耄品　第十九

昔、佛、舍衛國の祇樹精舍に在し食後天人・帝王・臣民・四輩の弟子の爲めに甘露の法を說き給へり。

時に、遠方の長老婆羅門七人有り、佛の所に來至り地に稽首し、叉手して佛に白して言はく「吾等、遠人なり、伏して聖化を聞くこと久し。當に歸命すべくして諸の礙多し。今、乃ち來覲し聖顏を見るを得たり、願くば弟子と爲り衆苦を滅するを得む」と。佛、卽ち、之を受け悉く沙門と爲し給ふ。卽ち、七人をして共に一房に止らしむ。然るに此の七人世尊を覲見するのみにて尋いで得道の爲めに無常を惟はず、共に房中に坐し但世事を思ふのみ、小語、大笑し成敗を計らず。命、日促盡り人に期を與へず。但、共に喜笑し意を三界に迷はすのみ。佛、三達の智を以て命盡きむとするを知り給ふ。佛、之を哀愍れみ其の房に起ち至り、之に告げて曰く「卿等、道の爲めに當に世を度するを求むべし、何ぞ大に笑ふことを爲すや、一切衆生は五事を以て自ら恃む、何をか謂つて五と爲す、一には年少を恃怙む、二には端正を恃怙む、三には多力を恃怙む、四には財富を恃怙む、五には貴姓を恃怙む。卿等七人小語し大笑し、何をか恃む所と爲すや」と。是に於て世尊、卽ち、偈を說きて言はく、

[二]何を喜び何を笑ふ、　念常に熾然り、　深く幽冥を蔽ふ、　定を求むるに如かず。
[三]身の形を見て範とし、　倚て以て安しと爲す、　想多きは病を致す　豈眞ならざるを知らむや。
[四]老ゆれば則ち色衰へ、　病みて光澤無く、　皮緩み肌縮み　死の命近づき促す。
[五]身死し神徙らば　乘車を御するが如し、　肉消え骨散ず、　身は何ぞ怙む可きや。

【一】老耄品。Dhammapada. 第十一品、Jarā(老衰)。
【二】此の偈、Dhammapada. 第百四十六偈。
【三】此の偈、Dhammapada. 第百四十七偈。
【四】此の偈、Dhammapada. 第百四十八偈。
【五】此の偈、Dhammapada. 第百四十九偈。

進み遙に如來を見たてまつる。情喜び量り難し。五體を地に投じ退きて一面に坐し、皆共に長跪し世尊に白して曰く「本初、家を發し三池に至り沐浴し仙を求めむと欲す、樹神を經出し陳ぶる所此の如し、是の故に化に投ず、願くば極靈を示し給へ」と。是に於て、世尊、其の所行に由りて偈を說きて言はく、

〔二〕裸に剪髮し、長服にして草衣し　沐浴し石に踞ると雖も、疑結を奈何せむ。伐ると殺すと燒くことをせず　亦、勝を求めず、天下を仁愛せば　適く所怨無し。

五百の梵志、偈を聞き歡喜す。皆沙門と爲り應眞の道を得たり。美音の宗等法眼を逮得せり。諸の比丘等、佛に白して言さく「五百の梵志及び長者等本何の德を行じ道を得ること何ぞ速かなるや」と。世尊、告げて曰く「過去久遠の時世に佛有り、名づけて迦葉と曰ふ。諸の弟子の爲めに法を說き給ふ。當來〔三〕五濁の時なり、時に梵志長者千人有り、同じく是の言を發す、我をして釋迦文佛に遭見せしめよと。爾の時の長者は今の美音等是れなり。是の因緣により我を見て便ち解れり」と。比丘、歡喜し禮を作し奉行せり。

【二】此の偈、Dhammapada. 第百四十一偈。

【三】五濁。一、劫濁。二萬歲以後に至つて見等の四濁起る時をいふ、二、見濁、身見邊見等の見惑なり劫濁時の衆生盛に之を起す、三、煩惱濁、貪瞋癡等の一切の修惑の煩惱を起すこと、四、衆生濁、人間の果報漸く衰へ心鈍く體弱く苦多く福少きをいふ、五、命濁、壽命漸く縮少し乃至十歲に至るをいふ。この下恐らく釋迦文佛出世說法等の語を脫するなるべし。

を聽く。一切歡喜し善を稱ふること量り無し。時に我、齋を奉じ暮て還り飡はず。婦、我が食せざるを怪みて問ふやう、「何を恨むや」と。答へて曰く、「恨まざるなり、」吾、市に行き長者須達の園に於て佛に飯を奉つるに見ゆ。我、往に齋を持つ、齋は八關と名くと。其の婦、瞋恚し忿然として言ひて曰く、瞿曇、俗を亂し奚んぞ採納するに足らむ。君は道則を毀る、禍此れより興らむと。蹴迫して已まず、便ち、共倶に食ふ。時に、我、爾の夜年壽算盡き夜半に終り神此に來り生る。是の愚婦の爲めに我が齋法敗れ其の業を終へず、斯の澤に來り生れ、此の樹神と作る。酪を提ぐるの福手より飲食を出す。若し齋法を終へなば應に天に生れ、封受自然なるべし」と。即ち、梵志の爲めに而も頌を說きて曰く、

祠祀は禍根を種へ　日夜枝條を長くし　唐に身の本を苦しめ敗る　齋法は世の仙を度す。

梵志、悉く偈を聞きて解り信受せり。旋りて舍衞に還り路一國に由る。國を拘藍尼と名づく。長者有り名づけて美音と曰ふ。人と爲り恩仁衆人敬仰す。梵志、宿を過ぐ、長者、問うて曰く「道士、那より來り今所に至らむと欲するや」と。具に、彼の澤の樹神の功德を陳べ、舍衞に詣り、須達の所に造り齋法を攬採し冀くば福を得るを蒙らむと欲す」と。美音、喜踊し、宿行の追ふ所を恒に自ら解暢す。宗室に誰か能く共に行きて齋戒の法を受くと宣命し、合して五百人僉然として命に應じ、本願相ひ引き威儀嚴出し共に舍衞に詣る。未だ祇洹に至らざるに道に須達と逢ふ。遇うて而も識らず、顧みて從者に問ふやう「此れは何の丈夫ぞ」と。對へて曰く「須達なり」と。梵志の衆等喜び追うて曰く「吾が願成ぜり、人を求めて人を得たり」と。馳せ趣き相ひ見え、聲を同じくし歎じて曰く「樹神德を歎じ、虛心に注仰ぎ具に所嗟を說く、故に來り投託す、冀くば法齋を示し車を住めよ」と。答へて曰く「求むる所大いに善し、吾に尊師有り、號して如來と曰ふ。衆祐にして人類を度脫し近く祇洹に在せり、共に親しく造る可し」と。即ち皆敬諾し恭肅す。前に

【八】八關齋。八戒齋のこと、殺・盜等の八罪を禁閉すること、此の八戒には齋法(不過中食)を具す、此の八戒齋は在家の男女一日一夜受持する戒法である。
【九】採納。とりいるゝこと。
【一〇】蹴迫。せまること。
【一一】僉然。ことごとく。

[四]良善を杖にて撾ち　妄に無罪を讒せば　其の殃、十倍し　災卒に赦すこと無けむ。[五]生きて酷痛を受け、　形體、毀折れ、　自然に惱病あり　失意恍惚たり。[六]人に誣染せられ　或は縣官の厄あり、　財產、耗盡し、　親戚、別離し、　舍宅、所有　災火に焚燒かれ、　死して地獄に入る、　是の如きを十と爲す。

時に、病比丘、佛の此の偈及び宿命の事を聞き自ら本行を知り心を剋し自ら責め、即ち、佛の前に於て患ふ所除愈ゆ、身安んじ意定り即ち羅漢道を得たり。賢提國王、歡喜・信解し尋いで五戒を受け、淸信士と爲り命を沒するまで奉行し須陀洹道を得たり。

昔、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園の精舍の中に在し、天人・龍鬼の爲めに法を說けり。東方に國有り、鬱多羅波提と名く。昔、婆羅門五百人有り、五百人相ひ牽ゐ恒水に詣らむと欲す。岸邊に三つの祠神の池有り、垢穢の裸形を沐浴し仙を求むること尼犍の法の如し。道、大澤に由り迷ひて過ぐるを得ず、中道にして糧に乏し。遙に望むに一大樹有り、神氣有るが如し、人の居ること有るを想ひ馳せて樹下に趣むき、見る所無きを了る。婆羅門等聲を擧げ大に哭く。飢渴委厄し斯の澤に窮死せむとす。樹の神人現はれて諸の梵志に問ふやう「道士よ、那より來り今何に行かむと欲するや」と。聲を同じくして答へて曰く「神池に詣り、澡浴し仙を望まんと欲す。今日、飢渴す、幸に哀れみ矜濟せよ」と。樹神、即ち手を擧ぐ、百味の飲食手より流れ溢れ衆に飲食を給し皆飽滿を得たり。其の餘の飲食道糧を足し供す。當に別れ去るべきに臨み神に詣り請問するやう「本何の德を行ひ此の巍巍を致すや」と。神、梵志に答ふるやう「吾本居る所は舍衛國に在り、時に國の大臣を名づけて須達と曰ふ、佛、衆僧に飯くはさむとし市に詣り酪を買ふ、酪を提ぐる者無し、左右顧視す。倩はれて我之を提ぐ。精舍に往到り、我をして斟酌せしむ。澡水を行るを訖へ儼然として法

【四】此の偈、Dhammapada. 第百三十七偈。
【五】此の偈、Dhammapada. 第百三十八偈。
【六】此の偈、Dhammapada. 第百三十九偈。
【七】此の偈、Dhammapada. 第百四十偈。

舍の中に在りて臥して瞻視する者無し。佛、五百の比丘を將ゐ其の所に往至り給ふ。諸の比丘をして傳る〳〵、共に之を視せしめ爲に〔二〕糜粥を作らしめ給ふ。而して諸の比丘其の臭處を聞き皆共に之を賤しむ。佛、天帝釋をして湯水を取らしめ佛の金剛の手を以て病比丘の身體を洗ひ給ふ。地尋いで震動し燿然として大明あり驚肅せざるは莫し。國王・臣民・天・龍・鬼神の無央數の人、佛の所に往到り稽首し禮を作し佛に白して言さく「佛は世尊爲り、三界に比無く道德已に備はる。云何か意を屈して此の病瘦・垢穢の比丘を洗へ給ふや」と。佛、國王及び衆會の者に告げ給ふやう「如來世に出現する所以は正に此の窮厄して護無き者の爲め耳。病瘦の沙門・道士及び諸の貧窮・孤獨の老人を供養するは其の福量り無く願ふ所意の如し。譬へば五河の流るゝが如く福の來ること是の如し。功德漸く滿ち會當に道を得べし。王、佛に言さく「今、此の比丘宿に何の罪有り病に困しみ年を積むも療治して差えざるや」と。佛、王に告げて曰ふやう「往昔、王有り、名けて惡行と曰ふ。治政嚴暴なり、一多力の〔三〕伍伯主をして人を鞭たしむ。伍伯、王の威怒を假り私に寒熱を作す。若し人を鞭たむと欲せば其の價數を責む、物を得ば鞭つこと輕く得ざれば鞭つこと重し。國を擧げて之を患ふ。一賢者有り、人の爲に訴へられ當に鞭つべきに應ず、伍伯敬じて言く、吾は是れ佛弟子なり、素り罪過無し、人の爲に枉げらる。願くば小らく恕を垂れよ」と。伍伯、是れ佛の弟子なるを聞き手を輕くして鞭を過ぎ身に著くる無し。伍伯、壽終り地獄の中に墮ち拷掠、萬毒の罪滅び復出でゝ畜生の中に墮ち恒に杖に撾たるゝこと五百餘世なり。罪畢り人と爲り常に重病に嬰り痛み身を離れず。爾の時の國王とは今の調達是れなり。時の伍伯とは今の病比丘是れなり、時の賢者とは吾が身是れなり、吾、前世を以ふに其の恕す所となり鞭身に著かず、是の故に世尊となり、躬爲めに之を洗ふ、人善惡を作さば殃福身に隨ふ、更に生死すと雖も免ることを得可からず」と。是に於て世尊、即ち偈を說きて言はく、

【二】糜粥。固きかゆとゆるきかゆ。

【三】伍伯主。伍長。

の智德の能有り舍夷國人を安處するを知ると雖も萬物衆生に七つの不可避有り。一には生、二には老、三には病、四には死、五には罪、六には福、七には因緣、此の七事は意避けむと欲すと雖も自在を得る能はず。卿の威神此を作すを得べきが如きも宿對の罪を負ひ離るゝを得可からず」と。是に於て目連、禮し已り便ち去る。自ら私意を以て舍夷國人の知識・檀越の四五千人を取り鉢の中に盛り著け擧げて虛空の星宿の際に著く。瑠璃王、舍夷國を伐ち三億人を殺し已り軍を引ゐて國に還る。是に於て目連、佛の所に往到り、佛の爲めに禮を作し自ら貢高して曰く「瑠璃王、舍夷國を伐つ。弟子、佛の威神を承け舍夷國人四五千人を救ふ。今、虛空に在り皆盡く脫るゝを得たり」と。佛、目連に告げ給ふやう「卿、爲に往きて鉢の中の人を看しや不や」と。曰く「未だ往きて之を視ず」と。佛、言く「卿、先に往きて鉢の中の人衆を視るべし」と。目連、道力を以て鉢を下し中の人を見るに皆死し盡くせり。是に於て目連、悵然として悲泣し其の[五]辛苦を愍れむ。還び佛に白して言さく「鉢の中の人は今皆死し盡くせり。道德・神力も彼の宿對の罪を免る能はず」と。佛、目連に告げ給ふやう「此の七事有り、佛、及び衆聖・神仙・道士・形を隱し體を散ずるも皆此の七事を免ること能はず」と。是に於て世尊、即ち、偈を說きて言く、

[六]空に非ず海中に非ず　山石の間に隱るゝに非ず、　能く此處に於て宿惡の、　殃を避免ること莫し。
衆生苦惱有り、　老死を免る能はず　唯、仁智有る者のみ　人の非と惡を念はず。

佛、是を說き給ふ時座上の無央數の人佛の無常法を說き給ふを聞き皆共に悲哀し對の難免るゝを念ひ欣然として道を得て須陀洹の證を逮せり。

[一]刀杖品　第十八

昔、一國有り、名けて賢提と曰ふ。時に長老比丘有り、長病・委頓し羸痩・垢穢なり、賢提の精

【五】辛苦。大正本辛に作るは誤植。

【六】此の偈、Dhammapada. 第百二十七偈、Udānavarga. 第九品、Las(業)、第五偈。

【一】刀杖品。Dhammapada. 第十品、daṇḍa(刀杖)。

佛、諸の天人に告げ給ふやう「汝は之れ近世獸身と爲り乃ち能く戯笑すと雖も塔寺を起作し今、天に生るゝことを得罪滅び福興る。今復來り躬に正教を奉ず。此の因緣に從り長く衆苦を離るべし」と。佛、是を說き已り五百の天人卽ち道迹を得たり。其所に共に來る水邊の五百の婆羅門罪福の報を聞きて自ら歎じて曰く「吾等、仙を學び積むこと年數有り、未だ果報を蒙らず、獼猴の戯笑して福を爲し天上に生るを得たるに如かず。佛は之れ道德、實妙乃し爾なり」と。是に於て佛の足を稽首し「願くば弟子と爲らむ」と。佛、言く「善く來りぬ、比丘よ」と。卽ち、沙門と成り、精進して日に脩め遂に羅漢道を得たり。

昔、佛、舍衞國の精舍の中に在し諸の天人の爲めに法を說き給へり。

時に、國王の第二兒を名けて瑠璃と曰ふ。其の年二十にして官屬を將ゐ從へ其の父王を退け兄の太子を伐ち自ら擅に王と爲る。一惡臣[四]有り名づけて耶利と曰ふ。瑠璃王に白すやう「王、本皇子爲りし時舍夷國外の家舍に至り佛の精舍の中を看んとして到り、諸の釋種子の爲めに呵せらる。罵詈し、好醜有ること無し。爾の時勅せらるゝやう、若し我れ王と爲らば、便ち此の事を啓せと。今、時已に到る。兵馬を興盛し宜しく當に怨を報ゆべし」と。卽ち、勅して嚴駕し兵馬を引率し往きて舍夷國を伐つ。佛に第二の弟子有り、摩訶目揵連と名く。瑠璃王、兵士を引率し舍夷國を伐ち以て宿怨を報ぜんとし、今、當に四輩の弟子を殺すべきを見、其の憐む可きを念ひ便ち佛の所に往到り、佛に白して言く「今、瑠璃王、舍夷國を攻む。我、念ふに中の人辛苦に遭ふべし、我、四方便を以て舍夷國の人を救はむと欲す。一には舍夷國人を擧げて虛空の中に著き、二には舍夷國人を擧げて大海の中に著き、三には舍夷國人を擧げて兩鐵圍山の間に著き、四には舍夷國人を擧げて他方の大國の中央に著き瑠璃王をして其處を知らざらしめむ」と。佛、目連に告げ給ふやう「卿、是

【四】惡臣。大正本臣字漏脫。

香し之を遶ること七匝なり。時に山中に五百の婆羅門有り、外道の邪見にして罪福を信ぜず。諸の天人の散華・作樂し獼猴の屍を遶るを見て怪み而して問ふて曰く「諸天の光影巍巍乃ち爾なり。何の故に意を屈し此の屍を供養するや」と。諸の天人曰く「此の屍は是れ吾等の故身なり、昔、此の澗に在りて諸の道人に效ひ塔寺を戯に立て、山の水、瀑漲し吾等を漂殺す、此の微福を以て天上に生るゝを得たり。今、故に散華し以て故身の恩に報ゆ。戯れに塔寺を爲り此の如き福を獲たり。若し當に至心に佛、世尊を奉ぜは其の德喩難し、卿等、邪見にして正眞を信ぜず百劫懃苦して一も得る所無し、共に耆闍崛山に往至り禮事・供養し福の無限を得るに如かず。」と。即ち、皆欣然として共に佛の所に至り、五體にて禮を作し散華供養す。諸の天人佛に白すやう「我等近き世獼猴の身なり、世尊の恩を蒙り天上に生るゝを得たり。恨らくは佛を見奉らず。今、故に自ら歸す」と。重て佛に白して言さく「我等前世何の罪行あり此の獼猴の身を受け塔寺を作すと雖も身漂殺せらるゝや」と。佛、天人に告げ給ふやう「此の因緣有り、空より生ぜず。吾、當に汝の爲めに其の由る所を說くべし。

乃往昔時、五百の年少の婆羅門有り、共に行いて山に入り仙道を求めむと欲す。時に山上に一沙門有り、山の上に於て泥にて精舍を治めむと欲し谷に下り水を取る。身の輕きこと飛ぶが若し。五百の婆羅門嫉妬の意を興し聲を同じくして之を笑ふ。「今、此の沙門の上下し、翩疾すること亦獼猴の如き耳。是の如く水を取りて止まずんば山水一たび來り溺殺すること久しからざるなり」と。佛、諸の天人に告げ給ふやう「爾の時の上下せし沙門とは我が身是なり、五百の年少の婆羅門とは五百の獼猴の身是なり、戲笑して罪を作り身に其の報を受く」と。是に於て世尊、即ち偈を說きて言はく、

戲笑を惡と爲す　已に身行を作さば　號泣ぶも報を受く、　行に隨つて罪至る。

豐強、三には安穩無病、四には壽を益し終に枉横ならず、之を行ひて懈らずんば亦道を得べし、」と。是に於て世尊、即ち、偈を說きて言はく、

[一七]神を祭りて以て福を求め　後より其の報を望むも　四分して一をも望まず、　賢を禮する者に如かず。[一八]能く善く禮節を行ひ　常に長老を敬ふ者は　四福自然に增す　色と力と壽と安なり。

是に於て其の人、佛の此の偈を聞き歡喜し信解し稽首して禮を作す。重ねて佛に白して言すやう「罪垢の蔽ふ所となり罪を積むこと九年なり、幸に慈化に賴り今開解を得たり。唯、願くば世尊よ、沙門と爲るを聽し給へ」と。佛、言く「善く來りぬ、比丘よ」と。頭髮、自ら墮ち即ち沙門と成れり。內に[一九]安般を思ひ即ち羅漢道を得たり。

[一]惡行品第十七

昔、佛、羅閱祇國に在しき。

一羅漢の須漫と名くるものを遣はし佛の髮爪を持ち罽賓の南に至り、山の中に[二]佛圖寺を作らしめ給ふ。五百の羅漢常に其の中に止まり、旦夕燒香し塔を遶て禮拜せり、時に彼の山中に五百の獼猴有り、諸の道人の塔寺を供養するを見、即便ち相ひ將ゐて[三]深澗の邊に至り、輦を負ひ泥石にて效ひて佛圖を作り木を竪て刹を立て幣を幡頭に繫げ、旦夕、禮拜すること亦道人の如し。時に、山水瀑漲し五百の獼猴一時に漂沒し、魂神、即ち、第二忉利天上に生る。七寶の殿舍、衣食自然なり。各自ら念じて言ふやう「何所より來りて天上に生るを得たるや」と。即ち、天眼を以て自らの本形を見、獼猴の身諸の道人に效ひ塔寺を戲作し、身漂沒すと雖も神生天を得たるを知り、今、當に下りて故屍の恩に報ゆべしと、各侍從を將ゐ華香・伎樂し故屍の上に臨み、散華・燒

[一七] 此の偈、Dhammapada. 第百八偈。

[一八] 此の偈、Dhammapada. 第百九偈。

[一九] 安般。數息觀。

[一] 惡行品。Dhammapada. 第九品、Pāpa (惡業)、Udānavarga. 第二十八品、Sdig.(惡行)、出曜經第二十九、惡行品。

[二] 佛圖寺。梵名、Stūpa. 塔。

[三] 深澗。深いたに。

三自歸を受け優婆塞と爲り亦法眼を得たり。

昔、佛、舍衛の精舍に在し敎化し給いし時羅閱祇國に一人有り、人と爲り凶愚にして父母に孝ならず良善を輕侮し長老を敬はず。居門衰耗し常に意の如くならず。便ち事火を行じ福祐を求めむと欲す。事火の法として日適沒せむと欲して大火聚を燃す。之に向つて跪拜し或は夜半火滅するに至つて乃ち止む。是の如くすること三年復福を得ず。更に日月に事ふ。日月に事ふるの法は晝は日出づるを以てし、夜は月明るを以て日月に向ひて拜す。沒して乃ち休止す。是の如く三年復福を得ず。轉復天に事へ燒香跪拜す。甘美の香華・【一四】酒脯・猪・羊・牛犢を奉上し遂に貧困に至り故に福を得ず。懃苦・憔悴し、病、門を去らず。舍衛の國に佛有り諸の天の宗ぶ所なり、當に往きて奉事すべし、必ず望めば福を得むと聞き、即ち、佛の所に至る。精舍の門に至り世尊を瞻視奉るに光相晃然たり、容顏奇異にして星の中の月の如し。佛を見て歡喜し頭面禮を作し叉手して佛に白すやう「生長してしかも愚癡にして三尊を識らず、火と日と月と及び諸の天に事へ九年精懃して永く福を蒙らず、顏色憔悴し氣力衰微し、四大多く患ひ死亡すること日無し。世尊は人を度し給ふ師なりと伏承りて。故に遠く自ら歸す。願くば福慶を垂れ給へ」と。佛、之に告げて曰く「汝の事ふる所は盡く是れ妖邪・【一五】魑魅・【一六】魍魎なり、禱祀ること山の如きも罪は江海の如し。殺生して福を求むるは福を去ること遠きなり。正に百劫懃苦し盡く殺し普天の猪・羊を持用つて禱祀るも罪は須彌の如く福は芥子ほども無し。徒に自ら費喪して、豈に惑はざらむや、又卿、人と爲り父母に孝ならず賢善を輕易んじ長老を敬はず、憍慢、貢高にして三毒熾盛なり。罪蓋日に深く何に緣りてか福を得む。若し能く心を改め賢者を禮敬し威儀禮節あり長老に供奉へ、惡を棄て善を信じ己を修め仁を崇めなば四福日に增し世世患ひ無からむ。何等をか四と爲す。一には顏色端正、二には氣力

【一四】酒脯。酒と乾肉。

【一五】魑魅。鬼の屬、ばけもの。

【一六】魍魎。水の神、又は山の精。

す所大多なるも福報薄少なり。火の中に種うる如く何に從つて報を得むや、若し、我れ化せずむは長く法門を離れん」と。是に於て、世尊、便ち起ちて服を嚴にし化して地より出て大光明を放ち普く衆會を照し給ふ。大小、之を見て未曾有と怪しみ、驚怖、悚懼し何の神なるかを知らず。長者羅摩達及び諸の大衆頭面を地に著け佛の爲めに禮を作せり。佛、衆人を見るに皆敬心有り、其の恭肅に因り便ち偈を說きて言はく、

〔二〕月に千反祠り、 終身輟まざるも、 須臾、一心に 法を念ずるに如かず、 一念の造福は
彼が終身に勝る。 〔三〕百歲を終へて 火神に奉事ふと雖も、 須臾三尊を 供養するに如かず、
一たびの供養の福は 彼が百年に勝る。

是に於て世尊、藍達に告げて曰く「施に四事有り、何等をか四と爲す。一には施多きも福報を得ること少し。二には施少きも福報を得ること多し、三には施も多く福報を得ることも多し。四には施も少く報を得ることも亦少し。何をか施多く福報を得ること少しと謂ふや。其の人愚癡にして殺生し祭祠す。酒を飲み歌舞し財寶を破損し福慧有ること無し。何をか施少く報を得ること少しと謂ふや。慳貪にして惡意を以て道士に施す。倶に兩ながら愚癡なり。是の故に福無し。何をか施少く福を得ること多しと謂ふや。能く慈心を以て道德の人に奉ず。道士、食し已り精進して誦を學ぶ。施は此れ少しと雖も其の福彌大なり。何をか施多く福を得ること多しと謂ふや。若し賢者有り世の無常を覺り、好き心にて財を出し塔寺・精舍・菓園を起立て三尊に衣服・履屣・床榻・厨膳を供養せば斯の福五河の流れて大海に入るが如し。福流是の如く世世斷ぜず。是を施多く其の報轉多しと爲す。譬へば農家の地厚薄有り、得る所同じからざるが如し」と。爾の時、藍達長者、座中の會の人佛の變化を見、說法の言を聞き皆大いに歡喜す。諸の天人と神と皆須陀洹道を得、五千の梵志皆沙門と作り應眞の道を得たり。主人、藍達の家に居る大小皆五戒を受け亦道迹を得、國王、大臣皆

【二】此の偈、Dhammapada. 第百六偈。
【三】此の偈、Dhammapada. 第七偈。

て臂を申し吾に鉢を授くる耳」と。即便ち、請じ入る。威神常に倍す。王、佛に白して言く「聞く、般特、本性愚鈍なりと、方に一偈を知り何に緣りて道を得たる」と。佛、王に告げ給ふやう「學必ずしも多からざるも、之を行ふを上と爲す。般特一偈の義を解し精理神に入る。身と口と意と寂、淨きこと天の金の如し。人、多く學ぶと雖も解らず行はざれば徒に識想を喪ふ。何の益か有らむ哉」と。是に於て世尊、即ち、偈を說きて言はく、

[三]千章を誦すと雖も、句義正しからずむば、一要を聞きて惡を滅すべきに如かず。[四]千言を誦すと雖も、義あらずむば何の益あらむ、一義を聞きて行じ度す可きに如かず。[五]多く經を誦すと雖も、解せずむば何の益あらむ、一法句を解するも行ぜば道を得べし。

佛、偈を說き已り給ふ。二百の比丘阿羅漢道を得たり。王及び群臣・夫人・太子歡喜せざるは莫し。

昔、佛、舍衞國の精舍の中に在し天人の爲めに法を說けり。

時に、舍衞國の中婆羅門長者有り、藍達と名く。大富極り無く其の家の資財計り數ふ可からず。梵志の法として當に大壇を作り以て名譽を顯すべし。家の財を盡し持用て布施し[六]般闍于瑟を作し婆羅門五千餘人に供養す。五年の中衣被・[七]床榻・醫藥・珍奇の寶物、郊祠の供具を供給し愛惜する所を盡くす。諸の梵志等五年の中羅摩長者の爲めに諸天・四山・五嶽・星宿・水火を祭祀し周遍せざるは無し。長者を呪願す。長夜福を受け五歲已に周る。最後の一日極めて大いに布施すること長者の法の如し。金鉢には銀の粟を盛り銀鉢には金の粟を盛る。象馬・車乘・奴婢・資財・七寶の服飾・繖蓋・[八]履屣・鹿皮の衣・錫杖・踞床・澡盤・床榻・[九]蓆薦、所應に得べし。事事八萬四千盡く持て布施す。其爾の日に當り皆大會に來る。鬼神・國王・大臣・梵志・大姓、悉く來り坐に會す。[一〇]隱隱・[一一]闐闐・歡欣せざるは莫し。佛、是の如きを見歎然として言ひて曰く「此の大姓の梵志何ぞ以て愚癡なる。施

【三】此の偈、Dhammapada. 第百偈。
【四】此の偈、Dhammapada. 第百一偈。
【五】此の偈、Dhammapada. 第百二偈。
【六】般闍于瑟、五年會なり。五年毎に設くる大齋會、無遮會と義譯するは一切の人を容受して遮遣せざればなり。
【七】床榻。とこやしとね。
【八】履屣。くつ。
【九】蓆薦、しきもの。
【一〇】隱隱。盛なる貌。
【一一】闐闐。鼓の聲・車馬・人の聲など盛なること。

し。一心に諦に聽けよ」と。般特、敎を受け而して聽く。佛、卽ち、爲に身三、口四、意三の由る所其の起る所を觀じ其の滅する所を察するを說き給ふ。三界、五道輪轉息まず。之に出つて天に昇り之に出つて淵に墮し之に出つて道を得、涅槃は自然なりと、分別して無量の妙法を說き給へり。時に、般特、然として心開け卽ち羅漢道を得たり。爾の時、五百の比丘尼有り、別に精舍に有り。佛、日一比丘を遣はし爲めに經法を說かしめ給ふ。明日、般特、次で應に行くべしと。諸の尼之を聞き皆豫め笑を含む。明日來らば我等當に共に逆つて其の偈を說き之を慚愧して一言する所無らしめむと。明日、般特、諸の比丘尼に往く。大小皆出て禮を作し相ひ視て笑ふ。坐し畢り食を下ぐ、食已り手を澡ぎ請ひて法を說かしむ。時に、般特、卽ち、高座に上り自ら慚否して曰く「薄德下才末に沙門と爲る。頑鈍素より學ぶ所有るも多からず、唯、一偈を知り粗其の義を識る、當に敷演を爲すべし、願くば各靜に聽けよ」と。諸の年少比丘尼偈を說くに逆はむと欲するも口開く能はず、驚怖し自ら責め稽首して過を悔ゆ。般特、卽ち、佛の說き給ふ所の如く、一々身意の由る所、罪福の內外、天に昇ること、道を得ること、神を凝し想を斷ち定に入るの法を分別す。卽ち時に諸の尼其の說く所を聞き甚だ其の異を怪しみ、一心に歡喜し、皆羅漢道を得たり。

後日、國王、波斯匿、佛と衆僧を請じ正殿に於て會す。佛、般特の威神を現さむと欲し鉢を與へ持つて後に隨つて行かしむ。門士、之を識り留めて入るを聽さず「卿、沙門と爲り一偈を了せず、請を受けて何をか爲す。吾は是れ俗人なるも出りて尙偈を知る。豈、況んや沙門をや、智慧有ること無き卿に施すも益無し、門に入る須からず」と。時に、般特、卽ち、門外に住す。佛、正殿に坐し水を行り畢る。般特、卽ち、鉢を擎げ臂を申し遙に以て佛に授く。王及び群臣、夫人、太子、衆會の四輩臂の來入を見て其の形を見ず。怪みて佛に問ふやう「是れは何人の臂ぞや」と。佛言く「是は般特比丘の臂なり。近日道を得て向に吾が鉢を持たしむ。門士、來り入るを聽さず、是を以

卽便ち、供を設け宿昔に已に辦ぜり。舍衞國に向ひ稽首長跪し燒香し佛を請ぜり。「唯、願くば尊を屈し廣く一切を度せよ」と。佛、其の意を知り、卽ち、五百の羅漢と與に各神足を以て其の舍に往到り給ふ。國王、人民敬肅せざるは莫し。佛の所に來至り五體を地に投じ却きて王位に坐す。食畢り澡ぎ訖る。佛、主人及び王の官屬の爲めに廣く明法を諫べ給ふ。皆、五戒を受け佛弟子と爲る。起ちて佛前に住し分那を歎じて曰く「家に在りては精勤し出家して道を得、神德、高遠にして家國度を蒙むる。我、當に云何が以て其の恩を報ひむ。」と。是に於て世尊、重て分那を歎じて偈を說きて言はく、

六 心已に休息し、　言行も亦止み、　正解脫に從はば、　寂然、滅に歸せむ。
七 欲を棄て著無く、　三界の障を缺き　望意已に絕ゆ　是を上人と謂ふ。
八 若しは聚、若しは野、　平地も高原も　應眞の過ぐる所　度を蒙らざる莫し。
九 彼は空閑を樂しむ、　衆人は能はず。　快なる哉、望無く、　欲求する所無きことや。

佛、偈を說き已り給ふ、主人及び王益歡喜を加へ供養すること七日須陀洹道を得たり。

一 千を述する品　第十六

昔、佛、舍衞國に在しき。一長老比丘有り、二般特と字す。新に比丘と作り禀性闇塞なり。佛、五百の羅漢をして日々之に教へしむ。三年の中に一偈を得ず。國中の四輩皆其の愚冥を知る。佛、之を愍傷し卽ち呼びて前に著け一偈を授與す。口を守り意を攝め身、非を犯す莫く是の如く行ずれば世を度することを得と。時に、般特、佛の慈恩を感じ歡欣し心開く、偈を誦し口を上ぐ。佛、之に告げて曰く「汝、今、年老いたり、方に一偈を得たり。皆之を知る奇と爲すに足らず。今、當に汝の爲に其の義を解說すべ

【六】此の偈、Dhammapada. 第九十六偈。
【七】此の偈、Dhammapada. 第九十七偈。
【八】此の偈、Dhammapada. 第九十八偈。
【九】此の偈、Dhammapada. 第九十九偈。
【一】述千品。Dhammapada. 第八品、Sahassa (千)、Udāna varga. 第二十四品、Sgre-ba(廣說)、出曜經第二十五、廣演品。
【二】般特。梵名、Kṣudra-panthaka. 周利槃特迦、愚なる佛弟子。

と曰ふ。年少く聰了にして〔二〕買販、市買す。海に入り生を治め事として知らざる無し。居家の財物分ちて一分と爲し、奴の分那を以て持ちて一分と作す。兄弟鬮を擲げ弟、分那を得たり。妻子を將ゐ空手舍を出づ。時に世飢儉唯分那を得るも相ひ活きざるを恐れ以て愁憂を爲す。時に、奴分那大家に白して言く「願くば愁憂する莫れ、分那計を爲し月日の中當に兄に勝らしめむ」と。大家、言く「若し審に爾るを能くせば汝を放ち良人と爲さむ」と 大家の夫人、私に珠物有り、分那に與へ本と作す。時に海の潮來り城内の人民水邊に至り薪を取る。分那珠物を持ち出て城外に至り、一乞兒の薪を賣るを見る。薪の中に牛頭栴檀香有り重病を治す可し。〔三〕一兩の直千兩金なり。時に世一も常に得る可からず。分那、之を識り金錢二枚を以て買ひ得て持ち歸り數十段に破作る。時に長者有り重病を得たり。當に此の牛頭栴檀香二兩を須ひ藥に合すべし。求むるも得ること能はず。分那、持ちて往き卽ち二千兩金を得たり。是の如く賣り盡し得る所の資財兄の十倍に富む。大家、分那の恩に感念し言の誓に違はず放ちて良人と爲す。意の樂ふ所に隨ふなり。

是に於て分那、辭して行き學道す。舍衞國に到り佛の爲めに禮を作し長跪して佛に白すやう「出づる所微賤なり、心道德を樂しむ。唯、願くば世尊よ、慈を垂れ濟度せよ」と。佛、言く「善く來りぬ、分那よ」と頭髮、自ら墮ち法衣身に著き卽ち沙門と成れり。佛、爲めに法を說き尋いで羅漢道を得たり。坐して自ら思惟するやう「今、六通を得存亡自由なり。今、當に度に往き幷びに國人を化すべし」と。時に分那、本國に往到り主人の家に至る。主人、歡喜し坐に請じ食を設く。食し訖り手を澡ぎ虛空に飛昇す。身を分ち體を散じ半にして水火を出す。光明洞達し上より下に來る。主人に告げて曰く「此れは之れ神德、皆是れ主人放捨の福なり。佛の所に往到り學ぶ所是の如し」と。主人、答へて曰く「佛の神化、微妙乃し爾なり。願くば世尊に見え其の教訓を受けむ」と。分那、答へて曰く「但、當に至心〔四〕饌具を供設すべし。佛、〔五〕三達の智あり必ず自ら來らむ」と。

【二】買販。市買、あきなふこと。

【三】一兩。四匁。

【四】饌具。飲食するに用ふる具。

【五】三達。天眼・宿命・漏盡の三、天眼は未來の生死の因果を知り、宿命は過去の生死の因果を知り漏盡は現在の煩惱を知りて之を斷盡す。之を知ること窮盡するを達といふ。

に、口より五色の光を出し普く天地を照す。佛、小兒の父母及び村人の大小に告げ給ふやう「此の二小兒は是れ鬼魅に非ず。福德の子なり。前に迦葉佛の時曾て沙門と作り、少小共に朋友と爲り、志を同じくし出家して各自ら精進す。道を得べきに臨み欻ち邪想を起し共に相ひ[二六]沮敗す。世の榮華を樂しみ福を恃み天に生る。下りて侯王・國王・長者と爲る。欻ち是の想を起し便ち墮して退轉し涅槃を得ず、此の生死を受く。彌劫數を連ね常に相ひ鈎牽す。輒ち共に雙び生れ我が世時に遭ひ今始めて乃ち生る。已往、佛を供養するの功德の故に餘福度に應じ罪滅し福生す。自ら宿命を識る。是を以て世尊、故に來りて之を度す。我、度せずむば橫に火の爲に燒かる」と。

是に於て世尊、卽ち偈を說きて言く、

[二七]大人は無欲を體とし　在所照然として明かなり、　或は苦樂に遭ふと雖も、　高く其の智を現さず、　[二八]大賢は世事無し、　子と財と國とを願はず、　常に戒と慧と道とを守り　邪の富貴を貪らず。　智人は動搖は譬へば　沙中の樹の如しと知る、　朋友志未だ强からずば　色に隨ひ其の素を染めむ。

佛、是を說き給ふ時小兒佛を見て其の身卽ち踊り八歲の小兒の如し。卽ち、沙彌と作り羅漢道を得たり。村人の大小、佛の光相を見、又小兒の形變じ踊りて、大なるを見て皆大いに歡喜し須陀洹道を得たり。父母、疑解け亦法眼を得たり。

[一]羅漢品　第十五

昔、一國有り、名けて那梨と曰ふ。南海の邊に近し。其の中の人民眞珠、栴檀を採り以て常業と爲す。

其の國に一家有り、兄弟二人父母終に亡くして、分異を求めむと欲す。家に一奴有り名けて分那

【二六】沮敗。はばみやぶること。

【二七】此の偈、Dhammapada. 第八十三偈。

【二八】此の偈、Dhammapada. 第八十四偈。

【一】羅漢品。Dhammapada. 第七品、Arahanta (阿羅漢)。

く久しきに至るも云何が活くるを得む。皆前世、富貴を戀慕し身を放ち意を散じ須臾を快樂せしに坐す。爾りし從り以來長き塗苦を受く。今の如く憂惱し當に何をか恃怙むべき」と。一人、答へて曰く「我、爾の時小稚にして、一時之れを懲めしも竟に意精進せず、而して數世諸の苦患に遭ふ。此れは是れ自ら爲し父母の作すに非ざるなり。但、共に之に當り復何をか言ふ所ぞ」と。父、二子の相ひ責むること是の如きを聞き甚だ大いに之を怪しむ。「謂呼是れは鬼の祟なり、災變を來生せむ。云何か數十日の小兒乃ち此の言を作さむ、恐らくは其れ後日親を殺し族を滅せん。(二四)曼小未だ大ならず、宜しく之を殺すべし」と。其の父、驚き出でゝ門を閉めて捨て去り、田に到り薪を取り之を燒き殺さむと欲す。其の母來り還り夫に問ふやう「此の薪を用つて(なにをか)爲す」と。夫、言く「甚だ大に怪しむ可し」と。說く所是の如し「此れは是れ鬼に似たり。必ず人の門族を破らむ。其の曼小を以て之を燒き殺さむと欲す」と。其の母、此の意中を聞き愕然たり。猶豫して未だ信ぜず、「小く數日を停まれ、更に其の言を聽かむ」と。明日に至り夫婦俱に戶外に出づ、潛みて二兒內に在り相ひ責むること故の如きを聽く、夫婦、重ねて共に之を聞き甚だ所以を怪しむ。便ち共に薪を集め密に之を燒かむと欲す。佛、天眼を以て此の夫婦、二子を燒殺せむと欲するを見、其の憐む可き宿福の度に應ずるを愍れみ給ひ、其の村に往到り普く光明を放ち天地大いに動き山川樹木皆金色と作る。村中の大小驚きて佛の所に到り佛の爲めに禮を作し歡喜せざるは莫し。佛は至神にして三界に比無しと知る。佛、雙生の小兒の家に到り給ふ、二兒、佛の光明を見て喜踊すること量り難し。父母、又驚き各一子を抱き將ゐ佛の所に至る。佛、世尊に問ふやう「此の小兒、生れて來五六十日、說く所是の如く甚だ共に之を怪しむ。禍害を作すを恐る、火に之を燒殺せむと欲す、正に佛の來るに値ひ未だ燒くを得るに及ばず、此の小兒是れ何等の(二五)鬼魅爲るやを知らざるなり。唯、願くば解說せよ。是れ何の災怪ぞや」と。小兒、佛を見て踊躍歡喜す。佛、小兒を見て大笑し給ふ

願樂せざれば之を緣とするを無願三昧といふ。

【二〇】四諦。苦諦、三界六趣の苦報、是れ迷の果なり。集諦、貪瞋等の煩惱及び善惡の諸業なり、此の二能く三界六趣の苦報を集起すれば集諦と名く、滅諦、涅槃なり、涅槃は惑業を滅し生死の苦を離れて眞空寂滅なれば滅と名く、道諦とは八正道なり、能く涅槃に通ずれば道と名く。

【二一】八解。八解脫の略、又八背捨と云ふ三界の煩惱に違背し之を捨離して其の繫縛を解脫する八種の禪定なり。

【二二】穢草。わら。

【二三】氈褐。毛布。

【二四】曼小。分別なき小兒。

【二五】鬼魅。おに、ばけもの。

と。是に於て沙門、其の習ふ所に因て偈を說きて言く、

[一二]弓匠は角を調へ、　水人は船を調へ　巧匠は木を調へ、　智者は身を調ふ。[一三]譬へば厚石は
　風の移す能はざるが如く、　智者は意重くして　毀譽に傾かず。[一四]譬へば深淵の　澄靜、清
　明なるが如く　慧人、道を聞きて　心淨く歡然たり。

是に於て沙門此の偈を說き已り、身虛空に昇り還び佛身を現ぜり。三十二相、八十種好光明洞達し天地を照耀す。虛空より來下り其の人に謂ひて曰く「吾が道德、變化は身を調ふるの力なり」と。是に於て其の人五體を地に投じ稽首して問うて曰く「願くば身を調ふるを聞かむ。其れ要有るや」と。佛、梵志に告げ給ふやう「五戒[一五]十善・[一六]四等・[一七]六度・[一八]四禪・[一九]三解脫、此れ身を調ふるの法なり。夫れ、弓・船・木匠・六藝・奇術、斯れ皆綺飾・華譽の事なり、身を蕩し意を縱にする生死の路なり。」と。梵志、之を聞き欣然として信解し、「願くば弟子と爲らむ」と。佛、言く「沙門よ、善く來りぬ」と。鬚髮自ら墮ち即ち沙門と成れり。佛、重ねて爲めに[二〇]四諦[二一]八解の要を說き給ひ、尋いで時に即ち阿羅漢道を得たり。

昔、佛、舍衞國に在しき。山民の村有り五六十家なり。國を去ること五百里あり、村の中に一貧家有り。其の主人の婦懷妊し十月にして雙び二男を生む。甚だ大いに端正にして比無し。父母之を愛す。便ち爲めに字を作り、一は雙德と名け二は雙福と名つく。生れて五六十日、其の父牛を放ちて來り還り、懈息うて却きて床上に臥す。其の母田に出で薪を拾ひ未だ還らず。此の二小兒左右を顧視し父母を見ず。便ち、相ひ責め、一人に語りて言く「前世の時當に道を得べきに垂んとして正に愚意に坐し命、常たるべしと謂ひ生死に退墮して劫を計るべからず、今は乃ち此の貧家に生れて、子と作ることを得。[二二]穢草の中に[二三]氈褐を以て自ら覆ふ。食飮麁惡にして纔に自ら身を支ふ。此の如

【一二】此の偈、Dhammapada. 第八十偈。
【一三】此の偈、Dhammapada. 第八十一偈。
【一四】此の偈、Dhammapada. 第八十二偈。
【一五】十善。不殺生・不偸盜・不邪淫・不妄語・不兩舌・不惡口・不綺語・不貪欲・不瞋恚・不邪見の十。
【一六】四等。慈・悲・喜・捨の四を平等に此心を起す故四等といふ。
【一七】六度。布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六波羅蜜はこれを修せば生死海を度す故六度といふ。
【一八】四禪。觀・練・薰・修の四種により四念住(身は不淨・受は苦・心は無常・法は無我を觀ずること)を觀ずること。
【一九】三解脫。三三昧ともいひ、空三昧・無相三昧・無願三昧となり。空三昧とは諸法は因緣生にして我なく我所なしと觀ずる三昧、無相三昧とは滅諦の滅・靜・妙・離と相應する三昧にして涅槃は色・聲・香・味・觸の五法、男女の二相、及び三有爲相の十相を離れ無相を緣とするより無相三昧といひ、無願三昧とは苦諦の苦・無常及び集諦は捨つべきが故に又道諦の道如行出の四相行は必ず捨つべきが故に總じて

ぶが如く弓を作り調ふること快し。買ふ者諍ひ前む。卽ち、自ら念じて曰く「少來して學ぶ所自ら以て具足せりとなせり。邂逅するも自ら輕んじて弓を作るを學ばず。若し彼と技を鬪はさば吾は則ち如かざるなり、當に從ひ受け學ぶべき耳」と。遂に、弓師に從ひ弟子と爲らむことを求め、心を盡くして受け學び、月日の中に具に弓法を解し所作巧妙にして乃ち師より踰えたり。財物を布施し奉じて辭し去れり。之の一國を去り、當に江水を渡るべし。一人の船師有り船を用ふこと飛ぶが若し。上下に迴旋す。便ち疾きこと雙無し。復、自ら念うて曰く「吾、技多しと雖も未だ曾て船を習はず。賤術爲りと雖も其を知らず。宜しく學びて萬技悉く備ふべし」と。遂に船師に從ひ願ひて弟子と爲り、供奉し盡敬し、力を竭して勞勤し、月日の中に其の逆順を知り、船の迴旋を御すること乃ち師より踰えたり。財物を布施し奉じて辭し去り。復、一國に至る。國王の宮殿天下に雙無し。卽ち、自ら念曰ふやう「此の殿を作る匠の巧妙乃し爾り。自ら隱遊し來り、偶 之を學ばずして若し與に術を競へば必ず勝たざるなり。且く當に復學ぶべし、意乃ち足る耳」と。遂に、殿匠を求め願ひて弟子と爲る。心を盡くして供養し〔八〕斤斧を執持り、月日の間に具に尺寸、方圓、〔九〕規矩を解す。〔一〇〕彫文・〔一一〕刻鏤・木事 盡く知る。天才明朗、事 輒ち師に勝る。所有を布施し師を辭して去れり。天下を周行し十六大國に遍ねし。敵に命じ技を捔す。獨り言ふやう隻步敢へて應ずる者無し」と。心、自ら貢高して曰く「天地の間誰か我に勝る者有らむ」と。

佛、祇洹に在し、遙に此の人の應に化度す可きを見給ふ。佛、神足を以て沙門を化作し杖を柱とし鉢を持ち前に在りて來る。梵志、遊來する國道法無く、未だ沙門を見ず是れ何人なるかを怪しみ、至る頃當に問ふべしとなす。須臾に來り到る。梵志、問ふて曰く「百王の則未だ君の輩を見ず、衣裳の制度此の服有ること無し。宗廟の異物此の器を見ず。君は是れ何人にして、形服常と改まるや」と。沙門、答へて曰く「吾、身を調ふるの人なり」と。復、問ふや「何をか身を調ふと謂ふ」

【八】斤斧。まさかりとをの。
【九】規矩。規はぶんまはし、圓をつくるもの、矩はさしがね、方をつくるもの、大正本、規知と作るは誤植。
【一〇】彫文。ほりかざりたるあや。
【一一】刻鏤。きざみちりばむこと。

分衞し來り郊の祠に趣く。長者の婦、之を見て忿然として瞋恚り、共に迦羅を捉へ火の中に撲ち著く。身を擧げて燋爛し便ち神足を現じ虚空に飛昇す。衆女、驚怖し泣きの涙にて過を悔ゆ。長跪し頭を擧げて自ら陳べて曰く、女人は[一八]憃愚にして至眞を識らず、群愚、[一九]荒駭、神靈を毀辱す。自ら惟ふに[二〇]過釁、罪惡山の若し。願くば尊德を降し以て重殃を消せよと。聲に尋いで下りて[二一]般泥洹せり。諸女、塔を起し舍利を供養せり」と。佛、大王の爲に而も偈を說きて言はく、

愚憃は惡を作して　自ら解る能はず、　殃追ひて自ら焚き　罪、熾然と成る　愚の所望する處、　謂はざるに苦に適き　厄地に墮するに臨みて　乃ち、不善と知る。

佛、大王に告げ給ふやう「爾の時の長者の婦とは今の王の女金剛是なり、五百の侍女とは今の度勝等五百の伎女是なり、罪福人を追ひ久しくして彰はれざる無く善惡の人に隨ふこと影の形に隨ふが如し」と。是の法を說き給ふの時國內の大小信伏し歡喜して咸三尊に歸せり。皆五戒を受け卽ち道跡を得たり。

[一]明哲品　第十四

昔、梵志有り、其の年二十なり、天才、自然なり。事大小と無く目を過ぐれば則ち能くす。自ら總哲を以てして、自ら誓つて曰く「天下の技術要ず當に知り盡すべし。一藝も通ぜざれば明達に非るなり」と。是に於て遊學し師として造らざる無し。[二]六藝・雜術・[三]博奕・妓樂・[四]博撮・衣裳を裁割すること、[五]綾綺を[六]文繡すること、厨膳の切割、滋味を調和すること、人間の事兼ね達せざるは無し。心、自ら念うて曰く「丈夫此の如くなれば誰か能く及ぶ者ぞ、試みに諸國に遊び牴對し摧伏せむ。名、四海に奮ひ技術天に衝き然る後功を竹帛に載せ勳を百代に垂れむ」と。是に於て一國に往至り市に入り觀視せり。一人有り坐して[七]角弓を作るを見る。筋を析き角を治す。手を用ふること飛

[一八] 憃愚。おろかなること。
[一九] 荒駭。あらあらしくおろかなること。
[二〇] 過釁。あやまちとつみ。
[二一] 般泥洹。入滅のこと。

[一] 明哲品。Dhammapada. 第六賢哲品(Paṇḍita)。
[二] 六藝。禮・樂・射・御・書・數を云ふ。
[三] 博奕。博はすごろく。奕は圍碁。
[四] 博撮　ばくちか。
[五] 綾綺。あやぎぬ。
[六] 文繡。衣裳の模樣と色合。
[七] 角弓。角にて弓管をつくれる弓。

に隨つて佛の所に往到り禮を作し却きて立ち散華・燒香して一心に法を聽けり。已に市を過ぎ香を取る。聽法に因るの功德宿行の追ふ所なり、香氣熏じ斤兩前に倍すと聞くも、其の遲晩きを嫌つて、共に之を詰る。度勝、道を奉じ卽ち事の如く言ふやう「世に聖師あり三界の尊なり、無上の法鼓を撃ち三千に震動す。往きて法を聽く者無央數の人なり。實に隨つて法を聽く、是を以て遲きを稽る」と。金剛の徒、世尊の法義深妙にして世の聞く所に非ざると說くと聞き悚然として心歡びて自ら歎じて曰く「吾等、何の罪あり獨り自ら聞かざらむ」と。卽ち、度勝に報ふ。「試に我が爲めに之を說けよ」と。度勝、白して曰さく「身賤しく口穢く敢て便ち宣べず、乞ふ、更に諮受し命の如く之を說かむ。」と。卽便ち遣はし出し重ねて之に告げて曰く「具に儀式を受けよ」と。度勝、未だ還へらず、金剛の侍女中庭に[一四]側息として子の母を待つが如し。佛、度勝に告げ給ふやう「汝、還り法を說かば度脫する所多からむ。說法の儀は先づ高座を施せよ」と。度勝、勅を受け具に聖旨を宣ぶ。皆大いに歡喜し各衣服[一五]一領を脫ぎ積みて高座と爲す。度勝、洗浴し佛の威神を承け、應の如く法を說けり。金剛之等の五百餘人疑解け惡を破り須陀洹道を得たり。法を說くこと甚だ美しく火を失するを覺らず一時に燒死し卽ち天上に生れたり。王、人を將ゐ從ひ來り火より救はむと欲して之の已に燃えたるを見、收拾し[一六]棺殮し葬送し畢訖り、佛の所に往過き佛の爲めに禮を作し却き常の位に坐せり。佛、王に問ふて曰ふやう「所より來るや」と。王、叉手して言ふやう「女、金剛、不幸にも失火を覺らず大小燒盡せり、適棺殮し還る。不審なり、何の罪ありて此の火の害に遇ふや。唯、願くば世尊よ、未だ聞かざるところを彰はし告げよ」と。佛、大王に告げたまはく「過去の世の時城有り波羅㮈と名く。長者の婦有り、婇女五百人を將ゐ城外に至り、大に祠祀す。其の法忍び難し他姓の人邊に到るを得ず、親疎を問はず其の來る者有らば火中に擲げ著く。時に、世に一[一七]辟支佛有り名けて迦羅と曰ふ。山の中に處在り晨に來り分衞し暮れて輒ち山に還へる。迦羅、

【一四】側息。息をそばめる、不安な貌。

【一五】一領。ひとかさね。

【一六】棺殮。骸を棺におさむること。

【一七】辟支佛。梵語、Pratyeka-buddha. 獨覺若しくは緣覺と譯す、身無佛の世に出でゝ性寂靜を好み加行を滿して師友の敎なく獨り覺るより獨覺といふ。

婆羅門、言く「善く此の偈を說けり、今、實に太だ遠し。後に來り更に之を論ぜよ」と。是に於て世尊、之を傷みて去り給ふ。老翁、後に於て自ら屋の椽を授く。椽墮ち頭を打ち即時に命過ぐ。室家、啼哭し四鄰を驚動す。佛、去りて未だ遠からざるに便ち此の變有り。佛、里の頭に到り諸の梵志に逢ふ。數十人有り。前みて佛に問ふて言く「何所從り來るや」と。佛言く「屬此の死せる老翁の舍に到り翁の爲めに法を說くも、佛語を信ぜず無常を知らず、今は忽然として已に後世に就く」と。具に諸の梵志の爲めに更に前偈の義を說き給ふ。之を聞き欣然たり、即ち道跡を得たり。是に於て世尊、爲に偈を說きて言はく、

愚闇の智に近づくは、瓢の味を斟むが如し、久しく狎れ習ふと雖 猶、法を知らず。〔九〕開達の智に近づくは 舌の味を甞むるが如し、須臾習ふと雖も 即ち、道要を解す。〔一〇〕愚人の施行は 身の爲めに患を招く、快心、惡を爲して 自ら重殃を致す。〔一一〕行 不善を爲さば退いて悔悋を見 涕流の面を致さむ、報は宿習に由る。

時に、諸の梵志、重て此の偈を聞き益 篤信を懷き佛の爲めに禮を作し歡喜し奉行せり。

昔、佛、舍衛國の給孤獨精舍に在し諸の天人の爲に法を說き給へり。

時に、波斯匿王に一〔一二〕寡女有り、名けて金剛と曰ふ。壯寡なるも未だ歸がず、父母哀愍し別に宮舍を爲り好き舍宅を作る。五百の妓女を給し以て之を娛樂せしむ。衆中に一長老の〔一三〕青衣有り、名づけて度勝と曰ふ。恒に市に行き脂粉、香華を買ふ。時に、男女の無數の大衆各 香華を齎らし城を出づるを見、即ち、行人に問ふやう「何所に至らむと欲するや」と。衆人、答へて言く「佛、世に出でて三界の尊なり。衆生を度脫し皆泥洹を得」と。度勝、之を聞き心悅び意喜び、即ち、自ら念じて言く「今、老いて佛を見るは宿世の福なり」と。便ち、香の直を分ち好華を買ひ衆人の輩

【八】此の偈、Dhammapada. 第六十四偈。
【九】此の偈、Dhammapada. 第六十五偈。
【一〇】此の偈、Dhammapada. 第六十六偈。
【一一】此の偈、Dhammapada. 第六十七偈。
【一二】寡女。やもめ女。
【一三】青衣。賤者の服、轉じて婢女。

好き蓮華を生ずるが如し。身、自ら道を得て還び宗親を度す。一切の衆生皆開解を蒙る。亦、華香の臭穢を掩蔽ふが如し」と。五十の比丘、佛の法を說き給ふを聞き進志堅固にして阿羅漢道を得たり。

愚闇品[1] 第十三

昔、佛、舍衞國に在しき。

時に、城中に婆羅門有り、年、八十に向ひ財富無數なり。人と爲り頑闇・慳貪にして化し難し。道德を識らず、無常を計らず更に好舍を作る。[2]前庌・後堂・涼臺・煖室・東西の[3]廂廡數十梁の間あり。唯、後堂の前の[4]拒陽未だ訖らざるのみ。時に、婆羅門、恒に自ら經營し衆事を指授す。佛、道眼を以て此の老翁を見るに命日を終らずして當に後世に就くべし。自ら知る能はずして而も方に[5]怱怱たり。形瘦せ力竭き精神福無く甚だ憐愍すべし。佛、阿難を將ゐ其の門に往到り老翁を慰問し給ふやう。勞惓無きを得たるか。今、此の舍を作り皆何の安んずるところぞ」と。老翁、答へて言く「前庌客を待ひ、後堂自ら處る。東西の二廂當に兒息・財物・僕使を安んずべし。夏は涼臺に上り冬は溫室に入る」と。佛、老翁に語り給ふやう「久しく宿德を聞く。思遲、談講せむ。偶、要偈有り存亡に益有り以て相ひ贈らむと欲す。不審なり、事を小く廢して共に坐して論ずべきや不や」と。老翁、答へて曰く「今、正に大いに遽し、坐して語るを容るさず。後日、更に來れ、當に共に善く敍ぶべし、云ふ所の要偈便ち之を說く可し」と。是に於て世尊、卽ち偈を說きて言はく、

[6]子有り財有りとて、　愚は唯汲汲たり、　我且つ我に非ず　何ぞ子と財とを憂へむや。　暑は當に此を止むべく、　寒は當に此を止むべし、　愚は多く豫め慮り　來る變を知る莫し。

[7]愚蒙、愚極にして、　自ら我れを智と謂ふ、　愚にして智と稱す　是を極愚と謂ふ。

【一】愚闇品。Dhammapada. 第五品、Bāla(愚)。
【二】前庌。前の正殿。
【三】廂廡。ひさし。
【四】拒陽。ひよけのことなるべし。
【五】怱怱。いそがしき貌。
【六】此の偈、Dhammapada の第六十二偈。
【七】此の偈、Dhammapada の第六十三偈。

昔、佛、羅閲祇の耆闍崛山の中に在しき。

時に、城中に長者の子五十人有り、佛の所に往詣り禮を作し却き坐せり。時に、佛、爲に無常、苦・空・非身の法を說けり。恩愛は夢の如く會すれば別離るべく尊榮豪貴も亦憂慼有り。唯、泥洹のみ有りて、永く生死を離れ群殃盡く滅し乃ち大安なる可し」と。時に、五十人、法を聞き喜悅す。「願くは弟子と爲らむ」と。佛、言く「善く來りぬ、比丘よ。」と。鬚髮自ら墮ち法衣具足す。即ち、沙門と成る。此の諸の沙門に親友の長者有り。其の出家を聞き意大いに歡喜し、崛山に往到り之と相ひ見へ讃へて言く「諸君快き哉善利にして、乃し此の志有り」と。之が爲めに壇を設け佛及び僧を請ず。明日、佛、衆會と與に其の舍の食に就き、食訖りて說法し、晡時に乃ち還り給ふ。此の諸の新學の沙門宗黨を戀慕し皆返り退かむと欲す。佛、其の意を知り給ふ。將に城門を出でて、田の中の汚泥の糞壤の中に蓮華を生ずるを見る。五色香潔にして、其の香芬薰として乃ち諸の臭を蔽ふ。佛、便ち、之に趣き、因て偈を說きて言はく、

[八]田の溝を作りて　大道に近く　中に蓮華を生じ　香潔可意なるが如く、　生死も然る有り、　凡夫は邊に處り　智者に出づるを樂しみ、　佛弟子と爲る。

佛、偈を說き已り、卽ち、山中に還り給ふ。賢者、阿難、前て佛に白して言はく「向に世尊、田の溝の上に臨み說く所の二偈其の義不審なり、願くば其の意を聞かむ」と。佛、阿難に告げ給ふやう「汝、溝の中の汚泥不淨の糞壤の中に蓮華を生ずるを見るや不や」と。「唯、然なり、之を見る」と。佛、言はく「阿難よ、人、世間に在り展轉して相ひ生まる。壽を計るに百歲よりも或は長く或は短し。妻子の恩愛・飢渴・寒熱あり、或は悲しみ或は欣ぶ。一凶[九]・二吉[九]・三毒[一〇]・四倒[一一]・五陰[一二]・六入[一三]・七識[九]・八邪[一四]・九惱[一五]・十惡[一六]、猶し田の溝の糞壤・汚泥の不淨を畜藏するが如し。欻ち一人有り、世の無常を覺り發心して道を學び淸淨の志を修し神を凝らし想を斷じ自ら得道を致す。亦、汚泥の

【八】此の偈、Dhammapada 第五十八、第五十九偈。
【九】一凶、二吉、七識とは正しく何をいふのであるか不明。
【一〇】三毒。貪欲・瞋恚・愚癡の三。
【一一】四倒。四種の顚倒、生死の無常・無樂・無我・無淨に於て常樂我淨を執すること。
【一二】五陰。色・受・想・行・識の五蘊法。
【一三】六入。色・聲・香・味・觸・法の六境。
【一四】八邪。八正道の反對、一に邪見、二に邪思惟、三に邪語、四、邪業、五、邪命、六、邪方便、七、邪念、八、邪定の八。
【一五】九惱。九難とも云ひ佛が現生に受けし九種の災難をいふ。
【一六】十惡。殺生・偷盜・邪淫・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪欲・瞋恚・邪見の十。

愛を割き道に從ひ世世福を蒙らむ」と。王、聞きて歡喜し便ち香瓔を以て末利夫人に與ふ。夫人、答へて言く「我、今、齋を持つ、此を著くるべからず、餘人に與ふ可し。」と。王、曰く「我、本意を發し勝る者に與へむと欲す。卿、今、最勝なり、又、法齋を奉じ道志殊に高し。是を以て相ひ與ふ。若し卿受けずむば吾将に安に置かむ」と。夫人、答へて言く「大王よ、憂ふること勿れ、願くば王よ、意を屈し共に佛の所に到り、此の香瓔を以つて世尊に奉上つり、并に聖訓の累劫の福を採らむ」と。王、即ち、許す。即ち、勅して嚴駕し往きて佛の所に到り、地に稽首し却きて王位に就く。王、佛に白して言ふやう「海神の香瓔波利に上る所なり。六萬の夫人得るを貪らざる莫し。末利夫人に與ふるに而も取らず。佛の法齋を持ち貪欲無し。謹みて以て佛に上る。願くば納受を垂れ給へ。世尊の弟子心を執り齋を護り直に信ずること此の如し。豈、福有らむや」と。是に於て世尊、爲に香瓔を受けたまふ。即ち、偈を說きて言はく、

[二]多く寶華を作り、　[三]步瑤を結べば綺はし、　廣く德香を積めば、　生るゝ所轉た好し。　[四]琦しの草、芳しの華、　風に逆つて熏ぜず、　道に近く敷開く　德人は遍く香ふ。　[五]栴檀、多香、青蓮、芳花、　是れ眞なりと曰ふと雖も、　戒の香に如かず。　[六]華の香氣は微なり、　眞なりと謂ふ可からず。　持戒の香は、　天に到るも殊勝なり。　[七]戒具に成就し、　行に放逸無く、定意、度脫せば、　長く魔道を離る。

佛、偈を說き已り、重て王に告げて曰く「齋の福祐、明譽廣く遠し。譬へば天下十六大國の中に滿る珍寶を持用つて布施するが如きも末利夫人の一日一夜、佛の法齋を持つに如かず。其の福須彌と豆とを比するが如し。福を積み慧を學べば泥洹に到る可し。王及び夫人、群臣の大小歡喜せざるは莫く執戴し奉行せり。

【二】此の偈、出曜經、第十九華品第六偈、Dhammapada. 第五十三偈。
【三】步瑤、花輪。
【四】此の偈、Dhammapada. 第五十四偈。
【五】此の偈、Dhammapada. 第五十五偈。
【六】此の偈、Dhammapada. 第五十六偈。
【七】此の偈、Dhammapada. 第五十七偈。

卷の第二

華香に喩ふる品の二

昔、佛、始めて道を得、羅閱祇國に在して教化し轉じて舍衛國に到り給ふ。國王、群臣宗仰せざるは莫し。

【一】時に、賈客大人有り、名けて波利と曰ふ。五百の賈人と與に海に入り寶を求む。時に、海神出てゝ水を掬ひ波利に問ふて言く「海水多しと爲すや、掬水多しと爲すや」と。波利、答へて曰く「掬水多しと爲す。所以は何ぞ、海水多しと雖も時に用ふるに益無し。彼の飢渴の人を救ふこと能はず。掬水少しと雖も彼の渴く者に値ひ持用て之を與へ以て其の命を濟ひ世世福を受くること稱げて計ふ可からず」と。海神、歡喜し讚めて言く「善き哉」と。即ち、身上の八種の香瓔の校るに七寶を以てするを波利に上り、海神之を送り、安善に往きて舍衛國に還到る。此の香瓔を持ち波斯匿王に上つり、具に由る所を陳ぶるやう「念ふに是の香瓔小人の服する所に非ず、謹みて以て貢上る。願くば納受を蒙らむ」と。王、香瓔を得以て奇異と爲し、即ち、諸の夫人を呼び羅列し前に住せしめ、若し最も好き者あらば香瓔を以て之に與へむと。六萬の夫人、盡く嚴に來出す。王、問ふ。末利夫人は何を以つて出でざる」と。侍人、答へて言く「今は十五日なり、佛法の齋を持ち素服嚴かならず、是を以て出でず」と。王、便ち、瞋恚り、人を遣はし呼びて曰く「汝、今、齋を持ち王の命に違ふべきや不や」と。是の如く三反す。末利夫人、素服にして出て衆人の中に在り。猶、日月の倍して常よりも好きが如し。王、意悚然として敬を加へ問ふて曰ふやう「何の道德有り、炳然として異り有るや」と。夫人、王に白すやう「自ら念ふに少福にして斯の女の形を稟く、情態穢垢にして日夜山積す、人命、促短なり、三塗に墮つることを懼る。是を以て月月佛法の齋を奉ず。

【一】此の譬喩譚は賢愚經、五、海人、船人に難問するの品、參照。

か。〔七〕學者は地を擇び　鑑を捨てゝ天を取り、　善く法句を說くこと、　能く德華を採るごとくす。　〔八〕世は　〔九〕坏の喩と知り　幻法・忽ち有り　魔の華の敷くを斷ちて　生死を覩ず。　〔一〇〕身を見ること沫の如く、　幻法は自然なり、　魔の華の敷くを斷ち、　生死を覩ず。

是に於て、諸の女、佛の此の偈を聞き、「願くは眞の道を學び比丘尼と爲らむ」と。頭髮、自ら墮ち法衣具足す。寂定を思惟し卽ち羅漢道を得たり。阿難、佛に白して言さく「今、此の諸女素、何の德有りて乃し、世尊をして就いて之を度せしめ、一たび說法を聞き出家し道を得たるや」と。佛、阿難に告げ給ふやう「昔、〔一一〕迦葉佛の時に大長者有り、財富無數なり、夫人・婇女・五百人有り、其の性妬惡にして門を妄に開けず。夫人、婇女往きて佛に見えむと欲するも終に肯て聽さず。後日、國王、諸の大臣を請し上殿にて宴會す。會、輒ち〔一二〕竟日なり。時に、夫人・婇女・長者會に入るを見て便ち共に佛の所に至り稽首し禮を作す。小らく坐し經を聽き各發願して言く、我をして世世惡人と共に遭遇すること莫く、所生の處恒に道德の聖人と相ひ値はしめよ、來世、佛有り、釋迦文と名くと聞く、願くば與に相ひ値ひ出家學道し訓誨を奉持せむと。」佛、阿難に語り給ふやう「爾の時の夫人・婇女五百人とは今の此の五百の比丘尼是れなり。本願、懇惻にして今應に度を得べし。是を以て世尊就いて之を度する耳」と。佛、是を說き給ふ時歡喜せざるは莫し。

【七】此の偈、Dhammapada. 第四十五參照、Udāna varga. 第十八華品、第二偈。
【八】此の偈、Dhammapada. 第四十六參照、Udāna varga. 第十八華品、第十七偈。
【九】坏。未だ燒かざる瓦。
【一〇】此の偈、Dhammapada. 第四十六參照、Udāna varga. 同、第十八偈。
【一一】迦葉佛。現世界に於て人壽二万歲の時出世して正覺を成じ釋迦佛より直ぐ前の佛、過去七佛の一。
【一二】竟日。終日に同じ。

華香品　第十二[一]

昔、佛、舍衞國に在しき。國の東南の海中に臺有り。臺の上に華香の樹有り。樹木淸淨なり。婆羅門の女五百人有り、異道に奉事へ意甚だ精進し佛有るを知らず。時に、諸の女自ら相ひ謂て曰く「我等、形を稟け生れて女人と爲る。少きより老に至るまで三事の鑑る所と爲り自由を得ず、命又短促し形幻化の如く當に復死亡すべし。共に華香の臺上に至り香華を採取するに如かず。精進して齋[二]を持ち梵天[三]を降屈し當に從つて願を求むべし。梵天に願生し、長壽にして不死となり、又自在を得て鑑忌有ること無く諸の罪の對を離れ復憂患無からん。」即ち、供具を齎し臺の上に往至り、華香を採取り梵天に奉事し、一心に齋を持ち、願くば尊神を屈せよと。

是に於て、世尊、此の諸の女を見給へり。俗の齋を爲すと雖其の心精進にして應に化度す可し。即ち、大衆弟子、菩薩・天・龍・鬼神と與に虛空に飛昇し臺の上に往至り、樹の下に坐し給ふ。諸の女、歡喜し、謂へらく「是れ梵天なり」と。自ら相ひ慶び慰め、我が願ふ所得たり」となす。時に、一天人、諸の女に語りて言く「此れ、梵天に非ず、是れ三界の尊、號し名けて佛と爲す。人を度すこと量り無し」と。是に於て諸の女前みて佛の所に至り佛の爲に禮を作せり。前みて佛に白して言さく「我等、多くの垢あり今女人と爲る。鑑檢を離れむことを求む。願くば梵天に生れむ」と。佛、言く「諸女よ、快く善利を得て、乃ち此の願を發せり。世に二事有り、其の報明に審かなり。善を爲せば福を受け、惡を爲せば殃を受く。世間は之れ苦にして天上は之れ樂、有爲[四]は之れ煩にして無爲[五]は之れ寂なり。誰か能く選擇し其の眞なる者を取らむ。善き哉、諸女、乃ち明なる志有り」と。是に於て世尊、即ち、偈を說きて言はく、

[六]孰か能く地を擇び　鑑を捨てゝ天を取るか。　誰か法句を說くこと、　善華を擇ぶが如くする

【一】華香品。Dhammapada, 第四品、Puppha (華)、Udāna Varga, 第十八品、Metog(華)、出曜經第十九、華品。

【二】齋。心の不淨を淸むること。

【三】梵天。色界の初禪天なり、此の天欲界の色欲を離れ寂靜淸淨なれば梵天といふ。

【四】有爲。爲とは造作の義にして造作を有するを有爲といふ、即ち、因緣所生の法をいふ。

【五】無爲。有爲の反對の語、因緣の造作なきをいふ、眞如のこと。

【六】此の偈、Dhammapada, 第四十四參照、Udāna Varga, 第十八華品第一偈。

心意品 第十一[一]

昔、佛、世に在せし時一道人有り、河邊の樹下に在り、學道すること十二年、中に貪想除かず。心を肆にし意を散じ但、六欲を念へり。眼は色・耳は聲・鼻は香・口は味・身は觸、更に心は法に、身は靜かなるも意遊び曾て寧息無し。十二年の中道を得ること能はず。

佛、度す可きを知り、沙門を化作し其の所に往至り給ふ。樹下に共に宿り須臾に月明なり。龜有り河水より出でゝ樹下に來至る。復、一水狗[二]有り、飢え行きて食を求む。龜と相ひ逢ひ便ち龜を噉はむと欲す。龜、其の頭、尾及び其の四脚を縮め甲の中に藏る。噉ふことを得る能はず。水狗、小しく遠ざかる。復頭足を出し行き歩むこと故の如し。奈何んともする能はず。遂に便ち脫るゝことを得たり。是に於て道人、化沙門に問ふやう「此の龜命を護るの鎧有り、水狗、其の便を得る能はざるなり」と。化沙門、答へて曰く「吾、念ふに世の人此の龜の如くならず。無常を知らず六[三]情を放恣す。外は魔便ち得て、形壞れ神去る。生死端無く五道に輪轉す。苦惱すること百千、皆意の造る所なり。宜く自ら勉勵せば永く滅度し安かなるべし」と。是に於て化沙門、卽ち、偈を說きて言く、

[四]身有ること久しからず、　皆當に土に歸すべし、　形壞し、神去れば　寄住、何をか貪らむ。

[五]心、豫て造る處　往來すること端無し、　念に邪僻多ければ　自ら爲に患を招く。

是れ意の自ら造るところなり　父母の爲るに非ず　勉めて正に向ふべし　福を爲して回る勿れ。

六を藏すること龜の如く　意を防ぐこと城の如く、　慧、魔と戰ひて　勝たば則ち患無し。

是に於て比丘、此の偈を說くを聞き貪斷ち婬止み卽ち、羅漢道を得たり。化沙門、是れ佛、世尊なるを知り敬肅し服を整へ佛足を稽首せり。天・龍・鬼神、歡喜せざるは莫し。

【一】心意品。Dhammapada. 第三品、Citta(心)、Udāna Varga. 第三十一品、Sems(心)、出曜經第三十二品、心意品。

【二】水狗。かはうそのことか。

【三】六情。六根のこと、眼・耳・鼻・舌・身・意なり。

【四】此の偈、Dhammapada. 第四十一偈。

【五】此の偈、Dhammapada. 第四十二偈。

藏著し訖りて便ち山を出で、兄弟を呼び求め負駄して持ち歸る。方に道の半に到る。佛、念ひ給ふやう「比丘應に度を得べし」と。佛、便ち一比丘尼を化作し給ふ。頭を剃り法服(をつけ)面に眉を畫き金銀・瓔珞を粧ふ。谷に隨ひ山に入り道に沙門と逢ふ。頭面に禮を作し起居を問訊す。道人、比丘尼を呵して曰く「道を爲すの法として應に爾るを得べきや不や。頭を剃り法衣を著く、云何が復面に眉を畫き身體に瓔珞を粧ふや」と。比丘尼、答へて曰く「沙門の法として應に爾るべきと爲すや不や。辭、學道に親み山居して志を靜む。云何が復其の財物に非るを取り、貪欲にして道を忘れ快心・放意し無常を計らざるや。世に生るゝは寄の如し、罪の報延長す」と。是に於て比丘尼、爲に偈を說きて言く、

[二] 比丘よ、戒を謹愼しめ　放逸に憂患多し　諍の小を變じ大を致し　惡を積みて火焚に入る。
[三] 戒を守り福に喜を致し　戒を犯すに懼心有らば　能く三界の漏を斷つ　此れ乃ち泥槃に近し。

是の時、比丘尼此の偈を說き已り、爲に佛身の相好光明を現ず。沙門、之を見て悚然として毛竪つ。佛の足を稽首し過を悔ひ自ら陳ぶるやう「愚癡、迷謬にして正教に違犯せり。往きて返らず、其れ將に奈何がせんや」と。是に於て世尊、卽ち、偈を說きて言く、

若し前に放逸なるも、　後に能く自ら禁ずれば　是れ世間を照す　定んで其の宜を念ぜよ。
過失りて惡を爲すも　追ひ覆すに善を以てせば、　是れ世間を照す　善く其の宜を念ぜよ。
少壯、家を捨て　盛に佛の敎を修めなば　是れ世間を照すこと、　月の雲消ゆるが如し。
人前に惡を爲すも　後に止め犯さゞれば　是れ世間を照すこと、　月の雲消ゆるが如し。

是に於て比丘、重ねて此の偈を聞き[四]結解け貪止み、佛の足を稽首し還び樹の下に到り、數息相ひ隨ひ止觀還び淨にして、道果を獲て證り阿羅漢と成れり。

【二】此の偈、Dhammapada. 第三十一偈。
【三】此の偈、Dhammapada. 第三十二偈。
【四】結。煩惱のこと。

有り。佛、比丘に告げ給ふやう「之を取れよ」と。教を受け卽ち取る。佛、比丘に問ひ給ふやう「此れを何の紙と爲す」と。諸の比丘、佛に白さく「此れ香を裹むの紙なり。今、處に捐棄つと雖も香故の如きなり」と。佛、復、前みて地を行き、斷ちし索有り。佛、比丘に告げ給ふやう「之を取れよ」と。教を受け卽ち取る。佛、復、問ふて曰く「此れは何等の索ぞ」と。諸の比丘、佛に白さく「其の索腥臭し。此れ魚を繋るの索なり。」と。佛、比丘に語り給ふやう「夫れ物は本淨なり。皆、因緣に由りて以て罪福を興す。賢明に近けば則ち道義隆く、愚闇を友とせば卽ち殃罪臻る。譬へば彼の紙・索香に近けば則ち香ひ、魚を繋けば則ち腥し。漸く染み翫び習ひて各自ら覺らず。是に於て世尊、卽ち、偈を說きて言はく、

鄙夫の人を染むるは、　臭き物に近づく如し。　漸く迷ひて非を習ひ、　覺らずして惡を成ず。
賢夫の人を染むるは、　香の熏を附くるが如し、　智を進め善を習ひ　行じて芳潔を成ず。

七十の沙門、重て此の偈を聞き家の欲は穢き藪と爲り妻子は[二五]桎梏と爲るを知る。信を執ること堅固にして精舍に往至り、意を攝め惟れを行じて、羅漢道を得たり。

[一]放逸品　第十

昔、佛、世に在せし時五百の賈客有り。海中より出で、大いに七寶を持し還び本國に歸れり。深山を經歷し惡鬼の爲に迷はされ出づるを得る能はず。糧食乏しく盡き頓に困厄し遂に皆餓死す。齎らす所の寶貨山間に散在せり。

時に、沙門有り、山中に在りて學ぶ。其の此の如きを見て便ち想念を起すやう「吾、勤苦して道を學び積むこと已に七年にして道を得ること能はず。又復、貧窮し以て自ら濟ふ無し。此の寶物主無し。之を取り、持つて歸り用つて門戶を立てんと。是に於て山を下り拾ひ取りし寶物を一處に

【二五】桎梏。足かせと手かせ。

【一】放逸品。此の品 Dhammapada, Appamāda(精勤) Udāna varga. 第四品、Big-yod-pa.(放逸)出曜經第五品、放逸品。

樹下に坐し諸の梵志に問ふやう「此の山中に居ること幾何の世と爲す。何の方業有り以て自ら供給するや」と。答へて曰く「此に居て以來三十餘世なり。田作、畜牧此を以て業と爲す」と。又、問ふやう「何の行を奉修し生死を離るゝを求む」と。答へて曰く「日月、水火に事へ時に隨つて祭祠す。若し死する者有らば大小聚會し唱へて梵天に生れ以て生死を離る」と。佛、諸の婆羅門に語り給ふやう「夫れ田作、畜牧し日月水火を祭祠し唱叫して天に生るゝも是れ長存し生死の法を離るゝに非ず。福を極むること二十八天に過ぐる無きも、道慧有ること無く還び三塗に墮つ。唯、出家有り、淸淨の志を修め寂義を履行し泥洹を得可し」と。是に於て世尊、即ち偈を說きて言はく、

〔二一〕眞を以て僞と爲し、　僞を以て眞と爲す、　是れを邪計と爲す。　眞の利を得ざるなり。〔二二〕眞を知りて眞と爲し、　僞を見て僞と爲す、　是を正計と爲す。　必ず眞の利を得む。　世、皆、生死有り　三界、安きこと無し、　諸天、樂と雖も　福盡きなば亦喪ふ。　諸の世間を觀るに　生として終らざる無し、　生死を離れむと欲せば、　當に道眞を行ずべし。

七十の婆羅門、佛の說き給ふ所を聞き欣然として意解け、「沙門と作らむ」と願ふ。佛、言く「善く來りぬ、比丘よ」と。鬚髮自ら墮ち皆沙門と成れり。佛、比丘と共に精舍に還り給ふ。中路に至りて妻息を顧戀し各退意有り。時に天の雨るに遇ひ益憂慘を懷けり。佛、其の意を知り便ち道の邊に於て數十間の舍を作り、中に入りて雨を避け給ふ。而して舍穿ち漏る。佛、舍漏るに因つて偈を說きて言はく、

〔二三〕屋を蓋ふに密ならずむば、　天雨れば則ち漏る。　意(を攝め)惟れを行ぜずむば　淫泆、僞に穿たむ。〔二四〕屋を蓋ふに善く密ならば、　雨れども則ち漏らず、　意を攝するを惟行ぜば、　淫匿、生ぜざらむ。

七十の沙門、此の偈を說くを聞き强て自ら進むと雖も猶帶帶を懷く。雨止み前み行く、地に故紙

〔二一〕此の偈、Dhammapada. 第十一偈。
〔二二〕此の偈、Dhammapada. 第十二偈。
〔二三〕此の偈、Dhammapada. 第十三偈。
〔二四〕此の偈、Dhammapada. 第十四偈。

王、夫人と與に[一五]播迸し晨夜舍夷國に至る。中道に飢餓し王[一六]蘆菔を噉ひ腹張れて薨ず。是に於て瑠璃遂に卽ち專制す。便ち劍を拔き東宮に入り兄の祇を斫り殺す。祇、無常を知りて心恐懼せず顏色變らず、笑を含み煕怡し甘心刃を受く。命未だ絕えざるの間に虛空の中に自然に音樂の聲を聞き其の魂神を迎ふ。佛、祇洹に於て卽ち、偈を說きて言く、

[一七]善を造り後に喜び　善を行ぜば兩ながら喜ぶ。　彼も喜び惟も歡び　福を見て心安からむ。

[一八]今も歡び後も歡び　善を爲せば兩ながら歡ぶ、　厥れ自の祐を爲し　福を受けて悅豫せむ。

是の時、瑠璃王、尋いで兵衆を興し舍夷國を伐つ。釋種の道跡の人を殺害す。殘暴、無道五逆兼ね備へり。佛、瑠璃を記し給ふやう「不孝・不忠衆罪深重なり、却後七日當に地獄の火の燒殺する所となるべし。」と。又、太史の記を記すこと佛と同じ。王、大いに怖懼れ卽ち船に乘り江に入る。「吾、今、水に處る、火來るを得ず」と。七日の日中自然の火有り、水中より出でゝ船を燒き覆沒す。王も亦燒かれ毒熱を恐怖し忽然として沈み終りぬ。是に於て世尊、卽ち、偈を說きて言はく、

[一九]憂を造りて後に憂ひ　惡を行ぜば兩ながら憂ふ、　彼も憂ひ惟も懼れ　罪を見て心懼れむ。

[二〇]今も悔ひ後も悔ひ　惡を爲せば兩ながら悔ゆ　厥れ、自の殃を爲さば　罪を受けて熱惱せむ。

佛、是を說き已り、諸の比丘に告げ給ふやう「太子、祇は榮位を貪らず死を守り道を懷ひ天上に上生し安樂自然なり。瑠璃王は狂愚にして意を快くし死して地獄に墮し苦を受くること無數なり。一切世間の豪貴・貧賤皆無常に歸し長く存する者無し。是を以つて高士命を殞す。全き行は精神の寶と爲す。佛、是を說く時信受せざるは莫し。

昔、耆闍崛山の後に婆羅門七十餘家有り、宿福度に應ぜり。

佛、其の村に到り道に神足を現じ給ふ。衆人、佛の光相の巍巍たるを見敬伏せざるは莫し。佛、

[一五] 播迸。逸走。
[一六] 蘆菔。なづなの根。
[一七] 此の偈、Dhammapada. 第十六偈。
[一八] 此の偈、Dhammapada. 第十八偈。
[一九] 此の偈、Dhammapada. 第十五。
[二〇] 此の偈、Dhammapada. 第十七。

王に告げて曰く「昔、彼の大王、佛に四備道に於て飯食せり。王、心に念じて言く、佛は國王の如く弟子は臣下の猶し、と。王、斯の核を種え今は自ら果を獲たり。後の一人の佛は牛の若く弟子は車の猶しと云へる彼の人は自ら車に轢る核を種へ、今は太山の地獄に在り火車の爲に轢れて自ら其の果を獲たり。王の勇健の能く致す所に非ざるなり。善を爲さば福隨ひ惡を爲さば禍追ふ。此れ自の作るところと爲す、天・龍・鬼神の能く此を與ふる所に非ず」と。是に於て世尊、即ち、偈を說きて言く、

[八]心を法の本と爲す、　心尊く心に使はる、　中心に惡を念じて、　即ち言ひ即ち行はば、　罪苦の自ら追ふこと　車の轍を轢むがごとし。　[九]心を法の本と爲す、　心尊く心に使はる。　中心に善を念じて　即ち言ひ即ち行はば、　福樂の自ら追ふこと　影の形に隨ふが如し。

佛、經偈を說き已り給ふに、王及び臣民聽く者無數なり。皆大いに歡喜し法眼を逮得せり。

昔、長者須達、太子の園田を買ひ共に精舍を造り世尊に奉上せり。各佛及び僧を供養すること一と月なり。佛、二人の爲に廣く明法を陳べ皆道跡を得たり。太子、祇陀歡喜し[一〇]東宮に還り、佛の德を歎じ樂を作し自ら娛しむ。祇陀の弟瑠璃常に王邊に在りき。時に、王、素服にして諸の近臣及び後宮の夫人と與に佛の所に往詣り稽首し禮し畢り一心に經を聽く。瑠璃後に在り御座を[一一]典衞す。時に諸の佞臣、阿薩陀等あり、姦謀し啓して曰すやう「試に大王の印綬を著けよ、御座の上に坐せば王の似如や不や」と。是に於て瑠璃、即ち、其の言に隨ひ、服を被て座に昇る。諸の佞臣等皆共に拜賀す。「正に大王に似たり、千載に[一二]黎庶の願に遭遇せり、豈に東宮をして此を[一三]闚覦せしむや。此の御座豈に昇つて復下るべけむや」と。即ち、從ふ所を率ゐ甲を貫ね劍を拔き自ら祇洹精舍に就到る[一四]斥徙す、大王、宮に還るを得ず。王の官屬と與に祇洹の間に戰ひ王の近臣五百餘人を殺せり。

[八] 此の偈、Dhammapada. 第一偈、Udāna varga. 第三十一心品、第二十四偈。

[九] 此の偈、Dhammapada の第二偈、Udāna varga の第二十五偈。

[一〇] 東宮。皇太子殿下の宮殿。

[一一] 典衞。まもり役。

[一二] 黎庶。人民。

[一三] 闚覦。こひねがひもとむること。

[一四] 斥徙。しりぞけること。

を行り手自ら斟酌す。佛、飯食畢りて、四道の頭に於て王の爲めに法を說き給へり。觀る者無數なり。時に兩の商人有り。一人、念じて曰く「佛は帝王の如く弟子は猶忠臣のごとし。佛、明に法を陳べ弟子誦し宣ぶ。斯の王明あり、佛の尊む可きを知り意を屈して之を奉ず」と。一人、念ふて曰く「斯の王は愚なる哉、爾れ國王と爲りて將た復何をか求めむ。佛は牛の若く弟子は車の猶し、彼の牛、車を牽き東西南北す、佛も亦是の如し。子、何の道有りて意を下し之を奉ずるや」と。二人、倶に去り行くこと三十里、〔四〕亭宿酒を沽る。共に飲み屬事を評論す。其の善く念ふ者四王之を護り、其の惡く念ふ者太山の鬼神酒をして腹に入らしめ火の身を燒くが如し。亭を出て路に臥し轍の中に宛轉す。晨、商人あり、車五百乘をもつて之を轢き殺せり。伴、明日之を求むるに死するを見、然して曰く「國に還らば疑はれ、人を殺し物を取り去ると疑はれん義ならざるも身を輕くし財を委ね他國に往至せむ」と。國王、崩亡し太子有ること無し。〔五〕讖書に云く、中土微人有り、當に斯の土に王たるべし。故王に神馬有り王に任ふれば必ず膝を屈す、と。卽ち、具に神馬を嚴駕し〔六〕印綬（を持つて）行きて國主を求む。觀る者數千あり、商人も亦國を出でぬ。〔七〕太史曰く、彼れ黃雲の蓋有り、斯れ王たる者の氣なり、と。神馬、膝を屈し商人の足を舐む。群臣、豫じめ香湯を作り澡浴す。拜して國王と爲す。是に於て遂に位に處り國事を聽省す。深く自ら思ひて曰く「余、微善無し、何に緣りてか此を獲たる。必ず是れ佛の恩の之をして然しむるなり」と。卽ち、群臣と與に舍衛國に向ひ遙に稽首して曰く「賤人、德無し、世尊の慈恩を蒙り此の國に王たるを得たり。明日、願くば應眞衆と倶に斯に顧みられよ」と。一時、三月なり、佛、阿難に告げたまはく「諸の比丘に勅し、明日、彼の王の請に於て皆當に變化を作し、彼の國王、人民をして歡喜せしむべし」と。各神足を作し彼の國に往到る。皆次いで座に就き法の如く儼然たり。食を下げ畢訖り、手を澡ぎ王の爲に法を說き給へり。王、曰く「吾れ、本微人にして素より快德無し、何に緣りて斯を獲たるや」と。佛、

【四】亭宿。しゆくばのはたごや。
【五】讖書。未來の事を記せし文書。
【六】印綬。印は官の印章、綬は印の環を承けつなぐくみひも。
【七】太史。天時星曆祭祀等の事を掌る官。

疲頓し乃ち及ぶ、責めて舍の直を索む。三賈客逆つて罵詈して言く、我、前に已に相ひ與へり、云何か復索むと。聲を同じく共に觝き肯て直を與へず。考母羸り弱く奈何ともする能はず、懊惱し咒誓し三賈客に語るやう、我、今、窮厄するも何ぞ欺き觝を忍ばむ。我、願くば我が後世生るゝの處若し當に相ひ値はゞ要ず當に汝を殺すべし、正に道を得しめむも終に相ひ置さゞるなり、汝を殺し乃ち休む。爾らずむば止まずと。」

佛、瓶沙王に語り給ふやう「爾の時の老母とは今此の牸牛是れなり、三賈客とは弗迦沙等の三人牛の爲めに觝殺さるゝ者是れなり」と。是に於て世尊、卽ち、偈を說きて言く、

　惡言・罵詈し、憍陵もて人を蔑にす、是の行を興起せは疾怨茲に生ず。遜言、辭を愼み、人を尊敬し結を棄て惡を忍べば疾怨自ら滅びむ。夫れ士の生るるや斧口の中に在り、身を斬る所以は其の惡言に由る。

佛、是れを說き給ふ時瓶沙王の官屬一切恭肅せざるは莫し。願ひて善行を崇め禮を作して去れり。

雙要品[一] 第九

昔、舍衞國の王を波斯匿と名づく。佛の所に來至り、車を下り蓋を却け劍を解き履を脫ぎ拱手して直に進み、五體を地に投じ足下に稽首し長跪して佛に白すやう「願くば以來日四街道に於て微食を施設し國人をして佛至尊を知らしめむと欲す。願くば衆生をして鬼と妖蠱とを遠ざけ悉く五戒を奉じ以て國の患を消さしめむ」と。佛、言く「善き哉、夫、國主と爲らば宜しく明に民を導率し道を以て來世の福を求むべし」と。王、曰く「眞を至して請ず、退きて嚴辦せむ」と。手、自ら饌[二]を爲し、往きて佛と衆僧とを奉迎し倶に四衢[三]に至る。佛、至りて座に就き給ふ。卽ち、澡水

【一】雙要品。Dhammapada. 第一品、Yamaka.(雙雙)。

【二】饌。飲食。

【三】四衢、四つ角。

ざるなり。

佛、偈を說き給ふ時卽ち光明を放ち天地を烈しく照す。三塗八難〔六〕歎喜せざるは莫し。各其の所を得、國王・和默・妙法を說くを聞き又光明を覩て甚だ大いに歡喜し卽ち道迹を得たり。病母、法を聞き五情悅豫し患ふ所消除す。二百の梵志佛の光相を覩、重ねて其の言を聞き慚愧し過を悔ひぬ。「願くば弟子と爲らむ」と。佛、盡く之を受け給ふ皆沙門と作り各願の如く得たり。王及び大臣佛を請じ供養すること一月にして乃ち去り、法を以て正しく國を治め遂に興隆せり。

言語品第八〔一〕

昔、弗加沙王、羅閱祇の城に入り分衞す。城門の中に於て新產の牸牛の觝殺する所と爲る。牛主、怖れ懼に牛を賣り轉じて他人に與ふ。其の人牛を牽き之を飮まむと欲す。牛、後より復其の主を觝殺す。其の主の子有り瞋恚し牛を取つて之を殺し、市に於て肉を賣る。田舍人有り牛の頭を買ひ取り貫き擔ひ持ち歸る。舍を去ること里餘にして樹下に坐して息み、牛の頭を以て樹枝の上に掛く。須臾にして繩斷ち牛の頭來下し正に人の上に墮つ。牛の角人を刺し卽時に命終る。一日の中凡そ三人を殺せり。瓶沙王、之を聞き其の此の如きを怪しみ、卽ち群臣と與に行きて佛の所に詣到りて禮を作し畢り却きて王位に坐し、叉手して佛に白して言はく「大いに怪む可し、一頭の牸牛而も三人を殺す、將に變有らむとす、故に願くば其の意を聞かむ」と。佛、瓶沙王に告げ給ふやう「罪の對原有り、適今に非るなり」と。王、曰く「願くば其の由を聞かむ」と。佛、言く「往昔、賈客三人有り、他國に到り治生を治む、孤獨の老母の舍に寄住す。應に舍の直を顧るべしと。老母の孤獨を見て欺き與ふるを欲せず、老母を伺ふに不在なり。聲を默して捨て去り竟に直を與へず。老母來り歸り賈客を見ず。卽ち、比居〔二〕に問ふ。云く皆已に去れり」と。老母、瞋恚し後を尋ね追ひ逐ふ、

〔六〕八難。一、地獄、二、餓鬼、三、畜生、四、北拘盧州、樂報殊勝にして總て苦なきが故なり、五、長壽天・色界・無色界の長壽安穩なる處、六、聾盲瘖瘂、七、世智辨聰、八、佛前佛後、二佛中間佛法なき處。

〔一〕言語品。Udāna varga 第八品、Tshig(言語)、出曜經第九、誹謗品。

〔二〕比居。となりのこと。

や」と。婆羅門、言く「城外の平治の淨處に當り四山日月星宿を[五]郊祠し、當に百頭の畜生種種各異類と及び一少兒を得て殺し以つて天を祠るべし、王、自ら躬身を將ゐ彼に至り跪拜し命を請へ、然る後乃ち差えむ」と。王、即ち、供辦すること其の言ふ所の如し。人、象・馬・牛・羊百頭を驅り道に隨つて悲鳴し天地を震動す。東の門より出で當に祭壇に就き殺して以て天を祠らんとす。世尊、大慈普く衆生を濟へ給ふ。是の國王の頑愚の甚しきを愍れみ給ふ、云何が惡を興し衆生の命を殺し一人を救はむと欲すと。是に於て世尊、大衆を將ゐ從へ往きて其の國に到る。城の東門の道路に在り王及び婆羅門の輩に逢ふ。驅る所の畜生悲鳴して來る。王、遙に佛を見奉るに、日の初めて出づるが如く、月の盛に滿つるが如く光明炳然として天地を照曜せり。人民見る者愛敬せざるは莫し。驅らるゝ畜生、祭餟の具皆脫せむことを願ひ求む。王、即ち、前進し車を下り蓋を却け佛の爲めに禮を爲せり。叉手し長跪し世尊に問訊す。佛、命じて坐せしめ問ひ給ふやう「所に至らむと欲するや」と。拱手して答へて言く「國の大夫人、病を得、經ること久し、良醫・神祇周遍せざるは莫し、今、始めて行きて解れむと欲す、星宿・四山・五嶽に謝し母の爲めに命を請ひ冀くば差ゆるを得んことを蒙らむ」と。佛、大王に告げたまはく「善く一言を聽け、穀食を得むと欲せば當に耕種を行ふべし、大富を得むと欲せば當に布施を行ふべし、長命を得むと欲せば當に大慈を行ふべし、智慧を得むと欲せば當に學問を行ふべし。此の四事を行ぜば其の種えし所に隨ひ還び其の果を得む、夫れ富貴の家は貧賤の食を貪らず、諸天七寶を以て宮殿と爲し衣食自然なり、豈、當に甘露の滾を捨て、來りて麤穢を食すべきや、婬亂を祠祀り邪を以て正と爲す。殺生して生を求むも生を去り道遠し、衆くの命を殺害し一人を救はむと欲す、安んぞ此の如きを得むや」と。是に於て世尊、即ち、偈を說きて言く、

若し人壽百歳まで、　勤めて天下の神に事へ、　象・馬を用つて祭祀るも、　一慈を行ふに如か

【五】郊祠。都に近き野外に祀ること。

佛、偈を說き已り男子獵より還る。諸の婦、經を聽きて復行きて迎へず。其の夫驚疑し常の如くたらざるを怪しみ肉を棄て來り歸り、變有りと謂ふが故に至り見るに、諸の婦、皆佛の前に坐し叉手して經を聽く。瞋恚して彀を張り佛を毀り鬪らむと欲す。諸の婦、諫めて曰く「此れは是れ神人なり、惡意を興すこと勿れ」と。即ち、各過を悔ひ佛の爲めに禮を作せり。佛、重ねて爲めに不殺の福、殘害の罪を說き給へり。夫主、意解け長跪して佛に白すやう「吾等、深山に生長し殺を以て自ら居る。罪過累積す、當に何の法を行じて重殃を免ることを得むや」と。是に於て世尊、即ち、偈を說きて言く、

　仁を履み慈を行ひ　博愛衆を濟へば　十一の譽有り、　福常に身に隨ふ。　臥して安に、覺めて安に　惡夢を見ず、　天を護り仁愛し　毒はず兵せず。　水・火喪はず　在る所利を得、

　死して梵天に昇る。　是れ十一と爲す。

佛、偈を說き已り給ふに、男女大小百一十二人歡欣びて信受し皆五戒を奉持せり。佛、瓶沙王に語りたまはく「其れに田地を給し穀食を賜與せよ」と。仁化廣く普く國の界安寧なり。

昔、大國有り、王を和默と名づく。處邊境に在り未だ三尊[二]の聖妙の化を覩ず。梵志・外道・妖蠱[三]に奉事し邪の殺生を奉ず。祭祀此を以て常と爲す。時に王の母病み痿へ頓に床に著く、諸の醫師をして湯藥を蒙らざらしめ、諸の巫女の在る所に遣はして請求せしむ。年を經歲を歷るも未だ除差を得ず。更に國內の諸の婆羅門を召し二百人を得、請じ入れ坐せしめ飮食を供設し而して之に告げて曰く「吾が大夫人、病み困み久しきを經たり、何の故に乃ち此の如くなるかを知らず、卿等、多智、明識法として天地の星宿を知る。何の不可あるか具に告示せられよ」と。諸の婆羅門言く「星宿倒錯[四]し陰陽調はず、故に爾しむる耳」と。王、曰く「何をか作し方に宜く除愈を得べき

【二】三尊。佛・法・僧の三寶のこと。
【三】妖蠱。みこ。
【四】倒錯。上下顚倒して入りまじること。

那含天に生る。佛、諸の弟子を遣はし[九]耶旬し塔を起せり。佛、諸の弟子に語り給ふやう「罪の對の根は愼まざる可からず」と。

慈仁品第七

昔、佛、羅閱祇に在しき。國を去ること五百里にして山有り、山の中に一家有り、百二十二人有りて生長す。山藪に殺獵し業と爲す。皮を衣とし肉を食し初より田作せず。鬼神に奉事し三尊を識らず。佛、聖智を以て明に其の度すべきを知り、其の家に往詣り一樹の下に坐し給へり。男子、獵に行き唯婦女のみ在り、佛の光相明に天地を照し山中の木石皆金色に變ずるを見る。大小驚喜し佛の神人なるを知り皆往きて禮拜し施を供へ席に坐せり。佛、諸の母人の爲めに殺生の罪行と慈の福と恩愛一時に會ひて離別有ることを說き給へり。諸の母人經を聞き歡喜し、前みて佛に白して言はく「山民、害を貪り肉を以て食と爲す。微供を設けむと欲す、願くば當に納受せよ」と。佛、諸の母人に告げたまはく「諸佛の法として以て肉食せず、吾、已に食し來る、復辦ずるを須ひず」と。因て之に告げて曰く「夫れ人の世に生くるや食ふ所のもの無數なり、何を以て有益の食を作さずして、群生を殘害し以て自ら濟活するや。死して惡道に墮ち損して益無し、人五穀を食し當に愍れむべし。衆生・蠕動の類、生を食らざるは莫し、彼を殺して己れを活す、殃罪朽ちず、慈仁にして殺さざれば世世患無し」と。是に於て世尊即ち偈を說きて言はく、

仁を爲して殺さず　常に能く身を攝むれば　是不死に處り　適く所患無し。　殺さずして仁を爲し　言を愼しみ心を守らば　是不死に處る　適く所患無し。　[一]垂拱して爲すこと無く　衆生を害はず　嬈亂する所無くば　是れ應に梵天となるべし。　常に慈哀を以て　淨きこと佛の教の如く　足るを知り止むを知らば、　是れ生死を度るなり。

【九】耶旬。火葬のこと。

【一】垂拱。衣を垂れ手を拱くことにて何事も爲さゞる意。

に詣り陶家の窰の中に在りて寄宿せり。明日城に入り分衛し食訖り佛の所に至り當に經戒を奉受せんとす。佛、神通を以て弗加沙の明日、食時に其の命將に終らむとするを知り給ふ。故に遠くより來り佛に見ゆるを得ず、又經を聞かざるは甚だ憐愍すべし。是に於て世尊、沙門を化作し往きて陶家に至り寄宿を求めむと欲す。陶家、語りて曰く「向は一沙門有り、彼の窰の中に在り、往きて共に止宿す可きなり」と。草を把り窰に入り一面に坐す。弗加沙に問ふやう「何所より來るや、師は是れ誰と爲すや、何の因緣を以て沙門と行作るや。佛を見たりや未や」と。弗加沙言く「吾、未だ佛を見ず、十二因緣を聞き便ち沙門と爲れり、明日、城に入り乃ち分衛し已り、當に往きて佛を見るべき耳」と。化沙門、言く「人命危脆、朝夕に變有り、無常の宿對卒に至り期無し。但、當に身を觀ずべし、四大由る所、合成し散滅し各其の本に還る。覺意・空・淨・無想を思惟し三尊を專念せよ、布施・戒德能く無常を知れば佛を見ると異ること無し、方に明日、無益の想を種うることを念ぜよ」と。時に化沙門、卽ち、偈を說きて言く、

夫、人善利を得むとせば　乃ち來り自ら佛に歸せよ、　是の故に當に晝夜　常に佛・法・衆を念ずべし。　[六]已に自覺の意を知る　是を佛弟子と爲す、　常に當に晝夜に佛と　法及び衆とを念ずべし、　身を念じ非常を念じ　戒と布施との德を念じ、　空と不願と無想とを　晝夜當に是を念ずべし。

時に化沙門、窰の中に在り弗加沙の爲に非常の要を說けり。弗加沙王、思惟し意定り卽ち[七]阿那含道を得たり。佛、已に解るを知り爲めに佛身の光明相好を現ぜり。弗加沙王、驚喜・踊躍し稽首し禮を作せり。佛、重ねて之に告げて曰く「罪の對と無常と畢るが故に恐るること莫れ」と。弗加沙王、言く「尊の教を敬奉し忽然として別れ去らむ」と。明日、食時、弗加沙王城に入り分衛す。城門の中に於て新產の牸牛犢を護るに逢ふ。弗加沙王に觝れて殺す。腹、潰え命終り卽ち[八]阿

【六】已。大正本己に作るは誤植。

【七】阿那含。譯して不還(果)といふ、欲界に再び生じ來らざればかくいふ。

【八】阿那含天。不還果の聖者。

と。時に、五沙門、意大いに歡喜し未曾有と怪しむ。心を安んじ意を定め復行を憂へず。明日の日中、此の道人食を送りて來る。食し訖り、安和にして心意惔怕なり。是に於て化人爲めに偈を說きて言く、

比丘は戒を立て　諸の根を守り攝し、　食は自ら節するを知り　寤の意に應ぜしむ。　戒を以て心を降し　意を守りて定を正しくし、　內に止觀を學べば　正智を忘るること無し。　明哲に戒を守り　內に正智を思へば　行道應ずるが如く、　自ら淨く苦を除く。

化道人、此の偈を說き已り佛身の光相の容を顯現せり。是に於て五沙門、精神震疊し威戒を思惟し、卽ち阿羅漢道を得たり。

惟念品　第六[一]

昔、佛、世に在せし時、弗加沙王、瓶沙王[二]と親友たり。弗加沙王、未だ佛道を知らず七寶の華を作り以て瓶沙に遺る。瓶沙王、之を得て轉じて佛に奉上す。佛に白して言さく「弗加沙王我と友たり、我に此の華を遺れり、今、以て佛に上る、願くば彼の王をして心開き意解け、佛を見、法を聞き聖衆を奉敬せしめよ。當に何物を以て遺る所に報ゆべきや」と。佛、瓶沙に告げたまはく「十二因緣經を寫し送り持て之を與へよ、彼の王、經を得て心必ず信解せむ」と。卽ち、經卷を寫し、別の書文に曰く「卿、寶華を以て遺る。今、法華を以て相ひ上つる。詳に其の義を思へ。果報は深美なり。便ち誦習するに到り以て道味を同じくせむ」と。弗加沙王、經を得て之を讀む。尋いで省り反覆し悵然として信解せり。喟然[三]として歎じて曰く「道化眞妙なり精義神を安んじ國榮ゆ。五欲[四]は憂惱の元、累劫の習迷始めて今乃ち寤む、顧みて流俗[五]を視るに貪樂す可き無し」と。卽ち、群臣を召し國を太子に付し便ち自ら頭を剃り行いて沙門と作り、法服と鉢を持ち羅閱祇の城外

【一】 Udāna vargu. 第十五品、Drun-pu.(念)、出曜經、第十六、惟念品。
【二】 瓶沙王。佛在世の摩竭國王。
【三】 喟然。なげく貌。
【四】 五欲。色・聲・香・味・觸の五境、卽ち是れ人の欲心を起すものなれば欲といふ。
【五】 流俗。世上。

は之れ信を履み父の教に違はず、戒を持ち慚愧し命を沒するも二たらず、聞と施と慧道の七財滿ち具れり。福德の致す所にして災變と爲すに非ず、智者能く行はば男女所生の處を問はず福の應ずること自然なり」と。是に於て世尊、卽ち、偈を說きて言はく、

信も財・戒も財、　慚と愧も亦財なり、　聞も財・施も財　慧とを七財と爲す。　信に從ひ戒を守り　常に淨く法を觀ず、　慧にて行を履み　教を奉じて忘れず。　生れて此の財有り　男女を問はず、　終に已に貧ならず、　賢者は眞を識る。

比羅陀、佛の說き給ふ所を聞き益篤信を加ふ。佛足を稽首し歡喜して家に還れり。具に佛の教を宣べ其の妻子を誨へ遂に相ひ承け繼ぎて皆道迹を得たり。

戒愼品[1] 第五

昔、波羅奈國[2]に山有り、城を去ること四・五十里なり。五沙門有り、山に處り道を學べり。晨且[3]に山を出で人の間に乞食す、食し訖り山に還り晩暮に乃ち到る。往き還り疲極して坐禪・思惟して正定に堪えず。年を歷て是の如く道を得ること能はず。佛、之の勞して獲ること無きを愍念み、一道人を化作し其の所に往到り給ふ。諸の道人に問ふやう「隱居し道を修め勞倦無きを得たるや」と。諸の沙門言く「吾等此に在り、城を去ること旣に遠し、四大の身當に飲食を須ふ。日日供給し往還して疲勞す。年を經歲を歷て勤苦し竟已る。晝日往返し暮れて輒ち疲頓す、復、道を修するを得るに暇あらず。爲めに正に爾く命を畢るべきのみ」と。道人、語りて曰く「夫れ、道を爲す者は戒を以て本と爲し、心を攝するを行と爲す。形を賤み眞を貴び軀命を捐棄つ、食は以て形を支へ意を守り定を正しくし、內に止觀を學び意を滅して道を得、身を養ひ情に順じ安に苦を免かるるを得、願くば諸の道人明日行くこと莫れ、吾、當に供養すべし。諸の道人をして一日休息せしめむ」

【一】戒愼品。Udāna varga. 第六品 Tshul-khrims.(戒) 出曜經、第七、戒品。
【二】波羅奈國。林名、Vārāṇasī. 中印度恒河流域の國名。
【三】晨且。あさ。

の淵を度す可し、數里の江何ぞ奇と爲すに足らむ」と。是に於て世尊、即ち、偈を說きて言はく、

信は能く淵を渡り、攝は船師と爲る、精進は苦を除き、慧は彼岸に到る。士に信行あらば聖の爲めに譽めらる、無爲を樂む者は一切の縛を解く。信は乃ち道を得法は滅度を致す、聞くことより智を得、到る所に明有り。信と戒と、慧と意に能く行ぜば、健夫は恚を度し是より淵を脫せん。

是に於て村の人々、佛の說き給ふ所を聞き信の證を見、心開け信堅く皆五戒を受け清信士と爲り、明に信じ日法教を修め普く天下に聞ゆ。

昔、佛、世に在せし時大長者有り、修陀羅と名け、財富無數にして信に道德に向へり。自ら誓つて臘月の八日を以つて佛及び僧を請じ、終身子孫奉行して廢てず、長者亡かるの時兒に囑するやう「廢することと勿れ」と。兒を比羅陀と名く。後日漸く貧しく居に有る所無し。臘月已に至り供辦するもの有ること無く愁感して樂しまず。佛、目連を遣し往きて比羅陀に問はしめ給ふ「汝の父の直月至らんと欲す、當に何等かの計を設くべし」と。比羅陀、答へて言く「亡父の教令敢て之に違えず、唯、願くば世尊よ、忽ち棄て給ふこと勿れ、八日の中に光を廻らし臨眄せよ」と。目連、還りて白すこと是の如し。比羅陀、即ち、妻子を將ゐ外に至り家の質百兩金を取れり。舍に還り供辦し一切具足せり。佛、千二百五十の衆僧と與に其の舍に往詣せり。坐し畢り水を行り、食を下げ澡ぎ竟り精舍に還り給ふ。比羅陀、歡喜して敢て悔恨せず、其の日夜半に諸の故藏の中自然に寶物悉く滿ちて故の如し。比羅陀夫婦、明旦之を見喜びて而も且つ懼る。官の見て所より此を得たるかと問ふを懼る。夫妻、共に議り當に往きて佛に問ふべしと。尋いで佛の所に到り具に白すこと此の如し。佛、比羅陀に告げたまはく「意を安んじ快く用ひよ、疑難有ることと勿れ、汝

【二】心を攝すること。

【三】清信士。優婆塞のこと、三歸五戒をうけて清淨の信心を得たる男子のこと。

【四】臘月。陰曆十二月の異名。

【五】直月。祥月のこと。

【六】臨眄。のぞみ見ること。

あるものが目なきものを豁ゆるが如し。是の故に癡を捨つ可し、慢と豪・富と樂とを離れ學を務め聞に事ふる者は、是を德を積聚むと名く。

是に於て五百人、佛の光相を見、重ねて此の偈を聞き、叩頭し歸命し剋心過を悔ゆ。刀瘡・毒箭自然に除愈す、歡喜し心開き卽ち[二]五戒を受く。國の界安寧となり歡喜せざるは莫し。

篤信品 第四[一]

昔、舍衞國の東南に大江有り、水既に深くして廣し。五百餘の家有り岸邊に居在せり。未だ道德世を度するの行を聞かず。剛强を習ひ、欺詐を務と爲す、貪利自ら恣にし心を快くし意を極めぬ。

世尊は常に其の度すべき者は當に往きて之を度すべきを念じ給ふ。此の諸の家の福應に度すべきを知り給へり。是に於て世尊、水邊に往至り一樹の下に坐し給へり。村人、佛の光相を見、奇異驚肅せざるは莫し。皆、往きて禮敬し或は拜し或は揖し起居を問訊す。佛、命じて坐せしめ爲に經法を說き給へり。衆人、之を聞き而も信ぜず。欺怠を習ひ眞の言を信ぜず。佛、便ち一人を化作し給ふ。江南より來り、足水の上を行き正に其の踝を沒し佛前に來至り、稽首して佛を禮せり。衆人、之を見て驚怪せざるは莫し。化人に問ふて曰く「吾等の先人此の江の邊に來居し、未だ曾て人の水上を行く者を聞かず。卿は是れ何人ぞや。何の道術有りて水を履きて沒せざるや。願くば其の意を聞かむ」と。化人、答へて曰く「吾は是れ江南愚直の人なり、佛、此に在ますを聞き、道德を貪樂し南岸の邊に至り時ならざるに度を得んと、彼岸の人に問ふやう、水淺深と爲すやと、彼の人語るやう、水踝に齊しかる可し、何ぞ涉渡らざると。吾、其の言を信じ、便ち爾く來り過ぐ、他の異術無きなり」と。佛、時に讚えて言はく「善き哉、善き哉、夫れ、信誠を執らば諦に生死

【二】五戒。殺生・偸盜・邪淫・妄語・飮酒をいふ。

【一】篤信品。Udāna va 'gg'. 第十品 Dud-pa.(信)、出曜經、第十一、信品。

昔、羅閱祇國の南に大山有り。城を去ること二百里なり。南土の諸國の路此の山に由る。山谷深邃にして五百の賊有り、嶮に從りて人を劫かす。後、遂に縱橫に害する所狼藉たり。衆賈毒を被り王路通ぜず。國王、追討するも擒獲すること能はず。

時に、佛、國に在り、群生を哀愍す。念ふに、彼の賊輩罪福を知らず、世に如來有るも而も目に覩ず、法鼓日に震ふも而も耳に聞かず、吾、往きて度せずむば石の淵に沈むが如しと。一人を化作し好き衣服を著け、馬に乘り劍を帶び手に弓矢を執り、鞍勒・嚴飾し金銀莊校す。明月の珠を以て馬の體は垂絡し、馬に跨り弦を鳴し往きて山中に入れり。群賊、之を見て以て寶を成さんと爲す。賊と作り年を積むも未だ此の便有らず、卵の石に投ずる此れと何ぞ異ならむ。群賊頭を齊へ徑を前み、圍遶して弓を挽き刀を拔き諍うて剝脫せむと欲す。是に於て化人弓を擧げ一つを發すれば五百の賊をして各一箭を被らしめ刀を以つて指擬するに各一瘡を被る。瘡重く箭深し、卽ち當顚倒す。五百の群賊宛轉し地に臥し叩頭して歸降る。是れ何の神威の力の爲めに乃ち爾るや。原赦を蒙り以て微命を活きむことを乞ふ。「願くば時に箭を拔き瘡を除愈せしめよ、今は瘡の痛堪忍ゆ可からず」と。化人、答へて曰く「是の瘡痛からず、箭深しと爲さず、天下の瘡重きこと憂より過ぐる莫く、殘害の甚だしきこと愚より過ぐるは莫し、汝、貪より得るところの憂ゝ殘殺の愚を懷く、刀瘡・毒箭、終に愈ゆ可からず。此の二事は根本深く固くして勇力・壯士の拔く能ざる所なり。唯、經戒・多聞の慧義のみ有りて、此の明道を以て心の病を療治す。憂愛・愚癡・貢高を拔除き、剛強・豪富・貪欲を制伏し、德を積み、慧を學びて乃ち除くを得て長く安穩を獲べし。」と。是に於て化人卽ち、佛身を現ず、相好挺特で、金顏殊妙なり。卽ち、偈を說きて言はく、

所痛は憂に過ぐる無く、　射箭は愚に過ぐる無し、　是れ壯も能く拔くこと莫く、　唯、多聞に從りて除く。　盲は是れによつて眼を得、　闇は從て燭を得、　世間の人を示導するは　目

先人、以來守りて此に死せむ」と。佛、長者に告げたまはく「人生、世間の横死に三有り、病有りて治せざるは一の横死と爲す。治して愼しまざるは二の横死と爲す、憍恣自ら用ひ逆と順に達せざるを三の横死と爲す。此の如き病者は日月・天地・先人・君父の能く除遣する所に非るなり。當に明かなる道を以つて時に隨ひ安に濟ふべし。一には四大の寒熱常に醫藥を須ふべし、二には衆邪の惡鬼當に經戒を須ふべし、三には賢聖に奉事し窮厄を矜濟し、德は神祇に感じ福は群生を祐け、大智慧を以て陰蓋を消去すべし。此の如く奉行せば現世安吉終に枉横無し。戒慧淸淨にして世世常に安かなり」と。是に於て世尊、即ち、偈を說きて言はく、

日に事ふるは明の爲の故なり。　父に事ふるは恩の爲の故なり　君に事ふるは力を以ての故なり、　聞の故に道人に事ふるなり。　人は命の爲に醫に事へ　勝たむと欲して豪强に依る。

法は智慧の處に在り　福を行へば世世明かなり。　友を察するは務を爲すに在り　伴に別るるは急時に在り、　妻を觀るは房の樂に在り　智を知らむと欲せば說に在り。　爲めに能く師は道を見はし　疑を解き學を明かならしむ、　亦、淸淨の本を與へ、　能く法藏を奉持せしむ。　聞は能く今世の利、　妻子と昆弟と友と　亦後世の福を致し　聞を積み聖智を成ず。

能く攝するは義を解らんがためなり。　解れば則ち戒穿たず　法を受け法に猗る者　是從り疾く安きを得ん。　是れ能く憂恚を散じ　亦、不祥の衰を除く、　安穩の吉を得むと欲せば　當に多聞者に事ふべし。

是に於て長者、佛の說法を聞き心意の疑結[九]爗然として雲の如く除こり、良醫、進て療し心を道德に委す。[一〇]四大、安靜し衆患の消除すること甘露を飲むが如し。中外怡懌ぶ、身安かに心定る。須陀洹道を得て宗室の國人敬奉せざるは莫し。

【九】爗然。消失すること。
【一〇】四大。地・水・火・風の四、こゝではそれより成る身體の意。

還び身を復し光明炳然として天地を晃照し、便ち、梵嶂を持つて梵志の爲めに偈を說きて言はく、

若し多少聞有りて　自ら大とし以て人に憍らば、　是れ盲の　燭を執りて　彼を照すも自らは
明かならざるが如し。

佛、偈を說き已り、梵志に告げて曰く「冥中の甚しきこと汝より過るは無し、而して晝炬を執り行きて大國に入る、卿の知る所の如きは何ぞ一塵に如かむや」と。梵志、之を聞き慚愧の色有り、即便ち叩頭し「願くば弟子と爲らむ」と。佛、即ち之を受け沙門と作さしめ給ふ。意解け安止み、即ち應眞を得たり。

昔、舍衞國に大長者有り。名けて須達と曰ふ。須陀洹を得たり。親友長者有り名けて好施と曰ひ佛道及び諸の醫術を信ぜず。時に重病を得、痿えて頓に床に著く、宗親・知友皆就き省み問ふ。勸て病を治せしめむとす、死に至るも肯んぜず。衆人に答へて言く「吾、日月に事へ君父に忠孝なり。命を此に畢るも終に志を改めざるなり」と。須達、語りて曰く「吾が事ふる所の師號して曰つて佛と爲す、神德廣く見らるゝ者福を得、試に來りて經を說き、呪願することを請ひ、其の說く所を聽け、言行・進趣何ぞ餘道の如くならむ、之に事ふと隨はざるとは卿の志す所なり。以に卿の病久し時ならざるに　除差せむ。卿に佛を請ずることを勸む。冀くば其の福を蒙むれ」と。好施、日に作し、「卿、便ち吾が爲めに佛及び衆弟子を請ぜよ」と。須達、即便ち佛及び僧を請ず。其の門に往詣り、佛、光明を放ち給ひ、內外通徹す。長者、光を見て欣然として、身輕し。佛、前て坐に就き長者を慰問したまはく「病む所何如む、昔、何の神に事へ何の療治を作せりや」と。長者、佛に白すやう「日月に奉事し君長、先人を恭敬し齋戒し祈請すること萬端なり。病を得て時を經るも未だ恩祐を蒙らず、醫藥・針灸の門に居るは忌む所なり。經戒の福德は素より知らざる所なり、

【八】除差。いゆること。

多聞は志を明かならしめ、已に明なれば智慧增す、智則ち博ければ義を解り、義を見れば行法安し。多聞は能く憂を除き能く定を以て歡と爲す、善く甘露の法を說き、自ら泥洹を得るを致す。聞は爲に法律を知り、疑を解り亦正を見る、聞に從りて非法を捨てば行きて不死の處に到るなり。

道人、偈を說き已る。佛、光相を現じ洪輝、赫奕・天地を照曜す。夫妻、驚愕し精神戰き懼れ惡を改め心を洗ひ頭惱を地に打ち二千億の惡を壞りて須陀洹道を得たり。

昔、佛、拘睒尼國[四]の美音精舍に在し諸の四輩の與に廣く大法を說けり。一梵志の道士有り、智博く衆經に通達し備に擧げて事として貫ぬかざるは無し。貢高、自ら譽へ、天下比無しと、敵を求めて行くも敢て應ずる者無し、晝の日炬を執りて城市の中を行く。人之に問うて曰く、何を以て晝日炬を執つて行くやと。梵志、答へて曰く「世皆愚冥なり、目見る所無し、是を以て炬を執り之を照す耳」と。世間を觀察するに敢て言ふ者無し。佛、梵志の宿福の度に應じ、而して貢高を行ひ勝れる名譽を求め、無常を計らず自ら悕憍[五]し、恣に是の如くせば當に太[六]山の地獄に墮ち、無央數劫出づるを求むるも甚だ難きを知り給ふ。佛、即ち、一賢者を化作し肆の上に居りて坐す。即ち、梵志を呼び「何が爲に此を作す」と。梵志、答へて曰く「以に衆人冥く晝と夜と明に見ず、故に炬を執りて之を照す耳」と。賢者、重ねて梵志に問ふやう「經の中四明法有り之を知ると爲すや不や」と。對へて曰く「不審なり、何をか四明法と謂ふ」と。「一には天文・地理に明にして四時を和調す、二には星宿に明にして五行[七]を分別す、三には治國に明にして化を綏ずること方有り、四には兵を將ゆるに明にして鬪くして失ふ無し、卿、梵志と爲り此の四明法有りや不や」と。梵志、慚愧し炬を棄て叉手し、及ばざる心有りと。佛、其の意を知り即ち

【四】拘睒尼國。梵名、Kauśāmbī. 中印度の國。

【五】悕憍。たのみおごること。

【六】太山。太山は泰山府君、(鬼を治む神)のこと、支那にて山東省の泰山を冥府とする思想あり、それと習合して太山の地獄とせしなるべし。

【七】五行。木・火・土・金・水。

失ひ、棄捨てゝ走る。是に於て道人忽然として捨て去る。舍を去ること數里樹下に坐して息む。其の夫、道中を來り歸り婦を見て其の驚怖を怪しむ。其の婦夫に語るやう「一沙門有り、怖を見ること此の如し」と。夫、大いに瞋怒し問ふやう「所在と爲すや」と。婦、曰く「已に去れり、想ふに亦未だ遠からざるなり」と。夫、即ち、弓を執り刀を帶び迹を尋ね往きて逐ふ。弓を張り刀を拔き奔走して直に前み道人を斫らむと欲す。道人、即ち、琉璃の城を化作し以つて自ら圍遶す。其の人、城を遶ること數匝にして入ることを得る能はず、即ち、道人に問ふやう「何ぞ開門せざるや」と。道人、曰く「門を開かしめむと欲せば汝の弓刀を棄てよ」と。其の人、自ら念ふやう「當に其の語に隨ふべし、若し當に入るを得れば手の拳を之を加へむ」と。尋いで弓刀を棄つ、門、故に開かず。復、道人に語るらく「已に弓刀を棄つ、門、何ぞ開かざる」と。道人曰く「吾、汝をして心中の惡意の弓刀を棄てしむる耳、手中の弓刀を謂ふに非ざるなり」と。是に於て其の人心驚き體悸く、道人「神聖にして乃ち我が心を知る」と。即便ち、叩頭し過を悔ひ道人に稽首して曰く「我に弊妻有り、眞人を識らず、我をして怨を興さしむ、願くは小か慈を垂れ便ち捨つること莫れ・今、將ゐ來らむと欲す、勸めて道を修めしめむ」と。即ち、起ちて還歸る。其の妻、問ふて曰く「沙門、所在せしや」と。其の夫、具に神變の德を說くやう「今は彼に在り、卿、宜く自ら往き改悔し罪を滅すべし」と。是に於て夫妻道人の所に至り、五體(を投じ)、過を悔ひ「願くは弟子と爲らむ」と。長跪して問ふて曰く「道人の神變・聖達乃し爾り。琉璃城有りて堅固踰え難し、志明に意定り永く毀患無し、何の道德を行じ此の神妙を致す」と。道人答へて曰く「吾、博學にして厭ひ無く法を奉じて懈らず、精進・持戒・慧あり放逸ならず、是に緣りて道を得自ら泥洹を致せり」と。是に於て道人因て偈を說きて言はく、

多聞、能く持するが故に、　法を奉じ垣牆と爲す、　精進は踰え毀り難し　是に從り戒・慧成ず。

禮を作し却きて一面に住せり。其の水を飲む者道路疲頓し日を經て乃ち達す。佛の神德、至尊の巍巍を見奉り稽首し禮し畢り涕泣して自ら陳ぶるやう「我が伴一人彼に於て命終し其の達せざるを感ず、願くば佛、之を知れよ」と。佛、言く「吾、已に明かなり」と。佛、手を以つて指して曰く「今、此の天人は則ち汝の伴なり、戒を全うし天に生れ又先に至れり」と。是に於て世尊、胸を披き之に示したまはく「汝、我が形を觀て我が戒を奉ぜず、我を見るといふと雖も我汝を見ざるなり、我を去ること萬里、經戒を奉行する此の人は則ち我が目前に在りと爲す」と。是に於て世尊、即ち偈を說きて曰はく、

學びて多聞、　持戒して失はざれば　兩世、譽られ　願ふ所は得るなり。　學び而して寡聞、
持戒完からざれば　兩世、痛を受け、　其の本願を喪ふ。　夫れ學に二有り、　常に多聞に
親しみ、　安諦に義を解る、困しむと雖も邪ならざれ。

是に於て比丘、偈を聞き慚怖し稽首し過を悔ひ所行を[三]嘿思す。天人、偈を聞き心意欣悦し法眼を逮得せり。天人、衆會奉行せざるは莫し。

[一]多聞品　第三

昔、舍衞國に一貧家有り。夫婦慳惡にして道德を信ぜず。佛、其の愚を愍み現に貧凡の沙門と爲り門に詣りて[二]分衞し給ふ。時に夫在らず其の婦罵詈し道理有ること無し。沙門、語りて曰く「吾、道士と爲り乞匃して自ら居る、罵詈することを得ざれ、唯一食を望む耳」と。主人の婦曰く「若し汝立ちて死するも食尙得ること叵し。況んや今平健にして我が食を望まむと欲す。但、時節を稽留するより早く去るに如かず」と。是に於て沙門其の前に住立し、[三]戴眼し氣を抒し便ち死相を現はす。身體膖れ張れ鼻口より蟲を出し、腹潰へ腸爛れ不淨流漫す。其の婦此を見て恐怖して聲を

【三】嘿思。默思に同じ。

【一】多聞品。Udāna varga. 第二十二品 Tlos(聞)、出曜經、第二十三聞品。

【二】分衞。乞食、比丘行て食を乞ふこと。

【三】戴眼。眼球を動かさずして上を見る眼。

厭ひ捨てゝ此に來至り樹に倚りて臥し自ら念ふやう、恩愛の牢獄を離れ一に何ぞ快き哉と、象は是れ畜生なり猶閑靜を思へり、況んや汝家を捨てゝ、世を度せむことを欲求む。方に以て獨りにして自ら伴侶を求めむと欲するや。愚冥の伴侶傷け敗る所多し、獨り住して對無く亦謀議無し、寧ろ獨り道を修め愚かなる伴を用ひざれ」と。是に於て世尊、即ち偈を說きて言はく、

學に朋類無し、　善友を得ざれば　寧ろ獨り善を守りて、　愚と偕ならざれ。　戒を樂みの行を學ぶに　奚ぞ伴を用ふることを爲さむ、　獨り善く憂無きは　空野の象の如し。

佛、是を說き給ふの時比丘意解け、內に聖教を思ひ即ち應眞を得たり。谷の中の鬼神も亦皆聞きて解けて佛弟子と爲れり。誓誡の勅を受け復民を侵さず。佛、比丘と共に精舍に還り給へり。

[一]護戒品　第二

昔、佛、舍衞國の祇洹精舍に在し、諸の天人の爲めに經法を宣演し給へり。

時に、羅閱祇國に二新學の比丘有り、往いて佛に見えむと欲す。二國の中間曠く人民無し。時に旱熱にして泉水枯竭せり。二人、飢渴、熱暍して呼吸す、故き泉の中に升餘の水有り而も細蟲有りて飮むことを得可からず。二人、相對へて曰く「故に遠く從り來り佛を望み見むと欲す、圖らざりき、今日、命を此に沒せんとは」と。一人言ひて曰く「且く當に水を飮み以つて吾が命を濟ひ、進前みて佛に見ゆべし。焉んぞ其の餘を知らむや」と。一人、答へて曰く「佛の明戒仁慈を首と爲す。殘殺し自ら活き佛に見ゆるも益無し、寧ろ戒を守りて死し、戒を犯さずして生れむ」と。一人、即ち起ち意を極めて快く飮む。是に於て路を進む。一人、飮まずして遂に命を殞すことを致せり。即ち、第二[二]忉利天上に生る。思惟し自ら省み、即ち宿命に戒を持して犯さず今來りて此に生ると識る。信なる哉、福の報其れ遠からざるなりと。即ち、華香を持ち下りて佛の所に到り佛の爲めに

【一】護戒品。法句經教學品中に此の品の偈を出す。

【二】忉利天。欲界六天中の第二、須彌山の頂、閻浮提の上八萬由旬の處にあり、この有情身長一由旬壽一千歲なり。

即ち偈を說きて言はく、

先づ母を斷たんと學べ。　君の臣を率ゐて、　諸の營從を廢するは　是れ上道の人なり。

佛、比丘に告げたまはく「[一五]十二因緣は癡を以つて本と爲す、癡は衆罪の源なり、智は衆行の本なり、先づ當に癡を斷ち然る後に意定まる。」と。佛、之を說き已り、比丘、慚愧し自ら責めて言く「我、愚癡の爲めに迷惑して來久しく古典を解せず、此の如くならしむる耳、今、佛の說き給ふ所甚だ妙と爲す」と。內思して正に[一六]安般を定め、意を守り心を制し情を伏し諸の欲を杜閉す。即ち、意を定むるを得て佛の前に在り、[一七]應眞を逮得せり。

昔、佛、羅閱祇國の靈鷲山の中に在して諸の天人、國王、大臣の爲に甘露の法を說き給へり。一比丘有り、剛猛、勇健なり。佛、其の意を知り、山の後の鬼神の谷の中に至らしめ樹下に坐して息を數へ定を求めしむ。「息の長短安般を知り意を守り求むることを斷じ苦を滅し泥洹を得可し」と。比丘、敎を受け谷の中に往至り坐して意を定めむと欲す、但、山の中、鬼神の語聲を聞き、其の形を見ずして、但音聲有り。[一八]悚息、怖懼し自ら寧むずる能はず。意悔ひ還らむと欲し卽ち自ら念言ふやう「家に居れば大富、宗族あり、又强て出家・學道し獨り安處を見る。鬼神の深山既に伴侶無く又行人無し、但、諸の鬼のみあり數來り人を怖れしむ。」と。思惟是の如く未だ去らざるの間、是に於て世尊、其の邊に往到り樹下に坐して之に問うて曰く「汝、獨り此に在り將に怖懼無き耶」と。比丘、稽首し白して言さく「初め未だ會て山に入らず、此に在りて實に憂り」と。須臾の間に一野象の王來り邊に在り、一樹に倚りて臥し心獨り歡喜す。「諸の象を遠離し何ぞ一に快き哉」と。佛、象の意を知り比丘に告げて曰く「汝、寧んぞ是の象の由て來る所を知るや不や」と。對へて曰く「不審にせず」と。佛、比丘に告げたまはく「此の象の眷屬大小五百餘頭あり、小象を

【一五】十二因緣。衆生が三世に涉りて五道に輪廻する第緣起を說きし敎、一、無明、二、行、三、識、四、名色、五、六處、六、觸、七、受、八、愛、九、取、十、有、十一、生、十二、老死の十二支をいふ。

【一六】安般。梵語、Ānāpāna. 譯、數息觀、出息入息を數へて心を瞋る觀法。

【一七】應眞。阿羅漢のこと、人天の供養を受くべき眞人の意。

【一八】悚息。おそれてひつそりずること。

萬歲を積み壽盡き復螺蜂の蟲・樹中の蠹蟲と爲り各五萬歲なり。此の四品の蟲長く冥中に生れ身を貪り命を愛し樂處に幽み隱る。冥を以つて家と爲し光明を見ず。一眠の時百歲乃ち覺む。罪の網に纒綿し出要を求めず。今、始めて罪畢り沙門と爲るを得たり。如何が睡眠し厭足を知らざるや」と。

是に於て比丘、重て宿緣を聞き慚怖自ら責め〔九〕五蓋の雲除き卽ち羅漢を得たり。

昔、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在し、諸の天人、〔一〇〕四輩の與に法を說き給へり。

時に、一年少の比丘有り、人と爲り頑愚・質直・疎野なり、未だ道の要を解せず、情意興ること盛にして欲を思想ふ、陽氣隆盛にして自ら制すること能はず、此を以つて惱と爲し世を度することを獲ず。坐して自ら思惟ふやう「根有り斷たば然る後淸淨にして道迹を得可し」と。卽ち、〔一一〕檀越の家に至り之從り斧を借り房に還り戶を閉ぢ衣服を脫ぎ去り木の板の上に坐し、自ら〔一二〕陰を斫らむと欲して正坐す。此の陰我をして勤苦せしめ生死を經歷すること無央數劫なり。〔一三〕三塗・〔一四〕六趣皆色欲に由る。此を斷ぜずむば道を得る緣無し。」と。

佛、其の意を知り、愚癡乃ち爾なり。道は心を制する從りす、心は是れ根源なり、當に死すべきを知らず自ら害して罪に墮ち長く苦痛を受けむと。是に於て世尊、往きて其の房に入り、卽ち、比丘に問ひ給ふやう「何等をか作さむと欲するや」と。比丘、斧を放ち衣を著け佛を禮して自ら陳ぶ。「學道を學ぶこと日久しく未だ法門を解せず、每に禪定に坐し道を得べきに垂んとして欲の爲に蓋ふ所となり、陽氣隆盛にして意惑ひ目冥み天地を覺らず、諦に自ら責む、念ふに事皆此に由る。是を以つて斧を借り之を斷じ制せむと欲す」と。佛、比丘に告げたまはく「卿、何の愚癡にして、道理を解せざるや。道を求めむと欲せば先づ其の癡を斷じ然る後に心を制せよ、心は善惡の根源なり。根を斷たむと欲せば先づ其の心を制せよ、心定り意解け然る後道を得む」と。是に於て世尊、

〔九〕五蓋。蓋は蓋覆の義五法ありて善く心性を蓋覆して善法を生ぜざらしむ、一、貪欲、二、瞋恚、三、睡眠、四、掉悔、五、疑法の五蓋。

〔一〇〕四輩。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四衆をいふ。

〔一一〕檀越（Dānapati）。施主をいふ。

〔一二〕陰。男根。

〔一三〕三塗。一、火塗、地獄趣の猛火に燒かるゝ處、二、血塗、畜生趣の互に相ひ食む處、三、刀塗、餓鬼趣の刀劒杖を以て逼迫せらるゝ處。

〔一四〕六趣。迷の衆生業因の差別により趣く所六あり、一、地獄、二、餓鬼、三、畜生、四、阿修羅、五、人間、六、天上の六なり。宋・明・元・聖語藏の諸本六畜に作る。

は魔兵を厭ひ　生死より度を得、
王、佛の言を聞き歎じて曰く「善き哉、誠に尊の敎の如し、四人、避け對ひ一人已に死せり、祿命分有り、餘も復然らん」と。群臣・從官・信受せざるは莫し。

敎學品　第二

昔、佛、舍衛國の祇樹精舍に在しき。

佛、諸の比丘に告げたまはく「當に勤めて道を修め　陰蓋を除棄くべし、心明に神定り衆苦を免る可し」と。一比丘有り、志、明に達せず飽食し室に入り房を閉ぢ靜に眠る。身を愛し意を快くし非常を觀ぜず冥冥として懈怠し復晝夜無し。却の後七日其の命將に終らむとす。佛、之を愍み傷み惡道に墮むことを懼れ、卽ち、其の室に入り指を彈きて覺して　曰く、

咄！　起きよ、何爲れぞ寐ぬるや、　蛹・螺・蚌・蠹の類　隱蔽するに不淨を以てし　迷惑して計りて身の爲にし、　爲めに斫瘡を被る有り、　心病痛に嬰るが如し、　衆の厄難に遭ひて、
反つて用て眠ること爲す。　思うて放逸ならず　人の爲めに仁の迹を學べば　是從り憂有ること無からん　常に自ら意を滅することを念ぜよ。　正見を學び務めて增さば　是を世間の明と爲す、　生る所の福千倍し　終に惡道に墮せず。

比丘、偈を聞き卽便ち驚き寤む。佛の親誨を見て敬を加へ　悚息す。卽ち、起ちて稽首し佛の爲めに禮を作せり。

佛、比丘に告げたまはく「汝、寧ろ自ら本の宿命を識るや不や」と。比丘、對へて曰く「陰蓋の覆ふ所にして實に自ら識らざるなり」と。佛、比丘に告げたまはく「昔、維衞佛の時汝曾て出家し身を貪り利養し經戒を念はず、飽食し却きて眠り非常を念はず、命終り魂神蛹蟲の中に生る。五

【三九】祿命。人の業より得たる命。

【一】敎學品。Udāna varga. 第十二品 Lega-par-abyod-pa.(善行)出曜經、第八學品。

【二】陰蓋。五陰(色・受・想・行・識)の常存するといふ妄念。

【三】蛹。じがばち。

【四】螺。ほらがひ。

【五】蚌。どぶがひ。

【六】蠹。しみ。

【七】悚息。おそれてひつそりすること。

【八】維衞佛。梵名、Vipaśin 過去七佛の第一。

時に、梵志兄弟四人有り。各〻五通を得たり。却後七日皆當に命盡くべし。自ら共に議りて言く「五通の力天地を反覆し日月を捫で山を移し流を駐め能はざる所靡し、寧むぞ此の死を避くる能はざらむ」と。對へて一人の言く「吾、大海の中に入り出現せず下りて底に至らず正に其の中に處らむ。無常の殺鬼安んぞ我が處を知らむ」と。一人の言く「吾は[三五]須彌山の中に入り還び其の表を合し際の現るゝこと無からしめむ。無常の殺鬼安んぞ吾が處を知らむ」と。一人の言く「吾、當に輕く擧りて虛空の中に隱るべし、無常の殺鬼安んぞ吾が處を知らむ」と。一人の言く「吾、當に大なる市の中に藏れ入るべし、無常の殺鬼趣きて一人を得何ぞ必ずしも吾を求めむや」と。四人、議り訖り相ひ將ゐて王に辭するやう「吾等の壽、算するに餘り七日有り、今、命を逃れむと欲す、冀くば當に脫れ還るを得て、乃ち顧省せむ。唯、願くば德を進めよ」と。是に於て別れ去り各〻在る所に到り七日の期滿つ。各各命終す。猶し果の熟し落つるがごとし。市監、王に白さく「一梵志有り卒に市中に死す」と。王、乃ち悟りて曰く「四人避け對ひ一人已に死す、其の餘の三人豈獨り免るゝを得むや」と。王、卽ち嚴駕し往きて佛の所に至る。禮を作し却きて坐し、王、佛に白して言はく「近きに梵志の兄弟四人有り、各〻五通を得自ら命盡くるを知り皆共に之を避く、不審なり、今は皆能く脫するを得たるや不や」と。佛、大王に告げたまはく「人四事有り、離るゝを得る可からず。何をか謂ひて四と爲す、一には[三六]中陰の中に在り生を受けざるを得ず、二には已に生れ老を受けざるを得ず、三には已に老いて病を受けざるを得ず、四には已に病みて死を受けざるを得ず」と。是に於て世尊、卽ち偈を說きて言はく、

[三七]空に非ず海の中に非ず　山石の間に入るに非ず、　地の方所の之を脫して、　死を受けざるところ有ること無し。
是は務是れは我が作　作して是を致さしむべし、　人は此の爲めに躁擾し　老死の憂を[三八]履踐む。
此を知りて能く自ら靜め、　是の如く生の盡くるを見る。　比丘

【三五】須彌山。梵語、Sumeru. 妙高等譯す、一小世界の中心の山名、九山八海その周圍をめぐる。

【三六】中陰。中有ともいふ、此に死して彼に生ずる中間に於て受くる陰形を云ふ。陰とは五蘊の義。

【三七】Dhammapada. 第百二十八偈。

【三八】履踐。ふみ行ふこと。

す。即ち、化人に問ふやう「何所從り來るや。夫主、兒子、父兄、中外皆何許に在りや。云何が獨り行きて將ゐ從ふこと無きや」と。化人、答へて言く「城中從り來り家に還歸らむと欲す。相ひ識らずと雖も共に還る可し。泉水の上に到り坐して息み共に語らざるや不や」と。蓮華、言く「善し」と。二人、相ひ將ゐ還び水上に到る。意を陳ぶること委曲す。化人睡來り蓮華の膝を枕とし眠る。須臾の頃に忽然として命絶ゆ、胮脹れ臭爛し腹潰え蟲出づ、齒落ち髮墮ち肢體解散す、蓮華之を見て心大いに驚き怖る。「云何が好人忽ち便ち無常なるや。此の人尙爾なり、我、豈久しく存せむ、故に當に佛に詣りし、精進して道を學ぶべし。」と。即ち、佛の所に至り五體を地に投げ禮を作し已訖り、具に見る所を以つて佛に向つて之を說く、佛、蓮華に告げたまはく「人に四事有り恃怙む可からず、何をか謂ひて四と爲す、一には少壯も會當に死に歸すべし、二には强健も會當に死に歸すべし、三には六親聚り歡娛し樂しむも會當に別離すべし、四には財寶を積聚むるも要らず當に分散すべし」と。是に於て世尊、即ち、偈を說きて言く、

老ゆれば則ち色衰へ、　壯なるも病めば　自ら壞れ　形敗れ腐朽つ　命終ること其れ然なり。

[三一]是の身何の用ぞ　洹に臭を漏らす處　病の爲めに困められ　老死の患有り。　欲を嗜み自ら恣なれば　非法是れ增して、　變を見聞せず　壽命は無常なり。　子有るも恃むところに非ず　亦父も兄も恃むところに非ず　死の爲に迫られ　親の怙む可き無し。

蓮華、法を聞き欣然として解釋け　身を觀ずること化の如し。命久しく停まらず、道德有り　[三二]泥洹永へに安し、と。即ち、前みて佛に白すやう「願くば比丘尼と成らむ」と。[三三]止觀を思惟し即ち羅漢を得たり。諸の坐に在る者佛の說き給ふ所を聞き歡喜せざるは莫し。

[三四]昔、佛、王舍城竹園の中に在して法を說き給へり。

【三一】Udāna varga. 無常品、第三十五偈。

【三二】泥洹。滅と譯す、生死の因果を滅すること。證りのこと。

【三三】止觀。妄念を止息し觀智眞理に契會すること。

【三四】此の譬喩譚は增一阿含經第二十三卷、第四、(大正、二卷、(68.b)婆羅門避死經(大正、二卷、854.b)を參照。

に熟し麥有りて野火の爲に燒かる(ゝが如し)。梵志此の憂惱を得て愁憒し意を失ひ恍惚たり。譬へば狂人の自ら解する能はざるが如し。人の說くを傳へ聞くやう、佛、大聖、天人の師と爲り經道を演說し憂を忘れ患を除き給ふと。是に於て梵志佛の所に往到り禮を作し長跪して佛に白して言さく「素り子息なく、唯、一女有り、愛して以つて憂を忘る。卒に重病を得我を捨てゝ喪亡る。天性悼み愍れみ、情として自ら勝へず。唯、願くば世尊よ、神を垂れ開化し我が憂結を釋き給へ」と。佛、梵志に告げたまはく「世に四事有り、久しく得可からず、何をか謂ひて四と爲す。一には有常は必ず無常となり、二には富貴は必ず貧賤となり、三には合會せば必ず別離あり、四には強健も必ず死すべし」と。是に於て世尊、卽ち偈を說きて言はく、

[三〇]常なる者は皆盡き　高き者は必ず墮ち、　合會へば離る有り　生ける者は死有り。

梵志、偈を聞き心卽ち開解せり。願くば比丘と作らむと。鬚髮自ら墮ち卽ち比丘と成れり。重ねて非常を惟ひ羅漢道を得たり。

昔、佛、羅閱祇の耆闍崛山の中に在しき。

時に、城內に婬女人有り、名を蓮華と曰ふ。姿容端正にして國中に雙ひ無し。大臣、子弟尋いで敬はざる莫し。爾の時、蓮華、善心自ら生じ世事を棄てて比丘尼と作らんと欲す。卽ち山中に詣り佛の所に就き到る。未だ中道に至らざるに流るゝ泉水有り。蓮華、水を飮み手を澡ぎ自ら面像を見るに容色、紅輝あり、頭髮紺靑、形貌方正にして挺特でゝ比無し、心に、自ら悔ひて曰く「人、世に生れて形體此の如くなれば云何が自ら棄て行きて沙門と作らむや。且く當に時に順つて我が私情を快くせむ」と念ひ已り便ち還る。佛、蓮華の當に化度すべきを知り一婦人の端正絕世なるを化作し給ふ。復、蓮華に勝ること數千萬倍なり、尋いで路に逆ひ來る。蓮華之を見て心甚だ愛敬

【二七】 六神通。六種の神通、天眼・天耳・他心智・宿命・神足・漏盡智證の六種。
【二八】 阿羅漢。小乘の悟を極めたる位の名、譯、一に殺賊、煩惱の賊を殺す意、二に應供、人天の供養を受くべき意。
【二九】 祇樹給孤獨園。梵名、Jetavana Anāthapiṇḍikārāma. 給孤獨と稱せられし舍衛國の長者須達が祇多太子の園林を購ひ精舍を建てゝ、世尊に獻じたる園。
【三〇】 Udāna varga. 無常品、第二十偈。

昔、佛、[二〇]羅閱祇の竹園中に在しき。諸の弟子と與に城に入り請を受け說法し畢訖り給ふ。[二一]晡時に城を出て道に一人の大群牛を驅り牧ひ還り城に入るに逢ふ。肥飽、跳騰し轉た相ひ[二二]觝觸す。是に於て世尊、卽ち偈を說きて言く、

[二三]譬へば人の杖を操り　牧に行き牛を食ふがごとく、　老と死とは猶然なり　亦命を養ひて去る。　[二四]千百にして一も非ず　族姓の男、女、　財產を貯へ聚めて、　衰喪せざる無し。　生ある者は日夜に　命を自ら攻め削る、　壽の消盡すること　[二五]滎霈の水の如し。

佛、竹林に到り足を洗つて卻いて坐し給ふ。阿難、卽ち前み稽首して問うて言さく「世尊よ、向には道の中に此の三偈を說き給ふ、其の義を審かにせず。願くば開化を蒙らむ」と。佛、阿難に告げたまはく「汝、人有り群牛を驅り牧ふを見るや不や」と。「唯、然なり、之を見る」と。佛、阿難に告げたまはく「此の屠家の群牛本千頭有り、屠兒、日日人を遣はし城を出て好き水草を求め養ひて肥長せしむ。肥へし者を擇び取り日に牽きて之を殺す。之を殺すこと過半にして餘の者覺らず、方に相ひ觝觸し跳騰し鳴吼す。其の無智を傷れむの故に偈を說く耳」と。佛、阿難に語りたまはく「何ぞ但此の牛のみならむや、世人も亦爾なり、吾我を計して、非常を知らず、五欲を[二六]饕餮し其の身を養育し、快心、意を極め更に相ひ殘賊す。無常の宿の對卒に至るも期する無く曚曚として覺らざるは何ぞ此に異ならむや」と。

時に坐中貪養の比丘二百人有り法を聞きて自ら勵み[二七]六神通に逮び[二八]阿羅漢を得たり。衆坐悲喜し佛の爲めに禮を作せり。

昔、佛、舍衞國の[二九]祇樹給孤獨園に在し諸の弟子の爲めに法を說き給へり。

時に梵志の女有り、年十四・五、端正聰辯にして父甚だ憐愛す。卒に重病を得て卽便ち喪亡ふ、田

【二〇】羅閱祇。摩揭陀國の王舍城の梵名、Rājagṛha の音譯。

【二一】晡時。午後四時頃。

【二二】觝觸。角つき合ふこと。

【二三】Udāna Varga. 無常品、第十五偈、Dhammapada. 第百三十五偈、此の偈の漢譯よりの國譯は從來誤譯されてゐる。今、巴利文を揭げやう。Yathā daṇḍena gopālo gāvo pāceti gocaraṃ, evaṃ jarā ca maccū ca āyuṃ pācenti pāṇinaṃ. (牧牛士の杖を以て〔制し〕、牛を牧場に驅るが如く、等しく老と死とは有情の壽命を驅る) これは立花俊道師の和譯であるが、巴利文の上では此より外に譯しやうがなく、漢譯も亦此の意味に譯すべきである。然し前偈と後偈とが明に合致しない。今、西藏譯を和譯して見やう。

譬へば牧人の杖を操りて牧場に牛を驅る如く、その如く病と老とにより死魔は有情を驅る。

【二四】Udāna Varga 無常品、第十九偈。

【二五】滎霈水。極めて少しの水。

【二六】饕餮。財を貪り、食を貪ること。

し[13]須陀洹道を得たり。

昔、佛、[14]舍衞國の精舍の中に在し諸の天・人・龍・鬼の爲に法を說き給へり。時に、國王、[15]波斯匿の大夫人、年九十を過ぎ重病を得、醫藥差えずして遂に便ち喪亡へり。王及び國臣、法の如く葬送し神を墳墓に遷し葬送し畢訖る。還び佛の所を過ぎ服を脫ぎ襪を跣ぎ、前みて佛の足を禮しぬ。佛、命じて坐せしめて之に問ふて曰はく「王、所從り來り衣纙にして、形異なるや。何所にか施を爲すや」と。王、稽首して曰はく「國の大夫人、年九十を過ぎ間重病を得、奄便ち喪亡へり。靈柩を遣送し遷して墳墓に葬れり。今、始めて來り還り過ぎ聖尊に覲ゆ」と。佛、王に告げて曰はく「古自り今に至るまで大なる畏四有り、生るれば則ち老い枯れ、病みて光澤無く、死すれば則ち神去り、親屬別離す、是を謂ひて四と爲す。人に期を與へず、萬物無常にして久しく居ること得難し、一日過ぎ去り、人の命も亦然なり。五河流れて晝夜息むこと無きが如く人の命の駛疾きも亦復是の如し。」と。是に於て世尊、卽ち偈を說きて言はく、

[16]河の駛く流れて　往きて返らざるが如く、　人の命も是の如し　逝く者は還らず。

佛、大王に告げたまはく「世皆是有り、長く存する者無く皆當に死に歸すべし、脫るゝ者有ること無し、往昔の國王、諸の佛、眞人、[17]五通の仙士も亦皆過ぎ去り能く住する者無し、空しく爲に悲感し以つて軀ゝを損ず。夫、孝子と爲り亡ぶる者を哀戀せば福と爲り德と爲り、以て之に歸し流れ、福祐の往き追ふこと遠人に[18]餉するが如し」と。

佛、是を說くの時、王及び群臣歡喜せざるは莫し、憂を忘れ患を除く。諸の來りし一切の人々皆[19]道跡を得たり。

【一三】須陀洹道。梵語、Srota-āpanna. 聲聞四果の中の初果の名、豫流と譯し初めて聖道の流に豫る意。

【一四】舍衞國。梵名、Śrāvasti. 城の名、憍薩羅國の首都。

【一五】波斯匿。舍衞國の王、梵授王の子なり、佛と同日に生る。

【一六】此の偈。Udāna varga. 無常品第十三偈。

【一七】五通。五の不思議の神力、天眼・天耳・他心・宿命・神足等なり。

【一八】餉。人に食をおくること。

【一九】道跡。證りの果。

法句譬喩經

巻の第一

晋世・沙門法炬・法立と共に譯す

[一]無常品 第一

昔、[二]天帝釋、五徳身を離れ自ら命盡き當に世間に下生し陶作の家に在りて、驢の[三]胞胎を受くべきを知る。何を五徳と謂ふか。一には身の上の光滅す、二には頭の上の華萎む、三には本坐を樂しまず、四には腋の下の汗臭し、五には塵土身に著く。此の五事を以て自ら福の盡くるを知り甚だ大いに愁憂ふ。自ら念ふやう、[四]三界の中人の苦厄を濟ふは唯佛有る耳と。是に於て奔りて馳せ往き、佛の所に到りぬ。

時に、佛、[五]耆闍崛山の石室中に在し坐禪して普濟三昧に入り給ふ。天帝、佛を見て稽首し禮を作し地に伏し、至心に三たび自ら佛、法、聖衆に歸命せり。未だ起たざるの間に其の命忽ち盡き、便ち陶家に至り驢母の腹中に子と作る。時に、驢、自ら(繩を)解き瓦、[六]坏の間を走り坏器を破壞す。其の主、之を打つ、尋いで時に胎を傷つく。其の[七]神、即ち還び故身の中に入り、五徳還び備り復天帝と爲る。佛、三昧より覺め讚へて言はく「善き哉、天帝能く[八]命を殞す際に於て[九]三尊に歸命し罪の對ひ已畢り更に勤め苦しまず」と。爾の時、世尊、偈を以て頌めて曰はく、

[一〇]所行は常に非ず　謂く興衰の法なり、　夫生ずれば輒ち死ぶ、　この滅を樂しみとなすなり。

[一一]譬へば陶家の　[一二]埴を埏ね器を作るも　一切は要ず壞るるが如く、　人の命も亦然なり。

帝釋、偈を聞き無常の要を知り罪福の變に達し興衰の本を解し寂滅の行に遵へり。歡喜して奉受

【一】無常品。Udāna va·ga. 第一品、Mi-rtag-pa (無常) 出曜經、第一、無常品。

【二】天帝釋。忉利天の主、姓は釋迦、帝釋天とも云ふ。

【三】胞胎。えな、托胎の意。

【四】三界。凡夫の往來する世界を三つに分つ。欲界、色界と無色界となり。

【五】耆闍崛山。中印度摩揭陀國王舍城の東北にあり、その山頂鷲に似たる邊より名けられ靈鷲山と謂ふなり。釋尊常に此處にて說法し給へり。

【六】坏。燒かぬ瓦。

【七】神。神識の意味。

【八】殞命。死ぬること。

【九】三尊。佛・法・僧の三寶のこと。

【一〇】所行は諸行のこと、生滅變化するもの、此の偈、Udāna varga の第一偈の註を引用する。
Aniccā vata saṃkhārā uppādavaya dhammind, uppajjitvā nirujjhanti, tesaṃ vūpasamo sukho. (Mahāparinibbānasuttaṃ 6).

【一一】此の偈。Udāna varga の第十偈。

【一二】埴。器を作る土。

昭和五年八月二十五日

譯者　赤沼智善
　　　西尾京雄　識

na）に屬せしめてよいものである。是等の因緣譚中の何つかは泰西の學者によつて研究發表され、その譯はSūryaGodha-sumangala 師に依つてなされ、又 Harvard の東洋叢書中にもその完譯は編入されて居る。しかし梵語・巴利語・漢譯、西藏譯の其等の物語の系統的なる比較研究は猶將來のものとして今日は殘されてゐるのである。

本經は三十九品より成り四卷に分けられてゐる、各品一つ以上五・六の譬喩譚を載せ合計六十八を數へることが出來、譬喩集錄としては賢愚經の六十九より一つ少ないだけである。其等の各品の梗概は品名の示す如きことが說かれてゐるのであつて取り立てゝいふ程のこともないであらうから此處には略する。

是等の一つ一つの物語りはそのまゝ經典より持ち來つたものもあり、又恐らくは法句集錄といふものが出來上つてから後に敎化の方便として創作せられたものもあるであらう。又經典より抄錄されたものも何分かは因緣譚としての脚色が行はれたであらうことも十分に考へられる。

四、撰者と譯者

法句譬喩經の撰者は誰であるか。法句經を法救撰とすることは既に智度論の云つてゐるところであるが、巴利系の Dhammapada はこれといかなる關係に考ふべきかは不明であり、又その法句經の註釋的な意味を含んでゐる譬喩譚が加へたこの法句譬喩經の撰者をも法救に歸すべきものであるかはにはかに斷定せらるべきことでなく、今は撰者は不明であるといふより外はない。

譯者は釋、法立と法炬の二人である。西晉（A. D. 265—316）の惠帝の時に（A. D. 290—306）洛陽に於て譯出したのである。その法立とは如何なる人であるか之を詳にしないが「開元釋敎錄」第二によれば樓炭經、六卷、大方等如來藏經一卷、福田經、一卷及び法句譬喩經の四部を譯出した人であり、智通弘く拔んじ物を悟るを先と爲すとのみあり、又、高僧傳、維祇難の條下にその兩名の名を出すけれどもその何處の人であるか、その人の事跡等は詳述されてゐないから知り得ない。

最後にこの國譯は大正藏經によつたものであるが、間々その字句の上に適宜に宋、元、明等の諸本を依用し、四、五、の底本の誤植は縮刷藏經により訂正したところもある。法句の讀み方については Dhammapada, 或は Udāna-varga（Hermann Beckh. Berlin. 1911）を參照しつゝ譯出した。佛教の論語ともいひつべき法句經がたとひ少分量であらうとも正しく國譯さるべきことを念頭したからである。

又、佛、涅槃の後諸の弟子要偈を抄集す。諸の無常偈等は無常品を作り、乃至婆羅門偈等は婆羅門品を作るが如し。亦、優陀那と名づく、

といふことにより、優陀那（Udāna）とは無常品より婆羅門品に至る法句の集錄をいふものであることが知られる。又、出曜經の第六巻の十二部經の說明の條下には、

六には出曜、所謂出曜とは無常從り梵志に至る。衆經の要藏を採り、演說布現し以つて將來を訓ふるの故に出曜と名づく、

とあるによりても知らるゝのである。この出曜はレヴイ博士が示さるゝ如く(J. A. 1912. II. p. 219) Udānaを譯して出(Ud)、曜 (dāna,√dai) としたものと解すべきである。(先に撰集百緣經の解題のもとには出曜は Avadāna の譯語ならむと考へたのであるが誤りであるから此處に訂正する）而して梵語、西藏譯、及び漢譯維祇難の法句經等はその撰者を法救(Dharmatrāta, Chos-skyob) 尊者としてゐる。

以上の如く法句經はパーリ語系統のものは Dhammapada と稱し梵語系統のものは Udāna-varga といはれたらしいが其等が漢譯の中に現はれてパーリ系統のものは維祇難譯の法句經となり梵語系統のものは宋の天息災の譯した法集要頌・經となつてゐるのである。

法句經に二系統あるが如く其等の法句(Dhammapada, Udāna-varga) の因緣物語も又二系統がある。卽ち、法句譬喩經は維祇難譯の法句經と共にパーリ語系のものであり、僧伽跋澄が將來し符秦の竺佛念と共に譯出した出曜經は法集要頌經と共に梵語系のものである。出曜經の梵名が 'Udāna-sūtra' であることより譬喩經類（Avadāna）に配當すべきものでないと考へられるであらうけれども此の經は法句譬喩經と同じく法句(Dhammapada, Udāna varga) の緣つて說き起されし因緣譚（Avadāna）が物語られてゐるのであるから十二分經中に配當するならば譬喩經類に屬すべきものである。然もその譬喩譚も要は法句の會得にあるのであるからその經の主眼をとつて出曜經としたものである。

三、同種の集錄と本經の組織

本經の如く譬喩譚が法句に對して註釋的位置を持つて加へられ、譬喩經類に攝して論ぜらるべきものがパーリ藏經中に年代から言へば新しいものであるが佛音（Buddhaghosa）の作と傳へられて法句註譯（Dhammapada aṭṭhakathā）として存在してゐる。是の中には多くの譬喩譚が含まれて居り譬喩經類（Avadā-

法句譬喩經解題

一、經題

法句譬喩經は一名法句本末經といひ、又法喩經とも名づけられ、南條目錄には梵語 Dharmapadāvadāna-sūtra に還元されてゐる。釋尊一代の說法をその說法の形式によつて九若しくは十二に分ち九分經又は十二部經としてゐるが、今、此の經は何れに分類せらるゝかといへば十二部經中第七位を占むる譬喩經(Apadāna)に屬するものである。法句譬喩經といはるゝ名から見て法句 (Dharmapada) の譬喩 (Avadāna) であることは明かであつて、法句の一偈、一偈が如何なる本末の因緣によつて說かるゝことゝなつたかといふ種々の譬喩譚が此の經典を支配する興味の中心となつてゐるのである。而してその譬喩譚を物語るのは法句を一般世人に了解せしめ佛の教を證得せしめむが爲めであり、勿論最後の目的は法句の體得にあつて譬喩譚はその手段としての役目を演じてゐるものであるが譬喩譚を物語ることが此の經の重要な點であるから譬喩經類 (Apadāna) に攝して論ずることは正しいことである。

二、法句譬喩經と出曜經

法句譬喩經も出曜經も同種類の經典であつて、共に法句、(Dharmapada, Udāna) の說かるゝ樣になつた因緣譚を說く譬喩譚經類に屬するものであるが同じく漢譯藏經にありて前者は巴利語系統のものであり、後者は梵語系統のものであるといふことは注意してよい事柄と思はれる。

法句經 (Dharmapada) に就いてはその國譯者が詳述せらるゝであらうから精しく述べる必要もないが、パーリの Dhammapada は釋尊の在世中緣に隨ひ機に應じて出家や在家の弟子達に說かれたものを第一結集の際合誦したものを傳へ、二十六品、四百二十三偈より成り、パーリ小部 (Khuddaka nikāya) 中に攝められてあり、その出版本は西紀一八五五年、フアウスベール氏によつて公刊されてより世界に喧傳せられあらゆる國語に翻譯せらるゝことゝなつた。

梵語系統の法句經は法句 (Dhammapada) とは名けられずして優陀那 (Udāna) といはれたものであることは中央亞細亞より得られた梵本斷片及び西藏譯等より證明せらるゝことである。又、傳統的の解釋からも決定し得ることであるが龍樹の智度論、第三十三卷には、

せ。猶明かなる日の虛空に處在して、普く照す所有るや、其を覩る有る者、光を蒙らざる莫きが若くなれ。是の故に說いて曰く、

諸の深法を出生する、　梵志は禪に習入し、　遍く一切世を照すこと、　猶日の虛空に在るがごとしと。

（七一）諸の深法を出生する、　梵志は禪に習入し、　能く魔衆の敵を卻くること、　佛の衆苦を脫するが如し。

『諸の深法を出生する、』とは如來の等正覺を成じ、三十七道品の法を具足したまふや、身口意の行、無漏と相應し、魔怨を降伏して、進却時に宜し。如來の等正覺は一切の結使を脫したまふ。

出　曜　經　（終）

彼彼に狐疑を滅す。

『梵志は是れ有ること無し。』とは意、殊妙の法に著し、樂を見るも、以て喜と爲さず、憂を見るも以て慼と爲さゞるなり。如如に意轉ぜられて、恒に自ら善を念ふ。彼彼、自ら惡を滅して聖諦を習ふを得て、諸使を分別するなり。是の故に說いて曰く、

梵志は是れ有ること無し。憂有るも念に憂ふること無し。如如に意は轉ぜられて、彼彼に狐疑を滅すと。

(六九)諸の深法を出生する、　梵志は禪に習入して　能く狐疑の網を解き、　身に其の苦痛を知る。

如來等正覺、初めて成佛したまへる時、七日の中、禪定正受して十二因緣を思惟す。一一に分別して[二八]起を知り、滅を知る。爾の時、如來、卽ち三昧より起つて斯の偈を說きたまはく、

諸の深法を出生する、　梵志は禪に習入し、　能く狐疑の網を解き、　身に其の苦痛を知ると。

我が習ふ所の積行の致す所の如し。今日等正覺を成ぜるは實にして虛ならず。梵志、禪に習入し、諸の惡法を去り、悉く狐疑の網を壞し、諸の深法に於て無礙智を得。念ふ所自在にして深く苦際を知り、深く因緣合數の法の權詐にして實に非ざるを知る。其の要を略誦せんとせば、當に[二九]因緣法を觀ずべし。復當に[三〇]盡法を觀ずべし。一切諸法は皆合數に由り、一切諸法は皆痛に由る、當に盡滅すれば有漏を造らざることを知るべし。

(七〇)諸の深法を出生する、　梵志は禪に習入し、　遍く一切世を照すこと、　猶日の虛空に在るがごとし。

法能く人を成ず。法に非ざれば就らず。晝夜に思惟して胸懷を去らず。身口意行に妄りに犯すこと有らざれ。能く此の法を成就すれば、便ち能く一切法を照さん。己が所得を以て悉く衆生に施

【二八】起、滅。十二因緣の起と滅。

【二九】因緣法。萬物を合成せしむる法則。四諦ならば集諦に當る。

【三〇】盡法。萬物を破壞せしむる法則。四諦ならば盡(滅)諦に當る。

弟子及び餘の使人をも(畜はず。)かくの若き人は人と爲り鮮潔にして志を虛無に託し、意を玄寂に繫く。是の故に說いて曰く、『若し床褥を共にせしむるも彼の婆鉤盧の如くならん。』と。

(六六)猶內法を、　梵志は表に在りとするが如し。　生を知り老を知るも、　轉當して死に至らん。

所謂內法とは人を誑惑せざるものなり。一向にして傾無く、一向にして邪無し。唯如來のみ有つて能く此の境界を越え、以て其の生を盡し、更に有を受けず、如實に之を知りたまふ。是の故に說いて曰く、

猶內法を、　梵志は表に在りとするが如し。　生を知り老を知るも、　轉當して死に至らんと。

(六七)日は晝に照り、　月は夜に照り、　甲兵は軍を照し、　禪は道人を照し、　佛は天下に出でゝ、　一切の冥を照す。※

『日は晝に照り、』とは日天子、初めて出づるの時に當つては億百千萬の光明を放ち、星宿月光をして復光明無からしむ。若し復、日沒するの時は月及び星宿、皆共に明を競ふ。倶に其の明を照す所有つて同じからず。猶大將の士の兩敵の相向つて威を揚げ、武を奮ひ、決戰勝負するや、震赫精刄、鐘鼓雷鳴あるが若く、禪定の人は山を移し、岳を飛ばし、海水揚塵し、手もて日月を捫む。此の神力有るも、自ら稱譽せず。此の諸人、此の德有りと雖も如來に及ばず。佛の世間に出づるや、衆相具足し、大光明を放ち、照さゞる所靡し。光明の及ぶ所、晝夜絕えず。其の光を見る者は聾盲瘖瘂もあり。考掠の苦痛も自然に休息す。是の故に說いて曰く、

日は晝に照り、　月は夜に照り、　甲兵は軍を照し、　禪は道人を照し、　佛は天下に出でゝ、　一切の冥を照すと。

(六八)梵志は是れ有ること無し。　憂有るも念に憂ふること無し。　如如に意は轉ぜられて、

※ 法句經梵志品。巴利法句經二六の三八七。

り。何を以ての故にとなれば、彼の陳說する所は眞正の義に非ず、亦復是れ至道の本ならざればなり。」と。是の故に說いて曰く、

諸有もの深法を知らんには、　等覺の所說を、　審かに諦め戒信を守ること、　猶祀火梵志のごとかれと、

眞誠に佛に歸命したてまつれ。

(六四)已が法より外に在つては、　梵志を最上と爲す。　一切諸の有漏、　皆盡きて皆餘無し。

或は復痛を觀ずるに、　皆盡きて皆餘無し。　或は復合會を觀ずるに、　皆盡きて皆餘無し。

或は復因緣を觀ずるに、　皆盡きて皆餘無し。

『已が法より外に在つては、』とは彼の修行人、一切の衆法を觀了して事として關せざる無く、事として知らざる無きこと、猶梵志の天文地理、星宿災變を知つて、皆悉く觀了せるが若し。一切の諸漏、皆盡きて餘無し。諸の苦痛を觀ずるに、若しは好、若しは醜、皆盡に歸す。其の合會を觀ずるに、必ず離別すべき因緣有つて、暫らく有るも亦復滅に歸す。

(六五)猶內法の本を、　梵志は表に在りと爲すが若し。　若し床褥を共にせしむるも、　彼の婆鉤盧[二五]の如くならん。

所謂內法とは四諦の眞如、一一に分別して次緒を失はざるなり。梵志は內なるものを則ち謂つて表と爲す。是の故に說いて曰く、

猶內法の本を、　梵志は表に在りと爲すが若し。　若し床褥を共にせしむるも、　彼の婆鉤盧の如くならんと。

此の婆鉤盧比丘は出家以來、未だ曾て人の與に、四句[二六]の義を說かず。　正しく與共に同坐して共の正法を說くことをも聞かず。生れてより老に至るまで八十一　鉢和蘭[二七]をも未だ曾て畜へず。沙彌

【二五】　婆鉤盧(Vakkula)。譯、善容。中阿含八、薄拘羅經には彼自ら種々の未曾有法を說けり。參照せよ。

【二六】　四句の義。四法印(苦・空・無常・無我)をいひ、又四句分別(有・空・亦有亦空・非有非空)をいふことあり。

【二七】　鉢和蘭(Pravāraṇa)。飯を入るゝ應量器。又自恣食と譯し、自恣の日、三寶に供養する飯食をもいふ。

說いて曰く、

梵志を捶たず、梵志を放たざれ。咄梵志を捶つや。放つ者も亦咄と。

(六二二)諸有もの深法を知らんには、老と少とを問はず、審かに諦め戒信を守ること、
猶[二三]祀火梵志のごとかれ。

昔、佛、世に在して、周旋敎化したまふ。時に諸比丘、廣く多問せず。爾の時、世尊、便ち是の念を作さく、「今、諸の比丘、懈怠有ること多くして、意精懃ならず。」と。復自ら當來、過去三世の事を觀察して、當來の世に當に比丘有つて、嫉妬恚癡にして道敎に順はず、便ち誹謗を興して如來の法を損し、師を輕慢すべく、亦復法を說くの人を敬はざるべきことを知りたまふ。是を以て世尊、後世の遺法の中間を觀察し、老と少と共に相上下し、尊卑別たず、老は耆艾を恃み、少は聰叡を恃み、老者は自ら陳ぶらく、「吾が目覩する所は卿の知る所に非ず。汝の今見る所は螢火蟲の如し。」と、少者は自ら陳ぶらく、「[二四]老頑闇魯、情喪ひ、心塞り、何ぞ歸すべきことか有らん。」とする有るを恐れたまふ。如來、敎へて曰く、「當に自ら戒を守ること猶事火梵志の若く、五處に火を然し、晝夜に承事して時節を失はず、香華、繒綵もて事事供養すべし。」と。是の故に說いて曰く、

諸有もの深法を知らんには、老と少とを問はず、審かに諦め、戒信を守ること、猶祀火梵志のごとかれと。

(六二三)諸有もの深法を知らんには、等覺の所說を、審かに諦め戒信を守ること、猶祀火梵志のごとかれ。

如來の出現は億十萬劫にして時時に乃ち出づるなり。賢に遭ひ、聖に遇ふことは實に得べからざれば、人、能く戒信を守つて儀を失はざること、祀火梵志の如かれ。昔、佛、世に在せしとき、諸の比丘を誡めたまはく、「自今以後、外書を誦するを得ざれ。(之は)外道異學の誦習する所の者な

【二三】祀火梵志。事火外道ともいふ。火を神聖視して之を祀る一派の婆羅門。

【二四】老頑闇魯。おいてかたくなにしておろかなること。

生死の河を斷じ、　能く忍んで超度し、　自覺して塹を出づる、　是を梵志と謂ふと。

（五九）當に流を截つて渡らんことを求め、　梵志は欲有ること無く、　內に自ら諸情を觀ずべし。　*是を謂つて梵志と爲す。　能く知ること是の如き者を　乃ち復梵志と爲す。

彼の行人の愛流の　[三]四駃四淵を斷ぜざる者の如きは道に進趣すること亦難からざらんや。河の暴溢なれば必ず傷つくる所有るが如く、梵志も貪欲なれば、死して惡道に趣く。是を以て如來は誡むるに貪を除かんことを以てし、與に欲本の汚穢不淨なるを說きたまはく、「當に諸邪を斷じて流馳せざらしむべし。」と。能く此の衆行を具する者を故らに名けて梵志と爲す。是の故に說いて曰く、

當に流を截つて渡らんことを求め、　梵志は欲有ること無く　內に自ら諸情を觀ずべし。　是を謂つて梵志と爲す。　能く知ること是の如き者を、　乃ち復梵志と爲すと。

（六〇）先づ其の母と、　王及び二臣とを去り、　勝境界を盡せる、　是を梵志と謂ふ。

『先づ其の母を（去り）、』とは愛心流馳すれば、以て源本と爲る。無漏の意識は能く斯を去り、病使を盡して餘無からしむ。王とは我慢なり。二臣とは戒盜と身見となり。『勝境界を盡せる、』とは一切の諸結使（無き）なり。能く衆結の患を去るが故に因つて梵志と爲す。是の故に說いて曰く、

先づ其の母と、　王及び二臣とを去り、　勝境界を盡せる、　是を梵志と謂ふと。

（六一）梵志を捶たず、　梵志を放たざれ。　咄梵志を捶つや。　放つ者も亦咄。

所謂梵志とは阿羅漢道を得たるものなれば、手拳刀杖を以て彼の眞人に加ふるを得ざれ。『梵志を放たざれ。』とは此は是れ眞人なれば、恒に當に衣被服・飯食・床臥具・病瘦醫藥を供養し、四事を供養して減少せざらしむべし。咄、梵志を捶つ行惡の人。放つ者も亦咄、復是れ惡人なり。飲食・床臥具・病瘦醫藥を供養することを留めざれ。能く此の行を具するが故に名けて梵志と爲す。是の故に

＊是を大正藏に自とせるは誤植。

【三】四駃、四淵。四流に同じ。見・欲・有・無明。

則ち離れて形質有るに非ず。心の化し難きは猶木の鋼を鑽るがごとし。是を以て聖人は後生に遺敎す。心を降伏せんと欲せば、晨に百藥を用ひ、中に百藥を用ひ、暮に百藥を用ひよ。」と。空・無想・(無)願の止觀もて滅盡し、用つて心病を療し、除愈することを得せしむ。能く此を具する者を故らに梵志と曰ふ。是の故に說いて曰く、

遠く逝き獨り遊び、隱藏して形無く、降し難きを能く降す、是を梵志と謂ふと。

(五七)色無ければ見るべからず。此も亦見るべからず。此の句を解知する者は、念に則ち所由有つて、結使の盡くるを覺知す、是は世の最たる梵志なり。

『色無ければ見るべからず。』とは何者か心なる、夫れ心は患を興し、身に殃を招く。猶象馬の剛强にして[三]懺戾調はざるが若し。有目の士は捶杖を加へ、楚痛を知らしめ、然る後に人心の患たるものを調良す。地獄・餓鬼・畜生に牽致し、人と爲るを得ると雖も、卑賤に處在し、顏色醜陋にして人の爲めに輕んぜらる。是の故に說いて曰く、

色無ければ見るべからず、此も亦見るべからず。此の句を解知する者は、念に則ち所由有つて結使の盡くるを覺知す、是は世の最たる梵志なりと。

諸佛世尊、世に出づる所以は正に此の弊惡の心を降さんと欲するなり。諸佛世尊、一切を慈愍し、弘く慈しみ、普く蓋ひ、照さざる所靡く、世に處ると雖も、染著せらること無し。

(五八)生死の河を斷じ、能く忍んで超度し、自覺して塹を出づる、是を梵志と謂ふ。

彼の行人の五欲の爲めに繫がるれば、生死の河に流轉するが如し。要に大聖の指授を須てば、權宜もて此の岸より彼の岸に至るを得べし。如來の形を降すや、事として豫らざるは非ず。要に有緣に接して後乃ち滅度すべし。塹とは憍慢の塹なり。能く此の塹を度り、憍慢の爲めに繫がれざれ。能く此を具する者を故らに名けて梵志と爲す。是の故に說いて曰く、

【三】懺戾。もとる、いふことをきかぬ。

家居を棄捐し、　家の畏無く、　甘露の滅に逮ぶ、　是を梵志と謂ふと。

(五五)世事を斷絕し、　口に麁言無く、　八道を審かに諦むる、　是を梵志と謂ふ。

如來世尊は光相炳著にして初めて法輪を八萬の諸天及び二王人、梵志七人、摩竭國王洴沙の萬二千人、摩竭國界石室の中の釋提桓因の萬二千の天子のために轉じたまひ、拘尸那竭國にて最後に[17]須拔を度したまふ。佛、滅度したまふの後、當に羅漢有つて世に出づべし。名けて[18]優波崛と曰ふ。其の中間に於て衆生を濟度すること稱計すべからず。八道無礙の法を演說したまふ。是の故に說いて曰く、

世事を斷絕し、　口に麁言無く、　八道を審かに諦むる、　是を梵志と謂ふと。

(五六)遠く逝き獨り遊び、　隱藏して形無く、　降し難きを能く降す、　是を梵志と謂ふ。

彼の行人、無涯の想を興し、無邊の念を散ずれば、身形は此に在れども、心は海表に在るが如し。人、意を觀じ、其の形狀を知らんと欲するも、甚だ剋し難しと爲す。心意は流馳し、彈指の頃も、數千萬億の江河山表を過ぐ。是を以ての故に『遠く逝き獨り遊び』と說く。復問ふ者有り「心に[19]十大地法有つて心を十大と爲す。何を以ての故に、遠く逝き獨り遊びと說くか。」と。報へて曰く、「心は恒に因緣を逐つて、前に隨つて住行す。心に當つて色・聲在り。爾の時、香・味・細滑の法有ること無し。心に當つて香在り。爾の時、色・聲・味・細滑の法有ること無し。心に味在り。色・聲・香・細滑の法無し。心に細滑在り。爾の時、色・聲・香・味の法無し。心に法有り。上の五事無し。當に色在るべき時には心を法本と爲す。猶王の行くや、[20]羽儀儐從、備はらざる有ること無きが如し。但王を以て名と爲す。此も亦是の如し。心、因緣を造つて十法の備はる有るも、但名を受けざるのみ。亦飛鳥の空中を飛行するは、其の六翮に依るが如し。然も但鳥を以て名と爲す。此も亦是の如し。心の無形なる亦窠窟無し。是は世人の肉眼の見る所に非ず。五陰に依止するも、陰、散ずれば

＊　法句經梵志品。

【一七】須拔(Subhadra)。須拔陀羅。佛陀最後の弟子。

【一八】優波崛(Upagupta)。優婆毱多。佛滅百年出世、阿育王の師。

【一九】十大地法。一、受。二、想。三、思。四、觸。五、欲。六、作。七、勝解。八、念。九、定。十、慧。

【二〇】羽儀儐從。王の行列の美しく飾り、臣が禮を厚うして扈從する貌。

ること無れ。能く此の行を具足する者は故らに名けて梵志と爲す。是の故に說いて曰く、

禪無くんば說くこと無く、　亦惡を念はざれ。　禪智淸淨なる、　是を梵志と謂ふと。

(五一二)比丘、塚間の衣をき、　欲の眞に非ざるを觀じ、　樹ある空閑處に坐する、　是を謂つて梵志と爲す。

塚間とは衣に四種有り。一には家を發してより著くる衣、出家の學者のもの、二には檀越の施衣、受けて守護するもの、三には百衲、諸の遺餘を拾ひしもの、四には塚間、汚穢不淨なるもの。如來の初めて學ぶや、家を發して衣を著け、欲の眞に非ざるを觀じて、六萬の夫人を捨て、轉輪聖王の位を棄てゝ出家學道し、閑靜の處に在り、樹王の下に住し、魔王を降伏し、十八億衆を破れり。能く此の衆德を具する者を故らに名けて梵志と爲す。是の故に說いて曰く、

比丘、塚間の衣をき、　欲の眞に非ざるを觀じ、　樹ある空閑處に坐する、　是を謂つて梵志と爲すと。

(五一三)人識知する無く、　語る無く說く無く、　體冷やかに煖無き、　是を梵志と謂ふ。

如來の出世したまふや、事として知らざる無く、事として包まざる無し。『語る無く說く無く、』とは永く狐疑を除いて猶豫を懷かず、諸の煩惱、結使、永く盡きて餘無く、甘露の滅に逮ぶなり。能く此の衆行を具するが故に、名けて梵志と爲す。是の故に說いて曰く、

人識知する無く、　語る無く說く無く、　體冷やかに煖無き、　是を梵志と謂ふと。

(五一四)※家居を棄捐し、　家の畏無く、　甘露の滅に逮ぶ、　是を梵志と謂ふ。

居家を作す所以は安處して人民、自ら身を生活するを得んとする者なり。(之は)衆結の屋室なり。是を以て聖人は人をして家を離れしめ、閑靜に在つて、甘露の滅を求めしむ。能く是の如き衆德を具する者を故らに梵志と曰ふ。是の故に說いて曰く、

※ 巴利法句經、二六の四〇四。小異。

所謂仙人とは[15]五通道を得て、群に在つて最も尊く、上に出づるもの有ること無く、内外に清徹して、衆瑕有ること無きものなり。仙とは亦名けて象と爲す。形體を長育し、獸中の最大なるものにして、意を執ること剛强にして能く衆敵を却く。無數は沐浴すとは、所謂沐浴とは[16]八解もて正に池に浴して、諸の塵垢を去り、結使有ること無きなり。如來は手を舒べ、手の及ぶ所の處に塵垢を著けしめず、惡人を伺察して其の便を得せしめず。是の故に說いて曰く、

仙人は龍中の上、大仙を最も尊しと爲す。無數の佛は沐浴したまふ。是を謂つて梵志と爲すと。

(五〇)所有盡く無く、流を渡つて漏も無く、此より岸を越ゆる、是を梵志と謂ふ。

彼の修行人、都て一切の諸法を越え、審諦分明に世の所有に悉く所有無きことを解せ。所謂流とは流に四名有り。一には欲流と名け、二には有流と名け、三には無明流と名け、四には見流と名く。此の四流を渡つて、然る後に乃ち無漏の行を得。羅漢・辟支は猶尙空・無相・(無)願・忍・煖・頂の法を思惟せよ。有漏の俗法を思惟すべしと雖も、意結は所在す。或は是の時、無漏を念ぜんと欲すること有れば、先づ無漏を念ぜよ。是を以て如來は深藏すれば則ち大闕有り。如來大聖は意を禪定に繫けて有より無に至る。無漏法に於て觀ずるに、未だ始めより闕有らず。諸の總持を得て、强記して忘れず。十力・四無畏・大慈大悲・三無礙道及び神足力、是を如來所修の法と謂ふ。羅漢・辟支、所修の法に非ず。是の故に說いて曰く、

所有、盡く無く、流を渡つて漏も無く、此より岸を越ゆる、是を梵志と謂ふと。

(五一)禪無くんば說くこと無く、亦惡を念はざれ。禪智淸淨なる、是を梵志と謂ふ。

彼の修行人は惡禪を念はざれ。夫れ入禪の人は無言無說にして常に善法を思へ。設し罵言せらるゝも、但其の法を守れ。若し相應禪及び中間禪を味はふを得ば、意を執つて之を守り、煩惱せらる

【一五】五通道。五神通のこと。
【一六】八解。八解脫の略。前卷二七八頁見よ。

爾の時、世尊、舍利弗と閑靜室に在つて獨り共に遊處したまふ。爾の時、人有り、已に命終を取つて[一四]中陰に處在して、精神移らざりき。佛、舍利弗に告げたまはく、『汝、今此の中陰中の識神を觀ぜよ。何許中より來ると爲すか、設しは復遷轉して何所に處くと爲すか。』と。時に舍利弗、此の人の何れより來ると爲し、何處へ趣くと爲すかを知らず。爾の時、世尊、舍利弗に告げて曰く、『汝、今見る所、諸佛の境界に及ばず。此の神の從來する所の處は無數の世界なり。汝の神力の能く見る所に非ず。』と。佛、舍利弗に告げたまはく、『汝、復此の精神の當に何處に生ずべきかを觀ぜよ。』と。時に舍利弗、復三昧に入る。而れども精神の湊る所を知らず。舍利弗、三昧より起ち、前んで佛に白して言く、『今日、入定し、遍く世界を觀ずるに、神の湊る所を知らず。』と。佛、舍利弗に告げたまはく、『此の神は今日、復當に一億の世界を過ぎて當に某甲の家、姓は某、字は某に生るべし。如來の所見は是れ聲聞・辟支佛の及ぶ所に非ず。宿命通を知るは唯如來等正覺のみ有つて、此の宿命通を得。』と。是の故に說いて曰く、

自ら宿命を識り、衆生の因緣を知る、如來佛は著すること無し。是を謂つて梵志と爲すと。

(四八)盡く一切の結を斷じ、亦熱惱有らざる、如來佛は無著なり。是を謂つて梵志と爲す。

諸有衆生は一切の結使を斷ぜよ。羅漢、辟支佛は結使を斷ずると雖も、由相似の結の有り在るがごとし。諸佛世尊には相似も有ること無し。是の故に說いて曰く、

盡く一切の結を斷じ、亦熱惱有らざる、如來佛は無著なり。是を謂つて梵志と爲すと。

(四九)仙人は龍中の上、大仙を最も尊しと爲す。無數の佛は沐浴したまふ。是を謂つて梵志と爲す。

【一四】中陰。中有ともいふ。此に死し、彼に生ずるまでの中間の存在。

衆智の妙門をや。天龍鬼神は能く我が處を知らんや。」と。是の故に說いて曰く、

　自ら識知せざるは、　天と揵沓和なり。　無量を知り觀ずる、　是を梵志と謂ふと。

　(四五)自ら宿命を識り、　天人の道を見、　苦を生ずる源を知る、　智心は永寂なり。

自ら宿命、無數劫の事を識り、地獄、天上の事を觀知するは餘者は能はず。唯、佛如來至眞等正覺のみ有つて、三千大千世界を觀ずること、掌に珠を觀るが如し。苦を生ずる源を知り、其の本を究暢せば、捷疾の智、速かに羅漢道を成じ、意に念ずる所に隨つて流滯無からん。是の故に說いて曰く、

　自ら宿命を識り、　天人の道を見、　苦を生ずる源を知る、　智心は永寂なりと。

　(四六)自ら[一一]心解脫を知り、　欲を脫して所著無くんば、　[一二]三明以て成就す。　是を謂つて梵志と爲す。

彼の行人、心に念ずる所を知つて、解脫と解脫ならざるものとを皆悉く明知すれば、欲想の諸行は永く解脫を得ん。所謂三明とは自ら宿命と天眼と漏盡とを識るなり。若し是の如き行を具足せば、名けて梵志と曰ふ。是の故に說いて曰く、

　自ら心解脫を知り、　欲を脫して所著無くんば、　三明以て成就す。　是を謂つて梵志と爲すと。

　(四七)自ら宿命を識り、　衆生の因緣を知る、　如來佛は著すること無し。　是を謂つて梵志と爲す。

是の時、如來、無數の事を知りたまふ。衆生の性行を觀ずることも、一一に分明にして、生者、死者皆悉く了知したまふ。猶天雨るや、普く世界を潤すが如し。是の時、世尊、生死の類を觀ずることも亦復是の如く、生者死者、[一三]觀練せざる無し。

【一一】心解脫(Suvimukt citta)。解脫を二分して心解脫と慧解脫とす。心解脫は心に情意的欲愛を離るゝこと。

【一二】三明。羅漢にあつては宿命明・天眼明・漏盡明三をいへども、佛に於ては之を三達智といふ。

【一三】觀練。みてしらべる。

て梵志と爲す。是の故に說いて曰く、

城は塹を以て固めを爲せば、　往來に其の苦を受く。　彼岸に適渡せんと欲せば、　背て他語を受けず、　唯能く滅して起さゞれ。　是を謂つて梵志と名くと。

(四二)人能く愛を、　今世にも後世にも斷じ、　有愛已に盡くる、　是を梵志と謂ふ。

愛根未だ盡きざれば、道に至らず。愛根已に盡くれば、乃ち能く道を爲む。道を欲求する者、三界の結使を斷ぜざれば、道に至らず。能く愛根を斷じ、然る後に乃ち道に至る。能く此を具足する者は故らに名けて梵志と爲す。是の故に說いて曰く、

人能く愛を、　今世にも後世にも斷じ、　有愛已に盡くる、　是を梵志と謂ふと。

(四三)人希望の、　今世にも後世にも無く、　以て希望無き、　是を梵志と謂ふ。

所謂希望とは天下萬物は皆人の希望する所、然も此の希望の故に未だ斷絕せず、如今身を現じ、未だ死せずして、世に見存す。正しく後世に其の命終を取つて、身死し神逝かば、復希望も無からん。能く此の如き功德を具足する者を名けて梵志と曰ふ。是の故に說いて曰く、

人希望の、　今世にも後世にも無く、　以て希望無き、　是を梵志と謂ふと。

(四四)自ら識知せざるは、　天と揵沓和なり。　無量を知り覩ずる、　是を梵志と謂ふ。

佛如來、坐禪したまふの時に當つて、諸天世人、竟に佛の今所在を爲すを知らず。一比丘有り、名けて多耆奢と曰ふ。往いて世尊の所に至り、便ち此の偈を以て如來を讃して曰く、

人中の尊に歸命したてまつる、　人中の上に歸命したてまつる。　不審、今世尊、　何等の禪にか因ると爲す。　唯願はくは天中の天よ、　其の教義を敷演したまへと。

如來、自ら梵行の中、我に出づる者有ること無きを說きたまはく『其の然るを知る所以は禪解脫、正受定意は猶是れ世の常法なり。諸天、龍神は我が所在を知る能はず。況んや、我が當行の佛事、

(三九)後にも前にも、　及び中にも有ること無く、　操ること無く捨つること無き、　是を梵志と謂ふ。

猶人有るが如し。未來世に於て衆の惡行を作さゞらんには已に作さず、當に作さゞれ。過去世に於ても、衆の惡行を作さゞらんには、已に衆の惡行を作したりとも、已に作さず、當に作さず、現に作さゞれ。及び其の中間にも衆の惡行を作したりとも、衆の惡行を作さゞらんには、已に作さず、當に作さず、現に作さゞれ。能く此の衆の惡行を捨つる者を故らに名けて梵志と爲す。是の故に說いて曰く、

後にも前にも、　及び中にも有ること無く、　操ること無く捨つること無き、　是を梵志と謂ふと。

(四〇)婬・怒・癡と、　憍慢と諸惡とを去ること、　鍼の芥子を貫くがごとき、　是を梵志と謂ふ。

彼の行人、欲もて心を汚すことを爲せば、虛寂の道に至るを得ざるも、憍慢と諸の不善法を除去すれば、便ち漸やく進んで泥洹境に至るを得るが如し。猶鍼もて芥子を貫くに、終に得べからざるが若し。彼の心も亦復是の如し。婬・怒・癡の爲めに繫がれて、拘礙せられざれ。能く此の行を具する者は是を梵志と謂ふ。是の故に說いて曰く、

婬・怒・癡と、　憍慢と諸惡とを去ること、　鍼もて芥子を貫くがごとき、　是を梵志と謂ふと。

(四一)城は塹を以て固めを爲せば、　往來に其の苦を受く。　彼岸に適渡せんと欲せば、　背て他語を受けず、　唯能く滅して起さゞれ。　是を謂つて梵志と名く。

生死は久遠にして苦を涉ること無數なり。唯禪定の人のみ有つて、此の生死の難を越えて、邪疑を去り、意に復猶豫無く、煩惱の結使を捨てゝ清淨の結使を受く。能く此を具する者を故らに名け

諸の人間有り。乞索して自ら済ひ、我無く著無く、梵行を失せず、智の無崖なるを說く、是を梵志と謂ふと。

（三六）若し能く欲を棄て、家を去り、愛を捨て、以て欲漏を斷ずれば、是を梵志と謂ふ。

彼の行人の如し。盡く能く欲を斷じ、道門に親近し、愛して捨てず。或は梵志有り。未だ究竟を盡さず、欲意未だ斷ぜずして、五樂に貪著す。梵志と稱すると雖も、欲を離れず。諸有學人、永く欲漏を滅して恩愛を習はざれ。能く此の行を具足する者を故らに名けて梵志と爲す。是の故に說いて曰く、

若し能く欲を棄て、家を去り愛を捨て、以て欲漏を斷ずる、是を梵志と謂ふと。

（三七）人を慈愍し、驚懼せざらしめ、害せず益有る、是を梵志と謂ふ。

衆行の要は四等を本と爲す。恒に當に慈愍して衆生に加被すべし。恐懼有り、憂惱を懷く者を見ば、便ち往いて恤化し、永く安隱無害に處らしめ、人に於て供養を興致せよ。能く此の行を具する者は名けて梵志と曰ふ。是の故に說いて曰く、

人を慈愍し、驚懼せざらしめ、害せず益有る、是を梵志と謂ふと。

（三八）怨を避けて怨まず、傷損する所無く、其の邪僻を去れるを、故らに梵志と曰ふ。

行人、意を執るに志操同じからざるも、心を用ふること平等なれ。設し怨家を見るも、視ること赤子の如く、慈心普等にして平均無二なれ。猶忍心は地の如く、平等なる秤の如く、蜎飛蠕動、蚑行喘息も視ること己身の如く、之を念ふること父の如く、之を念ふこと母の如く、之を念ふこと子の如く、之を念ふこと身の如くにして異ること有ること無きが若かれ。能く此の衆行を具する者を名けて梵志と曰ふ。是の故に說いて曰く、

怨を避けて怨まず、傷損する所無く、其の邪僻を去れるを、故らに梵志と曰ふと。

修行の比丘も亦復是の如く、婬・怒・癡、五結の爲めに縛されざれ。能く此の行を具する者を故らに名けて梵志と爲す。是の故に說いて曰く、

月の清明にして、虛空に懸處するが如く、欲に染せられざる、是を梵志と謂ふと。

(三三)*諍を避けて諍はず、犯さるゝも惱らず、惡來るも善もて待つ、是を梵志と謂ふ。

彼の入定の人、諍訟を起さず、禪定一意に念待すれば喜安なり。自ら[九]五行を守り、具足するを乃ち名けて定と爲す。設し惡意有つて、來り相向ふ者をも常に善を以て待て。是の故に說いて曰く、

諍を避けて諍はず、犯さるゝも惱らず、惡來るも善もて待つ、是を梵志と謂ふと。

(三四)*微妙の慧を解し、道と不道とを辨じ、[一〇]上義を體行する、是を梵志と謂ふ。

諸有人、籌量算計して萬物を圖度し、義趣を分別し、一一、分明に其の道趣を辨ぜよ。就くべきは就くを知り、捨つべきは捨つるを知り、上義を體行せよ。所謂上義とは滅盡泥洹是れなり。能く此の法を具足する者を故らに名けて梵志と爲す。是の故に說いて曰く、

微妙の慧を解し、道と不道とを辨じ、上義を體行する、是を梵志と謂ふと。

(三五)諸の人間在り。乞索して自ら濟ひ、我無く著無く、梵行を失せず、智の無崖なるを說く、是を梵志と謂ふ。

或は貴族姓子有つて、四姓中より出家學道するも、憍慢の意を捨て、高を去り、下に就き、榮冀に著せざれ。在在處處に周旋往來し、興して佛事行らしめ、三寶を恭奉せよ。若し衣食・床臥具・病瘦醫藥を得ば、便ち呪願を爲し、彼の施家をして、世世に福を受けしむ。或は神足を以て騰つて虛空に在り、十八變を作せば、施主、見る者、歡喜せざる莫し。便ち法を受けてより皆解悟を得。能く此の行を具する者を故らに名けて梵志と爲す。是の故に說いて曰く、

---

* 法句經梵志品。巴利法句經、二六の四〇六。

【九】五行。一に布施行、二に持戒行、三に忍辱行、四に精進行、五に止觀行。

* 法句經梵志品。巴利法句經、二六の四〇三。

【一〇】上義。涅槃、最高理想。

染著する所無く、三界なる欲界・色界・無色界に著せず。能く此を解して具足する者を乃ち梵志と名く。是の故に說いて曰く、

罪と福とに於て、兩行永く除き、三處に染せらるゝ無き、是を梵志と謂ふと。

(三〇)猶衆の華葉の如く、鍼を以て芥子を貫くがごとく、・欲の爲めに染せられざる、是を謂つて梵志と名く。

猶蓮華の葉の塵水を受けざるが如く、彼の修行人も亦復是の如かれ。以て欲より離るれば、色・聲・香・味・細滑の法に著せず。猶鍼を以て[五]藍豆と芥子とを貫かんと欲するも、獲べきこと難きが若し。彼の修行人は婬欲有ること無れ。其の要を略說するに、惡の爲めに染せられざれ。是の故に說いて曰く、

猶衆の華葉の如く、鍼を以て芥子を貫くがごとく、欲の爲めに染せられざる、是を謂つて梵志と名くと。

(三一)*心喜び垢無く、月の盛んに滿つるが如く、謗毀以て除ける、是を梵志と謂ふ。

猶月の盛んに滿つるは清淨無瑕穢にして[六]五翳有ること無く、衆星、圍遶し、大光明を放つて照さゞる所無きが如し。彼の比丘、清淨なる行人も永く五翳を除き、復[七]五結無く、心に解脫を得、諸の道品を覺れば、衆定正受して自ら圍遶せられ、中に於て獨尊にして衆瑕有ること無く、世の八法を捨て、毀譽以て除かん。能く此の行を具する者は故らに名けて梵志と爲す。是の故に說いて曰く、

心喜び垢無く、月の盛んに滿つるが如く、謗毀以て除ける、是を梵志と謂ふと。

(三二)月の清明にして、虛空に懸處するが如く、欲に染せられざる、是を梵志と謂ふ。

秋時、月、[八]五事の爲めに翳されず、清淨無瑕にして大光明を放ち、所として照さゞる靡きが如く、

【五】藍豆芥子。共に小さき實を持てり。

* 法句經梵志品。巴利法句經二六の四一三。

【六】五翳。五蔽に同じ。前卷三二七頁見よ。

【七】五結。一、貪結。二、恚結。三、慢結。四、嫉結。五、慳結。

【八】五事。五翳なり。

彼の行を習ふの人、内外を解知すれば、結使無く欲界・色界・無色界に著せず。能く此の如き梵行を具足する者を乃ち名けて梵志と爲す。是の故に說いて曰く、

彼に適く彼無く、彼彼以て虛しと、三處に染まざる、是を梵志と謂ふと。

(二一六)能く家業を捨て、愛欲を拔き、貪無く足ることを知る、是を梵志と謂ふ。

夫れ人、家を離るれば、世俗と事に從ふこと莫れ。正しく出家するも、其の法を修めず、戒を毀ちて精進せず、亦多聞ならざれば亦坐より起つて事に從ふに應ず。更に當來の利養を思惟せざれ。能く此の如きを具する者を乃ち梵志と名く。是の故に說いて曰く、

能く家業を捨て、愛欲を拔き、貪無く足ることを知る、是を梵志と謂ふと。

(二一七)如今知る所あり、其の苦際を究め、復欲有ること無き、是を梵志と謂ふ。

現法中に於て能く微妙を分別して衆惡有ること無く、苦は是れ衆病の源首なることを知つて能く此を斷ずる者は乃ち妙に應じ、現法中に於て欲意と共に相應せず。瞋恚愚癡永く盡きて餘無く、諸の縛著を離る。能く此の如きを具する者を名けて梵志と爲す。是の故に說いて曰く、

如今知る所あり、其の苦際を究め、復欲有ること無き、是を梵志と謂ふと。

(二一八)罪と福とに於て、*兩行永く除き、憂無く塵無き、是を梵志と謂ふ。

正しく福有るも、世俗有漏の善本功德は、人身と爲るを得せしむ。猶生老病死を脫せざるが故なり。又復罪を作り、三惡の本を種え、生死を經歷す。罪と福との二は貪るに足らず。兩行永く除き、復塵垢無く、能く此の行を具する者、是を梵志と謂ふ。是の故に說いて曰く、

罪と福とに於て、兩行永く除き、憂無く塵無き、是を梵志と謂ふと。

(二一九)罪と福とに於て、兩行永く除き、三處に染せらる無き、是を梵志と謂ふ。

福と罪とに欲無ければ、染せらるゝ無し。[四]中間に禪樂し、無色に禪樂して、行人、盡く捨つれば、

---

* 法句經梵志品。

【四】中間。色界。

彼の行を習ふ人は、心を持すること牢固に、毀譽にも動かざれ。來る者有るを見るも孚に用つて歡ばず、設し去る者を見るも亦用つて憂へず。若しは大衆に在り、若しは復衆を離るゝも、心恒に平等にして亦高下無し。是の故に說いて曰く、

　來るも歡と作さず、　去るも亦憂へず、　聚に於て聚を離るゝ、　是を梵志と謂ふと。

(一二二)來るも亦歡ばず、　去るも亦憂へず。　憂無く清淨なる、　是を梵志と謂ふ。

若しは愛念せられ、愛念せられざるも、亦用つて歎と作さず。然る所以は心染著し、因緣を興起せんことを恐るゝなり。設し去る者を見ば、便ち自ら念言すらく、「我は彼の人に於て、各犯す所無し。」と。內外清淨にして意を息めて起さざるを亦名けて梵志と爲す。是の故に說いて曰く、

　來るも亦歡ばず、　去るも亦憂へず。　憂無く清淨なる、　是を梵志と謂ふと。

(一二三)*以て恩愛を斷じ、　家を離れて欲無く、　愛有已に盡きたる、　是を梵志と謂ふ。

彼の行人の道を修習するが如し。永く恩愛を斷じ、離家無欲にして遠遊無礙なれ。諸の有愛を盡し、三界の漏を缺け。能く此の如きを具足する者を乃ち梵志と名く。是の故に說いて曰く、

　以て恩愛を斷じ、　家を離れて欲無く、　愛有已に盡きたる、　是を梵志と謂ふと。

(一二四)彼に適く彼無く、　彼彼以て無しと、　貪欲を捨離せる、　是を梵志と謂ふ。

所謂彼とは[二]外の六入なり。所謂彼無しとは[三]內の六入なり。行人、意を執つて、內外の諸情を觀ずるに斯れ悉く虛寂なり。貪婬を捨離して六情を興さざれ。此の如き衆行の本を具足する者を乃ち名けて梵志と爲す。是の故に說いて曰く、

　彼に適く彼無く、　彼彼以て無しと、　貪欲を捨離せる、　是を梵志と謂ふと。

(一二五)彼に適く彼無く、　彼彼以て虛しと、　三處に染まざる、　是を梵志と謂ふ。

* 法句經梵志品。

[二] 外の六入。六根の對境たる六境。
[三] 內の六入。六根又は六識。

卷の第三十

梵志品第三十四の二

(一八)*若し侵欺せらるゝも、　但念じて戒を守り、　身を端して自ら調ふる、　是を梵志と謂ふ。

若し復人有り、侵欺せらるゝも、惡を興し、瞋怒の意を懷有せず、戒を守り、多聞にして意識を降伏せよ。身正しければ、影直く、心平なれば、道存す。是の故に說いて曰く、

若し侵欺せらるゝも、　但念じて戒を守り、　身を端して自ら調ふる、　是を梵志と謂ふと。

(一九)*世の善惡とする所、　修短と巨細とを　取る無く與ふる無き、　是を梵志と謂ふ。

世俗の方略の事に若干有り。人情を察せんと欲せば、先づ其の語を採れ。善を說き、惡を說くも懷に記せず、長短廣狹有るを見ず、亦復取る有ると與ふる有るとを見ざれ、是の如きの行を具足する者、是を梵志と謂ふ。是の故に說いて曰く、

世の善惡とする所、　修短と巨細とを、　取る無く與ふる無き、　是を梵志と謂ふと。

(二〇)身を行本と爲す。　口と意とにも犯すこと無く、　能く三處を辨ずる、　是を梵志と謂ふ。

身に殺を行ぜず、口に惡罵せず、意に嫉妬せず、五鼎沸の世に於て能く此の三行を具する者は乃ち名けて梵志と爲す。是の故に說いて曰く、

身を行本と爲す。　口と意とにも犯すこと無く、　能く三處を辨ずる、　是を梵志と謂ふと。

(二一)來るも歡と作さず、　去るも亦憂へず、　聚に於て聚を離るゝ、　是を梵志と謂ふ。

---

* 法句經梵志品。

* 法句經梵志品。小異。
【一】修短。長短。

如し。音響清淨なれば、聽く者は樂しく受け、成就する所多し。淨うして過失無ければ、人を觸嬈せず。是の故に說いて曰く、

身と口と意と、淨うして過失無く、　能く三行を攝むる、　是を梵志と謂ふと。

（一七）*罵られ擊たるゝも、　默受して怒らざれ。　忍辱の力有る、　是を梵志と謂ふ。

人を擊たば、擊たるゝを得、人を罵らば、罵らるゝを得。皆忍ばざるに由つて此の患害を致す。夫れ能く忍ぶ者は戰中の上と爲す。忍は良藥たり、能く衆病を愈す。若し罵る者有らば、默然として對へざれ。是の故に說いて曰く、

罵られ擊たるゝも、　默受して怒らざれ。　忍辱の力有る、　是を梵志と謂ふと。

* 法句經梵志品。巴利法句經二六の三九九。

意定つて移らず、一切諸法の本を覺悟し、梵行已に立ち、所作已に辦じ、更に復有を受けず、清淨行を修して遺失する所無きなり。是の故に說いて曰く、

惡を出づるを梵志と爲し、　正に入るを沙門と爲す。　我が衆の穢行を棄つる、　是を則ち捨家と爲すと。

(一四)人幻惑の意無く、　慢無く愚惑無く、　貪無く我想無き、　是を謂つて梵志と爲す。

人の世に在るや、幻惑を懷かざれ。梵志、自ら謂つて言く、「百劫に一たび大海の中を過ぐれば、自然に幻惑有りて天下の人を食噉す。」と。諸の憍慢を去り、想著を興さゞれ。如來至眞等正覺は世の人法を離れ、世に染まず。亦名けて比丘と爲し、亦名けて沙門と爲し、亦佛と名く。是の故に說いて曰く、

人幻惑の意無く、　慢無く愚惑無く、　貪無く我想無き、　是を謂つて梵志と爲すと。

(一五)我梵志と說かず。　父母に託して生るればとて、　彼の衆の瑕穢多きを　滅するを則ち梵志と爲す。

所謂梵志とは父母より生じて諸の瑕穢多し。或は復出家して諸の世俗を離れ、清淨行を修して選擇施無く、平等無二にして雜想施をせず。或は復施す時に、國王と作り、天に生ぜんことを求むる、此を雜想の施と名く。雜想無きの施は盡く一切の爲めにし、自ら己の爲めにせざるなり。是の故に說いて曰く、

我、梵志と說かず。　父母に託して生るればとて、　彼衆の瑕穢多きを、　滅するを則ち梵志と爲すと。

(一六)身と口と意と、*　淨うして過失無く、　能く三行を攝むる、　是を梵志と謂ふ。

言を出すに柔和にして初めより罵詈すること無ければ、義趣を分別すること、掌に珠を觀るが

* 法句經梵志品。巴利法句經、二六の三九一。

是を謂つて梵志と爲す。

夫れ人、沐浴するも、腹裏の垢は去ること能はず。盡く惡法を除き、更に亦造らざるを乃ち名けて梵志と爲す。是の故に說いて曰く、

水の淸淨なるを以てせざるも、　多く人有つて沐浴して、　能く弊惡の法を除ける、　是を謂つて梵志と爲すと。

（一一）＊剃るを沙門と爲すに非ず。　吉を稱するを梵志と爲す。　能く衆惡を滅するを謂つて、
是を則ち道人と爲す。

所謂沙門とは未だ必ずしも鬚髮を剃除せず、內に正行有つて律法に應ふは乃ち沙門たるに應ふ。夫れ梵志と爲すは終日吉を稱して梵天に生るゝを得る者なり。見る人も、盡く當に彼處に生ずべし。但彼は吉を稱して梵天に生るゝなり。「能く衆惡を滅するを謂つて」とは淸淨行を修するなり。是の故に說いて曰く、

剃るを沙門と爲すに非ず。　吉を稱するを梵志と爲す。　能く衆惡を滅するを謂つて、　是を則ち沙門と爲すと。

（一二）＊彼は二無きを以て、　淸淨無瑕にして、　諸の欲結解く。　是を梵志と謂ふ。

盡く一切弊惡の法を捨て、周旋の處に出入行來し、言は殺に及はず、一切を害せず、傷損する所無く、淸淨無瑕にして永く諸縛無し。是の故に說いて曰く、

彼は二無きを以て　淸淨無瑕にして、　諸の欲結解く。　是を梵志と謂ふと。

（一三）＊惡を出づるを　梵志と爲し、　正に入るを沙門と爲す。　我が衆の穢行を棄つる、
是を則ち捨家と爲す。

梵志の行は諸の惡法を去り、內外淸淨にして衆穢永く盡き、悕望を懷き、人に貢高せざるなり。

＊法句經梵志品。

＊法句經梵志品。小異。

＊法句經梵志品。

す。迷を捨て、道に就き、其の法に惑はざれ。」と。是の故に說いて曰く、

愚者は鬚髮と　幷及に床臥具とを受く。　內に貪濁の意を懷き、　外を文飾するも、　何をか求めんと。

（七）*[三二]弊惡を被服し、　躬ら法を承けて行ひ、　閑居思惟する、　是を梵志と謂ふ。

修行の人は麁惡を被服し、文飾を著けざれ。法を思惟して行、貪求する所無れ。言を節し、語を省き、彼此と鬪亂せざれ。是の故に說いて曰く、

弊惡を被服し、　躬ら法を承けて行ひ、　閑居思惟する、　是を梵志と謂ふ。と。

（八）*癡の往來して、　塹に墮して苦を受くるを見、　單り岸を渡らんと欲して、　他語を好まず、　唯滅して起さざる、　是を梵志と謂ふ。

夫れ人、癡に執して意開悟せず、亦復、次を越えて證を取ること能はずして恒に嫌疑不淨の地に在る、此は則ち淨行の人に非ず。諸の有漏を斷じ、永く盡して餘無き、是を梵志と謂ふ。是の故に說いて曰く、

癡の往來して、　塹に墮して苦を受くるを見、　單り岸を渡らんと欲して、　他語を好まず、　唯滅して起さざる、　是を梵志と謂ふと。

（九）*流を截つて渡り、　無欲なること梵の如く、　[三三]行の以て盡くるを知る、　是を梵志と謂ふ。

若し水を以て其の身を沐浴せしめ、道に至るを得ば、水性の類は皆道に稱はん。但沐浴するのみにて道に至るに非ず。諸法を分別し、其の義を審諦にすれば、清淨無瑕にして衆結習行永く盡きて餘無けん。是の故に說いて曰く、

流を截つて渡り、　無欲なること梵の如く、　行の以て盡くるを知る、　是を梵志と謂ふと。

（一〇）水の清淨なるを以てせざるも、　多く人有つて沐浴して、　能く弊惡の法を除ける、

---

* 法句經梵志品。巴利法句經、二六の三九五。

【三二】弊惡。弊惡なる衣。糞掃衣と稱す。沙門梵志は塵捨場より拾ひ集めし弊惡なる布片を縫合せて衣とすべきなり。

* 法句經、梵志品。巴利法句經二六の四一四。

* 法句經梵志品。巴利法句經、二六の三八三。

【三三】行。因緣和合によつてつくられたるもの。

り。

初めて行を習ふの人は學次に在りと雖も、未だ分別して道果を思惟する能はず。一一に明了にし、其の緒を失せずんば、未だ獲ざる者を獲、未だ得ざる者を得ん。是の故に說いて曰く、

若し愛に倚つて、心に著する所無く、已に捨て已に正しくば、是れ苦を滅終するなりと。

(五)諸有ものに倚る所無く、恒に正見を習ひ、常に有漏を盡さんことを念ぜる、是を謂つて梵志と爲す。

猶大象の寸孔より出でしが、城門より出づることを得んと欲して、象、容らざるが如し。衆人、之を見て、各各驚愕して彼の象に謂つて曰く『汝、今寸孔より出でゝ往來無難なり。然るに城より出でんと欲して、反つて更に受けざるか。』と。是を以て聖人は借つて以て喩と爲す。衆生の類、家を出づるを得、道法を修習すると雖も、有漏を盡し、無漏を成じて心解脫、智慧解脫する能はざるあり。是の故に說いて曰く、

諸有ものに倚る所無く、恒に正見を習ひ、常に有漏を盡さんことを念ぜる、是を謂つて梵志と爲すと。

(六)愚者は鬚髮と、并及に床臥具とを受く。內に貪濁の意を懷き、外を文飾するも何をか求めん。

愚者は自覺せざれば、其の髮を長養す。髮を剃る所以は其の結使を剃るなり。但髮を剃るのみに非ざるなり。愚人は迷に執して其の髮を長養し、以て文飾と爲す。過去恒沙の諸佛の法は各各相授けて、鬚髮を剃除し、法服を齊整す。古より之有つて、今日に適るに非ず。今日、愚人は臥具に貪著す。然も我が法中、制するに三衣を以てし、遺餘を畜へしめず。樹下塚間、此を以て常と爲す。廣說すること其の本の如し。『內に邪見を懷き、貪濁の意を興し、外に自ら文飾して謂つて無瑕と爲

の履の價直億萬なるを既すればなり。吾、今、江を渡つて所在を求覓せん。』と。即ち江水を渡りしに、遙かに世尊の光明の炳然たるを見たり。世尊の所に至り、頭面もて足を禮し、世尊に白して言く、『唯然り、世尊、頗し夜輪童子の此を遊んで過りしを見しや。』と。佛、神足を以て彼の夜輪比丘を隱し、父をして見ざらしめ、佛、長者に告げたまはく、『汝、今、子を求めば、自ら求むるに如かず。汝、但速かに坐せよ。吾、汝の與に法を說かん。』と。長者、尋で坐し、佛、爲めに說法したまふ。即ち坐上に於て諸の塵垢盡き、法眼淨を得たり。爾の時、世尊、即ち三昧を捨て父をして子を見せしむ。父、子に告げて曰く、『汝、速かに家に還れ。汝の母、愁苦して汝の還らざるを恐る。』と。佛、長者に告げたまはく、『止みね、止みね。長者よ、斯の語を作すこと勿れ。云何か長者、如し修行の人有り、本、學地[二九]に在つて愛欲未だ盡きざるも、後には無學[三〇]を得て學地を離れん。無學の人をして學法を習はしめんと欲せんには長者の意、云何か爾るべきを爲さんや。』と。長者、對へて曰く、『不とよ。世尊。』と。佛、長者に告げたまはく、『汝が子、今日、以て無著を得、無學地に住せり。長者、當に知るべし、以て無著を得たることを。焉んぞ家に還るを得て、五欲を習はんや。』と。長者、之を聞いて歡喜踊躍し、即ち起つて子に禮し、五體投地す。自ら眞人に歸して永く所著無し。爾の時、世尊、即ち長者の與に斯の偈を說きたまはく、

身を捨てゝ倚る無く、　異言を誦せざれ。　兩行以て除ける、　是を梵志と謂ふと。

(三)今世に行淨ければ、　後世に穢無し。　習無く捨無き、　是を梵志と謂ふ。

人は邪見に執し、死に至るも改めざるものなり。計常の人は斷滅の見と相應せず、斷滅の見は計常の見と相應せず。能く此らの見を捨てゝ三世に著せざれ。是の故に說いて曰く、

今世に行淨ければ、　後世に穢無し。　習無く捨無き、　是を梵志と謂ふと。

(四)若し*愛に倚つて、　心に著する所無く、　已に捨て已に正しくば、　是れ苦を滅終するな

【二九】學地。有學地、學ぶべきものある修學中の地位。四果の中の前三果の位。
【三〇】無學。四果の第四阿羅漢果。學道圓滿して學ぶべきもの無きなり。

＊ 法句經沙門品。巴利法句經二六の三九、

世尊、自今以後、諸の道人に浴池に在つて沐浴して淸淨ならんことを聽させたまへ。』と。佛、比丘に告げたまはく『此の法を以ては道に至るを得ず。』と。

(一二)身を棄てゝ倚る無く、 異言を誦せざれ。 兩行以て除ける、 是を梵志と謂ふ。

昔、佛、波羅奈國仙人鹿野苑中に在せり。爾の時、世尊、五比丘を度し、未だ數日を經たまはず。爾の時、波羅奈國に一長者有り。名けて夜輸と曰ふ。種姓は豪族、饒財多寶なり。顏貌端正にして世に雙無し。欻ち一日の中に非常觀を得、自ら家裏の男女の屬を觀ずるに、斯は死身の如く、一も念ずべき無し。己が形體を視るに、塚間と異る無し。卽ち坐より起つて並びに是の說を作さく『惑愚至深なれば、幻化を別たず。』と。爾の時、長者、卽ち自ら家を捨てゝ逃走し出城す。琉璃の履屣價直一萬なるを脫し、卽ち江水を渡つて、世尊に奔趣す。頭面もて足を禮し、一面に在つて立ち、尋で佛に白して言く『世尊よ、世事多く、變易して一に非ざるが故に、萬物幻化して恃怙すべからず。我、今自ら歸して無爲安樂の處を求めんと欲す。』と。佛、長者に告げたまはく『善い哉、善い哉。族姓子よ、賢聖法中の甚大なる寬弘は正に是れ汝の身の願樂する所なり。』と。爾の時、長者、如來の教を聞いて、歡喜踊躍、自ら勝ふる能はず。爾の時、世尊、漸やく與に說法したまはく『所謂論とは施論・戒論・生天の論なり。欲不淨想の漏を大患と爲す。』と。爾の時、長者、斯の法を聞き已つて卽ち坐上に於て、諸の塵垢盡き、法眼淨を得。彼以て法を見、法を得、諸法を成就せり。卽ち坐より起つて重ねて自ら歸命し、頭面もて足を禮し、世尊に白して言く『唯然り、天中の天[三八]よ、道次に在つて出家學道するを聽させたまへ。』と。佛、長者に告げたまはく『善來、比丘よ。』と。鬚髮、自ら落ち、自然に法服し、重ねて說法を聞いて羅漢道を得たり。爾の時、長者の家中の父母・兄弟・男女・儀從嚴駕し、象馬もて追跡し、夜輸長者を求覓す。江水の側に到つて琉璃の履を見る。父、自ら思惟すらく『我が子の江水を將渡せしや必然にして疑はず。其の然るを知る所以は今此に琉璃

【三八】天中の天。世尊、佛陀。

比丘の修行するや、樂に處るも以て歡と爲さず、難に遭ふも以て苦と爲さゞれ、利衰毀譽も心を増減すること無れ。閑靜處に在つては一意に端坐し、心を流馳せざれ。諸の結使を斷じ、念に想著あること無れ。是の故に說いて曰く、

比丘は憂にも憂ふることを忍び、　床臥具を分別して、　當に無放逸を念じ、　有愛を斷じて餘無からしむべしと。

梵志品第三十四の一

(一)所謂梵志とは　但倮形のみならず、　嶮に居り棘に臥するをも、　名けて梵志と爲す。

爾の時、一比丘有り。世尊の所に至る。頭面もて足を禮し、世尊に白して言く、『唯然り、世尊、自今以後、諸弟子の皆悉く倮形にして衣服を著けざることを聽させたまへ。』と。世尊、告げて曰く、『咄、愚の戾むる所、法律に應はず。此れ梵志の法なるも、是れ內藏の修行する所に非ず。人、慚愧を懷くは便ち尊卑高下有り、父母兄弟有るを知ればなり。何爲れぞ、復倮形を世に行ずるを說かんや。』と。爾の時、復一異比丘有つて佛の所に詣る。頭面もて足を禮し、世尊に白して言く、『唯然り、世尊、自今以後、諸の道人、各ゝ頭髮を留めんことを聽させたまへ。』と。佛、比丘に告げたまはく、『咄、愚の戾むる所は法律に應はず。此れ梵志の法なるも、是れ內藏の修行する所に非ず。』と。復異比丘有り。世尊の所に詣り、頭面もて足を禮し、前んで世尊に白して言く、『唯然り。世尊、諸の道人に皆白灰を身に塗らんことを聽させたまへ。』と。復異比丘有り。世尊に白して言く、『自今以後、諸の道人に氣を服して、食はざることを聽させたまへ。』と。復異比丘有り。世尊に白して言く、『自今以後、諸の道人に倮形にして露地に臥せんことを聽させたまへ。』と。世尊、告げて曰く、『咄、愚の戾むる所や。』と。復異比丘有り。頭面もて足を禮し、世尊に白して言く、『唯然り。

(三九)愛生じて流溢すること、　猶蛇の毒藥を含むがごとし。　比丘は彼此に勝つこと、　蛇の故皮を脫ぐが如かれ。

人、愛に隨へば、意自ら禁制せず。漸やく欲界より乃ち三有に至り、五趣に流轉し、四生を離れず。『比丘は彼此に勝つこと』と論ずる所以は彼とは六塵、此とは六情なり。比丘の能く彼此を滅することは蛇の故皮を脫するが如かれとなり。

(四〇)諸有想觀を斷じ、　内に其の心を造らざる、　比丘は彼此に勝つこと、　蛇の故皮を脫ぐが如し。

觀に三種有り。欲觀・恚觀・無明觀なり。能く此を滅する者を乃ち謂つて道士と爲す。是の故に說いて曰く、

諸有想觀を斷じ、　内に其の心を造らざる、　比丘は彼此に勝つこと、　蛇の故皮を脫ぐが如しと。

(四一)戒を持つを比丘と謂ふ。　有を空じて乃ち行ずるを禪といふ。　空を行じて其の源を究むれば　無爲にして最も樂と爲す。

比丘、行を執らば、威儀を以て本と爲せ。戒むるに檢形を以てし、服るに法衣を以てせよ。行ふ所の法則は先聖に違はざれ。有を空じて定意なれば然る後に名けて禪と爲す。[三七]假號をも捨てず。如しは彼の行人、受くれば則ち信解し、其の義を分別し、無爲快樂の處を求め、飢寒苦惱の患有ること無れ。是の故に說いて曰く、

戒を持つを比丘と謂ひ、　有を空じて乃ち行ずるを禪といふ。　空を行じて其の源を究むれば、　無爲にして最も樂と爲すと。

(四二)比丘は憂にも憂ふることを忍び、　床臥其を分別して、　當に無放逸を念じ、　有愛を斷じ餘無からしむべし。

【三七】假號。かりに存在すると名づけらるゝ現象。

『愛欲の刺を拔けば、』とは刺に三義有り。欲刺・恚刺・無明刺なり。盡く無餘を斷じ、更に復生ぜず。起滅の法無く、見に五蓋[二六]を斷ず。是の故に說いて曰く、『愛欲の刺を拔けば、』と。

(三六)諸有家業無く、又不善根を斷ぜる　比丘は彼此に勝つこと、蛇の故皮を脫ぐが如し。

彼の修行人は苦を執り來ること久しくとも、菩薩の德を修して終日捨てず、捨家出學して世榮を貪らざれ。是の故に說いて曰く、

諸有家業無く、又不善根を斷ぜる、比丘は彼此に勝つこと、蛇の故皮を脫ぐが如しと。

(三七)諸の熱惱を有せず、又不善根を斷ぜる、比丘は彼此に勝つこと、蛇の故皮を脫ぐが如し。

所謂熱惱とは一には欲熱惱、二には瞋恚熱惱、三には愚癡熱惱なり。三熱惱中、恚を最も上と爲す。火、焚燒する所、欲界より乃ち初禪地に至る。三毒の熾火は欲界を燒き、無色界に至る。能く此の三毒界を滅する者は乃ち第一無爲の樂と爲す。是の故に說いて曰く、

諸の熱惱を有せず、又不善根を斷ぜる、比丘は彼此に勝つこと、蛇の故皮を脫ぐが如しと。

(三八)欲を斷じて遺餘せず、拔いて牢固ならざる如くせる、比丘は彼此に勝つこと、蛇の故皮を脫ぐが如し。

人の欲に著すれば命を喪はざる無し。然る所以は皆意に由つて心を斷ずる惑の致す所なり。是を以て聖人は先づ婬欲を制す。是の故に說いて曰く、

欲を斷じて遺餘せず、拔いて牢固ならざる如くせる、比丘は彼此に勝つこと、蛇の故皮を脫ぐが如しと。

其の要を略說するに、貪欲・瞋恚・愚癡・憍慢も亦復是の如し。

【二六】五蓋。五結に同じ。心を覆蓋すればかくいふ。

なり。爾の時、世尊、訓ふるに道徳を以てし、後の衆生の愛本を別たざるを恐る。是の故に演說して其の出源を知らしむ。是の故に說いて曰く、

　能く愛の根本を斷じ、　盡く欲の深泉を竭せば、　比丘は彼此に勝つこと、　蛇の故皮を脱ぐが如しと。

其の要を略說するに、欲・怒・癡・憍・慢も亦復是の如し。欲に著する者には其の欲を說き、瞋に著する者には其の瞋を說き、騃に著する者には其の騃を說く。

(三四)能く五欲を斷じ、　欲の根本を斷ずれば、　比丘は彼此に勝つこと、　蛇の故皮を脱ぐが如し。

猶人有つて身に[二五]五繫を被むるが如し。愁憂苦惱にも復情意無ければ、後に、赦を蒙むるを得、危厄を免るることを得。是を以て如來は喩と爲したまふ。後生をして審知して明白ならしめんと欲すればなり。是の故に說いて曰く、

　能く五欲を斷じ、　欲の根本を斷ずれば、　比丘は彼此に勝つこと、　蛇の故皮を脱ぐが如しと。

(三五)能く五結を斷じ、　愛欲の刺を拔けば、　比丘は彼此に勝つこと、　蛇の故皮を脱ぐが如し。

所謂五結とは貪欲結・瞋恚結・睡眠結・掉戲結・疑結なり。人心を覆蓋して慧明を覩ざらしめ、人をして盲冥ならしめ、光明を覩ざらしめ、智慧を滅し、永く諸趣を斷じて、泥洹に至るを得ざらしむ。是の故に說いて曰く。

　能く五結を斷じ、　愛欲の刺を拔けば、　比丘は彼此に勝つこと、　蛇の故皮を脱ぐが如しと。

【二五】五繫。死人・死蛇・死狗等の五屍もて、手足頸の五處に繫くること。

苦を受けず。

「以て叢る林刺に勝ち、」とは此は名けて色・聲・香・味・細滑の法と爲す。更に復有とは、何者かとなれば、林刺と爲す。所謂林刺とは婬・怒・癡の病を最も根本と爲す。唯諸佛世尊有つて乃ち能く除くのみ。設し彼、我を罵るも、形無きことを解知せよ。内に自ら思惟するに、身を苦器と爲し、内外主無し。此の身を分別するに、何ぞ貪樂すべけん。一病以て發すれば、四百四病、同時に倶作す。此を身の内患と名く。所謂外患とは荊棘叢林なり。誹謗の形を毀り、汚辱するに名く。或は撾打[二三]を被る。斯の如きの類も外より至る。或は蚖蛇の毒害、百足の蟲を被る。此も皆外事の其の身に來逼するなり。猶泰山の幻呪奇術の法を用ふるも、移動すべからざるが若し。是を以て比丘よ、衆苦の本を離るゝを得んと欲せば、唯眞如の四諦有るのみ。彼の比丘は苦樂を知らず。所謂苦樂を知らずとは苦至るも以て酸楚と爲さず、樂到るも以て歡娯せざるなり。是の故に說いて曰く、

以て叢る林刺に勝ち、　及び罵詈を除く者は　猶泰山に憑るが如し。(かゝる)比丘は苦を受けずと。

(二二)今後世を念はず、　世を幻夢の如く觀ずる、　比丘は彼比に勝つこと、　蛇の故皮を脫ぐが如し。

[二四]猶明行人の意に今世、後世の變易して停まらざるを知るが如し。是の故に說いて曰く、

今後世を念はず、　世を幻夢の如く觀ずる、　比丘は彼此に勝つこと、　蛇の故皮を脫くが如しと。

(二三)能く愛の根本を斷じ、　盡く欲の深泉を竭せば、　比丘は彼此に勝つこと、　蛇の故皮を脫ぐが如し。

此の喩を說く所以は欲を行人をして其の深淺を知らしめ、正行を料量して皆法に順ぜしめんと

【二三】撾打。うちうつ。

【二四】明行人。三明(宿命・天眼・漏盡)の行具足せる人。

て曰く。

心に永く休息を得て、比丘は意行を攝め、老病死を盡すを以て、便ち魔の縛著を脱すと。

(二一六)心に以て永寂を得て、比丘は意行を攝め、老病死を盡すを以て、更に復有を受けず。

有とは生死の類なり。五道に沈漂周旋する所以は皆意惑に由つて、其の源を盡さゞるが故なり。是の故に說いて曰く、

心に以て永寂を得し、比丘は意行を攝め、老病死を盡すを以て、更に復有を受けずと。

行人、意を執ること多ければ、所濟有り。常に方便を求めて、以て自ら濟度せよ。

(二一七)以て愛根を斷ぜし、比丘は意行を攝め、老病死を盡すを以て、更に復有を受けず。

愛の病たる、危害する所多し。欲界愛には其の事二有り。一には食愛、二には欲愛なり。色界、無色界は禪味愛なり。是の故に說いて曰く、『以て愛根を斷ぜし。』と。

(二一八)結使の心有ること無き、比丘は意行を攝め、老病死を盡すを以て、更に復有を受けず。

所謂結使とは衆行の本にして諸の穢濁を漏すものなり。是の故に說いて曰く、

結使の心有ること無き、比丘は意行を攝め、老病死を盡すを以て、更に復有を受けずと。

(二一九)以て有根を斷ぜざるも、比丘意行を攝め以て老病死を盡せば、更に復有を受けず。

生死を度る以て、更に有を受けざるなり。

(二二〇)比丘意行を攝むれば、以て老病死を盡し、更に復有を受けず、以て魔界を脱す。

永く魔界を離れ、更に欲界に處らず、以て脱し、永く脱し、更に有を受けず。

(二二一)以て叢る林剌に勝ち、及び罵詈を除く者は猶泰山に憑るが如し。(かゝる)比丘は

は所有するものに非ざればなり。現世の事を觀ずるとは衆生の類の生者、滅者の進退の所趣を知り、苦の所由を知り、五陰の成敗の所趣を分別するなり。是の故に說いて曰く、

當に正覺の樂を觀じ、凡夫に近づくこと勿るべし。此の現世の事を觀じて、五陰を分別せよと。

(二四)＊之を爲せ之を爲せ。必ず强めて自ら制せよ。家を捨つるも、＊解らば、意猶復染す。行懈緩なる者は、勞するも意除かず。淨梵行するに非ずんば、焉んぞ大寶を致さんや。

行を執るの人、諸の想著を興し、結使の本を起す。或は分別の計有るは、今世後の果有り。苦に於て自ら免れずんば、比丘は著すること莫れ。此を自ら淸淨の行と謂ふ。諸有沙門婆羅門は出要の法を知らず。我は此の人を應に得度すべしとは說かず。然る所以は縛著を離れざるの致す所なり。比丘は當に知るべし。非有なるを有と言ふは此は皆邪見にして眞諦の法に非ざることを。何を以ての故に。皆五陰の身本に由つて此の病を興せばなり。此の病有るを以て復惡行を生ず。此の諸病に由つて苦際を盡すを得ざるなり。比丘、當に其の源を究盡せんことを知り、無常を變易の法と爲すことを解知すべし。夫れ學ぶ人、此の法を觀ぜば、堅きこと無く、牢きこと無く、要有ること無し。身無きことを解知すれば則ち生死を知り、以て死魔の爲めに沮壞せられず。以て彼に勝つを得て更に有を造らず。一切の有を盡す。此を苦際と名け、更に上有ること無し。

(二五)心に永く休息を得し、比丘は意行を攝め、老病死を盡すを以て、便ち魔の縛著を脫す。

如しは彼の行人、永く諸結の意に染著する所を盡して復行を造らず。色・聲・香・味・細滑の法、復懷に在らず。自ら罪を知り畢つて、更に受胎せず、永く魔界を離れ、亦欲塵と相應せず。是の故に說い

＊法句經沙門品。
＊解は懈に通用せり。

諸有修善の法は、七覺意を本と爲す。此を名けて妙法と爲す。故に定比丘と曰ふと。

（一一）如今現に說く所は、自ら苦盡の源を知ることとなり。此を名けて善本と爲す。是れ無漏の比丘なり。

現法中に於て而も自ら觀了し、其の巧便を求めて便ち苦際を盡す。所謂苦際を盡すとは滅盡泥洹なり。是の諸根具足して、無漏行を成就すれば所行意の如くにて蹉失する所無し。是の故に說いて曰く、

如今現に說く所は、自ら苦盡の源を知ることとなり。此を名けて善本と爲す。是れ無漏の比丘なりと。

（一二）持戒の力を以てし、及び多聞の義を以てのみせず。正しく定意を得て、文飾に著せずんば、比丘は持する所有つて、無漏行に於て盡さん。

夫れ人、行を習はんには但精進忍辱のみせず、一心に智慧もて解脫を求めよ。亦復多聞解慧を以てせざれ。內外の法を知つて無爲に至らんには要に世俗の定意を得べし。然る後に[三]妙際に至らん。或は山野空閑の處に在つて善知識と相遇はゞ、其の正徑を說いて邪路を說かざれ。比丘、當に知るべし。此の行は無漏法を習ふことを。所以に苦際を盡す者皆是れ漏盡の羅漢・須陀洹・斯陀含・阿那含なり。猶諸の苦惱を涉る。是の故に說いて曰く、

持戒の力を以てし、及び多聞の義を以てのみせず。正しく定意を得て、文飾に著せずんば、比丘は持する所有つて、無漏行に於て盡さんと。

（一三）當に正覺の樂を觀じ、凡夫に近づくこと勿るべし。此の現世の事を觀じて、五陰を分別せよ。

如しは彼の學人、正覺の樂を觀じ、以て自ら娛樂して、凡夫に近づかざれ。然る所以は彼の境界

【三】妙際。煩惱なき解脫の境。

を爲すと稱す。此は是れ世俗の智なり。「智無ければ、禪ならず。」とは無漏の慧觀は必ず所至有つて罣礙有ること無し。設し二事有つて具足せば、便ち泥洹に近づかん。是の故に說いて曰く、

　禪無ければ智ならず、　智無ければ禪ならず。　禪智に道從せらるれば、　泥洹に近づくを得と。

（一八）*禪にして放逸する無く、　欲亂を爲すこと莫れ。　[二]洋銅を呑んで、　自ら惱み形を焦すこと無れ。

如しは彼の修行の人は身口意を攝し、少欲知足にして大いに慇懃ならざれ。衣服・飲食・牀臥具・病瘦醫藥を得ると雖も、自ら形を支ふるに趣き、世榮を慕はざれ。威儀禮節、其の度を失はず、牀坐具は恒に止足することを知れ。後世を受けて洋銅を口に灌ぐこと莫れ。是の故に說いて曰く、

　禪にして放逸する無く、　欲亂を爲すこと莫れ。　洋銅を呑んで　自ら惱み形を焦すこと無れと。

（一九）能く自ら身口を護り、　意を護つて惡有る無くんば、　後に禁戒の法を獲ん。　故に號して比丘と爲す。

夫れ人、行を習はんには、身に惡を行ぜず、口に罵詈せず、意に姤嫉せざれ。此の三を具する者を乃ち比丘と爲す。是の故に說いて曰く、

　能く自ら身口を護り、　意を護つて惡有る無くんば、　後に禁戒の法を獲ん。　故に號して比丘と爲すと。

（二〇）諸有修善の法は　七覺意を本と爲す。　此を名けて妙法と爲す。　故に定比丘と曰ふ。

如しは彼の行人の善く其の法を修せんには、先づ無漏盡苦の源を得ば、便ち七覺意の華を得て、漸やく無爲に至り、泥洹に近づくを得ん。是の故に說いて曰く、

＊　法句經沙門品。

【二】　洋銅。銅の溶融擴大熱盛せるもの。法句經一本は鎔に作る。

とを知る。是の如くなれば、行の蹤跡(を滅せんには)行を滅するを則ち本と爲す。略して其の要を說かんに、是の如くにして、結使の本は火の爲めに燒かれ、是の如くにして漸やく次を以て諸の結使の源を斷ず。是の如くにして頓し梵志有つて、(結)無くんば乃ち泥洹に至らん。

(一五)心善び極めて歡悅し、*加ふるに愛念ある、比丘は[一七]熙怡多く、空を盡して根源無からしむ。

彼の修行の人、歡喜踊躍して懈怠有ること無く、喜を聞くも以て歡と爲さず、惡を聞くも以て感と爲さゞれ。比丘は定に入つて錯亂有ること無く、恆に自ら思念せよ。無數劫より以來、衆德を修行して行本を失せず、空源の無邊無崖なるを究竟せよ。是の故に說いて曰く、

心喜び極めて歡悅し、加ふるに愛念ある、比丘は熙怡多く、空を盡して根源無からしむと。

(一六)身を息め而して意を息め、口を攝すれば亦甚だ善し。世を捨つるを比丘と謂ふ。淵を渡れば礙有ること無し。

彼の修行人は威儀を執持して其の則を失はざれ。[一八]口の四過を護つて違失する所無く、其の心をして流馳する所有らしめざれ。所說の言敎に麁獷有ること無れ。先に笑ひ、後に言つて人情に適可せよ。世を捨つるを比丘と謂ふ。何者か比丘と爲す。所謂比丘とは色・聲・香・味・細滑の法を離れ、婬・怒・癡を去れるなり。是の故に說いて曰く、

身を息め而して意を息め、口を攝すれば亦善し。世を捨つるを比丘と謂ふ。淵を渡れば礙有ること無しと。

(一七)*禪無ければ智ならず、智無ければ禪ならず。禪智に遵從せらるれば、泥洹に近づくを得。

夫れ人、學問せんには先づ[一九]四阿含を誦することより、[二〇]三藏を具足し、然る後に乃ち名けて禪定

* 大正藏に如とあるは誤植。
【一七】熙怡。やはらぎよろこぶこと。

【一八】、口の四過。妄語・兩舌・惡口・綺語。

* 法句經沙門品。巴利法句經、二五の三七二。
【一九】四阿含。一、長阿含。(後秦、佛陀耶舍、竺佛念共譯)二、中阿含。(東晉僧伽提婆譯)三、雜阿含。(宋、求那跋陀羅譯)四、增一阿含。(東晉、僧伽提婆譯)。
【二〇】三藏。經藏・律藏・論藏。四阿含は經藏に攝す。

我も亦乞士、　君も亦乞士、　二乞士中、　何れか勝ると爲すと。

爾の時、世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

比丘は剃に非ず。　慢誕は無戒なり。　貪を捨て道を思ふは、　乃ち比丘に應ふ。　息心は剃に非ず。　放逸無信なり。　能く衆苦を滅するを、　上沙門と爲す。と。

爾の時、梵志、斯の語を聞き已つて、即ち所有せる財貨を以て世尊に施す。爾の時、如來は尋で之を受けたまはず。梵志に語げて曰く、『我、今說く所は歌頌もて讚する所に非ず。何に緣つてか汝の所施の物を取らん。』と。梵志、佛に白く、『不審、今は此の所施を以て爲めに何人にか付せん。』と。世尊、告げて曰く、『汝、今此の所施を持して淨處に持著せよ。若しは無草の地に著けよ。若しは淸淨水中に著けよ。』と。爾の時、梵志、如來の敎を受け、即ち所施を以て水中に[一四]寫著す。是の時、水中より自然に涌出して、若干種の聲と作る。漸漸に中に於て大光明を出す。梵志、見已つて踊躍歡喜し、自ら勝ふる能はず。如來、即ち眞如四諦を說きたまふ。尋で（梵志）は座上に於て、諸の塵垢盡き法眼淨を得たり。

（一四）比丘慈定を得、　諸佛の敎を承受せば、　滅盡の跡を極得せん。　親無きを愼んで親る莫れ。

比丘、慈を得れば、所在に解脫し、萬行を分別して事として達せざる無けん。設し復人有つて衆生の類を見るに、步兵・象兵・馬兵・車兵共に相鬪諍せば、人慈の人は、彼の及ばざるを愍み、衆生を拔濟して無爲の岸に至らしめよ。猶平かなる秤の平等無二なるが如くなれ。如來の得たまへる所の[一五]四堅固の心に於て傾動すべからず。猶最勝なる長者及び比丘の佛を覩たてまつつて厭足無く、正しく[一六]化佛をして其の前に在らしむるも、亦能く心をして傾動せらるること有らしめざるが如くなれ。行人、滅盡の跡を得れば、復衆惱無し。近づくべきに近づくを知り、從ふべきに從ふを知るこ

【一四】寫は瀉に同じ。そゝぐ。

【一五】四堅固の心、佛・法・僧及戒を堅く信ずる心。

【一六】化佛、眞佛に非ざるにせの佛。

味を爲さん。
初學の人は此の五陰を觀ぜよ。皆當に壞敗し、一も貪るべきもの無く、諸持を分別しても、悉く牢固ならずと。意均しく平等なれば、顏色和悅、清淨無瑕にして諸の苦際を盡さん。是の故に說いて曰く、

當に五陰を制し、　意を服すること水の如くなるべし。　清淨和悅にして、　甘露の味を爲さんと。

(一一)彼の極峻山の　風の爲めに動かされざるが如く、　比丘も愚癡を盡せば、　所在に傾動せず。

猶安明山の四種の風の爲めにも傾動せられざるが若く、癡を盡せる比丘も亦復是の如し。色・聲・香・味・細滑の法の爲めに動かされず。是の故に說いて曰く、

彼の極峻山の　風の爲めに動かされざるが如く、　比丘も愚癡を盡せば、　所在に傾動せずと。

(一二)*一切の名色は　有に非ず惑ふこと莫れ。　近づかず愛せざるを、　乃ち比丘と爲す。

[六]名色、六入は行者の棄つる所、[七]我所も我所に非ず。都て所有無し。危嶮の法に近づかざれ。法に種種有り。或は眞正有り、或は危嶮有り。所謂眞正なる者は諸の[八]度無極なり。所謂危嶮なる者は世俗の常則なり。比丘、此を具足する者は乃ち　[九]應眞と謂ふ。是の故に說いて曰く、

一切の名色は　有に非ず惑ふこと莫れ。　近づかず愛せざるを　乃ち比丘と爲すと。

(一三)*比丘は　[一〇]剃に非ず。　[一一]慢誕は無戒なり。　貪を捨て道を思ふは、　乃ち比丘に應ふ。
[一二]息心は剃に非ず。　放逸は無信なり。　能く衆苦を滅するを、　上沙門と爲す。

爾の時、世尊、時到つて鉢を持し、衣服を整頓し、徑ちに向つて　[一三]婆羅墮といふ婆羅門の所に乞求す。爾の時、梵志、遙かに世尊を見たてまつる。梵志、自ら歎說して曰く、

---

* 法句經沙門品。巴利法句經二五の三六七。
【六】 名色六入。名は精神・色は肉體、六入は眼・耳・鼻・舌・身・意の六根。
【七】 我所。自我の所有。自分以外の萬物。
【八】 度無極(Pāramitā)。波羅蜜。新には到彼岸と譯す。菩薩の大行の謂、度は彼岸への救濟、無極は其の行法の際限なきこと。六度・十度などあり。
【九】 應眞。阿羅漢。
* 法句經沙門品、類似の偈あり。
【一〇】 剃。頭髮を剃ること。
【一一】 慢誕。ほこりあざむく。
【一二】 息心。沙門、比丘の古譯。動亂心を止息する者の意。
【一三】 婆羅墮(Bharadvāja)。

説いて曰く、

　手足もて妄りに犯すこと莫く、言を節し所行を愼しみ、常に内に定意を樂しみ、行を守るを比丘と謂ふと。

　(八)*法を樂しみ法を欲し、思惟して法に安んじ、比丘、法に依らば、正しうして費さず。

　學人は修行して諸法を分別せんに、法を見、法を得て深く入つて法を觀よ。若しは坐し、若しは臥し、衆神・往來思惟して法に安んぜよ。比丘は法に依つて乃ち滅度を得。諸の聖道に於て益すれども、費す無し。日に增益有るも、終に減損無し。亦正法をして久しく世に久存せしむ。是の故に説いて曰く、

　法を樂しみ法を欲し、思惟して法に安んじ、比丘法に依らば、正しうして費さずと。

　(九)*當に空に入らんことを學び、比丘は靜居すべし。人非きの處を樂うて、【四】等法を觀察せよ。

　行を執るの人は此の五陰を觀じ、計して是れ常にして牢固不敗と爲せば、捨離する能はずして塵勞を興さん。然も行を執るの人、五陰の内外悉く空なるを分別せんと、正に曠野の中、樹下塚間に在つて法本を思惟し、道果を求め、先づ當に空を習はゞ乃ち道眞に應はん。昔、諸の道人、室内に坐禪空行す。須菩提、外に在つて門を開かんことを求索す。内人、應へて曰く、『汝是れ誰か。』と。【五】須菩提、對へて曰く、『世人の假に須菩提と名くる者なり。人の樂ふ所の者は彈琴鼓瑟、倡伎樂を作すことなり。此は是れ人の樂ふ所。人の樂ふ所に非ざる者は禪定數息、意を繫けて一に在らしむることなり。人の念ふ所に非ず。』と。是の故に説いて曰く、

　當に空に入らんことを學び、比丘は靜居すべし。人非きの處を樂うて、等法を觀察せよと。

　(一〇)*當に五陰を制し、意を服すること水の如くなるべし。淸淨和悅にして、甘露の

---

* 法句經沙門品。巴利法句經、二五の三六四。

* 法句經沙門品少異。巴利法句經、二五の三七三類似。

【四】等法。平等の法。

【五】須菩提(Subhūti)。善現、善業と譯す。佛の十大弟子中般若の空理に通じ解空第一。

* 法句經沙門品。

(五)*人壽劫ならざるも、　內、心と諍ひ、　身を護り諦を念ぜば、　比丘は惟れ安し。

夫れ修學の人は四神足を得て晝夜に修習せよ。意に壽一劫に住せんと欲し、若し一劫を過ぐれば、意の念ふ所に隨つて則ち難きこと有ること無し。諸の縛を離れ、常に心と諍うて流馳せしめず、諸の希望を斷じ、是非の意を去り、欲と永別せよ。亦復三界の窟窟を見ず。然る後に乃ち虧損無きの行に應はん。是の故に說いて曰く、

人壽劫ならざるも、　內、心と諍ひ、　身を護り、　諦を念ぜば、　比丘は惟れ安し。

(六)朋友に親同せんことを念じ、　正命して雜糅する無かれ。　施さんには應に施すべき所を知り、　亦威儀を具せしめよ。　比丘衆行を備ふれば、　乃ち能く苦際を盡す。

行人の成就するは皆朋友に由る。功成り、德滿ち、稱、四遠に過ぐ。稟受の人は日に其の新有り、所行眞正なるも、外部に著はれず。出す所の惠施もて佛、比丘僧に施し、師及び諸の尊長に與ふ。然る所以は斯等の諸人は皆威儀有り、諸の禮節を執り、苦の所由を知ればなり。是の故に說いて曰く、

朋友に親同せんことを念じ、　正命して雜糅する無かれ。　施さんには應に施すべき所を知り、　亦威儀を具せしめよ。　比丘衆行を備ふれば、　乃ち能く苦際を盡すと。

(七)*手足もて妄りに犯すこと莫く、　言を節し所行を愼しみ、　常に內に定意を樂しみ、　行を守るを比丘と謂ふ。

世に多く人有り。兇暴にして惡を爲し、手拳相加へて遂に傷害を致す。內に六情を恣にし、色・聲・香・味・細滑の法に著す。斯の如きの人は道を爲むるを得ると雖も、法行に應はず、進んで修道の法無く、賢聖の儀を退失す。死を揩ぐ人種の復中直する所無きが如し。此の比丘等も亦復是の如し。能く自ら意を專らにし、所行隨順し、坐禪定意し、六時の行道、本行を失はざれ。是の故に

---

* 法句經沙門品、類似の偈あり。

* 法句經沙門品。巴利法句經、二五の三六二。

(三)比丘は諸愛を盡し、愛を捨て貢高を去り、無我にして吾我を去れ。此の義、孰か親しまざらん。

『比丘は諸愛を盡し、愛を捨て貢高を去り、』とは彼の苦行の比丘は諸の想著を滅せよ。(想著とは)欲色・色色・無色色、欲愛・色愛・無色愛なり。三界の憍慢、衆邪の顚倒を泯然として除盡せよ。是の故に說いて曰く、『比丘は諸愛を盡し、愛を捨て貢高を去り、』と。『無我にして吾我を去れ。此の義、孰か親しまざらん。』とは苦行の比丘、三界に滯らず、內外を解知すれば、悉く有ること無し。我を計するの人は貨に貿へて福を求め、願に從つて得ると雖も、後に必ず墮落す。凡夫地に在るも、吾我を見ざるの人は內外を解知し、萬物に虛寂なり。孰か吾我なる。吾我とは是れ誰なるか。人の爲めには繫がれ、罵詈を得るに及ぶ。悉く虛、悉く寂、都て所有無し。人の爲めに罵られ、音聲來往するも、中間內外、悉く所有無し。是の故に說いて曰く、『無我にして吾我を去れ。此の義孰か親しまざらん。』と。

(四)當に是の法の、身の出要なるを知るべし。象の敵を御するが如く、比丘も行を習へ。

『當に是の法の、身の出要なるを知るべし。』とは習行の比丘の衆要を博採するを得んには善を擇び、德を修め、以て及ばざるを補へ。如し人、至る所あらんと欲せば、必ず其の徑に由つて道を求めよ。寡痛も必ず其の路有り。出要の路とは四諦眞如なり。是の故に說いて曰く、『當に是の法の、身の出要なるを知るべし。』と。『象の敵を御するが如く、比丘も行を習へ。』とは彼の暴象の飲むに醲酒を以てすれば、奔逸して敵に向ふが如し。刀射を被つて死に至るも退かず。要に擒へらるゝ有りて乃ち本國に還る。然る所以は上の御者を畏れて外憲を畏れざるなり。習行の比丘も亦復是の如く、要に導師に從つて苦教を承受し、心懷に隱在せしめ、反覆思惟して、義跡を失はざるべし。是の故に說いて曰く、『象の敵を御するが如く、比丘も行を習へ。』と。

【二】泯然。水清き貌。

【三】醲酒。濃い酒。

卷の第二十九

沙門品第三十三

(一)*比丘乞求して、以て積むこと無きを得ば、天人に譽められ、淨を生じて穢無けん。

『比丘乞求して、以て積むこと無きを得ば、』とは乞食の比丘、恒に是の念を作さく、「我、今求索する所の者にて自ら足るのみ。遺餘を留めて計して財貨と爲さゞらん。設し遺餘有らば、尋で人に施して遺長を留めざること、佛の律に禁じて說く所の如くにせん。」』と。父母、年邁け、老病にて床に著き、及び同學の比丘の久しく重患を抱へて行來に堪へざるが、乞索せしむるを聽き、多少を問はずして、重病に供養せり。是の故に說いて曰く、『比丘*乞食して、以て積むこと無きを得ば、』と。『天人に譽められ、淨を生じて穢無けん。』とは比丘、行を執るに少欲知足なれ。時到つて乞求するも、藏積する所無ければ、諸天、衞護して其の德を稱歎し、名、四遠に聞え、聞知せざる靡けん。此の比丘を『淨を生じて穢無けん。』と論ず。諸天、其の德を稱歎する所以は持戒の人は死して必ず天に生じて諸の天衆を增益し、阿須倫衆を減損すればなり。是の故に說いて曰く、『天人に譽められ、淨を生じて穢無けん。』と。

(二)*比丘、慈を爲し、佛敎を愛敬し、深く止觀に入り、行を滅すれば乃ち安し。

比丘は意を執つて【一】四等心を行ぜよ。慈・悲・喜・護なり。一切を愍念し、三寶を愛敬し、信心不斷にして深く分別止觀の所趣に入り、在在に乞求し、處處に留化せよ。貪を除き、意を制する所以は世榮を除き、利養を貪らざらんと欲すればなり。生死を究竟し、諸の惡行を滅し、有を度つて無に至るを、乃ち永安と謂ふ。是の故に說いて曰く、

比丘慈を爲し、佛敎を愛敬し、深く止觀に入り、行を滅すれば乃ち安しと。

---

* 法句經沙門品、小異。巴利法句經二五の三六五。小異あり。

* 前出の乞求とせると異る。

* 法句經沙門品。巴利法句經。二五の三六八。
【一】四等心。慈・悲・喜・護の四心で無量の衆生に對して平等に心に起る、故に等といふ。

(四五)衆生の心誤まれば、盡く地獄の苦を受く。心を降せば則ち樂を致す。心を護つて復掉はしむる勿れ。

『衆生の心誤まれば、盡く地獄の苦を受く。』とは迷誤すれば、心の爲めに使はれ、地獄の根栽を種えて、無數億千萬劫を經歷し、屠割剝裂せられ、苦を受くること無量なり。是の故に說いて曰く、

衆生の心誤まれば、盡く地獄の苦を受く。心を降せば則ち樂を致す。心を護つて復掉はしむる勿れと。

(四六)心を護つて復掉はしむる勿れ。心を衆妙の門と爲す。護つて漏失せしめずんば、便ち泥洹の門在り。

心正しければ則ち道存し、邪なれば高下有り。衆生は愚*惑にして眞僞を別たず。是を以て墜墮して道に至らず。惑者は意迷うて道は空に在りと謂つて、乃ち自覺せず。心こそ道本、虛無寂寞と爲すなれ。法の極尊、衆行の究竟たり。永く三有を離れ、三界に處らず、衆の苦惱を度せば、壽を畢るまで生ぜず。是の故に說いて曰く、

心を護つて復掉はしむる勿れ。心を衆妙の門と爲す。護つて漏失せしめずんば、便ち泥洹の門在りと。

---

* 大正藏に感とあるは誤植。

覆はれ、重雲に翳さるゝに由る。慧明を見るを得んと欲するも、此は則ち然らず。命終の後、必ず死徑に趣く。是の故に說いて曰く『兼て掉戯の意を懷けば、斯等は死徑に就かん。』と。

(四三)是の故に當に心を護るべし。等しく清淨行を修せば、正見恆に前に在つて、起滅の法を分別せん。

『是の故に當に心を護るべし。等しく清淨行を修せば、』とは彼の修行人、恆常に心意を擁護し、威儀法を行じ、非法を捨て、行くべきには行くを知り、坐すべきには坐するを知り、進止行來、其の儀を失はざれ。是の故に說いて曰く『是の故に當に心を護るべし。等しく清淨行を修せば、』と。『正見、恆に前に在つて、起滅の法を分別せん。』とは人の德を修むるや、深く自ら己を知ること、家に財有るを主自ら能く別つが如かれ。行道の人も亦復是の如し。[三六]八直の正路を涉つて、[三七]四駛の穢濁を御し、智慧の錠燈を執つて、三毒の冥室を照せ。起滅の所由を分別し、之を歸すること一定にして無礙なれば、中に於て道を取るに、何の難きことか有らん。是の故に說いて曰く『正見恆に前に在つて、起滅の法を分別せん。』と。

(四四)比丘は睡眠を除き、苦を盡して更に造らざれ。心を降して樂に服し、心を護つて復掉はしむる勿れ。

『比丘は睡眠を除き、苦を盡して更に造らざれ。』とは觀行の比丘は睡眠陰蓋の患を除去し、諸の苦際を盡し、更に新を造らざれ。是の故に說いて曰く『比丘は睡眠を除き、苦を盡して更に造らざれ。』と。『心を降して樂に服し、心を護つて復掉はしむる勿れ。』とは常に當に心を擁護すべけんには、所願必ず剋ち、則ち能く聖に及ばん。無漏行を修するは斯は心を降し、穢を去るの致す所に由る。行放逸ならず、人を燒はさざれ。復是れ行者深要の業なり。是の故に說いて曰く『心を降して樂に服し、心を護つて復掉はしむる勿れ。』と。

【三六】八直の正路。八正道。
【三七】四駛。見・欲・有・無明。

は入定の人は何を以ての故に入定の人と說くや。定に三義有り。禪を最も首と爲す。猶國王の四方を統領するが如し。正に世財に富むべけんも、道財有ること無し。禪定の人は道財に富むも、世財有ること無し。所謂道財とは三十七品の禪定三昧、諸善の本なり。樂に二義有り。或は淨樂有り。或は不淨樂有り。不淨樂は飲食・衣被・服飾の具・香華・脂粉・(三一)細綵・旛蓋なり。斯を雜樂とも謂ふ。淨有るの樂とは禪に入り、正受して澹然無爲、他の思想無きなり。是を淨有るの樂と謂ふ。是の故に說いて曰く、『以て禪定に入るを得ば、便ち喜安樂を獲ん。』と。

(四一)意を護つて自ら莊嚴し、　(三二)彼を嫉んで己を營め。　憂に遭ふも患苦せず、　智者は(三三)審諦に住す。

『意を護つて自ら莊嚴し、彼を嫉んで己を營め。』とは彼の修行者、恒に結使の色・聲・香・味・細滑の法に縛著するを護り、衆想をして其の間に雜錯せしめざれ。復三十七品七覺意の花を以て自ら莊嚴せよ。是の故に說いて曰く、『意を護つて自ら莊嚴し、彼を嫉んで己を營め。』と。『憂に遭ふも患苦せず、智者は審諦に住す。』とは彼の修行人は以て無畏の處に入ることを得。智者の神は審諦にして移動せず。是の故に說いて曰く、『憂に遭ふも患苦せず、智者は審諦に住す。』と。

(四二)人、心を護らずんば、　邪見の爲めに害せられん。　兼て(三四)掉戲の意を懷けば、　斯等は死徑に就かん。

『人、心を護らずんば、邪見の爲めに害せられん。』とは行人、色・聲・香・味・細滑の法を守護せず、其れ衆生有つて邪徑を修習せば、便ち當に地獄・餓鬼・畜生の道に趣かん。邪見を習はずんば、天上・人中に生れ、中國に處在し、邊地の八不閑處に在らざらん。是の故に說いて曰く、『人、心を護らずんば、邪見の爲めに害せられん。』と。『兼て掉戲の意を懷けば、斯等は死徑に就かん。』とは行人、道に迷ふ所以は者陰蓋に覆はれて智慧の光明を(三五)闚看することを得ず、加ふるに復掉戲して、五蓋に

【三一】細綵。いろどれるきぬ。

【三二】彼。煩惱。結使。

【三三】審諦。明らかなる道理。

【三四】掉戲。いたづら、ふまじめ。

【三五】闚看。のぞきみる、

に於ても志を起さずと。

（三九）諸有もの此の如く心せば、　焉んぞ苦の蹤跡を知らん。　害する無く染せらるゝ無くんば、　戒律を具足す。　食に於て自ら足ることを知れ、　及び諸の床臥具にも。　意を修め方便を求めよ。　是を諸佛の教と謂ふ。

『諸有もの此の如く心せば、焉んぞ苦の蹤跡を知らん。』とは如し彼の行人、其の心を練精して、諸の穢著を去らんとし、意、結を斷ずるに存せば、日に進んで怠らざれ。爾の時、焉んぞ苦の蹤跡有るを知らん。是の故に說いて曰く、『諸有もの此の如く心せば、焉んぞ苦の蹤跡を知らん。』と。『害する無く染せらるゝ無くんば、戒律を具足す。』とは亦自ら害せず、復人を害せずんば戒律の所說、次緒を失はず。既に自ら德を修むれば、復此の德を以て人民に敎ふべし。是の故に說いて曰く、『害する無く染せらるゝ無くんば、戒律を具足す。』と。『食に於て*自ら足ることを知れ、及び諸の床臥具にも。』とは彼の行人、食を量つて進み、亦貪饕せざるが如し。其の命を趣支するは道を行ぜんのみ。膏を取つて車に膏する所以は重載をして致る所有らしめんと欲すればなり。人の瘡痍に膏を以て之を傅くるが如し、傅くる所以は新しき者をして故き者を增さずして除愈せしめんと欲すればなり。是の故に說いて曰く、『食に於て*自ら足ることを知れ、及び諸の床臥具にも。』と。『意を修めて方便を求めよ。是を諸佛の敎と謂ふ。』とは修行の人は要義を採取せよ。行中、急とする所の者は〔三〇〕增上心是れなり。是の故に說いて曰く、『意を修め方便を求めよ。是を諸佛の敎と謂ふ。』と。

（四〇）行人、心相を觀じ、　念待の意を分別し、　以て禪定に入るを得ば、　便ち喜安樂を獲ん。

『行人心相を觀じ、』とは彼の行人、心の根源を知つて、生ずるに適つて卽ち滅して滋長せしめざるが如し。念待の進退を知つて、善惡を分別するは永劫已來、修むる所の行事なり。是の故に說いて曰く、『行人、心相を觀じ、念待の意を分別し、』と。『以て禪定に入るを得ば、便ち喜安樂を獲ん。』と

＊ 原文は於食知止足とあれど初めの偈に從つて、於食自知足として譯す。知足は次の床臥具にもかゝる。

【三〇】增上心。强盛心。向上精進の心。

正に五樂の音にても、能く人意を悦ばしめず。如かず、一の正心の、平等の法に向はんにはと。

(三六)最勝は善眠を得、亦有我を計せず。諸有もの心に禪を樂んで、欲意を樂まざれ。

『最勝は善眠を得、亦有我を計せず。』とは修行人は吾我を計し、榮盛に深著せざる如くせよ。寧ろ冷石に臥して、土中に宛轉するも、縛著の心を以て高床幃帳の內に臥せざれ。是の故に說いて曰く、『最勝は善眠を得、亦有我を計せず。』と。『諸有もの心に禪を樂んで、欲意を樂まざれ。』とは入定せる人の心は移變せず。當に定に入るの時は寂として音響無く、千車同じく響き、萬雷同じく震ふも、入定せる人をして正受より離れしむること能はず。然る所以は其の心意に背く慈を得しに由るが故なり。是の故に說いて曰く、『諸有もの心に禪を樂んで、欲意を樂まざれ。』と。

(三七)最勝は意踊躍し、亦有我を見ず。諸有もの心に禪を樂んで、欲意を樂まざれ。

『最勝は意踊躍し、』とは無我を見るの人は內外、出づる所の四大を分別して一一に虛にして眞ならざることを解了す、是の故に說いて曰く、

最勝は意踊躍し、亦有我を見ず。諸有もの心に禪を樂んで、欲意を樂まざれと。

(三八)諸結永く已に盡くれば、山の動かすべからざるが如し。染に於ても染せらるゝ無く、恚に於ても恚を起さず。

『諸結永く已に盡くれば、山の動かすべからざるが如し。』とは如し彼の行人、諸結を永く盡せば、內外清淨にして瑕穢有ること無し。意は猶金剛の沮壞すべからざるがごとく、亦泰山の移動すべからざるが如し。何を以ての故に。其の心を執ること甚だ牢固なるに由る。欲に處つて汚されず。禍に在つて懼れず。形神、俱に虛しく、戀著すべき無し。是の故に說いて曰く、

諸結永く已に盡くれば、山の動かすべからざるが如し。染に於ても染せらるゝ無く、恚

ん。

『若し踊躍の意を以て、歡喜して懈怠せず、』とは彼の修行人、婬・怒・癡を息め、意を執ること剛強にして[二七]本願を捨てず、獲る所の功德を盡く無上正眞道等正覺に施し、此の福を持して轉輪聖王、粟散の諸王に求めざれ。亦復帝釋、梵天に求めず、亦魔若しは魔王に作すことを求めざれ。彼盡く滅盡泥洹無爲無作無生滅法を作らんことを求めよ。是の故に說いて曰く、

若し踊躍の意を以て、歡喜して懈怠せず、諸の善法を修せば、安隱の處を獲致せんと。

(三四)息むれば則ち歡喜を致し、身口意相應し、以て等解脫を得ん。比丘息むれば意快く、一切の諸結盡き、復塵勞有ること無けん。

『息むれば則ち歡喜を致し、身口意相應し、』とは人意以て息めば、衆病、都て廢し、復造らず。身口意の行に於て、若しは布施し、持戒し、攝意して[二八]受齋せよ。皆無爲の道を求めて、正に出家をして福業を修習せしめよ。世辯聰を捨てゝ、四辯才を習はゞ、以て[二九]八解脫法を得ん。比丘は法を習つて賢聖を離れざれ。是の故に說いて曰く、『息むれば則ち歡喜を致し、身口意相應し、』と。所謂結とは人心を結縛するなり。結結相纏へば、蛾の自ら裹むが如し。人心、纏縛せらるれば大明を見ず。彼の塵勞を除かば、乃ち自ら照見せん。是の故に說いて曰く、『一切の諸結盡き、復塵勞有ること無けん。』と。

(三五)正に五樂の音にても、能く人意を悅ばしめず。如かず、一の正心の、平等の法に向はんには。

『正に五樂の音にても、能く人意を悅ばしめず。』とは彼の修行人の志は禪定に在り、五陰の成敗の趣く所を分別す。正しく諸天をして倡伎樂を作さしめ、此の人をして心意を動轉せしめんと欲するも、此の事は然らず。何を以ての故に。心、正見に由つて顚倒無きが故に。是の故に說いて曰く、

【二七】本願。昔からの根本的なる衆生濟度の誓願。
【二八】受齋。齋(Upoṣatha)は清淨の義、罪を懺する謂。
【二九】八解脫法。前卷二七八頁見よ。

若し好語・醜語を聞くも、心懷を經ざれば、怨恨有ること無く、復害意無し。一切衆生に向はゞ、[二五]戰戰兢兢として終に捨離せざれ。是の故に說いて曰く、『慈心もて衆生の爲めにせば、彼に怨恨有ること無し。』と。

(三一)慈心もて一人を愍まば、便ち諸の善本を獲べく、盡く當に一切の爲めにせば、賢聖は福の上と稱せん。

『慈心もて一人を愍まば、』とは佛の契經の所說の如し。『若し人有り、一切衆生に施し、加ふるに慈心を以て一人に施さば、其の福、何者か多と爲んや、』と。比丘、報へて曰く、慈を行ずるの人、衆生を愍念せば、其の福、甚だ多く、甚だ多し。』と是の故に說いて曰く、『慈心もて一人を愍まば、便ち諸の善本を獲べく、』と『盡く當に一切の爲めにせば、賢聖は福の上と稱せん。』とは一人に惠施する其の福量り難し。況んや一切衆生の類に施すをや。其の福は無限、無量にして稱計すべからず。巨億萬倍にして譬喩を以ても比と爲すべからず。是の故に說いて曰く、『盡く當に一切の爲めにせば、賢聖は福の上に稱せん。』と。

(三二)普く一切を慈しみ、衆生の類を愍念し、慈心を修行せば、後に無極の樂を受けん。

『普く一切を慈しみ、衆生の類を愍念し、』とは人の慈を行ずるや、意を發すること平等なれ。衆生の類は地種多し。能く慈心もて一切衆生を愍む者は後に人身を受けて、樂を受くるも、厭くこと無けん。若し天上に生ぜば、福を受くること自然にして、東を視るも、西を望むも、玉女、營從して稱計すべからず。若し人中に生るれば、豪族富貴にして[二六]四姓の家に生れ、七寶具足して減少有ること無く、父母眞正にして卑賤に處らざらん。是の故に說いて曰く、

普く一切を慈しみ、衆生の類を愍念し、慈心を修行せば、後に無極の樂を受けん。

(三三)若し踊躍の意を以て、歡喜して懈怠せず、諸の善法を修せば、安隱の處を獲致せ

【二五】戰戰兢兢。おそれいましむる貌。

【二六】四姓の家。四姓は印度の階級制度。一、婆羅門(Brāhmaṇa)(宗教家)、二、刹帝利(Kṣatriya)(王族)、三、吠舍(Vaiśya)(農工商)、四、首陀羅(Śūdra)(奴隷)。是等の各階級は夫々梵王の口・脊・脇・足より生じたりと。今四姓の家とはよき身分の意。

ら共の意を護ること、犛牛の尾を護るが若かれ。』と。『一切に施すこと有れば、終に其の樂を離れず。』とは要當に意を興して一切を慈愍すべし。怨家を視ること赤子の如くせば阿須倫・迦留羅・旃陀羅・摩休勒、人若しは非人も其の便を得ること能はずして、自然に福を受け、快樂無極ならん。是の故に說いて曰く、『一切に施すこと有れば、終に其の樂を離れず。』と。

(二一九)一象の衆象を出づるは、　象中の[二三]六牙なる者なり。　心心自ら平等にして、　獨り曠野を樂しむ。

昔、拘深比丘、鬪訟を好喜し、未だ曾て歡樂せず、山野閑靜の處を樂しまず。爾の時、世尊、數く往いて呵諫したまふ。如來の言教を受けず。如來數ゝ與に法を說きたまふも、肯て承受せざれば、便ち捨てゝ去りたまふ。彼を去ること遠からざるに一象有り。獨り空山に在つて、閑靜無爲なり。象、自ら念言すらく、「我、大衆中に在るの時、衆象の爲めに[二四]嬈逐群せらる。草を食へば則ち弊惡なる草を得て食し、水を飲めば、濁れるを得たり。今日、此に在つて、衆象の爲めに嬈はされず。何ぞ乃ち快なるや。」と。爾の時、世尊、便ち斯の偈を說きたまはく、

一象の衆象を出づるは、　象中の六牙なる者なり。　心心自ら平等にして、　獨り曠野を樂しむと。

如來、此の偈を說き已つて、便ち捨てゝ去りたまふ。

(二二〇)*無害心を以て(せず)、　盡く一切人の爲めにし、　慈心もて衆生の爲めにせば、　彼に怨恨有ること無し。

『無害心を以て(せず)、盡く一切人の爲めにし、』とは盡く當に怨憎恨心を除棄し、一切衆生の類を慈愍すべし。是の故に說いて曰く、『無害心を以て(せず)、盡く一切人の爲めにし、』と。『慈心もて衆生の爲めにせば、彼に怨恨有ること無し。』とは己を視ること彼の身の如くにして異有ること無れ。

【二三】六牙。牙ある動物の優れたる者。

【二四】嬈逐群。多くのものにつきまつはる。

＊ 原漢文は 不以無害心　盡爲一切人 とあり。且く不を除して考へん。

復失ふこと勿れと。

要を取つて之を言へば、世を觀ずることも亦爾り。

(二一七)心に七覺意を念ひ、　意を等しうして差違せざれ。　當に愚惑の意を捨て、　〔二二〕不起忍を樂ふべし。　漏を盡して穢有ること無ければ、　世に於て滅度を取らん。

『心に七覺意を念ひ、意を等しうして差違せざれ。』とは彼の修行の人、覺意の法を修習して晝夜に思惟して懷に捨てざるが如し。是の故に說いて曰く『心に七覺意を念ひ、意を等しうして差違せざれ。』と。『當に愚惑の意を捨て、不起忍を樂ふべし。』とは若しは衆生有つて慈心を起して一切衆生に向はずんば、則ち道に至つて成就する所有らず。要當に愚惑の意を捨つべし。色想に著せずんば、乃ち道眞に應はん。不起法忍をも捨てんことを樂つて、意を等しうして差違せざれ。生滅の意無ければ、乃ち道室に入らん。是の故に說いて曰く『心に七覺意を念ひ、意を等しうして差違せざれ。』と『漏を盡して穢有ること無ければ、世に於て滅度を取らん。』とは彼の修行人、有漏を盡せば、無漏を成じ、心に解脫を得、叡に解脫を得、現法中に於て、自在を得ん。斯の如きの人は無爲の境に入つて、般泥洹を取り、永寂永滅にして更に復生ぜざらん。是の故に說いて曰く『漏を盡して穢有ること無ければ、世に於て滅度を取らん。』と。

(二一八)當に自ら其の意を護ること、　〔二三〕犛牛の尾を護るが若かれ。　一切に施すこと有れば、　終に其の樂を離れず。

『當に自ら其の意を護ること、犛牛の尾を護るが若かれ。』とは心に行道を爲すや、造作無端にして常に當に意を攝して失有らざらしめよ。猶彼の犛牛の晝夜に尾を護つて、斷絕有らんことを恐れ、寧ろ命根を喪はんよりは其の妻息を失はんとし、尾毛をして地に墜落せしめざらんとするがごとし。比丘の學道も亦復是の如し。寧ろ身命を喪ふも、戒を犯さゞれ。是の故に說いて曰く『當に自

〔二二〕不起忍。不起法忍又は無生法忍に同じ。知見の迷を斷じて空理を悟り、それを忍可決定すること。

〔二三〕犛牛。からうし(旄牛)。

久しく停まるべからず。此の四大の身も亦復是の如し。恒に苦しく敗壞して久しく停まることを得ざること彼の朽*弊の如し。亦は好きを盛り、亦は醜きを盛るも磨滅に會歸して、彼の灰燼に就く。此の危脆の身も亦復是の如し。亦は好を受け、亦は醜を受く。受くる所の善なる者は諸善功德もて其の身を瓔珞し、受くる所の惡なる者は不善行に於て其の心を染汚す。命終の後、浪、丘塚に在らん。是の故に說いて曰く、『身を觀ずること空瓶の如く、』と。『心を安んずること城に立つが如かれ。』とは城の牢固にして深塹なる者に立つ所以は但群賊の民物を盜竊することを厭患すればなり。心も亦是の如く、諸の結使に纏裹せらるゝを厭患す。故に城則ち牢固なれば賊、便を得ず、心正しく邪ならずんば、結も便を得ず。是の故に說いて曰く、心を安んずること城に立つが如かれ。』と。『叡を以て魔と戰ふとき、』とは技術已に備はり、六藝具足すれば、則ち能く彼の[二〇]自在天子と共に戰ふべし。是の故に說いて曰く、『叡を以て魔と戰ふとき、』と。『勝を守つて復失ふこと勿れ。』とは以て、婬・怒・癡に勝てば、復餘想無し。恒に意を繫けて前に在らしめ、他の異心無かれ。是の故に說いて曰く、『勝を守つて復失ふこと勿れ。』と。要を取つて之を言へば、世を觀ずることも亦爾り。

(二二八)身を觀ずること聚沫の如く、　焰野馬と解知すべし。　叡を以て魔と戰ふとき、　勝を守つて復失ふこと勿れ。

猶聚沫の生生すれども、便ち滅して久しく停まることを得ざるが若く、此の四大の身も亦復是の如し。聚れば則ち人と爲るも、散ずれば則ち氣と爲る。本、父母に由つて四大を得、其の本末を推すに、皆虛、皆寂なり。之を推すに其の前を見ず、之を尋ぬるに其の後を見ず。生生して滅し、生生して生ず。滅滅して滅し、滅滅して生ず。生ずれども生を見ず。滅すれども滅を見ず。凡夫は所習の顚倒なることを悟らず。是の故に說いて曰く、

身を觀ずること聚沫の如く、　焰野馬と解知すべし。　叡を以て魔と戰ふとき、　勝を守つて

* 弊。恐らくは瓶ならん。

[二〇] 自在天子(Maheśvara)。大自在天ともいふ。色界の頂にゐる三千世界の主。

の諸觀を離れ、正觀を習へ。正觀は意を定むること超越殊勝にして衆定中の尊なり。自ら聖人に非されども、漏盡無著なれば、此の觀定を得。是の故に說いて曰く、『亂觀及び正觀は、皆意に由つて生ずる所、』と。『能く心觀を覺知せよ。愚心は數數亂る。』とは進學の人は當に出要の觀なる空・無想無願觀を習ふべし。心垢を洗除し、世の[一七]八事を捨て、清淨心を修し、諸の相好を解けば、一一虛寂とならん。所說の教誡殊勝にして及び難し。四諦は[一八]如爾なれば、晝夜に修習せよ。愚人は惑を執つて數數意亂る。猶甘美の漿を愚は辛苦と謂ふがごとし。豈聖人を須つも口を擘いて之を與へんや。意迷誤を執れば、革め難きこと斯の如し。是の故に說いて曰く、『能く心觀を覺知せよ。愚心は數數亂る。』と。

(二四)智者は是の如く觀じ、　念者は專ら行を爲す。[一九]咄嗟にも意無著なるは、　唯佛のみ能く此を滅す。

『智者は是の如く觀じ、念者は專ら行を爲す。』とは所謂智者は演說して微を吐き、惑を暢べ、疑を遣れども、人情を豫明し難し。大衆に處在して獨步無侶、數々群黨に問ふらく、「誰か疑惑有る。吾、當に大慧の火を以て汝等の猶豫の聚を焚燒すべし。」と。時に隨つて觀察して意錯亂せず。學人の、所修は此を以て業と爲す。是の故に說いて曰く、『智者は是の如く觀じ、念者は專ら行を爲す。』と。『咄嗟にも意無著なるは、唯佛のみ能く此を滅す。』とは彼の修行人、定三昧を得れば、盡く世俗有漏の行を捨て、亦復世俗の善本、解脫定意をも捨つ。此の者は是れ誰ぞ。惟々佛世尊のみ能く之を捨つるのみ。是の故に說いて曰く、『咄嗟にも意無著なるは、唯、佛のみ能く此を滅す。』と。

(二五)身を觀ずること空瓶の如く、　心を安んずること城に立つが如かれ。　叡を以て魔と戰ふとき、　勝を守つて復失ふこと勿れ。

『身を觀ずること空瓶の如く、』とは猶朽故せる瓶の內外牢からざるが如し。受盛すべしと雖も、亦

【一七】八事。八法なり。

【一八】如爾。眞理のまゝ。

【一九】咄嗟。瞬間。

『靜に在つて自ら修學し、愼んで欲跡を逐ふこと勿れ。』とは常に當に端ら意心の行を執つて、欲意の爲めに鉤連せられざるべし。欲とは人をして迷惑し、尊卑を別たざらしむるものなり。是の故に說いて曰く、『靜に在つて自ら修學し、愼んで欲跡を逐ふこと勿れ。』と。『熱鐵丸を呑むこと莫れ。嘷哭すれども其の報を受けん。』とは火に燒かるれば、骨髓に痛徹し、死して地獄に入り、酸楚萬端なるが如し。熱銅柱を抱へ、熱鐵丸を呑まば、嘷哭すれども、報を受け、訴ふる所を知る靡し。是の故に說いて曰く、『熱鐵丸を呑むこと莫れ。嘷哭すれども其の報を受けん。』と。

(二二)應に起つべきに起たず、力を恃んで精懃ならず。自ら人形の卑に陷つて、懈怠して慧を解かず。

『應に起つべくして起たず、』とは形を起つと謂ふは佛、善知識と伴なるも、然も善功德を造らざるなり。生れて時に遇ふと雖も、人行に益無し。天七寶を雨らし、世界に遍滿せしむるも、愚者は意惑ひ、其の寶を收めず。恒に人形を受くるも、遠慮有らず。名けて人と爲すと雖も、時に益無し。此も亦是の如し。佛世に遭遇し、深法を暢演せらるゝも、愚人は惑に執して肯て承受せず。是の故に說いて曰く、『應に起つべきに起たず、』と。『力を恃んで精懃ならず。』とは行人有り、氣力强壯にして受化するに堪任すれども、然も復懈怠して大いに精懃ならざるなり。是の故に說いて曰く、『力を恃んで精懃ならず。』と。『自ら人形の卑に陷つて懈怠して慧を解かず。』とは自ら生死に陷つて、後世の殃を顧みず。佛世に遭ひ、善知識に遭ひ、賢聖と相遇ふと雖も、肯て慧を受け、義趣を分別せず。是の故に說いて曰く、『自ら人形の卑に陷つて、懈怠して慧を解かず。』と。

(二三)亂觀及び正觀は、皆意に由つて生ずる所、能く心觀を覺知せよ。愚心は數數亂る。

『亂觀及び正觀は、皆意に由つて生ずる所、』とは所謂亂觀とは欲觀・恚觀・無明觀なり。行人、此

り。』とは三十六邪は心に出つて生じ、萬端に流溢して遂に邪見を成ず。是の故に說いて曰く、『幷及に心意より漏るゝなり。』と。『數數邪見有るは、欲想に依つて結ぶ。』とは此の邪見とは乃ち計常見、斷滅見を論ず。此の二邪見は與に相應せず。計常見は斷滅見と相應せず。斷滅見は計常見と相應せず。二人の所見、各各同じからず。是に緣つて邪見は地獄・餓鬼・畜生を牽致し、復三想を起す。欲想・恚想・無明想なり。是の故に說いて曰く、『數數邪見*有るは、欲想に依つて結ぶ。』と。

(二〇)意を捨てんには其の根を放て。人は意に隨つて迴轉す。少しく[一五]名稱を滅することを爲せば、鳥の空林を捨つるが如し。

『意を捨てんには其の根を放て。人は意に隨つて迴轉す。』とは世に多く人有り。五音を好憙す。若し眼に色を見て、眼識を起さば、遂に眼根を成じ、若し耳に聲を聞いて、耳識を起さば、遂に耳根を成じ、若し鼻に香を嗅いで鼻識を起さば、遂に鼻根を成じ、若し舌に味を知つて、舌識を起さば、遂に舌根を成じ、若し身に細滑を知つて、身識を起さば遂に身根を成じ、若し意に法を知つて、意識を起さば、遂に意根を成ぜん。是の故に說いて曰く、『意を捨て其の根を放て。人は意に隨つて迴轉す。』と。『少しく名稱を滅することを爲せば、鳥の空林を捨つるが如し。』とは人の過を爲すや、後慮を顧みざれども、積日に善を爲せしものを失ふこと斯須に在り。諸の檀越施主の爲めに譏論せらるらく、「我等、本、戒具清淨なりと呼べり。何ぞ圖らん。今日、乃ち瑕隙を見んとは。」と。皆共に薄賤して復敬を興さず。猶群鳥の恒に茂林に宿つて[一六]五果の香華の氣味を貪りしが、華果適盡するや、各捨てゝ逝くが如し。犯戒の人も其の喩、此の如し。福盡き、罪至れば、自ら當に除散すべし。是の故に說いて曰く、『少しく名稱を滅することを爲せば、鳥の空林を捨つるが如し。』と。

(二一)靜に在つて自ら修學し、愼んで欲跡を逐ふこと勿れ。熱鐵丸を呑むこと莫れ。嘷哭すれども其の報を受けん。

※ 原漢文は「邪見を漏すは」とあり。

[一五] 名稱。名譽。

[一六] 五果。一、核果。桃李の如きもの。二、膚果。瓜梨の如きもの。三、殼果。胡桃、石榴の如きもの。四、檜果。松柏子の如きもの。五、角果。大豆小豆の如きもの。

故、大聖、三達の智、通ぜざる所靡し。乃ち將來、有我の徒の恚害心を有するを知りたまへり。今重ねて自ら悔い、更に新を造らざらん。』と。爾の時、比丘、漸やく與に甚深の法を說く。卽ち坐上に於て、諸の塵垢盡き、法眼淨を得。法を見、法を得て、畏難する所無かりき。

（一八）心に住息無く、　亦法を知らずんば、　世事に迷つて、　正智有ること無し。

『心に住息無く、亦法を知らずんば、』とは心は池の流れて、制還すべきこと難きが如し。水、泉源を出でゝ晝夜に下流せば、還つて泉源に入らしめんと欲するも、斯を獲ること難し。此の如きの人は正法を知らず。亦復就くべきには就くを知り、捨つべきには捨つるを知ることを知らず。譬へば人有つて聾にして【三】五音を聽き、盲にして燭を執るが如し。是の故に說いて曰く、『心に住息無く、亦法を知らずんば、』と。『世事に迷つて、正智有ること無し。』とは彼の行人の世に貪樂するが如し。邪を信じ、見を倒にし、或は諸神・水火・日月に事へ、先祖・父母・兄弟を祭祀して、意中に正法の功德を得んことを望む。人の空中に宮宅を安んぜんと欲するが如く、甚だ難しと爲す。經文の說の如し。『生を殺し、生を祀るは交ゝ害を受く。』と。是の故に說いて曰く、『世事に迷つて、正智有ること無し。』と。

（一九）＊【四】三十六使の流るゝは、　幷及に心意より漏るゝなり。　數數邪見有るは、　欲想に依つて結ぶ。

『三十六使の流るゝは、』とは三十六邪なり。身邪に三有り。三界に各一有り。邊見に三有り。欲界に一、色界に一、無色界に一なり。邪に十二有り。欲界に四、色界に四、無色界に四なり。見盜に十二有り。欲界に四、色界に四、無色界に四なり。戒盜に六有り。欲界に二、色界に二、無色界に二なり。取つて合して三十六に合す。世人をして迷惑し、正見を覩ざらしむるものなり。是を以て智人は未然に防慮す。是の故に說いて曰く、『三十六使の流るゝは、』と。『幷及に心意より漏るゝな

【三】五音。五種梵音なり。一、正直にして邪曲ならざる音。二、和雅にして粗獷ならざる音。三、清徹にして染濁ならざる音。四、深滿にして淺陋ならざる音。五、周徧にして迫窄ならざる音。

＊　巴利法句經、二四の三三九。

【四】三十六使。五見卽ち一、身見。二、邊見。三、邪見。四、見取見。五、戒禁取見を更に細分せるもの。

人に演布せよ。』と。衆生の聞く者、濟を蒙らざる靡し。一比丘、[九]波羅梨大國の鷄頭園中に有り。數千萬衆の爲めに前後を圍繞せられ、高座に昇り、法教を敷演す。其の法を聞く者、濟を蒙らざる靡し。趣く所に隨行して各其の願を充せり。外國の舊典、內法の儀は寺に入つて法を聽き、及び佛を禮する者は皆當に脫帽すべしとなり。時に國王有り、頭素く髮少く、加ふるに復瘡有り。又且つ脚に[一〇]履屣を著けたり。自ら豪尊を恃み、[一一]氈を以て頭を裹み、內に入つて經を聽かんとし、王、比丘に白すらく『我が與に法を說け。』と。比丘、告げて曰く『如來に敎有り。其れ衆生有つて、脚に履屣を著くる者には與に法を說かざれと。』と。王、聞いて、恚を懷きつゝも即ち履屣を脫す。比丘に語げて曰く『卿、速かに法を說いて、我が情を稱悅ならしめよ。我が本意に違はゞ、當に汝の首を梟すべし。』と。比丘、王に告ぐらく『又復如來の禁戒し忌みたまふ所は頭を覆ふ者の與に法を說かざれと。』と。王、斯の語を聞くや、倍ゝ復瞋恚し、天意を奮赫す。比丘に語げて曰く、『卿、我を辱めんと欲し、今故に[一二]前却するか。我、今、正爾に頭を露はして卿の說法を聽かん。若し吾が疑結を解かずんば、當に汝の身を取つて分つて三分と爲さん。』と。爾の時、比丘、尋で彼の王に向つて斯の偈を說かく、

不淨の意を以てし、　亦及び人を瞋恚せざれ。　法を知らんと欲せば、　(法とは)三耶三佛說なり。　諸有貢高を除き、　心意を極めて淸淨にせよ。　能く傷害の懷を捨つれば、　乃ち正法を聞くを得んと。

王、斯の偈を聞き、慚顏愧形し、即ち起つて坐し、五體を地に投じ、自ら歸して懺悔し、身口意の過を滅せんことを求め、長跪叉手して比丘に白して言く、『不審、此の偈は是れ如來神口の所說と爲すや、是れ尊人、我が心意を知つて然る後に說くと爲すや。』と。比丘、王に告ぐらく『此の偈は乃ち是れ如來神口の所說なり。此に來るや久し。今に適るに非ず。』と。王、自ら思惟すらく『善い

【九】波羅梨大國（Pāṭaliputra）。波吒釐にも作る。十六大國の一。摩揭陀國の首都の地。鷄頭園（Kukkuṭārāma）は單に鷄園ともいふ。阿育王の建立せる精舍あり。

【一〇】履屣、くつ、ざうり。

【一一】氈。細密なる毛織物。

【一二】前却。前へおしやる。要求を拒否す。

蓋の上に在るが如し。使者之を見て、卽ち往いて觀視して、「人中の奇異なる、何ぞ復是に過ぎん。此の人、正應に王位を紹繼すべし。」と。卽ち喚んで覺さしめ、扶けて輿輦に載せ、前後を圍繞して將に王宮に詣らんとす。人、萬歳を稱し、國界淸泰なり。爾の時、世尊、此の二義を觀じ已つて、卽ち斯の偈を說かく、

心を法本と爲す。　心尊く、心に使はる。　中心に惡を念じて、　卽ち言ひ卽ち行はゞ、　罪苦の自ら追ふこと、　車の轍を轢むがごとし。　心を法本と爲す。　心尊く、心に使はる。　中心に善を念じて、　卽ち言ひ、卽ち行はゞ、　福慶の自ら隨ふこと、　影の形に隨ふが如しと。

(一五)念に適止無くんば、　邊(等)を絕無せず。　福の能く惡を遏むることを、　覺る者を賢と爲す。

『念に適止無くんば、邊(等)を絕無せず。』とは夫れ修行人、意を縱にして遊逸し、專一なること能はずんば、正に法を聞くも、心懷を貫かず。所謂『邊(等)を絕無せず。』とは[六]戒・盜・身・邪なり。是の故に說いて曰く、『念に適止無くんば、邊(等)を絕無せず。』と。『福の能く惡を遏むることを覺る者を賢と爲す。』とは夫れ積善の人は永く婬・怒・癡、憍慢の心を去る。斯の如きの人は道を履むに、則ち易し。是れより福慶は漸やく道場に至る。是の故に說いて曰く、『福の能く惡を遏むることを覺る者を賢と爲す。』と。

(一六)不淨の意を以てし、　亦及び人を瞋恚せざれ。　法を知らんと欲せば、　(法とは)[七]三耶三佛說なり。　諸有[八]貢高を除き、　心意を極めて淸淨にせよ。　能く傷害の懷を捨つれば、　乃ち正法を聞くを得ん。

諸佛世尊、恒に天眼を以て三世の事を觀、將來の世を知りたまうて『愚惑なる衆生は自ら憍り、人を懱にし、三寶に事へず。吾が身の世を去るや、遺法存在す。族姓子、汝、吾が經誡を傳へて後

【六】戒・盜・身・邪。之に邊を加へしものを五見といふ。普通の順に從へば、一、身見とは實我實法ありとする我見、我所見。二、邊見とは我が死後常住し、又は斷滅するとなす極端の見。三、邪見とは因果の道理を撥無するもの。四、見取見(盜見)とは劣惡の思想を取るもの。五に戒禁取見とは外道の非理の戒禁によつて福を得んとする見。

【七】三耶三佛說(Samyak-sam-buddha)。三藐三佛陀。譯、正偏智、等正覺。さとり。

【八】貢高。高慢。

瞋恚も亦爾り。憎嫉も亦爾り。憍慢も亦爾り。愛結も亦爾り。

（一三）*心を法本と爲す。　心尊く心に使はる。　中心に惡を念じて、　卽ち言ひ卽ち行はゞ、
罪苦の自ら追ふこと、　車の轍を轢むがごとし。

爾の時、世尊、諸比丘に告げたまはく、『自今以後、先に[五]觀食の偈を說き、然る後に乃ち食せん。』と。舍衞城里に二乞兒有り。衆僧中に至つて乞食す。正に聖衆の未だ觀食の偈を說かざるに値ふ。其の中の一乞兒有り。嫉妬心盛んなれば、便ち惡心を發すらく、「設し我、後に自在を得て、國王と爲らば、當に車輪を以て爾許の道人の頭を轢斷すべし。」と。偈を說きしの後、乞兒、食を乞ひ得て、貲、無央數なり。出でゝ路側に在つて、飽滿して睡眠せしに、數百の群車の路、其の中に由れば、其の頭を轢斷せり。死して地獄に入り、苦を受くること無量なりき。

（一四）*心を法本と爲す。　心尊く心に使はる。　中心に善を念じて、　卽ち言ひ卽ち行はゞ
福慶の自ら隨ふこと、　影の形に隨ふが如し。

彼の第二の乞兒、內心に自ら念ずらく、「設し我、後に富貴を得て王と爲らば、盡く當に供養して、爾許の聖衆をして渴乏せざらしめん。」と。時に彼の乞兒、乞うて本意を充し、尋で出でゝ臥して樹下に在つて睡眠す。神識澹靜にして亂想有ること無し。爾の時、彼の國、國主を喪失し、更に復王者の種を嗣繼するもの無し。群臣百僚、雲集して共に論ずらく、『今、國に主無く、復繼嗣無し。將に人民散在して、久しからずして、國亡び家破れんことを恐る。是に由つて君等を興さん。各各何の方謀もて國をして全在せしめ、民をして異趣無からしめんと欲するか。』と。中に智臣有り、明達第一なり。諸の人民に告ぐらく、『我等、主を失ひ、且つ繼嗣無し。宜しく使を遣はして國界を巡行せしめ、若し咸相福祿の足る者有らば、王位を紹がしめん。』と。卽ち遣はして案行せしむるに、一樹の下に人有つて睡眠せるを見る。日光以て轉ずれども、樹影移らず。蔭、人身を覆ひて、

* 法句經雙要品。巴利法句經一の一。

【五】觀食の偈。食時に食を觀ずると共に身心を觀じ、心道を開くに資す。今五觀の偈あり。曰く、一には功の多少を計り彼の來處を量れ。二には己が德行の全缺を忖つて供に應ぜよ。三には心を防ぎ過を離れよ。四には正に良藥を事とせよ。五には成道の爲めに食を受けよ。

* 法句經雙要品。巴利法句經、一の一。

ち恚を知り、恚有れば恚有ることを知る。』とは怨を怨めば、自ら茲[四]に怨を爲す。自ら怨む者は古より未だ有らず。要當に怨を息め、怨を滅すべし。然る後に乃ち怨無きを知らん。是の故に說いて曰く、『恚有れば則ち恚を知り、恚有れば恚有ることを知る。』と。

(一〇)是の意は自ら造る。　父母の爲るに非ず。　邪を除き定に就き、　福を爲して迴ること勿れ。

意、衆行を造り、身の爲めに患を招く。善を爲し、惡を爲すことは斯は心の造に由る。亦父母・兄弟・宗族・僕從・奴婢の爲す所に非ず。明かに此を審かにする者は乃ち邪より此の塵勞を生ずることを知り、復守護せず、心をして亂れざらしむ。是の故に說いて曰く、

是の意は自ら造る。　父母の爲るに非ず。　邪を除き定に就き、　福を爲して迴ること勿れと。

(一一)＊屋を蓋ふに密ならずんば、　天雨れば則ち漏る。　人惟れ行ぜずんば、　婬怒癡を漏さん。

猶世人の宮殿屋舍を造作するに、亦至密ならずんば、天雨るの日、處として漏らざる無けん。人も其の行を正さずんば、便ち色・聲・香・味・細滑の法を漏さん。亦不淨の觀を思惟せずんば、三毒暴溢の水を漏出せん。是の故に說いて曰く、

屋を蓋ふに密ならずんば、　天雨れば則ち漏る。　人惟れ行ぜずんば、　婬怒癡を漏さんと。

盡く應に偈と爲るべきも、其の要を略說せば、愚癡も亦爾り。瞋恚も亦爾り。慳嫉も亦爾り。憍慢も亦爾り。愛結も亦爾り。

(一二)＊屋を蓋ふに緻密なれば、　天雨るも漏らず。　人自ら惟れ行ぜば、　婬怒癡無けん。

猶至密の人の宮殿屋舍を造作すること緻密なれば、天雨るも漏らざるが如し。人自ら惟れ行ぜば、婬・怒・癡を去つて諸患を漏さず。盡く應に偈と爲るべきも、其の要を略說せば、愚癡も亦爾り。

【四】茲、滋に通ず。

＊法句經雙要品。巴利法句經一の十三。

＊法句經雙要品。巴利法句經一の十四。

捨て、神逝き、澹然虚空にして、肢節形體、各其の本に歸せり。地は地に還歸し、水は水に還歸し、火は火に還歸し、風は風に還歸す。神逝無爲、復更に來つて形を受くるも懼畏せず。是の故に說いて曰く、『梁棧已に壞し、臺閣も摧折す。』と。

（八）心已に行を離るれば、中間已に滅す。　心を輕躁と爲す、　持ち難く護り難し。

『心已に行を離るれば、』とは所謂行とは衆結の首なり。群萠、生死に沈湎する所以は皆造行に由つて斯の災變を致す。聖人は世に降つて精懃自修し、諸の行本を斷じて復生ぜしめず。是の故に說いて曰く、『心已に行を離るれば、』と。『中間已に滅す。』とは三世の法、永く盡きて餘無きなり。是の故に說いて曰く、『中間已に滅す。』と。『心を輕躁と爲す、』とは佛の契經の所說の如し。『我、今心の本の輕躁迅疾なるを說かんに、一日一夜に九百九十九億念有り。念念、想を異にし、造行同じからず。』と。是の故に說いて曰く、『心を輕躁と爲す、』と。『持ち難く護り難し。』とは發心の頃も、善惡の行を造り、善を念ふの心尋で響き、卽ち至間も滯礙無し。惡を念ふの心は響の聲に應ずるが如し。守護せしめんと欲するも、未だ之有らず。猶惡獸の類、虎狼・蛇虺・蝮蠍の屬の若くにして、其の意を將護せしめ、惡を行ぜざらしめんと欲するも、亦未だ曾て聞かず。是の故に說いて曰く、『持ち難く護り難し。』と。

（九）智者は能く自ら正す。　猶匠の箭を搦めて直くするがごとし。　恚有れば則ち恚を知り、
恚有れば恚有ることを知る。

『智者は能く自ら正す。猶匠の箭を搦めて直くするがごとし。』とは夫れ人、行を習ふや、先づ其の形を正せ。恒に苦・空・非身・無我の法を知り、行を思念して以て自ら身を誡めて邪曲ならざらしめよ。猶巧匠の善能く箭を治めて端直無節たらしむるが若し。堪任して敵を御すれば、亦所難無し。是の故に說いて曰く、『智者は能く自ら正す。猶匠の箭を搦めて直くするがごとし。』と。『恚有れば則

暴逸の象を御するが如くにせん。

『汝心を遊行せしめて、恣意にして放逸ならしむる莫れ。』とは心の物爲る猶豫にして定まらず。色・聲・香・味・細滑の法に著すること猶猨猴の果蓏に貪著して、一を捨て一を取り、意專ら定まらざるが如く、心も亦是の如し。萬端に横生し、衆患を造作して捨離する能はず。是の故に說いて曰く、『汝心を遊行せしめて、恣意にして放逸ならしむる莫れ。』と。『我今還つて汝を攝すること、暴逸の象を御するが如くにせん。』とは我、當に不淨觀を以て此の心意を攝して流馳せざらしむること暴象を御して放逸ならしめざる如くにせんとなり。是の故に說いて曰く『我今還つて汝を攝すること、暴逸の象を御するが如くにせん。』と。

（六）*生死量有ること無く、　往來端緒無し。　屋舍を求むる者は　數數胞胎を受けん。

『生死量有ること無く、往來端緒無し。』とは人、生死に處し、劫數を經歷すること稱記すべからず。或は地獄・畜生・餓鬼に在つて、其の中に苦を受くること甚だしく、計るべきこと難し。是の故に說いて曰く、『生死量有ること無く、往來端緒無し。』と。『屋舍を求むる者は數數胞胎を受けん。』とは行跡を滅せずんば、往來息まず。肥白に繋つて形色に貪著すれば、數數胎を受けん。是の故に說いて曰く、『屋舍を求むる者は數數胞胎を受けん。』と。

（七）*此の屋を觀ずるを以て　更に舍を造らず。　梁棧已に壞し、　臺閣も摧折す。

『此の屋を觀ずるを以て、』とは危脆にして牢からず、當に壞敗すべければ、磨滅の法と爲す。正しく[三]安明と巨海をも盡く當に融爛せしむべし。『更に舍を造らず。』とは然る所以は根源と病の所由とを知りたるを以て更に形を受け、五陰の室を造らずとなり。是の故に說いて曰く、『此の屋を觀ずるを以て更に舍を造らず。』と。梁棧已に壞し、臺閣も摧折す。』とは此を論ずる所以は乃ち結使の原本を論ずるなり。身壞し、四大散ずれば、萬物久しく合せず。此れ乃ち成道の人を論ずるなり。形を

＊三。法句經老耗品類似の偈あり。巴利法句經、一一の一五

＊四。巴利法句經、一一の一五

【三】安明。須彌山。

れん。是の故に說いて曰く、『心識極めて愰懅すれば、魔衆に奔馳す。』と。

(三)心の走るは一處に非ず。　猶日光の明の如し。　智者には能く制せらるゝこと、　鉤の惡象を止むるが如し。

『心の走るは一處に非ず。猶日光の明の如し。』とは彼の日光の初めて出づるの時、悉く四方を照して、通達せざる靡きが如く、心も亦是の如く、色・聲・香・味・細滑の法に奔趣す。自ら制して流馳せざらしむること能はず。彼の惡象の凶暴にして御し難きが如し。以て鋼鉤を得ば、然る後に乃ち制せん。是の故に說いて曰く、

心の走るは一處に非ず。　猶日光の明の如し。　智者には能く制せらるゝこと、　鉤の惡象を止むるが如しと。

(四)我、今此の心を論ぜんに　牢きこと無く見るべからず。　我、今訓誡して、　愼んで瑕隙を生ずること莫らんと欲す。

『我、今此の心を論ぜんに、牢きこと無く見るべからず。』とは彼の修行の人、其の一意を專らにし、心を繫けて前に在らしめ、若干の方便を以て其の心を誨責せよ。汝の心本に由つて無數劫中、生死を經歷し、身を捨て身を受くること稱記すべからず。或は三塗八難の處に在り、或は天上・人中に在つて往來す。「我、今人と爲つて佛の聖法に遭ふ。宜しく本來の染著の想を捨つべし。」と無數の方便を以て心を誨責し已れ。復更に心に告げよ。「汝は今輕脆にして恃怙すべからず。」と。此に於て身を見ば、當に愛結を盡すべし。是の故に說いて曰く、

我今此の心を論ぜんに、　牢きこと無く見るべからず。　我今訓誨して　愼んで瑕隙を生ずること莫らんと欲すと。

(五)汝心を遊行せしめて、　恣意にして放逸ならしむる莫れ。　我今還つて汝を攝すること、

巻の第二十八

心意品第三十二

(一)*輕ければ護持し難く、　欲の居る所と爲る。　心を降すを善と爲す。　以て降せば便ち安し。』

『輕ければ護持し難く、』とは如來世尊の世に出現したまふは正に人心を降伏し、穢惡の行を去らんと欲してなり。彼の修行の人の恒に自ら思惟して心の與に論を設くるが如し。所謂心とは衆禍を招致し、人をして地獄・餓鬼・畜生の道に入らしむるものなり。是の故に說いて曰く、『輕ければ護持し難く、』と。『欲の居る所と爲る。』とは彼の修行人、病の興る所を觀ずるに、皆因緣有り。欲の源を究むるに斯は心意に在り。猶盜賊の嶮に依つて劫盜するが若し。設し嶮無くんば、患を生ずるに由無し。欲も亦是の如し。心を窠窟と爲す。展轉流馳して以て災患を成す。是の故に說いて曰く、『欲の居る所と爲る。』と。『心を降すを善と爲す。以て降せば便ち安し。』とは人能く心を降せば、彼の壽を記せざるも、至る所の到處にて人の爲めに敬せられ、壽終の後、漏盡き、意解け、滅盡泥洹を得ん。是の故に說いて曰く、『心を降すを善と爲す。以て降せば安し。』と。

(二)魚の旱地に在つて、　以て深淵を離るゝが如く、　心識も極めて　[三]惶懼すれば、　魔衆に犇馳す。

『魚の旱地に在つて、以て深淵を離るゝが如く、』とは猶彼の魚、以て淵を失へば、地に宛轉するが如く、心意も煩惱すれば、自在を得ず。是の故に說いて曰く、『魚の旱地に在つて、以て深淵を離るゝが如く、』と。『心識も極めて惶懼すれば、魔衆に犇馳す。』とは猶彼の岸上に魚、跳踉せば、自在なるを得ず。心亦是の如し。諸の結使を馳趣せしめて能く自ら止めずんば、便ち衆邪の爲に便を得ら

* 法句經心意品、小異す。
【一】輕ければ。心が輕躁なれば。
【三】惶懼。おそれおびゆる貌。

（四一）所在に賢人有り。　欲穢垢に著せず。　正しく苦樂に遭へども　害心を興さず、

『所在に賢人有り。欲穢垢に著せず。』とは聖人の世に處するや、多く自ら隱遁し、欲想に著せず、欲垢を興さず。所謂賢人とは阿那含、阿羅漢なり。是の故に說いて曰く、『所在に賢人有り。欲穢垢に著せず。』と。『正しく苦樂に遭へども、害心を興さず。*』とは苦樂に遭ふと雖も、想著を興さざるなり。是の故に說いて曰く、『正しく苦樂に遭へども、害心を興さず。』と。

＊　原漢文は心皆意となれり。

と。『勝負は自然に興り、竟に獲る所有らず。』とは如し人、世に處する、貴賤も無常なり。或は轉輪聖王と爲るも、後に便ち[二三]粟散の諸王と爲らん。一尊一卑、或は高く、或は下し。唯賢聖の道のみ有つて尊卑高下有ること無し。是の故に說いて曰く、『勝負は自然に興り、竟に獲る所有らず。』と。

(三九)諸人[二四]樂壽を得んと欲すれば、能く彼の輕報をも忍べ。忍ぶとは人に忍ぶなり。忍ばざれば諸く有に處らん。

要を取つて之を言ひ、其の義を略說せんに、[二五]害せざるに害を生じ、惱まさゞるに惱を生じ、恚らざるに恚を生じ、怨まざるに怨を生ずるなり。上の如く異ること無し。

諸(人)樂壽を得んと欲すれば、惑に於て惑ふこと無れ。惑とは人に惑ふことなり。我に斯の惑有ること無く、諸(人)樂壽を得んと欲すれば、終已に結著無れ。當に念食を食すること、彼の光音天の如くなれ。恒に念を以て食と爲せば、意身燒かるゝこと無し。

(四〇)村野に苦樂を見るも、彼此に燒かるゝこと無れ。[二六]更樂に値ふと雖も跡に、跡無ければ焉んぞ更有らん。

『村野に苦樂を見るも、彼此に燒かるゝこと無れ。』とは人の修道するや、或は城傍に在り、村に依つて住し、或は曠野無人の處に在り、或る時は苦衆くして人の痛心せるに遇ひ、時には復樂をも以て歡と爲さゞるに遭はんも、更樂を興し、[二七]十二緣病を起さゞれ。彼とは彼の[二八]六塵、此とは此の六情なり。是の故に說いて曰く、『村野に苦樂を見るも、彼此に燒かるゝ無れ。』と。『更樂に値ふと雖も跡に、跡無ければ焉んぞ更有らん。』とは人の世に處するや、心恒に放逸にして先更、後樂せば、遂に罪根を增さん。或る時は彼の地獄の更樂を生ずるも、更無ければ、則ち跡も無し。亦復地獄の更樂有ること無し。是の故に說いて曰く、『更樂に値ふと雖も跡に、跡無ければ焉んぞ更有らん。』と。

【二三】粟散の諸王。あはつぶを散らしたる如き小國の王。

【二四】樂壽。安樂長壽。

【二五】害せざるに害を生じ云々。積極的な迫害を爲さずして他より害を受くとなり。之は忍ばざるに依る。以下之に倣ふ。

【二六】更樂(Phassa)。觸ともいふ。知覺經驗。

【二七】十二緣病。十二因緣によつて存する迷の人生を病に比したるなり。

【二八】六塵。色塵・聲塵・香塵・味塵・觸塵・法塵。

『樂有つて惱有ること無きは、正法を多聞すればなり。』とは彼の入定の人、晝夜禪寂にして定意を離れず、空・無相・(無)願を以て遊觀を爲せば、當に復身、苦行に遭ふと雖も、神寂無爲にして傷損する所無きが如く、彼の行人も瞋恚心無くして群萠を慈愍して己と異ること無きが如かれ。是の故に說いて曰く、『樂有つて惱有ること無きは、正法を多聞すればなり。』と。『設し損する所有るを見るは、人人、色に於て貪ればなり。』とは彼の學者、彼の根源を觀るに、婬・怒・癡の病は衆禍の首なり。皆欲を起し、心意を怒らし、共に相染汚して以て大患を成ずれば、便ち能く生老病死・愁憂苦惱・衆患の源を脫する能はず。是の故に說いて曰く、『設し損する所有るを見るは、人人色に於て貪ればなり。』と。」

(三七)結無ければ世に善く壽く、　大法は結の源を知る。　人當に結瑕の、　人人の心を縛著し、　亦色を縛するの本なるを明むべし。

結無きの人は婬・怒・癡・盡き、復俗なる衆結の本を樂はず、怨讎、恚心亦復興らず。明人の所鑒は能く斯病を斷ず。既に自ら病を去り、復他人を治して病有ること無からしむ。亦復衆色に著することを念はず、利衰毀譽にも其の心動かさゞれ。是の故に說いて曰く、

結無ければ世に善く壽く、　大法は結の源を知る。　人當に結瑕の、　人人の心を縛著し、

亦色を縛するの本なるを明むべしと。

(三八)一切辱苦を受くると、　一切己が樂に任すると、　勝負は自然に興り、　竟に獲る所有らず。

『一切辱苦を受くると、一切己が樂に任すると、』とは人、困厄に遭はゞ、意、舒ぶることを得ず。人の顏色を瞻ては恒に意を失はんことを恐る。自恣の人は意の如く所に隨つて、念へば則ち至ること響の聲に應ずるが如し。是の故に說いて曰く、『一切辱苦を受くると、一切己が樂に任すると、』

『是の如き等を見るの人は、愛欲の泥を免る。』とは彼の修行人、等解脫を得、復罣礙無くば、愛欲の深泥を免れて便ち生死の岸を離るゝことを得ん。是の故に說いて曰く『是の如き等を見るの人は、愛欲の泥を免る。』と。『去るも亦處所無ければ、以て無動の樂を獲ん。』とは是の如きの類は神と冥合して、空體を識らん。亦復東西南北四維上下を知らず。來も亦從つて來る所を知らず、去も亦從つて去る所を知らず。猶熱鐵丸の漸漸に冷ならんと欲して熱の湊る所を知らず、亦復、冷の所在を知らざるが如し。是の故に說いて曰く『去るも亦處所無ければ、以て無動の樂を獲ん。』と。

(三二五)中間に恚有ること無く、變易して停まらざる有れ。憂を除き愁有ること無く、寂然として世有を觀よ。

『中間に恚有ること無く、』とは所謂恚とは人心を染汚して道に至らしめざるもの、唯無垢の人のみ有つて、乃ち能く此の恚怒の心を免る。是の故に說いて曰く『中間に恚有ること無く、』と。『變易して停まらざる有れ。』とは世に多く人有つて、行に輕重有り、操々擧ぐるに、同じからず。或は冥契の運、至つて結使を造らざる有り。或は知つて故らに犯し、以て塵勞を興す有り。是を以て聖人は誠を後生に布き、行を執るの人をして既往の失を改め、將來の禍を絕たしめんと欲す。貪學の人、之を翫ひ之を寶として未だ心より墜さずんば、便ち能く進んで賢聖の室に適かん。然る後に方に聖法の崇ぶべく、穢法の近づくべからざるを知る。是の故に說いて曰く『變易して停まらざる有れ』と。『憂を除き愁有ること無く』とは彼の修行人の如し。永く愁憂の本を拔けば、樂根と共に相應し、寂然として世變を觀ること、彼の幻の野馬の如し。是の故に說いて曰く『憂を除き愁有ること無く、寂然として世有を觀よ。』と。

(三二六)樂有つて惱有ること無きは、正法を多聞すればなり。設し損する所有るを見るは、人人色に於て貪ればなり。

【三二】等解脫。三世諸佛に平等なる、一切の邪妄を離れて普遍なる解脫をいふ。等正覺に同じ。

【三三】冥契の運。前生に約せる運命。

彼の行人の無漏の慧觀を以て、欲愛・色愛・無色愛の身行・口行・意行を滅し、[三〇]身三・口四・意三を除き、永く盡きて餘無く、五陰の興起する本末を解知し、更に復三有の行に著せざるが如し。是の故に說いて曰く、

盡く諸の愛欲を斷じ、及び一切の行を滅し、幷びに五陰の本を滅し、更に三有を受けざれと。

(三三)義興れば則ち樂有り。朋友も福樂を食む。彼の滅の寂然たる樂も、展轉して人に普及す。苦は樂と爲るの本たり。

『義興れば則ち樂有り。朋友も福樂を食む。』とは猶商賈の人の如し。形を勞らし、體を苦しめ、危險を冒涉して、重寶を採致し、安隱に家に還れば宗族慶賀し、男女大小、歡喜せざる靡し。朋友の同伴せるものも皆悉く恩を蒙る。(之は)開意惠施せしめて、普く一切に及ぼすが若し。復衆苦無く、樂を以て本と爲し、宗族娛樂して捨離する能はず。是の故に說いて曰く、

義興れば則ち樂有り。朋友も福樂を食む。彼の滅の寂然たる樂も展轉して人に普及す。苦は樂と爲るの本たりと。

(三四)猶彼の火爐の、赫焰の熾然なるも、漸漸に滅に還り、湊る所を知らざるがごとし。是の如き等を見るの人は愛欲の泥を免る。去るも亦處所無ければ、以て無動の樂を獲ん。

『猶彼の火爐の、赫焰の熾然なるも、』とは猶彼の匠も火燒せる鐵丸の極めて自ら熾然たるには甚だ近づくべきこと難きが如し。是を以て聖人は衆生の類の婬・怒・癡の火を觀るに、而も自ら燒炙するを自ら覺知せず。是の故に說いて曰く、『猶彼の火爐の、赫焰の熾然なるも、』と。漸漸に滅に還り、湊る所を知らざるがごとし。』とは彼の熱鐵丸の漸漸に冷に至つて、熱の湊る所を知らず、亦復冷の所在を知らざるが如し。是の故に說いて曰く、『漸漸に滅に還り、湊る所を知らざるがごとし。』と。

【三〇】身三。殺生・偸盜・邪淫。口四。妄語・綺語・兩舌・惡口。意三。貪欲・瞋恚・邪見。

貪著し、五趣に流轉し、周つて復始む。謂つて得道、永く滅して起らずと爲す。是の故に說いて曰く、『世俗の歡樂と及び彼の天上の樂との如きは』と。『此に名けて愛盡と爲す。十六に未だ一をも獲ず。』とは其れ行人有り、先づ愛根を斷じ、永く枝葉を去つて、意に執つて懼を懷き、惡を未然に防がば、後に無漏の樂を得て、遊心自然ならん。(之は)十六分中に於て、未だ其の一をも得ず。是の故に說いて曰く、『此に名けて愛盡と爲す。十六に未だ一をも獲ず。』と。

(三一)能く重擔を捨てゝ、　更に重擔を造らざれ。　重擔は世の苦なり。　能く捨つるは最も快樂たり。

『能く重擔を捨てゝ、更に重擔を造らざれ。』とは人、重擔を負つて、嶮難の處を經過するに、負ふ所は旣に不要にして世俗の不急の貨なり。亦金銀・珍寶・車渠・馬瑙・眞珠・琥珀に非ざるが如し。乃ち是れ世俗不要の貨なり。傍人、諫語すらく、『君の負ふ所を觀るに、是れ眞寶に非ず。何ぞ之を捨てゝ更に眞を求めざる。』と。其の人、卽ち捨てゝ更に眞なる者を求む。此の衆生を觀るに、亦復是の如し。五陰身を負うて欲界に遊處し、生死に宛轉して出づることを得る能はず。聖人、告げて曰く、『汝、今負ふ所の五陰の形は穢漏臭處、何ぞ是を負うことを爲すや。宜しく速かに捨て、更に輕き者を求むべし。』と。爾の時、衆生、卽ち方便を設けて、欲界の形を捨て、色界の身を受く。已に色界の身を受くるや、聖人、復往いて彼の教化に就き、身を捨てしめて、無漏智　[19]五分法性に就かしむ。是の故に說いて曰く、

能く重擔を捨てゝ、　更に重擔を造らざれ。　重擔は世の苦なり。　能く捨つるは最も快樂たりと。

(三二)盡く諸の愛欲を斷じ、　及び一切の行を滅し、　幷びに五陰の本を滅し、　更に三有を受けざれ。

【一九】五分法性。五分法身の體性としての戒・定・慧・解脫・解脫智見。

及び世人の能く測度する所に非ず。亦國王、群臣百僚の（能く測度する所に）非ず。男、婦を娶らず、女、門を出でず。我が甘饌飲食を辦具する所以は淸旦に佛及び比丘僧を請じて家に在つて供養するなり。』と。阿那邠坻、佛の名號及び比丘僧を聞き、衣毛〔一七〕悚竪し、悲しみ且つ喜ぶ。尋で佛の所に往き、頭面禮足し、一面に在つて坐す。斯須にして退坐し、前んで佛に白して言く、『伏して惟るに、天尊、居を興すこと輕利に遊歩すること〔一八〕康彊なり。聞かまくは、儞に此に在つて善眠することを得たまふや。』と。爾の時、世尊、阿那邠坻の與に、斯の偈を說きたまはく、

一切は善眠を得、梵志は滅度を取る。欲の爲めに染せられずんば、盡く諸處を脫し、盡く不祥の結を斷ず。内なる煩熱を降伏すれば、永く息みて睡眠を得、心識、悉く淸徹すと。

（二一九）愼んで樂に著すること莫れ。當に來行を就護すべし。當に世を捨てんことを念じ、快樂の事を觀ずべし。

『愼んで樂に著すること莫れ。當に來行を就護すべし。』とは夫れ人、學道は苦しまずんば、成らず。要當に須く苦しむべし。然る後に乃ち成ぜん。世の俗禪及び俗解脫を捨て、無漏禪、無漏解脫を修せよ。是の故に說いて曰く、『愼んで樂に著すること莫れ。當に來行を就護すべし。』と。『當に世を捨てんことを念じ、快樂の事を觀ずべし。』とは人、小樂に遇はゞ、當に更に求索して其の樂本を弁すべし。是の故に說いて曰く、『當に世を捨てんことを念じ、快樂の事を觀ずべし。』と。

（二二〇）世俗の歡樂と、及び彼の天上の樂との如きは、此に名けて愛盡と爲す。十六に未だ一をも獲ず。

『世俗の歡樂と、及び彼の天上の樂との如きは、』とは世俗の樂とは欲界の樂なり。及び彼の天樂とは色界の樂なり。衆生の類、長夜の中、五趣に迷惑して、眞を寘くるを知らず。世俗の禪福の報に

〔一七〕悚竪。おそれて立つ。

〔一八〕康彊。すこやか・ちやうぶ。

の家必ず慶を蒙る。

『人尊は甚だ遇ひ難し。終に虚しく生を託さず。』とは億千萬劫にも值遇すべからず。所謂人尊とは諸佛世尊是なり。所謂生るゝの處は其の種は清淨に、父母は、眞正に、其の家は饒財多寶・七珍具足・金銀・珍寶・車渠・馬瑙・眞珠・虎珀・象馬・車乘・渇乏する所無し。所生の國土は上下和穆し、共に相順從す。是の故に說いて曰く、『人尊は甚だ遇ひ難し。終に虚しく生を託さず。』と。『設し當に生を託すべきの處は、彼の家必ず慶を蒙る。』とは眷屬は成就し、中國に處在して邪僻に在らず。是の故に說いて曰く、『設し當に生を託すべきの處は、彼の家必ず慶を蒙る。』と。

（二八）一切は善眠を得、　梵志は滅度を取る。　欲の爲めに染せられずんば、　盡く諸處を脫し、
　盡く不祥の結を斷ず。　内なる煩熱を降伏すれば、　永く息みて睡眠を得、　心識悉く
　淸徹す。

昔、佛、成道して未だ久しからず、[12]初めに五人を、次後に五人と江村の十三人と、賢士衆中の三十七人とを度す。佛と通じて六十一人なり。爾の時、世尊、諸弟子に告げたまはく、『汝等各各四面に敎化して、閻浮利地の人を度せ。吾は獨り江水の側に往詣せんと欲す。』と。[13]三迦葉の師徒千人を度し、次に舍利弗、目揵連を度し、次に洴沙王を度し、羅閱城迦蘭陀竹園の所に在り。爾の時、[14]阿那邠坻長者、少しく俗緣有つて、羅閱城中に來至し、大長者に造り、寄住を得んと欲し、正に彼の家の男女僕從、各各作役し、或は薪を破つて火を然し、或は生を炊いで食を熟にし、或は坐具、[15]氍氀、毾㲪を布置するに値ふ。是の時、長者、躬ら高座を敷き、繒旛蓋を懸け、香汁を地に灑ぐ。是の時、阿那邠坻長者、彼の長者に問ふらく、『貴家今日、[16]辦具待賓の調、亦小節に非ず。國王の舍を過らんことを請はんと欲するが爲めか。是れ貴家の男の娶らんと欲し、婦女の嫁がんと欲するが爲めか。願はくは其の意を聞かん。』と。其の主、報へて曰く、『我、今、辦ずる所の餚饌の具は亦天

【一二】初めに五人……。五比丘と稱せらるゝもの。卽ち憍陳如(Kauṇḍinya)、摩訶那摩(Mahānāma)、跋波(Vāṣpa)、阿捨婆闍(Aśvajit)、跋陀羅闍(Bhadraja ?)なり。次後に五人とは耶舍(Yaśas)、と其の友人四人。卽ち滿願(Pūrṇaji)、善臂(Subāhu)、離垢(Vimala)、牛主(Gavampati)。江村の十三人と賢士衆中の三十七人とは耶舍少年時代の交友なり。以上を六十一阿漢といふ。佛は六十人の布敎師を得たるなり。

【一三】三迦葉。迦葉姓の三人の兄弟、長を優樓頻螺迦葉(Uruvelvā-kāśyapa)、中を那提迦葉(Nādī-kāśyapa)、末を伽耶迦葉(Gayā-kāśyapa)。

【一四】阿那邠坻(Anāthapiṇḍada)。又阿難賓低と書く。譯給孤獨。本名は須達多。祇園精舍を建てし人。增壹阿含經卷四十九參照。

【一五】氍氀、毾㲪。毛織の敷物。

【一六】辦具待賓の調、諸道具を整頓し、賓客を待遇せんとする準備。

くも、究竟せざるは皆怒を與すに由る。是の故に說いて曰く、『慢を滅して邪無きは快し。』と。

(二一五)諸賢を視るを得るは樂し。　同會するも亦復樂し。　愚と從事せざれば、　故きを畢るまで永へに以て樂し。

『諸賢を視るを得るは樂し。同會するも亦復樂し。』とは賢聖の人は道果以て具し、衆德悉く備はる。義に修學積行する所、乃ち共の恭敬有るを致す。永く賢に事ふる者は後に其の樂を受け、財業無數となり、家人和穆し、宗族日に熾んなり。是の故に說いて曰く、『諸賢を視るを得るは樂し。同會するも亦復樂し。』と。『愚と從事せざれば、故きを畢るまで永へに以て樂し。』とは善人は德を修め、良伴を慕求す。惡知識を見ては終に以て遠離す。然る所以は惡人の與くる所は終に善行無し。人より墮して冥きに在つて、大明を視ず。是の故に說いて曰く、『愚と從事せざれば、故きを畢るまで永へに以て樂し。』と。

(二一六)如し愚と事に從へば、　無數日をも經過せん。　愚と同居するの難きは　怨憎と會ふが如し。　智と同處するの易きは　共に親親と會ふが如し。

『如し愚と事に從へば、無數日を經過す。』とは若し彼の行人、愚と事に從へば、晝夜に墮落して生死に墜在し、億佛過去するも、濟度を蒙らざらん。是の故に說いて曰く、『如し愚と事に從へば、無數日を經過す。』と。『愚と同居するの難きは、怨憎と會ふが如し。』とは怨憎と會ふは苦難なり。皆無明に由るが故に、良師を逐はず、善知識と事に從はず。是の故に說いて曰く、『愚と同居するの難きは、怨憎と會ふが如し。』と。『智と同處するの易きは、共に親親と會ふが如し。』とは智人の學ぶ所は必ず上に當ふ。相見るに及べば、同じく歡ぶ。先に笑つて後に語り、和顏悅色にして內外清泰、諍訟有ること無し。是の故に說いて曰く、『智と同處するの易きは、共に親親と會ふが如し。』と。

(二一七)人尊は甚だ遇ひ難し。　終に虛しく生を託さず。　設し當に生を託すべきの處は、　彼

脫するは樂し。

『持戒完具するは樂し。』とは其れ衆生有つて、持戒する者に遇はゞ、承事供養し、隨時に瞻視せよ。後に其の報を獲、無爲に安處し、快樂自由ならん。是の故に說いて曰く、『持戒完具するは樂し。』と。『多聞廣知なるは樂し。』とは復衆生有つて、多聞の人に遭遇し、其の敎を承受し、一一に名身・句身・味身を失はず、義理通達し、尋究して義を暢べよ。聞けば便卽ち悟り、復重ねて受けざれ。是の故に說いて曰く、『多聞廣知なるは樂し。』と『眞人を覩見するは樂し。行跡を解脫するは樂し。』とは設し衆生有つて、德本を宿植せば、賢聖に遭遇し、彼の羅漢に値つて、滅盡定及び空寂定を得ん。其れ衆生有つて眞人に施さば、現身に報を獲、錢財集聚し、所願、意の從にして願として果さゞる無く、諸の結使に於て、永く所染無けん。是の故に說いて曰く、『眞人を覩見するは樂し。行跡を解脫するは樂し。』と。

(二四)駛水淸涼なるは樂し。　法財自ら集まるは快し。　智を得て明慧なるは快し。
　　慢を滅して邪無きは快し。

『駛水淸涼なるは樂し。』とは猶駛河の澄靜淸涼にして聲響微細なるが、物を傷害せず、甘甜極美なるが若し。學者、貪る所多ければ、成就する所も(多し)。是の故に說いて曰く、『駛水淸涼なるは樂し。』『法財自ら集まるは快し。』とは所謂法財とは法を以て合集して、物理を抂げざるなり。縣官・盜賊・水火・災變の爲めに侵欺せられず。何を以ての故に。皆正法に由つて、其の財利を獲、人物を抂げざるが故に其をして然らしむるなり。是の故に說いて曰く、『法財自ら集まるは快し。』と。『智を得て明慧なるは樂し。』とは彼の學人、世間の第一智を得るが如し。盡く能く一切の衆法を分別し、普く光明を放ち、接悟する所有るなり。是の故に說いて曰く、『智を得て明慧なるは快し。』と。『慢を滅して邪無きは快し。』とは人、憍慢を懷けば、必ず人を淩懱す。永劫より以來、善德を懷

て供養、供給を須ひられん。出家梵志は身を懃め、體を苦しめて、縛著を斷ぜんことを求め、所行は清淨にして惡本を造らざれ。是の故に說いて曰く、『世に沙門有るは樂し。靜志の樂も亦然り。』と。

（一二）諸佛の興出するは樂し。　說法を堪受するは樂し。　衆僧の和するも亦樂し。　和すれば則ち常に安けさ有り。

『諸佛の興出するは樂し。』とは如來の出現は甚だ遇ふべからず。猶優曇鉢華の數千萬劫に時時に乃ち出づるが若し。爾の時、群生、優曇鉢華を見、各各歡喜して自ら相謂つて言く、『如來の世に降るや、將に久しからざるに在らんとす。瑞應、已に現ず。豈虛有らんや。』と。古昔の經籍、自ら明文有り。『若し此の華有つて世に出現せば、如來の出世も亦復久しからじ。諸天世人、共に相慶賀す。皆供養の具を設け、遲かに如來の光相形容を覩たてまつれ。』と。是の故に說いて曰く、『諸佛の興出するは樂し。』と。『說法を堪受するは樂し』とは佛、初め得道するや、衆相具足し、七七四十九日、寂然として入定したまひ、衆生の與に法味を敷演したまはず。後、梵天の爲めに請はれ、便ち四部の衆と比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷と諸天・龍・神・揵沓和・阿須倫・旃陀羅・摩休勒・人と非人との與に善法を暢演したまふ。群生、恩を蒙り、濟度せざるは靡し。是の故に說いて曰く、『說法を堪受するは樂し。』と。『衆僧の和するも亦樂し。和すれば則ち常に安けさ有り。』とは衆とは其の事一に非ず。或は四、或は八、或は無數に至る。如來の衆は最も第一と爲す。如來の衆中、（一〇）四雙八輩（一一）十二賢士有り。諸有衆生の徒、競ひ來つて供養す。聖衆を修敬する者は福を獲ること無量なり。斯の如き福田は道果を出生す。良と爲し、美と爲し、無旱霜と爲す。隨意の所願、剋獲せざる靡し。聖衆の貴ぶ所は唯和を上と爲す。是の故に說いて曰く、『衆僧の和するも亦樂し。和すれば則ち常に安けさ有り。』と。

（一三）持戒完具するは樂し、　多聞廣知なるは樂し。　眞人を覩見するは樂し。　行跡を解

【一〇】四雙八輩。前卷一七一頁見よ。

【一一】十二賢士。賢士とは在家の菩薩をいふ。

『耆老の戒を持つは樂し。』とは夫れ學道の人、年耆艾なりと雖も、勞苦を辭し、中ろにして退心し、復年少なりと雖も、目を盛んにして世榮を視て、復懈怠せざれ。道の心に在るや、老少を問はず。唯剛烈在つて乃ち道に至らんのみ。信心以て存せば、何くに往くとしてか、剋たざらん。是の故に說いて曰く、『耆老の戒を持つは樂し。』と。『信有つて成就するは樂し。』とは人に信心有れば、四事も動かし難し。正しく佛形に化作して、諸の光明を現じ、來つて詭調せんと欲する者も心をして移轉せしむる能はず。是の故に說いて曰く、『信有つて成就するは樂なり。』と。『義趣を分別するは樂し。』とは人の辯才は皆宿行に由る。億千萬劫に乃ち其の辯を獲。言教を出すと雖も、諸義を分別し、一一の所趣に次緒を失はず、一句義より演じて百千に至るも、終に麁獷の言を吐出さゞれ。是の故に說いて曰く、『義趣を分別するは樂し。』と。『衆惡を造らざるは樂し。』とは夫れ人、惡無ければ、天上に生れ、人中に福を受けん。是の故に說いて曰く、『衆惡を造らざるは樂し。』と。

（二二）世に父母有るは樂し。　衆聚りて和するも亦樂し。　世に沙門有るは樂し。　靜志の樂も亦然り。

『世に父母有るは樂し。衆聚りて和するも亦樂し。』とは佛の契經の所說の如し。父母の恩重きことは記するを得べからず。若し孝子をして其の恩に報いしめんと欲せば、右肩に父を負ひ、左肩に母を負ひ、生れてより長ずるに至るまで、天地を周行し、百千劫を經るも、亦父母一日の恩に報いること能はず。何を以ての故にとなれば、皆父母に由つて五陰を長養し、六情に敷張し、光明を視せしめられ、燥を推し、濕に居り、時に隨つて扶持せられしなり。是を以て孝子は恩を報ぜんと欲すと雖も、百千分に其の一を獲す。是の故に說いて曰く、『世に父母有るは樂し。衆聚りて和するも樂し。』と。『世に沙門有るは樂し。靜志の樂も亦然り。』とは出家學道し、諸の恩愛を斷じ、家業を離棄し、恒に三業を行つて、其の操を失はざれば、復百千の群生の爲めに愛念せられ、時に隨つ

【九】耆艾。としより。艾は頭よもぎの如く蒼白なるをいふ。

洹す。是の故に說いて曰く、『善く經行を樂しみ、山藪に處ることを樂しめ。』と。

(一八)已に安樂處に逮べば、　現法にして無爲となる。　已に諸の恐懼を越ゆれば、　世の諸の染著をも超ゆ。

『已に安樂處に逮べば、現法にして無爲となる。』とは彼の修行人の如し。有餘泥洹界に於て、眞法を自ら娛樂し、漸漸に乃ち滅盡泥洹界に至る。是の故に說いて曰く、『已に安樂處に逮べば、現法にして無爲となる。』と。『已に諸の恐懼を越ゆれば、世の諸の染著をも超ゆ。』とは已に道跡を見れば、諸の苦難を越え、世の諸の染著を超え、三界を行過し、衆の爲めに福田を祐く。是の故に說いて曰く、『已に諸の恐懼を越ゆれば、諸の染著をも超ゆ。』と。

(一九)善く念待を樂しみ、　善く諸法を觀ぜよ。　善い哉世の無害、　衆生の類を育養せるや。

世に欲愛の樂無く、　諸の染著の意を越え、　能く己が憍慢を滅せよ。　此を第一樂と名く。

如來、降神して王家に來適したまひ、世の非常、萬物の幻の如きを觀じ、世の王位を捨てゝ深山に學道し、積年苦行して、樹王の下に坐して等正覺を成じたまひ、七日七夜、樹を觀て眴きせられず。如來、爾の時、即ち坐より起つて、文鱗龍王の所に詣り、彼の宮殿に至つて、斯の偈を說きたまはく、

善く念待を樂しみ、　善く諸法を觀ぜよ。　善い哉世の無害、　衆生の類を育養せるや。　世に欲愛の樂無く、　諸の染著の意を越え、　能く己が憍慢を滅せよ。　此を第一樂と名くと。

龍、此の偈を聞いて心開け、意解け、眼目開くを得て、如來の形を視たてまつり、愴然として涙を揮ひ、自ら宿舋を鄙しめり。

(二〇)耆老の戒を持つは樂し。　信有つて成就するは樂し。　義趣を分別するは樂し。　衆惡を造らざるは樂し。

【八】愴然。いたみかなしむ貌。

法を愛するものは善く眠寐し、　心意潔く清淨たり。　賢聖の說く所の法は、　智者の娛樂する所なりと。

(一六)若し人、心に禪を樂しまば、　亦復樂起らざらん。亦四意止を樂しめ。　幷びに七覺意と　及び彼の四神足と　賢聖八品道とを(樂しめ)。

『若し人、心に禪を樂しまば、亦復樂起らざらん。』とは彼の修行人、禪を樂しむ所以は無餘洹泥界を欲して滅度を取り、不起不滅たらんとなり。是の故に說いて曰く、『若し人、心に禪を樂しまば、亦復樂起らざらん。』と。『亦四意止を樂しめ。幷びに七覺意と、』とは結を止めて起さゞる、之を意止と謂ふ。覺悟する所有るが故に覺意と謂ふ。是の故に說いて曰く、『亦四意止を樂しめ。幷びに七覺意と、』と。『及び彼の四神足と、賢聖八品道とを(樂しめ)。』とは夫れ神足法は亦結使を斷ず。現法中に於て、快樂無爲なり。賢聖八品道は現法中に於て、亦結使を斷じ、快樂善利なり。是の故に說いて曰く、『及び彼の四神足と、賢聖八品道とを(樂しめ)。』と。

(一七)善く摶食を樂しみ、　善く攝法服を樂しみ、　善く經行を樂しみ、[七]　山藪に處ることを樂しめ。

『善く摶食を樂しみ、善く攝法服を樂しみ、』とは彼の行人の如し。一切を獲斷するの智を以て、食想の意を分別して染著せず。食想、起れば食し、若しは好、若しは醜、意に是非する無れ。法服は齊整して先聖の制せし所の服飾に違はざれ、是の故に說いて曰く、『善く摶食を樂しみ、善く攝法服を樂しみ、』と。『善く經行を樂しみ、山藪に處ることを樂しめ。』とは佛の契經の所說の如し。夫れ經行するの人は五功德を獲。云何が五と爲す。一には遠く行くに堪任す。二には多力。三には食噉すべき所、自然に消化す。四には無病。五には經行するの人は速かに禪定を得。習道の人は眞如の四諦微妙の法を得て、法を聞くや意悟り、卽ち深山無人の處に入つて禪定習道し、無餘泥洹界に於て般泥

【七】經行。坐禪の時、催ほせる眠を除き、又運動のために一定の地を步行すること。

を作せば惡を受け、福を作せば福を受く。是の故に說いて曰く、『快なる哉大なる福報や、所願皆全成し』と。『速かに第一滅を得、漸やく無爲の際に入る。』とは衆結除盡すれば、諸德普具し、淨きこと光明の如く、內外清徹す。意欲して第一義を所求する者は尋で時に卽ち獲。永へに虛無の處に入るを得んと欲するものは、尋で時に卽ち得て疑滯有ること無し。正しく外邪弊魔の＊徒をして爲福の人を毀壞せんと欲求するも、尋で時に自ら壞れて之を奈何ともする無し。猶昔、魔王、十八億衆を將ゐ、百頭一身、形像畏るべきもの、虎狼・師子・毒蛇・惡蚖、來つて如來を恐す。如來、福力もて使魔を斷壞したまふ。魔王、退くの後、爾の時、世尊、便ち斯の偈を說きたまはく、

　快なる哉大なる福報や、　所願皆全成し、　速かに第一滅を得、　漸やく無爲の際に入ると。

（一四）若し彼の方便を求めて、　賢聖の智慧に施ばゞ、　其の苦の原本を盡して、　當に大幸を獲んことを知るべし。

『若し彼の方便を求めて、賢聖の智慧に施ばゞ、』とは學人、賢聖の法を習はんと欲せば、勇猛精進して意を分散せざれ。然る後に乃ち賢聖の法に應はん。是の故に說いて曰く、『若し彼の方便を求めて、賢聖の智慧に施ばゞ』と。『其の苦の原本を盡して、當に大幸を獲んことを知るべし。』とは所謂苦とは五盛陰是なり。能く此を滅する者は乃ち道教に應はん。是の故に說いて曰く、『其の苦の原本を盡して、當に大幸を獲んことを知るべし。』と。

（一五）法を愛するものは善く眠寐し、　心意潔く清淨たり。　賢聖の說く所の法は、　智者の娛樂する所なり。

學人は行を習うて深法に達了し、義句を曉了分別せよ。所趣の心意、澹然として餘の異想無く、一意に入定して衆邪の爲めに傾動せられざらん。賢聖の言教する所は翫んで之を習ひ、能く捨離せざれ。智者の習ふ所は愚の論ずる所に非ず。是の故に說いて曰く、

＊大正藏に度とあるは誤。

『人、百千變に遭はゞ、等しく憍慢の怨を除いて、』とは學人は家に在つて財業に戀著せば、衆事慣亂し、心一定せず。人、道を修せんと欲せば、當に家業を離れ、憍慢を除去し、想著を興さゞるべし。乃ち惠施するを得るも、其の報を望まざれ。謙恭卑下は修徳の本なり。人を輕んじ、己を貴ぶは殃禍の災なり。是を以て人に閑靜の處を教へよ。然る後に乃ち道眞を修せしむるを得ん。是の故に說いて曰く、『人百千變に遭はゞ、等しく憍慢の怨を除いて、』と『時に清淨心を施せ。健夫を最も勝れたりと爲す。』とは施すに五時有れば、五功徳を獲。憍慢自大の心を除去し、意常に清淨にして穢濁を懷かざれ。是の故に說いて曰く、『時に清淨心を施せ。健夫を最も勝れたりと爲す。』と。

(一二二)忍は少くとも勝の多きを得、　戒は懈怠の多きにも勝る。　信有つて惠施する者は、
　後身に善報を受く。

『忍は少くとも勝の多きを得、戒は懈怠の多きにも勝るとは多く衆生有り。信心極めて少く、瞋恚隆熾し、持戒、忍辱も亦復少少なるのみ。以て能く忍を行ぜば則ち怨讎に勝ち、持戒の人は懈怠の者に勝つ。猶 六 阿那律の一たび辟支佛の與に德を施す有るや、九十劫中、未だ曾て惡道に趣かず、後釋種の家に生れ、佛並びに父母の弟、出家學道して其の道果を成ぜしが如し。是の故に說いて曰く、

忍は少くとも勝の多きを得、　戒は懈怠の多きに勝る。　信有つて惠施する者は、　後身に善報を受くと。

(一二三)快なる哉大なる福報や、　所願皆全成し、　速かに第一滅を得、　漸く無爲の際に入る。

『快なる哉大なる福報や、所願皆全成し、』とは人の修福は皆前身の立行の致す所に由る。良福田に値はゞ、種子は少なりと雖も、報を獲ることは無量なり。若しは復前身に賢聖に觸嬈するも、施心不純にして平等の意無ければ、設し人形を受くるも、形狀醜陋にして人の爲めに輕んぜらる。悪

【六】 阿那律。前生に貧窮なりしとき、無患辟支佛(Upari-ṭṭha)(拔栗咤)に食を施し、天に七生し、人間に七生し遂に釋種に生れたる本生話は中阿含卷十三(本一切經本阿含部四、二七二頁以下)にあり。阿那律の家系については彼は佛の父淨飯王の弟なる白飯王又は甘露飯王の子とぜらる。

昔、舍衛城内に一長者有り、名けて最勝と曰ふ。更に長者有り、名けて難降と曰ふ。二人は慳貪なること國中第一なり。饒財多寶、七珍具足し、象馬・車乘・僕從・奴婢・穀食・田業稱計すべからず。二人、門戶各各七重有り。門を守る者に勅して、乞兒をして我が門戶、中庭の中に入らしむる無れと。鐵籠もて上を覆へるは、飛鳥の穀食を啄拾する有るを恐るればなり。屋舍の四壁を鑄鐵の垣牆とせるは鼠の穿鑿して器物を嚙壞するを恐るればなり。是の時、五大聲聞、各次第を以て彼に詣つて教化す。地より涌出して、教ふるに〔三〕法施を以てす。長者二人、之を聞いて各々化を受けず。後、佛、自ら往いて虛空に坐臥して大光明を放ちたまふ。佛、長者の與に微妙の法を說きたまひ、長者、聞くと雖も、心猶達せず。内に自ら思惟すらく、「佛、舍に來至す。〔四〕虛爾に精舍に還らしむべからず。宜しく藏裏に入り、一、〔五〕白氎を取つて如來に布施すべし。」とて、卽ち起つて藏に入り、一の惡しき者を選ぶに、反つて更に好きを得。捨てゝ更に取るに、倍々好き者を得。心意共に諍つて自ら決する能はず。其の日に當つて阿須倫と忉利天と共に闘へり、或は天、勝を得ば、阿須倫、如かず。或は阿須倫、勝を得ば、諸天、如かず。爾の時、世尊、天眼を以て長者の心を觀見したまふに、或る時は慳心、勝を得て施心、如かず、或る時は施心、勝を得て慳心、如かず。爾の時、世尊、便ち斯の偈を說きたまはく、

施と、戰と同處なる、　此は德智に譽められず。　施す時と亦戰ふ時、　此の事二俱に等しきごときと。

長者、遙かに聞いて、内に慚愧を懷くらく、「如來の所說は正に我が身を謂ふ。卽ち好氎を持用て施を爲さん。』と。難降長者も五百兩の金を出して持用て施を爲す、心開け、意解け、各道跡を見たり。

〔一一〕人百千變に遭はど、　等しく憍慢の怨を除いて　時に清淨心を施せ。　健夫も最も勝れたりと爲す。

【三】法施。布施に二種あり。財物を施すと教法を施すとなり。法施は後の教法を說示する布施。

【四】虛爾。空手にて、手持無沙汰にて。

【五】白氎。白い厚地の毛布。

『惡行すれば地獄に入り、所至は惡道に墮す。』とは人、惡行を爲すは父母、兄弟、宗親の爲す所に非ず。皆己身に由つて罪を爲るの致す所なり。罪を作らば、自ら其の殃を受け、能く代る者無し。外道異學の所見は同じからず。外道の所見は己身に罪を作るも、他人、報を受くと。是の故に說いて曰く、『惡行すれば地獄に入り、所至は惡道に墮す。』と。『非法は自らを陷溺すること、手に蛇蚖を把るが如し。』とは猶彼の人の手に蛇蚖を把るが如し。或は呪術を以て取る者、或は藥草を以て取る者、或は師敎を被つて手に惡蛇を翫弄するものあり。呪罷むの後は蛇の爲めに嚙まれ、死して地獄・餓鬼・畜生に入り、生死を經歷して休已有ること無し。是の故に說いて曰く、『非法は自らを陷溺すること、手に蛇蚖を把るが如し。』と。

(九)法と非法とを以てせず。　二事倶に同報とすれども、　非法は地獄に入り、　正法は天に生ず。

『法と非法とを以てせず、二事倶に同報とすれども、』とは此の衆生の類、善惡の行を造るも、自ら殃福の報を覺知せず、善を爲す者も善の報有るを知らず、惡を爲す者も惡の報有るを知らず。彼の人有つて毒を雜ふるの食を得るが如し。得て而して之を享け、食中に毒有るを知らざるも、毒氣流熾するや、其の身に便せず。惡を行ずるの人も亦復是の如し。當時は口甘けれども、後に其の殃を受け、遂に其の命を喪ひ、善處に至らず。有目の士は食を觀て之を知る。斯は是れ清淨にして其の中に毒無しと。便ち之を取食するも、後に苦患無し。是の故に說いて曰く、

法と非法とを以てせず、　二事倶に同報とすれども、　非法は地獄に入り、　正法は天に生ずと。

(一〇)施と戰と同處なる、　此は德智に譽められず。　施す時と亦戰ふ時と、　此の事二倶に等しきごとき。

今世にも後世にも樂し。

夫れ人、世に在つては務めて法を行ひ、善法を選擇せよ。其の惡を去る者は周旋往來して善知識を追ひ、善教を採取し、至る所の到處に法事を興布せよ。是の故に說いて曰く、

法を樂しみ學行を樂しみ、　愼んで惡法を行ずること莫れ。　能善く法を行ずる者は、　今世にも後世にも樂しと。

(六)法を護り法を行ずる者は、　法を行じて善報を獲。　此く法律の教に應ひ、　法を行ぜば惡に趣かず。

『法を護り法を行ずる者は、法を行じて善報を獲。』とは能く自ら法を擁護して漏失せしめざれば、後に其の福を獲。是の故に說いて曰く、『法を護り法を行ずる者は、法を行じて善報を獲。』と。『此く法律の教に應ひ、法を行ぜば惡に趣かず。』とは彼の行を執るの人、法を以て自ら護れば、所生の中、惡災に遇はず、小より大に至るまで悉く其の對を受く。天に從つて福を受け、人間に下生して復重ねて福を受く。是の故に說いて曰く、『此く法律の教に應ひ、法を行ぜば惡に趣かず。』と。

(七)法を護り法を行ずる者は、其の形を蓋覆するが如し。　此く法律の教に應ひ、　法を行ぜば惡に趣かず。

彼の修行人、深法微妙の教を擁護し、諸の陰蓋を去るは、猛熱なる熱あるも、而も好蓋を獲ば濟度を蒙り得るが如し。是の故に說いて曰く、

法を護り法を行ずる者は、其の形を蓋覆するが如し。　此く法律の教に應ひ、　法を行ぜば惡に趣かずと。

(八)惡行すれば地獄に入り、　所至は惡道に墮す。　非法は自らを陷溺すること　手に蛇蚖を把るが如し。

(三)*愛欲を善樂しつゝ、　杖を以て群生に加へなば、　中に於て自ら安きを求むるも、　後世には樂を得じ。

『愛欲を善樂しつゝ、』とは一切衆生、皆樂を貪樂し、苦惱を樂はず。苦を見るは則ち群心の願樂せざるところなり。己自ら殺を行じなば、人をして殺生せしめ、己自ら婬泆ならば、人をして婬泆ならしめ、己自ら妄言綺語せば、人をして妄言綺語せしめ、己自ら與へざるを取らば、他人をして復他物を竊盜せしむべきなり。是の故に說いて曰く、『愛欲を善樂しつゝ』と。『杖を以て群生に加へなば、』とは所行非法にして濫に百姓を枉げ、意の所存を傷つくるを以て本と爲す。是の故に說いて曰く、『杖を以て群生に加へなば、』と。『中に於て自ら安きを求むるも、後世には樂を得じ。』とは人、惡行を作すは皆自ら己が爲めなり。身を捨て、形を受けなば、諸の苦惱に遭ひ、生死を經歷し、五道に沈潛し、所生の處に罪苦自ら隨はん。是の故に說いて曰く、『中に於て自ら安きを求むるも、後世には樂を得じ。』と。

(四)*人歡樂を得んと欲せば、　杖を群生に加へざれ。　中に於て自ら樂を求めば、　後世に亦樂を得ん。

『人歡樂を得んと欲せば、杖を群生に加へざれ。』とは一切衆生、皆樂を貪つて、苦を樂はず。彼の苦を見ば、慈愍の心を興し、四等平均に彼を視ること赤子の如くあれ。初、怨を起すも、杖もて衆生を捶たざれ。世に處しては皆身の安きを求む。設し我、今日彼を觸嬈せば、後世の中、對を受くること無數ならん。是の故に說いて曰く、

人歡樂を得んと欲せば、　杖を群生に加へざれ。　中に於て自ら樂を求めば、　後世に亦樂を得ん。と。

(五)法を樂しみ學行を樂しみ、　愼んで惡法を行ずること莫れ。　能善く法を行ずる者は、

* 巴利法句經、一〇の一三一。

* 巴利法句經、一〇の一三二。

【三】對。むくひ、こたへ。

巻の第二十七

樂品第三十一

(一)※勝てば則ち怨滅し、　負くれば則ち自ら鄙しむ。　息めば則ち快樂なり。　勝負の心も無し。

『勝てば則ち怨滅し、負くれば則ち自ら鄙しむ。』とは彼の怨家の晝夜に彼の人を伺察するが如し。彼に於て大怨嫌有つて世より世に至り、罪怨を捨てず。是の如くにして數百千身を經歷して怨を執ること乃ち息むも、負くれば自ら鄙しむ。是の故に說いて曰く、『勝てば則ち怨滅し、負くれば則ち自ら鄙しむ。』と。『息めば則ち快樂なり。勝負の心も無し。』とは一切の結使、永く盡きて餘無く、更に復想著の念を起さず。亦復勝負の心も無し。我勝ち、彼如かず、彼勝ち、我如かずといふ都て彼此の心無し。是の故に說いて曰く、『息めば則ち快樂なり。勝負の心も無し。』と。

(二)若し人彼を嬈亂し、　自ら世に安樂ならんと求むれば、　遂に其の怨憎を成じて、　終に苦患を脫せざらん。

『若し人彼を嬈亂し、自ら世に安樂ならんと求むれば、』とは世に多く人有り。迷惑の意を執り、怨讎の心深く、人を觸嬈すれども自らは快樂し、宗族も慶を蒙らんことを望む。苦栽を種えて、甘果を冀望するが如し。唐しく功夫を喪つて、時に益無し。是の故に說いて曰く、『若し人彼を嬈亂し、自ら世に安樂ならんと求むれば、』と。『遂に其の怨憎を成じて、終に苦患を脫せざらん。』とは【一】卒鬪し殺人するは猶尙恕すべし。毒を懷いて陰謀するは乃ち親しむべからず。斯の如きの類は必ず惡道に趣かん。然る所以は其の愚を執つて捨てざるに由るが故なり。是の故に說いて曰く、『遂に其の怨憎を成じて、終に苦患を脫せざらん。』と。

※　法句經安寧品。小異す。

【一】卒鬪。にはかにたゝかふ。

人、永く滅して亦生ぜしめざれ。亦復三界の結使を造らざれば、內外清淨にして塵垢を造らず。是の故に說いて曰く、『若し其の想を滅せんと欲せば、內外に諸因を無みせ。』と。『亦過ぎにし色想無ければ、四、應に生を受けざるべし。』とは彼の行人、[四六]過去色、過去の造色、未來色、未來の造色、現在色、現在の造色を觀じ、一一に分別するに、四は色有ること無し。彼の轉輪聖王の四天下を統ぶるが如きは、身に大人の相有つて衆好具足す。行人も彼を觀ること己の如くにして異ること無れ。色好を以ても好想を興さず、色醜を以ても、惡想を興さゞれ。我是、彼非、彼是、我非たるを見ず。我も亦復是非、是是非非を見ざれ。都て好醜の想無ければ、永く四を斷じ應に與に事に從はざるべし。是の故に說いて曰く、『亦過ぎにし色想無ければ、四應に生を受けざるべし。』と。

(四三)*前を捨て後を捨て、　間を捨てしものこそ有を越ゆれ。　一切を盡く捨つれば、　**生死を受けず。

『前を捨て後を捨て、間を捨てしものこそ有を越ゆれ。』とは所謂前とは過去の陰持を捨てゝ結使の縛著に入るなり。後を捨つとは未來の陰持を捨てゝ結使の縛著に入るなり『間を捨てしものこそ有を越ゆれ。』とは現在の陰持を捨てゝ結使の縛著に入るなり。一切を捨つるとは現身中に於て虛無道を得、[四七]三千に王たり、十方を典どるなり。意自らの從なるに由り、所作已辦じ、更に復胎を受けざることを如實に之を知る。是の故に說いて曰く、

前を捨て後を捨て、　間を捨てしものこそ有を越ゆれ。　一切を盡く捨つれば、　生死を受けずと。

【四六】 過去色、過色の造色。所産された客觀的の色と色を產出する主觀から眺めた色。以下之に準ず。

* 巴利法句經、二四の三四八。

** 諸本、生老となり居れど、後には生死とあるものあり。且く之に由る。

【四七】 三千。三千世界。

とを說くべし。善く之を思念せよ。廣說すること契經の如し。生死分に流轉し、五道に著す。』と。是の故に說いて曰く、『猶叢林に網するが如し。』と。『愛無し況んや餘有らんや。』とは如來、成道して永く愛有ること無く、永く五道を斷じ、三界に處らず、四生を受けず。是の故に說いて曰く、『愛無し況んや餘有らんや。』と。『佛に無量の行有れども、跡無し、誰か跡を將らんや。』とは所謂佛とは一切諸法を敎悟し、事として知らざる無く、事として達せざる無く、四意止・四意斷・四神足・(五)根・(五)力・(七)覺(意)・(八正)道を修す。演說を廣布して窮極有ること無し。高くして上無く、能く量度する無し。深邃にして下無く、深さ測るべからず。結有れば則ち跡有り、結無ければ則ち跡無し。夫れ人、足有れば便ち東西南北、四維上下に遊行するを得。結の跡有る者は將に三界に入り、五道に遊馳して生死を離れず。結の跡無き者は三界八難の處に至らず。是の故に說いて曰く、『佛に無量の行有れども、跡無し誰か跡を將らんや。』と。

(四一)若し有の生ずるを欲せざれば、　以て生ずるも有を受けざらんとせよ。　佛に無量の行有れども、　跡無し誰か跡を將らんや。

『若し有の生ずるを欲せざれば、以て生ずるも有を受けざらんとせよ。』とは身を捨て、形を受け、生死を經歷すること億千萬身、生死無量にして稱計すべからず。今成道を得、故きを畢りたれば、身更に形を受け、諸の苦惱を受けず。是の故に說いて曰く、

若し有を生ずるを欲せざれば、　以て生ずるも有を受けざらんとせよ。　佛に無量の行有れども、　跡無し誰か跡を將らんやと。

(四二)若し其の想を滅せんと欲せば、　內外に諸因を無みせ。　亦過ぎにし色想無ければ、　四[四五]、應に生を受けざるべし。

『若し其の想を滅せんと欲せば、內外に諸因を無みせ。』とは所謂想とは欲想・色想・無色想なり。行

【四五】　四。好醜是非か。

猶安明山の、　風の爲めに動かされざるが如く、　叡人も亦是の如し。　毀譽の爲めに動かされずと。

(三八)如し樹に根有ること無ければ、　枝無し、況んや葉有らんや。　健者以て縛を解かば、
　誰か能く其の德を毀たんや。

『如し樹に根有ること無ければ、枝無し況んや葉有らんや。』とは無明は根本にして衆患の源なり。愛は枝葉を生じ、以て邪見を興す。是の故に說いて曰く、『如し樹に根有ること無ければ、枝無し、況んや葉有らんや。』と。『健者、以て縛を解かば、誰か能く其の德を毀たんや。』とは所謂健とは諸佛世尊の諸の縛著を脫して更に胞胎の形を受けざるなり。亦復今世より後世に至らざるなり。是の故に說いて曰く、『健者以て縛を解かば誰か能く其の德を毀たんや。』と。

(三九)垢無ければ住すること有る無し。　[四一]身塹あつて苦子を種ゆ。　[四二]最勝は愛有ること無し。
　天世人も知らず。

『垢無ければ住すること有る無し。』とは諸の結使を去れば、永く盡きて餘無し。結有れば則ち住すること有り。結無ければ則ち住することも無し。亦身塹無ければ、亦苦子無し。是の故に說いて曰く、『垢無ければ住すること有る無し。身塹あつて苦子を種ゆ。』と。『最勝は愛有ること無し。天、世人も知らず。』とは如來は坐禪して寂然として入定し、[四三]三昧正受に形を滅して自ら隱る。諸天、聖人も如來を知るを得んと欲すれども、此の事然らず。是の故に說いて曰く、『最勝は愛有ること無し。天世人も知らず。』と。

(四〇)猶叢林に網するが如し。　愛無し、況んや餘有らんや。　佛に無量の行有れども、　跡無
　し誰か跡を將らんや。

『猶叢林に[四四]網するが如し。』とは佛、比丘に告げたまはく、『今當に汝の與に愛の根本と枝葉の滋蔓

【四一】身塹。身を塹穴に比す。
【四二】最勝。如來世尊。
【四三】三昧正受。梵漢兼擧。三昧は梵語([illegible])の音寫。禪定なり。正受は其の譯。正とは邪亂を離れ、受とは法を納るゝをいふ。
【四四】網す。魚を捕へんとして網を打つこと。

爲さず、若し彼毀辱するも、以て感と爲さず。過去は已に滅したりとて善心を絶たず、當來は未だ至らずとて未だ兆を生ずること有らず、現在は住まらずとて、當に復漂轉すべし。是の故に說いて曰く、

一毀一譽は但其の名を利するのみ。有に非ず無に非ず。亦知るべからずと。

(三六)叡人は譽めらる。若しは好、若しは醜なるも、智人は缺くる無く、定に叡つて解脫す。紫磨金の如く、內外清徹す。

叡人は若しは好、若しは醜なるも、譽めらる。覺見、廣見もて一義を敷演すること及ぶべからず。皆得度を蒙り、神を濟ひ、苦を離れしむ。猶如來の行くや、虛を履み、地を離るゝこと四寸なるも、地上に印文炳然として自現し、其の中の蟲螺有形の類、光を蒙つて度を得、七日安隱にして永く樂苦無く、能く傷害する無きが如し。猶紫磨純金の內外清淨にして瑕滓有ること無きが如し。是の故に說いて曰く、

叡人は譽めらる。若しは好若しは醜なるも。智人は缺くる無く、定に叡つて解脫す。
紫磨金の如し。內外清徹す。

(三七)猶[三八]安明山の、風の爲めに動かされざるが如く、叡人も亦是の如し。毀譽の爲めに動かされず。

彼の安明山の峙立安固にして終に風の爲めに動かされざるが如く、如來も世に處り、世を去るに、[三九]八法の毀譽の爲めに動かされず。一梵志有り、多聞廣見にして事として包まざる無し。佛、出世して毀譽の爲めに動かされず。心を持すること地の好醜を記せざるが如きを聞き、佛の所に往至し、百種の罵を以て如來を毀呰し、後復百種の語を以て如來を讃譽す。如來、心意[四〇]鏗然として動かざりき。是の故に說いて曰く、

【三八】安明山。須彌山の譯。

【三九】八法。八風ともいふ。人心を扇動する世の憎愛。(前卷二七七頁を見よ)。

【四〇】鏗然。金石の如く高く、強く堅き貌。

んば賢聖を差別せず。』と。『若しは復論議を知れば、所說に垢跡無し。』とは無垢の論は諸の想著を去り、內に歡喜を懷き、稱慶無量なり。所聞の法味、一切に充飽し、惡道なる餓鬼・畜生・地獄の惱に趣かず。是の故に說いて曰く、『若し復論議を知れば、所說に垢跡無し。』と。

(三三)法に應へる議論を說き、當に仙人の幢を竪つべし。法幢は仙人の爲めにし、仙人は法幢の爲めにす。

法に應へる議論を說き、昌熾なる法味を人の與に演布し、文句を具足して展轉して相敎へよ。仙人とは諸佛世尊なり。名身、句身を說いて一一に分別して錯謬有ること無からんは、正法をして世に久存せしめんと欲すればなり。是の故に說いて曰く、

法に應へる議論を說き、當に仙人の幢を竪つべし。法幢は仙人の爲めにし、仙人は法幢の爲めにす。

(三四)或は寂然として罵る有り、或は衆に在つて罵る有り、或は未だ聲せずして罵る有り。世に罵らざる有ること無し。

『或は寂然として罵る有り。』とは心內熾然、呪咀息まず。彼の人をして水火、盜賊に遭はしめんと欲するも、內心に思惟せるを彰露して外に在らしめざるなり。是の故に說いて曰く、『或は寂然として罵る有り。』と。『或は衆に在つて罵る有り、』とは高聲に大喚して尊卑を避けざるなり。是の故に說いて曰く、『或は衆に在つて罵る有り。』と。『或は未だ聲せずして罵る有り。』とは、權に衆中に在るにしても、亦高聲ならずして對面して相罵る。是の故に說いて曰く、『或は未だ聲せずして罵る有り。世に罵らざる有ること無し。』と。

(三五)一毀一譽は、但其の名を利するのみ。有に非ず無に非ず。亦知るべからず。

一毀一譽は、但其の名を利するのみ。諸善功德は其の身を育養す。設し供養を得るも、以て歡と

畢し、塵垢を興さず。是の故に說いて曰く、『行路に復憂無く、終日解脫を得るものは、』と。『一切の結使盡きて復衆惱有ること無し。』とは彼の行人、意を執ること牢固にして結使永く盡きて餘無きなり。是の故に說いて曰く、『一切の結使盡きて、復衆惱有ること無し。』と。

(三〇)造る無く造る有る無れ。　造る者は煩熱を受けん。　造るに非ず造る無きに非ざれば、
　前に憂ふるも、後亦然らんや。

『造る無く造る有る無れ。造る者は煩熱を受けん。』とは人、前に罪を爲るも、深く非法なるを知り、人に向つて布現して改を求め、懺悔して自ら隱藏せずんば、若しは更生して形を受けんに、苦惱を受けじ。是の故に說いて曰く、『造る無く造る有る無れ。造る者は煩熱を受けん。』と。『造るに非ず、造る無きに非ざれば、前に憂へ後復然らん。』とは人、前に過を爲し、尋で時に改悔せば、壽終の日、神錯亂せず、善神衞護して惡道に至らじ。是の故に說いて曰く、『造るに非ず造る無きに非ざれば、前に憂ふるも後復然らんや。』と。

(三一)造らば善妙を爲れ。　以て作らば憂を懷かじ。　造るに樂しんで造らば、天に生じて
　歡樂を受けん。

『造らば善妙を爲れ。以て作らば憂を懷かじ。』とは人、善行を修すれば、衆德具足し、衆人に敬せられ、宗奉せられざる莫く、壽終の後、善處天上に生ぜん。是の故に說いて曰く、
　造らば善妙を爲れ。　以て作らば憂を懷かじ。　造るに樂しんで造らば、　天に生じて歡樂を
　受けんと。

(三二)亦復論を知らずんば、　賢聖を差別せず。　若しは復論議を知れば、　所說に垢跡無し。

『亦復論を知らずんば、賢聖を差別せず。』とは彼の行人、議論を解せず、句義を別たず、若しは大衆に在つて威儀禮節を知らずんば、賢愚を別たざるが如し。是の故に說いて曰く、『亦復論を知らず

を思惟して以て行を爲めよ。』とは三解脱滅盡の門に著し、以て自ら娯樂して能く捨離せざれ。是の故に說いて曰く、『空及び無相行を、思惟して以て行を爲めよ。』と。

(一一七)希に衆生有り。　其の徑にも順はず。　度ると度らざると有り。　死(を說く)も甚だ難しと爲す。

『希に衆生有り。其の徑にも順はず。』とは希に衆生有つて中國に生る。復衆生有つて賢聖に遇ふ者、亦復少きのみ。是の故に說いて曰く、『希に衆生有り。其の徑にも順はず。』と。『度ると度らざると有り。』とは多く衆生有れども、世を度らんことを求むる者は亦復少きのみ。生死の根栽、有無是非を知らず。斯は鄙濁にして性行に達せざるに由る。是の故に說いて曰く、『度ると度らざると有り。』と。『死(を說く)も甚だ難しと爲す。』とは人は生を貪り、但目前のみを見、死に趣く衆苦の患を知らず。亦度世の業を思惟せず。是の故に說いて曰く、『死(を說く)も甚だ難しと爲す。』と。

(一一八)諸有もの平等に說いて、　法法共に相觀ずれば、　盡く諸の結使を斷じ、　復熱惱有ること無し。

『諸有もの平等に說いて法法共に相觀ずれば、』とは夫れ人、世に處して、是非を觀察し、法法成就して高下有ること無からしむるなり、是の故に說いて曰く、『諸有もの平等に說いて法法共に相觀ずれば、』と。『盡く諸の結使を斷じ、復熱惱有ること無し。』とは彼の行人、思惟挍計して諸の結使を斷じ、諸の想著を去つて、復熱惱の患無きなり。是の故に說いて曰く、『盡く諸の結使を斷じ、復熱惱有ること無し。』と。

(一一九)行路に復憂無く、　終日解脱を得るものは、　一切の結使盡きて、　復衆惱有ること無し。

『行路に復憂無く、終日解脱を得るものは、』とは履行の人は德を修むること自然にして衆の苦惱を

を爲めよ。

『若しは人依る所無く、』とは修行の人は衆の結使無く、亦藏貯せざれ。是の故に說いて曰く、『若しは人依る所無く、』と。『彼の貴ぶ所の食を知り、』とは世人は食に依つて以て其の命を存ふるなれば、其の搏食の出づる所の本末を知れ。更に食を樂しむ者、意を興して想著せば（觀ずること）彼の生牛の皮の如かれ。意に食を想ふ者は彼の火聚の如かれ。識に食を想ふ者は猶劍戟の如かれ。かくの如く彼の搏食の人、食の本末を觀じ、或は自ら手に執り、或は鉢中に在らしめ、食の從つて生ずる所、爲めに何に從つて滅するかを思惟翻覆し、諸の惡露の貪樂すべからざるを觀ぜよ。是の故に說いて曰く、『彼の貴ぶ所の食を知り、』と。『空及び無相、願を、思惟して以て行を爲めよ。』とは彼の衆生の三解脫門[三七]に入るに、思惟して道を念じ、心首を去らざるが如くするなり。是の故に說いて曰く、『空及び無相、願を、思惟して以て行を爲めよ。』と。

（二五）鳥の虛空を飛んで、　而も足跡無きは、　彼の行人の、　言を說いて趣く無きが如し。

『鳥の虛空を飛んで、而も足跡無きは、』とは虛空の飛鳥を悉く鳳凰と名く。虛空の中に足跡を見ず。周旋往來して都て處所無し。是の故に說いて曰く、『鳥の虛空を飛んで、而も足跡無きは、』と。『彼の行人の言を說いて趣く無きが如し。』とは彼の修行人此の義理を觀じて、都て東西南北、所趣の方を知らず。是の故に說いて曰く、『彼の行人の言を說いて、趣く無きが如し。』と。

（二六）諸（人）能く有の本を斷じ、　未然に依らざれ。　空及び無相行を、　思惟して以て行を爲めよ。

諸有行人は有の根本を斷ぜよ。有と論ずる所の者は欲有、色有、無色有なり。永く盡きて餘無く、更に復興さゞれ。是の故に說いて曰く、『諸（人）能く有の根本を斷じ、』と。『未然に依らざれ。』とは未變の事、興衰の變を知らざるなり。是の故に說いて曰く、『未然に依らざれ。』と。『空及び無相行

【三七】三解脫門。三三昧の中無漏の三昧なり。之は解脫して涅槃に入るの門なり。

有を遠離せんことを念ずべし。』と。

(一二)信ずること無く反復すること無きは、　牆を穿つて盜竊するなり。　彼の希望の意を斷ずる、　是を名けて勇士と爲す。

『信ずること無く反復すること無きは、』とは諸の佛弟子有つて篤信の意有ること無きが如し。何を以ての故に。彼の人、佛を信ぜず、法を信ぜず、比丘僧を信ぜず。亦復苦・集・盡・道を信ぜず。盡とは滅盡泥洹是なりと爲す。彼の人、信ぜず、亦恭奉せざるなり。是の故に說いて曰く、『信ずること無く反復すること無きは、』と。『牆を穿つて盜竊するなり。』とは彼の行を執るの人は有漏三界の牆を穿壞して、中に於て貿易し、其の福慶を望む。是の故に說いて曰く、『牆を穿つて盜竊するなり。』と。『彼の希望の意を斷ずる、是を名けて勇士と爲す。』とは其の利養の想を斷じ、希望有ること無きは人中の士にして過ぎたる者有ること無し。是の故に說いて曰く、『彼の希望の意を斷ずる、是を名けて勇士と爲す。』と。

(一三)其の*父母の緣と、　王家及び二種とを除き、　遍く其の境界を滅し、　無垢なるを梵行と爲す。

『其の父母の緣と、』とは如來の是を說く所以は其の愛心を現はし、永く盡して餘無く、更に復生ぜしめざれとなり。是の故に說いて曰く、『其の父母の緣と、』と。『王家及び二種とを除き、』とは王を論ずる所以は其の憍慢を現はす。二種とは一は戒律、二は邪見なり。此の憍慢を除いて、更に復興さゞれ。是の故に說いて曰く、『王家及び二種とを除き、』と。『遍く其の境界を滅し、無垢なるを梵行と爲す。』とは如來、此を說く所以は欲見、已慢永く盡して餘無く、其の淨行を修せしめんとなり。是の故に說いて曰く、『遍く其の境を滅し、無垢なるを梵行と爲す。』と。

(一四)若しは人依る所無く、　彼の貴ぶ所の食を知り、　[三六]空及び無相願を、　思惟して以て行

＊　巴利法句經、二一の二九四。

【三六】空及び無相願。空三昧・無相三昧・無願三昧の三三昧をいふ。願の上に無を略す。三三昧一に空三昧とは諸法は因緣生にして我も我所も無しと觀ずるなり。二に無相三昧とは滅諦涅槃は凡て現相を離るゝに名く。三に無願三昧とは苦や無常は捨つべく願樂すべき無きをいふ。倘前卷夫々の項を見よ。

聞いて、無數の辯才の法を暢演し、思惟分別するは皆[三四]觀練に由る。是の故に說いて曰く、『賢者は千數有り、智叡は叢林ほど在り。』と。『義理に極めて深邃なるものは、智者の分別せらる。』とは諸法を分別して次第を失はず、義理に深邃にして、其の法を究暢するものは從つて生ずる所を知り、從つて滅する所を知つて、義理を分別して一一に失はず。是の故に說いて曰く、『義理極めて深邃なるものは、智者の分別せらる。』と。

（二〇）多く衆生の類有るも、射ずんば値らず。　今此の義理を觀ずれば、　無戒の人の恥づる所なり。

『多く衆生の類有るも、射ずんば値らず。』とは所謂値らんとする者は非法を修する所の人是れなり。是の故に說いて曰く、『多く衆生の類有るも、射ずんば値らず』と。『今此の義理を觀ずれば、無戒の人の恥づる所なり。』とは利根捷疾なるは、是の常・非常・有淨・無淨を觀じ、戒德を具する者は其の淨なるを歎說すれども、犯戒の人は彼の教訓を聞くも、謂つて誹謗して、眞誠を說かずと爲し、自ら[三五]姓號の本を稱名せず、亦自ら卑しみ、彼をも歎譽せず。猶射を善くするの人、善者を分別して其の矢を效すが若くあれ。然る所以は惡者をして其の行を改修し、修善者をして正法を敎崇せしめんと欲すればなり。是の故に說いて曰く、『今此の義理を觀ずれば、無戒の人の恥づる所なり。』と。

（二一）有を觀ずるに恐怖なるを知る。　變易すれば有も無なるを知る。　是の故に有を樂はず、　當に有を遠離せんことを念ずべし。

『有を觀ずるに恐怖なるを知る。變易すれば有も無なるを知る。』とは有に恐怖にして恃怙すべからず。實の如くにして去離せされ。是の故に說いて曰く、『有を觀ずるに恐怖なるを知る。變易すれば有も無なるを知る。』と。『是の故に有を樂はず、當に有を遠離せんことを念ずべし。』とは夫れ人、衆苦の本を樂はず、亦本業の所造を思惟せされ。是の故に說いて曰く、『是の故に有を樂はず、當に

【三四】觀練。禪法なり。種々の法相を觀察し諸の間雜する垢穢を精錬して除くこと。

【三五】姓號の本。自家の姓名、素性、身分。

心は曠野に存す。是の故に說いて曰く、『無欲のみ常に之に居る。』と。『欲の處る所に非ず。』とは著欲の人は心意在る有り。猶人の罪に墮して牢獄に閉在せるを、官決斷せずして遂に年歲を經、望んで出でんことを欲求するも、良に得難きがごとし。婬逸の人も亦復是の如し。癡心に裹まれ、欲獄に閉在せられ、無漏聖叡の藥に遭はず。免濟を得んと欲すれども、甚だ復剋くし難し。是の故に說いて曰く、『欲の處る所に非ず。』と。

（一七）林の閑靜に在れ、　高岸平地にあれ、　[二九]應眞の過ぐる所は、　祐を蒙らざる莫し。

眞人の居る所は必ず。[三〇]善應有り。[三一]地主の　四王、常に來つて擁護す。所居の方、災患を被らず。福能く惡を抑へ、衆害生ぜず。聖、中に居るに由つて威神の致す所なり。是の故に說いて曰く、林の閑靜に在れ、高岸平地にあれ、應眞の過ぐる所は、祐を蒙らざる莫しと。

（一八）移し難く可動し難きこと、　彼の重き雪山の如し。　賢に非ざれば現はさず。　猶夜冥室に射るがごとし。

賢聖の人の心は移動すべからず。意に所規を欲すれば、必ず剋つこと離からず。猶衆山の好藥を競出するが若し。隨意に之を取つて毒害を分別せよ。是の故に智者は衆德を具足せよと說く。是の故に說いて曰く、『移し難く可動し難きこと彼の重き雪山の如し。』と。『賢に非ざれば現はさず。猶夜、冥室に射るがごとし。』とは善知識を以てせざれば、善知識に親近せず。惡を聞いて其の本を出さず、善を聞いて其の德を歎ぜず。猶冥室の中に其の矢を闇射するが若し。是の故に說いて曰く、『賢に非ざれば現はさず。猶夜冥室に射るがごとし。』と。

（一九）賢者は　[三二]千數有り、　智叡は　[三三]叢林ほど在るも、　義理に極めて深邃なるものは、　智者に分別せらる。

『賢者は千數有り、智叡は叢林ほど在るも、』とは所謂賢とは分別せらる有るものなり。一句の義を

【二九】應眞。阿羅漢の舊譯。人天の供養を受くる應き眞人。
【三〇】善應。善い應報。
【三一】四王。四天王。
【三二】千數。澤山。
【三三】叢林。澤山の形容。

行を觀じ、諸根、缺漏する無く、』と。『食に於て止足を知り、信有つて精進を執り、』とは行人、意を執れば、無漏の信を得。多食すれば、[二四]瞪瞢として定に入るべからず。信心勇熾にして精進を行ふに堪ふれば、超群獨邁して尋で其の證を受けん。是の故に說いて曰く、『食に於て止足を知り、信有つて精進を執り、』と。『欲意に恣ならざるべくんば、風の泰山を吹くが如し。』とは行人、意を用ひて衆想を亂さゞれ。欲は禍の根主と爲つて、災患を生ず。身神を見るに[二五]慌として慧明を受けず。死すれば、燒身の痛に對至す。此の理を料別するに、悉く苦患たり。意を制して色・聲・香・味・細滑の法を興さず。外は六塵を御し、內は六情を攝し、內外清淨にして欲意を漏さゞれ。猶泰山の安峙堅固にして[二六]飄風の爲めに吹動せられざるが若し。心は金剛の如く沮壞すべからず。是の故に說いて曰く、『欲意に恣ならざるべくんば、風の泰山を吹くが如し。』と。

（一六）空閑は甚だ樂しむべきも、　然も人彼を樂しまず。　無欲のみ常に之に居る。　欲の處る所に非ず。

『空閑は甚だ樂しむべきも、』とは聖人、此の語を論ずる所以は行人をして速かに其の法を獲せしめんと欲すればなり。閑靜の中に、意專一なるを得て、思惟校計して時節を移さゞれば、意念の響應すること人の聲を呼ぶが如し。是の故に說いて曰く、『空閑は甚だ樂しむべきも、』と。『然も人彼を樂しまず。』とは此の如きの徒は皆是れ凡夫なり。意、愛欲に著して捨離する能はず、意女色に著して以て實用と爲す。一旦亡歿すれば、乃ち非眞たるを知る。是の故に說いて曰く、『然も人彼を樂しまず、』と。『無欲のみ常に之に居る。』とは聖人と言ふ所以は婬・怒・癡無く、諸結の縛著、豁然として除盡し、淨きこと天金の亦微翳無きが如ければなり。若し人村に在つて周遊教化すれば、時到つて、鉢を持して衆生を福度し、施の多少に隨つて施主を呪願す。檀越の施主、[二七]聞聲に値ふ者は則ち道教を聞いて心懷に貫徹し、設し辟支佛に値ふ者は鉢を空虛に飛ばし、[二八]十八變を作し、形は衆に在りと雖も、

[二四] 瞪瞢。目開くも目明かならざる貌。
[二五] 慌。くらき貌。
[二六] 飄風。暴風。
[二七] 聞聲。聲聞。
[二八] 十八變。羅漢入定の時、現はす十八種の神變。

進止行來、患苦する所無かりき。

（一四）淨を觀じて自ら修むるも、　諸根具足せず、　食に於て厭足無き、　斯等は　二〇凡品の行なり。　轉た欲意を增すこと、　屋壞れて穿漏するが如し。

『淨を觀じて自ら修むるも、諸根具足せず、』とは初めて履行する人、意堅固ならず、內に自ら髮毛爪齒を思念するも、淸淨に愛著し。欲想に興著せば、瞋恚を增益し、愚癡滋長せん。諸情を攝せず、根門定まらず、放逸自恣ならば、遂に道明を失せん。由火の赫熾なるに復酥油を益すがごとし。深く此の理を明らめよ。豈是れ滅火の兆ならんや。夫れ婬・怒・癡の火を息めて永く生ぜざらしめんと欲せば、當に、惡露不淨の想を興すべし。是の故に說いて曰く、『淨を觀じて自ら修むるも、諸根具足せず、』と。『食に於て厭足無き、斯等は凡品の行なり。』とは彼の修行人、乞求して厭くこと無く、得れば囊に藏し、慳心を捨てずんば、若し後、命終して凡品の行を受けん。是の故に說いて曰く、『食に於て厭足無き、斯等は凡品の行なり。』と。『轉た欲意を增すこと、屋壞れて穿漏するが如し。』とは行人愚に執して善根を修せず、欲意熾盛にして自ら改更せずんば、當に復生死の難を經歷すべし。猶蓋屋の覆治牢からざれば、天雨るや、漏つて衣服の淨き者に　二一澆漬して汚れしむるが若し。人情も是の如し。意堅固ならずんば、婬・怒・癡を漏す。是の故に說いて曰く、『轉じて欲意を增すこと、屋壞れて穿漏するが如し。』と。

（一五）當に不淨行を觀じ、　諸根缺漏する無く、　食に於て止足を知り、　信有つて精進を執り、　欲意に恣ならざるべくんば、　風の　二二泰山を吹くが如し。

『當に不淨行を觀じ、諸根缺漏する無く、』とは行人、意を御するに食息も暇あらざれ。此の身の不淨を漏出することを觀察して一一に分別し、身中の　二三三十六物の穢汚不淨なるを料簡せば、頭より足に至るまで一も貪るべき無し。諸根を收攝して漏失せしめざれ。是の故に說いて曰く、『當に不淨

【二〇】凡品の行。凡俗の人の行。

【二一】澆漬。そゝぎそゝぐ。

【二二】泰山。大山。

【二三】三十六物。一に外相の十二、髮・毛・爪・齒・眵・淚・涎・唾・屎・溺・垢・汗。二に身器の十二、皮・膚・血・肉・筋・脈・骨・髓・肪・膏・腦・膜。三に內含の十二、肝・膽・腸・胃・脾・腎・心・肺・生藏・熟藏・赤痰・白痰。

を受く。

『貪餮して自ら節せず、三轉を隨時に行ずるも、』とは彼の愚惑の人の如し。人の標首と爲り、人の供養を受け、自ら其の形を養ひ、身體肥盛して轉側する能はず。檀越施主、隨時に[17]禮覲すれば、愚人は佯つて坐して入定思惟す。是に由つて自ら大供養を致得す。是を以て世尊は假つて以て譬と爲したまはく、『養はるゝ猪の臥食して動かず、久久にして當に屠割を受くべきを知らざるが如し。身を捨て、身を受けて休已有ること無し。』と。是の故に說いて曰く、

貪餮して自ら節せず、三轉を隨時に行ずるも、圂に養はるゝ猪の如く、數數胞胎を受く

と。

(一三)人能く其の意を專らにし、食に於て止足することを知れ。欲に趣くは其の形を支ふるのみ、壽を養はんには其の道を守れ。

昔、佛、波斯匿王との與に此の偈を說きたまふ。波斯匿王は德本を宿植し、福響自ら應ず。後園中に於て自然に甘蔗の樹を生ず。甘蔗を流出すること晝夜、絕たず。彼の園中に於て自然に一株の[18]粳米を生ず。穗を垂れること數百、之を取るに盡くる無し。王、其の福を受け、之を食して厭ふ無かりしが、身體肥重し、喘息の苦極まり、轉側もする能はず。時に佛の所に往き、[19]低身揖讓し一面に在つて坐す。爾の時、世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

人能く其の意を專らにし、食に於て止足することを知れ。欲に趣くは其の形を支ふるのみ、壽を養はんには其の道を守れ。

王、斯の語を聞き、歡喜踊躍して自ら勝ふる能はず、卽ち坐より起つて、佛を辭して宮に還る。卽ち廚宰作食の人に勅すらく、『設し汝、食を擎げて吾が前に在らば、先づ斯の偈を說いて、爾して乃ち食するを得せしめよ。』と。是より以始、常に以て法と爲す。王、轉じて減食するや、身體輕便、

【一七】禮覲。禮を厚くしてお目にかゝる。

【一八】粳米。うるち、稻。

【一九】低身揖讓。身をひくめ手をこまねきてへりくだり禮す。

して世界に在り。彼の虚僞なる鍮の、其の中に純ら銅有るが如し。獨遊して畏忌する無きも、內穢れ外も不淨なり。

『色の從容なるを以てせず、蹔らく覩て人意に知れ。』とは世に多く人有り。顏色從容として人と言談するに、辭義しく辯美し。然も內心は虚僞にして心口相違す。人の僞めと名くと雖も、性行均しからず。外は賢士の如く、內に毒行を懷く。暫らく相見ると雖も、賢愚を別たず。猶夜、火を覩て遙かに光明を見、若し當に往いて捉ふれば、便ち其の手を燒くが如し。此も亦是の如し。顏色有りと雖も、內に熾焔を懷く。是の故に說いて曰く、『色の從容なるを以てせず、蹔らく覩て人意を知れ。』と。『世には行に違ふ人多し。遊蕩して世界に在り。』とは當來の愚人は巧詐滋繁、漸漸に遂に賢を誇り、聖を毀つに至り、姦宄萬端にして世人を幻惑す。人と言談して顏色正しからず。言を出し、章を成すや、辯聰無礙なるも、大衆に堪在しても[一三]無軌の事を爲す。衆人覩る者、目を拭はざる莫し。『彼の虚僞なる鍮の其の中に純ら銅有るが如し。』とは巧詐の人は諸の方略多し。烟を以て銅を熏べ、色眞金に勝らしめ、世人を誑惑して財貨を貪取す。是を以て如來は此を引いて喩と爲したまひ、『彼の僞れる鍮もて世の重利を獲るが如し。』と。姦宄の人も亦復是の如し。甘言美辭もて檀越を誘進し、供養を獲致して四事乏しからず。衣被・飲食・床褥臥具・病瘦醫藥なり。其の供養を獲ると雖も、後當に之を償ふべし。洋銅を報受し、苦惱を經歷するも、罪積未だ畢らず。是の故に說いて曰く、『彼の虚僞なる鍮の其中に純ら銅有るが如し。』と。『獨遊して畏忌する無きも內穢れ外も不淨なり。』とは彼の姦宄の人の如きは多く翼從を將ゐて人間に遊處す。衆人見る者、敬を興さざる莫きも、賊の暴虐なるが多く村落を壞するが如し。然る後に乃ち是れ眞人に非ざるを知る。是の故に說いて曰く、『獨遊して畏忌する無きも、內穢れ外も不淨なり。』と。

（一一二）[一四]貪餮して自ら節せず、[一五]三轉を隨時に行ずるも、[一六]圂に養はるゝ猪の如く、數數胞胎

【一三】無軌の事。惡事、無道の事。

【一四】貪餮。食をむさぼること。

【一五】三轉。三轉法輪の略。四諦の教を說くに示・勸・證の三あり。示轉とは是は苦なり、是は集なり、是は滅なり、是は道なりと示すこと。勸轉は四諦の修行を勸むること。證轉は四諦を證せる佛の模範。上中下の三根が夫々此の三轉によつて悟るなり。

【一六】圂。動物を入れて畜ふをり。

の道を學ぶや、志苦しめるを見、尋で佛の所に往つて、世尊に白して言く、『向に遊觀を行ひ、二梵志を見たり。苦形學道、至つて及び難く、亦儔匹無しと爲す。』と。佛、王に告げて曰く、『人の修德持戒の完具を知るを得んと欲せば、要當に同じく止まり、威儀を觀察し、尋省し來つて語れ。然る後に乃ち有戒無戒を知らん。』と。王、斯の語を聞き、內に慚愧を懷き、卽ち坐より起つて、頭面もて禮足し、辭退して去り、宮殿に還至し、傍臣に告語すらく、『汝、速かに詣つて彼の二梵志を喚んで、我が後園に在らしめよ。吾、之を觀察せん。審して苦行して道德を求むる有るか、虛稱を爲して、詐逸の行合せざるのみか。』と。臣、其の教を受け、卽ち喚んで、園に在らしむ。王、樓上より遙かに其の行を觀て、彼の巧僞の詐稱して道を爲むるを知り、重ねて慚愧を懷き、心に自ら悔を思ひ、信心隆盛となつて佛道を貪樂す。卽ち國界の人民の類をして其の外學異道に供事する有る者は皆誅戮を受けて、(二)從容を得せしめず。王、佛の所に至り、頭面もて禮足し、本及ばざりしを悔い、自今以往、四事もて供養し、三寶を恭敬す。其の形壽を盡して此の誓に違はざりき。是の故に說いて曰く、『善き顏色有るも、乃ち巧僞心を懷けるあり。』と。

(一〇)能く是を斷ずる有る者は、　永く其の根本を拔く。　智者は諸穢を除けば　乃ち名けて善色と爲す。

『能く是を斷ずる有る者は、永く其の根本を拔く。』とは世人、多く姦宄の心を懷き、法服を披ると雖も、內に不眞を行ず。能く此を斷ずる者は乃ち道門に應ふ。是の故に說いて曰く、『能く是を斷ずる有る者は、永く其の根本を拔く。』と。『智者は諸穢を除けば、乃ち名けて善色と爲す。』とは智人は法を習つて、要應に道を爲むべし。非法を行ぜずして學者に尊ばれ、顏色怡懌にして衆人に敬仰せらる。是の故に說いて曰く、『智者諸穢を除けば、乃ち名けて善色と爲す。』と。

(一一)色の從容なるを以てせず、　(三)蹔らく覩て人意を知れ。　世には行に違ふ人多し。　遊蕩

【二】從容。許す。

【三】蹔。暫に同じ。

人の道を修するや、常に染汚を懷き、婬・怒・癡の垢、心を去らずんば、袈裟[九]を披ると雖も、三毒[一〇]、去らず。此は則ち道に至らざるなり。是の故に說いて曰く、『塵無く塵を離るゝものは、』と。『能く此の服を持する者なり。』とは唯賢聖の人のみ有つて、衆惡を防塞し、能く此の眞法の服を服る。此れ有ること無き者は則ち應に服るべからず。是の故に說いて曰く、『能く此の服を持する者なり。』御無く所至無きものは、此は法服に應はず。』と。

(八)若し能く垢穢を除き、　戒を修し、慧定を等しうすれば、　彼は應に業を思惟すべく、
　此は應に袈裟を服るべし。

『若し能く垢穢を除き、戒を修し、慧定を等しうすれば、』とは人の修學するや、穢を除くを本と爲せば、三毒の結使、永く盡きて餘無し。羅漢を得ると雖も、定意に入らずんば、無記對至して、乃ち謬誤を知らん。戒を修し、垢穢を除き、其の道心を失はざれ。是の故に說いて曰く、『若し能く垢穢を除き、戒を修し慧定を等しうすれば、』と。『彼は應に業を思惟すべく、此は應に袈裟を服るべし。』とは入定の人は必ず所益有り。心に所念有れば、事として果さゞる無し。諸天、世人、魔及び魔天釋、梵四天王も宗奉し。承事せざる靡し。是の故に說いて曰く、『彼は應に業を思惟すべく、此は應に袈裟を服るべし。』と。

(九)柔和の言を以てせざるも、　名稱の所至有るあり。　人、善き顏色有るも、乃ち巧僞心
　を懷けるあり。

『柔和の言を以てせざるも、名稱の所至有るあり。』とは世に多く人有り。人と言談して、內に姦宄を懷くも、外に愚を現はすが如きあり。是の故に說いて曰く、『柔和の言を以てせざるも、名稱の所至有るあり。』と。『人、善き顏色有るも、乃ち巧僞心を懷けるあり。』とは往昔、波斯匿王、園觀に遊戲して、二梵志の形を苦しめ、道を學ぶを見たり。日月に仰事し、水火を祭祀せり。王、此の人

【九】袈裟(Kaṣāya)。譯、不正、壞、濁。三法衣(前卷三九頁)の總稱。僧衣は印度にては濁赤色を用ひたれば色について此の名あり。
【一〇】三毒。貪・瞋・癡。衆生を害すること甚しければ毒といふ。

斯は愛の深固なるに由る。

『愚の意うて以て牢と爲すものは、』とは夫れ人、世に在るや、意愚にして革め難し。或は陰聚を言つて牢と爲し、或は結本を言つて牢と爲し、中に於て想を興して眞僞を別たず。復出家學道すると雖も、反つて邪行を習ふ。是の故に説いて曰く、『愚の意うて牢と爲すものは、』と。『反つて九結の縛を被むる。』とは人の道を修むるや、要當に家を捨つべし。愚なる惡知識は邪徑を指授し、故の結縛を捨つるも、反つて九結を被むらしむ。蛾の火に投じて後慮を顧みざるが如し。斯は愛の深固なるに由る。是の故に説いて曰く、『反つて九結の縛を被むる。鳥の羅網に投ずるが如し。斯は愛の深固なるに由る。』と。

(六)諸有もの狐疑を懷くあり。　今世にも及び後世にも。　禪定は盡く能く滅し、　惱無く梵行を修せしむ。

『諸有もの狐疑を懷くあり。』とは彼の修行人は惡露不淨の想を思惟して狐疑憎嫉の心を除去せよ。聞けば則ち信を得、重ねて思惟せざれ。是の故に説いて曰く、『諸有もの狐疑を懷くあり。』と。『今世にも及び後世にも、』とは今とは現身、後とは後身、今とは現世、後とは後世なり。中に於て猶豫を興し、狐疑を生ぜずんば、乃ち應に意を定むべし。是の故に説いて曰く、『今世にも及び後世にも。』と。『禪定は盡く能く滅し、』とは入定の人は心意堅固にして盡く能く消滅して想著を興さず。是の故に説いて曰く、『禪定は盡く能く滅し、』と。『惱無く梵行を修せしむ。』とは結使の爲めに煩惱せられず、意を執ること清淨にして常に一心の如くんば、修むる所の徳本、人上に超越す。是の故に説いて曰く、『惱無く梵行を修せしむ。』と。

(七)塵無く塵を離るゝものは、　能く此の服を持する者なり、　御無く所至無きものは、　此は法服に應はず。

【八】陰聚。五陰の積聚。

『牢として牢想を起さず。』とは此の衆生の類は生死を戀慕し、若しは自ら念を生ずらく、「人の世間に處して、五欲に樂著し、以て自ら娯樂するは、乃ち牢固と爲せばなり。」と。是の故に說いて曰く、『牢として牢想を起さず。』と。『牢として不牢想を起し、』とは邪見の人、執意し來るや久しく、共に相指授して乃ち此の論を興すらく、「竊かに聞く。佛家は泥洹を稱して無生・無滅・無起滅の想と說く。亦復宗親五族を歌歎喜舞せしむる有ること無く、園觀浴池の行來進止、都て此かる者無し。何の牢固か有らん。」と。佛、言く、「爾らず。斯等は顛倒にして邪心滅せざるなり。牢として固き者は泥洹に過ぎたるは莫し。反つて更に毀呰して、以て牢からずと爲す。」と。是の故に說いて曰く、『牢として不牢想を起し、』と。『彼、牢に至らざるは、邪見を起すに由るが故なり。』とは滅盡泥洹は衆患有ること無く、澄然無爲、凝神不動なり。亦變易せず。愚者は解して以て此を眞と爲さず。是の故に說いて曰く、『彼、牢に至らざるは、邪見を起すに由るが故なり。』と。

(四)牢の牢たるを知る者は　不牢の不牢たるを知る。　彼の人は牢を求め、　正治を以て本と爲す。

若し衆生有つて、滅盡泥洹の無生無滅なるを解すれば、亦世に欺詐誑惑せられず。諸佛世尊は永息の室にあり。其れ衆生有つて、此の室に入らんとする者は寵位至るも以て歡を增さず、毀辱逼るも以て慼を加へざれ。倒見と其の辭を異にし、邪部と其の趣を殊にすれば、冥然太虛として永く息みて起らず。智者の慕ふ所なれども、愚の習ふ所に非ず。彼の室に至らんと欲せば、要に[五]八正の徑路を涉り、[六]十二の洪崖を度らんことを求めよ。以て生死の嶮岸を渡れば、無爲にして澹然たるに安卹し悠悠として[七]楚酷なるを顧眄す。苦しい哉、愚惑の滋甚なるや。是の故に說いて曰く、

牢の牢たるを知る者は　不牢の不牢たるを知る。　彼の人は牢を求め、　正治を以て本と爲す。

(五)愚の意うて以て牢と爲すものは、　反つて九結の縛を被むる。　鳥の羅網に投ずるが如し。

【五】八正の徑路。八正道。
【六】十二の洪崖。十二因緣。
【七】楚酷。くるしみつらさ。

巻の第二十六

覆要品第三十

(一)夜光の冥を照すは、日の未だ出でざるに至る間なり。日光大明を布けば、夜光は便ち【一】黮黵たり。

此の義を觀じ已つて、如來は喩を引き、後生をして其の事に明達せしめんと欲したまはく、「猶夜光の虫の幽冥に處在するが若し。其の光明を布き、遠く照す所有るや、謂つて已が明に及ぶ者有ること無しと爲せども、日天子の百千の光明を放つて東方に昇るに値ふや、爾の時、復夜光虫の明無く、顏色黮黵として像純黑の如し。」と。是の故に說いて曰く、

夜光の冥を照すは、日の未だ出でざるに至る間なり。日光大明を布けば、夜光は便ち黮黵たり。

(二)【二】察者の光明を布くは、如來の未だ出でざる頃なり。佛大明を放てば、察も無く、【三】聲聞も無し。

外道梵志の所行は同じからず。或は察して知る者有り。或は入定して知る者有り。或は教を聞いて悟る者有り。此の三種の人は世に在つて、【四】跨行し各自に尊と謂ふ。然る所以は蓋し如來、未だ世に現はれざるに由るなり。設し如來、神を世に降し、大光明を放ち、流教布化したまふや、爾の時は外道梵志、自然に消歇し、其の道、行はれず、復威神無し。是の故に說いて曰く、

察者の光明を布くは、如來未だ出でざる頃なり。佛大明を放てば、察も無く聲聞も無し。

(三)牢として牢想を起さず、牢として不牢想を起し、彼、牢に至らざるは、邪見を起すに由るが故なり。

【一】黮黵。くらき貌。

【二】察者。智慧の觀察にて悟れる者。

【三】聲聞。聖賢の解教を聞いて悟れる者。

【四】跨行。横行闊歩す。

斯の偈を説かく、

福を作り惡を作らざるは、　皆宿行の法に由る。　終に死徑を畏れざること、　船の流を截つて渡るが如しと。

形を改め、服を易へ、竊かに行いて求索し、官物を償ひ畢つて、乃ち身を出すことを得んのみ。」と。其の人、復念へらく、「隣國に王有り、善宿と號す。道徳を修行し、施心絶たず。當に往いて彼に至り、至誠もて情を告げなば、必ずや違かれじ。王物を償ふに足らん。」と。尋で彼に往至し、王に隨つて乞索す。王、言く、『大いに佳し。當に相供給すべし。吾が沐浴し訖るを須て、當に惠施すべし。小らく停まれ、憂ふること勿れ、言、信に負かず。』と。王、浴地に詣りしに、鬼兵の爲めに擒にせらる。王、尋で還顧し、悲戚して涕零つ。鬼王、問うて曰く、『我等、聞く。王、仁和博愛、周濟せざる靡しと。厄困に遭ふと雖も、何爲れぞ、悲戚するや。』と。王、鬼に報へて曰く、『我、生れて惠施し、未だ曾て悔有らず。向に梵志有つて、外に在つて乞索せり。許せども、未だ與へず。是を以て憂戚するのみ。』と。鬼王、王に白く、『王、誠信を守り、由來改めず。如今、王を放つも、施し訖る時、還らん。』と。乃ち王の心の誠心に負かざるを知るなり。王、宮に還るを得て、藏を開いて惠施し、彼の人の意を恣にす。尋で還り、信に就き、鬼王の所に詣る。鬼王、告げて曰く、『汝、吾を畏れざるか。何爲れぞ、死を受けんとして來るや。』と。爾の時、善宿大王、彼の鬼王に向つて、斯の偈を說かく、

福を作り惡を作らざるは、　皆宿行の法に由る。　終に死徑を畏れざること、　船の流を截つて渡るが如しと。

鬼王、之を聞いて、内に慚愧を懷き、心を改め、行を易へ、善本を思修す。即ち善宿王に告げて曰く、『今、所說を聞くに、人中有り難きことなり。今九十九王を放ち、我、此の位を捨てん。願はくは王、統領し、法を以て治化せよ。我、鬼業を領して寶宿に還らん。若し俱に健ならば、自ら當に數〻觀るべし。』と。即ち共に離別し、各〻所在に還る。萬民、稱慶し、國界、清泰なり。共に十善を行ひ、惡業を修せず。善宿は行を積んで息まず。後に樹王の下に成佛することを得たり。復

(三二)福を作り惡を作らざるは、皆宿行の法に由る。終に死徑を畏れざること、船の流を截つて渡るが如し。

昔、佛、先世に未だ成等正覺せざる時、菩薩身たり。號して一切施と曰ふ。婆羅門の爲めの故に、自ら縛して(四六)闕に詣る。敵國王、曰く『汝、今吾を畏るゝか。』と。爾の時、一切施、此の偈を說きたまはく、

福を作り惡を作らざるは、皆宿行の法に由る。終に死徑を畏れざること、船の流を截つて渡るが如しと。

昔、噉人鬼有り。人中に在つて王と作る。恒に人肉を食し、以て(四七)廚宰と爲す。隣國の征伐にて九十九王を得。二十一人は以て常則と爲す。九十九王、羅刹王に白して曰く『隣國に王有り。名けて善宿と曰ふ。好んで施惠を行じ、菩薩の德を修す。求索せらるゝ有れば、人意に逆はず。大王、設し能く彼を擒獲せば、我等、心に甘んじて死を受くるも、萬に一も恨無し。』と。爾の時、羅刹人王、卽ち鬼兵を起し、往いて其の便を伺はしむ。正に善宿大王の外の園觀に在つて浴池に遊戲せるに値ふ。一梵志の家を辭して外學する有り。夫の梵志の法は辭去するに臨むの時、父母に白して言く『我、今家を離れ、學問を追伴す。還るの日を計するも且つ未だ期有らず。設し財貨窮乏せば、王より與貸せられよ。我、還らば、當に償ふべし。』と。其の人、學問成就し得たるを以て家中に來至するに、但空屋を見るのみにして人衆を見ず。卽ち隣比に問ふらく『我が今父母・兄弟・姉妹、竟に所在すと爲すや。』と。隣比、報へて曰く『汝、學ぶの後、王財を擧げて貽りしが、以て當に償ふべき無かりしかば、王の爲めに繫がれて今、牢獄に在り。往いて看んと欲せば、宜しく是の時を知るべし。』と。其の人、自ら念へらく『家窮しみ、事狹く、財寶有ること無し。設し我、獄に詣り、父母に親覲せば、復當に拘執せられ、同じく其の苦を受け、王法を免れじ。宜しく外に在らしめて、

【四六】闕。宮闕。

【四七】廚宰。最上の料理。大御馳走の意。

を聞いて卽日四種の兵もて嚴駕し、宮人、婇女と城を出でゝ災を避く。尋で[四三]恒水に詣り、帆を張り、船に乘り、謂つて難を免かるゝと爲す。時に阿鼻地獄の火焔來つて諸の群衆に接及す。翼從せる多少のもの悉く地獄に入り、得脫する者無し。琉璃王、先に未だ災を避けざるの時、舍衞城內に來至して、忽ち遙かに倡伎樂を作し、歌舞戲笑、五樂自ら娛めるを聞き、王、左右に問ふらく、『斯は是れ、誰の家なれば、戲笑の聲、乃ち此に徹するや。』と。諸臣、白して言く、『此は是れ[四四]祇頭太子家中の音樂の聲なり。』と。王、尋で信を遣はし、速かに使を喚び來り、『我、今征伐して賊と戰鬪し、國事を憂慮す。祇頭は今日方に歡樂に更けり、五樂以て自ら娛む。設し我、戰鬪して賊に如かずんば、此の人、必ず王の尊位を得んことを望まん。』と。祇頭太子、王の召喚を聞き、尋で出でゝ奉迎す。王、太子に告げたまはく、『吾、賊と戰ひ、心に萬國を憂ふ。汝、今方に五樂に更り、自ら娛む。』と。卽ち利劍を拔き、斬つて捨て去る。祇頭、身を捨てゝ卽ち天上に生ず。內宮の伎女、五樂自ら娛んで、主を失へるを覺らず。天上の婇女に前後を圍遶せられて、亦復倡伎樂を作して共に相娛樂す。爾の時、世尊、天眼を以て祇頭王子の二處にて福を受くるを觀たまひ、大衆中に在つて、此の偈を說きたまはく、

　此に喜び彼に亦喜び、　福行二俱に喜ぶ。　彼に喜ぶは彼に報を受くればなり。　行を見て自ら清淨なれと。

爾の時、世尊、復、琉璃王の與に斯の偈を說きたまはく、

　此に煮彼に亦煮、　罪行二俱に煮る。　彼に煮るは彼に罪を受くればなり。　行を見るに自ら驗有りと。

爾の時、世尊、天眼を以て、瑠璃王の地獄に處在し、拷掠[四五]酸楚せらるゝを觀見したまふ。是の故に、世尊は斯の偈を說きたまへり。

【四三】恒水。恒河。

【四四】祇頭太子(Jeta Jeta)。祇陀、誓多とも書く。舍衞城波斯匿王の太子。

【四五】酸楚。くるしみいたむ。

の時、世尊、便ち其の喩を引きたまはく、「日の初めて沒する際の如し。山川・樹影、皆各、陰を垂れ、遂に冥きに至る。今此の群惑の徒の迷に執することも亦爾り。身口を造り、不善の本を行ず。臨終の日、諸惡重陰し、各各自ら隨つて漸漸に冥室に將至して、報を受く。」と。是の故に說いて曰く、

惡を作せば憂有りと言ふ。久しく作せば亦憂ありと言ふ。屛隈にて(作すも)亦憂ありと言ふ。彼の報は亦憂有りと。

(三〇)此に憂ひ、彼に亦憂ふ。惡行は二俱に憂ふ。彼に憂ふるは彼に報を受くればなり。行を見て乃ち審かに知れ。

所謂『此に憂ひ、』とは今現世の憂なり。所謂『彼に憂ふ。』とは後世の憂なり。所謂『此に憂ひ、』とは死せず、命終せざるときにして所謂『彼に憂ふ。』とは已に死し、已に命終したるときなり。是の故に說いて曰く、

此に憂ひ、彼に亦憂ふ。惡行は二俱に憂ふ。彼に憂ふるは彼に報を受くればなり。行を見て乃ち審かに知れと。

(三一)此に喜び彼に亦喜ぶ。福行は二俱に喜ぶ。彼に喜ぶは彼に報を受くればなり。行を見て自ら清淨なれ。

昔、琉璃王、兵を興し、迦維羅竭國を攻伐し、人民を摧破し、七千を擒獲す。聖人の道跡を見はす者は悉く其の足を埋め、暴象をして蹈んで之を蹈殺せしむ。略して其の義を說き、佛、比丘に告げたまはく、『拘薩羅王の現はるゝや、反覆無く、聖に違ひ、眞に叛き、無擇罪を興せり。斯れ等の類は却後七日にして自ら當に報を受くべし。拘薩羅國は王種當に絕え、復繼嗣無かるべし。(四二)無擇地獄の火焰當に出で、王身及び諸の侍從を纏裹して悉く無擇地獄の中に入らしむべし。』と。琉璃、之

【四二】無擇地獄。無間地獄の古譯。五逆等の無間業を造りしもの凡て墮ちて、不斷に苦を受くる地獄。

餓鬼なり。其れ衆生有つて、惡心熾盛なれば、壽終るの後、此の十處を離れず。是の故に說いて曰く、『十品處に當れば、便ち當に彼に趣くべし。』と。

(二一七)痛痒なる語は麁獷なり。　此の形は必ず壞敗す。　衆病に酷切せらるれば、　心亂れて定まらず。　宗族は別離して散じ、　財貨は費耗して盡く。　王者に劫掠せらるれば、　所願は意の從ならず。　或は復無數の變あり。　火の爲めに焚燒せられ、　身壞れ、智慧も無し。　亦十品に趣く。

此の上の諸偈は盡く是れ如來の神口の所說なり。調達は愚かにも阿闍世をして酒飲める暴象の醉へるを如來に向はしめたり。是の時、世尊、尋で彼の象に向ひ、而して斯の偈を說きたまひしなり。

(二一八)惡を作して(罪)無と言ふこと勿れ。　久しく作して罪無しと言ひ、　[四〇]屛隈なれば、罪無しと言ふも、　斯は皆證驗有り。

夫れ人、惡事を作すに輕重有り。意盛んなれば、捨てず、去離する能はず、出要を求めず。藏隱して自ら匿す。亦復人に向つて陳說する能はず。是を以て世尊、後人に教誨したまはく、『新作も舊造も、下屛隈の處に至るも、善惡の冥報は藏匿すべからず。』と。是の故に說いて曰く、『惡を作して(罪)無しと言ふこと勿れ。久しく作して罪無しと言ひ、』と、『屛隈なれば罪無しと言ふも、斯は皆證驗有り。』とは人、意を設けて屛隈の處に在つて諸の罪根を造らんと欲すれども、當時、前類の謗を免かるべしと雖も、然も復、後世の報對は免れず。是の故に說いて曰く、『屛隈なれば罪無しと言ふも、斯は皆證驗有り。』と。

(二一九)惡を作せば憂有りと言ふ。　久しく作せば亦憂ありと言ふ。　屛隈にて(作すも)亦憂ありと言ふ。　彼の報は亦憂有り。

人の惡を造るや、初意赫熾なれば、自ら覺知せず。當時、心勇めば、[四一]應爾を爲したりと謂ふ。爾

【四〇】屛隈。人目につかざるもの、かげやすみ。

【四一】應爾。當然。

を獲るが如し。

『福は爲すこと少しと雖も、後には大福を受け、』とは人の福を爲すや、唯、心に存在し、財物の多く有り、少く有るに在らず。設ひ物を施すこと少しと雖も、心意普等にして廣く一切に及び、自ら己の爲めにせずんば、後に其の福を獲ることも、稱限すべからず。是の故に說いて曰く、『福は爲すこと少しと雖も、後には大福を受け、』と。『當に大報を獲べきこと、種えて實を獲るが如し。』とは後に天人自然の福を受け、顏色從容たり。恒に中國に處り、邊境に在らず、言語に從つて用ひて人意を傷つけず。饒財多寶にして憎嫉を懷かず。家に在つて德を修め、宗族和穆す。設し當に出家せば、恩愛を捐棄し、鬚髮を剃除し、三法衣を著け、形を苦しめ、道を學び、榮冀心を除く。次を越えて證を取り、其の有漏を盡し、無漏行を成ず。衆德普く備はり、功福具滿す。猶田夫の多く種えて報を獲、倉庫盈滿して、意志歡喜し、內に自ら功の擧ること唐しからざりしを慶賀するが如し。是の故に說いて曰く、『當に大報を獲べきこと、種えて實を獲るが如し。』と。

(二一六)過無きに而も强て輕しめ、　恚無きに而も强て侵せば、　十品處に當れば、　便ち當に彼に趣くべし。

『過無きに而も强て輕しめ、恚無きに而も强て侵せば、』とは彼の有人、恚嫉憍慢の心有ること無きに、然も愚騃の人は意を興して彼に向ひ、害心を起謀するが如し。諸佛世尊は一切を慈愍したまひ、哀苦有るを見れば、其の難を拔濟したまふ。生類を興念すること母の子を愛するが如し。是の故に說いて曰く、『過無きに而も强て輕しめ、恚無きに而も强て侵せば、』と。『十品處に當れば、便ち當に彼に趣くべし。』とは所謂十品とは一に無救と名け、二に焰と名け、三に大焰と名け、四に黑繩と名け、五に啼哭と名け、六に大啼哭と名け、七に等害と名け、八に等命と名け、九には畜生、十には

(二三)先づ當に善心を制し、　惡の根本を攝持すべし。　是に由つて福業を興せ。　心は惡を樂しむに由るものなり。

『先づ當に善心を制し、惡の根本を攝持すべし。』とは善心を具足して分散せしむること勿れ。意を執つて前に在ること油鉢を擎ぐるが如くにし、戰戰兢兢として劫燒を避くるが如くせよ。當に無常、苦・空・非身を以て、心の穢垢を除き、沐浴して淨ならしむべし。是の故に說いて曰く、『先づ當に善心を制し、惡の根本を攝持すべし。』と。『是に由つて福業を興せ。心は惡を樂しむに由るものなり。』とは人、善を行じて後世の資糧を作らずんば、命終して、燒身の患あらん。日夜に惡を爲せば、自ら改むること能はず。是の故に說いて曰く、『是に由つて福業を興せ。心は惡を樂しむに由るものなり。』と。

(二四)惡を爲すこと復少しと雖も、　後世には苦を受くること深し。　當に無邊の報を獲べきこと、　毒の心腹に在るが如し。

『惡を爲すこと復少しと雖も、後世には苦を受くること深し。』とは人、意固からず、所行記無く、少多の罪を爲つて、或は覺り、覺らざるも要當に報を受けて、其の對を免れざるべし。無慚無愧にして出要を求め、世道を度ることを求めざるあり。是の故に說いて曰く、『惡を爲すこと復少しと雖も、後世には苦を受くること深し。』と。『當に無邊の報を得べきこと、毒の心腹に在るが如し。』とは少多も隙有り、塵垢意を染むれば、便ち當に無邊の罪を受くべし。或は人を觸嬈して惡行を興さしめんか、是に由つて自ら無邊の罪に墮することを致さん。或は眷屬を離別し、家室を鬪亂せられん。此の如きの苦の衆腦は無數なり。是の故に說いて曰く、『當に無邊の報を得べきこと、毒の心腹に在るが如し。』と。

(二五)福は爲すこと少しと雖も、　後には大福を受け、　當に大報を獲べきこと、　種えて實

微にして苦を受くることも幾くも無し。斯は過を悔い、罪の根本を知れるに由る。若し畜生と作るも、負擔重からず、食は以て時に隨ひ、苦痛も加はらず。若し餓鬼と爲るも、鬼に四種有るうち、生れて豪尊の餓鬼と作り、衣食自然なり。若し人間に處るも、豪富大族として闕乏する所無し。若し天に生ずるも、微福の報ありて、食は以て口を覆ひ、自ら福の少きを恥づるほどなり。是の故に說いて曰く、『人悪行を爲すと雖も、亦數數作さゞれ。』と。『彼に於て意樂しまず、悪の苦たるを知れ。』とは學人、悪を見て、意に願樂せず、自ら其の意を攝して分散せしめざれ。罪、微細なりと雖も、報は泰山の如し。猛火、小なりと雖も、山野を燒く。是を以て智者は常に當に防慮して悪の根源、衆苦の首を知る。是の故に說いて曰く、『彼に於て意樂しまず、悪の苦たるを知れ。』と。

(二二)人能く其の福を作らば、亦當に數數造るべし。彼に於て意願樂すれば、善く其の福報を受けん。

『人能く其の福を作らば、亦當に數數造るべし。』とは人生れて一世、貧窮を致す所以は皆前身の慳結の誤まる所に由る。是を以て聖人は類に觸れて說く所は先づ施惠を以て首と爲す。復貧窮すと雖も、要當に少多を減損して以て曩の愆を補ふべし。財貨無しと雖も、當に自ら己を役し、力を出して使を作し、神祠を修補し、衆事を佐助すべし。日夜にも其の福業を闕かしめざれ。彈指の頃も善を念ふも亦是し。況んや復躬自ら功德を行ずるをや。是の故に說いて曰く、『人能く其の福を作らば、亦當に數數造るべし。』と。『彼に於て意願樂すれば、善く其の福報を受けん。』とは人の福を修するや、潤及する所多し。善を行ずる者を見ば、共に代つて歡喜し、輒ち自ら財を出して福を爲らんことを勸助せよ。身に祐獲られ、善名流布す。見る者は心歡んで敬を致さゞる靡し。生るれば輒ち聖に遇ひ、八無閑處に墮せず。是の故に說いて曰く、『彼に於て意願樂すれば、善く其の福報を受けん。』と。

と。『如し惡以て熟さずんば、惡者は其の惡を觀よ。』とは如し人、惡を作すの後、尋で悔を懷くらく、「咄、我が所作は將いに非なり。其れ宜しく人に嫉まるべし。我、今之を習へるは將いに非なり。是れ我が執意の誤りか。自今改悔して惡の穢汚なるを觀ん。」と。是の故に說いて曰く、『如し惡以て熟さずんば、惡者は其の惡を觀よ。』と。

（二一〇）賢者は其の惡を觀るも、　乃至賢は熟せられず。　設し以て賢熟せらるれば、　賢と賢と自ら相觀よ。

『賢者は其の惡を觀るも、乃至賢は熟せられず。』とは賢人は戒を守り、衆德具足し、多聞辯慧にして言に缺漏無し。言を出すに柔和にして常に眞誠を行ひ、四等心を行じて一切を慈愍す。小過隙を見れば、便ち恐懼を懷く。況んや當に無擇罪を造るべけんや。是の故に說いて曰く、『賢者は其の惡を見るも、乃至賢は熟せられず。』と『設し以て賢熟せらるれば、賢と賢と自ら相觀よ。』とは賢者は自ら察し、自ら性行を觀る。我、今致さるゝ供養は皆前身に學を積みしの致す所に由る。宿に福を種え、恩を布き、德を施さずんば、今日何に緣つてか此の福報を得ん。今、謹んで愼重に其の德を行ぜずんば、後更に形を受くるも、福として憑るべき無けん。復當に流浪して生死を經歷すべし。方便もて行を積まば、久しうして乃ち成就せん。其の間の艱難、度るも知る所に非ず、算ふるも籌る所に非ず。過佛恒沙も覩ず、聞かざるなり。行うて自ら墜ちて自り今に至るまで、度られず。是の故に說いて曰く、『設し以て賢熟せらるれば、賢と賢と自ら相觀よ。』と。

（二一一）人、惡行を爲すと雖も、　亦數數作さざれ。　彼に於て意樂しまず、　惡の苦たるを知れ。

『人惡を爲すと雖も、亦數數作さざれ。』とは人、惡行を爲さば、當に自ら改更すべし。備さに三塗八難の苦を受くれば、中に於て出でんことを求むるも、亦甚だ得難し。是の故に智者は制するに禁法を以てし、防ぐに未然を以てす。設ひ其の報を受くるも猶輕し 若し地獄に在るも、湯 冷水、

【三八】小過隙。小さきつみとが。
【三九】無擇罪。五逆等の無擇地獄に墮すべき大罪業。

すべけん。是の故に說いて曰く、『惡(人)惡を自ら爲すは易く、惡人の善を爲すは難し。』と。

(一八)愚者は自ら正しと謂ふも、　猶惡未だ成熟せず。　惡以て成熟し滿つれば、　諸苦も亦復熟す。

『愚者は自ら正しと謂ふも、猶惡未だ成熟せず。』とは愚人は自ら所行專正なりと念ひ、餘者の所作は皆非法なりと爲す。善を行ずる者を見ては共に之を憎嫉す。罪根已に具はり、癡心純熟して然る後に乃ち我が所作の非なるを知る。今我、惡を造り、父母、爲るに非ず、亦兄弟宗親の所造にも非ず。其の罪を分受すれば、悔ゆるも及ぶ所無し。天に非ず、鬼に非ず、沙門・梵志の所造に非ず。我、今自ら罪の根本を知る。上、天を怨まず、下、地を尤めず。心に甘んじて罪を受け、復奈何なるを知る。是の故に說いて曰く、『愚者は自ら正しと謂ふも、猶惡未だ成熟せず。』と『惡以て成熟し滿つれば、諸苦も亦復熟す。』とは積罪の人は獄に入つて報を受け、十三種の焰、其の身を纒裹し、死すれども復蘇へり、死を求むれども得ず。要に故罪を償ふべし。以て盡くせば、餘無し。然る後に乃ち出づ。若しは畜生に在つて、愚癡に蔽はれて眞道を識らず、領腫れ、脊壞れ、鼻を穿ち、頭を羈ぎ、手脚を枷鎖せらる。若しは餓鬼に生じて晝夜に飢渴し、腹は泰山の若く、咽は細きこと鍼の若く、身長は四十里にして[三七]一寸千隔す。若しは人中に在つて、貧窮困悴し、衣、形を蓋はず、食、口に充たず。是の故に說いて曰く、『惡以て成熟し滿つれば、諸苦も亦復熟す。』と。

(一九)賢者は惡を見るも、　惡の爲めに熟せられず。　如し惡以て熟さずんば、　惡者は其の惡を觀よ。

『賢者は惡を見るも、惡の爲めに熟せられず。』とは彼の行を執るの人、其の惡を行ふを見れば、時に隨つて訶諫すらく、「此は妙行に非ず。生死に輪轉して出でんことを求むるも、甚だ難し。三惡道に於て、罪の根本を造る。」と。是の故に說いて曰く、『賢者は惡を見るも、惡の爲めに熟せられず。』

【三七】一寸千隔す。身長非常に長けれども、體內の一寸程の部分も千に區隔せらる。爲めに食を取るも榮養全身に普遍し難し。

事は甚だ難しと爲す。

『多く衆惡を行ふ有れば、必ず身の爲めに累と作る。』とは世に多く人有り。惡を布き、自ら侵して聖諦に合せず。屠割[28]畋獵し、猪を養ひ、雞を畜ひ、[29]懸弶を[30]張施し、以て群鹿を捕ふ。賊と爲つては殺戮し、獄卒に縛就せらる、[31]眞陀羅種となつて[32]羂索し、[33]飛綸す。是の如き惡行の衆生は稱計すべからず。斯の如きの類、必ず身の爲めに患と作り、死して地獄に入り、痛を受くること量り難し。是の故に說いて曰く、『多く衆惡を行ふ有れば、必ず身の爲めに累と作る。』と。『善を施し恩德を布く、此の事は甚だ難しと爲す。』とは人能く自ら前世、後世を察せば善惡の報應あらん。廣く施し、窮に[34]侵肌の*貨を周むことは人に施すことなるを以て此の事は甚だ難し。是の故に說いて曰く、『善を施し恩德を布く、此の事は甚だ難しと爲す。』と。

（一七）善い哉、善を修する者や、*善い哉甚だ惡を爲すや。　惡（人）惡を自ら爲すは易く、惡人の善を爲すは難し。

『善い哉、善を修する者や、』とは善人は善を修して行自然に應ふ。惡を爲すの徒には親近すべからず。善を爲すの人は諸佛に衞護せられ、諸天・世人に愛敬せらるべし。所至の方も終に善知識を離れず。是の故に說いて曰く、『善い哉、善を修する者や、』と。『善い哉、甚だ惡を爲すや、』とは人の惡を爲すや、日に增して損する無きこと猶蔓草の種えざるに自ら滋り、正しく其の地を鏟り、故處を淨むるも、猶生じて息まざるが如し。是の故に說いて曰く、『善い哉、甚だ惡を爲すや、』と。『惡（人）惡を自ら爲すは易く、惡人の善を爲すは難し。』とは猶眞陀羅種の恒に死人を擔つて、塚間に捐棄するに、心恒に喜歡して畏忌する所無く、心倍々歡喜して以て自ら娛樂するが如し。猶典獄の人の[35]杻械を守護して晝夜に惡を行ひ、自ら謂つて尊と爲す。賢聖の人は此の衆變を觀じて以て大患と爲す。[36]應死の人の將に都市に詣らんとするは擧足下足、以て死地に近づくなり。三界酸楚、何ぞ貪慕

【二八】畋獵。かりすること。
【二九】懸弶。かけたるわな。
【三〇】張施。はりまはす。
【三一】眞陀羅種（Caṇḍāla）。旃陀羅。譯、屠者、下姓。
【三二】羂索。鳥獸を取る具。わな。
【三三】飛綸。鳥獸を取る具。とびなわ。
【三四】侵肌の貨。手離し難き大切なる財貨。
＊　大正大藏經に貸とあるは誤植。
＊　善い哉…。惡の力の大なるをあげ注意を喚起せし句か。
【三五】杻械。かせ、罪人の手足にはむる刑具。
【三六】應死の人。死刑を宣告せられ、應に死すべき人。

云く此に調達有り、衆惡を造作し、傷害心を起して如來に向ふ。』と。調達、聞き已つて、內に憂感心を懷き、心自ら寧からず。便ち本國に還る。宿惡盡きずして恚結の爲めに纒はれ、菩薩宮[二五]內に搪揬して、瞿夷[二六]に語げて曰く、『我、今汝の拜を取つて第一夫人と爲さん。不審、聖女、爾るべしと爲すや不や。』と。瞿夷、之を聞いて調達に語げて曰く、『汝の右手を前せ。吾、之を把らんと欲す。』と。調達、尋で手を舒べて把らしむ。腕を扼せしに骨碎け、五指より血出づ。當時、迷悶良久しうして乃ち蘇へる。瞿夷、語げて曰く、『悉達の力を除け。更に人の我より出でゝ上に有るもの無けん。設し當に汝と相把持すべけんには身體碎爛して塵霧よりも劇しからん。猗力人の指の千樹を壞るが如く、隨意に之を碎かんこと何の難きことか有らん。』と。是の時、調達、轉じて宮殿に進入し、菩薩の床に坐す。宮人、之を見て悉く共に嫌恨[二七]す。卽ち前んで競ひ捉へ、床下に擲つ。卽ち左臏に傷つき、行來に堪へず。家人、輦輿もて本舍に還歸せしむ。諸釋、皆嫌ひ、皆來つて告語すらく『汝、今調達よ、宜しく改更して佛に向つて懺悔すべし。』と。調達、之を聞いて、私かに巧詐を設け、密かに鐵爪を作り、害毒を之に塗る。外形は柔和なれども、內には瞋恚を懷く。爾の時、調達、佛の所說を憶へらく『瞿曇沙門は恒に此の言を陳ぶ。「身有るも瘡痏無ければ、毒の爲めに害せられず。毒も瘡無きを奈何せん。惡無ければ所造も無し。」と。我、今當に往いて佯つて懺悔するが如くにし、爪を以て其の脚を摑壞せん。毒氣流溢して自ら當に死を取るべし。』と。諸人に輿を輦かしめて、世尊に往詣す。世尊を去ること三七仞にして、左右の人に語るらく『下つて我、地に在らん。吾、步して往かんと欲す。』と。尋で下つて地に在り。尋で時に、地中より涌火沸出し、其の身を纏裹し、將に地獄に入らんとす。是の故に說いて曰く、

身有るも瘡痏無ければ、　毒の爲めに害せられず。　毒も瘡無ければ奈何せんと。*

(一六)多く衆惡を行ふ有れば、　必ず身の爲めに累と作る。　善を施し、恩德を布く、　此の

【二五】菩薩宮。佛陀卽ち前の悉達太子の宮殿なり。

【二六】瞿夷(Gopikā or Gopā)。瞿比迦、羅波とも書く。譯明女。守護池、舍夷長者の女、悉達太子の夫人。耶輸陀羅と同一人か否か諸說あり。

【二七】嫌恨。きらひうらむ。

＊　第四句拔けたり。

に在つて周旋するに、未だ彼の壽を幾うせず。短を見れば、恥有るが如く、長を見るも、自ら稱せざるがごとし。世に在つて其の壽を訖るも、終に惡行を爲さず。是の故に說いて曰く、『智者は善く壽きするも、亦衆惡を爲らず。』と。

(一四)商人の路に在つて懼るゝは、　伴少くして貨多ければなり。　嶮難の處を經過すれば
然も折軸の憂有り。

『商人の路に在つて懼るゝは、伴少くして貨多ければなり。』とは昔、衆々の賈商人有り。途路を冐涉し、曠野險難の中を經過するに、路に盜賊多く、自ら免るゝに由無く、齎らす所の財寶は[二三]貲糧有ること無し。同伴の行人、器仗の用つて自ら防備すべき有ること無し。行人、旣に少けれども、財貨は極めて多ければ、心に恐懼を懷き、神識熾然たるなり。一黠者有り、其の同伴に告ぐらく、『恐懼を生ずること勿れ。吾、當に計を設けて此の難を免るゝことを得せしむべし。衆人、意正しければ、便ち他無きを得ん。』と。是の故に說いて曰く、『商人の路に在つて懼るゝは、伴少くして貨多ければなり。』と。『嶮難の處を經過すれば、然も折軸の憂有り。』とは道路、嶮難にして良伴に遇はざれば、其の大道を捨てゝ其の細徑に隨ひしに、所至に達せざる中道に車壞れ、前伴は後伴を顧みず、共に相捐棄せり。是を以て世尊、此を借りて喩と爲し、後生をして深く罪福を識らしめんと欲したまふ。化を受くる者に毫釐の礙無くんば、教を演ぶる者も、其の功を損てざるなり。是の故に說いて曰く、『嶮難の處を經過すれば、然も折軸の憂有り。』と。

(一五)身有るも　[二四]瘡痏無ければ、　毒の爲めに害せられず。　毒も痏無ければ奈何せん。　惡
無ければ所造も無し。

猶調達の羅閱城に在つて、害心を興謀し、後、事彰露し、擧國、聞知せしが如し。時に王阿闍世、調達に語げて曰く、『汝、宜しく國を出で、此に住することを須ひざれ。十六大國、聞知せざる莫し。

【二三】貲糧。恐らくは貲ならん。然らばはかるなり。

【二四】瘡痏。きず。

れば、則ち聖に遇ひ、常に其の福を受く。父母・兄弟有つて代つて其の慶を獲るに非ず。意自ら清潔なれば、人を累はさず。自行清淨なれば、自ら其の報を受く。是の故に說いて曰く、

人の惡を爲すや、後に自ら報を受く。己惡を爲さずんば、後に憂ふる所無しと。

（一二）己淨不淨に達せずんば、何ぞ他人の淨を慮らんや。愚者は自ら練らず。鐵の純鋼を鑽るが如し。

『己淨不淨に達せずんば、何ぞ他人の淨を慮らんや。』とは己自ら清淨なれば、亦能く彼をして清淨を行はしむ。己が行、均はずんば、焉んぞ能く彼をして清淨行を得せしめん。是の故に說いて曰く、『己淨不淨に達せずんば、何ぞ他人の淨を慮らんや。』と。『愚者は自ら練らず。鐵の純鋼を鑽るが如し。』とは愚人の習ふ所は終日窮らず。一日の所造にて永劫に墜墮す。賢聖に遇ふと雖も、濟度を蒙らず。猶鐵の純鋼を鑽るに、功至るも、獲べからざるがごとし。是の故に說いて曰く『愚者は自ら練らず。鐵の純鋼を鑽るが如し。』と。

（一三）若し眼に非邪を見るも、[三]黠人は方便を求む。智者は善く世に壽きするも、亦衆惡を爲らず。

『若し眼に非邪を見るも、』とは夫れ人、行を習ふ、專精なるを要と爲す。若し眼に色を見るも、眼識を起さゞれ。若しは好、若しは醜、意悉く平等なれ。設し好色を見るも、染著を興さず、設し惡色を見るも、亦感を懷かざれ。是の故に說いて曰く『若しは眼に非邪を見るも、』と。『黠人は方便を求む。』とは彼は眼に色を見れば、非眞爲り、磨滅の法爲り、遷轉して住まらざるを知る。生ずる者は盡くること有り、常なる者は亦滅す。愚者は翫習して智者に嗤はる。是の故に說いて曰く『黠人は方便を求む。』と。『智者は善く世に壽きするも、亦衆惡を爲らず。』とは智人、施す所の教は權化一世に非ず。惡を無形に防ぎ、福を自然に養ふ。行を執るや、世を累はさず。言教、形質を損せず。世

【三】黠人。さとくかしこき人。

『故無うして彼の人を畏れ、清淨を謗毀する者は、』とは人の學を修むるは穢を除くを上と爲す。行人垢を除き、唯清淨を修すれば、功德充滿し、何の達せざるをか懼れん。心に慳嫉無き者は其の道根を崇び、豁然として自悟す。斯は深要に通達し了するに由るが故なり。清淨の人には結使有ること無し。愚者は謗毀して謂つて不淨と爲す。聖者を謗毀すれば、受くるに罪を擇ぶ無し。斯は福報に由つて行を積むの致す所なり。是の故に說いて曰く、『故無うして彼の人を畏れ、清淨を謗毀する者は、』と。『尋で惡、其の力を獲、煙雲の風に吹かるゝがごとし。』とは世人、迷を執れば、惡を以て妙と爲す。是に由つて殃禍、漸やく泰山に入り、地獄・餓鬼を造り、畜生の罪を雜ゆ。是の故に說いて曰く、『尋で惡其の力を獲、煙雲の風に吹かるゝがごとし。』と。

（一〇）人の行を爲すや、　各各自ら知る。　善の善爲り、　惡の惡爲るを。

『人の行を爲すや、各各自ら知る。』とは人の行を修するや、志趣若干なり。惡者は自ら惡を知り、善者は自ら善を知る。善を爲すと雖も、惡を自ら知らざる者は報一倍を受く。善者は福を受くること無窮なれども、惡者は罪を受くること一倍なり。淨者は淨行を受け、不淨者は不淨行を受く。臨終の時、善惡然も別なるは神來迎するが若し。宮殿・屋舍・園觀・浴地を見、神、錯亂せず。衣被・服飾自然に體に著き、天女、圍遶して共に相娛樂す。還た自ら光の照す所無礙なるを見る。積惡の人は死に臨むの日、神識倒錯し、但大火・劍戟を見るのみ。蹲鵄・野狐・羅刹・妖魅・虎狼・惡獸を見、復刀山・劍樹・荊棘・坑坎・惡鬼の圍遶するを見る。是の故に說いて曰く、『善の善爲り、惡の惡爲るを。』と。

（一一）人の惡を爲すや、　後に自ら報を受く。　已惡を爲さずんば、　後に憂ふる所無し。

『人の惡を爲すや、後に自ら報を受く。』とは夫れ人、惡を爲せば、自ら禍患を招く。父母・兄弟・宗族有るも、其の罪を代受するに非ず。自ら惡を爲さずんば、後に報を受けず。此の如きの人は生る

是の故に說いて曰く、『人其の神を練らんと欲せば、要當に數〻修琢すべし。』と。『智者は彫飾し易ければ、乃ち世の雄と名く。』とは捷疾利根の人は言を出せば、律を成す。必ず度する所あらんと欲せば、[一八]四辯才を得よ。義辯・法辯・辭辯・應辯なり。義辯・法辯は此の二は內法に攝し、辭辯・應辯は此の二は外法に攝す。是の故に說いて曰く、『智者は彫飾し易ければ、乃ち世の雄と名く。』と。『能く彼に親近する者は安隱にして憂惱無し。』とは人の威儀を執つて進止去來、周旋往反するに皆威儀を執ることは其の節を失はざること、猶衆華の競敷して香氣遠く布くが如くなるべし。履行の人も亦復是の如し。戒・聞・施・慧の諸の[一九]總持の門を意を定めて散ぜしめず、能く此に親近して違失する所無くんば、便ち能く無漏の聖行を成就せん。是の故に說いて曰く、『能く彼に親近する者は安隱にして憂惱無し。』と。

(八)永く息みて過ぐる無き者は、　柔和にして卒暴ならず。　諸の惡法を吹棄すること、　風の其の葉を落すが如かれ。

『永く息みて過ぐる無き者は、柔和にして卒暴ならず』とは諸根具足して流溢する所無く、所說專正にして言卒暴ならず、威儀禮節漏失する所無き斯の如きの人は儔匹有ること無く、亦過ぐる無き者なり。是の故に說いて曰く、『永く息みて過ぐる無き者は、柔和にして卒暴ならず。』と。『諸の惡法を吹棄すること、風の其の葉を落すが如かれ。』とは行人、意を執ること[二〇]鏗然不動、信を執ること堅固にして毫釐も犯されずんば、諸の惡法を去つて日に其の善に進み、晝夜に校飾して塵有らしめざらん。鐵の垢を生ずるも、[二一]瑩治すれば、乃ち明かなるが如く、人心も垢を重ぬるも、慧を須ふれば、乃ち照す。是の故に說いて曰く、『諸の惡法を吹棄すること風の其の葉を落すが如かれ。』と。

(九)故無うして彼の人を毀れ、　清淨を誹毀する者は、　尋で惡其の力を獲、　煙雲の風に吹かるゝがごとし。

【一八】四辯才。四無礙智ともいふ。義辯とは教法の義理を知る。法辯とは教法の名句文そのものを知る。辭辯とは諸の言辭に通達す。應辯とは衆生の爲めに自在に說き、又正理に應ふ。

【一九】總持(Dhāraṇī)。陀羅尼の譯。種々の善法を散失せず、廣大なる義理を攝持すること。

【二〇】鏗然。高き貌。

【二一】瑩治。玉にて磨く。

『當に法味を服すべし。』と。

(六)人其の心を損せず、亦其の意を毀らずんば、以て善永く惡を滅し、惡道に墮するを憂へず。

『人其の心を損せず、亦其の意を毀らずんば、』とは人の初めて行を立つるや、先づ善法を習へ。初め意に猶豫すれば、乍ち信じ、乍ち信ぜず。其の意、勇なれば、聞くや輒ち信解す。意、狐疑すれば、法に達せず。此の人、必ず當に生死を經歷すべし。億佛、超過するも、得度を蒙らざらん。設し其の心を損せず、其の意を毀らずんば、至道を得んと欲するに、之を取ること甚だ易し。人、修學せんと欲し、專意なれば乃ち獲。匹夫の彼の有法を聞くが如し。中路、多難にして經過するに由無きも、一意に念ぜば、彼の形意以て達せん。何を以ての故に知るか。彼の得道の人は心に念ぜば形以て隨へばなり。是の故に說いて曰く『人其の心を損せず、亦其の意を毀らずんば、』と。『以て善永く惡を滅し、惡道に墮するを憂へず。』とは夫れ人、行を習うて、敦く道業を崇べば、世俗、根を見て現在前す。善根有りと雖も、斯は是れ、世俗有漏の行なり。想著を興さず、上及を求むる斯の人は終に惡趣に墮することを憂へず。是の故に說いて曰く『以て善永く惡を滅し、惡道に墮するを憂へず。』と。

(七)人、其の神を練らんと欲せば、要當に數々修琢すべし。智者は彫飾し易ければ、乃ち世の雄と名く。能く彼に親近する者は安隱にして憂惱無し。

『人其の神を練らんと欲せば、要當に數々修琢すべし。』とは舊學の人は外虛なれども、內實なり。或は山藪に潛隱する有り、或は【七】佯狂して世に遊ぶ有り。行不同なりと雖も、所濟等一なり。此は形器を取らざるも、此は純ら精神を練り、意を定めて錯らざらしむるなり。行人、權現して千轉百化し、要ず方便を設けて、衆生を導引して百練の室に至れ。所謂室とは泥洹虛寂の無爲城是れなり。

【七】佯狂。きちがひのまねす。

すれば、乃ち無爲に應ふ。是の故に說いて曰く、『法の起滅の跡を知れ。』と。『賢聖は世を樂しまず。愚者は賢と處らず。』とは賢聖は永く諸惡を滅して群俗と處らず。鶴、飛べば、高うして丘塚を樂しまず、猩猩は淨を好んで[一四]厠溷に處らず。賢聖の人も亦復是の如し。群俗と處つて與共に光を同じうせず。愚者は惡を好んで賢衆と處らず。是の故に說いて曰く、『賢聖は世を樂しまず。愚者は賢と處らず。』と。

(五)念待の味を解知し、　休息の義を思惟すれば、　熱無く飢想無く、　當に法味を服すべし。

『念待の味を解知し、』とは無數の生死を經歷して已來、未だ曾て此の念待の味を得ず。世に甘美殊勝の味は多し。甘蔗、葡萄此の如きの比も稱數すべからず。晝夜、之を享くるに、厭足有ること無し。然も此に從つては無爲に至るを得ず。念待の味は未だ曾て口を經ざるも、設し當に一たび遇ふべくんば、永く飢渇無し。其の餘の味は生死に展轉して、三塗に墜墮し、出期を求めんと欲するも、實に難しと爲す。是の故に說いて曰く、『念待の味を解知し、』と。『休息の義を思惟すれば、』とは彼の修行人、專精一已に思惟禪定すれば、心に念ずる所の法、終に錯亂せず。初めより竟りに至るまで、次緖を識らず。是の故に說いて曰く、『休息の義を思惟すれば、』と。『熱無く飢想無く、』とは貪欲は是れ熱、瞋恚は是れ熱、愚癡は是れ熱、飢渇は是れ熱なり。能く此の飢渇の熱を斷ずるは其の事甚だ難し。正しく此の[一五]四大海の水を飲んで其の渇を消さんと欲する者は未だ始めより見ず。其の渇を除き、永く生ぜざらしめんと欲せば、唯[一六]八解澄淨の味のみ有つて乃ち此の衆渇の本を消すことを得。是の故に說いて曰く、『熱無く飢想無く、』と。『當に法味を服すべし。』とは所謂法味とは衆施のうち、法施、勝れ、衆味のうち、法味勝るゝなり。此の味を得る者は法身、善本を離れず、諸の世俗の飢渇の患を斷ず。人、修學して其の解脫を求めんと欲せば、甘露至要の味を得ざる者も、無爲に安坐せよ。自ら慇懃に道跡を得んと欲求せざる者は甚だ難しと爲す。是の故に說いて曰く、

【一四】厠溷。かはや、便所。

【一五】四大海。須彌山の四方にある大海。此の大海に各一洲あり。

【一六】八解澄淨の味。八功德水のこと。須彌山と七金山との內海に盈滿す。八とは一、澄淨。二、清冷。三、甘美。四、輕軟。五、潤澤。六、安和。七、飲めば飢渇を除く。八、諸根を長養し、四大增益す。

することは、　鶴の乳を擇んで飲むが如かれ。

『隻行にして愚を逐ふこと勿れ。』とは所謂隻行とは閑靜の處に在つて、意分散せず、善本を思惟して念を繫けて前に在るなり。設し同處せんと欲せば、當に善知識と事に從ふべし。惡知識と事に從ふこと莫れ。是の故に說いて曰く、『隻行にして愚を逐ふこと勿れ。』と。『群せんと欲せば當に智を逐ふべし。』とは世に多く人有り、上賢を慕及し、有智を追逐し、持戒・精進・辯才・深邃にして道教を說くに堪へ、疲勞を懷かず。是の故に說いて曰く、『群せんと欲せば當に智を逐ふべし。』と。

『智者は其の惡を滅すること、』とは智慧の人は古を明らめ、今に達す。言に出す所說は必ず所濟有り。晝夜孜々として道術を思惟し、明智に承受す。吐く所の言教は善功德を以て衆惡を消滅す。是の故に說いて曰く、『智者は其の惡を滅すること、』と。『鶴の乳を擇んで飲むが如かれ。』とは昔、人有つて多く群鶴を捕へて爭乳するに、滋長し、展轉相生じて其の數無限なるが如し。養鶴の法は水を以て乳に和し、乃ち之を飲むを得せしむ。鶴の常法は當に之を食はんとする時、鼻孔より氣を出して水を吹いて兩つに闢き、純ら其の乳を食ふ。鳥の頑鈍なる猶能く分別して水を去つて乳を飲む。今の比丘たるもの能く爾らざらんや。當に其の善を選んで其の惡を[三]蠲除すること彼の鳥鶴の深く好惡を知るが如くなるべし。是の故に說いて曰く、『鶴の乳を擇んで飲むが如かれ。』と。

（四）世の若干變を觀じ、　法の起滅の跡を知れ。　賢聖は世を樂しまず、　愚者は賢と處らず。

『世の若干變を觀じ、』とは所謂世とは世に三品有り。一には器世、二には陰世、三には衆生世なり。此の三世は貯病の牢屋なり。內外堅固にして醫の療治する所に非ず。內には四百四病、同時に俱に作り、外には含毒の類、蚖・蛇・百足・蝮・蠍・虎・狼に噬齧せらる。衆變若干、其の事同じからず。水火・盜賊・怨讎の類、竊かに來つて傷害す。是の故に說いて曰く、『世の若干變を觀じ、』と、『法の起滅の跡を知れ。』とは跡を知る起滅に其の事二有り。一には結跡、二には陰跡なり。能く其の事を滅

【三】蠲除。はぶきのぞく。

し。我が夫主を知らんと欲せば、心懐に施在するところを今當に與に說くべし。閻浮利內迦毘國界の釋迦文佛の神力ある弟子を名けて目連と曰ふ。彼に賢弟有り。大富長者にして惠施を好喜し、窮を周ひ、乏しきを濟ふ。彼、命終の後、當に此に來生し、我等の與に夫主と作るべし。七寶の宮殿及び我等の身は惠施の報なり。』と。其の人、聞いて喜び、善心を生ぜり。兄の所に還至し、具さに其の情を白す。目連、告げて曰く、『云何か族姓子よ、夫れ人の惠施は當に報有りや、報無しと爲すべきや。』と。弟、慚愧を懷き、頭面に懺悔し、還つて世間に至り、廣く施して惓まざりき。是の故に說いて曰く、『惠施は福報を獲。』と。『藏して恚怒を懷かざれ。』とは夫れ人、毒を懷いて藏匿して內に在れば、人の惡を伺ひ、人の善を惱む。斯の如きの類は與に親しむべからず。灰の火を覆ふが如し。目、視ずと雖も、蹈めば、脚を燒く。身に防備無ければ、禁戒に[九]搪揬す。當時、意勇なれば、傷損を覺らざるも、人の傷害することは古より之有り。或は先に嫌を懷き、或は卒かに怒を興す。卒かに怒を興すは、猶尙恕すべし。先に嫌を懷くは斯の意親しみ難し。然る所以は夫れ人、陰謀すれば、必ず[一〇]傷剋す。群愚は相逐ひ、遂に惡災を致す。外に揚ぐること密ならざれば、內に情を共にして通ず。共に相稱譽して惡朋友を成ず。事、願と違うて遂に喪沒を致す。家屬財產、斯れ皆官に入り、人に憎嫉せられ、其の聲、惡聞す。是の故に說いて曰く、『藏して恚怒を懷かざれ。』と。『善を以て其の惡を滅すれば、欲・怒・癡餘り無し。』とは所謂善とは賢聖の道品是れなり。此の道品に乘ずれば、猶四瀆の水を流を斷つて度るも、畏難する所無きがごとし。諸惡を滅すれば、[一一]部使復生ぜず、災有り、毒を吐けば、欲・怒・癡生ず。三の根栽を拔いて其の三業を種え、仰いで道觀を修め、進んで[一二]四道に趣けば何の受け難きことか有らん。是の故に說いて曰く、『善を以て其の惡を滅すれば、欲・怒・癡餘り無し。』と。

(三)隻行にして愚を逐ふこと勿れ。　群せんと欲せば當に智を逐ふべし。　智者の其の惡を滅

【九】搪揬。牴觸なり。つきあたる。

【一〇】傷剋。きづゝきかたれる。

【一一】部使。派生的部分的煩惱。

【一二】四道。涅槃への四つの道。一、加行道。努力修行の道。二、無間道。正智を發し、煩惱を斷じ、間無き位。三、解脫道。正智眞理を證悟する位。四、勝進道。更に進んで定慧增勝する位。

昔日、大目揵連の同產の弟は饒財多寶にして七珍具足し、金銀、珍寶、硨磲・馬瑙・眞珠・虎珀、庫藏に盈溢し、僕從奴婢、稱計すべからず。是の時、目連、往いて弟の家に到り、弟に告げて曰く、『聞く、卿は慳嫉にして惠施を好まずと。佛、常に演說したまふ。夫れ人、惠施すれば、報を獲ること無數なりと。卿、今施さば、福を得ること無量ならん。』と。弟、兄の敎を聞き、藏を開いて惠施し、更に新たに庫藏を立てゝ、其の報を受けんと欲せしが、未だ旬日を經ざるに、財寶、竭盡す。故藏悉く空しけれども、新藏報無し。其の弟、懊惱して兄に向つて說いて曰く、『前に施は大報を獲ると告勅せられたれば、敢て敎に違はず、藏を竭して惠施し、當來、過去の諸の貧窮者に周遍せざる靡からしめたり。然も財寶貨盡き、舊藏空竭なれども、新藏報無し。將に兄の爲めに疑誤せられたること無からんや。』と。目連、告げて曰く、『止みね、止みぬ、族姓子よ、此の語を陳ぶること莫れ。異學邪見の士をして此の麁言を聞かしむること無れ。若し福德をして當に形有らしめば、虛空境界も容受せざる所なり。吾、今、權且に汝の微報を示さん。若し見んと欲せば、我に隨從し來れ。』と。爾の時、目連、神足力を以て、手に其の弟を接り、六天に至る。彼に宮殿有り。七寶もて合成す。前後の浴池、香風遠く布く。庫藏、盈溢し、稱計すべからず。玉女、營從するもの數千萬衆、純女のみにして男無く、亦夫主無し。弟、目連に白さく、『是は何の宮殿なれば、巍巍として乃ち爾るか。男有るを見ず、純是れ女人のみ。』と。目連、弟に告ぐらく、『汝、今往いて問ひ、自ら當に之を知るべし。』と。卽ち往いて之を問ふらく、『天女、當に知るべし。我に所問有り。願はくは[八]發遣せられよ。』と。天女、問うて曰く、『何の狐疑有つて、問はれんと欲するか。』と。其の人、報へて曰く、『是は何の宮殿なれば、七寶の合成にして巍巍堂堂として虛空に懸處せる。誰か斯かる德有つて中に於て福を受くる。願はくは我が疑を解き、永く猶豫無からしめよ。』と。天女、報へて曰く、『汝、知らずや。我等、此に在つて積むに年歲有り。福を食すること自然にして復是に過ぐる無

【五】道根。佛道の根本。
【六】優曇鉢華。前卷七七頁見よ。
【七】佛王三千。三世三千佛。過去世莊嚴劫の一千佛、現在世賢劫の一千佛、未來世星宿劫の一千佛。合せて三千佛なり。王とは尊稱の意。
【八】發遣。疑問をやり解決す。

卷の第二十五

惡行品第二十九

(一)*諸の惡は作すこと莫れ。　諸々の善は奉行せよ。　自ら其の意を淨うする、　是れ[一]諸佛の教なり。

『諸々の惡は作すこと莫れ。』とは諸佛世尊、後人の[二]三乘道の者を教誡して、以て惡を修せずんば、道は至るを得、皆善に習はゞ、自ら道跡を致さんと。是の故に說いて曰く『諸の惡は作すこと莫れ。』と。『諸々の善は奉行せよ。』とは彼の修行人は普く衆善を修し、唯自ら瓔珞して衆德を具足せよ。惡を見れば、避け、恒に其の善を修せよ。所謂善とは[三]止觀の妙藥にて亂想を燒滅するなり。是の故に說いて曰く、『諸の善は奉行せよ。』と。『自ら其の意を淨うする。』とは心を行の本と爲し、罪根を招致す。[四]百八重の根は解き難きの結にして其の心を纏裹す。欲・恚・癡盛んなれば、憍・慢・慳・嫉、諸の塵垢を種ゆ。此の病有る者は則ち心淨からず。行人、志を執つて自ら心意を練つて想を亂れざらしめよ。是の如くして息まざれば、便ち[五]道根を成ぜん。是の故に說いて曰く、『自ら其の意を淨うする。』と。『是れ諸佛の教なり。』とは如來、教を演べ、禁戒すること同じからず。戒むるに檢形を以てし、義すに攝心を以てす。佛の世間に出づること甚だ遇ふべからず。猶[六]優曇鉢華の億千萬劫にして時時に乃ち有るが如し。是の故に、如來の遺戒敎化を賢聖、相承して以て今日に至る。禁戒、修せずんばあるべからず。惠施、行ぜずんばあるべからず。吾が成ぜんとする所の[七]佛王三千は皆禁戒、惠施に由つて致す所なり。是の故に說いて曰く、『是れ諸佛の教なり。』と。

(二)惠施は福報を獲。　藏して恚怒を懷かざれ。　善を以て其の惡を滅すれば、　欲・恚・癡、餘り無し。

---

* 法句經述佛品。巴利法句經十二の一八三。之を七佛通誡の偈と稱し、佛教の基本的禁ゝ、又代表的標語なり。此の偈は經律に散見す(增壹阿含一、四分律、五分律等)。

【一】 諸佛。三世十方の諸佛ともいふ。こゝにては釋迦佛以前の過去七佛を指す。佛は超越的存在ならざれば、多佛は多神教ならず。佛は理想の實現者、人格の大完成者なり。

【二】 三乘道の者。乘とは教法は衆生を運載して救濟するのりものにたとへ、又乘り手にもたとふ。三乘とは聲聞乘・緣覺乘・菩薩乘なり。聲聞は法門としては四諦であり、機類としてはそれを耳に聞いて悟るを得る鈍根の分際なり。緣覺は教としては十二因緣でそれを思惟し、又他の動機にて獨り覺るを得るやゝ利根の者なり。されど以上は二乘の自利を出でぬもの。菩薩は六度の教によつて悟り之を自利利他の二行に實行する上根のもの。

【三】 止觀(Śamatha, Vipaśyanā)。寂止正觀。妄念を離れ、心を一境に止め正智を發して諸法の眞相に觀達するをいふ。

【四】 百八重の根。百八の煩惱の根本。前卷一五〇頁見よ。

ず。是の故に說いて曰く、『以て苦の根源を解する、是を明かなる妙觀と謂ふ。』と。

(二一九)誰か凡夫人をして、　衆行の本を覩ざらしむる。　彼に因つて觀察せば、　冥を去り大明を見ん。

『誰か凡夫人をして衆行の本を覩ざらしむる。』とは世間の盲冥は大明の誰の所造なるかを覩ず。衆生は悠悠として正路を識らざるも、現に四大の陰有り、人を持すれば、苦しむなり。愚者は染著して恚たるを信ぜず、諸の邪見を興して、遂に塵勞を增す。彼の行人に因つて自ら觀察して、晝夜に思惟して結を斷ぜんことを業と爲せば冥を去り、大明を見ん。大明の本には冥根無きなり。是く佛を識らず、法を識らず、比丘僧を識らず、亦復眞如四諦の苦集盡道を識らざれば、境界淸淨の行をも修せざるなり。是の故に說いて曰く、『誰か凡夫人をして衆行の本を覩ざらしむる。』と。

(二七)云何か見ると見ざると。　何をか見ると見ざると說く。　何に因つてか見ると見ざると。　出を爲すは何を見るに因るか。

『云何か見ると見ざると。』とは行人、法を修し、有を計す。是れ常に清淨の法なり。所謂見ずとは苦集盡道を見ざるなり。是の故に說いて曰く『云何か見ると見ざると。』と『何をか見ると見ざると說く。』とは行人は唯一緣を見、或は色に緣り、或は色・聲・香・味に緣り、或は思惟し、或は思惟せざる有り。是の故に說いて曰く『何をか見ると見ざると說く。』と『何に因つてか見ると見ざると。』とは猶二人の衆行、以て具すれば、功德備悉して、生死に在りと雖も、怯弱を懷かず、意に結を斷ぜんことを求めて亦疑滯無し。一人意偏れば、究竟に達せず。一には諸の有漏を斷ずることを見ず、一には諸の生死に在るを見ず。是の故に說いて曰く『何に因つてか見ると見ざると。』と『出を爲すは何を見るに因るか。』とは賢聖法に由つて自ら出要の義を見れば、所願必ず剋ち、畏忌する所無し。是の故に說いて曰く『出を爲すは何を見るに由るか。』と。

(二八)猶苦を觀ぜざるが若きは、　常に當に深く自ら觀ずべし。　以て苦の根源を解する、是を明かなる妙觀と謂ふ。

『猶苦を觀ぜざるが若きは、』とは彼の學人の苦・空・非身・無我を見ず、亦諸の行陰を分別せざれば、便ち墮落を爲すが如し。自ら身中の汚穢不淨を觀ずれば、頭より足に至るまで、一も貪るべき無し。我は自我にして、色有るは自我色なりとするは亦色の本末を分別せざるなり。是の故に說いて曰く『猶苦を觀ぜざるが若きは、常に當に深く自ら觀ずべし。』と『以て苦の根源を解する、是を明かなる妙觀と謂ふ。』とは解する所の苦とは空・無常・非身の義なり。身の患たる萬病を流溢せしむ。行人、思惟すれば、意亂錯せずして、深く病の根源を知る。身を世の四大合成に寄すれば、無數劫より以來、大明を視ず。斯は癡惑に由つて纏裹せらるゝが故なり。我今脫るゝを以て彼の緣を造ら

も壞るゝこと久しからじ。

『觀るとも復重ねて觀て、』とは觀に二種有り。一には財觀、二には第一義觀なり。夫れ財觀は結使を增益す。第一義は有漏を滅し、無漏行を成ず。是の故に說いて曰く、『觀るとも復重ねて觀て、』と。『彼の性本を分別せよ。』とは或は人有り、性の行を造ること同じからず。國界も若干にして法敎一に非ず。聖人、中に在つて一一に分別す。或は意開悟する者有り、或は意開悟せざる者有り、或は開悟し、開悟せざる者有り。衆生、性を受けて悟に遲疾有り。是を以て聖人は之を訓ふるに道を以てし、勤めて修行を加へ、晝夜懈らず。是の故に說いて曰く、『彼の性本を分別せよ。』と。『計畫して以て夜にも爲せば、』とは衆生の類、性行、同じからず。或は善本を思ひ、或は善本を思はず。是を『計畫して以て夜にも爲せば、』と謂ふ。『寶身も壞るゝこと久しからじ。』とは世間の財貨は世の常法として終日聚集するも要ず當に消壞すべし。善根の財貨は終に腐敗せず。是の故に律本に說いて曰く、『當に不寶の身を以て寶身に易へ、不寶の財を寶財に易へ、不寶の命を寶命に易へよ。』と。是の故に說いて曰く、『寶身も壞るゝこと久しからじ』と。

(二六)觀れども重ねて觀ずんば、　見ると雖も亦見ず、　見るが如くにして見ざるなり。　觀れども亦見ず。

『觀れども重ねて觀ずんば、』とは彼の修行人、思惟妙觀す。道者は觀察して彼の行人の亦妙觀無くして思惟を得るを知る。定者に二種の人有り。一人は觀るを得、一人は觀るを得ず。復更に導師有り、行人を觀察するに、頗し聖諦に應ずる者有り、遍く之を思觀せずして聖諦に應ぜざるものあり。是の故に說いて曰く、『觀れども重ねて觀ずんば、』と。『觀れども亦見ず。』とは多く思惟して道行を修習する有り。復久遠の過去世の事を觀て、或は達する者有り、或は達せざる者有り。一一に分別して亦錯亂せず。是の故に說いて曰く、『觀れども亦見ず。』と。

望まんやと。

(二三)此は自ら歸するの上に非ず、亦吉利有るに非ず。如く自ら歸する有るも、一切の苦を脫せず。若し自ら佛に歸し、法と比丘僧とに歸する有り、聖なる四諦を修習せば、慧の見る所となる如し。苦の因と苦の緣と生ぜは、當に此の苦の本を越ゆべし。賢聖八品道は、甘露の際を滅盡す。是を自ら歸するの上と爲す、吉利有らざる非し。如く自ら歸する者有らば、一切の苦を得脫せん。

人の道を修するには、唯信と戒と有るのみ。信根以て全ければ、戒も毀れず。諸行衆生能く自ら此の三寶に歸すれば、願として成らざる無く、天人の爲めに供養せられ、自ら得道を致し、亦復永劫の福を受く。人の怙無きは猶樹の根無きがごとし。若し憑む所有らば、何事か果さゞらん。

(二四)觀、已に觀、當に觀るべし。觀ずんば亦當に觀るべし。觀るとも復重ねて觀よ。觀れば復觀ざれ。

所謂觀るとは苦集盡道の眞如の四諦をなり。彼の行を執るの人は已に苦集盡道の眞如の四諦を觀たるなり。觀ること現在に已らば、過去にも觀、當に未來にも觀るべし。塵勞を興すは皆三世に由つて生死に墜墮し、道に至らざるなり。是の故に說いて曰く、『觀、已に觀、當に觀るべし。』と。『觀ずんば亦當に觀るべし。』とは所謂觀ずとは苦集盡道を見ざるなり。是の如くんば、當に觀るに深察し、分明に知ることを爲すべし。苦集盡道の眞如の四諦を見ざる、是の故に說いて曰く、『觀ずんば亦當に觀るべし。』と。『觀るとも復重ねて觀よ。』とは觀れども觀ざる者は、信に能く苦集盡道を分別して一一に思惟して、其の義を究暢せよとなり。『觀れば復觀ざれ。』とは已に觀、已に知れば、復思惟せざれとなり。是の故に說いて曰く、『*「觀ずんば亦當に觀るべし。」觀れば復觀ざれ。』と。

(二五)觀るとも復重ねて觀て、彼の性本を分別せよ。計畫して以て夜にも爲せば、寶身

＊ 諸本凡て此の句あれども、恐くは衍。

す。往いて世尊に趣き、前んで佛に白して言く、『唯然り、天師、三界の大護よ。今、此の變を覩て、倍ゝ恐懼を懷けり。』と。尋で佛前に於て此の偈を說かく、

今天上の位を捨て、、生死の本を造らず、地獄の苦をも離れんことを求む。願はくは泥洹の滅を說きたまへと。

爾の時、世尊、漸やく難陀の與に微妙の法を說きたまひ、無爲に安處し、道場に至らしめんとして、

青衣をき、白き蓋覆せる、御者、一輪を御するも、彼の末塵の垢を觀ては、便ち縛著を斷ぜんことを求めよと。

(一二)人は多く自ら歸せんことを求めよ。山川・樹木の神、園觀及び神祠に、苦患の難を免れんことを望まんや。

人、恐懼を懷き、意迷つて寤らずんば、[41]禱祀に値前するも、眞僞を別たず。昔、[42]月支國に王有り。惡少と名く。王、此の天下を靡伏せざる莫し。母、王に敎勅すらく、『設し卿、死に臨むの難有るも、愼んで佛寺を左旋すること莫く、當に右旋せんことを念ずべし。愼んで吾が此の敎に違ふこと莫れ。』と。是の時、惡少王、大いに兵衆を出し、純西城を攻め、手自ら劍を執り、三億人を殺し、四億に滿たず。五億に滿たんことを規りしが、後戰如かず。象に乘つて奔走す。[43]佛圖を顧見するや、母の敎誡を憶ひ、便ち象を迴して右旋す。敵國、之を見、皆伏して國に還る。王、賊の退けるを見、尋で後追し、搶へて卽ち還り、賊を壞つて擒獲す。王、身に便ち佛語の『自ら佛に歸する者を尊と爲し、上と爲し、及ぶ者有ること無しと爲す。』といふを憶ひ、『設し我右旋せずんば、豈能く此の賊を壞らんや。』と。是の故に說いて曰く、

人多く自ら歸せんことを求めよ。山川・樹木の神、園觀及び神祠に苦患の難を免れんことを

【四一】禱祀。いのるほこら。みや。

【四二】月支國。印度の西にある國。支那の西北敦煌の地より起り、希臘人の植民地大夏(Bactria)をも服せり。

【四三】佛圖。塔。(前出)

後、當に來生して此の天宮に處在すべし。彼の人は卽ち我等の夫主なり。』と。難陀、之を聞いて、竊かに自ら歡喜すらく、『今論ずる所の者は正しく是れ我なり。』と。卽ち佛の所に還り、具さに此の情を以て世尊に白して言く、『此の諸の宮殿の玉女の營從するは盡く是れ我が許なり。』と。佛、難陀に告げたまはく、『梵行を快修せよ。是の如くなれば、久しからずして當に此に來至して、福を受くること自然ならん。』と。是の時、世尊、神足力を以て手に難陀を接り、將ゐて地獄に至る。路、鐵圍山の表を經るに、一獼猴の瞎にして一目も無きを見る。佛、難陀に語げたまはく、『汝の孫陀利婦と是の瞎の獼猴と何如にや。』と。難陀、佛に白すらく、『止みね、止みね、世尊よ。復此を說くこと勿れ。豈當に此を以て彼の人に方べんや。孫陀利は女の中の英妙なるもの、六十四術、事として閑はざる無し。』と。爾の時、世尊、難陀に告げて曰く、『瞎の獼猴を孫陀利に比するは復孫陀利を以て諸の天女に比するがごとし。億千萬倍するも、譬喩を以て比と爲すべからず。』と。是の時、世尊、卽ち難陀を接つて將ゐて地獄に至り、彼の苦痛なる考・掠・搒・笞の酸毒計り難きを示す。[三七] 八大地獄は罪人を湯煮し、一大地獄に[三八]十六隔子あつて其の獄を圍遶す。刀山・劍樹・火車・爐炭・燒炙焦煮して苦痛陳べ難し。一大鑊有り。獄卒、圍遶す。湯沸き、火熾んなれども、罪人を見ず。難陀、佛に白すらく、『不審、世尊よ、斯の諸の地獄は皆罪囚有り。斯は是れ、何の鑊なれば、罪人を見ざる。』と。佛、難陀に告げたまはく、『汝、躬自ら往いて彼の獄卒に問へ。自ら當に汝の爲めに其の本末を說かん。』と。是の時、難陀、佛の敎誡を受け、往いて獄卒に問ふ。『斯は是れ何の鑊なれば、罪人、空無なる。』と。獄卒、報へて曰く、『閻浮利地の[三九]眞淨王の家兒は成道を得たるが、父を並にせる弟、[四〇]甘露王兒、名けて難陀と曰へるは、人と爲り放逸にして婬欲の情多し。自ら豪族を恃み、萬民を輕忽す。彼、命終の後は當に來つて此の鑊中に入るべし。劫數を經歷して乃ち免脫することを得ん。卿の知らんと欲するは其の事是の如し。』と。難陀、聞き已つて、衣毛皆豎ち、形體戰慄し、顏色變異

【三七】八大地獄。一、等活地獄、有情斫刺せらるゝ前に等し活きかへる地獄。二、黑繩地獄、先づ黑繩にて肢體を縛られて後斬鋸せらる。三、衆合地獄、衆多の苦具合して身を逼むるもの。四、號叫地獄、衆苦に逼られ悲號叫喚するもの。五、大叫地獄、劇苦に逼られ更に大叫するもの。六、炎熱地獄、火炎熾熱のもの。七、大熱地獄、其の更に烈しきもの。八、無間地獄、苦を受くること間斷なきもの。

【三八】十六隔子。十六の別處に隔たれる小地獄。

【三九】眞淨王の家兒。眞淨王(Suddhodana)は淨飯王、白淨王ともいふ。此の家兒とは悉達多卽ち釋尊なり。

【四〇】甘露王兒。難陀を敬愛讃歎していふ。

こと未だ時を經ざるに、正に如來の彼に從つて進めるに値ふ。難陀、見已つて、大樹に奔趣し、自ら形を隱さんと欲す。如來、神力もて反つて大樹をして難陀の後に在らしむ。難陀、周慞して身を安くに處無し。爾の時、世尊、復神力を以て、彼の大樹を拔き、虛空に縣在せしむ。爾の時、難陀、樹根の處に入り、形を隱して自ら蔽ふ。如來、尋で往いて與共に相見たまひ、『難陀よ、何爲れぞ乃ち來つて此に至るや。』と。難陀、默然として慚愧して對へず。如來、再三、難陀に告げて曰く、『汝、何くに趣かんと欲してか、默然として對へざる。』と。難陀、言く、『家に還り、婦と相見ん。』と。佛、難陀に告げたまはく、『夫れ人、道を學んで、心自ら專らならず、欲心に貪著して、後世の燒身の禍を顧みざるあり。』と。爾の時、世尊、便ち偈を說いて言く、

園を非として園を脫し、　園を脫して復園に就く。　當に復此の人を觀るべし。　縛を脫して
復縛に就くなりと。

『我、今汝を將ゐて天上に遊觀すべし。宜しく當に自ら專らにして恐怖を懷くこと勿るべし。』と。是の時、世尊、神足力を以て、手に難陀を接つて將ゐて天上に至る。一宮殿を見る。七寶もて作られ、金銀、刻鏤し、玉女、營從するもの稱計すべからず。純、女のみにして男無く、亦夫主無し。是の時、難陀、前んで佛に白して言く、『是れ何の天の宮殿なれば、快樂無比なる。七寶の殿堂にて琴を彈じ、瑟を鼓し、倡伎樂を作し、共に相娛樂せるは昔より未だ聞かざる所なり。然も此の天女、夫主、有ること無し。唯願はくは、世尊よ、我が狐疑を解きたまへ。』と。爾の時、世尊、難陀に告げて曰く、『汝、自ら彼に往いて、其の情實を問へ。天女、自ら當に汝の與に之を說かん。』と。難陀、教を受けて、彼の天宮に至り、其の情實を以て天女に問うて曰く、『汝等天女、自然に福を受け、七寶の殿堂にて五樂自ら樂しむ。汝等の夫主、竟に所在すと爲すや。』と。天女、報へて曰く、『汝、知らずや。閻浮利地迦維羅衞國の釋迦文佛の父を並にせる弟、名けて難陀と曰へるが、命終の

昔、佛、釋翅搜迦維羅竭國尼拘類園中に在せり。爾の時、世尊、時到つて衣を著け、鉢を持し、侍者阿難を將ゐて迦維羅竭城に入りて乞食す。爾の時、童子[三五]難陀、高樓上に在つて遙かに世尊の城に入り、乞食せるを見、速かに高樓を下り、世尊の所に至り、頭面もて禮足し、世尊に啓して言く、『如來の姓は國中の豪族、轉輪聖王にも所至するの處なり。何爲れぞ自ら辱め、鉢を持して乞食するや。』と。爾の時、難陀、如來の鉢を取つて、内に入り、甘饌の飲食を盛らんとす。佛、難陀の舍に入れるを見し後、阿難に告げて曰く、『我、今、尼拘類園に向はん。難陀、出づるも、復鉢を取ること勿れ。汝難陀に語げよ。躬自ら鉢を送つて如來に還せ。』と。難陀、教を受けて、後より鉢を送る。[三六]婦、復後に隨ひ、難陀に語げて曰く、『速かに還り、久しかる勿れ、來るを須つて乃ち食せん。』と。前進すること未だ久しからざるに、婦、重ねて信を遣はし、「時に還つて停まること勿れ。鄭重にする所以は捨家學道を恐るればなり。」と。難陀、持して世尊の所に至り、手自ら鉢を擎げ、如來に授與し、『唯願はくは時に受けよ。今家に還らんと欲す。』と。佛、難陀に告げたまはく、『卿、以て此に至る。今宜しく家に遠ざかり、鬚髮を剃除し、三法衣を著けよ。何爲れぞ復辭して家に還到せんと欲するか。』と。是の時、如來、威神力を以て難陀に逼迫し、出家して家を爲め、靜室に閉在し、家に還さしめず。是の如くして日月の數を經歷し、次第に當直して遂に難陀に至る。難陀、之を聞き、内に自ら歡喜すらく、「我、今事に當直し從容たることを得ん。此の閑暇に因つて逃走して家に還らん。」と。是の時、難陀、直使を受け、辦水掃地、事事に闕かず。是の時、天神、難陀を侍衞す。水を汲んで滿に至れば、自然に淨地の中に飜棄し、草土更に滋く、門戶を關閉すれば、戶自然に開く。難陀、思惟すらく、「我が家は王者の種にして饒財多寶、乏短する所無し。我、今逃走して家に向はん。設ひ漏失有るも、物を以て之を償はん。今當に竊かに細徑を逐ふべし。大塗を按ぜば、備く如來に値はん。」と。爾の時、難陀、三法衣を脫し、白服を更被して摩何して去る。行く

【三五】難陀(Nanda)。佛陀の異母弟、母は佛母摩耶夫人の妹憍曇彌なり。

【三六】婦。難陀の新婦孫陀利(Sundari)なり。

財を積むこと億萬にして肯て惠施せざるも、其の壽終に至れば、一錢を持して自ら隨ふ能はず。其れ衆生有り、貪嫉を修行する者は身に威神無く、遂に貧窮を致さん。宗親和せずんば、人の爲めに輕んぜらる。是の故に說いて曰く、『結使の緣を究めず。』と。『以て結使を生ぜざらんには、當に欲有の流を度るべし。』とは流に四品有りて其の事同じからず。云何か四と爲す[三〇]。一には欲流、二には有流、三には無明流、四には見流なり。衆生の類、生死に沈溺するは皆此の四流の浪に由る[三一]。四使を自ら免るゝ能はずんば方當に[三二]五道に涉歷流轉すべし。是の故に說いて曰く、『以て結使を生ぜざらんには、當に欲有の流を度るべし。』と。

（二〇）上には一切欲無し。當に此を察して大觀すべし。是の如くすれば、本より未だ度らざる所の者も解脫すること有り。

『上には一切欲無し。』とは上とは色界・無色界なり。欲とは欲界なり。此の三界に於て復三毒無く、中に於て永く解脫を得。是の故に說いて曰く、『上には一切欲無し。』と。『當に此を察して大觀すべし。』とは無欲の人は是れ佛の第一の弟子なり。佛に四弟子有り。羅漢を勝と爲し、尊と爲し、貴と爲し、上有ること無しと爲す。是の故に說いて曰く、『當に此を察して大觀すべし。』と。『是の如くすれば——解脫すること有り。』とは聖人の行を執るや、自ら己が爲にせず、諸の[三三]四駛に於て永く自在を得、更に有に著して、身口の行に在らず。是の故に說いて曰く、『是の如くすれば——解脫すること有り。』と。『本より未だ度らざる所の者も、』とは昔、經歷せし所の生死の難、未だ曾て度ることを爲さゞるも、當に方便を求めて此の三有を度れば、更に有を受け、四大の身を造らず。是の故に說いて曰く、『本より未だ度らざる所の者も、』と。

（二一）[※三四]園を非として園を脫し、園を脫して復園に就く。當に復此の人を觀るべし。縛を脫して復縛に就くなり。

【三〇】一、欲流。欲界の一切諸惑なり。流とは之によつて三界に流轉漂泊すればなり。二、有流。色界無色界の一切諸惑なり。三、無明流。三界の無明なり。四、見流。三界の見惑卽ち道理に迷ふ煩惱なり。以上を四流といふ。
【三一】四使。四流をいふ。
【三二】五道。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間道をいふ。
【三三】四駛。四流のこと。
※　巴利法句經、二四の三四四。
【三四】園。佛の教團を意味す。

未だ斷ぜず。我、今宜しく請うて家に在らしめ、諸の婦女をして食を擎げて供養せしめん。設し欲情有る者は我、當に之を知るべし。」と。即ち往いて寺に在り、諸の年少の道人を請うて長者の家に詣る。婦女を莊嚴し、新衣を更著して盡く出して禮拜し、恭敬の意を興さしむ。時に[26]六通羅漢有り、尋で覺知し、即ち死人の骸骨に化す。血肉消盡し、髑髏手脚、各自一處なり。爾の時、羅漢、諸比丘に告ぐらく『當に自ら意を專らにして以て度世を求むべし。女色を視て穢汚心を興すこと莫れ。』と。時に彼の長者、彼の瑞應を覩、歎ずること未曾有なり。內に自ら剋責して不是を爲せることを知り、五體を地に投げ、自ら悔過を求むらく「我、今乃ち法の微妙たるを知れり。」と。諸の婦女、各各慚愧して即ち還つて舍に入る。是の時、羅漢、長者に告げて曰く『佛法は寬博にして[27]汪洋無崖なり。卿、今凡夫の智を以て聖人を量度す。斯れ正理に非ず。猶拳許りの土塊もて仰いで[28]須彌升合の器に比し、海水を量らんと欲するが若し。』と。爾の時、比丘、便ち此の偈を說かく、

強く彩畫を以て形り、醜穢なる身を莊嚴すれば、愚者は以て緣と爲し、亦自ら度を求めず。髮を分つて八分と爲し、雙部に[29]耳璫を眼すれば、愚者は染著せられ、亦自ら度を求めず。と。

爾の時、比丘、此の二偈を說き已り、便ち座より起つて去る。時に彼の長者及び諸の婦女、善心、自ら生じ、三寶を恭敬し、後日、各各其の道跡を成ぜり。

(一九)欲に著し欲に染んで、結使の緣を究めず。以て結使を生ぜざらんには、當に欲有の流を度るべし。

『欲に著し欲に染んで、』とは群徒、世に在るや志趣同じからず。或は少欲なる有り、或は欲意偏多なるあり。欲偏多なれば、聖賢の法に違せず。是の故に說いて曰く『欲に著し欲に染んで、』と。『結使の緣を究めず。』とは貪・嫉・慳は結病中の重なる者、骨に入り髓に徹すれば、醫を療せざる所なり。

【二六】六通羅漢。六神通を得たる羅漢。

【二七】汪洋無崖。ひろびろとしてはてしなき貌。

【二八】須彌升合の器。須彌山ほどある大なる量器。

【二九】耳璫を眼す。耳にかざり玉を穿ちつく。

如し。是の故に說いて曰く、『智者は之を遠離す。』と。

(一五)是の如く當に身を觀ずべし。　衆病の所因は病と愚との合會なり。　焉んぞ能く恃怙すべけんや。

人の胞胎より出づるや、前世の因緣に由つて、多病・少病・形貌の好醜あり。是の故に說いて曰く、是の如く當に身を觀ずべし。　衆病の所因は、　病と愚・の合會なり。　焉んぞ能く恃怙すべけんやと。

(一六)當に畫ける形像の　[二五]摩尼紺靑の髮を觀るべし。　愚者は以て緣と爲し、　彼岸に越ゆることを求めず。

『當に畫ける形像の摩尼紺靑の髮を觀るべし。』とは衆香もて其の髮を芬熏沐浴し、衆香もて沐浴せる香氣、遠く布くなり。是の故に說いて曰く、『當に畫ける形像の摩尼紺靑の髮を觀るべし。』と。『愚者は以て緣と爲し、彼岸に越ゆることを求めず。』とは愚者は纏裹せられ、遠離を得ること能はず。巧便もて彼岸に至るを得ること有ること無し。所謂彼岸とは滅盡泥洹なり。是の故に說いて曰く、『愚者は以て緣と爲し、彼岸に越ゆることを求めず。』と。

(一七)當に畫ける形像の、　摩尼紺靑の髮を觀るべし。　愚者は以て緣と爲せども、　智者の厭患する所なり。

智慧の人は分別妙觀、思惟校計して想著を興さず。是の故に說いて曰く、『智者の厭患する所なり。』と。

(一八)强く彩畫を以て形り、　醜穢なる身を莊嚴すれば、　愚者は以て緣と爲し、　亦自ら度を求めず。

昔、豪族の家有り。饒財多寶にして七珍具足す。長者、自ら念へらく、『今時の年少の道人は情欲

【二五】摩尼紺靑。摩尼(Maṇi)は珠、寶、離垢の意。垢なく光澤美しき紺靑。

王、我が與に紫金の鬘を作られんことを。終日竟夜、枯萎すること有ること無けん。』と。水上の泡は人目を誑惑し、形質有りと雖も、生生して便ち滅す。盛熖、野馬も亦復是の如し。渇愛、疲勞して其の命を喪ふ。人身、虚僞にして樂少く苦多し。磨滅の法と爲す。久しく停まるを得ず。遷轉變易す。世に在つて死王の爲めに見られざるは幾くも無し。是の故に說いて曰く、

當に水上の泡を觀ずべし。　亦幻の野馬を觀よ。　是の如く身を觀ぜずんば、　亦死王を見ざらんやと。

（一二）當に水上の泡を觀ずべし。亦幻の野馬を觀よ。是の如く世を觀ぜずんば、亦死王を見ざらんや。

『世を觀ぜずんば、』とは[二三]五盛陰身は是の如くなるも、久しからずして當に復消滅すべし。設し能く此の五陰身を滅する者は死王と相見せず。

（一三）是の如く當に身を觀ずべし。王の[二四]雜色車の如しと。愚者には染著せらるれども、善く彼を遠離せんことを求めよ。

『是の如く當に身を觀ずべし。王の雜色車の如しと。』とは國王の車の雜色もて莊嚴せるは、形色有りと雖も、亦牢固ならず、重載に任へざるが如し。是の故に說いて曰く、『是の如く當に身を觀ずべし。王の雜色車の如しと。』と。『愚者には染著せらるれども、善く彼を遠離せんことを求めよ。』とは愚人は所貪を翫んで之を習へども、智者の棄つる所なるは糞除を捐つるが若し。是の故に說いて曰く、『愚者には染著せらるれども、善く彼を遠離せんことを求めよ。』と。

（一四）是の如く當に身を觀ずべし。　王の雜色車の如しと。　愚者には染著せらるれども、

智者は之を遠離す。

智人は心を動搖せしむるを知つて樂を願はず。常に意、遠離せんことを欲するは火災を避くるが

【二三】五盛陰身。前巻一九、二〇頁註見よ。

【二四】雜色車、諸種の美しき色彩を施せる車。

淨を翫んで之を習ひ、犯欲無際なる、是を第二の邊際と謂ふ。是を諸賢、諸著を增益すと謂ふ。能く此を知るを得る者は亦隨つて流轉せず。「有目者は觀る。」とは所謂有目者は諸佛世尊是なり。信じ能く觀察すれば、流轉は停息す。是の故に說いて曰く、「*有目者は觀る。」と。此の二邊を解する者は染著せらるゝこと無く、塵勞を興さず。此を苦際と名く。

（一一*）當に水上の泡を觀じ　亦幻の野馬を觀ずべし。　是の如く身を觀ぜずんば、　亦死王を見ざらんや。

『當に水上の泡を觀ずべし。亦幻の野馬を觀よ。』とは彼の水泡の久しく停まるを得ざるが如し。昔、國王の女有り。王の爲めに愛せらる。未だ曾て目を離れず。時に天、雨を降らし、水上に泡有り。女、水泡を見て、意に甚だ愛敬す。女、王に白して言く、『我、水上の泡を得て、以て〔二〕頭花鬘と爲さんと欲す。』と。王、女に告げて曰く、『今、水上の泡、捜持すべからず。云何か得取し以て華鬘と爲さん。』と。女、王に白して言く、『設し得ずんば、我當に自殺すべし。』と。王、女の語を聞き、尋で〔三〕巧師を召し、而して之に告げて曰く、『汝等、奇巧、事として通ぜざる靡し。速かに水泡を取つて我が女の與に鬘を作れ。若し爾らずんば、當に汝等を斬るべし。』と。巧師、王に白すらく、『我等、泡を取つて鬘を作るに堪へず。』と。其の中に一老匠有り。自ら泡を取るに堪能なりと占ひ、即ち前んで王に白すらく、『我、能く泡を取つて、王の與に鬘を作らん。』と。王、甚だ歡喜し、即ち女に告げて曰く、『今、一人有り、鬘を作るに堪任す。汝、自ら往いて躬自ら臨視すべし。』と。女、王の語に隨つて、外に在つて瞻視す。時に彼の老匠、王女に白して言く、『我、素より水泡の好醜を別たず。伏して願はくは王女躬自ら泡を取れ。我、當に鬘を作るべし。』と。女、尋で泡を取るに、手に隨つて破壞し、之を得ること能はず。是の如くすること終日なるも、竟に泡を得ず。女、自ら疲厭して之を捨てゝ去る。女、王に白して言く、『水泡は虛僞にして久しく停まるべからず。願はくは

＊ 原本は有目者所見とあり。前に準ず。

＊ 巴利法句經、一三の一七〇、倘原漢文は如是不觀世、亦不見死王。とあれど不觀世は觀世とせざれば意通せず。然かすれば次の句は反語とする要なし。今は不を生かさんがため、强て反語に譯す。諒せよ。

〔二〕 頭花鬘、花を多く貫き結んで頭の飾りとするもの、

〔三〕 巧師。かざりや。

今衆に在つて最尊最上なり。宗族・姓望・屋宅・田業・僕從・家產我に及ぶ者無し。」と。心意堅固にして捨離する能はず。是の故に說いて曰く、『衆生は慢の爲めに纏はれ、憍慢に染著せられ。』と。『見の爲めに迷惑せられて、生死の際を免れず。』とは 計常見[17]と 斷滅見[18]と相應せず、斷滅見と計常見と相應せず。(かくては)此の生死を免れ、無爲の岸に至ること能はざるなり。是の故に說いて曰く、『見の爲めに迷惑せられて、生死の際を免れず。』と。

(一〇)已逮及び當逮は、　二俱に塵垢を受く。　病の根本を習ひ、　及び諸の所學を學べ。
諸の持戒者と、　梵行の清淨人とを觀じ、　病瘦者を瞻視せよ。　是を邊際に至ると謂ふ。

世に衆生有り、邪見心盛にして愛欲に貪著して捨離する能はず。欲を潔くし、清淨なるを翫んで之を習へども、中に於いて憍慢を興起して自ら改更せず。是を第二の邊際と謂ふ。是を諸賢・諸著を增益すと謂ふ。『已逮及び當逮は、』とは 陰[19]を得、入[20]を持すると、或は陰を得、入を持するを得ざる者と有り。『二俱に塵垢を受く。』とは一には邪見塵、二には愛欲塵なり。結の爲めに使はれて捨離する能はず。是の故に說いて曰く、『二俱に塵垢を受く。』と。『病の根本を習ひ、』とは外道異學是なり。彼の技術を習つて自ら已を榮えしむ。『及び諸の所學を學べ。』とは諸有衆生、其の技術を學び、乘馬・御車・造作無端にして皆能く備悉せよ。此の行を具する者は乃ち解脫を得。是の故に說いて曰く、『及び諸の所學を學べ。』と。『諸の持戒者と』とは或は梵志の禁戒を奉持せるが或は烏戒を持して聲を擧げて烏に似せ、或は禿梟戒を持して隨時に跪拜して禿梟の鳴を効ひ、或は鹿戒を持して聲響を鹿に似す。是の故に說いて曰く、『諸の持戒者と、』と。『梵行の清淨人とを觀じ、』とは彼の外道異學自ら相謂つて言く、「其れ滿滿を有し、淨行を行ずる者は便ち解脫を得て清淨處に至る。若しは復火・日・月・神珠・藥草・衣服・宮殿・屋舍に事へ、然る後乃ち無爲の處に至る。」と。是を謂つて名けて一邊際と曰ふ。世に衆生有り、邪見心盛にして愛欲に貪著し、捨離する能はず。欲を計して清

【一七】計常見。人の心身は過現未に常住すると計度する邊見。
【一八】斷滅見。前と反對に斷滅すると考へる邊見。
【一九】陰。五陰のこと。
【二〇】入。六入のこと。

の故に說いて曰く、『亦行に見ず、觀れども有る所無し。』と。

(七)衆生は皆[一五]我有り。　彼の爲めに患を生ず。　一一相見ず、　邪見の刺を覩ざれ。

『衆生は皆我有り。彼の爲めに患を生ず。』とは世に多く人有り。性、顚倒を懷き、衆生の類は我の所造にして我より生ずと爲す。復說者有り。他從り生じ、他に從つて有りと。是の故に說いて曰く、『衆生は皆我有り。彼の爲めには患を生ず。』と。『一一相見ず、邪見の刺を覩ざれ。』とは一一とは所謂外道梵志是なり。正見を思惟せず、邪なる顚倒を信ずるものなり。是の故に說いて曰く、『一一、相見ず、邪見の刺を覩ざれ。』と。

(八)此の刺の因緣を觀ずるに、　衆生は染著せらる。　我の造にして彼の有に非ずとか、　彼の造にして我の有に非ずとかと。

『此の刺の因緣を觀ずるに、』とは所謂刺とは邪見の刺なり。因緣とは地獄・餓鬼・畜生・人・道なり。人天各各別異にして種とする所同じからず。是の故に說いて曰く、『此の因緣を觀ずるに、』と。『衆生に染著せらる。』とは外道異學、晝夜に孜孜汲汲として各自に眞と謂ひ、邪なる倒見を信じ、捨離して正路に就くこと能はず。是の故に說いて曰く、『衆生は染著せらる。』と。『我の造にして彼の有に非ずとか、彼の造にして我の有に非ずとかと。』とは各自に正と謂ひ、共に相[一六]干錯すらく、「衆生の類は我の作、我の造にして彼の所有に非ず。」と。復自ら思惟すらく、「彼の造、彼の作にして我の所有に非ず。」と。是の故に說いて曰く、『我の造にして彼の有に非ずとか、彼の造にして我の有に非ずとかと。』と。

(九)衆生は慢の爲めに纏はれ、　憍慢に染著せられ、　見の爲めに迷惑せられて、　生死の際を免れず。

『衆生は慢の爲めに纏はれ、憍慢に染著せられ、』とは彼の人、自ら念ふに、意性憍豪なれば、「我、

【一五】我(Âtman)。個人的にも宇宙的にも認めらるゝ本體、中心。

【一六】干錯。おかしそむく。あらそふ。

めに纏裹せらる。

『世の衰耗の法を觀ずるに、但衆色の變ずるを見るのみ。』とは夫れ人、世に處するや、千轉萬端、所行不同なり。世に三事有り。一には器世、二には陰世、三には衆生世なり。所謂器世とは三千大千刹是なり。衆生世とは三界の衆生・四生・五趣、是なり。陰世とは色陰、　色陰是なり。三世中に於て、衆生界を取り、何を以ての故に衰耗の法と說くや。所謂衰耗の法とは婬・怒・癡の爲めに衰耗せらるゝなり。猶商賈の遠く塗路を涉り、賊に遇ひ、獲し所の財寶を亡失し、賊の爲めに劫かさるるが如し。此の衆生の類も亦復是の如し。婬・怒・癡の爲めに劫かされ、善根の財貨を斷ず。衆人皆其の衰耗せるを見知す。億千萬衆のうち、時に脫する者有り。是の故に說いて曰く『世の衰耗の法を觀ずるに、但衆色の變ずるを見るのみ。』と。『愚者は自ら繫縛し、闇の爲めに纏裹せらる。』とは世に多く人有れども、行跡は同じからず。恒に二縛の爲めに繫がる。一には結使、二には陰縛なり。此の二事の爲めに縛られ、無明に陰はる。蓋し亦【四】堪任せず、次を越えて證を取れば、有漏を盡し、無漏を成ぜん。猶有罪の人の牢獄に閉在せられ、日月の光明を覩ざるが若し。此の衆生の類も亦復是の如し。無明の闇室に纏裹せらるゝを以て、夫の欲・怒・癡の爲めに繫縛せられ、解脫を欲求するも、得べきこと難し。是の故に說いて曰く『愚者は自ら繫縛し、闇の爲めに纏裹せらる。』と。

*『亦行に見ず、觀れども有る所無し。』とは性を以て觀察するに、功德の本を見ず。復他人の心を知るの智を以て此の難を免かれしめんと欲すれども、一の善根の濟免すべき無し。猶人有つて深厠に溺沒し、糞除に汚されしを復慈愍の人有つて彼の難を免濟するを得んと欲し、淨處を求覓し、往いて手に捉へんと欲して、遍く悉く之を觀るに一の淨處無くして便ち捨てゝ去るが若し。無漏の人も衆生を觀察し、頗し毫氂の善本の療治すべき有らんかと遍く之を觀察するに善本の療治すべき者有ること無し。聖人、自ら念へらく「咄、嗟衰耗せる群徒、罪重くして乃ち斯に至れるか。」と。是

【四】堪任。もちこたへしのぶ。

* 此の二句前に出でず。

收攝して流逸せしめざるなり。是の故に說いて曰く、『威儀缺漏せざらんには、』と。『當に眞淨の壽を觀ずべし。』とは進止行來も、口に言語を出すも、飲食するも取つて以て其の壽を養へとなり。是の故に說いて曰く、『當に眞淨の壽を觀ずべし。』と。

(五)世間には〔一〇〕盲冥　普く、〔一一〕有目は〔一二〕尠尠のみ。群鳥の羅網に墮するがごとく、天に生ずるは言ふに足らず。

『世間には盲冥普く、』とは猶盲人の善色・惡色・平地・高岸を見ざるが如く、此の衆生の類も亦復是の如し。婬・怒・癡の爲めに覆はれ、善惡の行を見ず、好醜を知らず。亦復白黑の法を知らず、意自ら迷惑し、善處を求めず。是の故に說いて曰く、『世間には盲冥普く、』と。『有目は尠尠のみ。』とは猶長阿含契經の所說の若し。佛、〔一三〕長爪梵志に告げたまはく、「世皆善を修するは甚だ少少なり。要を取つて之を言へば、倒見を懷く衆生は大地の土よりも多し。佛を識らず、法を識らず、比丘僧を識らず、父母を識らず、亦復尊卑高下を別たず。正見を懷く衆生は爪上の土の如し。見は錯らずと雖も、願求することは同じからず。猶外道梵志、尼揵子等の出家學道して各ゝ自ら尊と謂ひ、書籍を別異して解脫を求め、愚に執して意迷ひ、大道に達せざるが如し。正見の人は蓋し言ふに足らず。是の故に說いて曰く、『有目は尠尠のみ。』と。『群鳥の羅網に墮するがごとく、』とは猶獵者の羅網を施張し、彌を懸け、鳥を捕ふるに、無數の鳥獸の屬を剋獲するが如し。其の得脫する者は若しは一、若しは兩なり。天に生ずるの衆も亦復是の如く、若しは一、若しは兩のみ天福を得受す。雜阿含契經の所說の如し。佛、比丘に告げたまはく、「衆生の地獄に入る者は地の土よりも多し。地獄より終に地獄に還生す。餓鬼・畜生も亦復是の如し。天に生ずる衆生は爪上の土の如し。」と。是の故に說いて曰く、『※群鳥の羅網に墮するが如く、天に生ずるは言ふに足らず。』と。

(六)世の衰耗の法を觀ずるに、但衆色の變ずるを見るのみ。愚者は自ら繫縛し、闇の爲

【一〇】盲冥。くらくおろかなる人。
【一一】有目。あかるくかしこき人。
【一二】尠尠。すくなし。
【一三】長爪梵志（Dirghana-kha brahmacārin）。佛に歸依す。

※諸原漢文は何れも「群鳥在羅網、生天亦復尠。」とあれど初めに從つて改む。

見ず。』と。

(三)慚を知るは壽中の上なり。　烏は貪を以て[四]掣搏し、　力士は畏忌すること無きも、　斯等の命は　[五]促短なり。

『慚を知るは壽中の上なり。』とは人の世に處して慚愧を知らざれば、畏難する所無し。猶暴逸の牛の畏難する所無きが如し。彼の[六]愚騃の人も亦復是の如し。出意造行に畏忌する所無し。是の故に說いて曰く、『慚を知るは壽中の上なり。』と。『烏は貪を以て掣搏し』、とは猶飛烏の[七]貪餮して厭くこと無く、人物を掣搏して忌度有ること無きが如し。衆生の類も亦復是の如し。財色に貪著して厭足有ること無きが如し。是の故に說いて曰く、『烏は貪を以て掣搏し、』と。『力士は畏忌すること無きも、』とは彼の力人は畏難する所無く、大衆中に在つて恣意に所作し、及ぶ者有ること無し。其の呵諫するもの有つて來つて勸喩すれば、尋で瞋恚を懷き、其の命根を斷ず。是の故に說いて曰く、『力士は畏忌すること無きも、』と。『斯等の命は促短なり。』とは夫れ人、世に處しては人を輕んじ、己を貴び、但顚倒迷惑して寤めず、[八]三尊物を侵し、[九]强梁自ら恃む。斯の如きの類も、命久しく停まらず。是の故に說いて曰く、『斯等の命は短促なり。』と。

(四)慚を知れば壽盡きず。　恒に行を清淨にせんことを求めよ。　威儀缺漏せざらんには、　當に眞淨の壽を觀ずべし。

『慚を知れば壽盡きず。』とは彼の慚愧の人は諸の衣食に於いて大いに慇懃ならず。所得の財貨を人に分布し、麤衣惡食し、裝飾を著けず。唯命を世に存ふるのみにて榮冀する所無し。是の故に說いて曰く、『慚を知れば壽盡きず。』と。『恒に行を清淨にせんことを求めよ。』とは所行清淨にして邪部を造らざるなり。身口意淨ければ、無上行に應ふ。亦外淨ければ、言を出し、適前するも傷害せらるゝ無きを知る。是の故に說いて曰く、『恒に淸淨行を求め、』と。『威儀缺漏せざらんには、』とは諸根を

【四】掣搏。自由が利かぬやうに抑へたゝく。
【五】促短。みじかし。
【六】愚騃。おろか。
【七】貪餮。食をむさぼる。
【八】三尊物。佛法僧の三寶の恩惠による物。
【九】强梁。强力、多力。梁は支ふる力あるにたとふ。

卷の第二十四

観品第二十八

（一）*善く己の瑕隙を観じ、　己をして外に露はさゞらしめよ。　彼彼自ら隙有り。　彼の輕塵を飛ばすが如し。

『善く己の瑕隙を観じ、』とは人は但彼の惡を見て己が愆を見ず。互ひに相是非し、共に相誹謗すること由ほ[一]典場の人の穀を抄つて高揚するがごとし。輕き者は遠くに在り、重き者は近くに在り。是の故に説いて曰く、

善く己の瑕隙を観じ、　己をして外に露はさゞらしめよ。　彼彼自ら隙有り。　彼の輕塵を飛ばすが如しと。

（二）*若し己に瑕無しと稱せば、　[二]二事、倶に幷び至る。　但外人の隙のみを見ば、　恒に危害の心を懷かん。

夫れ人の世に在るや、多く自ら矯譽し、自ら功德、世に雙び無しと稱すらく、「我の所行たる戒・聞・施・慧は尊と爲し、特と爲し、匹儔無しと爲す。」と。是の故に説いて曰く、『若し己に瑕無しと稱せば、』と。『二事、倶に幷び至る。』とは此の自ら[三]博掩するの人に逆ふ者は勝を得、順ふ者は恒に負く。行を執るの人の德を修むるも亦爾り。自ら己が愆を知り、彼をも露見せざれ。是の故に説いて曰く、『二事倶に幷び至る。』と。『但外人の隙を見ると、恒に危害心を懷くとなり。』とは人は自ら審かにせず、但外を見て諸の不善法、弊惡の患を事とし、惡趣に墮入して、善處に至らず、地獄・畜生・餓鬼の苦を種ゆ。是の故に説いて曰く、『但外人の隙のみを見ば、恒に危害心を懷かん。』と。虛空と地と各各離別す。眞法を見ず、非眞法を見ず。是の故に説いて曰く、『遠くを觀ても、近くは

---

* 巴利語法句經、一八の二五二。

【一】 典場。質屋。

* 巴利法句經、一八の二五三。此の偈の下に宋・元・明の三本、遠レ觀不レ見レ近の一句あり。

【二】 二事。罪福の二。

【三】 博掩するの人。賭博する人、ばくちうち。

して停まらざらん。興る者は必ず衰へ、合會する者は離るゝこと有り。宜しく服を脱し、形容を更改して乞士の法の如くすべし。[七七]摩何して自ら退いて往いて深山に適き、道德を思惟し、以て自ら娯しむべし。設し此の暴王、我が身を獲て、形體を擒殺せんと欲せば、其の愆をも辭せじ。然る所以は國を亡ぼし、土を失ふことは皆一人に由る。我、今死を受けなば、萬民患無からん。豈我に於て大幸有らざらんや。』と。時に、彼の敵國の王、歎ずること未曾有にして聲を擧げて唱へて曰く『善い哉、善い哉、大王や。古より今にいたる迄、未だ斯の比有らず。我、勝を得ると雖も、未だ王の比には如かず。』と。懷を開き、大いに通じて世榮を顧みず。自今已往、還つて本國を治む。王の治化と共に相接待し、己に異ること無きが如し。是の故に說いて曰く、『衆力のうち忍力最たり。』と。

『愛盡き苦諦かなるは妙なり。』とは愛の本たるや衆結の本なり。學人、道を習はゞ先づ愛結を斷じ、然る後に無漏の道檢に漸進せよ。是の故に說いて曰く、『愛盡き苦諦かなるは妙なり。』と。

【七七】摩何。梵語の音寫か、禮をすることか。又當時の支那の俗語の混入か。

諦かなるは妙なり。

『衆施のうち法施勝れ、』とは衆施の中、何を以ての故に法施を勝るゝと爲すや。所謂法施とは良たり、美たり、衆患無しと爲す。其の中の衆生、聞く所の法に心意開悟し、解脱せざるは靡し。所謂財施とは一人は足充し、二者は嫌恨す。施意、高下あつて、其の事同じからず。猶萍沙王の與に微妙の法を說くに、八萬の諸天、萬二千の摩竭の衆生、復釋提桓因の與に石室の中に在りて微妙の法を說くに、八萬の諸天、皆微妙の法を得、諸情通達して罣礙する所無きが如し。是の故に說かく、『衆施のうち法施勝れ、』と。所謂財施とは今日施を受くれば、明かに當に更めて求むべし。其の中に天上道を求むるに至らん。彼の人、法を聞くも從劫至劫窮盡有ること無し。是の故に說いて曰く、『衆施のうち法施勝れ、』と。『衆樂のうち法樂、上に、』とは俗に在て樂に處るは亂想の本なり。此に至趣すれば、正しく地獄行を造る。夫れ法樂とは演說に暢達して問へば滯らず、觀意に暢達して洋洋として耳に入る。是の故に說いて曰く、『衆樂のうち法樂、上に、』と。『衆力のうち忍力最たり、』とは昔、隣國の王有り。兵を興し、衆を起して往いて敵國を攻む。左右の諸臣、其の王に語げて曰く、『隣國、兵を興し、今來り逼近す。願はくは王、自ら備へ、共に相攻擊せん。』と。王、諸臣に語ぐらく、『此は是、閑事なり。何ぞ必ずしも吾が公を須つて自ら敵に臨まんや。』と。賊、以て逼近し、城門を攻伐す。諸臣、王に啓すらく、『賊、今外に在り。明王、宜しく當に斯の理を深慮したまふべし。』と。王、諸臣に告ぐらく、『賊、外に在りと雖も、遠慮するに足らず。但自ら私を營むのみ。何ぞ公務を慮らんや。』と。時に賊、暴虐にして轉じて城裏に入る。左右、啓して曰く、『賊、今逼近す。不審、明王、竟に何をか〔七六〕備慮する。』と。王、諸臣に告ぐらく、『此の事は微細なり。何ぞ上聞するに足らん。』と。隣國の大王、轉進して殿に至る。諸臣、啓して曰く、『隣國の王、今以て逼るを見る。不審、聖尊、何の思慮か有る。』と。其の王、告げて曰く、『我、今、世に處するも、變易

【七六】備慮。つぶさに考ふ。

（二一五）所謂究竟とは　息跡を第一と爲す。　盡く諸の想著を斷ずるなり。　（この）文句は錯謬せず。

『所謂究竟とは息跡を第一と爲す。』とは所謂究竟とは法中の上にして過越有ること無きなり。病中の重は縛著なり。欲心永く盡くれば、餘無し。是の故に說いて曰く、『所謂究竟とは息跡を第一と爲す。』と。『盡く諸の想著を斷ずるなり。（この）文句は錯謬せず。』とは所謂想とは興欲是れ想、瞋恚是れ想、愚癡是れ想。彼の雜契經の所說の如し。『佛、比丘に告げたまはく、「瞿多よ、當に知るべし。欲・怒・癡の想、此を行の本と爲す。彼の諸の衆想、永く盡きて餘無ければ、亦想念と彼の欲意興らず。」と。』と。所說の言句、終に錯謬せず。然る所以は行に究盡有り、不盡有ればなり。是の故に教を設け、彼の後生に訓ふ。是の故に說いて曰く、『盡く諸の想著を斷ずるなり。（この）文句は錯謬せず。』と。

（二一六）節を知り節を知らず。　最勝は[七三]有行を捨て、　內に自ら行を思惟す。　卵の其の膜を壞るが如し。

『節を知り節を知らず、』とは節とは有爲の行と爲す。節を知らずとは久しく瞋恚を抱へ、道を思惟することを容ひず、六情、閉塞して道義通ぜざるなり。是の故に說いて曰く、『節を知り節を知らず。』と。『最勝は有行を捨て、』とは至眞、等正覺、是を最勝と爲す。其の[七四]三有を捨てゝ其の行を造らざるなり。是の故に說いて曰く、『最勝は有行を捨て、』と。『內に自ら行を思惟す。卵の其の膜を壞るが如し。』とは猶定に入るも定ならず、其の定意を得れば、其の道果を成ずるが若し。猶[七五]孚乳の類の皮を捨てゝ其の形に就くが如し。今亦是の如し。其の本行を捨てゝ無漏の行に就く。是の故に說いて曰く、『卵の其の膜を壞るが如し。』と。

（二一七）衆施のうち法施、勝れ、　衆樂のうち法樂、上に、　衆力のうち忍力最たり。　愛盡き苦

【七三】有行。再び迷へる人生の生存を來す行。

【七四】三有。欲有・色有・無色有。

【七五】孚乳の類。卵から孵化する動物。

『月に非ざれば光有る非く、日に非ざれば明有る非し。』とは猶日月の光の如し。衆塵自ら蔽へば、廣く其の教命を布宣する能はず。猶忉利天上と一究竟天との若し。光光自ら照して日月の光明有ること無し。皆義昔の積行の致す所に由る。是の故に說いて曰く、『月に非ざれば光有る非く、日に非ざれば明有ること非し。』と。『審諦に此を觀ずる者は乃ち梵志行に應ふ。』とは所謂梵志とは三界を越過して行充ち德滿つるなり。故に梵志と曰ふ。是の故に說いて曰く、『審諦に此を觀ずる者は乃ち梵志行に應ふ。』と。

(二三)端正なるかな色、縱容として、一切苦を得脫す。色に非ず、不色に非ず。一切苦を得脫す。

有色無色は苦本より生ず。能く此の苦を脫する者は諸苦中より得脫す。是の故に說いて曰く、『端正なるかな色、縱容として一切苦を得脫す。』と。

(二四)究竟して恐懼せず、縛を越ゆれば狐疑無し。未だ[七三]有欲刺を斷ぜずんば、豈身の患爲るを知らんや。

『究竟して恐懼せず』とは究竟に二事有り。一には意を用ふるの究竟、二には自然の究竟なり。心正しければ、其の曲れるを畏れず。是の故に說いて曰く、『究竟して恐懼せず。』と。『縛を越ゆれば、狐疑無し。』とは諸の縛結を斷じ、永く盡して餘無きなり。生死は久長にして五道に輪轉す。輪轉すること際無ければ、慚愧恥辱の法を知らざらん。是の故に說いて曰く、『縛を越ゆれば狐疑無し。』と。『未だ有欲刺を斷ぜずんば、豈身の患爲るを知らんや。』とは夫れ人、世に處し、法を行ずるに不同なり。未だ有欲を斷ずるを得ざるに其の事三有り。一には欲有、二には色有、三には無色有なり。所謂欲刺とは邪徑の刺なり。打捶して重ねて捶ち、損して重ねて損するものなり。是の故に說いて曰く、『未だ有欲刺を斷ぜずんば、豈身の患爲るを知らんや。』と。

【七三】有欲刺。生存に對する欲望の人を惱ますこと針の刺す如きをいふ。

衆生の類の悠悠として世に在るは皆食に由る。人、食を得ずんば、以て道を行ふ無し。是の故に說いて曰く、『食に非ずんば、命は濟はれず。』と。『孰か能く食を揣らざらん。』とは此の非常を覺つて、食の出づる所を知り、[六八]審諦にして疑ひ無くんば、受者も施行も狐疑有ること無し。是の故に說いて曰く、『孰か能く食を揣らざらん。』と。食の物たる、[六九]生死滓濁の法なり。有形なれば則ち其の食に累はさる。是の故に說いて曰く、『夫れ食を立つるを先と爲す。』と。佛、諸比丘に告げたまはく、「我、諸入の非地・非水・非火・非風なるを知る。所以に識に非ず、空に非ず、不用に非ず、有想無想に非ず、今世後世に非ず、及び日月所照の處に非ず。」と。斯の如きの類は緣の及ぶ所に非ず。其の中の倒見の人、自ら解脫せんことを求む。尼揵子等自ら相敎訓すらく、「解脫を求めんとせば要當に[七〇]六十肘百由延に入るべし。其の此の室に入る者は便ち解脫を得ん。」と。佛、此の義を觀じ已つて生死の狐疑を斷ぜんと欲し、※尼揵子の顚倒の想を遮せんと欲するが故に、此の事を說き、後世の狐疑を斷ぜんと欲するが故に、故らに斯の事を說きたまはく、『日月、倶に明かならず、邪正、競ひ興らず。此の事明かなり。是の故に比丘よ、我も亦周旋往來、生死起滅を說かず。此を苦際の本と謂ふ。』と。

(二一)[七一]地種及び水火には、　是の時風の吹くこと無し。　光焰の照さゞる所、　亦其の實を見ず。

應化の人は或は豪とする所に憑り、或は濟はるゝ有るに因る。豪貴に應じて度せらるゝ者は言聲を加へず、憑度せらるゝ者は豁然として自ら寤り、師匠を須ひず。謙恭卑下する者は自然に得寤す。是の故に說いて曰く、『光焰の照さゞる所、亦其の實を見ず。』と。

(二二)月に非ざれば光有る非く、　日に非ざれば明有る非し、　審諦に此を觀ずる者は、　乃ち梵志行に應ふ。

【六八】審諦。つまびらかにあきらか。
【六九】生死滓濁の法。肉體生存に必要なもの、しかしそれは心の糧に比しては寧ろ第一義的純粹なるものに非ず。
諸入。入とは六根と六境との涉入の意。諸入とは單に六根をも意味す。
【七〇】六十肘百由延。肘とは肘の本端より中指の末に至る長さ、一尺八寸。四肘を一弓とし、五百弓を一拘盧舍とし、八拘盧舍を一由延（Yojana）とす。由延は由旬とも書く。間口、奧行の長さか。
※尼揵子。前卷一八頁を見よ。
【七一】地種云々。地・水・火・風を四大と稱し、萬物の要素と見なす。

の者は皆依と謂ふ。能く此を滅する者、乃ち第一義に應ず。第一義に於ては來往周旋を見ず。以て來往周旋無ければ、則ち生死無し。此を解せざる者は則ち塵勞を興し、生・老・病・死、日日に滋長す。是より憂を生じ、愁惱萬端なり。之を尋ぬれども、其の緒を見ず、展轉相生じて其の五陰の苦形を成ず。能く此を滅する者、唯泥洹の道有るのみ。或は比丘有り。有生・有實・有爲。或は比丘有り。無生・無實・無爲。比丘、無爲と爲らざる者は亦有生ならず。設し、有生ならず、有實ならず、有爲ならざれば、則ち生に因り、實に因り、有爲に因つて而して無爲を說く。設し當に衆生、此の患無ければ、如來、終に滅盡泥洹の樂を說きたまはず。

(一九)生の本末を知れば、有爲も無爲たるを知る。生死に纏裹せらるれば、衰老は甚だ制し難し。

『生の本末を知れば、』とは彼の契經、中阿含の所說、(六七)大愛の本末の所說の如し。『佛、阿難に告げたまはく、「若し生るゝも生有ること無き者は人に告げて生の法を說かず。下、群徒魚水の類に至るまで(說かず。)設へば龍には龍性有り、鬼には鬼性有り、天には天性有り、人には人性有り。是の如くなれば、阿難よ、我は生有るを知るが故に生を說く。」と』と。是の故に說いて曰く、『生の本末を知れば、』と。「有爲も無爲たるを知る。』とは無形無像には變易法を觀察すべからず。是の故に說いて曰く、『有爲も無爲たるを知る。』と。『生死に纏裹せらるれば、』とは人の世に處するや、衰老せば、死を知る。二事に逼らるれば、其の患を免かれず。是の故に說いて曰く、『生死に纏裹せらるれば、』と。『*衰老は甚だ制し難し。』とは斯は衆、婬欲・瞋恚・愚癡・憍慢・嫉妬・恚癡を行ふに由つて、老病の爲めに使はれ、此に由つて趣る。是の故に說いて曰く、『衰老は甚だ制し難し。』と。

(二〇)食に非ずんば、命は濟はれず、孰か能く食を揣らさらん。夫れ食を立つるを先と爲す。然る後に乃ち道に至る。

【六七】大愛の本末。大愛と名づくる經典をいふべけれど、之に西晉白法祖譯大愛道般泥洹經一卷、失譯大愛道比丘尼經二卷等あれど何れにや。

※ 衰老。原本何れも衰者とあれど、前例に依り暫く改む。

一人は解せず。解せざる所の者に復興に[五八]彌梨車語を語きたまふ、「摩屑妒屑　一切毘梨羅」と。時に四天王、皆四諦に達し、尋で座上に於て[五九]柔順法忍を得。

（一八）身を無みし、　其の想を滅すれば、　[六〇]諸痛、清涼を得、　衆行永く休息し、　[六一]識想復興らず。　是を謂つて苦際と名く。

『身を無みし、其の想を滅すれば、』とは是の身は牢きこと無く、磨滅の法と爲す。是の身は堅からず。必ず當に離散すべし。唯[六二]五分法身のみ有りて、乃ち牢固と爲す。意、想より想を生ずれば、萬病興る、能く其の想を滅すれば、乃ち[六三]道眞に應ず。是の故に說いて曰く、『身を無みし、其の想を滅すれば、』と。『諸痛、清涼を得、』とは此の衆生の類、生死の海に流轉するは、[六四]江湖四瀆、之に投じて厭くこと無きがごとし。斯は痛本に由つて以て其の困を受くるなり。衆生、相殘し、共に相殺害するは皆痛に由つて此の患を致すなり。唯智者のみ有つて其の痛を造らず。是の故に說いて曰く、『諸痛、清涼を得、』と。『衆行、永く休息し、』とは人の識を受くるは行に由つて生ず。行にして滋長すれば、以て萬病を成ず。善行は善に趣き、惡行は惡に趣く。智人は行を習うて行本を造らず。是の故に說いて曰く、『衆行、永く休息し、』と。『識想、復興らず、』とは識想流馳せば、病興ること萬端なり。是を以て聖人は識を攝めて散ぜしめず。人の識を興すこと多ければ、癡根を起す。三百藥を以て百識を滅す。晨に百藥を用ひ、中に百藥を用ひ、暮に百藥を用ひ、而して識想を滅す。復無漏の聖行、[六五]頂忍の法を以て識想を滅す。是の故に說いて曰く、『識想、復興らず、』と。依ること有れば、便ち動くこと有り。動くこと有れば、便ち滅すること無し。已に滅すること無ければ、便ち厭くこと無きを知る。以て滅すること無きを知れば、則ち[六六]去・來・今を見ず。以て去・來・今無ければ、則ち生死無し。以て生死の愁憂苦惱も無し。此の苦陰に由つて諸の衆病を生ず。斯は習に由つて衆結を興すなり。纏裏人の修行は必ず所依有り。所謂依とは山河石壁、有形の類にして目に覩る所

【五八】彌梨車（Mleccha）。又蜜利車蔑戾車。佛の教法を見聞し難き北印度邊境の人種。譯、垢濁種。

【五九】柔順法忍。心柔く智順にして實相の理に背かず、其の位に安住して動かざるをいふ。

【六〇】諸痛。諸の病を煩惱にたとふ。

【六一】識想。對境を了別する心のはたらき。之は苦惱を持來すものなり。

【六二】五分法身。前出。

【六三】道眞。宇宙の大道眞理。

【六四】江湖四瀆。湖沼河川の意。四瀆は支那にては江（楊子江）、河（黃河）、淮、濟を意味す。

【六五】頂忍の法。四善根をいふ。前巻五八頁を見よ。

【六六】去・來・今。過去・未來・現今。

ば、枝葉滋からじ。中に於て自ら拔き、永く斷じて餘無からしめば、欲本も自ら滅して更に復生ぜじ。愛に由つて欲流生ず。猶駛河の生類を漂溺するが如し。億千萬衆、其の命根を喪つて、全濟することを得ず。河竭の後は衆生、往來するも、形を傷害すること無し。是の故に說いて曰く、『愛を斷じ、其の欲を除け。河を竭せば流兆無し。』と。『能く此の愛本を明むる、是を謂つて苦際と名く。』とは愛は形質の欲と爲り、枝葉の癡と爲つて[五三]潤津を爲す。若し彼の學人、思惟妙觀して、能く此を斷ずる者は苦際を超越せん。是の故に說いて曰く、『能く此の愛本を明むる、是を謂つて苦際と名く。』と。

(一六)見る、而も實に見る。　聞く、而も實に聞く。　知る、而も實に知る。　是を謂つて苦際と名く。

何を以ての故に、『見る、而も實に見る。』と說くや。何を以ての故に、實に見るに非ずんば、見るに非ざるか。復人有り、若し眼に色を見、色の本を分別して思惟せば、識緣・想著を起さざるが如し。實に見るに非ずんば、見るに非ずといふは、彼の愚惑の人、眼に色を見て眼識を生ずるが如し。此は見ると雖も、非見に如かず。何を以ての故に。其の眼見に由つて眼識を生ぜしが故なり。是の故に說いて曰く、『見る、而も實に見る。』と。『聞く、而も實に聞く。』とは人の微妙の聲を聞いて識著を興さざるが若し。是の故に說いて曰く、『聞く、而も實に聞く。』と。『知る、而も實に知る。』とは復人有り、識身を分別し、善根を採取し、不善根を捨棄せば、諸垢永く盡き、更に新を造らざるが如し。是の故に說いて曰く、『知る、而も實に知る。是を謂つて苦際と名く。』と。

(一七)伊寧彌泥[五四]　陀俾陀羅俾　摩屑姤屑　一切毘梨羅　是を謂つて苦際と名く。

[五五]昔、佛世尊、[五六]四天王の與に法を說きたまふ。二人は中國の語を解し、二人は解せず。二人の解せざる者の與に[五七]曇蜜羅國語を說いて四諦を宣暢したまふ。曇蜜羅國語を說くと雖も、一人は解し、

【五三】潤津。うるほひうるほふ。愛が心を惑溺せしむること。

【五四】伊寧彌泥……伊寧彌泥云々の偈文は印度俗語の音譯なれば、今にして梵語等に遡元し原意を正確に譯出することは殆ど不可能に屬す。

【五五】十誦律卷二十六に類似の話出でたり。

【五六】四天王。前卷一三七頁を見よ。

【五七】曇蜜羅國。翻梵語八卷に「譯して樂法と曰ふ」とあり。又鞞婆沙論九卷に所謂曇羅國と同じならん。南印ドラギダ國(Dravidian の國)と宇井教授より示教せらる。

ず。　如今獲べからず。

『我の有てるは本より以て無きなり。本有るもの我今は無し。』とは外道異學の所見同じからず。各自ら正しと爲す。我本姓は某、字は某、有りと雖も而も無し。無しと雖も而も有り。無有にして自ら生ず。是の故に說いて曰く、『我の有てるは本より以て無し。本有るもの我今は無し。』と。『無に非ず、亦有に非ず。』とは「無に非ず、」とは過去なり。「亦有に非ず、」とは當來なり。『如今獲べからず。』とは現在なり。執愚の士、豈沙門梵志を離れんや。此を行じて邪徑自ら改更せず。爾る所以は第一の義、泥洹の道を解せず、邪見を信じ、泥洹を信ぜず。是の故に說いて曰く、

　我の有てるは本より以て無し。　本有るもの我今は無し。無に非ず、亦有に非ず、　如今獲べからずと。

(一四)難見の諦は不動なり。　善く觀じて分別せよ。　當に愛盡の原を察すべし。　是を謂つて　苦際[五一]と名く。

『難見の諦は不動なり。善く觀じて分別せよ。』とは滅盡泥洹は極めて微妙たり。無形にして見るべからず。有爲の法は動轉して停まらず。無形の法は移轉すべからず。唯如來・辟支佛及び聲聞等のみ有つて、智慧眼を以て善く觀じて分別し、一一に決了す。是の故に說いて曰く、『難見の諦は不動なり。善く觀じて分別せよ。』と。『當に愛盡の原を察すべし。是を謂つて苦際と名く。』とは愛の根本の病を興すこと若干なるを知り、中に於て、自ら拔き永く斷じて餘無からしむ。是の故に說いて曰く、『當に愛盡の原を察すべし。是を謂つて苦際と名く。』と。

(一五)愛を斷じ其の欲を除け。　河を竭せば　流兆[五二]無し。　能く此の愛本を明むる、　是を謂つて苦際と名く。

『愛を斷じ其の欲を除け。(河を竭せば流兆無し)。』とは愛の病たる衆患の本なり。以て愛本を拔か

【五一】苦際。苦の際限なれば苦の無くなりしところ。

【五二】流兆。水流のしるし。

んぜん。愚を懷き。性邪にして意に倒見を信ずるがごときは終に嶮難の處を越ゆるを得ず。要に智慧の目、賢聖の術有つて然る後に能く無爲の場に到らん。』と。是の故に說いて曰く、

以て意を懈怠せずんば、　怯弱も至る所有らん。　泥洹に至らんと欲求せば、　諸の縛著を焚燒せよ。

(一一二)*比丘よ、　速かに船を抒め。以て抒まば便ち當に輕くなるべし。　永く貪欲の情を斷ぜば、　然る後に泥洹に至らん。

昔、比丘有り。江河を渡らんと欲して、弊船の朽故不治なる有るに値ふ。是の時、船師、比丘に報へて曰く、『道士、之く所有らんと欲せば、己が功を以て此の[四九]儲水を抒むべし。船輕く、身全ければ、何ぞ往くに剋へざらん。』と。爾の時、比丘、其の乳哺の力を盡して、其の船の水を抒み窮め、乃ち彼の水岸に越至することを得、衣服を收攝し、威儀を整頓し、漸漸に往至して世尊に親近す。到り已つて、頭面もて禮足し、一面に在つて坐す。如來、彼の應に濟渡し得べきを知りたまふ。是を以て顧眄熟視したまふのみ。是れ辟支、羅漢の及ぶ所に非ず。爾の時、世尊、便ち此の偈を說きたまはく。

比丘よ、　速かに船を抒め。　以て抒まば便ち當に輕くなるべし。　永く貪欲の情を斷ぜば、
然る後に泥洹に至らんと。

爾の時、世尊、諸比丘に告げたまはく、『汝ら今乃ち目前の難を慮つて、乃ち反つて後世の忌に更ふ。船は危嶮なること世の常法なり。群生を權渡して以て倦むことを爲さざれ。[五〇]形は眞器の純盛なるが如きも、不淨なり。何ぞ遺棄せざる。穢漏の病を抒み、婬・怒・癡を斷じて、賢聖の船に乘らば、泥洹に至るを得べし。』と。

(一一三)我の有てるは本より以て無きなり。　本有るもの我今は無し。　無に非ず、　亦有に非

＊法句經沙門品は四言に作る。巴利法句經、二五の三六九。

【四九】儲水。浸水せるたまり水。

【五〇】形。身形肉體。

棘を生じ、高岸絕坑に蚖蛇毒蟲の孚乳するもの滋く多し。皆先身の積惡に由つて致す所なり。是の故に說いて曰く、斯の如く皆緣有り。』と。

（一〇）*鹿は野に歸し、　鳥は虛空に歸し、　義は分別に歸し、　[四七]眞人は滅に歸す。

昔、佛世尊、摩竭の東界、甘果園の側、因帝石室に在せり。爾の時、世尊、天眼の清淨にして寂然として塵垢無きを以て見たまふに、衆の群鹿有り、彼の獵師に遇ひ、驚愕を懷き、嶮阻の中に馳奔す。爾の時、世尊、復天眼を以て見たまふに、群鳥有り、羅を避けて高翔し、虛空を馳趣す。如來、天眼もて復見たまふに、比丘あり、言辯義趣、柔和暢達なるが、尋即に、其の夜、十二因緣を思惟し、反覆して逆順本末を究悉す。如來、天眼もて亦復之を覩たまふ。復異比丘を見たまふに、通夜の中、反覆思惟して解脫禪定に入り、夜將に曉闇ならんと欲し、復盡きんと欲するころ、無餘泥洹界に於て般泥洹す。復是れ如來神眼の鑒みる所なり。爾の時、世尊、此の義の因緣の起る所を覩じて弟子をして其の教を演布せしめんと欲す。復正法をして世に久住せしめ、後の群生をして其の大明を覩せしむ。爾の時、世尊、便ち此の偈を說かく、

鹿は野に歸し、　鳥は虛空に歸し、　義は分別に歸し、　眞人は滅に歸すと。

（一一）以て意を懈怠せずんば、　怯弱も至る所有らん。　泥洹に至らんと欲求せば、　諸の縛著を焚燒せよ。

『以て意を懈怠せずんば、怯弱も至る所有らん。』とは佛の契經、中阿含の所說の如し。『佛、比丘に告げたまはく、此の法は精進する者の修むる所、懈怠せざる者の修むる所。然れば、性、懈怠なれば、自ら進む能はざらん。焉んぞ能く[四八]巧便もて泥洹に至ることを得んや。猶人有り、素性怯弱にして素兩目無きが如し。豈能く意を設けて曠野に露宿せんや。諸の盜寇多く、路越ゆるを得難し。彼の嶮難處を度らんと欲求せば、以て健夫勇猛の士のみ有つて、乃ち自ら濟るを得て身を無爲に安

* 法句經泥洹品。

【四七】眞人。眞理を證する人。阿羅漢をも、佛をもいふ。

【四八】巧便。善巧方便、てだて。

に應じ、前に適き、藥を投じて虚しからず。其の中、利根の徒は世の萬變して同處すべきこと難きを觀じ、上、無爲を求むること[三五]頭然を救ふが如くにす。所以は何んとなれば、彼は虚寂・閑靜・安樂に處り、永く[三六]虚表に合して、[三七]澄神、不動なればなり。是の故に說いて曰く、『如實に此を知る者は速かに泥洹を求む。』と。

*[三八](九)因有つて善處に生じ、[三九]緣有つて惡趣に生じ、緣有つて般泥洹す。斯の如く皆緣有り。

『因有つて善處に生じ、』とは云何か緣と爲す。所謂緣とは[四〇]施・戒・聞・慧・思惟なり。[四一]清信士の威儀、出家の威儀、[四二]大道人の威儀は善行の跡を捨てしむ。是を因緣は趣道の基なりと謂ふ。是の故に說いて曰く、『因有つて善處に生じ、』と。『緣有つて惡趣に生じ、』とは何の因緣か有る。喩ふれば、人有り、內に憎嫉を懷き、施心、開かず、殺生、不與取を犯戒するが如し。此の如き[四三]十惡の行を改更すること能はざれば、遂に墜墮を致し、三塗に趣く。是の故に說いて曰く、『緣有つて惡趣に生じ、』と。『緣有つて般泥洹す。』とは說く所の泥洹は皆[四四]賢聖の眞道を用つて諸の結使を斷じ、前んで無爲に趣くなり。此の*聖品を離るれば、獲べからず。猶[四五]外道梵志の自ら相謂つて言く、「世には因緣も無く、亦本末も無し。有れば、自然にして有るなり。無ければ、自然にして無きなり。何を以て其の然るを知るか。猶曠野に荊棘の生ずるが若し。其の棘鍼豈巧匠有つて利鍼に削りしならんや。鹿の如き百獸、群鳥の樹に棲める、衣毛雜色、形像同じからず。豈復人有つて其の體を彩畫せしならんや。其の品類を論ずるに、受姓同じからず。地性は素、濡、石性は素、堅、豈復人有つて堅濡を造りしならんや。斯は皆因緣無くして自然に生ぜしなり。此の如きの類に迷を執り來るや久し。共に相教授して今に至つて絕えず。是の故に世尊、說いて曰く、「其れ事は緣有り、唐しく苦しまざるのみ。復何の因緣かあり。衆生、[四六]十善を修行すれば、衆生處る所の其の地、平正なり。爾の時、阬坎高岸・荊棘逆草・自然に平整なり。其れ衆生の惡を修行する者有れば、是の時、普地に盡く荊

【三五】頭然を救ふ。熱心なる形容。然は燃に通ず。
【三六】虚表。大虚空・天空。
【三七】澄神。清澄純潔なる精神。
＊　法句經泥洹品。
【三八】因。直接原因。
【三九】緣。間接助緣。こゝにては區別をなさず使用せり。
【四〇】施戒等。布施・持戒・多聞・智慧・思惟等の諸德。
【四一】清信士。優婆塞即ち信男。
【四二】大道人。菩薩。
【四三】十惡。一、殺生。二、偷盜(不與取)。三、邪淫。四、妄語。五、兩舌。六、惡口。七、綺語。八、貪欲。九、瞋恚。十、邪見。
【四四】賢聖の眞道。八聖道をいふ。
＊　聖品。八聖道。
【四五】外道梵志。六師外道のあるものゝ如きを指す。
【四六】十善。十惡の反對。

足すれば、當に衰喪老病に困めらるゝこと有るべし。[三一]形變じ、神徙れば、當に彼の善惡の報を受くべし。斯は造行の致す所なり。是の故に說いて曰く、『行を第一苦と爲す。』と。『如實に此を知る者は、泥洹の第一樂あり。』とは人の修行して[三二]永寂を求むれば、永く衆患を離れ、無爲に安處し、復衆惱苦痛の患無し。是の故に說いて曰く、『如實に此を知る者は泥洹の第一樂あり。』と。

(八)※趣善の徒は少く、　趣惡の徒は多し。　如實に此を知る者は　速かに泥洹を求む。

人の世間に在るや、善を修する者は少し。復善を行はんと願ふと雖も、意の從ならず。設し當に衆行具足せば、是の時、諸天、唯人を善處と爲し、人は天を以て福堂と爲すべし。猶[三三]雜契經に說く所の如し。『佛、比丘に告げたまはく、「諸天、自ら[三四]五瑞應の至るを知つて皆共に雲集せるとき、彼の天子に語げて曰く、汝、此に從つて沒し、善處に生ぜんことを願へ。彼の善處に至らば、善利を快得せん。善利を得るを以て、無爲に安處せんと。」と。爾の時、比丘、前んで佛に白して言く、「云何か、世尊、諸天は善處にて善利を快得し無爲に安處する。此の※三句の義、何者か是なる。」と。佛、比丘に告げたまはく、「道根具足し、正法中に於て、鬚髮を剃除し、三法衣を著け、家屬を樂はず、出家學道する、是を比丘よ、諸天の善處と謂ふ。」と。「云何か無爲に安處する。」と。佛、比丘に告げたまはく、「四聖諦を得て、思惟分別する、是を比丘よ、諸天は無爲に安處すと謂ふ。」と。世に在つて道を行ひ、善を修する者は少ければ、『趣善の徒は少し。』と。『趣惡の徒は多し。』とは然る所以は衆生の類、惡を修する者は多し。佛を識らず、法を識らず、比丘僧を識らず、亦復善惡と好と醜とを分別せず、但地獄・餓鬼・畜生の根栽を種ゑ、冥より冥に入り、復出期無し。猶盲の燭を執つて彼を照すも、自らは明かならざるがごとし。是の故に說いて曰く、『趣惡の徒は多し。』と。『如實に此を知る者は、速かに泥洹を求む。』とは人人利疾有り。倶に寤ること同じからず。或は聞いて而して自ら寤る有り、或は形を覩て而して解する有り。是を以て聖人は布敎するに、若干にし、病

【三一】 形變じ神徙る。死ぬこと。

【三二】 永寂。永へに苦のなくなつた境界。卽ち泥洹。

※ 法句經泥洹品。

【三三】 雜契經。雜阿含か。

【三四】 五瑞應。天より降るめでたいしるし。五とは何々を指すか不明。

※ 三句。三の字或は二か。

召せしむ。其の人、酒に醉ひて官の來使を殺し、尋で走つて奔向し、朋友に歸趣し、己が情實を以て具さに彼に向つて說かく、『我、今、危厄にして足を投ずるに地無し。唯ゞ容受せらるれば、其の困みを免るることを得ん。』と。朋友、之を聞いて、皆共に愕然たり。『咄、卿の大事、藏匿すべきこと難し。宜しく時に還つて復此に停まること勿るべし。設し事、顯露せば、我を罪することも少からざらん。卿は兄弟有り、宗族も熾なり。何爲れぞ我に向ひ、骨肉に叛くや。』と。其の人、之を聞くや、尋で家に還歸し、兄弟に投歸し、五體もて歸命し、實を以て、自ら作す所の[二六]愆咎を陳ぶ。宗族、之を聞いて皆共に慰勞すらく、『怖懼を懷くこと勿れ。當に權計を設けて此の難を免れしむべし。』と。[二七]五親、雲集し、嚴駕行調し、各各路を進んで他國の界に適き、更に屋宅を立て共に相敬待すること本國のときに倍勝す。財寶、日に熾んにして僕從無數なり。是の故に說いて曰く、『知親は第一友、』と。『泥洹は第一樂。』とは泥洹の中には終に患苦無し。塵勞、衆結永く復有ること無く、休息滅盡す。是の故に說いて曰く、『泥洹は第一樂。』と。

（七）飢を第一患と爲し、　行を第一苦と爲す。　如實に此を知る者は、　泥洹の第一樂あり。

『飢を第一患と爲し、』とは昔、[二八]蓱沙王、兒阿闍世の爲めに深牢に閉在せられ、人よりの信、斷絕し、糧餉、通ぜず。彼に在つて飢困するも、告訴するに所無し。王、歘ち思惟して佛を念じて心に在らしめ、本說きたまふ所を憶ふ。尋で獄中に於て斯の偈を說かく、

最勝なる言教は、　流布すること際無く、　世共に傳習し、　實に厭くこと有ること無し。

無等倫の所說の善教の如し。　身苦に逼らるゝもの、何ぞ飢患に過ぎん。

患中の苦は飢より過ぎたるは莫し。是の故に說いて曰く、『飢を第一患と爲し、』と。『行を第一苦と爲す。』とは夫れ人、世に處するや、志趣同じからず、所習各別なり。飢寒勤苦は切身の酷なり。若し人、形を受くれば、當に[二九]處胎冥室の患有るべし。設し復降形すれば、[三〇]柝體の惱有り、諸情具

【二六】愆咎。つみとが。

【二七】五親。父・母・兄・弟・妻。
＊法句經泥洹品は四言に作る。巴利法句經、五の二〇三。

【二八】蓱沙王（Bimbisāra）。新に頻毘娑羅といふ。佛時代の摩揭陀國王。信心深かりしも逆子阿闍世王（Ajātaśatru）のために幽閉せられ、獄中佛の光明に照さる。初め蓱沙王、韋提希夫人との間に阿闍世を生まをけしが、相師の長じて父を害すべしとの豫言に恐れて、生るゝや高樓より地に落す。死せずして長ず。阿闍世後に此を知つて惡友提婆と謀り、父母を幽して遂に弑す。觀無量壽經に詳し。

【二九】處胎冥室の患。母胎に十月宿るくるしみ。

【三〇】柝體の惱。產兒が母胎より分離する苦惱。

を獲致すべし。猶完器の[二一]受盛するに堪任するが如し。衆人、見る者、愛樂せざる莫し。是の故に說いて曰く、『若し自ら煩惱せずんば、猶器の完牢の具はるがごとく、』と。『是の如く泥洹に至つて、永く塵垢の翳無し。』とは人、此の瑕滓無ければ、滅盡泥洹の處に至るを得、永寂永息にして起滅する所無し。是の故に說いて曰く、『是の如く泥洹に至つて、永く塵垢の翳無し。』と。

（六）*無病は第一利、　知足は第一富、　知親は第一友、　泥洹は第一樂。

『無病は第一利、』とは世に多く人有り、宿に疹患少きは、皆前世の報應の果に由る。昔、二商客有り。危嶮を冒涉し、他國に生を治む。未だ幾日を經ざるに、財を積むこと無數なり。一人は緣至つて、卒かに重患に遇ふ。所有の財貨も療患に亦盡く。窮困頓篤にして[二二]瘳除を蒙らず。一人は無病にして財貨を費さず。大利を獲ると雖も、猶怨訴を懷くらく、「我今得る所の益、言ふに足らず。」と。安隱に家に歸り、損失する所無かりしも、晝夜に財利を獲ざりしを怨訴す。親族、勸諫して商人に語げて曰く、『卿、今無病安隱に家に至れり。何爲れぞ、[二三]嘷叫して、利を獲ざりしと言ふや。身有り、命全きは寶中の上なり。』と。是の故に說いて曰く、『無病は第一利、』と。『知足は第一富、』とは佛の律藏の所說の如し。『世に二人の厭足すべきこと難きもの有り。云何か二と爲す。一は利を得て費耗し、二は利を得て深藏す。若し閻浮地內をして天より[二四]七寶を降らし、此の世界に滿たしむるも、此らの二人は猶足ることを知らず。』と。未斷欲の人は財貨に貪著して得れども、復求めて厭足することを知らず。唯履道の人のみ有つて明かに非常を知り、非眞を解釋すれば、其の珍なるを顧みず、幻化の久しく停まるを得ざること猶石を琢つて火電の目を過歷するを見るが若く、斯の變の如く、遷轉して住まらざることを解知す。是の故に說いて曰く、『知足は第一富、』と。『知親は第一友、』とは人、知親と共に欵到するを以て本と爲す。先に信、後に義なれば、乃ち同處すべし。猶昔一人有り。情愛至深なり。但朋友と事に從ひ、兄弟とは言談もせず。官、[二五]禁防を遣はし此の人を來

【二一】受盛。うけもる。

* 法句經泥洹品には四言に作る。巴利法句經一五の二〇四。

【二二】瘳除。病がなほりのぞく。

【二三】嘷叫。なきさけぶ。

【二四】七寶。金・銀・瑠璃・硨磲・碼碯・眞珠・琥珀。

【二五】禁防。警吏。

練るも、造作無端なれば、便ち智者の爲に嫌疑せられん。若し責數を喚ぶとき、倍ゝ恚怒を增さん。斯の如き徒には親近すべからず。是の故に說いて曰く、『所說は辯才に應ぜよ。』と。『少聞にして共に論難せば、反つて彼の屈伏を受けん。』とは人の此を相是非し來るや久し。我が所說は是、汝の所說は非と互ひに相高下せば、遂に忿怒を生ぜん。猶二人の佛を謗毀するが如し。一人は信有れども、敎を受くること審かならず、一人は信無くして諸根も闇鈍なり。斯の如き二人は地獄・餓鬼・畜生の根栽を受けん。若し生れて人と爲るも、[一八]六情具はらず、言語[一九]蹇吃せん。是の故に說いて曰く、『少聞にして共に論難せば、反つて彼の屈伏を受けん。』と。

(四)數ゝ自ら煩惱を興せば、　猶彼の器の敗壞するがごとく、　生死に數ゝ流轉せば、　長く沒して出期無けん。

『數ゝ自ら煩惱を興せば、猶彼の器の敗壞するがごとく、』とは如し人、愚に執して死に至るも改めざれば、結使縛著し、顚倒せる亂想邪見、貿試して自ら纏絡せらるゝこと、猶破器の漏出して盛る所、復中る所無く、塵土に垢坌して自ら汚染するが若し。是の故に說いて曰く、『數ゝ自ら煩惱を興せば、猶彼の器の敗壞するがごとく、』と。『生死に數ゝ流轉せば、長く沒して出期無けん。』とは人、豫慮せずんば、必ず其の殃を受けん。猶陶輪の輪轉して停まらざるが若し。久しく生死に處れば、出づることを求むるも、剋くし難し。以て喩と爲す無し。是の故に說いて曰く、『生死に數ゝ流轉せば、長く沒して出期無けん。』と。

(五)若し自ら煩惱せずんば、　猶器の完牢の具はるがごとく　是の如く泥洹に至つて、　永く塵垢の翳無し。

『若し自ら煩惱せずんば、猶器の完牢の具はるがごとく、』とは若し能く自ら專ら諸著を興さず、諸の縛結を去れば、便ち當に無漏の慧根なる。[二〇]四意止・四意斷・四神足・五根・五力・七覺意・賢聖八品道

【一八】六情。六根のこと。根に情識あればなり。
【一九】蹇吃。なやみどもること。
【二〇】四意止乃至八品道。所謂三十七道品なり。

み、形痛まざる者は便ち地獄・餓鬼・畜生に墮す。形痛み、心痛まざる者は便ち無上を感じ、最正覺を爲さん。』と。爾の時、諸仙士、各各歡じて曰く、『善い哉、善い哉、神仙よ、忍の妙たる過ぎたる者有ること無し。捷疾利根にして其の福を長養す。必ずや其の願を果さんこと將に久しからざるに至らんとす。』と。是の故に說いて曰く、『忍辱を第一と爲す。』と。『佛は泥洹を最と說きたまふ。』とは法中の微妙なる者泥洹に過ぎたるもの莫し。法中の上にして復過ぎたる者無し。夫れ泥洹は不生・不老・不病・不死・澹然無爲にして起滅の想無し。是の故に說いて曰く、『佛は泥洹を最と說きたまふ。』と。『以て煩熱を懷かず、』とは家を捨て、妻子を捐棄する所以は五欲を除去し、世の八業を捨て、俗榮を顧みずして、出家修道するなり。何爲れぞ、中に於て衆生を惱熱せんや。是の故に說いて曰く、『以て煩熱を懷かず、』と。『他*を害するも、沙門と爲したまふ。』とは夫れ沙門と爲るには第一義に應じ、沙門法に隨つて、次序を越えず、憎嫉詐誑有ること無く、人に於て彼を護ること己を視るが如きなり。(今)敎令に從はざるに進學せしむ。是の故に說いて曰く、『他を害するも沙門と爲したまふ。

(三)言は當に[一五]麤獷なる莫るべし。　所說は辯才に應ぜよ。　少聞にして共に論難せば、　反つて彼の屈伏を受けん。

『言は當に麤獷なる莫るべし。』とは昔、佛、世に在せしとき大目揵連の與に法を說かく、『鄉、今日目連よ、夫れ說法を爲さんには當に如法に說くべし。其の間に[一六]襍糅の義を容れざれ。正法を說く時は心意端正にして左右を顧視するを得ざれ。豈當に不急の事を浮說すべけんや。何を以ての故に爾るかとなれば、夫れ麤言する者は諸の瑕隙多く、後更に形を受けんに一身に百頭ならん。彼の迦比羅比丘の如くに異ならず。』と。是の故に說いて曰く、『言は當に麤獷なる莫るべし。』と。『所說は辯才に應ぜよ。』とは天文・地理・星宿・變異災怪の出づる所を知り、[一七]六藝に通達し、博く典籍を

* 他。前には彼に作る。

【一五】麤獷。あらあらし。

【一六】襍糅。襍は雜。いりまじり不純なること。

【一七】六藝。禮・樂・射・御・書・

恚憎嫉の心を興し、瞋恚赫熾して其の理を顧みず。直ちに前んで問うて曰く、『卿、仙士と爲り、此に在つて術を習ふ。卿、[九]第一禪を得たりと爲すや。』と。對へて曰く、『不とよ、大王。』と。復重ねて問ふらく、『頗しは第二、第三、第四禪、[一〇]空處・識處・不用處・有想無想處を得たりや。』と。對へて曰く、『不とよ、大王。』と。王、之に告げて曰く、『卿、今、此に在つて道術を學ぶも、此らの諸德に於て其の一をも獲ず。何の爲めに此に在つて其の日月を喪ふや。』と。菩薩、報へて曰く、『吾、家業を損棄し、此に在つて學ぶ所以は忍辱の定を修せんと欲すればなり。』と。王、復自ら念へらく、『此の人、此に在つて學んで來た積久なり。向に我が色を瞻、我が瞋盛なるを知る、是を以て我に報ふるに、忍辱を修行すと。吾、今之を試みん、審して爾りと爲すや不やを。夫れ忍を試むるの法は[一一]餚饌を飲食し、倡伎樂を作すべからず。乃ち之を知るを得んには要に威怒切痛を用て肌を傷つくるの惱ならば、乃ち[一二]現驗を知らん。』と。王、仙士に語るらく、『設し卿、忍辱を行ぜば、速かに右手を舒ばせ。吾、之を試みんと欲す。』と。是の時、菩薩、歡悦して之を舒ぶ。時に王、恚盛にして後世を顧みず、尋で利劍を拔き、右手を斫り斷ち、次で左手を斫る。復右脚を斫り、次で左脚を斫る。耳を截り鼻を截る。王、仙士に問ふらく、『汝、今、何の志求する所ぞ。』と。仙士、報へて曰く、『吾、今、忍辱を行じて斯須も捨てず、正に王をして今我が身體を取つて碎くこと芥子の如くならしむるも、終に退轉して[一三]慈忍辱を失はざらん。夫れ人、瞋恚汚染の心ならば、形毀るゝの後は血を漏すこと無量なり。我、今、忍の[一四]加被を得たれば、形を毀るも、諸の瘡孔中より悉く乳汁を出さん。此を以て驗と爲す。故に忍辱を行ず。』と。彼を去ること遠からざるに復仙士有り。數百の衆、彼に在つて學道す。此の菩薩、王の爲めに毀らるゝを聞き、皆來つて奔趣し、圍繞問訊すらく、『不審、仙士よ、疼痛、至劇ならざるか。』と。對へて曰く、『非らず。諸賢諸仙。』と。復問うて曰く、『汝、今形體分れて七分と爲る。豈復、疼痛無しと言ふを得んや。』と。菩薩、報へて曰く、『心痛

【九】第一禪乃至第四禪。總稱して四禪(定)又は四靜慮といふ。欲界に於て惑を離るべき精神統御の四階段。
【一〇】空處。是等の四を四空處とも四無色ともいふ。空無邊處定・識無邊處定・無所有處定及非想非非想處定の四つの禪定の修行によつて得る四つの境地。
【一一】餚饌。さかなのあるぜんだて。御馳走。
【一二】現驗。まのあたりに見るしるし。
【一三】慈忍辱。慈悲忍辱。
【一四】加被。加護。

し。』とは猶熾火の光、熖赫赫として山野の樹木枝葉を焚燒して遺餘有ること無ければ、火滅するの後、更に赫熖の兆無きが如し。凡夫の士も亦復是の如し。貪の熾火、瞋の熾火、愚癡の熾火を以て功德の善根を焚燒して永く盡きて餘無からしむれば、旣に自ら福を喪ひ、復他人をして究竟に至らざらしむ。若し羅漢を得ば、諸の塵垢盡き、婬・怒・癡の火永く復見ず、己身に道を得、復能く人を度せん。是の故に說いて曰く、『滅度には言說無し。』と。

(二)忍辱を第一と爲す。　佛は泥洹を最と說きたまふ。　以て煩熱を懷かず、　彼を害するも沙門と爲したまふ。

〔二〕釋迦文佛、*昔、菩薩たりし時、深山無人の處に處在し、神を勞し、體を苦しめ、忍辱を修行し、內に自ら意を繫け、衆想起らざりき。時に〔三〕迦藍浮王有り、出行遊戲し、諸の宮人婇女を將ゐ、〔四〕五樂自ら娛しみ、琴を彈じ、瑟を鼓し、倡伎樂を作して恣意自由なり。樂を聞けるうち疲厭して卽便ち睡眠す。宮人婇女、各各馳散し、妙花を採拾す。遙かに菩薩の樹下に在つて坐せるを見るに、顏貌端正にして桃華色の如し。其を覩る者有れば、喜踊せざる莫し。日の初めて出づるや普く照さゞる靡きが如く、月の空に在るや衆星に〔五〕嶽峙するが如し。諸の婇女、見て奔趣し向跪して各一面に立つ。是の時、菩薩、徐に目を開く。視るに威儀〔六〕庠序たり。漸漸に導引して與に妙法を說かく、『〔七〕欲不淨行の漏を大患と爲す。夫れ人、貪欲して形に染汚する者は後に鳥獸鴿雀の中に墮し、臭穢不淨にして惡趣に墮入せん。是れ賢聖眞人の所學に非ず。諸妹よ、當に知るべし。夫れ婬欲は當に火車爐炭の報を受くべきことを。』と。是の如く菩薩は無數の方便もて欲穢汚を說く。時に迦藍浮王、睡より覺めて左右を顧視するに、諸の婇女衆を見ず。卽ち利劍を拔き、〔八〕輕乘疾馬にて馳奔し求覓し、良久にして乃ち見たり。遙かに菩薩の顏色の從容として婇女に圍繞せらるゝを覩、王、意に自ら念へらく、「此の人、端正なること世に希有なり。必ずや我が婇女と欲情を交通したらん。」と。內に恚

【二】 釋迦文佛。釋迦牟尼佛。

＊ 此の本生話は涅槃經三十一、金剛經、大智度論十四等にも出づ。

【三】 迦藍浮王 (Kali or Kalingu)。迦黎、歌利とも音譯す。鬪諍、惡生と譯す。

【四】 五樂。色・聲・香・味・觸の五欲の感官的享樂をすること。

【五】 嶽峙。いかめしくそばだつ。

【六】 庠序。優雅、上品の貌。

【七】 欲不淨行。婬欲の行。

【八】 輕乘疾馬。輕快な馬車を速い馬に引かせたるもの。

卷の第二十三

泥洹品第二十七

(一)龜の其の六を藏すが如く、比丘は意想を攝めよ。倚ること無く、彼を害すること無かれ。滅度には言說無し。

『龜の其の六を藏すが如く、比丘は意想を攝めよ。』とは猶彼の神龜の身命を喪はんことを畏るゝがごとし。設し怨讎を見れば、六を甲裏に藏し內に自ら思惟すらく、「若し我、六を藏さずんば、便ち獵者の爲めに擒にせられ、或は其の首を梟に、或は前の左右の足を傷つけ、或は後の左右の脚を斷ち、或は我が尾を毀たれん。今防慮せずんは、定んで死せんこと疑無けん。」と。比丘の行を習ふも亦復是の如し。生死を畏惡し、意の亂想を攝め、恒に自ら思惟すらく、「人と爲るを得ると雖も、生を寄すること幾くも無し。今自ら攝めずんば、便ち弊魔波旬及び欲塵魔、自在天子の爲めに我が便を得せしめられん。」と。是の故に說いて曰く、『龜の其の六を藏すが如く、比丘は意想を攝めよ。』と。『倚ること無く、彼を害すること無ければ、滅度には言說無し。』とは衆結の縛著、邪業の顚倒に倚るを得ざれ。倚る所有らんと欲せば、唯聖諦に依れ。至る所有らんと欲せば、安隱に彼に達せん。喩へば久しく病めるが羸瘦して床に著きて臥し、大小便に動搖する能はず、或は老いたるが羸極して起居する能はず、要に健夫を須つて兩腋を扶持せらるれば、所至を意欲するも、安隱に彼に至るが如し。衆生の類も其の譬亦爾り。諸根闇鈍にして諸の深義に於て大いに慇懃ならざるも、設し良友に遇うて憑仰するに處有れば、漸漸に生死の處を免るゝを得ん。是を以て世尊は後生に演敎すらく、『生死に倚り、害心を起謀すること無かれ。倚ること無く、害する所無くんば、乃ち道跡を成ぜん。』と是の故に說いて曰く、『倚ること無く、彼を害すること無かれ。』と。『滅度には言說無

【一】六。頭と前、後、左、右の足と尾と。

を致せり。亦復魔若しは天の見ざる所なり。外道異學の沙門、梵志、能く如來をして恐怖有らしめんとするも、此の事然らず。吾、昔、樹王の下に在りしとき、衆結未だ盡きず、弊魔波旬、將に十八億衆あり。人身にして、獸頭・猨猴・獅子・虎・兕・毒蛇・惡鬼の形貌せるが、山を擔ひ、火を吐き、刀・劍・戈・牟・鎧・鉀を把持し、聲を揚げて哮吼し、虛空を塡塞し、時に來つて我を恐せしが、猶尙我が一毛をも動かす能はざりき。況んや今、我が身、等正覺を成じ、三界に獨尊なるをや。豈當に愚なる調達を畏れんや。此の事然らず。』と。爾の時、世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

愚を見、聲を聞くこと莫れ。　亦愚と居ること莫れ。　愚と同居することの難きは　猶怨と同處する(ことの難き)が如しと。　當に選擇して共に居り、　親親と會するが如くすべし。

夫れ人の世に處る、當に黠慧の人と共に居るべし。出でゝは和顏に、入つては同じく歡び、共に相敬待すること父の如く、兄の如く、身の如くにして異ること無く、猶親親の心意歡至するが如くせよ。此の如く相敬へば皆無爲に至らん。是の故に說いて曰く、『當に選擇して共に居り、親親と會するが如くすべし。』と。

(二一〇)是の故に多聞を事とし、　幷に持戒に及ぶ者、　是の如きは人中の上たり。　猶月の衆星に在るがごとし。

『是の故に多聞を事とし、幷に持戒に及ぶ者、』とは多聞の衆生は世の非常を解し、明かに三有を鑒み、今世後世の報を知り、自ら衆德を具足すべきことを知る。恒に賢人に親近し、戒を成就し、定を成就し、慧を成就し、解脫を成就し、解脫見を成就す。是の故に說かく、『多聞を事とし、幷に持戒に及ぶ者』と。『是の如きは人中の上たり。猶月の衆星に在るがごとし。』とは五分法身、未だ具はらざるをして具足せしむ。(之は)大衆中に在つて獨尊隻步にして儔匹有ること無し。猶明月の衆星中に在るが如く、光明遠く照して、及ぶ者有ること無し。是の故に說いて曰く、『是の如きは人中の上たり。猶月の衆星に在るがごとし。』と。

【六〇】兕。野牛に似て色青く一角あり。

と。『愚人の自ら智と稱するは是を愚中の甚しきものと謂ふ。』とは愚人の世に生るゝや、恒に自ら歎譽すらく、「我は尊貴たり。餘者は如かず、達せず。今世後世の[六六]殃舋の罪は我が知見する所、世に希有なり。」と。自ら其の名を揚げ、彼の德を抑へ、生死の難を知らずして凡夫行を修す。是の故に説いて曰く、『愚人の自ら智と稱するは、是を愚中の甚しきものと謂ふ。』と。

(一八)若しは復、愚を歎譽し、　智者の身を毀呰するあり。　智を毀るは猶勝ふる有れども、
　愚を歎ずるは上と爲さず。

『若しは復、愚を歎譽し、』とは愚者は習ふ所　見る物を歎譽して尊卑善惡の行を別たず。歎ずべき所の者を反つて更に毀呰す。是の故に説いて曰く、『若しは復、愚を歎譽し、』と。『智者の身を毀呰するあり。』とは(智者は)誹謗を被むると雖も、以て憂慼せず、自ら果報の緣對して至る所を知る。是の故に説いて曰く、『智者の身を毀呰するあり。』と。『*(智を毀るは)猶勝ふる有れども、』『愚を歎ずるは上と爲さず。』とは衆生の世に處るや、愚と群し、惑と黨し、彼の稱名を聞けば、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず。久しうして後、身に便ならざるを知らず。是の故に説いて曰く、『愚を歎ずるは上と爲さず。』と。

(一九)愚を見、聲を聞くこと莫れ。　亦愚と居ること莫れ。　愚と同居することの難きは　猶
　怨と同處する(ことの難き)が如し。

昔、佛、羅閱祇に在せり。侍者一人、名を阿難と曰ふを將ゐ、路に在つて遊行したまふ。爾の時、世尊、遙かに[六七]調達の路を逐うて、前進するを見たまふ。佛、阿難に告げたまはく、『我等、共に餘の路に就いて行くべし。何爲れぞ、此の愚人と相見んや。』と。爾の時、阿難、前んで佛に白して言く、『云何か、世尊如來よ、今日、此の調達を畏れたまふ。何爲れぞ、避けて餘路に就かんと欲したまふや。』と。佛、阿難に告げたまはく、『我、自ら憶念するに、本、造る所の福は自ら無上等正覺

【六六】殃舋。わざはひ、つみとが。

＊原漢文諸本皆毀智の二字を脱し、之が解説もなし。

【六七】調達。提婆達多。

類は罪垢深固にして改更すべきこと難し。過去恒沙の諸佛世尊、說法を無餘の境に終訖するも、然も衆生の類、愚に執すること積久にして甘露滋く降るも覩ず、聞かず。形を捨て形を受け、生死に輪轉して出期有ること無し。斯は愚惑に由つて無明に纒はるゝが故なり。

（一六）怨憎のもの智有れば勝つ。　親友の義に隨はず、　愚者に非道を訓ふれば、　漸やく地獄の徑に趣く。

『怨憎のもの智有れば勝つ。』とは怨憎あるの人、自ら隙深きを知るも、意性、明達なれば、未然に防慮し、恒に自ら思惟すらく、「設し我、今日非法を行ぜば、便ち自ら陷溺して、彼の人を毀らざらん。怨讎の衆多有ることを知つて怨を報いんと思欲すれども、力の至らざる所あらん。當に如何なるべきかを知る。如かず、慈を行じて乃ち勝を得べけんには。」と。是の故に說いて曰く、『怨憎のもの智有れば勝つ。』と。『親友の義に隨はず、』とは親友の人、心意【六五】欵到して意に好む所を前人に教授して與共に同じく歡び、惡なれば同じく惡み、好なれば同じく好めば、後に報を受けて地獄中に對入せん。是の故に說いて曰く、『親友の義に隨はず、愚者に非道を訓ふれば、漸やく地獄の徑に趣く。』と。

（一七）愚者の自ら愚と稱するは、　當に善き黠慧なるを知るべく、　愚人の自ら智と稱するは、是を愚中の甚しきものと謂ふ。

『愚者の自ら愚と稱するは、當に善き黠慧なるを知るべし。』とは愚は自ら思惟すらく、「本を悔ゆるとも及ばざれども、我、本行ふ所は實に非法たり。諸の罪根を種ゑ、地獄の門を開き、泥洹の路を塞ぎしは晝夜に懇責するところなり。我今、世に處て衆結自ら纒ひ、塵垢に汚染せらる。身を捨て、身を受け、生死に輪轉して三有を離れず。」と自ら悔責して師を追ひ、侶を逐へば、漸漸に無爲の處に至るを得ん。是の故に說いて曰く、『愚者の自ら愚と稱するは、當に善き黠慧なるを知るべし。』

【六五】欵到。いたり通ずるなり。

彼は眞法なる[60]三耶三佛說を知らず。所謂眞法を知らざる者は愚者是なり。

（一四）智者は一句を尋ねて、　百種の義を演出し、　愚者は千句を誦して、　一句の義をも解せず。

『智者は一句を尋ねて、百種の義を演出し、』とは智者、意を執つて明かに道術に達し、禪宴[61]にして亂れず、神識を練精して、永く塵垢無く、[62]四辯具了して、一句の義を聞けば、百千の章に達す。是の故に說いて曰く、『智者は一句を尋ねて、百千の義を演出し、』と。『愚者は千句を誦して、一句の義をも解せず。』とは愚者は意迷へば、冥より冥に至つて大明を視ず。千章を誦すると雖も、一義をも解せず。是を以て智人は常に當に之と遠ざかつて與に事に從はざるべし。是の故に說いて曰く、『愚者は千句を誦して、一句の義をも解せず。』と。

（一五）一句の義をも成就せんと、　智者には修學せらるれども、　愚者は好んで　眞佛の所說に遠離す。

昔、比丘有り。佛の所に往至し、前んで佛に白して言く、『唯然り、世尊よ、大慈もて愍みを垂れたまへ。開悟未だ及ばず、願はくは爲に說法し、應に人意に適せしむべし、我、法を聞かば己が心意開悟し、度脫を蒙ることを得ん。』と。爾の時、世尊、其の義を略說し、比丘に告げて曰く、『汝に非ざるものは則ち捨てよ。』と。比丘、佛に曰く、『我以て知りぬ。』と。佛、比丘に告げたまはく、『我が義云何。汝以て知れるか。』と。比丘、佛に白く、『[63]色は我が有に非ず。我、以て捨てたり。』と。佛言く、『善い哉、汝の所說の如し。』と。是の故に說いて曰く、『一句の義をも成就せんと智者には修學せらるれども、』と。『愚者は好んで、眞佛の所說に遠離す。』とは聖人は世に處し、衆生に平等の大道を敎誡すれども、愚者は意迷ひて神識を革め難し。或は如來を見たてまつりて目を掩ふ者、或は說法を聞いて耳を塞ぐ者、或は如來の行ける跡に[64]輪相の地に在るを見て蹋壞する者あり。斯等の

【六〇】三耶三佛說（Samyak-sambuddha）。三藐三菩提・三耶三佛檀とも音譯す。正遍知・等正覺と譯す。如來十號の一。

【六一】禪宴。心靜かに安らけき貌。

【六二】四辯。四無礙辯ともいふ。一に法無礙辯、敎法に於て滯らず。二に義無礙辯、敎法の義理に滯らず。三に辭無礙辯、言辭通達自在なり。四に樂無礙辯、前三種の智を以て辯說滯らざるなり。

【六三】色。物質の義。

【六四】輪相。千輻輪相、蹠に輪形あること。佛の殊勝なる三十二相の第二の特徵。

の故に說いて曰く、『非親は愼んで習ふこと莫く、習はゞ當に賢に近づくべし。』と『比丘は道を行じ、忍苦して諸漏を盡せ。』とは行人意を執れば、衆業備具す。[五七]賢聖八品は如來の聖道にして諸佛世尊の常に修行する所なり。復賢聖苦忍の法を以て諸の有漏を盡し、無漏を成ず。是の故に說いて曰く、『比丘は道を行じ、忍苦して諸漏を盡せ。』と。

(一二)*愚者は形壽を盡して　明智の人に承事するも、　亦眞法を知らざること、　瓢の食を[五八]斟酌するが如し。

愚者の世に處つて壽百年、智者と同倶なりと雖も、然も意懞懞として眞法を別たず。是を以て聖人は瓢を以て喩と爲す。(之は)終日、物を酌めども鹹酢を知らず、彼の愚者、賢聖に遇ふと雖も、意迷ひ、心惑つて正教に達せず。生を世に寄するも、時に益無し。是の故に說いて曰く、

愚者は形壽を盡して、　明智の人に承事するも、　亦眞法を知らず。　瓢の食を斟酌するが如しと。

(一三)*智者は斯須の間、　賢聖の人に承事すれば、　一一に眞法を知ること、　舌の衆味を知るが如し。

智人は學ぶ所の意志捷疾なり。一を聞けば萬を知り、豫め未然に達す。隨時の行亦錯謬せず。悉く能く分別して亦滯礙無し。猶舌の味を嘗めて[五九]甜・酢・鹹・淡悉く能く之を知るがごとし。學人も習ふ所、本末を究暢し、白黑の法を別ち、病の興る所を知り、病の滅する所を知つて斯は顚倒に非ず、斯は是れ顚倒なりと皆能く別了して、之に聖藥を投ぜよ。是の故に說いて曰く、

智者は斯須の間、　賢聖の人に承事すれば、　一一に眞法を知る。　舌の衆味を知るが如しと。

其の事を略說せんに、彼の慧を解せざるは愚人の所習なり。唯有智の者のみ能く其の事を究む。彼の眼目無きは所謂愚者是なり。眼目とは賢聖の眼目是なり。唯有智の者にして此を有するのみ。

【五七】賢聖八品。賢聖の則るべき八種の道、卽ち八聖(正)道のこと。

※ 法句經愚闇品は四句偈に作る。巴利法句經五の六四。

【五八】斟酌。くみはかる。

※ 法句經愚闇品、巴利法句經五の六五。

【五九】甜・酢・鹹・淡。あまき・すき・からき・うすき。

(一〇)習ふべきを觀ては之を習ひ、近づくべきを知つては親近せよ。　毒箭其の束に在れば、淨き者も其の汚れを被る。　勇夫は能く汚れを除き、　惡を去つて伴と爲らず。

『習ふべきを觀ては之に習ひ、近づくべきを知つては親近せよ。』とは世に多く人有り、未だ道撿に在らざるは意堅固ならず、惡と從事し、教訓を被らずして物を見ては習ふ。惡を見ては惡を習ひ、善を見ては善を習ふ。已が所見を以て人に示見すれども、身自ら正しからざれば、焉んぞ能く人を正さん。猶毒箭の餘者を汚染するが如し。已が身に惡を行じ、人をして之を習はしむ。智者は此を觀察し已つて其の惡を行ぜず。是の故に說いて曰く、

習ふべきを觀ては之を習ひ、　近づくべきを知つては親近せよ。　毒箭其の束に在れば、淨き者も其の汚れを被る。　勇夫は能く汚れを除き、　惡を去つて伴と爲らずと。

(一一)是の故に果報を知り、　智人は悉く分別す、　非親は愼んで習ふこと莫く、　習はゞ當に賢に近づくべし。　比丘は道を行じ、　忍苦して諸漏を盡せ。

『是の故に果報を知り、智人は悉く分別す。』とは衆生は造行の果報同じからず。或は罪輕くして藥すこと妙に、或は罪重くして療し易し。唯覺者有つて能く消滅するのみ。智人は習ふ所、自ら審明なり。設ひ愆咎有るも、卽ち能く悔過す。猶馬の蹶躓するも、之に杖策を加ふれば、然る後に調伏するが如し。智人の行を習ふも、亦復是の如し。隙の生ずる所を尋ねて自ら及ばざるを悔ゆ。是の故に說いて曰く、『*聖人は果報を知り、智者は悉く分別す。』と。『非親は愼んで習ふこと莫く、習はゞ當に賢に近づくべし。』とは所謂非親とは所行義に非ず、口に言教を吐くも、終に善響無く、毒を人に布いて以て快樂と爲すなり。其れ衆生有つて此を翫習せば、便ち爲めに長夜に生死に流轉し、惱を受くること無量にして神識倒錯し心意煩熱せん。所謂賢者は衆事を包識して萬機に惑はず。人の師範と爲つて辯才無礙なり。已が明慧を以て衆生に演示し、其の音を聞く者は斯に度脫を蒙る。是

【五六】道撿。道に從ひ、道に則りて進退し得る分際。

※ 初出の偈と異る。之が正しきか。

便ならざるを知らず。臭氣流溢して外に布見す。惡を習ふの人も亦復是の如し。與に親近する者は即ち其の惡を成ず。善根を損減し、惡部を增衍す。是の故に說いて曰く、

魚の湍に聚湊せるを、人の貪著して取れば、意著して臭を覺えざるが如く、惡を習ふも亦是の如しと。

(八)木樒、葵霍の葉を、衆生往いて採取すれば、葉の薰香、遠く布く。善を習ふも亦是の如し。

『木樒、葵霍の葉を衆生往いて採取すれば、』とは如し善樂の人有り、往いて其の香を採るに、根を得ずと雖も、而も香葉を獲ば、香氣苾芬たり。正しく彼を捨つるも、故處猶香る。善知識の事に從ふ者も亦復是の如し。成人の功德は日に積む。是の故に說いて曰く、

木樒、葵霍の葉を衆生往いて採取すれば、葉の薰香、遠く布く。善を習ふも亦是の如しと。

(九)已に自ら惡を習はざるも、惡を習ふ者に親近すれば、人の爲めに誣笑せられ、惡名日に增熾せん。

『已に自ら惡を習はざるも、惡を習ふ者に親近すれば、』とは世に多く人有り、惡事・婬逸・盜竊を行ぜず、性、飲酒せず、博奕戲樂せず。然も彼の衆生、或は酤酒家に在つて坐し、或は婬種村中に入り、或は博奕家に在つて坐するを主人の爲めに見らるれば、謂つて、「斯の人、此の非法を習ふ。」と爲され、猶豫の想を興され、「此の人先に自ら貞潔清淨なるに、今日何爲れぞ此の非法を習ふか。」と。惡聲、遂に顯はれて四遠に流聞し、百千の衆生共に相告語し、誹謗の名、是より日に滋し。是の故に說いて曰く、

已に自ら惡を習はざるも、惡を習ふ者に親近すれば、人の爲めに誣笑せられ、惡名日に增熾せんと。

【五三】木樒。樒は槐に似たる一種の香木。
【五四】葵霍。葵はあふひ、霍は一種の草、しろをはら。
【五五】苾芬。かうばしき貌。

し。日に善根を損して惡法を增益す。是の故に說いて曰く、『惡に近づけば自ら陷溺し、』と。『善を習へば名稱を致す。』とは勝れたる人の習ふ所は日に名稱有り。猶月の盛滿ならんと欲し、日に光明有つて遠く無外を照すが如し。修善の人も亦復是の如し。善名廣く著はれ、名稱遠く布く。是の故に說いて曰く、『善を習へば名稱を致す。』と。『妙者は恒に自ら妙なり。』とは所行專ら正しく無上道を修す。猶須陀洹家の仰いで斯陀含道を修し、斯陀含家の仰いで阿那含道を修し、阿那含家の仰いで阿羅漢道を修し、阿羅漢家の轉じて自ら諸善功德を增益するが如し。是の故に說いて曰く、『妙者は恒に自ら妙なり。』と。『此は身の眞正に由る。』とは當に巧便を求め、諸の功德を求めて其の身を瓔珞すべし。意中に名稱の廣布するを得んと欲する者、諸天世人の敬待を得んと欲するものは當に自ら謹愼して塵勞を興さず、[五二]道故を懷ひ來るべし。

（六）善者は終に以て善し。　斯は善に親近するに由る。　智慧を最上と爲せば、　禁戒永く寂滅せん。

『善者は終に以て善し。斯は善に親近するに由る。』とは智人は智を求め、以て其の聖道を成ず。猶紫磨眞金の內外清徹にして器皿を造作するに成就せざる無きが如し。智者も亦爾り。賢聖相脩ひ、教を留めて世に在らしめば、永世不朽ならん。是の故に說いて曰く、『善者は終に以て善し。斯は善に親近するに由る。』と。『智慧を最上と爲せば、禁戒永く寂滅せん。』とは夫れ人、行を習ふには先づ當に上人の法を求むべし。是の故に說いて曰く、『智慧を最上と爲せば、禁戒永く寂滅せん。』と。

（七）魚の湍に聚湊せるを、　人の貪著して取れば、　意著して臭を覺えざるが如く、　惡を習ふも亦是の如し。

『魚の湍に聚湊せるを、人の貪著して取れば、』とは猶群魚の一處に集聚して穢汚近づき難きも、人の意貪著すれば、臭穢を顧みざるが如し。愚人、意に執して謂つて甘美と爲すことも久々には身に

【五二】道故。古佛の道。

更に衆生の佛を出づる者無し。佛を除いて以て更に衆生の辟支佛より出づる者無し。佛、辟支佛を除いて更に衆生の聲聞より出づる者無し。其の信心有りて、此の三に向ふ者は究竟に至ることを得て、[五一]三塗厄難の處に墮ちず。是の故に說いて曰く、『恒に正法會に與せよ。』と。

（四）行路には防慮を念ぜよ。　持戒多聞の人は、　無量の境を思慮し、　彼の善き言教を聞いて、各各、差別を知る。

『行路には防慮を念ぜよ。』とは群徒と途に在らば、言を出すに防慮せよ。曠野の中、諸の鬼神多し。若し惡語を論ぜば、神は卽ち便を得、善を論說せば、鬼神は營護せん。至到する所の處にて惡人に遇はず、亦復人を劫盜する者に逢はざらん。是の故に說いて曰く、『行路には防慮を念ぜよ。』と。『持戒多聞の人は、』とは佛の言教を受けて、心首を去らざるなり。佛の所說の如し。『諸比丘に告げたまはく、當に三昧を修し、正しく定意を受け、若しは行、若しは坐に違失せしむること無くんば、便ち諸天鬼神の爲に營護せられん。』と。然る所以は皆正しき佛の言教を承受するに由る。是の故に說いて曰く、『持戒多聞の人は、』と。『無量の境を思慮し、』とは晝夜に坐禪・誦經・戒聞・施慧を思慮するなり。是の故に說いて曰く、『無量の境を思慮し、』と。『彼の善き言教を聞いて、各各差別を知る。』とは。如し彼の學人、彼の善き教を聞いて、意錯亂せず、文句相應せば、便ち道果たる須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を成じて、善根を增益し、無爲道に至らん。是の故に說いて曰く、『彼の善き言教を聞いて、各各、差別を知る。』と。

（五）惡に近づけば自ら陷溺し、善を習へば名稱を致す。　妙者は恒に自ら妙なり。此は身、眞正なるに由る。

『惡に近づけば自ら陷溺し、』とは如し復人有り、惡友に親近せば、但日に損すること有つて究竟に至らざらん。猶半なる月日は闇冥有つて大明有ること無きが若し。惡友に親近するも亦復是の如

【五一】三塗。三途とも書く。火塗・刀塗・血塗。卽ち地獄・餓鬼・畜生の三惡道に同じ。

として威儀を失せず、和顔悦色もて先づ笑ひ、後に言つて人意を傷らず。是の故に說いて曰く、『信有つて慳嫉無く。』と。『精進にして信に多聞なれば、』とは人の修行は精進を上と爲す。況んや復多聞・戒聞・施慧を廣學採取して一切に廣布し、無爲に安處し、道場に寧處して己が所見を以て前人に演示するをや。是の故に說いて曰く、『精進にして信に多聞なれば、』と。『智者は敬待せられ、』とは常に當に及ばざるものに親近承受すべし。[四二]戒身を具足せざる者をして具足せしめ、[四三]定身・[四四]慧身・[四五]見身・[四六]見解脱身を具足せざる者をして具足せしむべし。是の故に說いて曰く、『智者に敬待せられ、』と。『賢聖は以て樂と爲す。』とは夫れ人、修行して賢を追ひ、聖を逐つて、寒苦も辭せず、正しく百千億の難に遭遇するも、能く身命を捨てんには斯かる苦に遭ふと雖も、其の意に介せざるなり。是の故に說いて曰く、『賢聖は以て樂と爲す。』と。

(二)[四七]惡知識に親しまず、　[四八]非法會に與せず、　善知識に親近し、　恒に[四九]正法會に與せよ。

『惡知識に親しまず、』とは彼の修行人、惡知識に遭へば、日に惡行を増し、地獄・餓鬼・畜生に墮入す。正しく行淸く意潔きものも、惡に隨はゞ、其の素を染められん。猶人有つて犬・猪・羊を愛して心に遠離せず、猪犬も隨逐して亦相離れず、猪犬の樂む所の糞除を上と爲し、[五〇]厠溷を浴池と爲し、共に相染汙するが若し。惡知識に親しむ者も亦復是の如し。共に相追逐して終に以て善きこと無し。是の故に說いて曰く、『惡知識に親しまず、』と。『非法會に與せず、』とは非法人は五の無救罪あり。無戒・無信・無聞・無慧・無施なり。此の如きの人には親近すべからず。其の追逐せらるゝ有つて以て伴と爲る者は惡趣に墮入し、善處に至らざらん。是の故に說いて曰く、『非法會に與せず、』と。『善知識に親近し、』とは學ぶこと日に新たなること有るも、言を出すに柔和にして心意相應し、設ひ之に造ること有るも、人意を傷らず、先づ笑つて後に言ひ、文句相應せよ。是の故に說いて曰く、『善知識に親近し、』と。『恒に正法會に與せよ。』とは所謂正法會とは佛・辟支佛・聲聞是れなり。

【四二】戒身。佛の法身を成ずる五種の功德の第一。佛は身口意三業の過非を離れたれば戒身といふ。
【四三】定身。佛の心が寂靜にして妄念無きこと。
【四四】慧身。佛の智慧圓明なること。
【四五】見身。普通は解脱身となれり。
【四六】見解脱身。佛の解脱せしを如實に知見すること。
【四七】惡知識。惡友の義。知識とは朋友、我に知られ、彼に識らるゝ間柄なり。
【四八】非法會。非法卽ち惡を事とする會衆。
【四九】正法會。佛や佛に從ふものゝあつまり。
【五〇】厠溷。かはや。

ず、亦復佛法の聖衆、眞如の四諦なる苦集盡道を信ぜざれば、財を積んで天に至るも、猶恃怙すべからず。壽を捨つるの日、財は自ら隨はず。皆今身に惠施せざるに由るが故に、功德を造り畢らざるが故に、新を造らざるなり。猶鳥有つて肉食を嗽食するが如し。山樹に葉有り、其の像、肉色なるを晝夜に伺捕せんと頸を延して仰望せり。樹に在れば、像、肉なれども、墮つれば、卽ち葉爲り。迷惑に纒はれ、自ら覺寤せず、是の如くにして息まずんば、命を彼に喪はん。然る所以の者は皆貪心自ら改更せざるに由るが故なり。此の間、語を聞くや、傳へて彼に至り、設し彼より聞かば、復此に傳へ、彼此をして鬪亂せしめ、成就せざらしむ。意中に嫉を興せば、轉じて塵垢を生ぜん。是の故に說いて曰く、『無信にして憎嫉を懷き、彼此の人をして鬪亂せしむるは、』と。『智者の屛棄する所なれども、』とは智人は禮節を知り、嫌を避け、疑に遠ざかり。惑亂の中に處らず、彈指の頃も與に事に從はず。況んや當に竟に至るまで、與共に遊ばんや。所謂智者は古を明らめ、今を知り、衆事に博通し、未然を防慮す。所行左ならず、心口相應、言に失有ること無し。深義を分別するも、意到錯せず。一句義より無數を演布す。愚者は惑はさる。是の故に說いて曰く、『智者の屛棄する所なれども、』と。『愚は習つて以て樂と爲す。』とは設し復人有り、善心もて勸諫し、童蒙を誘進し、之に訓ふるに道を以てし、道門を見せしむるも、其の敎に從はず、反つて更に疑惑し、地獄を以て堂室と爲し、後世の殃禍の根を慮らず、惡業を敎行して善敎に從はず、轉じて復地獄・餓鬼・畜生の中に墮落す。是の故に說いて曰く、『愚は習つて以て樂と爲す。』と。

（二）信有つて憎嫉無く、　精進にして信に多聞なれば、　智者に敬待せられ、[四一]賢聖は以て樂と爲す。

『信有つて憎嫉無く、』とは如し復人有り、篤く佛・法・聖衆を信じ、至意に苦集盡道を信解し、諛諂を懷かず、心意柔軟にして諸の梵行人に承事敬待し、晝は則ち勤受し、夜は則ち經行す。孜孜汲汲

【四一】賢聖。賢とは惡を離れ善に和するも未だ眞智を發し道理を證しない凡夫位のもの、聖は證理斷惑して凡夫の性を捨てしもの。

三には[二七]迦詩、四には[二八]拘薩羅波斯王、五には[二九]素摩、六には[三〇]須羅吒、七には惡生王[三一]抜蹉、八には[三二]抜羅憂塡王、九には[三三]遏波、十には[三四]阿婆檀提憂陀羅延王、十一には[三五]鳩留、十二には[三六]般遮羅阿拘嵐王、十三には[三七]椽難、十四には[三八]耶般那、十五には[三九]劍桴（本十六を闕く）。此の十六大國（の人）は萬機を苞識し、衆事惑はず、衆辯捷疾にして學、煩重ならず、妙義に暢達す。本末を尋究して演布すること無量なれば、之を尋ぬるも窮め難し。斯れ十六大國の中に出づる夫の修行人も能く施さず。心に妙義を仰慕する者は但だ當に遊行して十六國を歴べし。威儀禮節、自然に修成し、師よりも加へられず、[四〇]模則も有ること無し。』と。

（九）若し人、神祀に禱り、歲を經て其の福を望むも、彼は四分中に於て、亦未だ其の一をも獲ざらん。

『若し人、神祀に禱り、歲を經て其の福を望むも、』とは外道異學の顚倒邪見を想ひ、愚に執して悟らず、神祠を祭祀して乃ち一歲を經、其の中に生民の貨を費耗すること亦計ふべからず。若干種の甘饌飮食を以て火に焚燒し、謂うて福を獲ると爲せども、反つて更に禍に遇ふ。斯は愚に執して自ら改更せざるに由る。今に至つて死するも後に闇冥に入り、大光智慧の明を覩ざらん。是の故に說いて曰く、『四分中に於て、亦其の一をも獲ざらん。』と。是の故に聖人は之に訓ふるに漸を以てし、之を導くに路を以てし、愚惑を獲誘して安穩處に至る。須臾も善を行へば、彼の一年に勝る。

親品第二十六

（一）無信にして憎嫉を懷き、彼此の人をして鬪亂せしむるは、智者の屛棄する所なれども、愚は習つて以て樂と爲す。

『無信にして憎嫉を懷き、彼此の人をして鬪亂せしむるは、』とは夫れ人、世に在つて信心固から

【二七】迦詩（Kāśi）。迦尸。波羅奈國のこと。現今のベナレス。
【二八】拘薩羅（Kośalā）。憍薩羅、現今のオウド州。
【二九】素摩。長阿含の蘇摩婆國か。
【三〇】須羅吒。不明。大集月藏經にも見ゆ。
【三一】抜蹉。跋沙（Vaṅśa）か又は婆蹉（Maccha）か。
【三二】抜羅。長阿含の末羅（Malli）か。
【三三】遏波。阿濕波（Aśvakā）か。
【三四】阿婆檀提（Avanti）。長阿は阿般提。
【三五】鳩留（Kuru）。居樓。現今のデリー市附近。
【三六】般遮羅（Pañcāla）。
【三七】椽難。閻牟那河畔の國か。
【三八】耶般那。雜阿含二十七に出づる耶槃那（Yavana）か。
【三九】劍桴（Kamboja）。劍浮沙。
【四〇】模則。のりてほん。

食し、由ほ忿怒を懐いて二親にすら向ふ。豈當に慈の衆生に加被するもの有るべけんや。此の事は然らざるなり。是の故に說いて曰く、「慈心を以てせざる者は十六に一をも獲ず。」と。衆生を愍れまざるは十六に一をも獲ず。猶境界方域、其の中の衆生の名號、姓字稱計すべからざるも、若し慈定に入るの士有らば、中に於て教化し、窮を周はし、乏を濟つて好醜を擇ばず、亦想を興さず、斯は施與すべし、斯は與ふべからずと平等無二にして一にして異らざるが如し。乃ち眞の施と謂ふべし。是の故に說いて曰く、「慈心を以てせざる者は十六に一をも獲ず。」と。或は國土有つて其の衆生を稱して名けて蠕動の類と曰ふ。中に於て勇猛にして勤勞を辭せざるは彼の國界に適いて、所須を供給して闕減せしめず。是を施心と謂ふ。蠕動の類は神祇を以てせざるが故に十六に一をも獲ず。正法を以てせざるが故に衆生自ら隊墮し、外道異學[二一]尼犍子等、自ら稱して尊と爲す。[二二]鐵鍱を以て腹まき、世間を跨行す。自ら相謂つて曰く、「此の諸の釋種沙門道士は、世の狂夫なり。[二三]露頭左衽にして自ら稱して尊と爲す。我等觀察するに正に是れ不祥の應なり。世人、狂惑して何爲れぞ尊事するや。若し衆生有つて此の人に施さん者は後に穢惡不淨の報を得ん。夢に之を想見しても、寤れば惡に遇ふ。況んや當に道を行かんとして與共に相見るをや。」と。是の故に世尊、諸比丘に告げたまはく、「能く正法に於て信心不斷なれば、百千の勤苦衆難に遭遇するも、心變易せず、一意信向なれば、倒見に習はれず。爾るを乃ち名けて如來の正法と曰ふ。其れ不信なる者は十六分に於て未だ其の一をも獲ず。其の信心有り、正法に向ふ者は其の福無量にして稱計すべからず。百倍、千倍、萬倍、巨億萬倍にして譬喩を以ても比と爲すべからず。何を以て名けて「十六分の一をも獲ず」と曰ふか。十六を論ずる所以は十六と謂ふは[二四]十六大國を謂ふなり。此の閻浮境の仁義の所居は此の十六大國を出づること有ること無し。古に博く、今に攬つて、深奥を敷演し、隨順決斷して永く孤疑を除いて猶豫無からしむ。十六國は其の號を名けて、一に[二五]鴦伽と爲し、二には[二六]默偈陀洴沙王、

【二一】尼犍子。前巻一八、二九六頁を見よ。

【二二】鐵鍱。鐵の薄き板金。

【二三】露頭左衽。頭を露出し、左まへ（夷狄の風）。

【二四】十六大國。佛時代の印度の列國なり。其の名、諸書一致せず。長阿含巻五、仁王經下等參照。

【二五】鴦伽（Angā）。摩揭陀國の東にあり。瞻波城を都とす。

【二六】默偈陀（Mng·dhā）。摩揭陀。現今のパトナ市の南。

にも篤く佛を信じて、意移易せざれば、其の福、量り難く、稱計すべからず。譬喩を以ても比と爲すべからず。福の至るは冥報にして無形無像なり。忽然として自ら至り、功祚無窮なり。是の故に說いて曰く、『彼は佛を信ぜざれば、十六に一をも獲ず。』と。

要を取つて之を言はゞ、彼、法を信ぜざるときは十六に一をも獲ず、億千萬劫時に法の聲を聞くのみ。所謂法とは滅盡泥洹是れなり。契經の所說の如し。『諸比丘に告げん。今當に汝らの與に三つの第一尊を說かん。一には佛を第一の尊と爲し、二には法を第一の尊と爲し、三には僧を第一の尊と爲す。』彼らいはく、「云何か佛を第一の尊と爲す。」「諸有衆生の類は無足・有足・一足・二足・四足より衆多の足に至るまで、有色・無色・有想・無想乃至非想・非無想のうち、如來を中に於て尊と爲し、最と爲し、上有ること無しと爲す。是を以て比丘よ、其れ衆生有つて篤く佛を信ずる者を第一の尊を信ずると爲す。第一の尊を信ずるを以て、便ち第一の福を受く。第一の福を受くるを以て、便ち人天第一の豪尊に生ず。是を謂つて名けて、「佛を第一の尊と爲す。」と曰ふ。彼らいはく、「云何か法を第一の尊と爲す。」「所謂法とは有爲法、無爲法なり。滅盡無欲、無生滅の法、泥洹の法を尊と爲し、最と爲し、上有ること無しと爲す。其れ法を敬ふ者を第一の尊を敬ふと爲す。第一の尊を敬ふを以て、便ち第一の福を獲、第一の福を獲るを以て、便ち天上第一の豪尊に生ず。是を謂つて名けて「法を第一の尊と爲す。」と曰ふ。彼らいはく、「云何か僧を第一の尊と爲す。」「諸有大衆・大衆・大會・翼從の徒のうち、如來の聖衆を尊と爲し、最と爲し、上有ること無しと爲す。是を以て比丘よ、其れ衆生有つて篤く僧を信ずる者を第一の尊を(信ずると爲す。)第一の尊を信ずるを以て、便ち第一の福を受く。第一の福を受くるを以て、便ち天人第一の豪尊に生ず。是を謂つて名けて「僧を第一の尊と爲す。」と曰ふ。

「慈心を以てせさる者は十六に一をも獲ず。」衆生の類、晝夜に毒を含み、瞋恚に纏はれ、共に相茹

【二〇】茹ふ。貪り食ふ。

『卿、前に山に在ること百年、火に事へて諸神を祭祀せしが、唐しく其の功を勞して究竟に至らざりき、汝、今乃ち眞道の處を知れり。如かず、須臾の間、行を執り自ら修纂せんには。世人、愚に執して、死に至るも剋たず。百年、火に事へて自ら覺悟せず、愚を抱き、冥に投じて自ら改むること能はず。若し能く之が非眞たるを覺知して、恒常に思惟せば、病の興る所、爲めに從來する所、爲めに從去する所を知つて、悉く非眞實の法を了せん。若し復他より衣被・飲食・床臥具・病瘦の醫藥を受くるも、便ち能く消化して失ふこと有らしめず、[一七]名華・擣香・雜香・繒綵・幢旛を承事供養せられん。是の如きの福、稱計すべからず。百歲、火に事へんも、須臾彈指の頃、一ら慈心を行ぜんには如かず。其の福は最尊にして上有ること無しと爲す。稱し難く、量り難く、譬喩を以ても比と爲すべからず。猶芥子の仰いで須彌に比し、牛跡の水の海と校量し、爪上の末塵の自ら勝地と稱し、螢火の蟲の日と明を競ふが如し。慈心の德も其の事此くの如し。況んや復百年、修德具足せるをや。此の福に乘ぜば、百千劫を經るも、未だ曾て墮ちて凡夫地に墮在せず、衆人、仰望して敬奉せざること莫けん。皆前世に行を積みしに由つて致す所なり。是の故に說いて曰く、『須臾にも一ら慈心を行ぜんには如かず。』と。

(八)月より其の月に至るまで　愚者は[一八]摶食を用ふ。　彼は佛を信ぜざれば、[一九]十六に一をも獲ず。

『月より其の月に至るまで、愚者は摶食を用ふ。』とは或は生類有つて、飯食に貪著し、以て其の形を養ひ、後世の殃禍の災を慮らず。『四大の體は其の性同じからず。神、其の中に處つて是非を識別す。』と。智者は眞を識るも、愚者は倒見し、今世後世を知らず。善惡の行、展轉して三途八難を出づる期有ること無し。是の故に說いて曰く、『月より月に至るまで、愚者は摶食を用ふ。』と。『彼は佛を信ぜざれば、十六に一をも獲ず。』とは若し衆生有つて、一日、半日、一時、半時、彈指の頃

【一七】名華。名高き立派な花。擣香。鼻をうつ如き名香。雜香。種々雜多の香。繒綵。いろどれる美しき絹。幢旛。佛堂にかざる旗。

【一八】摶食(Piṇḍa)。又舊譯に團食といひ、新譯に段食といふ。まるめたる常用の食物。

【一九】十六。滿數を表はす。

施し悋惜する所無し。

（七）※復壽百歲なりと雖も、山林に【一四】火を祭祀したらんには、如かず、須臾の間も、行を執り自ら【一五】修纂せんには。

『復壽百歲なりと雖も、山林に火を祭祀したらんには、』とは昔、梵志有り。形を勞し、體を苦しめ、曠野深山の中に在つて、火神を祭祀す。時に隨つて瞻拜して其の火に違はず、淨薪を選擇し、好肥を採取し、種々の香を燒き、以て供養に用ひ、恩福を得んことを望めり。時に彼の梵志、退いて自ら念言すらく、「我、此の山に在つて奇術を習學し、此の火に念事し、以て百年を經たり。今當に自ら試みて火の恩福を知るべし、若し恩福を識らば、證驗當に見つべし。設し爾らざれば、復祭祀を爲さんや。」と。時に彼の梵志、意に遠慮あらず。卽ち兩手を以て前んで熾火を捧げたれば、尋で手臂を燒き、疼痛言ひ難し。梵志、自ら念へらく、「吾、火を祭祀して爾許年かを經たり。唐しく其の功を勞し、損して益無し。是を將つて我が身、此の患苦を招けり。」と。爾の時、彼の山に學道の比丘有り。相去ること遠からず。知つて問うて曰く、『梵志、當に知るべし。火は體熱く、恩養を尊卑高下に別たず。卿、知らんと欲せば、吾に聖師有り、三界の獨尊なり。行くや【一六】虛を蹈んで罣礙する所無く、坐するや光を揚げて十方に照徹す。寧ろ卿と與に彼に往いて親しく覲るべし。備さに其の深奧の法を聞くことを得て、此岸より彼岸に至るを得ん。』と。梵志、聞き已つて、心開け意解け、便ち道人と往いて佛の所に至り、頭面もて足を禮し、一面に在つて立つ。爾の時、世尊、彼の梵志の應に度脫を得べきを觀たまひ、大衆中に在つて、此の偈を說きたまはく、

復壽百歲なりと雖も、山林に火を祭祀したらんには、如かず、須臾の間も、行を執り自ら修纂せんには。と。

爾の時、梵志、豁然として心解け、諸の塵垢盡き、法眼淨を得たり。佛、梵志に告げたまはく、

※ 法句經教學品に類似の偈あり。

【一四】 火を祭祀す。彼等の一派を事火外道又は事火婆羅門といふ。

【一五】 修纂。自らをとゝのへ修行すること。

【一六】 虛。虛空。

『如かず、一日の中に、生滅の事を曉り了らんには。』と。

要を取つて之を言へば、「痛の從つて生ずる所を觀よ」と。夫れ人、世に處して痛の滅すると異ることを知らざれば、比丘と爲ると雖も、沙門の行に達せざらん。是の故に說いて曰く、「痛の從つて生ずる所を觀よ。」と「當に有漏の盡くることを觀ずべし。」とは人の行を習ふや、有漏に達せざれば、便ち三界五趣に留滯して生死に流轉し、出期有ること無かるべし。智者は行を習ふに、此の有漏を觀じ、從つて生ずる所を知り、從つて滅する所を知る。生ずるも、生ずる所以を知らず、滅するも滅する所以を知らざれば、漸漸に無漏の境界に至るを得んや。「復當に不動の行跡を觀察すべし。」とは若し復人有つて不動の行跡を觀察する能はずんば、便ち自ら墮落して生死に墜ちん。沙門に處ると雖も、沙門の行に非ず、婆羅門に處ると雖も、婆羅門の行に非ず。四事の因緣に由つて法を深奧にする者、若しは復學人と雖も、不動の行跡を觀察了知すれば、意傾動せず、亦移易せず、漸漸に無爲の岸に至登することを得ん。「復當に不死の行跡を觀察すべし。」とは如し人、世に在つて死生を知らざるも、死すれば、爲めに神從り、風去り、火冷め、魂靈散じ、身體侹直し、復中る所無けん。然も此かる習道の人法衣を荷服し、鬚髮を剃除し、三法衣を著くれば、死の死たるを、生の生たるを觀察する能はざらんや。亦復清淨梵行を修する能はざらんや。所謂不死の行跡とは滅盡泥洹なり。是を以て無爲の處、不生・不老・不病・不死に入中するを得ば、澹然快樂ならん。是の故に說いて曰く、「當に不死の行を觀ずべし。」と。「復當に清淨なる行跡を觀察すべし。」とは道足清淨にして穢濁に非ければ、所學の道も能く垢を去り、垢を習ふこと非し。所學の次、當に天の形象を觀察すべし。法は覩見すべからざれば、上人の跡を習へ。一切諸法に於て最上最尊にして能く及ぶ者無し。所謂滅盡泥洹是れなり。行人、甘露の行跡を觀察せば、饑渴の想無く、煩熱の想無し。其の覩ざる者は永く生死に墜ちて本に達せず、甘露を獲ること無し。福業具足せば、已を以て彼に

※ 以下の文に偈の脫落等あるべし。
【一】 痛。苦なり。
【二】 四事。衣服・飲食・臥具・醫藥。
【三】 侹直。こはばつてまつすぐにのびること。
※ 前の偈の「復當に不死の行跡を觀察すべし。」と異る。

無爲大道の處に至らず。自ら道に迷ひ、轉じて他人をして生死に沒在せしむ。若し檀越より飲食、牀臥具、病瘦醫藥を受くるも、消化する能はず。生より死に至つて地獄・餓鬼・畜生に墮す。人と爲るを得ると雖も、〔七〕邊地・佛後・〔八〕世智辯聰の〔九〕八難の處なり。然る所以は皆前身に德を積まざりしに由る。是の故に說いて曰く、『復壽百年なりと雖も、懈怠して精進せざれば、』と。『如かず、一日中、精進して怯弱ならざるには。』とは或は世に人有り。勇猛精進にして、世の非常なることを解し、人身の得難く、佛世の遇ひ難く、生れて〔一〇〕中國に値ふことも亦復遭ひ難く、諸根の完具することも亦復得難く、賢聖法の中に於て沙門と作るを求むることも亦得べからず、眞の法言を聞くことも復得べからず。有智の人、能く此れを解せば、當に精進を念じて道果を求むべし。泥洹に至るを得ること亦復難からず。已に以て辦具せば、便ち能く無漏の法身を成就せん。是の故に說いて曰く、『如かず、一日中、精進して怯弱ならざるには。』と。

（六）復壽百歲なりと雖も、　生滅の事を知らざれば、　如かず、一日の中に、　生滅の事を曉り了らんには。

『復壽百歲なりと雖も、生滅の事を知らざれば』とは、人の世間に在つて無明自ら纏ひ、能く解くことを得ず、百年を計ふる中に罪を積むこと量り無きあり。亦復生ずる者と滅する者とを知らず、出家して道を爲むるを得ると雖も、如來法中に在つて生滅を了せざれば、恒に凡夫の地に在つて無爲に至らざらん。斯れ比丘沙門の業に非ず。如來の藏に遠く、佛の篋に近からず。是の故に說いて曰く、『復壽百歲なりと雖も、生滅の事を知らざれば、』と。『＊如かず、一日の中に、生滅の事を曉り了らんには。』とは人の世に在つて諸法の一一虛無なるを觀達するに、生ずる者は生ずる所以を知らず。滅する者は滅する所以を知らず。一一之を別つて能く根本を知れば、死に臨むの日も亦畏懼せず、怖難する所無し。所生の處は神識も錯らず、賢に遭ひ、聖に遇ひ、法を聞いて度を得。是の故に說いて曰く、

【七】邊地佛後。八難の第八。佛に遠く離れ、佛出世の世に後るること。
【八】世智辯聰。八難の第七、世間の人の邪智なるが、只外道の經書のみを習つて、出世の佛法を知らざること。
【九】八難。八無閑處ともいふ。(前卷一〇二頁見よ)。
【一〇】中國。世界の中央に位するよき國。

＊ 原本には「不如生一日」とあれど、今は一本に從ひ、偈の如く「不如一日中」として譯す。

(三)復壽百年なりと雖も、　戒を毀ち、意定まらざれば、　如かず、一日中、供養持戒する人には。

『復壽百年なりと雖も、戒を毀ち意定まらざれば、』とは夫れ犯戒の人は三事なる坐禪・誦經・佐助を護らず。斯くの如きの類には親近すべからず。久しく世に在りと雖も、積惡無量なり。死して地獄に入り、無數の苦を受く。【五】火車・爐炭・刀山・劍樹なり。畜生・餓鬼も亦復是の如し。是の故に說いて曰く、『復壽百年なりと雖も、戒を毀ち意定まらざれば、』と。『如かず、一日中、供養持戒する人には。』とは持戒する人は修行し、意を定めて、一日の功德、無數無量なり。譬喩を以ても比と爲すべからず。久しく世に處して德を積むこと無量なり。若し天に生ぜば、自然に福を受けん。是の故に說いて曰く、『如かず、一日中、供養持戒する人には。』と。

(四)壽百年なりと雖も、　慧無く定ならざれば、　如かず、一日、黠慧にして定有るには。

『壽百年たりと雖も、慧無く定ならざれば、』とは世に多く人有るも、慚愧を知らざれば、六畜と別たず。猶駱駝・騾・驢・象・馬・猪・犬の屬の如く尊卑高下有ること無し。人の無智なるも、其の譬亦爾り。愚闇に纏裹せられて其の明を知ること莫し。是の故に說いて曰く、『壽百年なりと雖も、慧無く定ならざれば、』と。『如かず、一日、黠慧にして定有るには。』とは黠慧の人は深く法典に入り、一句義より百千義に至り、思惟反覆して以て難しと爲さず。是の故に說いて曰く、『如かず、一日、黠慧にして定有るには。』と。

(五)復壽百年なりと雖も、　懈怠して精進せざれば、　如かず、一日中、　精進して怯弱ならざるには。

『復壽百年なりと雖も、懈怠して精進せざれば、』とは如し世に人有り。意恒に懈怠なれば、所願成ぜず。既に自ら墮落して復他人をして生死に沒在せしむ。自ら陷溺する者は【六】五分法身を失ひ、

【五】火車等。地獄の苦具によつて別けし種類なり。

【六】五分法身。無學位卽ち阿羅漢及び佛が自體として備ふる五種の功德、一に戒身、(身は聚又は蘊ともいふ)三業が一切の過非を離るゝこと。二に定身、心寂靜にして一切の妄念を離るゝこと。三に慧身、正見正智もて法性に達すること。四に解脫身、身心一切の繋縛を脫すること。五に解脫知見身、已が實に解脫せるを知ること。

卷の第二十二

廣演品第二十五

(一)*千章を誦すると雖も、(一)不義ならば何ぞ益せん。寧ろ一句も解して、聞かば道を得べし。

『千章を誦すると雖も、不義ならば何ぞ益せん。』とは夫れ人、世に在つて多く誦し、廣く學ぶも、義理を曉らず、亦復味義・句義を了せざれは、猶人有つて多く草木を負ひ、百千擔に至つて正に勞苦すべけんも、時用に益無きが如し。是の故に說いて曰く、『千章を誦すると雖も、不義ならば何ぞ益せん。』と。『寧ろ一句も解して、聞かば道を得べし。』とは昔、士有つて財貨を貯ふること多く、諸の穀食に饒かなるが、意に遠遊せんことを欲し、便ち家穀を以て之を糶つて寶に易へ、珍を積むこと量り無く、後復珍寶を以て好銀に易ふること多く、意に復多きを嫌ひ、便ち好銀を以て紫磨金に(二)轉博し、意に復多く持てるを嫌ひ、好金を以て無價の(三)如意摩尼寶に轉じ所願畢果して終に差違せざりしが如し。此れも亦是くの如し。學問すること多しと雖も、句義を解せざれば、一義を解する者の所獲、必ずや剋たん。是の故に說いて曰く、寧ろ一句も解して聞かば道を得べし。』と。

(二)千章を誦すると雖も、法義を具足せよ。一法句を聞くも、從つて意を滅すべし。

『千章を誦すると雖も、法義具足せよ。』とは人、學を修むること多くとも、義味を成就せよ。然も復義趣を思惟する能はざれば、便ち自ら墜落して(四)究竟に至らざらん。是の故に說いて曰く、『千章を誦すると雖も、法義を具足せよ。』と。『一法句を聞くも、從つて意を滅すべし。』とは世に多く人有り。博學多聞にして能く一句を思つて百千義に至り、義義相次いで、其の緖を失はざれば、漸を以て無爲の道に至るを得ん。是の故に說いて曰く、『一法句を聞くも、從つて意を滅すべし。』と。

＊ 法句經述千品に類似の句あり。

【一】 不義。意義を理解せざること。

【二】 轉博。とりかふること。

【三】 如意摩尼寶(Cintāmaṇi)。摩尼は寶珠なり。之より意の如く欲するものを出すを得るを以てかくいふ。

【四】 究竟。涅槃のこと。

劫至劫にして稱記すべからず。契經の所說の如し。「衆生の地獄に入る者は大地の塵土よりも多し。如し我れ今日三界を越過し、天眼を以て衆生の類を觀るに蜎飛蠕動、共に相傷害して[102]竟已有ること無し。猶陶家の脚に輪轉を蹴つて其の坏器を成ずるに、或は輪上に壞する者、或は地に在つて壞する者、或は陶に入つて壞する者あり。人も亦是の如し。是の故に學人は纂修せんことを念ふべし。」と。又復經を引かんに、「吾れ天眼を以て衆生を觀るに、天に生ずる者は爪上の土の如く蓋し言ふに足らず。」と。是の故に說いて曰く、「智者は其の道を獲。」と。「天に處つて久しく遊觀す。」とは若し衆生有りて久しく天に生ずる者は後に天に生ずるより三事に勝る。何をか三事と謂ふ。一には天壽、二には天色、三には福祿なり。是の故に說いて曰く、「天に處つて久しく遊觀す。」と。「天に處つて久しく福を受く。」とは共に相娛樂し、東を視て西を忘るゝなり。是の故に說いて曰く、「天に處つて久しく福を受く。」と。宗族中に處在して日の雲を貫くが如く、出でゝは父母兄弟姉妹の爲めに、中外に愛敬せられ、諸の一切の縛を斷じ、盡く能く一切諸の結使を斷じ、永く盡きて餘無く、縛著愛染、悉皆除棄す。是の故に說いて曰く、「盡く能く一切諸の結使を斷じ。」と。憂に處るも、已に憂心あらず。是非を解し、無常を解知す。恩愛別離は世の常法なり。樂有れば必ず苦あり、生ずれば當に死すること有るべく、生ぜざれば則ち死すること無し。豈避くべけんや。是の義を以て憂を推して是れを誰か樂の從來する所と爲さんや。是の故に說いて曰く、「憂に處るも、憂心無し。」と。死灰の如く澹然無爲にして盡く一切の惡趣を滅せよ。惡趣とする所以は地獄・餓鬼・畜生・邊地夷狄の中を亦惡趣と名く。是の故に說いて曰く、「一切の惡趣を滅せよ。」と。一切の苦惱を脫せよとは八苦の根を脫するなり。[103]生苦・老苦・病苦・死苦・[104]怨憎會苦・[105]恩愛別離苦・[106]所欲不得苦、要を取つて之を言へば、[107]五盛陰苦なり。行者は中に於て此の衆苦を脫して泥洹を第一と爲せ。無爲無作にして衆變有ること無し。是の故に名けて泥洹と爲すなり。

くるも劫は盡きずと。されば從劫至劫とは久遠の者から永遠の未來にといふ程の意。

【一〇二】竟已。終極。をはり。

【一〇三】生苦。老苦・病苦・死苦。是等を四苦といふ。

【一〇四】怨憎會苦。うらみにくむ者とも會はざるべからざる苦。

【一〇五】恩愛別離苦。恩愛の者とも別離せざるべからざる苦。

【一〇六】所欲不得苦。欲求する所のものを得る能はざる苦。

【一〇七】五盛陰苦。五陰盛苦ともいふ。五陰は身心の總體、其の五陰の生長に關する熾盛なる欲苦。

門と謂ふ。願ふ所の者は四事の供養なる衣被・飲食・床臥具・病瘦醫藥をも得ん。是の故に說いて曰く『已に以て降伏せらるゝを以て、智者は其の義を演ぶ。』と。

*要を取つて之を言へば、偈は三句を成す。其の文は一同なり。但「智者は其の法を獲。」との一句を益す。法に謂く二義あり。一は[九四]名字體、義體にして第二は所謂第一義の[九五]四沙門果是れなり。

「智者は其の戒を得。」とは此れ二句なり。戒に二種有り。一を[九六]二百五十戒と名け、二を[九七]無漏身戒と名く。「智者は歎譽せらる。」とは此れ三句なり。此れに亦二義あり。一は俗に歎譽せらるゝもの、二は內藏の爲めに歎譽せらるゝもの。所謂俗とは言語辯才あり、和顏悅色あつて人意を傷らず、其の聞法者、歡喜承受して其の法を樂聞するなり。無漏身戒とは所行左ならず、常に賢聖に遇ひ、八不閑處を離るゝなり。其を見る者有れば、心開け、意解く。共に相告げて其の德を歎說せしむ。「智者は其の名聞ゆ。』とは此れ四句なり。或は學人有つて、俗に其の名聞え、道に其の名聞ゆるなり。「智者は其の樂を獲。」とは樂に二種有り。俗樂と道樂となり。(俗樂とは)俗に在つて其の福德を受け、檀越施主の爲めに、念待せられ、其の供養なる衣被・飲食・牀臥具・病瘦醫藥を受く。道樂とは禪定福・[九八]根・力・覺意・賢聖八道を受くるなり。「智者は其の慧を獲。」とは慧に二種有り。或は俗慧有り、或は道慧有り。所謂俗慧とは[九九]名字聚を分別して滯礙せざるなり。所謂道慧とは須陀洹道・斯陀含道・阿那含道・阿羅漢道を得、諸根具足して[一〇〇]空無相願を得るなり。是の故に說いて曰く、「智者は其の慧を獲。」と「智者は其の心を獲。」とは心とは衆行の本なり。若し心正しからざれば、萬端に流馳し、外は色・聲・香・味、細滑の法に着す。若し能く降伏して心を攝めて亂さざれば、便ち能く無爲の道果を成就せん。然れば彼の行人、其の心意を服せよ。曩昔、心の爲めに惑はされしことを思惟するに、劫數量り難く、生死を經歷せしは皆心に由れり。然れば、我今日心の所爲を覺りたれば、更に新を造つて心の爲めに使はれざらん。「智者は其の道を獲。」とは衆生は流轉すること[一〇一]從

---

* 以後の文に恐らく錯簡脫落あるべし。今は原漢文に從つて譯するのみ。

【九四】名字體、義體。本質そのものに非ざる說明の手段としての名字意義の第二義的のもの。大正藏經に字體とあるは誤植。

【九五】四沙門果。須陀洹果・斯陀含果・阿那含果及び阿羅漢果。前卷二〇頁見よ。

【九六】二百五十戒。比丘の受持すべき戒に二百五十種あり、比丘の具足戒といふ。

【九七】無漏身戒。無漏律儀ともいふ。聖者が無漏純淨智を發し、身自ら防非止惡を爲すもの。

【九八】根・力・覺意。五根・五力・七覺意のこと。

【九九】名字聚。いろ〳〵の事物に對する說明の文字言句。

【一〇〇】空無相願。觀法としての三三昧即ち空三昧・無相三昧・(無)願三昧。前卷一三九頁見よ。

【一〇一】從劫至劫。劫(Kalpa. Kappa.)長時、大時と譯す。通常計る能はざる程の時間。方磐石又は芥子の譬喩あり。四十里の石山を細軟の衣を以て百年に一回磨し、遂に其の石磨滅するも劫は盡きずと。又四十里の大城に芥子を滿たし百歲に一粒を取り、芥子盡

はれん。』と。

（一〇）己の爲めにし、或は彼の爲めにせば、成就せざる有ること多し。其の此れを覺る者有らば、己を正して乃ち彼に訓へよ。

『己の爲めにし、或は彼の爲めにせば、成就せざること有ること多し。』とは人の行を習ふに、己が修めし所の邪見の業を以てし、復己が智を以て彼に授けて此れを學ばしむれば、則ち墜墮して無爲に至らざらん。如し復人有り。己が身を專ら正し、正しきを習つて受行し、己が所見を以て前人に教訓すれば、受くる者、信解して其の功を唐しくせざらん。是の故に說いて曰く、『己の爲めにし、或は彼の爲めにせば、成就せざること有ること多し。』と。『其の此れを覺る者有らば、』とは人の習ふ所を明らめ、當に本行を究むべし。佛の所說の如し。「自ら利する能はずして、焉んぞ能く人を利せん。行を習ふの人は當に念じて〔九〇〕非常・苦・空・非身を觀察思惟すべし。悉く解すれば、彼の無我・空も有るに非ず。豈身有らんや。」と。是を以て聖人は人に軌則を示し、導くに〔九一〕微教を以てし、見を布いて切に禁む。是の故に說いて曰く、『其の此れを覺る者有らば、己を正して乃ち彼に訓へよ。』と。

（一一）身、全うして道を存することを得。爾の時、豈彼を容らんや。已に降伏せらるゝを以て、智者は其の義を演ぶ。

『身、全うして道を存することを得、』とは彼の行を習ふの人、專精刻己なるに由つて、尊と爲し、貴と爲し、〔九二〕成有る無しと爲る。進止行來にも凶虐に逢はず、恒に諸天・世人・天・龍・鬼神・揵沓和・阿須倫・旃陀羅・摩休勒の爲めに供養せられ、其の身を衞護せられて、患に遭はざらしめらる。是の故に說いて曰く、『身、全うして道を存することを得。爾の時、豈彼を容らんや。』と。『已に降伏せらるゝを以て、智者は其の義を演ぶ。』とは如し人深奧の法を纂修し、第一義を得、三界を越過すれば、便ち〔九三〕四意止・四意斷・四神足・五根・五力・七覺意・賢聖八品道を得ん。是れを如來甘露の法

【九〇】非常・苦・空・非身。無常・苦・空・無我ともいふ。佛陀の人を導く常套語、大意は生滅變遷に互る諸行は常住不變に非ず。其故に永久性に執着する心からは凡ては苦と感ぜらる。苦と感ぜらるゝは一切が皆空なるによる。空といふは中心的存在たる自我といふべきものゝ無きに基くとなり。

【九一】微教。幽玄微妙のをしへ。

【九二】成。完成、成就、完全の意。

【九三】四意止等。前卷一四四頁以下を見よ。

を以て自ら莊嚴し、定三昧を念じて諸の有漏を盡くせば、然る後に乃ち一切を訓誨することを得ん。其れ聞法者は自ら歸することを篤信にして狐疑を懷かざれ。是の故に說いて曰く、『當に自ら剋修して、其の教訓に隨ふべし。』と。『己、訓を被らずして焉んぞ能く彼を訓へん。』とは如し人、學を修むるに素より善師無く、將導有ること無ければ、便ち[八六]躓礙を致さん。善師に遇ふ者、能く自ら修責して、必ず所願を獲んとせば、事として剋くせざること無けん。猶善御する馬將の馬の良善に隨つて、善き者は育養し、惡しき者は[八七]加捶し、然る後に乃ち善惡、別有ることを知るが如し。賢愚も亦復異らず。善者は天に生れ、惡者は獄に入り、方當に異なる諸の罪苦を經歷すべし。其の間の艱難何ぞ能く[八八]具宣せん。如し人、出行して、必ず良祐を求めんとせば、意欲する所至、願として獲られざるは無けん。是の故に說いて曰く、

當に自ら剋修して、　其の教訓に隨ふべし。　己、訓を被らずして　焉んぞ能く彼を訓へんと。

(九)自ら剋修せんことを念ぜば、　彼をして信解せしめん。　我已に意專らなれば、　智者に習はれん。

『自ら剋修せんと念ぜば、』とは恒に當に專精にして意をして亂れざらしめ、[八九]十跡行を滅し、身口意、應ずれば、無數の衆生をして渴仰せざる莫からしめん。遲ち所說を聞き、行を修奉せんことを欲す。是の故に說いて曰く、『自ら剋修せんと念ぜば、』と。『彼をして信解せしめん。』とは比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・刹利・婆羅門・長者・居士をして正しき言教を聞かしめ、心意に信樂して終に違逆せざらしむ。是の故に說いて曰く、『彼をして信解せしめん。』と。『我、已に意專らなれば、智者に習はれん。』とは如し人、術を習ふに、意專らなれば、乃ち剋くせん。若し良師を失はゞ、便ち自ら墜落して自ら拔く能はざらん。出入進止、天、世人の爲めに愛敬せらるれば、若し他方異域の刹土に至るも、見る者心歡び、終に中退せざらん。是の故に說いて曰く、『我已に意專らなれば、智者に習

【八六】躓礙。障礙につまづく。

【八七】加捶。むちうつことをなすこと。

【八八】具宣。つぶさにのべる。

【八九】十跡行。十惡業なり。一、殺生。二、偸盜。三、邪淫。四、妄語。五、兩舌。六、惡口。七、綺語。八、貪欲。九、瞋恚。十、邪見。

いて曰く。

天、犍沓和を非とし、　魔及び梵天を非とし、　勝を棄つるを最も上と爲す。　智慧ある比丘の如しと。

(六)*先づ自ら己を正し、　然る後に人を正せ。　夫れ自ら正す者を　乃ち謂つて上と爲す。

『先づ自ら己を正し、然る後に人を正せ。』とは夫れ人、修習して自ら守るを上と爲す。晝は則ち教誡し、夜は則ち經行し、孜孜汲汲として終日懈らず。然る後に衆生を訓誡して大道に安處せしめよ。佛の契經の所說の如し。『佛、均頭に告ぐらく、「如し人已に自ら深泥に沒在せば、復權宜もて彼の溺者を拔挽せんと欲するも、此の事然らず。猶人、戒無くして前人を敎誡することを得んと欲するも、亦此の事無けん。』と。廣說すること契經の如し。如し器完具せば、盛る所漏らず。人も神、[八一]淡泊なれば、深法を受くるに堪え、亦能く一切衆生を敎化す。其の聞法者、信樂せざるは莫けん。是の故に說いて曰く、

先づ自ら己を正し、　然る後に人を正せ。　夫れ自ら正す者を　乃ち謂つて上と爲すと。

(七)先づ自ら己を正し、　然る後に人を正せ。　夫れ自ら正す者は、　智を侵さゞる者なり。

夫れ人、行を習ふには其の功を唐しくせず、其の學を畢竟して、勞苦を辭せざれ。己が所信を平等無二にし、懃ろに精進を加ふれば、日に[八二]新業有らん。明智に附近し、[八三]弊友に親しまざれ。夫れ人、智有るは皆[八四]明哲に由る。人の慧を成ずるは師に非ずんば剋くせず。是の故に說いて曰く、『智を侵さゞる者なり。』と。

(八)當に自ら[八五]剋修して、　其の敎訓に隨ふべし。　己、訓を被らずして　焉んぞ能く彼を訓へん。

『當に自ら剋修して、其の敎訓に隨ふべし。』とは如し人、行を習つて、諸行を備具し、戒・聞・施・慧

* 法句經愛身品に類似の句あり。

【八一】淡泊。心がさつぱりして名利の念なきこと。

【八二】新業。新たなる業蹟。

【八三】弊友。惡友。

【八四】明哲。賢者。

【八五】剋修。つとめおさむること。

『自らに勝つを上と爲す。』とは夫れ人、世に在るや、能く自らを降伏して、精神錯まらざれば、復天・龍・鬼神・揵沓和・阿須倫・迦留羅・旃陀羅の爲めに供養せらる。天魔波旬、[七三]六天を統ぶると雖も、亦其の[七四]便を得ること能はず。是の故に說いて曰く、『自らに勝つを上と爲す。』と。『彼の衆生の如し。』とは彼の修行人の如きは既に自ら學を慕ひ、復能く人をして行を執らしむ。此の心内に[七五]垢を興さず、外塵をも入らざらしむ。乃ち清淨無爲處に應ふ。是の故に說いて曰く、『彼の衆生の如し。』と。『自らを降すの士は、衆行も具足す。』とは人に十名號有つて亦同じからず。或は言く、[七六]衆生とは、我、人、壽命有形の類、皆衆生と名く。斯くの如きの輩、能く自らを降伏して、外想を生ぜざれ。[七七]實諦第一義は無形にして見るべからず。無爲道を欲求する者は自らを降伏せんことを念じ、[七八]十八本持を生ぜず、諸界を漏らさゞれ。斯れ亦復自らを降すの士と名く。諸根具足し、功德備具し、時に隨つて道を行じて時節を失せず。是の故に說いて曰く、『自らを降すの士は、衆行も具足す。』と。

(五)天、揵沓和を非とし、魔及び[七九]梵天を非とし、[八〇]勝を棄つるを最も上と爲す。智慧ある比丘の如し。

『天、揵沓和を非とし、魔及び梵天を非とし、』とは、或は世人有り。諸天を祭祠して恩福を欲求し、或は揵沓和に事へて其の淨行を修め、或は魔天に事へて豪尊を得んと望み、或は梵天に事へて天を謂つて道と爲す。外道異學は心に梵天を想ひ、「衆生の根本は皆梵天に由つて生ず。」と。是を以ての故に梵天に事ふ。如來說いて曰く、『此れは眞道に非ず。自ら既に迷惑し、復他人をして邪徑に內らしむ。亦堅固に非ず、恃怙すべからず。所謂眞正の道とは智慧ある比丘是れなり。』と。(彼は)心を執ること清淨にして諸結を漏らさず。人の爲めに說法して彼此の心無し。意虛空の如く沮壞すべからず。利根速疾にして亦滯礙せず。意の念ふ所、往くとして剋たざるは無し。是の故に說

【七三】六天。欲天の六天、一に四王天、二に忉利天、三に夜摩天、四に兜率天、五に樂變化天、六に他化自在天なり。
【七四】便を得る。機會に乘じて誘ふ。
【七五】垢。煩惱。
【七六】衆生、我、人、壽命。是等を四相といふ。衆生相とは衆生は五蘊假和合せりと見、我相とは五蘊中に我といふ中心ありとし、人相とは我は人中に生れて餘趣に異るとなし。壽命相とは我は一期の壽命有りとす。衆生はかゝる顚倒虛妄の相をなす。
【七七】實諦第一義。聖者所見の眞實なる大法を實諦といふ。之は諸法中第一なれば第一義といふ。
【七八】十八本持。十八界のことか。
【七九】梵天(Brahmadeva)。色界の初禪天。宇宙創造の神。
【八〇】勝。天、揵沓和等の功德勝ると思はれ禮拜せらるゝもの。

身相功徳を念じ、意を忍辱に持ち亦分散せざらしむべし。是の如き心を有する者は便ち村に入つて衆生を度せんことを求むべし。亂想を興さゞること彼の山林の如くにして異り有らざらん。是の故に說いて曰く、『獨步して伴無く、』と。『當に自ら降伏して、』とは恒に自ら意を息めて馳散せざらしめ、常に能く內外の諸物を校計して以て能く降伏すれば、便ち諸天、世人の爲めに承事供養せられ、[六九]八部鬼神、時に隨つて擁護し、佛世尊の爲めに歎譽せられん。是の故に說いて曰く、『當に自ら降伏して、』と。『隻り山林を樂しむべし。』とは心を持ち、意を專らにして恒に空閑を樂しめば、大衆に入ると雖も、意空無の如し。天雷地動にも心錯亂せず。然る後に乃ち如來の聖典に應はん。是の故に說いて曰く、『隻り山林を樂しむべし。』と。

＊(三)千たび千を敵と爲して、　一夫にて之に勝つも、　自らを伏するの、　戰中の勝たるには若く莫し。

『千たび千を敵と爲して、一夫にて之に勝つも、』とは或は衆生有り。一人にして千に勝つも、自らを降さゞれば則ち勝つと爲すに非ず。便ち墮落を爲せば、[七〇]究竟に至らず。能く自ら意を攝め、內外を降伏すれば、乃ち次を越えて無爲境に至るを得、諸の怨讐に勝つて畏忌する所無し。乃ち謂つて勝つと爲す。能く三界の結使の根本を滅し、永く盡きて餘無きを名けて健夫と爲す。三界の結の本、已に滅して餘無ければ、更に[七一]新を造らず。或は衆生有り。一人にして千に勝ち、或は萬に勝つも、人健夫と爲すに非ず。何を以ての故にとなれば、猶生死に在りて[七二]八難に遠からざればなり。是の故に說いて曰く、

千たび千を敵と爲して、　一夫にて之に勝つも、　自らを伏するの、　戰中の勝たるには若く莫しと。

(四)自らに勝つを上と爲す。　彼の衆生の如し。　自らを降すの士は、　衆行も具足す。

【六九】八部鬼神。一に乾闥婆(Gandharva)譯香陰。二に毘舍闍(Piśāca)譯噉精氣。三に鳩槃茶(Kumbhāṇḍa)譯甕形。四に薜荔多(Preta)譯餓鬼。五に諸龍(Nāga)。六に富單那(Pūtana)譯臭餓鬼。七に夜叉(Yakṣa)譯勇健鬼。八に羅刹(Rākṣasa)譯捷疾鬼。

＊ 法句經述千品。小異す。巴利法句經。八の一〇三。

【七〇】究竟。涅槃、無爲境。

【七一】新。新しき煩惱。

【七二】八難。見佛聞法に障難ある八處なり。一に地獄難、二に畜生難、三に餓鬼難、四に長壽天難、五に北欝單越難、こゝは人壽千歲で中夭せず、安樂なれど聖人出でず。六に盲聾瘖瘂難、七に世智辯聰難、人邪智にして外道に親しむ。八に佛前佛後難、佛世に會はざるなり。

我品第二十四

(一)當に善言を學ぶべし。　沙門は坐起にも、　一坐にも樂ふべき所は、　[六六]息心を求欲することなり。

『當に善言を學ぶべし。』とは晝夜に善言好語を誦習して衆妙なる度世の要を採取するなり。是の故に說かく、『當に善言を學ぶべし。』と。『沙門は坐起にも、』とは比丘は常に當に是の念を作すべし。「上下を分別して他坐を侵さじ。斯は是れ食の坐、斯は是れ行道の坐なり。吾れ當に此に坐して此を捨つべし。」と。是の故に說かく『沙門は坐起にも、』と。『一坐にも樂ふべき所は、』とは其の一心を專らにして定意を求め、諸情を分別して諸根を攝取するなり。一坐するも心亂るれば、一坐と爲すに非ず。意、外に馳せざれば、便ち超えて魔境界を越度せん。是の故に說いて曰く、『一坐にも樂ふべき所は、』と。『息心を求欲することなり。』とは心識を藏匿して攝心せざる者は諸の[六七]思想多し。若し更に形を受くれば、三惡道なる地獄・畜生・餓鬼中に趣き、三寶諸佛世尊に遇はず、清淨なる諸の[六八]梵行人に値はず。慚恥を知らずして當に一生より百千生に至るべし。息心を求欲すれば則ち生死無けん。是の故に說いて曰く、『息心を求欲することなり。』と。

(二)一坐、一臥にも、　獨歩して伴無く、　當に自ら降伏して　隻り山林を樂しむべし。

『一坐、一臥にも、』とは內外の生死、熾然なるを降伏せんと復一坐一臥すと雖も、心意定まらざれば、坐臥すと爲すに非ず。復當に三有の難を思惟すべく、恒に當に意を繫けて分散せざらしむべし。是の故に說いて曰く、『一坐、一臥にも、』と。『獨歩して伴無く。』とは衆に在るも、野の如く、心、恒に一定し、若しは行、若しは坐、心馳騁せず。彼の行人の隨時に乞食して、內に自ら食の從來する所を思惟するが如く、受施の人は其の恩に報いんことを求め、自ら止足を知り、復當に佛の

【六六】息心。心を休息し、靜めること。

【六七】思想。雜念妄想のこと。

【六八】梵行人。梵は清淨の義清淨なる行をなす人。

當に見を說くべく、聞は當に聞を說くべし。是の故に說かく、『聞見は牢固ならず。事は義に由つて理を析つ。』と。

(一四)智牢くして善く說くは快く、　聞智あり定意なるも快し。　彼の智定を用ひざるものは[六五]
　速かに放逸を行ずる者なり。

『智牢くして善く說くは快く、』とは彼の善く思惟するものは、言錯亂せず、承受せしことを忘失せず、則ち應に行ふべきを此れ行ふ。是の故に說かく、智牢くして善く說くは快し。』と。『聞智あり定意なるも快し。』とは皆聞に由るが故に、然る後に定を得。已に定を得ば、意の適く所、礙ゆる無し。是の故に說かく、『聞智あり定意なるも快し。』と。『彼の智定を用ひざるものは、速かに放逸を行ずる者なり。』とは放逸の人は輒ち能く惡を行じて後緣を顧みず、後世を念はず。猶穀子を以て火に投ずるが如し。苗幹を欲望するも、事終に然らず。猶小塊もて江を塞ぐが如し。以て流を止めんと欲するも終に得べからず。放逸の人、意行暴虐にして毫釐の善を欲求するも、吾は亦見ず。是の故に說かく、『彼の智定を用ひざるものは、速かに放逸を行ずる者なり。』と。

(一五)賢聖は法を樂しみ　所行、口に應ず。　忍を以て定を思惟し、　聞くや意則ち牢固なり。

『賢聖は法を樂しみ、』とは賢聖の法を樂應し、未だ始めより去離せず。終に翫習し已るも、意に厭足無し。皆是れ諸佛賢聖の演說する所なればなり。是の故に說かく、『賢聖は法を樂しみ、』と。『所行、口に應ず。』とは行ふに禁法の如くして遺失する所無し。是の故に說かく、『所行、口に應ず。』と。『忍を以て定を思惟し、』とは人の教誡を受くるや一心に奉行して、彼此を憎嫉するの心を興さず。其の善言を聞いては心に甘んじて稟受し、晝夜に誦習して定意を離れず。是の故に說かく、『忍を以て定を思惟し、』と。『聞くや意、則ち牢固なり。』とは佛所說の法は初より竟に至るまで上中下の義を終日諷誦して初より忘失せず。是の故に說かく、『聞くや意則ち牢固なり。』と。

【六五】智定。聞智と定意。

廣し。其の人、爾の時、其の側に在つて稱言すらく、『此の偸婆を造るに何爲れぞ高廣なるや。』と。即夜、一鈴を以て[六三]佛圖上に懸け、尋で誓願を發すらく、『若し我れ後に在在處處に生るゝも、聲響清徹して、上は梵天に徹し、彼の聖に遭遇して諸漏を盡し、弟子中に於ても聲響清徹なることを得せしめられよ。』と。昔、言を吐いて寺の廣大なるを嫌ひしに緣り、此の果報に由つて、身を受くること極小なるなり。復鳴鈴を以て寺上に懸け、此の果報を蒙つて妙聲を致すを得しなり。』と。

『內、既に之を知るも、』とは自ら己が身、內に所有無きを觀じ、好く悉く能く分別するが若し。『※內に自ら知る。』とは內なる六根を知るなり。是の故に說かく、『※內に自ら之を知る。』と。『外に見る所有るものは、』とは便ち外身を觀じて一一分別し、若し剝割斫刺せらるゝも亦所覺無くして虛詐たるを解知するなり。又『外に見る所有るものは、』と言ふは外に[六四]六入を見るなり。是の故に說かく、『外に見る所有るものは、』と。『彼は朗智有れば、』とは內外の身を分別して一一思惟し、善く察して滯ること無く、所有を解知するなり。智を以て之を觀れば、悉く所有無し。是の故に說かく、『彼は朗智有れば、』と。『聲に隨つて往かず。』とは人の聲響は人の善念を亂すの原首なり。彼の入定者は外聲入らざれば、內亂も出でず。彼の聲は猶空等の如しと解知す。是の故に『聲に隨つて往かず。』と。四偈の義を了知すること是の如し。

(一一三)耳識に所聞多く、　眼識に所見多くとも　聞見は牢固ならず。　事は義に由つて理を析つ。

『耳識に所聞多く、』とは或は佛經を或は外道異學の歌詠詩誦を聞いて、好き者は便ち受け、惡しき者は捨離せよとなり。是の故に說かく、『耳識に所聞多く、』と。『眼識に所見多くとも、』とは眼識亦所見多ければ、若しは好、若しは醜、善色・惡色あり。是の故に說かく、『眼識に所見多くとも、』と。『聞見は牢固ならず。事は義に由つて理を析つ。』とは若し見聞念知にして盡く能く了別せば、見は

【六三】佛圖(Buddha)。浮圖、佛陀と音譯す。如來より轉じて寺塔をいふ。偸婆に同じ。

※『內に自ら知る』及び『內に自ら之を知る』は『內に所知有り』のことならん。

【六四】六入。眼・耳・鼻・舌・身・意の六根なり。入とは六根より六識が外境を受入るゝよりいふ。

（一二）內に自ら知ること無く、外にも見る所無きものは、內に果を見ざれば、便ち聲に隨つて往く。

昔、王波斯匿、(五六)四種の兵を集め、夜、人非きの時に、城を出で、遊行せり。時に(五七)一比丘有り。羅婆那拔提と名く。寂然たる閑靜に唄聲を清徹せしむ。四種の兵、聞かざる者莫し。時に波斯匿王、彼の衆中に於て、便ち此の念を作さく、「若し我れ、明日、此の唄ふ比丘を見ば、當に三百千兩の金を賜ふべし。」と。王、復漸やく近づき、內に自ら思惟すらく、「聲音近きに似たる如し。然も復見ず。」と。轉じて復前進して其の人を見るに、身は一函の裏に在り。便ち三つの貝珠を賜ふのみ。是の故に說かく、

內に既に之を知り、外に見る所無きものは、內には果實を見るも、便ち聲に隨つて往く。
內に既に知らず、外に見る所有るものは、二果俱に成じて、便ち聲に隨つて往く。
內に知る所有り、外に見る所有るものは、彼は朗智有れば、聲に隨つて往かず。

時に波斯匿王、前んで佛に白して言く、『向の唄へる道人、今(いづこに)所在すと爲すや。吾れ、之を覩んと欲す。』と。佛、王に告げて曰く、『見んと欲せば、懈慢を興すこと勿れ。』と。佛、即ち信を遣はして、比丘を喚び來らしむ。王、尋で之を見て(五八)變悔心を生じ、夜、許せし所の極めて奢侈たりしを悔ゆ。尋で三枚の貝珠を與へしことをも意に猶悔いんと欲す。王、佛に白して言く、『今此の比丘は本、何の德を行じてか此の妙聲を得たる。復何の行を作してか此の(五九)小形を受けたる。唯願はくは世尊、其の義を敷演したまへ。』と。爾の時、世尊、即ち(六〇)宿命智を以て當來・過去・現在を觀察したまひ、便ち王に告げて曰く、『往昔、久遠世の時、人壽(六一)二十千歲にして人民の類、共に相敬待、謙遜して承事せり。時に世に佛有り。名けて迦葉と曰ふ。世に在つて遊化教誡すること周く訖り、便ち滅度を取る。是の時、國王、臣民、戀慕心を興し、即ち(六二)偸婆を起つ。高くして且つ

【五六】四種の兵。一に象兵、二に馬兵、三に車兵、四に步兵。
【五七】一比丘。賢愚經卷十一、無惱指鬘品に同一の話あり。
【五八】變悔心。氣うつりして後悔する心。
【五九】小形。短身倭軀のこと。
【六〇】宿命智。宿世の生命を知る智。
【六一】二十千歲。二萬歲。
【六二】偸婆(stūpa)。塔婆、卒堵婆とも書く。單に塔ともいふ。中に遺骨等を納む。

智博く多聞爲り、持戒も悉く完具せば、二倶に稱譽せられ、所願は盡く獲られんと。

(一〇)多聞にして能く法を奉じ、智慧あつて常に意を定むれば、彼の四九閻浮金の如し。
孰か能く瑕有りと說かん。

『多聞にして能く法を奉じ、』とは正法を思惟して缺漏する所無く、一句義を分別して無量を演出し、復能く略說して一句に還至せしむ。是の故に說かく、『多聞にして能く法を奉じ、』と。『智慧あつて常に意を定むれば、』とは五〇分別慧、明かにして五一有漏を盡し、五二無爲處に至らんと欲し、亦造作せずして賢聖無漏智を成就し、心常に禪寂にして亂想無きなり。是の故に說かく、『智慧あつて常に意を定むれば、』と。『彼の閻浮金の如し。』とは餘の弊惡なる金は瑕有る者多し。此の閻浮金は內外無瑕にして亦塵垢無し。是の故に說かく、『彼の閻浮金の如し。』と。『孰か能く瑕有りと說かん。』とは猶、戒行清淨なる人の如し。內外清徹にして行に五三玷缺無く違失する所無ければ、能く彼の行人を譏る者有ること無し。是の故に說かく、『孰か能く瑕有りと說かん。』と。

(一一)諸有もの己が色を稱し、名德を歎說する有り。斯れは皆貪欲と謂ふべし。然も自らは覺知せず。

佛、契經に說きたまはく『如來世尊は先づ當に二業を成ずべし。一には眼に色を知り、二には耳に聲を知る。』と。愚者は錯つて聞いて、一には如來は色に著すると謂ひ、二には如來は聲を貪ると謂ひ、『如來の聲は五四梵なること五五羯毘鳥の如し。』と。佛言く『爾らず。吾が所說は義を異にす。此の如くならず。』と。智者は分別して如來の義を解すらく、『如來は行を阿僧祇劫に積み、先づ眼色耳聲を淨め、然る後に方に餘行を修するなり。』と。是の故に說かく、

諸有もの己が色を稱し、名德を歎說する有り。斯れは皆貪欲と謂ふべし。然も自らは覺知せずと。

【四九】閻浮金(Jambūnada-suvarṇa)。閻浮檀金ともいふ。閻浮樹下の河中より出づる良き金。
【五〇】分別慧。世の事相を分別する智慧。
【五一】有漏。漏とは煩惱。世間の事物は皆煩惱所產にして、煩惱を含有すといふ。
【五二】無爲處。爲とは造作の義、因緣によつて造作せられざるものを無爲といふ。卽ち聖智所證の眞理なる涅槃、法性是れなり。之を實在的に見て無爲處といひしなり。
【五三】玷缺。玷は玉のかけ損じ。瑕所。缺點。
【五四】梵(Brahmā)。清淨の義、佛の音聲を梵音といひ其の三十二相中に數ふ。
【五五】羯毘鳥(Kalaviṅka)。迦陵頻伽とも書く。好聲美音と譯し、雀に似たり。旣に卵殼中にあつて美聲を發すと。

多聞と爲すと雖も、禁戒を具足せざれば、』と。『法律の爲めに彈かれ、所聞に便ち闕くる有るなり。』とは戒律の人は法を以て彈擧せらる。斯の人は律を犯して正法を行ぜざれば、人の爲めに譏られ、慚愧の事を行ず。是の故に說かく、『法律の爲めに彈かれ、所聞便ち闕くる有るなり。』と。

(七)行人、少聞なりと雖も、禁戒盡く具足すれば、法律の爲めに稱せらる。聞に於ては
便ち闕くる有り。

『行人、少聞なりと雖も、禁戒盡く具足すれば、』とは持戒完具して缺失有ること無きも、廣く學を習はず。是の故に說かく、『行人、少聞なりと雖も、禁戒盡く具足すれば、』と。『法律の爲めに稱せらる。聞に於ては便ち闕くる有り。』とは彼の持戒の人、人の爲めに稱せられ、「某甲某村に持戒の人有り。敬ふべく貴むべし。」と。晝夜に道を行じて廢せざるも、學廣博にして古に達し、今を知らざれば、聞に於ては便ち闕くる有るなり。是の故に說かく、『法律の爲めに稱せらる。聞に於ては便ち闕くる有り。』と。

(八)少多の聞有りと雖も、持戒完具せざれば、二俱に訶責せられ、所願、便ち失はれん。

『少多の聞有りと雖も、持戒完具せざれば、』とは既に自ら少しく聞くも、戒律、具はらずんば、衆多の人民の爲めに嗤笑せられん。人、人本を修せんには、必ず一行を全うせよ。云何ぞ斯の人、盡く善本を拔かんや。或は念を興して憐愍すること有れ。「彼の人、身まかるの後、長夜、惱を受くること無量ならん。」と。是の故に說かく、

少多の聞有りと雖も、持戒完具せざれば、二俱に訶責せられ、所願便ち失はれん。と。

(九)智博く多聞爲り、持戒も悉く完具せば、二俱に稱譽せられ、所願は盡く獲られん。

多聞にして戒具足し、衆惡を犯さゞれば、便ち天[四二]・世人[四三]・龍[四四]・鬼神[四五]・阿須倫[四六]・眞陀羅[四七]・摩休勒[四八]等の爲めに悉く恭敬・承事・尊奉せられん。是の故に說かく、

【四二】天(Deva)。三界の諸天に生れ、身に光明を具す。
【四三】世人。世間の人。
【四四】龍(Nāga)。畜類にて水族の王。
【四五】鬼神(Preta)。饑渴に迫らるゝ陰鬼。
【四六】阿須倫(Asura)。譯非天、天に類すれども天に非ず。容貌惡しく常に帝釋と戰ふ。
【四七】眞陀羅(Kinnara)。
【四八】摩休勒(Mahoraga)。以上前卷五二頁見よ。

所覩無きが如し。』と。『衆妙の色有りと雖も、有目も明を見ず。』とは彼の屋舍の裏に衆妙の色有つて姝好を羅列すと雖も、有目者、中に入つて永く色を見ず。是の故に說かく、『衆妙の色有りと雖も、有目も明を見ず。』と。

（四）彼の一人有り、智達し、學、廣博なるが如し。聞かざれば則ち、善法及び惡法を知らざらん。

『彼の一人有り、智、達し、學、廣博なるが如し。』とは世に儒し人有り、優婆塞にせよ、優婆夷にせよ、刹利にせよ、長者にせよ、居士にせよ、諸の庶人にせよ、心慧く、意朗かなれば、先づ聞けば則ち善惡の法を知る。極めて智慧き人も先づ法を聞かざれば則ち別知する所無し。是の故に說かく、『聞かざれば則ち、善法及び惡法を知らざらん。』と。

（五）猶人、燭を執れば、悉く諸の色相を見るが如し。聞き已れば盡く能く、善惡の所趣を知る。

『猶人、燭を執れば、悉く諸の色相を見るが如し。』とは猶智達の人、手に明燭を執れば、盡く能く好惡の諸色を分別するが如し。是の故に說かく、『猶人、燭を執れば、悉く色相を見るが如し。』と。『聞き已れば盡く能く善惡の所趣を知る。』とは彼の智學の人、法を聞けば卽ち善惡の諸法を知り、近法・遠法・有記・無記盡くを能く了知す。是の故に說かく、『聞き已れば盡く能く、善惡の所趣を知る。』と。

（六）稱して多聞と爲すと雖も、禁戒を具足せざれば、法律の爲めに彈かれ、所聞に便ち闕くる有るなり。

『稱して多聞と爲すと雖も、禁戒を具足せざれば、』とは多聞博智にして善く法を分別するも、禁戒に於て大いに慇懃ならず、觸れて犯す所有れば、戒律は具はらざるなり。是の故に說かく、『稱して

【三九】姝好。うつくしくみめよきもの。

【四〇】居士（Kulapati）。迦羅越。財に居るの士、家に居るの士。在家にて佛道に志す人。

【四一】有記・無記。有記は善法、惡法。無記は中性の法を指す。

（一）善く聞き、好く行ひ、善く閑靜を好み、所行[三二]左ならざれば、安きこと沙門の如し。

『善く聞き、好く行ひ、』とは多聞の學士は人の爲めに「善哉善哉」と譽めらる。人の聞くこと有るや所行必ず善し。是の故に說かく、『善く聞き、好く行ひ、』と。『善く閑靜を好み、』とは[三三]欲界・色[三四]界・無色[三五]界を出でんことを求めて、憒亂を樂はず、繫縛せらるゝこと無き閑靜を志趣するなり。是の故に說かく『善く閑靜を好み、』と。『所行左ならざれば、』とは身口意の所行、常に正理に順じ、終に左ならざるなり。（然れば）最勝最妙にして出づること有る者無し。是の故に說かく『所行左ならざれば、』と。『安きこと沙門の如し。』とは沙門の行に順じ、沙門の行に逆はず、彼の所行所修の如くするなり。是の故に說かく、『安きこと沙門の如し。』と。

（二）愚者は覺知せざれば、好んで[三六]不死の法を行ず。善く法を解知する者は、病めば芭蕉樹の如し。

『愚者は覺知せざれば、好んで不死の法を行ず、』とは愚者の所習は恒に弊行を習ふ。善法・惡法を別たず、若しは好、若しは醜、盡く覺知せず。無常變易の法を計せず、一身の資のみを營む。千年も盡きず、物、久常を保ち、耗滅有ること無しと謂ふ。是の故に說かく、『愚者は覺知せざれば、好んで不死の法を行ず、』と。『善く法を解知する者にても病めば芭蕉樹の如し。』とは善く法に於て解すると雖も、耳を經て便ち過ぐるは芭蕉樹の風に遇へば則ち葉落ち、病者の[三七]頓極なるに加ふるに毒湯を以てするが如し。是の故に說かく、『善く法を解知する者にても、病めば芭蕉樹の如し。』と。

（三）猗屋を蓋ふに密にせば、闇冥にして所覩無きが如し。衆妙の色有りと雖も、有目も明を見ず。

『猗屋を蓋ふに密にせば、闇冥にして所覩無きが如し。』とは猗屋舍を造つて[三八]窗牖を閉塞し、內外緻密なれば、冥然として明を見ざるが如し。是の故に說かく『猗屋を蓋ふに密にせば、闇冥にして

【三二】左。もとる、よこしま。

【三三】欲界(Kāmadhātu)。凡夫が往來生死する三の世界の第一。淫欲と食欲とを有する有情の住む所。五趣と六欲天(前出)は之に入る。

【三四】色界(Rūpadhātu)。色は物質の義。淫食の二欲を離れたる有情の住處。物色は凡て淨妙なり。四禪天を含む。

【三五】無色界(Arūpadhātu)。此の世界には物質的のもの一もなし。唯心識のみの深妙な禪定的存在あるのみ。之に四無色天あり。以上の三を三界といひ、無色界を除ける二は須彌山の周圍上下に在りと。

【三六】不死の法。涅槃をいふこともあれど、今は無常變易の理を知らざる災息不死の祈願又は祭祀。

【三七】頓極。くるしみつかる。

【三八】窗牖。まど。

所積無く』と。『解脱して心無漏なれば』とは心、永く解脱を得て罣礙せらるゝこと無く、復無漏を獲て永く諸垢を除くなり。是の故に說かく、『解脱して心無漏なれば』と。『天と世人とに恩惠す。』とは一切衆生、皆歸仰せんと求む。是を以て聖人は時に應じて適化救濟して乏しきこと無し。是の故に說かく、『天と世人とに恩惠す。』と。

（一六）猶人の山頂に立つて、　遍く人や村落を見るがごとし。　審かに法を觀ずることも是の如く　樓に登つて園を觀るが如し。　人憂ふれば、除きて、憂無からしめ、　生死の趣を知らしむ。

『猶人の山頂に立つて、遍く人や村落を見るがことし。』とは如し有目の士、遍く村落を見れば、行く者、坐する者、出入行來するもの、啼哭・歌舞・喜笑するもの皆悉く之を觀ん。如來世尊も亦復是の如し。智慧の山頂に立つて、五趣の衆生の〔三〇〕黠者・愚者・〔三一〕有至・無至のもを觀、皆能く分別して往いて之を化したまふ。是の故に說かく、『猶人の山頂に立つて、遍く人や村落を見るがごとし。』と。『審かに法を觀ずることも是の如く、樓に登つて園を觀るが如し。』とは如來は天眼もて一切遍く見たまふ。高樓に乘つて觀るがごとく、一一分別して、度し難き、度し易き、與に言ふべき者には與に言ひ、與に言ふべからざる者には自ら默然たり。其の前人の所念に隨つて道を成ぜしむ。是の故に說かく、『審かに法を觀ずることも是の如く、樓に登つて園を觀るが如し。』と。『人憂ふれば、除きて、憂無からしめ、生死の趣を知らしむ。』とは如來は憂有り、憂無き、少智・多智有るを觀察して皆悉く分別し、衆生に教示して生死の趣を知らしむ。是の故に說かく、『人憂ふれば、除きて、憂無からしめ、生死の趣を知らしむ。』と。

聞品第二十三

大衆に悉苦の道を述べて怖心なきこと。

【三〇】黠者。賢者。

【三一】有至・無至。道に至れるもの至らざるもの。

隅、東に垂る。土俗の常法は若し一人の佛に事へざる者は當に山西に送つて、鬼に付して之を噉はしむべし。自爾已來、佛法、熾盛し、道を得るもの無數なり。是の故に說かく、

諸有、佛を信ずる、此の如き衆生の類は、安穩に還り歸ることを得。皆馬王の度に由る。

と。又彼の國の常儀は國王、子を生まば、若しは十、若しは百、若しは無數に至るまで、盡く出で〻道を作し、佛經を誦習し、[二一]三藏、備さに擧ぐるや、還つて復道を罷め、王位に登陟するなり。[二二]梵語に通ぜず、經籍、擧らずんば、則ち王位に陟ることを得ざるなり。外渚に住在するが故に、[二三]師子渚國と稱す。

（二四）如來は等倫無し。二の觀行を思惟し、二の閑靜を善觀したまふ。冥を除くと神仙にも超えたり。

『如來は等倫無し。』とは如來の世に處するや、神德無量なり。虛空をも行過して所化無量なり。普く衆生を引いて導いて慧明を示したまふ。[二四]四等に育養して、見る者に度を得せしむ。是の故に說かく、

如來は等倫無し。二の觀行を思惟し、二の閑靜を善觀したまふ。冥を除くこと神仙にも超えたり。と。

（二五）善く獲、自在を獲、愛盡きて所積無く、解脫して心、無漏なれば、天と世人とに恩惠す。

『善く獲、自在を獲』とは衆生、[二五]塗炭に處在し、[二六]五趣に流轉し、[二七]七使に迴波すれば、道に趣かんと欲するも、何の路より至ることを得るかを知らず。是の故に如來は[二八]弘誓の心を捨てたまはず、苦難を拔濟し、普く衆生の類に處らしめんと自在の堂を指示したまふ。是の故に、『善く獲、自在を獲』と。『愛盡きて所積無く』とは[二九]四無畏を得て、永く愛を盡すなり。是の故に說かく、『愛盡きて

【二一】三藏(Tripiṭaka)。經、修多羅(Sūtra)、律、毘奈耶(Vinaya)、論、阿毘達磨(Abhidharma)の三なり。藏とは佛說の義理を包藏するの意。佛教聖典は此の三要素より成る。

【二二】梵語(Saṃskṛta)。よくつくられたるもの〻意。印度古代の雅語、文語なり。今日殘れる梵語に三種の系統あり。古典梵語、吠陀梵語及び佛教梵語なり。

【二三】師子渚國。錫崙(Ceylon)島を師子國といふ。

【二四】四等。公平平等。

【二五】塗炭。塗は泥、炭は火。水火のくるしみ。

【二六】五趣。五道ともいふ。一、地獄趣。二、餓鬼趣。三、畜生趣。四、人趣。五、天趣。

【二七】七使。七の煩惱。一に欲愛、二に恚、三に有愛、四に慢、五に無明、六に見、七に疑。

【二八】弘誓の心。佛や菩薩の衆生救濟弘大なる誓願。

【二九】四無畏。化他の心に畏怖なきをいふ。一に一切智無畏、佛が大衆中に於て一切智なる師子吼して怖心なきこと。二に漏盡無畏、凡ての煩惱を斷ぜりと宣言すること。三に說障道無畏、惡法を彈壓して恐れず。四に說盡苦道無畏、

し。何に緣つて復稱して羅刹鬼と爲すや。速かに出でゝ外に在れ。吾れ自ら之を觀察せん。』と。王、鬼女を將ゐて內宮中に入り、門閤を牢固にし已つて、入つて一宿せしが、明日、食時に宮門、開かず。諸臣、共に議すらく、『王、新たに妻を納れ、意相貪樂するが故に、門開かざるのみ。』と。師子、說いて曰く『來り議するに如かず。王及び夫人、幷に諸の婇女、必ずや羅刹の爲に食噉し盡くされん。故に、門開かざるのみ。』と。卽ち高梯を施し、牆を踰えて內に入る。死人の骸骨、數間に滿ちて舍てられしを見る。復坑孔に新出の土壤を見る。諸臣、師子に問うて曰く、『王、今已に死し、內宮喪亡しぬ。骨、積を成し識別すべからず。云何が、王身を葬送せん。』と。師子、報へて曰く『盡く諸骨を一處に聚めて焚燒せよ。但王を葬ると言へ。餘者は其の例に在らず。』と。葬送、已に訖る。諸臣、師子を責めて曰く『正に汝が身に坐して羅刹鬼を將ゐきたり、王を殺し、國を喪ひ、宮殿を滅亡せしめしなり。卿、今云何か意欲する。』と。師子、答へて曰く、『吾れ、先に言契[一九]有り。『此れは人身に非ず、是れ羅刹鬼なり。備さに愆咎有らんも、後に怨まるゝこと莫らん。』と。卿等に何爲れぞ復責數せられん。』と。諸臣、人民、前んで師子に白さく、『王、今已に死しぬ。更に胤嗣無し。唯願はくは、師子、當に王位に登り、人民を統理し、永く康寧を得せしめられんことを。我ら諸臣をして尊奉するに處有らしめよ。』と。師子、告げて曰く、『若し我れを擧けて王者たらしめんと欲せば、當に我が敎に隨ふべし。設し我が敎に從はずんば、盡く羅刹の爲めに噉はれん。』と。諸人、異形同響に、咸皆善しと稱す。卽ち王の敎に隨ふ。王、諸臣に告ぐらく、『彼の羅刹子女は睡眠するに時有り。當に共に兵を集め、船に乘り、海に入つて攻擊すべし。』と。卽ち往いて攻擊し、羅刹の男女大小を殺すこと稱數すべからず、遺在有ること無し。復往いて鐵城を破壞し、其の中の人を出す。彼の住止せしに因つて、人民熾盛し、富樂自然たり、珍奇異物、稱量すべからず。因つて彼の城號を名けて師子遺落と曰ふ。諸の羅刹鬼の例に在らざる者は移して山西に在らしむ。鐵[二〇]

【一八】門閤。大門小門、入口。

【一九】言契。口約束。念を押し契へること。

【二〇】鐵圍(Cakravāḍa)。山名、須彌山の周圍にある七山八海の中、第八海は鹹海なるが、之を圍繞するが鐵圍山なりと。

唯師子一人のみ有りて安穩に歸るを得たりしが、餘者は戀慕心に由つて皆厄難に墮せり。時に羅刹婦、其の男女を抱へ、往いて師子商客を在在處處に逐ひ、村落に告語すらく、『師子身は是れ我が夫主なり。共に男女を生みしが、我れを捨てゝ逃走し、趣く所を知らず。』と。諸人、聞き已つて、師子に問うて曰く、『卿の婦女を觀るに體性容貌、人中の英妙なり。兒女愍むべし。何爲れぞ之を捨つるや。』と。師子、報へて曰く、『此は亦人に非ず。是れ羅刹鬼のみ。海渚中に住み、商賈を殺噉するもの稱數すべからず。吾が伴數百も鐵城に閉在せらる。唯我れ一人のみ幸に免濟を得しなり。今此の鬼女、復我が後を逐ひ、規つて我を害せんと欲す。恐らくは免濟せられじ。』と。此の語を說き已つて轉じて復前行し、本國に還至す。鬼、亦後を逐ひ、其の國土に到る。鬼、往いて王に白さく、『我れ、師子と共に夫婦に爲り、此の男女を生みたり。後に力を得んと望みしに、圖らざりき。今日永く見捨られ已んぬとは。師子、我が身に用あらずと意はゞ、當に男女を[一五]錄取すべし。我れ、故年少、豈更に[一六]適趣する能はざらんや。』と。王、師子を召して其の情實を問ふらく、『卿の婦は幼少にして顏貌端正なり。男女は殊異にして君子の相有り。何爲れぞ、之を捨てゝ肯て納受せざる。』と。師子、王に白さく、『此れは[一七]人形に非ず。乃ち是れ人を噉ふ羅刹鬼なり。男女に化作して我が後を追逐す。人意の傾くを望んで、我れを取り殺さんと欲するなり。前に五百の賈客を將ゐて海に入り寶を採りしに、盡く羅刹の爲に噉食せられ、唯我れ一人免濟を得たるのみ。今復逐はれ、將に如何になるかを知らんとす。』と。王、師子に告ぐらく、『設し卿、用て持すべからずんば、我れに與へよ。』と。師子、報へて曰く、『此れは實に非人なり。是れ羅刹鬼なり。備さに愆咎有らんも、後に怨まるゝこと莫らん。』と。師子、復左右の諸臣に語ぐらく、『斯の鬼、此の間に至らば、必ず傷害すること有らん。王、今信ぜられず、深宮に內れんと欲せらる。是の如くせば、久しからずして王及び內宮盡く當に灰滅すべし。』と。王、復瞋恚して師子に語げて曰く、『女中の姿容、天の玉女の如

【一五】錄取。登錄し引取る。

【一六】適趣。嫁にゆく。一本適娶とあり。

【一七】人形。人身の意。

と此の鬼界に來至して高山頂に住す。(而して)三たび喚呼すらく、『誰か閻浮利地に還歸せんと欲する。』と。卿等若し馬王の聲を聞かば、皆往いて禮敬し、本鄉に還らんことを求めよ。』と。其の人、是の語を聞き已つて、卽ち伴の中に還り、具さに情狀を陳ぶ。衆人、報へて曰く、『今、去るべきや、不や。』と。智者、答へて曰く、『十五日の至るを須て。馬王、當に來らば、乃ち去るを得べけんのみ。』と。未だ數日を經ざるに、馬王、便ち至る。高山の頂に在りて、三たび喚呼すらく、『誰か閻浮利地に還歸せんと欲する』と。聲、極遠にまで震ふ。商客、聞き已つて、皆馬王の所に往至し、前んで王に白して言く、『我等咸、本鄉里に還らんと欲す。願はくは[一二]將接せられ、無爲に歸ること得せしめられよ。』と。馬王、告げて曰く、『卿等、意を專らにして我が所說を聽け。各〻家に歸り、本鄉に還らんと欲する者、心意專正なれば、便ち家に歸ることを得ん。心專正ならずんば、歸ることを得じ。此の諸の婦女各〻[一三]男女を抱へ、卿の後を追逐して啼哭喚呼せん。其の中の諸人、戀慕心を興さんか、正に我が脊上に在るも、猶去ることを得ず、若し能く恩愛を捨て、正心一意に戀著する所無く、至心に我が一毛を捉ふれば、便ち家に歸ることを得ん。』と。其の所語の如く諸の婦女至る。各〻夫に語げて曰く、『誠に我が賤身は捨つべけんも、何爲れぞ兒女をも捐棄するか。』と。先づ兒女に敎へて往いて父の頸を抱き、啼哭喚呼せしむらく、『我等を捨てゝ何くに去らんと欲するか。』と。心意戀著せし者は便ち還ることを得ず。唯[一四]大智の師子一人のみ有りて卽ち安穩に家に還れり。是の故に說かく、

諸有、佛を信ぜざる、　此の如き衆生の類は、　當に厄道に就くべし。　商の羅刹に遇ふが如くにと。

(一三)諸有、佛を信ずる、　此の如き衆生の類は、　安穩に還り歸ることを得。　皆馬王の度に由る。

【一二】將接。ひきつれること。

【一三】男女。小供の意。子女。

【一四】大智の師子。大智の人を獸類の王たる獅子に譬へていふ。

城裏の人に問うて曰く、『何爲れぞ父母兄弟を稱喚するか。』と。城裏の人、報へて曰く、『我等海に入り、寶物を採拾せしが、風の爲めに漂はされ、又羅刹女の爲めに誑かされ、此の鬼界に墮ちて牢城に閉在せられぬ。前に五百人有りしが、漸漸に取殺され、今は二百五十人有つて存するのみ。君、此の女を呼んで謂つて是れを人なりと爲すこと莫れ。皆是れ羅刹鬼のみ。』と。其の人、聞き已つて即ち還樹を下り、彼の女の村に詣り、竊かに女に就いて臥す。明日晨旦に諸を同伴に談るらく、『吾に[五]匿事有り。共に論說せんと欲す。各閑靜なる處に往け。愼んで男女を自ら隨へること莫れ。』と。諸人、響應して各ゝ隱處に詣る。即便ち告げて曰く、『卿等、知るや不や。昨夜、吾れ欻ち此の念を生ずらく、「斯の女人等は何故に慇懃に左面の道に從ふこと莫れと說くや。」と。(乃ち)女の睡眠せしを見、竊かに起きて、往くに大鐵城を觀見せり。閉ぢらるゝもの數百人、[六]嘷哭喚呼せり。吾れ樹頭に上り、遙かに意故を問ひぬ。衆人、我れに報ふらく、「我れら[七]摩竭魚の爲めに船を壞られ、惡風、浪を吹いて此の鬼界に墮し、鐵城の高さ數十丈なるに閉在せられぬ。」と。我に勸むるに、「家に還るに善く方計を求めよ。」と。卿等、今日意欲するところ云何。』と。衆人、答へて曰く、『卿、昨夜、何ぞ重ねて彼の人に問はざりしや。頗し[八]權宜方計有らば、衆人及び我が身、安穩に歸家することを得るや不やと。』と。その人即ち報へて曰く、『我れ昨夜、此の事を問はずして退きぬ。今暮、竊かに起きて當に往いて重ねて之を問ふべし。』と。此の語を說き已るや、各ゝ所在に還る。彼の智達の人は向暮に女と交接し已り、女の睡眠せるを相し、竊かに起きて彼の樹上に詣り、城裏の人に問うて曰く、『頗し權宜方計有らば、卿等諸人と復我が身と閻浮利地に還るを得るや不や。』と。城裏の人、報へて曰く、『我等適に念を生じて閻浮利地に還らんと欲すれども、此の鐵城は便ち數重に作れば、敗壞すべからず。死者、日に次ぎ、免るゝを得るに由無し。唯卿ら外人は少しく權宜有らば、度脫して本土に還至するを得ん。十五日の淸旦に一[九]馬王有り。[一〇]鬱單越より自然の[一一]秔米を食はん

【五】匿事。秘密のかくしごと。

【六】嘷哭喚呼。さけび、なきわめきよぶ。

【七】摩竭魚(Makara)。摩伽羅魚とも書き、鯨、鮫又は鰐のことなりと。慧苑音義下に「其の兩目は日の如く口を張れば暗黑の如し」と。

【八】權宜方計。かりの方便手段。

【九】馬王。王とは敬愛の意を含めし語。

【一〇】鬱單越(Uttarakuru)。鬱多羅究留、北拘盧とも書く。須彌山の周圍の四大洲中の北の大洲の名。

【一一】秔米。粳米、うるしね、うるち。

巻の第二十一

如來品第二十二の二

(一二)諸有、佛を信ぜざる、此の如き衆生の類は、當に厄道に就くべし。商の[一]羅刹に遇ふが如くに。

『諸有、佛を信ぜざる』とは閻浮利地に衆多の賈客有り。共に相率ゐ合して海に入り、寶を採る。正に廻波に値ひ、惡風に吹かれ、大船を壞らる。復諸人有りて弊壞せる船に乗りつゝありしが、順風に流迸せられて羅刹界に墮ちぬ。衆多の[二]羅刹女の輩の顏貌端正なるが衆寶もて自ら身を瓔珞し、前んで賈客を迎ふらく、「善くも來れり。男子よ、此の間には財饒かに寶多し。隨意の明珠、無價の雜珍、恣意に之を取れ。之を守る者とて無し。我等も既に夫主無く、汝らも妻妾無けん。此の間に止まるべし。共に相娛樂せん。後、善風の良伴を得て、家に歸らんも遠からじ。又諸君よ、當に知るべし、海水は晝夜に廻波して定方有ること無し。若し左面に見て道有るも、愼んで隨從すること莫れ。設ひ夢中に於て左面の道を見るも亦陳説すること莫れ」と。時に商客中に一智達者有り。內に自ら思惟すらく、「此の諸の婦女の說く所の左道の事、徒爾には會へじ。當に緣有るべし。」と。即ち權詐を設け、竊かに陰謀を爲し、向暮に女と共に臥して交接せり。女の已に睡れるを伺ひ、竊かに即ち起き、進んで左道を渉る。行くこと數里、中に一城裏に數千萬人の稱怨歎呼せるを聞けり。或は父母と已が兄弟姉妹妻息を呼ぶらく、『云何んが閻浮利地を捨てゝ此に就いて命終せん。』と。賈客、聞き已つて、衣毛皆竪てり。還心意を攝め、直ちに前んで城に詣る。[三]周匝して觀察するに城に鑄鐵の垣牆を見る。亦門戶として出入すべき處所無し。城を去ること遠からず、[四]尸梨師樹の高廣にして且つ大なるあり、即ち往いて樹に攀ぢ、城裏を見る。數千萬人、啼哭號喚せり。遙かに

【一】羅刹(Rākṣasa)。地獄の鬼の類。前巻九二頁を見よ。

【二】羅刹女(Rākṣasī)。

【三】周匝。めぐりめぐる。

【四】尸梨師樹(Śirīṣa)。印度に産する香木。合歡樹と譯す。

我、成佛せしは【五三】四意止・四意斷・四神足・五根・五力・七覺意・八直行に由れり。我れ今承事供養して尊長を敬するが如し。過去恒沙の諸佛世尊も亦此の法に由つて最正覺を成ぜり。當來の恒沙の諸佛も亦此の法に緣つて成道することを得ん。我れ今現在の如來至眞等正覺も亦此の法に緣つて道果を成ぜり。我れ今躬自ら此の法を思惟分別す。』と。是の故に說かく、

＊諸の過去の佛、　及び已當來の者、　現在の等正覺は　衆人の憂を除くこと多しと。

(一〇)盡く共に法を敬重せよ、　已に敬せる、　今敬する者、　若しは當に、甫めて恭敬すべけんものも。　是を佛法の要と謂ふ。

三世の恭敬を引かんと欲し、故らに此の偈を說く。

(一一)若し自ら要を求めんと欲せば、　身を正すを第一と爲し、　正法を恭敬し　佛の教誡を憶念せよ。

『若し自ら要を求めんと欲せば、身を正すを、第一と爲し、』とは人、道を成ぜんと欲せば、必ず自ら要を求めて道に進趣し、諸法を恭敬し、過去恒沙の諸佛の說きたまふ所の教誡を追憶して現に前に在すが如く亦漏失せざれ。是の故に說かく、

若し自ら要を求めんと欲せば、　身を正すを第一と爲し、　正法を恭敬し、　佛の教誡を憶念せよと。

【五三】四意止……八直行。三十七道品(菩提分)と總稱す。前卷一四四、一四五頁を見よ。

※　前と異る。

て日夜に滅すれば、』と。『諸天常に衞護して、』とは入定の人は諸天衞護し、承事禮敬して其の功德を增さしめんと欲す。是の故に說かく、『諸天常に衞護して、』と。『佛の爲めに稱記せらる。』とは此の世界より上、[四八]淨居天に至るまで立根の人を歎說し、衆生に善利を快得せしめ、如來は現在して廣く法味を說きたまふ。所度の衆生稱限すべからず。是の故に說かく、『佛の爲めに稱記せらる。』と。

(八)彼は天人中に於て、　等正覺と歎說せらる。　速かに得而して自覺し、　最後に[四九]胎身を離れたり。

『彼は天人中に於て、等正覺と歎說せらる。』とは諸天世人、恒に佛の功德を詠じ、各〻善心を獻げて成佛に至り、未だ曾て遠離せず。是の故に說かく、『彼は天人中に於て、等正覺と歎說せらる。』と。『速かに得而して自覺し、』とは人民の類歎ずること未曾有にして、「如來の功德は甚だ奇、甚だ特なり。我等衆人、謂つて如來は斯の坐に在りと爲せども、何ぞ圖らん、如來は無量百千の世界に遊び、衆生を教化して以て倦むことを爲したまはず。」と。是の故に說かく、『速かに得而して自覺し、』と。『最後に胎身を離れたり。』とは最後の受身、泥洹せんとするに臨み、佛、自ら歎說して阿難に告語すらく、「如來の此の身は更に生を受けず、無爲永寂にして復起滅せず。阿難よ、當に知るべし、吾、[五〇]方域及び上空界を觀るに、更に[五一]生分を受けずして畢んぬ、阿難よ、我、更に俗に染まず、俗中躁擾すれども、吾は復更めず。」』と。是の故に說かく、『最後に胎身を離れたり。』と。

(九)諸謂過去の佛、　及び[五二]已當來の者、　現在の等正覺は、　衆人の憂を除くこと多し。

彼の雜阿含契經の所說に『昔、佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在せり。爾の時、世尊、諸比丘に告げたまはく、世人、共會して相恭敬せざるは甚だ苦哉と爲す。我、恒に此の念を發すらく、世に頗し人有りて、沙門にせよ、婆羅門にせよ、我に勝らん者有らば、我當に承事供養して禮敬せんと。然も我沙門、婆羅門を觀察するに、恭敬すべけん者あるか。時に比丘よ、我れ復是の念を作さく、昔、

【四八】淨居天。精しくは五淨居天。不還果を證せる聖者の生ずべき地。一、無煩天。二、無熱天。三、善現天。四、善見天。五、色究竟天。
【四九】胎身。母胎に宿れる肉體身。
【五〇】方域上空界。橫と縱の空間四方上下のこと。
【五一】生分。迷苦の人生に再生すべき因分。
【五二】已當來。これより當に來らんとする。

『智人は愚と慮らず、世を觀じ隨つて化し。』とは佛及び諸弟子の先づ世間を觀ずるを謂ふ。誰か應に度し得べく、誰か應に度すべからざるかを周遍く觀察し、誰か化を受くるに堪え、誰か化を受けえざるか、誰か解脱の根栽を種え、誰か解脱の根栽を種うるをえざるかと。是の故に說かく『智人は愚と慮らず、世を觀じて隨つて化し。』と。『無垢の迹をば說く。永息は上有ること無し。』とは無垢の迹とは[四一]賢聖八道なり。永息とは滅盡泥洹なり。聖人の世に降つて群生を[四二]接度するや、恒に賢聖道を以てし、初めより無漏行を離れず。是の故に說かく『無垢の迹を說く。永息は上有ること無し。』と。

(六)勇猛は正法を大吼す。　如來の[四三]法說義說を覺る者は永へに安し。

『勇猛は正法を大吼す。如來の』とは勇猛とは佛及び諸弟子なり。釋迦文佛は勇猛なること[四四]九劫に超越す。是の故に名けて勇猛と爲す。六師は縱逸にして好んで非法を修め、正律を按ぜず。如來は所演如法にして、所行、世法に超過せり。是の故に說かく『勇猛は正法を大吼す。如來の』と。『法說、義說を覺る者は永へに安し。』とは人、法を法と爲さゞれば、人に嗤はれ、衆に憎惡せらる。如來、所說の法說義說は聞者をして歡悅せしめ、憂熱惱を除き、永く苦患無く、常に安穩を得、心識を[四五]憺然ならしむ。是の故に說かく『法說義說覺る者は永へに安し。』と。

(七)勇健に一心を立て、　出家して日夜に滅すれば、　諸天常に衞護し、　佛の爲めに[四六]稱記せらる。

『勇健に一心を立て、』とは彼の修行人、定意一心にして他の餘念無ければ、衆德具足して意も壞すべからず。定に入るの人は所願必ず果されん。是の故に說かく『勇健に一心を立て、』と。『出家して日夜に滅すれば、』とは所謂出家とは但妻息を捨て五欲を離るゝのみならず、欲界を出でんことを求め、[四七]上界の道を修し、初禪より行を休息して起滅無からしむものたり。是の故に說かく『出家し

【四一】賢聖八道。八聖道、八正道に同じ。
【四二】接度。接化ともいふ。衆生に接近して化度すること。
【四三】法說義說。法說は第一義の眞理の說明、義說は其の解義的說明。
【四四】九劫。釋迦佛は彌勒佛と共に發心せしも勇猛精進なれば九劫を超えて現に成佛せりと。
【四五】憺然。靜かに安らかなる貌。
【四六】稱記。稱讚、記憶。
【四七】上界。色界・無色界。

んで佛を得、』と。『自然に聖道に通ぜり。』とは熱惱結使を捨て冷やかにして熅無きなり。人、憂心有れば、顏常に歡ばず。憂心無ければ、顏常に和悅す。如來世尊も亦復是の如し。衆患已に盡き、復熱惱無し。是の故に說かく、『自然に聖道に通ぜり。』と。爾の時、憂毘梵志、前んで佛に白して言く、『君今自ら稱して最勝と爲すや。』と。爾の時、世尊、偈を以て梵志に報へて曰く、

　己勝つて惡を受けず。一切、世間に勝てり。叡智は[三三]廓として彊無し。蒙を開きたれば、
　我を勝てりと爲すと。

『己勝つて惡を受けず。一切、世間に勝てり。』とは能く惡世に勝てるを稱して勝てりと曰ふ。此の勝てりとは勝つことを爲すに非ず。[三四]漏を斷じ、諸の[三五]使を盡くし、衆結永く盡きしを乃ち稱して勝てりと爲すなり。斯くなれば獨り世界に王たり、能く及ぶ者も無し。是の故に說かく、『己勝つて惡を受けず。一切、世間に勝てり。』と。『叡智は廓として彊無し。蒙を開きたれば、我を勝てりと爲す。』とは世間の惡法の罪惡に墜墮せしむる者を吾已に永く滅して[三六]不起法忍を得たり。當來にも有・生・愛の[三七]十二牽連を受くることを永く滅して餘無からしむ。是の故に說かく、『叡智は廓として彊無し。蒙を開きたれば我を勝てりと爲す。』と。爾の時、憂毘梵志、前んで佛に白して言く『瞿曇よ、今日爲に何くに趣かんと欲するか。』と。爾の時、世尊、復偈を以て報へて曰く、

　今、波羅㮈に往き[三八]甘露の鼓を擊たんと欲す。當に[三九]法輪の未だ曾て轉ぜしこと有らざ
　る者を轉ずべし。

と。梵志、佛に問ふらく、『審して爾りや不や。』と。佛、梵志に告ぐらく、『如來の言に二有ること無し。』と。梵志、聞き已つて[四〇]頷頭歎吒して去れり。

（五）智人は愚と處らず、世を觀じ、隨つて化し、無垢の迹をば說く。永息は上有ること無し。

【三三】廓。開きて大なる貌。
【三四】漏。煩惱、前卷一五頁見よ。
【三五】使。煩惱、人を驅使すればかくいふ。
【三六】不起法忍。無生法忍ともいふ。智的迷を打破して得る空理の認可決定。
【三七】十二牽連。十二因緣又は十二緣起(Dvādaśāṅga Pratītyasamutpāda)に同じ。十二とは一、無明。二、行。三、識。四、名色。五、六處。六、觸。七、受。八、愛。九、取。十、有。十一、生。十二、老死。牽連とは衆生が三世に亙つて生存を繰返し繼續する意。
【三八】甘露の鼓。佛陀の大覺せる四諦の教法を譬ふ。
【三九】法輪(Dharmacakra)。轉輪王の輪寶が山岳岩石を摧破するが如く、佛の教法の衆生の惡を摧伏するを輪に譬ふ。
【四〇】頷頭歎吒。頭をうなづかせ感心すること。

清徹なり。將に何の故有りとするか。」とて『師は是れ誰に從ひ、誰に道を學ぶことを爲せしか。何の法を學び、何の技術を修むることを爲せしか。』と。爾の時、世尊、卽ち梵志に向つて此の偈を說きたまはく、

我、旣に師保無く、　亦獨にして伴侶無し。　一行を積んで佛たるを得、　自然に聖道に通ぜりと。

『我旣に師保無く、』とは如來至眞等正覺は三世に觀達して事として知らざること無きなり。後の衆生の末だ覺悟せざる者の爲めに、此の偈を說きたまひしなり。「吾、[二七]善逝の後に當に比丘有るべし。一を[二八]摩訶僧祇と名け、二を[二九]婆蔡審鞞と名く。」と。[三〇]文殊師利に稱言し、釋迦文佛、彼の猶豫を除かんと欲するが故に、是の故に此の偈を說きたまへり。復說く者有りて、諸の外道異學名ょ是の論を作さく、「沙門瞿曇は[三一]阿蘭迦蘭に從つて法を聞き、然る後に成道せしなり」と。彼の猶豫を除かんと欲し、故らに『我旣に師保無く、』と說く。『亦獨にして伴侶無し。』とは如來等正覺は三世に觀達し、當來・過去・現在の事として察せざるは無し。當來の二部の比丘、一を摩訶僧祇と名け、二を婆蔡審鞞と名く。本を捨て、末に就く。人有るの[三二]界土には則ち佛、出世したまふ。下方の地獄・畜生・餓鬼と上方の天の樂ありて自ら娛めるとには終に佛、出でたまはず。如來は所化、處として遍からざるは無し。若し一處にても遍からざれば、名けて佛と爲さず。彼の二部は謂つて遍からざるものと爲す。如來の神力は一須彌の頂にも登る。是の如く經歷する所を敎化周旋して窮極すること有ること無し。是の故に說かく、『亦獨にして伴侶無し。』と。『一行を積んで佛を得、』とは此の三世に於て、最正覺を成じて、佛、世に興出するは要ず閻浮利地に在り、中國に生れて邊地に在らざるなり。此の閻浮利地に生るゝ所以は東西南北、億千の閻浮利地のうち此の間の閻浮利地は最も其の中に在り。土界・神力・餘方に勝る。餘方の刹土は轉た此れに如かず。是の故に說かく、『一行を積

【二七】善逝。如實の眞理に從つて去る、卽ち涅槃に入ること。名詞ならば佛十號の第五。

【二八】摩訶僧祇（Mahāsaṃghika）。大衆部と譯す。原始佛教二大分派の一。佛弟子中の靑年派の自由進步主義のもの。後に大乘佛教となる傾向のもの。

【二九】婆蔡審鞞。根本二分派史上、上座部系統のものを指すことは明かなれど明確に配當し難し。東北帝大金倉教授によつて犢子部(Vatsiputriya)ならんと示教せらる。或は若し婆蔡が蔡婆の顚倒なりせば、說一切有部(Sarvastivadin)の音寫か。

【三〇】文殊師利(Mañjuśrī)。單に文殊ともいふ。妙德 妙吉祥と譯す。釋迦に侍して智慧を司る菩薩。史的人物ならず。

【三一】阿蘭迦蘭(Arāḍa kālāma)。仙人の名。佛出家の初、師事せしが、得る所無くして去れり。

【三二】界土。國土。

（三）我は世尊たり。　漏を斷じて婬すること無し。　諸天世人の一群心の從なり。

『我は世尊たり。』とは世に三有り。一には[一八]陰世、二には[一九]器世、三には[二〇]衆生世なり。[二一]何を以ての故に名けて無著と爲すか。曰く、三義に由るが故に名けて無著と爲す。一には結を斷ずるが故に無著と謂ふ。二には人の施を受くるに堪ふるが故に無著と謂ふ。三には[二二]三界への種なく、亦根本無く、亦復生ぜざるが故に無著と謂ふ。是の故に說かく、『我は無著たり。』と。『漏を斷じて婬すること無し。』とは無上の義を謂ふ。過上有ること無き者にして亦儔匹無きなり。一切諸法を覺悟して微として入らざるは無く、細として達せざるは無く、復座中の衆生の爲めに狐疑を解するが故に、無上の義を說く。過去無數恒沙の諸佛の壽命は極長にして弟子の徒衆、稱計すべからず、國土は清淨にして瑕穢有ること無しとて謂つて過佛の神力は多しと爲さんも、我は今日、斯の觀を作すこと莫し。然る所以は神通智力は一にして二ならず。但衆生心に自ら增減有るなり。是の故に說かく、『漏を斷じて婬すること無し。』と。『諸天世人の一群心の從なり。』とは諸天、世人、沙門、婆羅門、魔、若しは[二三]魔天釋、[二四]梵四王のうち吾を獨尊、獨悟にして與等無き者と爲す。是の故に說かく、『諸天世人の一群心の從なり。』と。爾の時、六師の弟子、佛の此の偈を說き已れるを聞き、心堅固なる者は卽ち道を爲めんことを求め、心に[二五]猶豫を懷ける者は還つて師の所に至り、具さに所聞を白すらく、『三界の獨尊にして十方を典領して實に等倫無し。宜しく各々馳せ散じて、各々安んずる所を求むべし。』と。

（四）我既に師保無く、　亦獨にして伴侶無し。　一行を積んで佛たるを得、　自然に聖道に通ぜり。

爾の時、世尊、樹王の下に於て、梵天の爲に請はれ、卽ち座より起つて、波羅㮈國に詣りたまふ。爾の時、憂毘梵志、遙かに世尊の來れるを見、便ち是の念を作さく、「瞿曇は今日顏色[二六]容悅、內外

道。佛が大衆中にて滅苦の道を說いて怖れざること。

【一五】十八不共殊勝法。佛にのみ限る十八種の功德屬性なり。

【一六】三達神通。天眼通・宿命通・漏盡通。

【一七】罣礙。さしさはり。

【一八】陰世。三世間の一、五陰世間ともいふ。色受想行識の五陰、次の二世間は共に五陰所成なり。

【一九】器世。三世間の一、器世間。山河大地なり。器とは容受するの義。

【二〇】衆生世。三世間の一、衆生世間。器世間に居る一切衆生なり。

【二一】以下の一節錯入か。

【二二】三界。欲界・色界・無色界。

【二三】魔天釋。天帝釋。帝釋天。

【二四】梵四王。梵天と四天王。梵四王。天帝釋の外臣。四天王ともいふ。東に居るを持國天、南は增長天、西は廣目天、北は多聞天といふ。

【二五】猶豫。疑惑して決せざること。

【二六】容悅。ゆつたりと安らけき貌。

られず』と。『一切智にして無畏なり。』とは一切の患を離れて、復衆惱無く、水火惡賊の爲めに陷溺せられず、厄難を超越し、獨り善にして憂無きなり。是の故に說かく、『一切智にして無畏なり。』と『自然にして師保も無し。』とは獨り[七]三千大千國土に王として[八]儔侶有ること無く、等しき者猶無し。況んや出でんとするものをや。是の故に說かく、『自然にして師保も無し。』と。

(二二)獨にして[九]等倫無きことを志し、自ら[一〇]正道を獲たまへる、如來は[一一]天人の尊にして、

一切の智力を具したまふ。

『獨にして等倫無きことを志し、』とは我れ天眼を以て三千大千刹土を觀て、頗し斯の類に我と等しきもの有りやと遍うして之を觀るに、等しき者有ること無し。況んや出でんとするものをや。此の事然らざるなり。是の故に說かく、『獨にして等倫無きことを志し』と。『自ら正道を獲たまへる、』とは吾、道を求めて師の教授無く、自然に之を獲たれば、亦作侶無くして獨歩するも無畏なり。是の故に說いて曰く、『自ら正道を獲たまへる、』と。『如來は天人の尊にして、』とは何故に名けて如來と爲すや。如とは過去の等正覺なり。來とは吾、彼より來るなり。三阿僧祇劫に於て行を執るに、勤苦し、或は國財妻子頭目髓惱を施し、能く自ら拔濟して、中より來れるが故に、如來と名く。復如來は[一二]法性より世間義を說くが故に、如來と謂ふ。過去の諸佛世尊の[一三]十力、[一四]四無所畏、[一五]十八不共殊勝の法を具足し、大慈大悲にして廣く一切を度し、如性を離れざるが如く、我も今亦爾るが故に如來と謂ふ。何を以ての故に、名けて天人の尊と爲すや。曰く天人の尊と稱する所以は天人は彼に緣つて善本を修するを得、次を越えて證を取り、聖道を成じ、有漏を盡し、無漏を成じ、[一六]三達神通、[一七]罣礙する所無ければなり。是の故に說かく、『如來は天人の尊にして。』と。『一切の智力を具したまふ。』とは如來遺體の力は體に百二十節有り。一節に百二十八臂有り。神力は是れ乳哺力にして神通力に非ず。是の故に說かく、『一切の智力を具したまふ。』と。

【七】三千大千國土。三千大千世界に同じ。(前出)
【八】儔侶。ともがら、同じ仲間。
【九】等倫。ひとしくくらぶるもの。
【一〇】正道。聖道・さとりのみち。
【一一】天人。六趣の中、天趣と人趣となり。
【一二】法性。如性、佛性、眞如、涅槃と同じ。
【一三】十力(Daśa balāni)。如來の優れたる十種の智力。一、物の道理を知る智力。二、三世の因果業報を知る智力。三、諸の禪定の力を知る智力。四、諸根の勝劣を知る智力。五、種々の解を知る智力。六、種々の世界を知る智力。七、一切の行因の到る處を知る智力。八、天眼もて無礙に知る智力。九、衆生の宿命や涅槃を知る智力。十、妄惑の習氣を斷ぜしめる智力。
【一四】四無所畏(Catvāri-vaiśāradyāni)。佛の化他の心怯れざるをいふ。一、一切智無所畏、佛が大衆中にて我一切正智の人なりと獅子吼して怖心なきこと。二、漏盡無所畏、佛が大衆中にて、煩惱なしと宣言して怖れず。三、說障道無所畏、佛が大衆中にて外道を破して怖れず。四、說盡苦

萬の婇女と晝夜に娛樂せり。未だ師法を更ず、曾て學に造らざりき。」と。更に人を遣はし、往いて所說に頗し經理有りや、凡夫の如しと爲すやを聽かしめんとして卽ち明達なる一人を遣はし、往いて之を觀視し、具さに所說を聞かしむ。還つて六人に白すらく、『彼の瞿曇の演ぶる所は古に達し、今を知り、[四]前知極り無く、[五]郤觀窮り無し。義を判じ、理を析つて、理、煩重ならず。』と。六師、聞き已つて復是の念を作さく「世に多く人有り。辯辭捷疾にして人心を悅可せしむるも、然も理を存せず、尋究すべからざるあり。」と。復一人を遣はし、往いて瞿曇を觀せしむ。『衆人、其の所說を聞いて寂然として聽受するや、憒亂を爲して聽かざるやと。』と。卽ち往いて觀聽するに、諸ゝの大衆、渴仰して法を聞き、心意を專一にし、如來を瞻仰するの目、未だ曾て眴かざるを見たり。還つて六師に白すらく、『瞿曇の演ぶる所は味甘露の如し。衆人、渴仰して聽き、厭足すること無し。』と。六人、復是の念を作さく、「人集り、徒衆きは初心の極猛なるもの、久しければ、必ず退散せんこと復何ぞ疑怪せん。」と。更に一人を遣はし、往いて瞿曇は義理深邃なりや、淺薄無緒爲りやを瞻せしめんとして卽ち高勝なる一人を遣はし、往いて瞿曇を觀、具さに所說を聞かしむ。還つて六人に白すらく、『瞿曇の演ぶる所は海の如く、涯無く、我等の見る所は牛蹄の水の如し。今我れ一人は且に彼に就いて弟子たらんことを求めんと欲す。焉んぞ其の餘者を知らん。』と。前後の使人、各ゝ共に相將ゐて如來の所に詣る。復無數の衆生有つて　[六]雲隕競至して如來の所に到る。卽ち佛の此の偈を說きたまふを聞けり。曰く、

　最正覺を自ら得、　一切法に染せられず。　一切智にして無畏なり。　自然にして師保も無し。

と。『最正覺を自ら得』とは一切諸法を覺悟して細として入らざる無く、微として察せざる無く、神通力を以て如實に之を知るなり。是の故に說かく『最正覺を自ら得』と。『一切法に染せられず』とは利・衰・毀・擧・稱・譏・苦・樂、此の八法の爲に染せられざるなり。是の故に說かく、『一切法に染せ

【四】前知。先のことを見通す。先見。
【五】郤觀。後のことを觀察すること。
【六】雲隕競至。雲のくづれかゝるごとく競ひ集まること。

出曜經

巻の第二十（續）

姚秦涼州の沙門、竺佛念譯す。

如來品第二十二の一

（一）最正覺を自ら得、一切法に染せられず。一切智にして無畏なり。自然にして師保も無し。

『最正覺を自ら得、』とは昔、六師、世に在つて利養に貪著し、競つて自ら己を稱し、獨り謂つて尊しと爲せり。佛、出世して神德、人に過ぎたるを聞き、六師、雲集して各〻共に誓を結ぶらく、「我等六人は世に等倫無し。近ろ佛の出世する有りて神德威力、我等に踰越せりと聞く。宜しく同議して心齊しく、意等しからしめんこと語相違せざらん。然る後に乃ち彼の瞿曇に勝るを得ん」と。即ち一人を遣はし、往いて如來を觀、顏色の人の如しと爲すや不やを視瞻せしむ。即ち往いて觀見するに視て厭足無し。還つて六師に其の所見の如くに白すらく、『瞿曇の顏貌は世にも希有にして威神光明、日月にも踰えたり。我が所見の如くんば譬の喩ふべき無し。』と。六人、復念へらく、「其の人は王種に出づ。理として應に端正なるべし。何ぞ復怪むに足らん。今且に更に一人を遣はし、往いて瞿曇の容儀、無畏なりや、躁疾局促たりやを觀せしめん。」と。即ち往いて觀相するに、師子王の群獸中に在りて、畏難する所無きが如し。還つて六師に告ぐらく、『瞿曇は衆に在りて獸中の王の如く、畏難する所無し。』と。六人、復念へらく、「愚人は事故を更へんことを希ひ、彼の光明を貪るが故に之を圍繞するのみ。此は是れ常宜なり。何ぞ復怪むに足らん。彼の瞿曇は王宮より出で、六

【一】最正覺。此上なき最上のさとり。正覺とは眞理に契ふ智慧。
【二】六師。佛陀時代の六人の有名な外道の學者。前巻二六一頁を見よ。
【三】神德。神妙なる功德。

卷の第三

卷の第四

巻の第三……〔六一——九一〕……二八五

法句譬喩經

目次

（本丁）（通頁）

本縁部 十一

江田俊雄
赤沼智善
西尾京雄
譯

國譯一切經

大東出版社藏版